594
089

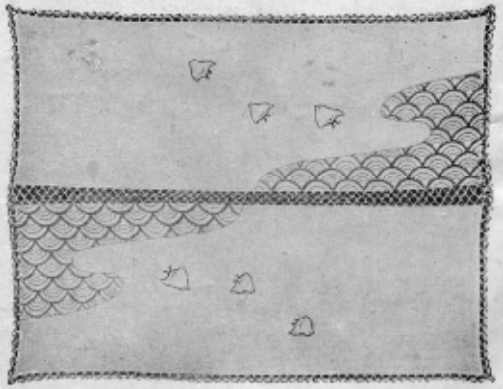
大妻技芸学校
大妻高等女学校 校長 大妻コタカ著

文部省認定

現代手藝全書

東京 研文書院

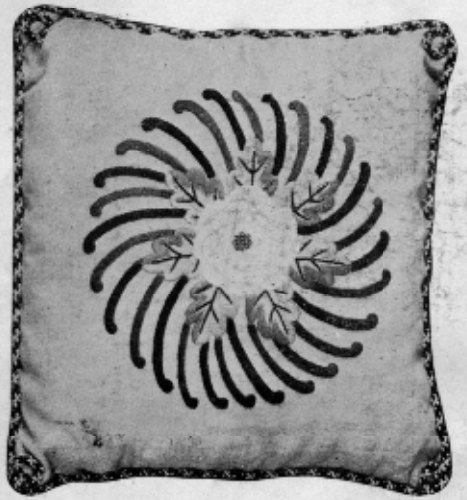
ベビーコート
（編物編二十九頁参照）



手拭を利用した食卓掛
（編物編百五十六頁参照）

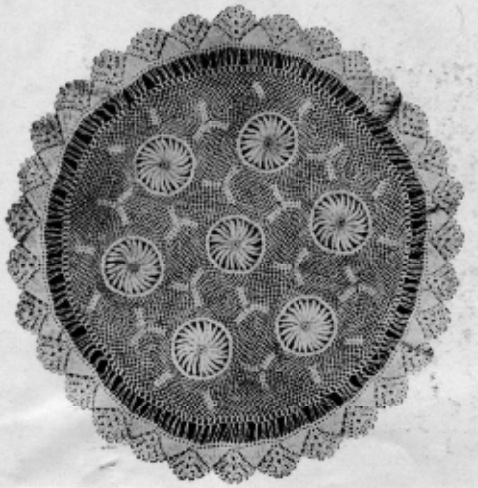
3524

東京都千代田区
大妻学院図書館
昭和
3524

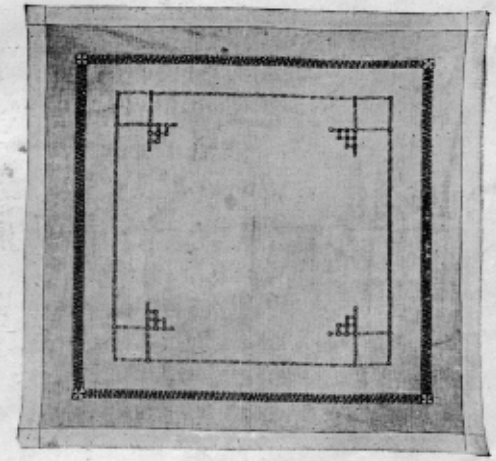


亂菊模様のクッシヨン
（刺繍編三百九十三頁參照）

クレープ人形
（人形細工編五百六十一頁參照）



菊花模様テーブル掛
（編物編百八十九頁參照）



テーブル掛
（ドロンワーク二百八十二頁參照）

日本人形沙汰
（人形細工編五百七十六頁參照）

祝儀用紙幣包
（贈答用折紙と水引結編參照）

はしがき

一、婦人が手藝を學ぶといふことは、日常生活の上に自然に女らしさ、優美さを表はす基となるものでありまして、女子にとつて大切な要素の一つであります。

手藝に熟達しますと自から新らしい種々の考案をするやうになりますから、たゞ徒に模倣するだけでなく獨創力を養ひ、尚一面に自分の生活の内容を美化し、又充實させるのに最も役立つものであります。

一、本書は手藝の各科に渉つて多年の研究と教授上の經驗とに基き、親切叮嚀に手を取つて教へる如く詳述してありますから、初學の者でも容易に本書によつて學ぶことが出來ます。

一、本書は各科共基礎の技術から、其の應用に至る迄、秩序的に說明して

あるばかりでなく、一々實物を作りながら記述しました故、世間に有り勝ちの讀んでも實物が出來ぬといふやうなことは斷じてありません。

一、本書は挿畫を出來る丈多く挿入いたしましたから説明が簡明で挿畫を見たゞけでも容易に會得することが出來ます。又材料はどんな山間僻地でも容易く求め得られるもの、又は家庭に有り合せの材料を應用して作られるやうなものを撰擇しました。

著者識

現代手藝全書　目次

一、編物編

編物……一
用具の種類及び用途……二
基礎編
鉤針編
鎖編……四
短編……五
長編……五
すじ編（短綱應用）……七
鎧編（短綱應用）……七
松編（長綱應用）……八
麻の葉編……九
笹編……一〇
鈴蘭編……一一
疊編……一二
横松編……一三
しがらみ編……一四
捧針編
目の作り方……一五
表編（メリヤス編）……一六
裏編……一六
ガーター編……一七

ゴム編……一七
市松編……一八
鹿の子編……一八
バスケット編……一九
シャツ編……二〇
時雨編……二〇
たづな編……二一
袋編……二一
玉編……二二
引返し編……二二
ピコットの編み方……二三
増目の仕方……二三
目の減し方……二四
伏目編（一名かぶせ目止め）……二四
裏二つ一度の仕方……二五
表目編の耳の拾ひ方……二五
ガーター編の耳の拾ひ方……二六
鈎針のとぢ合せ方……二六
メリヤス編のつなぎ方……二六
ガーター編のとじ合せ方……二七
ガーター編の接ぎ方……二七
メリヤス編に刺繍の仕方……二八
糸の替へ方……二八

應用編

ベビーコート……二九
嬰兒帽子（其の一）……三四
同（其の二）……三七
同（其の三）……三九
嬰兒用靴下……四一

おむつカバー……四二
二三歳用ヅロース……四四
二三歳用コンビネーション……四五
ねびえ知らず……四七
二三歳用ねびえ知らず……五〇
二三歳用ロンパース……五二
二三歳用袖付マント……五四
疊編麻の葉マント……五八
疊編麻の葉帽子……六二
二三歳女兒用ドレス（帽子付）……六三
二三歳用花形編ドレス……六九
二三歳女兒用マガレットオーバー……七四
オチヤン〳〵……七七
二三歳用チヤンチヤンコ（斜横松編）……七九
二三歳女兒用藤編袖なしセーター……八四
四五歳用指付靴下……八六
四五歳用洋服下着……八九
五六歳女兒用春向の袖なしセーター……九一
五六歳用袖無しセーター……九六
六七歳女兒用網代模様セーター……九九
七八歳男兒用セーター……一〇六
七八歳男兒用オーバー……一〇八
八九歳女兒用セーター……一一〇
七八歳用半セーター……一一三
七八歳用筋入ガーター編のチヨツキ……一一五
十四五歳用スポーツ型セーター……一一八
女學生用セーター……一二二
婦人及び女學生向セーター……一二五
大黒帽子……一三二
ベレー帽子……一三三

十三四歳用ベレー帽子……一三五
お辨當袋……一三七
脊中布團……一三八
スキー用手袋……一四〇
クッションカバー……一四二
大人用ヅロース……一四六
大人用靴下……一四八
靴下カバー……一五一
保溫足袋……一五三
同（指付）……一五四
手拭を利用した食卓掛……一五六
レースの袖口編（その一）……一五八
同（その二）……一六一
ハンカチーフ入……一六二
洋服の衿カバー（その一）……一六六
同（その二）……一七〇
同（その三）……一七五
小テーブルセンターの飾編……一七八
もみぢ形テーブル掛……一八〇
二重丸のテーブル掛……一八四
菊花模様テーブル掛……一八九
桔梗形テーブル掛……一九六
盛花模様テーブル掛……二〇八
春向きショール……二一二
桔梗形花瓶敷……二一六
矢筈模様花瓶敷……二二〇
風車形花瓶敷……二二三
菊形花瓶敷……二二八

タツチング

タツチングについて……二三一
用具……二三一
糸の巻き方……二三二
シヤツターの持ち方と糸の掛け方……二三三
編方……二三三
ピコットの作り方……二三五
輪にする場合の編み方……二三六
ピコットの接ぎ方……二三七

基礎編

基礎編（その一）……二三八
同（その二）……二三九
同（その三）……二四〇
同（その四）……二四一
同（その五）……二四二
同（その六）……二四三

應用編

羽織紐……二四三
花瓶敷……二四五
角形手提袋……二四八

マクラメレース

マクラメについて……二五五
用具……二五五

基礎編

糸のかけ方……二五六
七寶結び……二五六
巻き結び……二五七

鎖結び……二七七

應用編

電燈カバー……二七八
クローバの葉……二七〇
ネクタイ……二七二
手提袋……二七五

ドロンウオーク

材料……二七三
用具……二七三
糸の抜き方……二七三
穴かがりの仕方……二七四

基礎縢り

ヘムステッチ……二七四
千鳥ヘムステッチ……二七四
鋸形縢り……二七五
鼓形四本結び別け縢り……二七五
格子縢り……二七六
石目縢り……二七六
籠の目縢り……二七七

應用編

遠足用手提袋……二七八
テーブル掛……二八三
鏡掛……二八五

二、刺繍編

刺繍について……二八九

日本刺繍

用具と使用法……二九〇

基礎縫

平縫（ひらぬひ）……三〇一
肉入縫（にくいりぬひ）……三〇二
纏縫（まつひぬひ）……三〇二
菅縫（すがぬひ）……三〇三
玉縫（たまぬひ）……三〇四
すからぬひ……三〇四
星縫（ほしぬひ）……三〇五
絞縫（しぼりぬひ）……三〇六

挿縫（さしぬひ）……三〇六
網代縫（あじろぬひ）……三〇六
金銀糸縫（きんぎんしぬひ）……三〇七
平埋縫（ひらうめぬひ）……三〇八
友禅縫（いうぜんぬひ）……三〇九
絽縫（ろぬひ）……三一〇
繻縫（もりぬひ）……三一〇
紋縫（もんぬひ）……三一一

應用縫

額面（掛の折枝）……三一一
壁掛（盲台）……三一五
額面（菊）……三一八

半襟（薔薇）……三二一
額面（牡丹）……三二五
色紙（松に菰）……三二八
小袱紗（松竹梅）……三三一
額面（竹に雀）……三三四
額面（雞鳥と雛）……三三九
額面（光線鏡の静物）……三四四
額面（動物）……三四六
額面（風景）……三四九
紋章縫……三五三

佛蘭西刺繍

佛蘭西刺繍について……三六〇
用具……三六〇
糸の扱ひ方……三六一
用布の張り方……三六一
圖案……三六二
仕上げの方法……三六二

基礎縫

ダーニングステッチ……三六二
アウトラインステッチ……三六三
バックステッチ……三六四
シードステッチ……三六四
フレンチノットステッチ……三六五
レージーデージーステッチ……三六五
サウサンドフラワーステッチ……三六六
エイトストランドステッチ……三六七
チエインステッチ……三六七
ヘムステッチ……三六八

フラットステッチ……三六八
モーニンググローリーステッチ……三六九
オープンチエンステッチ……三六九
クロスステッチ……三七〇
フアースンチエンステッチ……三七〇
フレンチローズステッチ……三七一
フエザーステッチ……三七一
コーチングステッチ……三七二
バスケットステッチ……三七二
ジヤーマンノットステッチ……三七二
ランプラローズステッチ……三七三
カバーステッチ……三七四
バリオンステッチ……三七四
シヤドーステッチ……三七五
ラインステッチ……三七六
ロングエンドショートステッチ……三七六
ネットステッチ……三七七
リーフステッチ……三七七
ボタンホールステッチ……三七八
アイレットステッチ……三七八
パッチドウオークステッチ……三七九
サテンステッチ……三七九
ハネイコームステッチ……三八〇
カットウオークステッチ……三八〇
ロールステッチ……三八一
ケーブルステッチ……三八二

應用縫

肌襦袢の袖口……三八二
花瓶敷……三八四

草履表……三八六
手提袋……三八八
鏡掛（折模様）……三九一
クッション（亂菊模様）……三九三
同（魚模様）……三九五
テーブルセンター……三九七
テーブル掛……三九九
机掛……四〇一
テーブル掛……四〇三
アップリケー（壁掛）……四〇五
カットウオーク（小丸卓掛）……四〇九

リボン刺繍

リボン刺繍に就て……四一〇

基礎縫

點縫……四一二
線縫……四一六
返し縫……四一六
御縫……四一七
一針縫……四一七
片切縫……四一八
鎖縫……四一九
相良縫……四一九
輪縫……四一九
流相良縫……四二〇
平縫……四二〇
鎖止縫……四二一
出入縫……四二一
撚掛肉入縫……四二二
十字縫……四二二

松葉掛縫……四二三
斜縫……四二三
撚掛割縫……四二四
籠縫……四二四
スカラ縫……四二五
纏詰縫……四二六
組縫……四二六
平重縫……四二七
巻重縫……四二七
鹿の子縫……四二八
綱代縫……四二八
平繞目縫……四二九
輪刺縫……四三〇
刺縫……四三〇
縫附縫……四三一

應用縫

鏡掛（バラ）……四三三
ハンドバック（月見草）……四三三
テーブル掛（ブドウ模様）……四三四
クッション（格に小鳥）……四三七
壁掛（ボンボン）……四三九
額面（松に鶴）……四四一
額面（山水）……四四五

ビーズ刺繍

ビーズ刺繍について……四四八
纂口（菊模）……四四八
手提袋……四五〇
鏡掛（孔雀）……四五一
花瓶敷（金魚）……四五四

三、摘書編

摘細工について……四四七
摘書の基礎……四四七
材料の選び方及用途……四四九
布の裁ち方……四五一
布の染め方……四五三
糊の伸べ方……四五三
ピンセット及鋏の持ち方……四五三

基礎摘

角摘……四五三
丸摘……四五五
角摘み及丸摘み裏の切り方……四五六
丸摘み裏返しの折方……四五六
角摘み裏返しの折方……四五八

應用摘

卓上飾（柿）……四五九
柱掛（梅花）……四七二
藥玉（菊花）……四七五
壁掛（縫ひ上げし）……四八〇

四、リボンアート編

リボンアートについて……四八五
バラ……四八五

ダリヤ……四八八

五、クレープ造花編

クレープ造花について……四九一
カーネーション……四九二
花菖蒲……四九五
白百合……四九八

六、フラワーリリーアート編

フラワーリリーアートに就いて……五〇三
藥玉……五〇四
柿に繡眼兒……五一〇

七、縫細工編

縫細工について……五一五
鶏の針差……五一五
内裏雛……五一九
桃袋……五二二
蛸……五二五
白鳥袋……五二七
揚羽蝶小袋……五二九
サンタクロースのお手玉……五三三

羊人形……五三三

八、壜細工編

壜細工に就いて……五三九
糸巻……五四〇
金魚……五四六

九、人形細工編

人形細工について……五五五
玉子人形福助……五五五
玉子人形玉乗……五五八
クレープ人形……五六一
蠟面壁掛……五六四
西洋人形花賣乙女……五六七
ピエロ……五七三
日本人形汐汲……五七六
日本人形猿まわし……五八四

十、贈答用折紙と水引結編

包紙の種類……二八九
水引の種類……二九〇
水引の結方……五九〇
金銀包（飾結）……五九一
凶事用紙幣包（眞結）……五九四
日常用紙幣包（縁結）……五九七
万物包＝反物及箱の類等（花結）……五九九
婚禮用反物包（眞結）……六〇三
胡麻鹽包……六〇三
熨斗……六〇五

附

若き女性に送る

強く正しくにこやかに……六〇九
焦るな休むな怠るな……六一一
仲よく働け笑つて暮せ……六一三
お饒舌り……六一三
人の惡口を聞く時……六一四

——目次終り——

現代手藝全書

大妻コタカ著

一、編物編

編物

従来趣味の手藝として、観賞されて居りました編物も、時代の要求と共に、急激な進歩と發達とを示し、ことに、服裝の變遷に伴ひ、衛生上より、また經濟上より、必要缺くべからざるものとなりました、と同時に、近代人の趣味、嗜好に合致し得る點に於て、亦著しく實用價値を高めたことは眞に驚くの外ありません。

しかも編物は、學習に比較的たやすく、婦人の家庭に於ける家政、育兒の餘暇にも充分習得せらるゝもので、用具の簡單であるのと、場所を要さないことが繁雜な家庭婦人の手藝として實に適好たものであります。

本編は初めて編物を手にせらるゝ方々の便利の爲、特に多くの圖解を附し、基礎編に充分力を注ぎましたから、どんな初學者でも一讀了解の出來るやうに致してあります。たゞ編物は功を急ぐべからず、撓ゆまざる根氣をもつて、

其の一目一目をもおろそかにしない注意が肝要であります。

第一圖　編物に用ふる用具

用具の種類及び用途

編物に用ふる用具の種類には鉤針、棒針、ほつれ止め、毛糸針、起毛器等があります。

鉤針　鉤針には角製、象牙製、セルロイド製、鐵製、竹製等がありまして、其の中、鐵製はレース糸及び絹糸の細を編む時に用ひられ、其の他は多く毛糸編に用ひられます。

太さにも大小がありますが、これは毛糸の太、細によつて選びます。又鉤針に玉の付いたのがありますが、是は多く疊編に用ひられます。

棒針　これにも矢張り角製、象牙製、セルロイド製、竹製、鐵製等があります。

棒針には〇號より十號位までの番號がありまして、〇號が一番細く、一號、二號とだん〳〵に太くなつて行きます。一番多く用ひられる番號は〇號より五號位までありまして、〇號と一號とは極細編、中細編に用ひられ、二號より三號位迄は並太編、四號五號は極太糸を編む時に用ひられます。

鐵製の針は他の針と異り番號順に段々細くなつて居ります。主に十號、十二號、十四號、十六號位が用ひられます。用途は靴下、手袋等に用ひられますが、細い方は絹糸類の時に使用されます。

ほつれ止め　これは安全ピンの大きい物で、編みかけの目を別の針に移して置く時に是を用ひるのであります。

毛糸針（一名とぢ針）　これは穴の長い先の丸い針でありまして、用途は晒、袖下、鈎付等をとぢる時用ひ、其の他はガーター編や、メリヤス編等を接ぎ合せる時、又毛糸刺繍等に用ひられます。

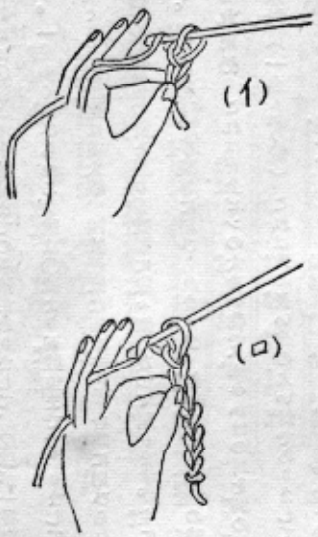
起毛器（ブラシ）　是は植物製のものと、金属製のブラシとあります。植物製のものはチーゼルと申しまして、穂の先が皆まがつて居ますので、毛起てするには都合が宜しうございます。ブラシは細い針金が毛のかわりになつて針金の先がまがつて出來て居ります。毛起てをする時にはチーゼルか、又ブラシを持つて品物をこすらずに引き上げるやうにして毛を立てるのであります。

基礎編

編方には、次に說明するやうに種々ありまして、基礎編を全部習得してから實物にかゝるのが順序でありますが、實物製作を急ぐ場合は、その一つ〳〵に當つて必要な基礎の編方だけを練習して直ちに實物にかゝつてもよろしうございます。

鉤針編み

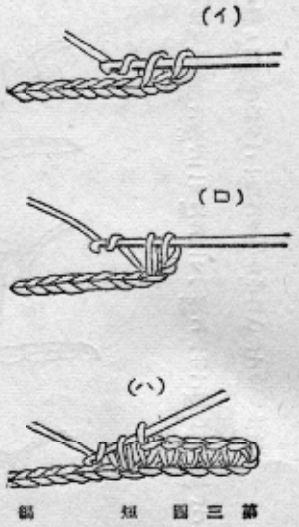
鎖編



第二圖

第二圖(イ)のやうに糸をかけては抜きかけては抜きして(ロ)のやうにあんでまいります。目が緊くなり易いものですから、出來るだけ弛くあむやうに注意いたします。

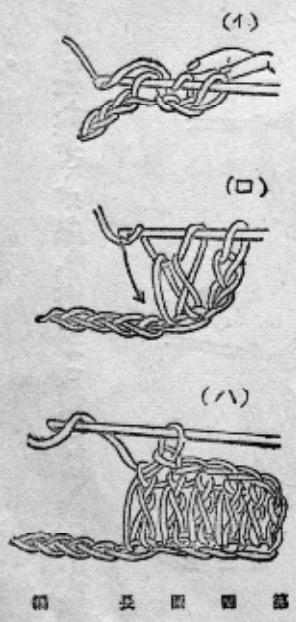
短編



第三圖　短編

初め必要の數だけ鎖を編み、(イ)のやうに二ツ目に針をさして糸を引き出し、(ロ)のやうに二ツ一度に引き出します。これをくり返して(ハ)の如く編み進みます。

長編



第四圖　長編

必要の數だけ鎖編をし、更に第四圖(イ)のやうに鎖編を三ツ編んで、針に糸をかけて鎖編の四ツ目に針を通し、糸を抜いて(ロ)のやうに二ツを抜き、更に殘りの二ツを抜きます。

半長編

第四圖(イ)のやうに引き出した

三本の糸を一度に引き抜いて、鎖一ツ編みます。

長々編　長々編は、長編をずつと長くする場合に使ふ編方で、長々編の長短によつて編針にかける糸の度數が變

第五圖　長々編

りますが普通に糸を二ツ又は三ツ、針にかけて鎖の目に通して糸を引き出し、第五圖(ロ)、(ハ)、(ニ)のやうに二ツづゝ順々に引きぬいて一目になるまではづして參ります。

すじ編（短編應用）

第六圖　すじ編

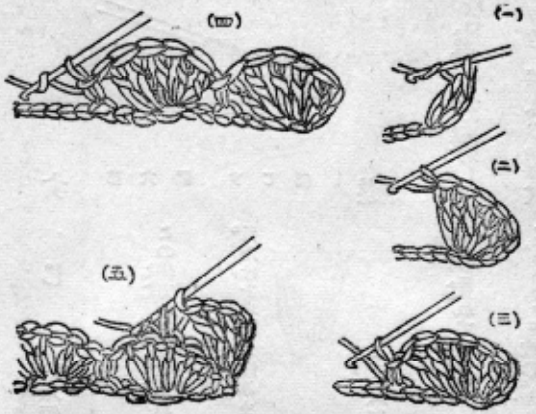
この編方は短編を重ねて編む時に、第六圖のやうに前段の向ふ側の目だけを抄つて編みます。

鎧編（短編應用）

これは短編の上に裏返して又短編を重ねて編む時、第七圖(イ)のやうに向ふ側の低い目を抄つて編みます。表側から編み、次に裏返してあんで、表裏交互に(ロ)のやうにあんで行きます。

第七圖　鎧編

松編（長編應用）



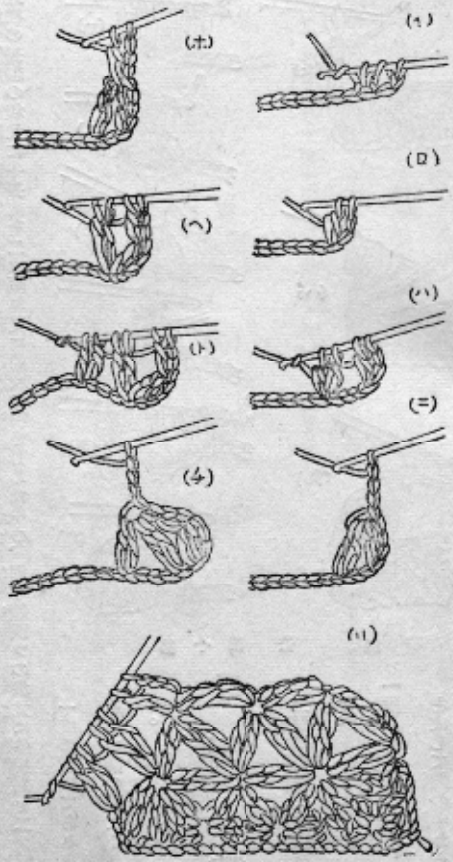
第八圖　松編

六の倍數に一目多く鎖編をいたします。

一段――鎖四ツ目に「長編五」あみ、更に鎖編の三ツ目に「短編一」をあみます。

二段――鎖編三ツあみ、根元へ長編二ツあみまして、次の短編は前段の長編五ツ目の中央に編みます。これを第八圖(五)のやうにくりかへします。

麻の葉編



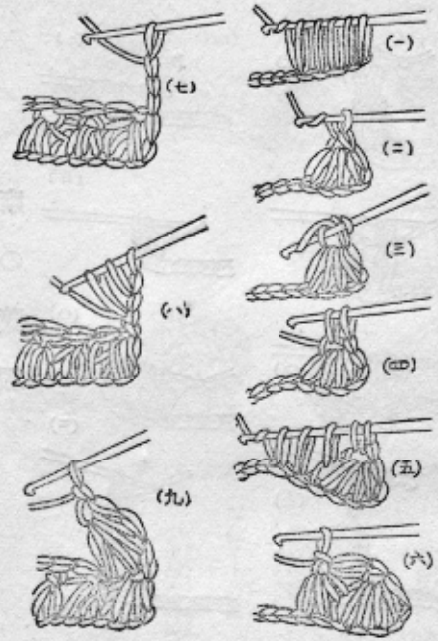
第九圖　麻の葉編

四の倍數に目を造ります。

一段――更に鎖三あみまして四ツ目に長編を一ツして、鎖編でしめます。鎖編三ツして、その根元に半長編一ツして更に初めの長編の根元に半長編二つ編み、最初の鎖の四ツ目に半長編を二ツ編みますと棒に六ツ目があります

からこれを全部一度に抜いて鎖編二ツでしめます。更に鎖編三ツしてその根元に半長編を一ツして、前のやうに二段はくりかへします。

二段——裏返して鎖編三ツあみ、その根本に長編一ツ編み更に鎖三ツあみ、その根元に又半長編を編み第二段目の最初の長編の根元に半長編を二ツ編み更に前段の引きしめた中心、即ち鎖四ツの根元に半長編を二ツ編みこれを一度に抜いてあみます。これを第九圖の順にくりかへします。



第十圖　笹編

笹編

二目の倍數に鎖編をいたします。

一段——更に鎖三ツして、一目とばして鎖の中から糸を引き抜き四目つづけて四本引き出し、五目一緒に抜き鎖編一ツして引きしめます。次はこの鎖の目を前長くして、その目の根元から一目抄ひ出し次は前の笹の終りの裏から引き出し、次は鎖二ツ目から引き出して五目一緒に引抜いて鎖編を一ツいたします。

二段——鎖編を二ツして裏側からあみます。

鎖編を引きのばして次の目から引き出し、前段笹の芯（五目引抜いて引しめた鎖）から引き出し芯と芯の間からも一ツ引き出して第十圖のやうに順々に編んで行きます。

第十一圖　鈴蘭編

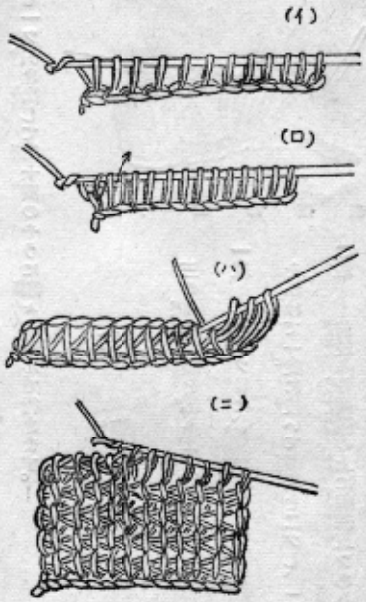
鈴蘭編

三の倍數に鎖を編みます。

一段——鎖四ツ目に、長編のやうに糸を掛けて抜くこと三度つづけて一緒になし、糸をかけて一度に抜いて鎖編を二ツし、二目とばして三ツ目に同樣につづけます。

二段——前段の鈴蘭編の上に鎖編五ツあみ前段の鈴蘭編の間の鎖を抄つて一段と同じ編方をします。

疊編



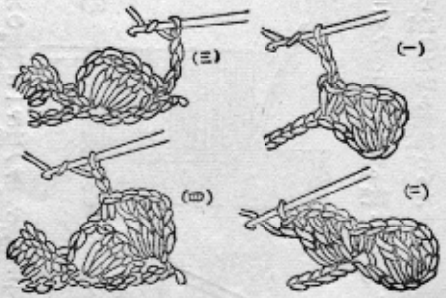
第十二圖　疊編

一段――中全部の鎖の目から順次に輪を引き出し最初輪の一ツを鎖編して外し、次は順々に二ツづゝ外しながらイ、ロの順序に編んで行きます。

二段――ハの様に裏に縦に出ている目の間から針を出して前段のやうに糸を引き出して、二ツづゝ拔いて行きます。

疊編に模様をあらはす時は、ロ圖のやうに戻る中途で鎖四ツ編んで、ハ圖のやうに裏の目を拾ふ時に鎖を前に出して編みますと、ピコットのやうな瘤が出來て、模様によつてこれを適當な箇所に出すと模様が出來ます。

横松編



第十三圖　横松編

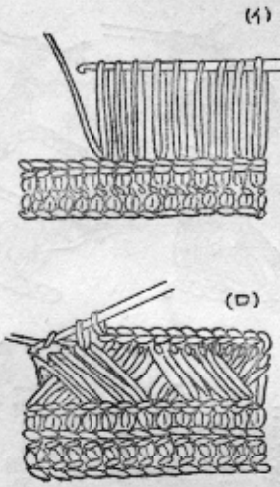
四の倍數に鎖編をいたします。

一段――鎖編四ツ目に長編四ツあみ、鎖編の四ツ目に短編一ツあみます。次に鎖編三ツあみましたら短編一ツあんだ所に長編を四ツあみ鎖四ツ目に短編でとめ、これをくりかへします。

二段――鎖編を四ツあみます。根元に長編四ツあみ、前段の鎖編の山に短編一ツして鎖編三ツあみ、前段の鎖の中に長編四ツをあみます。これを十三圖のやうにくりかへします。

しがらみ編

六の倍數に一を加へた目を作ります。



第十四圖　しがらみ編

一段——短編一段あみます。

二段——鎖編を一段あみます。

三段——短編のやうにして糸をのばします。第十四圖(イ)のやうに一目に一目づゝの糸を長く引きぬいて置きます。

四段——長く引き出してある糸目を三ツづゝ分けて、最初(右側)の三ツの目の中に次の(左の)目三ツをくゞらせます。第十四圖(ロ)かうして全部を組み合せて置きます。そして裏返して、組み合せた目を一目づゝ拾ひながら短編をいたします。

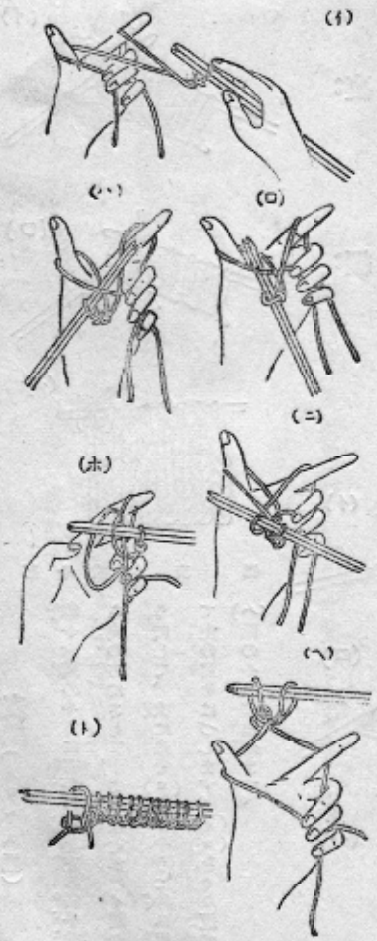
五段——前段のやうに鎖編を三回いたします。

六段——第二段目以下と同樣にあみます。

棒針編

目の作り方

第十五圖の眼に棒針を二本揃へて目を作ります。



第十五圖　目の作り方

表編（メリヤス編）

第十六圖のやうに右手の針を左の目手前から向の方にさして下より糸をかけ(イ)圖のやうにして、表に糸を(ロ)圖のやうに抄ひ出して左の目をはづします。(イ)(ロ)をくり返すと(ハ)圖のやうに出來ます。

第十六圖　表編

(イ)

(ロ)

(ハ)

第十七圖　裏編

裏編

第十七圖(イ)のやうに左針の上に右針を出して向ふより糸をかけ(ロ)圖のやうに針を抜き右針の輪をはづします。(ハ)圖

ガーター編

ガーター編は、初め表編を一行し、裏返して帰りも表編をいたします。これをくり返すと第十八圖のやうになります。ガーター編に限つて一往復を一山、又は一段と云ひます。

段毎の終りの一日は、編まずにそのまゝ右針にうつす事もあります。

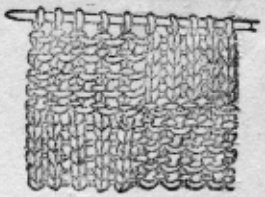
第十八圖　ガーター編

ゴム編

ゴム編の表裏の目數は好みによつて定めます。一目おき、二目おきのゴム編は一番廣く用ひられております。二ツおきのゴム編を説明いたします。第十九圖のやうに表編二、裏編二と交互にあみます。次段は表編の二の上には表編二ツをあむやうにいたします。

第十九圖　ゴム編

市松編



第二十圖

この編方は五の倍數にいたします。

五段目毎に變つてあみます。

市松

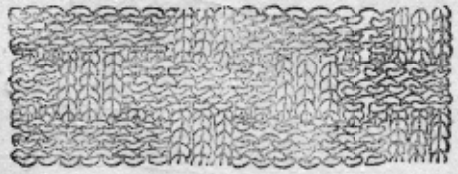
第二十圖のやうに表編五、裏編五を交互にあみ同じ模樣になるやうにあむ、六段目は表編の上に裏編をして反對にあみます。五段あみましたら又第一段目のやうに編みます。これは五つでございますが二、三、四、六、七、いくつでも良ろしいのです。

鹿の子編

第二十一圖　鹿の子編

第二十一圖のやうに市松編を一ツづつにしまして一段おきにかへますと鹿の子編になります。

バスケツト編



市松編と似ておりますが、バスケット編はガーター編の中に表編で模樣を違つて行くのであります。

第二十二圖のやうに、十の倍數に目を造ります。

一段——裏編七、表編三編みます。

二段——裏編三、表編七、編みます。

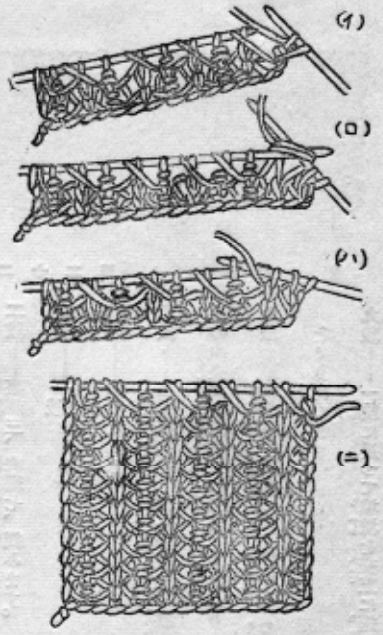
三段——一段に同じ。

四段——二段に同じ。

五段——二目裏編をして「表編三、裏編七」終り裏編七あみます。（前段の表編の中央に表編が三つあめる事になります）

六段——表編五、「裏編三、表編七」終りに裏編二つ、七、八段は、五、六段をくり返します。

九段——一段に戻つて模樣を交互に編みます。



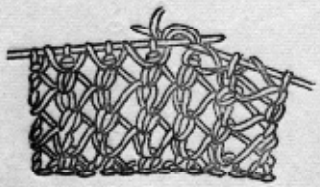
第二十三圖　シャツ編

シャツ編

三の倍數に目を造ります。

一段——一目編ますにうつして糸を手前によこして二ツ一度「糸をかけて一目うつして二ツ一度」を繰返す。

二段——第一段と同樣にあみます（第二十三圖參照）



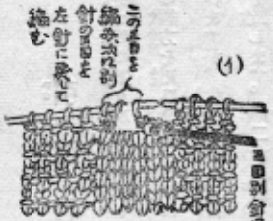
第二十四圖　時雨編

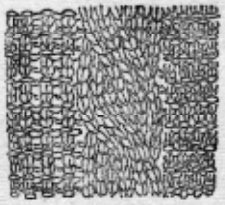
時雨編

偶數に目を造ります。

右針をかけ糸の下より出して左針の二目を一度に表編をいたします。

「かけて二目一度をつゞけます。各段同じく繰り返します。（第二十四圖參照）





第二十五圖　たづな編

たづな編

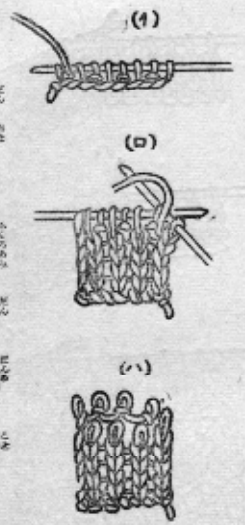
十の倍數に目を造ります。

一段——「ガーター編四、表編六」をくりかへします。

二段——裏編六、ガーター四を繰り返します。

八段まで一段、二段を繰り返します。

九段——表編の六ツを三ツづゝに分けて右の方の三ツを下から左に移し、左を右の方に上から持つて來て目を入れ替へて前段と同樣にあみます。以上八段毎に表編の目を交互にかへて行きます。（第二十五圖(イ)(ロ)參照）

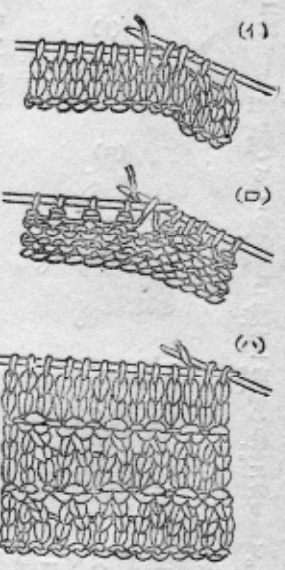


第二十六圖　袋編

袋編

一段——表編を一ツし糸を手前によこして、左針の一目を編ますに右針にうつし、糸を向ふへまはして表編一ツあみ、次は編ますにうつす。これをくりかへします。

二段——一段と同じ。この袋編は二段で一段編める事になります。



第二十七圖　玉編

玉編

偶數に目を澁ります。

一段——表編全段あむ。

二段——裏編全段あむ。

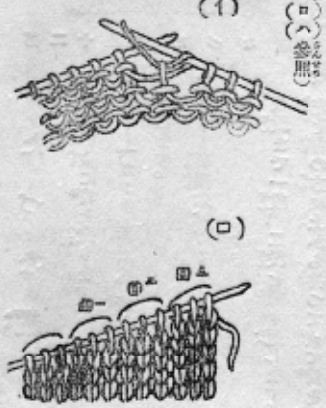
三段——二目一度に全段あみます。

四段——表編を編む時に前段の二目一度の間の目を一目づゝ拾つて表編を一段あみます。

五段——第一段にもどつて以上くりかへします。(第二十七圖イ)(ロ)(ハ參照)

引返し編

是は肩の下り或はチヨツキの前先などを作る時に此の編方を用ひます。下りの多い少いに依りまして異ひますが、先づ普通は三目位づゝ殘してあともどりを致します。第二十八圖(イ)(ロ)のやうにもどる時には一目編まずに右の針に移して次の目から編んで行きます。此次もこゝで引返す時は前の三目共六目殘して後戻りします。其時も始めの目は一目右の針に移して次の目より編んで往くので、其の目數に依つて繰り返すことになります。



第二十八圖　引返し編

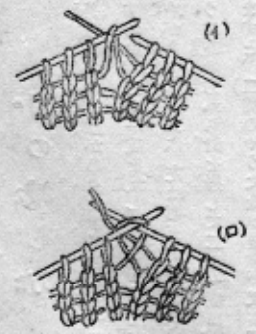
ビコットの編方

第二十九圖　ビコットの編方

第二十九圖(イ)のやうに三ツ編を編み、(ロ)のやうに根元に堅編で付けますと(ハ)のやうなビコットが出來ます。

增目の仕方

目の增し方には色々な方法がありますが、編みながら目の間々で增し目する時には、目と目の間の糸を左の針にすくひ取り、一ツねじつて編むのであります。(第三十圖參照)



第三十圖　增目の仕方

目の減し方

是も色々の方法がありますが、目を一ツ減す時は、二ツ一度を致します。それは左と右がありまして、左は第三十一圖(ハ)のやうに左の方から針を通して二ツ一度に編みますと、(二)圖のやうになります。又右二ツ一度は、右の方より針を左の方に(イ圖)向つて通して(ロ)圖の樣に編みます。

第三十二圖　伏目編

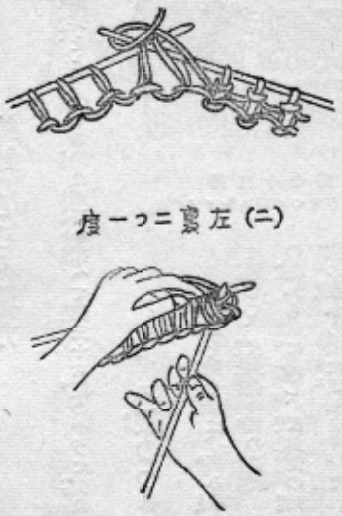
伏目編(一名かぶせ目止め)

是は主に目を止める時に用ひます。又衿肩を止める時などに用ひます。第三十二圖のやうに今編んだ目に、前に編んだ目をかぶせて、又次の目を一目編んで、前の目をかぶせて順々に止めるのであります。

第三十一圖　目の減し方

裏二ツ一度の仕方

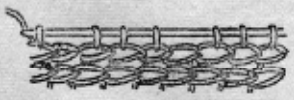
普通の裏編で二ツ一度に編みますのは、右の方より左の方に向つて第三十三圖(一)の如く針を通して編みます。又左裏の時には左の裏方より(第三十三圖の(二)右の方に向つて二ツ一度に編むのであります。



第三十三圖　裏二ツ一度の仕方

表編の耳の拾ひ方

第三十四圖のやうに、おもにメリヤス編の時に用ひるのでありまして、例へば、襟を編む時に目を拾ふ時、又は衿ぐりはりの目を拾ふ時などは皆此の方法にいたします。圖は一目とんだ處がありますが編んで居るものに依り又目數の都合に依つては一目も殘ばさずに拾ふ場合もあります。



第三十四圖　表編の耳の拾ひ方

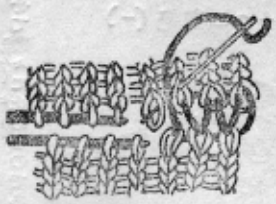
第三十五圖
ガーター編の耳の拾ひ方

ガーター編の耳の拾ひ方

此拾ひ方もメリヤスと同じ場合に同じやうに致します。（第三十五圖參照）

鉤針のとぢ合せ方

鉤針で兩耳をとぢ合せる時は兩耳を揃へて第三十六圖のやうにリヌき編を致します。

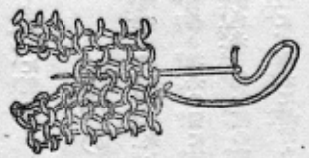


第三十七圖
メリヤス編のつなぎ方

メリヤス編のつなぎ方

メリヤス編を續ぐ時は、編み終りの糸を續がうとする巾の數倍に切り、とぢ針に通して、反對側の目の裏側から表に出し、向ふ側の表から裏に入れ、隣の目の裏から表に出し、反對側の始めに糸を出した目にもう一度表から裏に入れ、隣の裏から表に出します。これを繰返して第三十七圖の如くとぢて行きます。終りは裏に針を出して一針かゝつてとけないやうにとめて置きます。

第三十六圖
鉤針のとぢ合せ方



第三十八圖　ガーター編のとぢ合せ方

ガーター編のとぢ合せ方

耳のガーターの場合には第三十八圖のやうに兩耳のこぶ〳〵を互ひ違ひにとぢ針で拾つて合せるのであります。

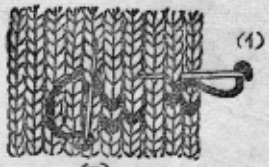
ガーター編の接ぎ方

きづ始めはガーター編の一山編んだものと、もう片方は一山の内を半山だけ編んだものとをつぎ合せるのであります。半山編んだ方を手前の方におき、表目の出た方を向側にまはしておきます。始めは右端の手前側の目の裏から表へ針を出し、向側の目の裏から表へ、次の目の表から裏へとすくひ出すのであります。手前側の今くゞらせた目の表から裏へ、次の目の表から裏へと順々にくゞらせて、第三十九圖のやうに右から左の方へと接合せるのです。

第三十九圖　ガーター編の接ぎ方

メリヤス編に刺繍の仕方

メリヤス編に變色糸で模様を表はすのであります。刺繍する圖案と變色糸は編んだ地色と調和する色を選びます。

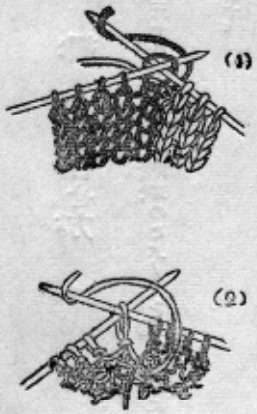


第四十圖　刺繍の仕方

始め、とぢ針に變色の糸を通して、縫ふ模様の左下の方の、目の裏から表に針を出して、其の目の上の方から右より左向きに一目横に抄つて針をぬきます。次は其の目の中央を縦に抄ひ出します。これで一目の刺繍が出來たのであります。縫ふ順序は下から上へと順々に刺しますと、奇麗にも出來、又刺し易いのであります。

糸の替へ方

地糸の間に變色糸を入れようとする場合は、變色糸で一目作り地糸の目に結びつけ、變色糸で編んで行きます。變色糸を編む幅の廣い時は、休んで居る地糸を二糸置き位に、編糸に絡げながら編んで行きます。二段目からは糸を變へる時に、一つ置つて編みます。



第四十一圖　糸の替へ方

メリヤス編、裏編、ガーター、何れの場合も同じ方法でいたしますが、ガーターの時は、表から編む時に糸を替るやうに注意を要します。第四十一圖(1)、(2)、を御參照下さい。

備考

以下說明中に鎖編を鎖と、表編を表、裏編を裏と略して書く事があります。

應用編

ベビーコート

材料　白中細毛糸バオンス、一糎幅リボン五十糎位。

用具　角の鉤針細いもの一本。

編み方　このコートは首廻りから編み初めます。

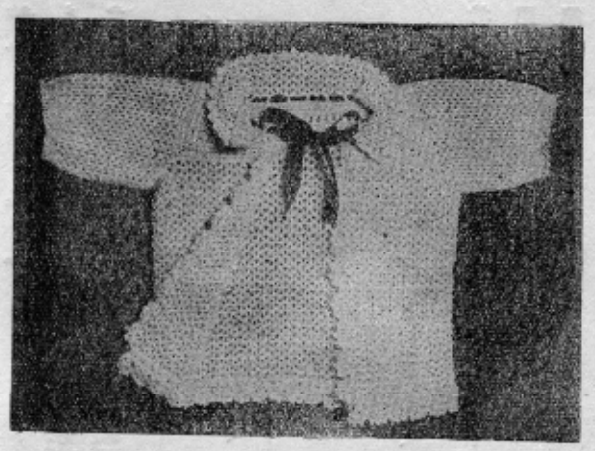
始め鎖を百一ツ作り、こゝから後戻りして表の目から短編をして十五目の處まで編んで參りましたら、この目に三

ツ短編を入れます。又次の目より短編をして、二十目の處まで編みましたら、又三ツ入れます。其の次は三十目の處に三ツ入れ、次は又二十目の處に三ツ入れて、次は十五目で終りになります。其處で鎖一ツをして後向きに返へし、又短編を續けて參ります。

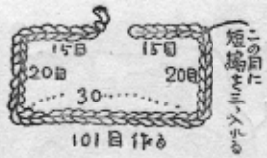
前段の一目に三ツ入れた處には、三ツの眞中に、又三ツ入れるのであります。そして二段目からは、目の向側の一筋に針を通して編むのであります。さうしますと、編目に高低が出來て、鎖の様になります。これを八段編みまして（第四十三圖參照）次は胴廻りにうつります。

第四十四圖の如く、（イ）の部に糸を付け三ツ鎖を編み、目を二ツとばして、三ツ目に長編一ツを入れ、鎖二ツを編み、同じ處に長編一ツを入れる、又二目をとばして長編一ツを入れ、二ツ鎖を編み、同じ處に長編を入れる。これを繰り返して（ロ）の部まで編みましたら鎖を二十四編みます。さうして（ハ）の部に長編で附け、又鎖二ツを編み、同じ處に長編を入れる。

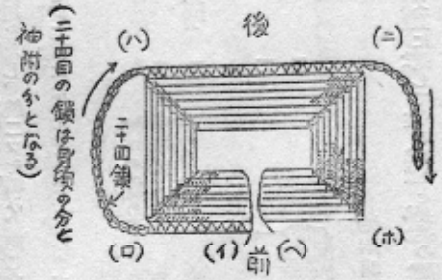
（ハ）から（ニ）までを（イ）から（ロ）までと同じ編み方で編み、これを繰り返して（ニ）の部まで編み、又二十四の鎖を編み、（ホ）の部まで編みます。それより（イ）から（ロ）の間と同じく（ヘ）の部まで編みましたら、（ヘ）の部の處で鎖三ツして、第四十五圖のやうに、裏に返し、前段の長編も長編の間に鎖二ツ入れた處に長編を一ツ入れ、鎖二ツを編み、同じ處に長編一ツを入れる。これを繰り返して後戻りをして前に二十四鎖を編んだ處は二目とばして同じ編方を續けます。これを三十段編みます。三十段出來上りましたら裾の飾りを編みます。



第四十二圖　出來上り圖



第四十三圖

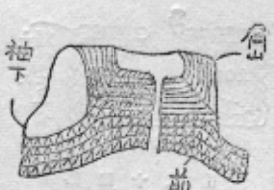


第四十四圖

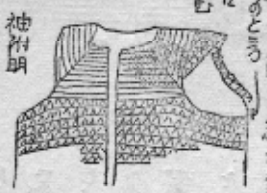
裾飾りの編み方　三ツ鎖を編み裏に返して鎖二ツの中に長編一ツを入れ三ツ鎖を編み、元の目に短編で付ける。又同じ處に長編を一ツ入れる。これを裾全體に編みまして糸を切ります。

大妻圖

袖の作り方　袖は前に二十四鎖編みした處の袖附明に編みつけるのであります。始め第四十六圖のやうに、身頃を正しく二ツ折りにして前側脇山から袖付明きの三分の一の處に糸を付け、付けた處から二目とばして長編をなし、鎖二ツを編み、同じ處に長編を入れる。これを繰り返して、後側袖附の三分の一の處まで編み前側と同じ形になるところまで編みます。



第四十五圖



第四十六圖

さうして二目とんで短編で付ける。裏に返して前段の鎖二ツの處に長編を一ツ入れ、鎖二ツを編み同じ處に長編一ツを入る。これを繰り返して同側の終りに短編で付けた處まで長編を入れます。さうして次の目を二目とばして短編で付けます。又裏に返して今の長編と長編の間に鎖二ツ入れた處に長編一ツを入れ二ツ鎖を編み、同じ處に長編を入れる。この段は三回目でありますから、返らずに全體の廻りを一周します。袖下の鎖の處は胴廻りにならつて、胴の長編が編んである所に入れるのであります。これを十二段ぐる〳〵廻りましたら袖口に移ります。

袖口の作り方　袖口は前の長編と長編の間々に短編を一ツづゝ入れて一段編みますと、袖口が半分の廣さになります。これを繰り返して四段編みます。それから袖口飾りをいたします。袖口飾りは胴や袖と同じ編み方ですが、是迄長編と長編の間を二目おきに編んだ處を袖口丈け一目おきに今までの長編をいたします。長編と長編の間の鎖は矢張り二つづゝ編みこれを四段いたしますと口の處が少し廣がり加減になります。最後の緣飾りは裾飾りと同じやうに致します。

衿の付け方　衿は一番初めの鎖編の處に糸を付け、鎖五ツを編み、二目とばして長編一ツ、二目とばして長編一ツ、これを一段してリボン通しといたします。次は鎖三ツして最初の拵目に長編一ツ鎖二ツ、又同じ拵目に長編一ツ、次の拵目に長編一ツ、これを繰り返して四段編みます。

五段目は裾や袖口と同じ緣飾りを付けておきます。

前巾の飾の付け方は長編を一ツ置きに丁字編の飾を付け、前に用意して置きましたリボンを衿のあみ初めのリボン通しの長編を一ツ置きに通して前の方で結んで置きます。

丁字編の編み方　丁字編は上前の首まはりの鎖編の初めの處に糸を付け、鎖編の二段目の處に長編を入れ、鎖三ツを編み長編の頭に短編で付け、長編と同じ處に長編を入れて鎖三ツして長編の頭に付ける。これを四回編みます。

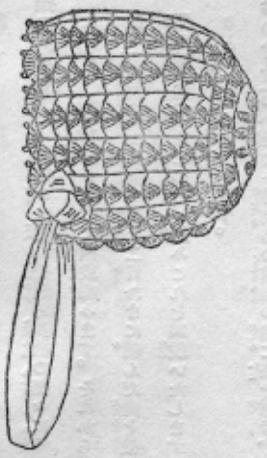
まして鎖編の二段目に短編で付けます。つまり松編の頭にピコットのついたものです。銀編の處が終りましたならば、長編の所は長編の横目を一つ置きに丁字編を入れて、一ツおきに短編で付けます。右前の方は裾の方より糸を付けて編み上げます。

嬰兒帽子（其の一）

材料　極細毛糸一オンス二本合せ、リボン二糎幅五十糎、内外。

用具　毛糸用鉤針

編み方　後頭部よりぐる〳〵丸くあみ、後頭の所だけ殖して、表、裏交互に漸次前へ編んで參ります。



第四十七圖　出來上り圖

一段――鎖編五ツ編み、編み初めの目に引き抜きで止めて輪にいたします。

二段――鎖編三ツして輪の中に長編を二十編みます。

三段――鎖編三ツして、その根元に鈴蘭編を編み、鎖三ツして、前段の長編の目

を一ツおきに鈴蘭編を編みます。これをぐるかへして一周しますと、鈴蘭編（玉編）が十出來る事になります。鈴蘭編は其様編の中にも說明してあるやうに「かけて抜き」を長編のやうにして三回し、それを最後に一度に引き抜いて鎖編一ツで止めます。

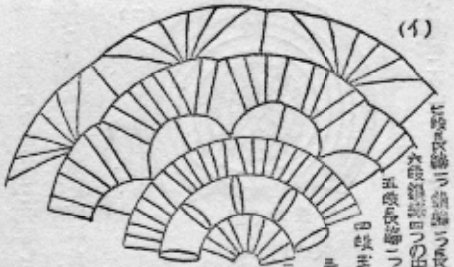
一周編んだ終りは、段變りの時編んだ鎖三ツの頭に引き抜きにいたします。

四段――鎖三ツして鈴蘭編の間に「長編六ツ、鎖編一ツ」を一段あみます。

五段――鎖編三ツして更に「鎖編四ツ編み前段の長編三ツ目に短編を編み鎖四ツして前段の鎖編一ツの中に長編一ツ」編みこれをぐるかへします。

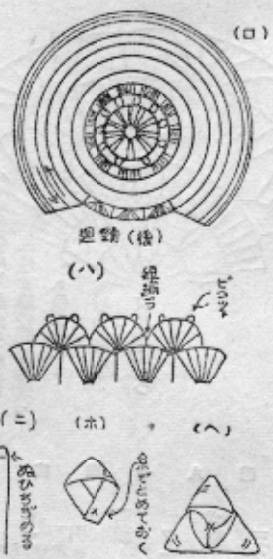
六段――鎖三ツして前段の鎖編四ツの中に長編を四ツづゝ編み一周します。

七段――前段の長編四ツの上に引き抜きを二ツして、四ツの目中まで來て、鎖三ツ編み、更に鎖一ツして次の長編



四ツの中央に「長編六ツ鈴編一ツして又次の四ツの間に長編一ツ鈴編を一ツ」あみ「　」の中をつゞけて一周りします。（第四十八圖參照）

八段——裏側にむけて逆に引返して引き抜きを二ツ編み前段の長編一ツの上まで來て又表側に向け、鈴編三ツあみ前段の長編六ツの中央に前段と同樣長編六ツ編みます。第四十九圖（ロ）のやうに「長編六ツを三ツ、長編一ツ」を二ツを殘して九段にうつります。



第四十九圖

九段——裏側に向けて鈴編三ツして前段の通りに編んで八段から先を十段あんで飾り編をいたします。

飾りの編み方　細の方は第四十九圖（ハ）のやうに長編一ツの上に「長編二ツ、ピコット一ツ、長編二ツ、ピコット一ツ、長編二ツ、長編二ツ」をあんで松編の上には短編を一ツあみ、これをくりかへして飾りといたします。

頸の方は長編の角々を一ツおきに松編と短編とを交互に一段あみます。編み方はこれで終りました。

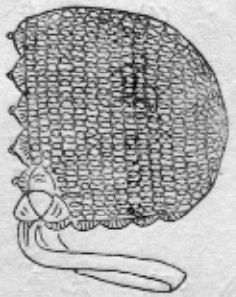
リボンの結び方は種々樣々ありますが此處では第四十九圖（ニ）以下のやうなのをいたします。

飾り花の造り方　凡そ二重半巾のリボンを、巾の三倍の丈に六枚取り、その一枚づゝを（ホ）圖のやうに、三角にして糸でとめておき、六枚共出來ましたら、（ニ）圖のやうに三枚づつ合せて眞中を糸でとめておきます。別に長いリボンの剛端を（ヘ）圖のやうに一糎折つてぬひちぢめ花の裏側の中心にあてゝ出來上り圖（第四十七圖）のやうにつけます。

嬰兒帽子（其の二）

材料　極細白毛糸一オンス二本合せ、リボン二糎巾五十糎內外

用具　毛糸用鉤針一本。



第五十圖　出來上り圖

編み方　後頭の中心より丸く編み、だん〳〵前に向つてあみます。

一段——鉤編を五ツあんで最初の目に引き抜きを一つして輪にいたします。

二段——初め鉤編三ツあんで、前段の輪のなかに鈴蘭編を十あみまして、最後の鈴蘭編の時、最初の鈴蘭編の山へ引き抜きをして置きます。

三段——段變りの準備として鎖三ツあみ、前段の鈴蘭編と鈴蘭編との間へ、鈴蘭編を一ツ二ツ一ツ二ツと交互に入れて行きます。都合十五編まれる事になります。

四段——前段の鈴蘭編二ツの間には鈴蘭編を一ツ編み、一ツの前後には二ツづゝ鈴蘭編を編みますと全部で廿五になります。

都合五十一圖

五段——前段のやうに一ツの前後には鈴蘭編を二ツ編んで、二ツの間には鈴蘭編を一ツ編みます。（第五十一圖イ）參照）

六段——第五十一圖ロ）のやうに一所で鈴蘭編を五ツ宛け殘して裏側から編み、又表から編み表裏交互に編んで、凡そ十五段位あみます。丈と巾と同寸位になりましたらそこで飾りをつけきます。

飾りの編み方　顏の方は短編を一段あみ「長編三ツ、ピコット一ツ、長編三ツ」をあみ、四ツ目に短編一ツして止めます。これをくりかへします。

顏の廻りの飾りは、長編五ツの卷編を一と廻りいたします。

リボンの結び方は前の帽子と同樣にいたします。

嬰兒帽子（其の三）

材料　極細白毛糸一オンス二本合せ、變り色少々。

用具　毛糸用鈎針

編み方　筆編で前の帽子と同樣に頭の中心から顏の方に編みます。

一段——鎖編を五ツして輪にいたします。

二段——鎖編三ツ編み輪の中に長編二十編んで最初の長編の山に引き抜きをして止めます。

三段——この段から筆編をいたしますが、普通の筆編と異つた方法でいたします。基礎の筆編の三針きでは同樣で四針目は前の筆編の根本に入れ五針目は初めて前段の目を抄ひます。ですから一目づつ前段の目を編む事になります。全段編めましたならば、最初の筆編の中心の所に引き抜きで留めます。

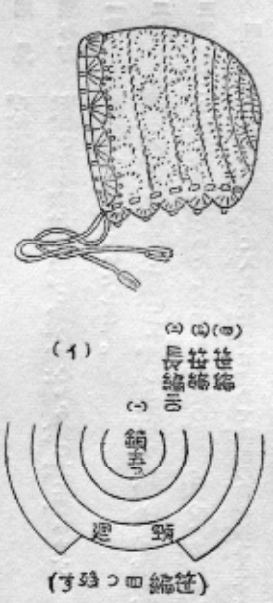
四段——前段のやうな筆編を一ツし、普通の基礎の中にある筆編を一ツして一ツおきにいたします。おしまひは引き抜きで止めます。

五段——普通の笹編を編んで、最後に第五十二圖(イ)のやうに笹編を四ツ殘して六段にうつります。

六段——鎖三つ編んで裏側から前段の笹編の中心に長編を二ツづゝで一段あみます。

七段——鎖三ツあみ裏から笹編を一段あみます。

八段——鎖三ツあみ六段と同じやうに裏から長編二ツづゝあみます。



第五十二圖　出來上り圖

九段——七段に同じ。

十段——八段に同じ。

十一段——七段に同じ。

十二段——八段に同じ。

十三段——七段に同じ。

十四段——變り糸で八段と同樣にあみます。ここから顏の出る方の飾りになります。

十五段——前段の四ツ目に長編五ツを編みますが、その長編と長編の間には一ツづつピコットを編みます。そして四ツ目に短編で止めます。更に四ツ目に「長編とピコットを五回じして短編でとめる」これをくりかへします。

頸廻り飾りの編み方　一段短編をいたしまして「長編一ツ、鎖編二ツ」前段の目を一ツ飛ばして二ツ目に長編一ツをくりかへしてリボン通しの穴を作ります。

次はリボン穴に「長編四ツ」をあみ長編四の中央にピコットを一ツ編み、次のリボン穴には短編一ツ編んでこれをくりかへします。最後にリボン穴にリボンを通します。

嬰兒用靴下

材料　極細白毛糸一オンス（三本合せ）

用具　毛糸用鉤針一本。

編み方　上部からぐる〳〵と輪に編み、足首の所まで編みましたら甲をたたみ組とし、次は足底に向つてすじ編をいたします。

一段——鎖編四十を編み輪にして鎖三ツ編み、目數だけ長編をし、最初の鎖編みの頭に引きぬきでとめます。

二段——鎖編三ツ編み「長編三、鎖編一」、一ツとんで、長編一、鎖編一、一ツとんで」をくりかへして一段あみます。

三段——前段の通りに全部あみます。

四段——前段の長編三ツの上に長編一ツを編み、次に鎖編一ツあみ更に前段の長編一ツを中心に前後一ツづゝの長編を編み、都合長編三ツになります。つまり前段と反對の模樣になります。

五段——四段と同様。

六段、七段——二、三段と同様。

八段、九段——四、五段と同様。

十段——第五十三圖(イ)のやうに全體の目を三等分して、三分の一だけ一重編にして九段あみます。(基礎編參照)

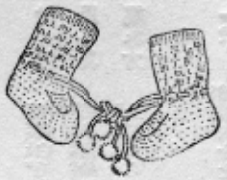
次に最初の周圍と後側の端の方をぐるりと短編いたします。

次は第五十三圖(ロ)のやうにすじ編を(基礎編參照)いたします。

すじ編が五糎位になりましたら糸をとめます。そして底合せをとぢ針でとじて合せます。

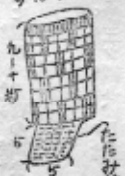
紐の編み方　四十糎位のくさり編をしてそれを上から七段目の穴に通して前で結ぶ樣にいたします。紐の先には、房又は玉をつけて飾りといたします。

おむつカバー

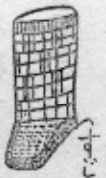


出來上り圖

(イ)



(ロ)



第五十三圖

材料　太毛糸四オンス、スナツプ五個。

用具　三號玉付針。

編方　始め目數百三十を掛けます。編み初めの六目をガーターに次から一ツ裏、一ツ表のゴム編みに編みまして、終りの六目を又ガーター編にして二糎編みます。次は袋編を三糎、ゴム編を二糎編みます。ゴム編が出來ましたならこん度は兩側のガーターの處は其のまゝガーターで續けて中は全部メリヤス編にいたします。メリヤス編を十二糎編みましたらば、兩方のガーターは其のまゝにして、ガーターの次の目より內側三十四目づゝは第五十四圖の如く表一表一のゴム編にいたします。殘り中央五十目の間はメリヤスに編むのであります。これを三糎編みましたらば、こん度は兩方のガーターとゴム編の處丈け

す。それが出來ましたら、左右のガーター編の内側で、メリヤス編の方を二ツ一度に編んで一ツづゝ減します。これを表側の時丈け減しますと二段置きに減すことになります。左右のガーター編はそのまゝでメリヤス編の所が八目殘るまで減します。其の先きは全部をガーター編にして五段編んで止めます。第五十四圖(ロ)のやうにスナップを前の合せ目のガーターの處へ三個、下のガーター編の處兩側へ二個付けますと出來上りであります。

二三歳用ヅロース

材料　並太毛糸五オンス、ゴムテープ一米。

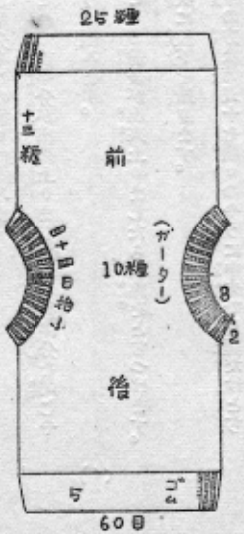
用具　五號二本針、とぢ針。

編み方　後より編み初め前へ續けます。最初目數を六十作り、一目裏一目裏のゴム編を五糎あみ、つゞけてガーター編を十三糎編みます。

次は一段おきに、初めと終りの一目の内側で、一目づゝ目を減らし、巾が十糎になるまで減して行きます。この十糎巾が股になり、後片側が出來たのであります。

前はこの反對に同じ形に編んで行くのであります。即ち、今まで初めと終りで減らして來た所で、一目づゝ增し目をして、全部の目數が六十になりましたら眞直ぐに十三糎あみます。つゞいて一目づゝのゴム編を五糎あんで最後をかぶせ止めにしてしまひます。

第五十五圖



股下の編み方　次は股になるべき巾の狹い所の兩側の弓形の間で四十四目を拾つて、こゝも一目づつのゴム編を二糎編みます。

それから後と前とを合せて、とぢ針に毛糸を通して兩脇をとぢゴム編の目にゴムテープを通して出來上りといたします。(第五十五圖參照)

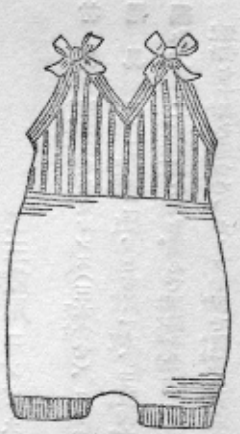
二三歳用コンビネーション

材料　極細白毛糸九オンス(三本合せ)、スナップ二個、リボン二糎巾四十糎。

用具　三號二本針二組、とぢ針一本、三號四本針一組。

編み方　二枚同樣な物を編んで兩脇を合せて肩でスナップで留めるのであります。

最初七十目を造つて、ガーター編で腹部を眞直に二十三糎編みます。



第五十六圖　出來上り圖

それから「表編四裏編二」をくりかへして凡そ五編になるまで編みます。

全體の目數を半分に分けます。

兩方別々な針で編んでもよいのですが糸を二つ使つて一緒に編んでもよいのです。

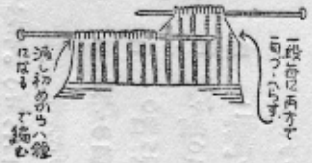
先づ片方だけ說明いたします。第五十七圖(イ)のやうに兩方で一段毎に一目づゝ減らして行きます。へらし初めた所から八編位になりましたらば糸を留めます。殘してある半分もこの通りに編みます。

これで前半分が出來上りましたから後半分を同じやうに編みます。

これで前後が出來上りましたら兩脇をとぢつけます。次に股下を造ります。

下の方は第五十七圖(ロ)のやうに中央で五編だけとぢ針でとぢ合せ、そして兩足の出る所の目數を拾つて

(イ)



(ロ)

第五十七圖

編みます。凡そ六十目ありますから四本針に通してゴム編「表二つ裏二つ」でぐるりと二糎編み、糸を留めてしまひます。

もう一方の足を同樣に編みます。

袖附、衿刳を一段ぐる〳〵と短編をいたしまして次にすじ編を四段編んで糸をとめます。兩側の肩にスナップをつけておきリボンを蝶形にむすび前の肩につけます。

ねびえ知らず

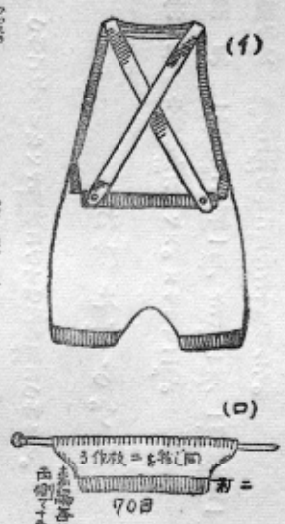
材料　中細毛糸六オンス。スナップ二個。

用具　一號玉付二本針一組、とじ針一本、一號四本針一組。

編み方　始め二本の針に目を七十掛けます。

一本を抜きとり端の糸を良く編んで一ツ表、一ツ裏のゴム編を二糎編みます。次より第五十八圖(ロ)のやうに、メリヤス編にして、編み初めと編み終りの一ツ內側で一目づゝ增し目をいたします。メリヤス編は一段表編、一段裏編でありますから表に向つた時丈け增し目をいたします。これを十五回增します。そして五十九圖(イ)の如く片方だけ十目一度に增目いたします。

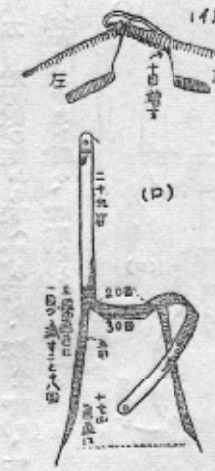
次は同じ番號の別の針に七十目を掛けまして前と同じものを作ります、出來上りましたなら、增目の絶つた所が股下になりますから其處で四本針に取替ながら第五十九圖(イ)のやうに、兩方共突き合せをしてぐる〳〵と眞直に十一糎編みます。次に前に增した十目の中央を中心として二段おきにその兩側で一目づゝ都合二目を五回減します前後共同樣にいたします。これが凡そ五糎位になりますから其處で減した所をそれ〳〵前後の中心にして二等分して、半分は前に半分は後といたします。さうして前の分は其のまゝ針に殘しておき、後になる方は袋編を三糎編んで全部をかぶせ止めにいたします。この所は袋編にしますと後巾が半分位に縮んでゴムテープなどを入れる必要がなくなります。次は前の方を三糎メリヤス編にいたします。



第五十八圖

こゝで第五十九圖(ロ)のやうに兩側五目づゝをガーター編にして中はメリヤス編に編み、ガーターが十七山出來るまで眞直に編み續けます。其の所より兩側のガーターとメリヤスの境目の所でメリヤスの方を一目づゝ減します。これを三段おきに兩方で減すこと十八回、次は全部の眞中三十目をガーター編にして三山編み、出來ましたなら中の二十目をかぶせ止めにして止めておきます。さういたしますと中の兩側に五目づゝのガーター編が殘ります この時は兩方が別々のものになりますから片方づゝ編むやうになります。この時兩側に五目づゝのガーターがありまして中はメリヤス編になつて居ります。

これを編み續けて內側のガーター編を段毎に內側から外側の方に向つて減します。さうしますと內側が三角形になります。內側のガーター五目を減し絶つたらこゝからメリヤス編の所も全部ガーター編にして後側の紐を編み續けます。これを二十九糎編みましたら兩側で一目づゝ減し乍ら丸味を付けて止めておきます。片方も亦同じ寸法に編みます。



第五十九圖

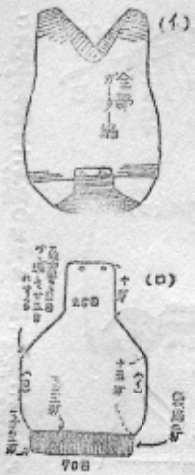
後の袋編と脇のメリヤス編の所が三糎はなれて居りますから、これをとぢ針で裏の方でとぢ付けておきます。兩方をたすきにして第五十八圖(イ)のやうに兩側へスナップを二ツ付けてボタンは飾りボタンにいたします。出來上りましたら良く形を整へて湯伸をして使用いたします。

二三歳用ねびえ知らず

材料　白の中細毛糸四オンス、スナップ六個。

用具　二號玉付二本針、とぢ針一本。

編み方　最初後の腰から下へ編み下り、第六十圖ロ、（イ）に第六十一圖ロ（イ）の如く、前下から上へ編み、脇から左右に分れてたすきを編み、兩脇をとぢ合せます。

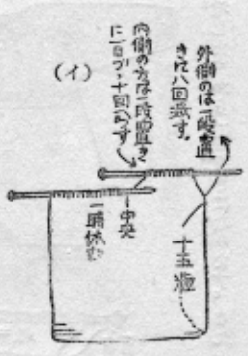


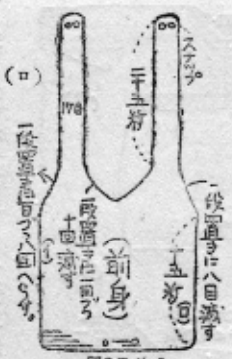
第六十圖

始め二本の針に目を七十掛けます。一本をぬきとり糸を結んで、第六十圖ロ（ロ）のやうに一ツ表、一ツ裏のゴム編を二糎編みます。

次に裏編を二糎編みます。又表一ツ、裏一ツのゴム編を二糎編みます。さうしてこれよりガーター編で十五糎編みます。それより兩側で一段置きに一目づゝ減して二十五の目になりましたら、其のまゝ十糎位編み、こゝで糸を切つて置きます。これは後の分になるのであります。

前身の編み方　第六十一圖のやうに針に目を七十掛けてガーター編で十五糎編み、そこから腕明きを作ります。全體の目の中央から第六十一圖（イ）のやうに、外側の方に長りします。其時內側の方で二ツ一度に編みます。外側の方へ編んで參りました時も同じく二ツ一度に編みます。これを一段置きに外側の方は十回、內側の方は八回、さうしますと殘りが十七の目にたりますから、其の殘りの目で其のまゝ二十五糎編みまして糸を止めます。これがたすきになるのであります。



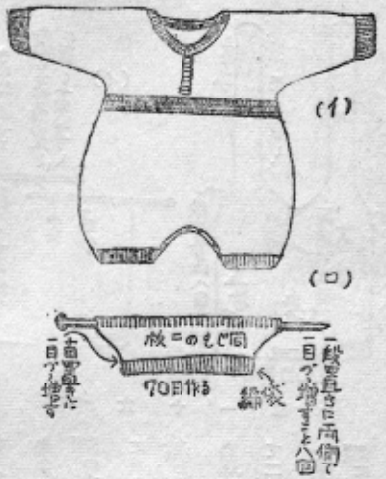


第六十一圖

あとの片方も同じやうにして十七になるまで減します。さうして二枚出來上りましたら、前身と後身を合せ、（イ）と（イ）、（ロ）と（ロ）をとぢ合せて置きます。後の編み初めゴム編の處二糎內の兩脇にスナップを付け、たすきの方にも片方に二ツづつ付けて止めます。後の目を減して編み總つた所から一糎程の所と、前の編み初めとにも、スナップをつけて出來上りきす。

二三歳用ロンパース

材料　太毛糸八オンス、スナップ七個。



用具　三號四本針、同二本針各一組。

編み方　始め二本針に目を七十掛けて一本を抜き、袋編（基礎編参照）を二段編み、次は裏編を一段編み、裏に返して表の時に、十目に一ツづゝ目を増します。其の増し方は目と目の間の糸をすくひ、ねじつて編みますと増し目の處が穴があかずにきれいに出來ます。次は全部メリヤス編にして兩端の一ツ手前の處で第六十二圖(ロ)の如く一目づゝ増すこと八回いたします。これは表側丈けでこれを二十段編み、こゝで七目おきに一目づゝ減します。減らしたまゝで三段編み、次はガーター編で六山帶編みます。次は又メリヤス編にして五段編み、こんどは後と前とを分けて第六十三圖の様に後の方を眞直に三段程編みます。

前の分は別の針に通して其のまゝにしておきます。

第六十三圖　袖の目の出し方は編み終りの處で三目一度に増し、これを三回、五目づゝを三回増し尙終りの一回は十目一度に増しまして、このまゝ増減なしに十段編み、それより袖として増した目數に關係なく後巾の三分の一が衿肩になり、殘りの分が左右兩前身頃になるのであります。衿肩と片身頃を別の針に通して、片身頃を編んで行きます。

眞直ぐに三段編み胸明きの方で一段置きに二目づゝ三回増し、次は衿肩の二分の一よりも三目多く増しておき、増した三目はガーター編にして其のまゝ又眞直ぐに十段編みます。衿肩で三段編んだ半分はくりこしになりますから、肩山を定めて袖下は後袖と良く合せ、増した目數を反對に順々にかぶせ止めにして、いつも袖口の方から

返るときに止めて行きます。止め終りましたら其のまゝにして置いて、他の一方の袖及び前身を編み、衿肩の分丈けは別の針に殘して置きます。そうして前に編んだ片方と同じやうに増し目をして減す處も同じにいたします。これが出來ましたら後と同じにメリヤス編を五糎編みます。そうして前に衿を作る時殘して置いた前巾とつなぎ合せます。

このつなぎ方はメリヤスのつなぎ方であります。（基礎編第三十七圖メリヤスのつなぎ方を御參照下さい。）

これが出來ましたら袖口の端の處に糸を付け横の目を二ツづゝ拾つて目を作り、一ツ表一ツ裏のゴム編を三糎して止めます。片方も同じことをします。

衿廻りは前の端の處に糸を付け、衿肩の處までは袖口と同じやうに目を作りますが後の方は前に目を殘して置きましたから、一緒にして編んで行くことになります。

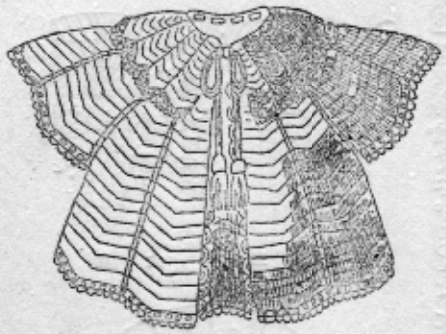
これも一ツ表、一ツ裏のゴム編を二糎編んで止めて置きます。下の方のあいて居る處は、綴針で一段短編をあんでおきますと丈夫でスナップを付けるのにしつかりいたします。

スナップはオムツ等がおちない位の程度に付けます。

二三歳用袖付きマント

材料　極細毛糸六オンス（二本合せ）又は中細毛糸八オンス

用具　成る可く細い毛糸用鉤針一本。



編み方　このマントは首廻りから編み初め、中途で袖の部を殘して開を下へ編み下り、袖と衿は後から編み足します。

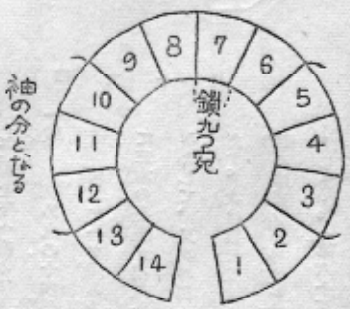
一段——初め九の十四倍の鎖を百二十六作り、後に戻つて、四ツ目に長編を一ツ編み次の目に又長編一ツを編むと始めの鎖と共に三本の長編が出來た事になります。四ツ目には長編五ツを編みまして、又次の目より長編を一目に一ツづゝ三ツ編へて編みます。次は目を二ツとばして、三ツ目より長編三ツ編へて四ツ目には五ツの長編を編みます。又長編三ツ編へて次の二目をとばします。（第六十五圖參照）

さうしますと山形のものが終りまでに十四出來ることになります。

二段——裏に返して次の目に引きぬき編みをいたします。この引きぬき編は、裏に返した時に必ず一目編むのであ

ります。鎖三ツ編んで前段の向側の目に針を通して長編を致します。是を三ツ編み、前段の五ツの眞中の目には長編を三ツ入れて、次は一ツづゝ四ツ長編を編みます。是を繰り返しまして、山の中央に三ツ入れる段と、五ツ入れる段を一段置きにいたしますから、一段置きに山の兩側で一ツづゝ殖えて行く事になります。是を繰り返して十六段編みます。

第六十五圖



第六十六圖

十七段――前二山丈け編みまして三山目から六山目へ飛び、六山目から又四山を編みます。さうして又三山飛ばして終りの前となる二山だけを編みます。このとばした三山づゝは袖になるのでありますから中央の四山と左右の二山づゝが胴になります。（第六十六圖參照。）是を眞直に二十段、次第に編んで行くと目が殖えます。二十段出來ましたらば飾り編に移ります。

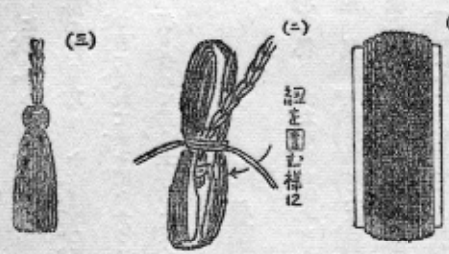
飾りの編み方　胴の編終りの所で鎖三ツ編み、目を一ツ飛ばして次の目に長編を一ツ入れ、三ツ鎖を編み前の鎖編の根元に短編で付け一目とんで、次の目に長編を入れますと一ツのピコットが出來ます。ピコット一ツあみ一目とんで長編一ツ、是を繰り返して裾の飾りとします。前巾の飾りは又胴の編み方に致します。

前飾りの編み方　上前は前幅の上の角から、下前は裾の角から糸をつけて、身頃の長編の根元に長編を九ツか十一位編み、次の長編の根元に短編でつけて行きます。つまり大きな松編で飾るのであります。

衿の編み方　首廻りの端の處に糸を付けまして胴の反對に向つて首まはりの編方に合せて同じ十四の模樣を編むのであります。是を八段編みまして裾と同じ飾りを付けて置きます。袖口の處も同じ飾りを付けるのであります。全部分來上りましたらば紐を編んで首廻りに通します。

紐の作り方　中細毛糸ならば六本位、又極細の場合は十四本位を合せて、極くゆる目の鎖編一メートルを編むのであります。

一メートルの鎖を編みますには糸を鎖の六倍位の長さに致しておきます。紐が出來上りましたら身頃の首廻りに模樣を一ツ置きに通して尖きの方



第六十七圖　房の作方

に房を付けておきます。

房の作り方　十六糎位の平たい巾のものに糸を百回位巻いて、それを抜きとり、前に通した紐の先きを百回の中程に入れて糸を謂むやうにして其の中を別の丈夫な糸で堅く結びます。第六十七圖(二)のやうにして上の半分を折り曲げて房の上の方を堅く結んでおき、房の尖きを良く揃へて切ります。

疊編廊の葉マント

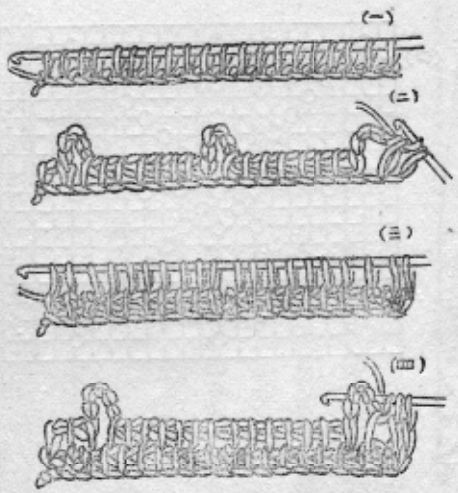
材料　白太毛糸十四オンス（極細毛糸ならば十オンス）

用具　毛糸用鉤針又は疊編用鉤針。

編み方　此のマントは大體疊編で裾の方だけに模様を入れた編い物を何本もつなぎ合せたものであります。

疊編はかたくなりやすい編方でありますから、編みながら注意しなければなりません。

一段——始め鎖二十編み、次の目より一目に一ツづゝ糸を引出して二十目を第六十八圖(一)のやうに針に掛けておきます。其儘後もどりをしながら、一目づゝ引きぬいて行きますが、第六十八圖(二)の如く二目編んで三ツ目を編む前に鎖を四ツ編みます。次に其儘八目引抜きをして鎖を四ツ編みます。又八目引抜きをして、終りの二目手前で四ツ鎖を編み、殘り二目を引抜きます。



第六十八圖

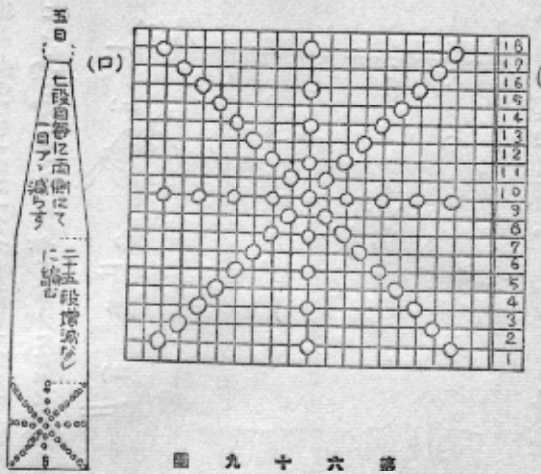
二段——鎖の目を一目に一ツづゝ引出して第六十八圖の(三)の如くに三目の時に前段の四ツ鎖を手前の方に出すやうにして裾の目だけを抄ひ、糸をかけ針に目が二十掛りましたら、三目引ぬいて四ツ鎖を編みます。次より引抜いて終りの目の三ツ手前で鎖を四ツ編み、第六十八圖(四)のやうにすつかり引抜いてしまひます。此線に沿しますと、鎖四ツは丸く玉のやうになつて疊の所から飛び出して線線となつて行くのであります。

三段——二段目と同じく鎖の目を一目づつ引出して針に二十の目を掛けて、戻る時には四目引抜いてから四ツ鎖を編み、次に六ツ引抜いて四ツ鎖を編みますと、丁度中央に玉が出ます。中央の玉は一段おきに出す事になります。又六ツ引抜いて四ツ手前で鎖四つ編み、殘りの四ツの目を引抜いて終ります。

此の方法で中央は一段おきに玉を出し、兩側は段毎に一目づゝ內側に玉を出しながら、八段まで編み、九段目に

は二目おきに玉を出して行きます。第六十九圖(イ)(ロ)の如く、これが模様の段の中央になるのであります。次からは是を反對に十段は八段に同じく、十一段は七段と同じくを繰り返します。

模様が終りましたならば疊編ばかり二十五段編み、それから七段おきに兩側で一目づゝ減します。これを六回して糸を切ります。これを十五枚編んでつなぎ合せるのであります。



第六十九圖

接ぎ合せ方　麻の葉の模様をよく合せて中表にして鉤針で引抜きで、全部つなぎ合せますと胴が出來上ります。

衿の編み方　胴の狹い方即ち衿肩廻りの端に糸を付けて、鎖五ツ編み二目とばして三ツ目に長編一ツ入ます。次には鎖二ツあみ三ツ目に長編一ツ、鎖二ツ長編一ツを繰り返して一段編み紐通しにします。

次の段は鎧編の山形編を作ります。裏に返して短編を一目に一ツづゝ入れて五ツ編み、六ツ目に短編を三ツ入ます。次の目より短編を五ツして、六ツ目をとばして七ツ目から又五ツ短編をなし、六ツ目に三ツ短編を入ます。さうしますと六ツ目毎に三ツ増した處と、一ツ減した處とで高低が出來て山形編になります。これを繰り返して一段致します。

(衿の略圖)

第七十圖

裏に返して、(編み初めは一段置きに鎖を一ツして返ります。)前段の高い所には三目編み、低い所は飛ばして高低を繰り返して二十六段あみます。これで衿は出來上ります。(第七十圖參照)

周圍の飾りの編み方　飾りは前と裾全部に三ツ鎖を編み、根元にとめ、次の目に短編でとめる。即ちピコットを付けておきます。

紐の編み方　紐のあみ方は極細ならば十六本位合せて、糸の丈は編上げ丈の約六倍の長さに用意して一米六十糎位で鎖編をいたします。そしてその先に玉を編んで付けるのであります。

玉の編み方　始め鎖三ツあみ、丸くして其の中に短編を六ツ入れます。二段目は一目に三ツづゝ短編を入れてまはり、あとは増減なしに三段まはつて、其の中に綿を入れて、一目おきに一ツづゝ減じて二段まはり、なるべ

く穴のあかないやうにして糸を切ります。これを六ツあんで紐の先に三ツづゝ付けます。（第七十二圖「出來上り圖」參照）

第七十一圖　出來上り圖

疊編麻の葉帽子

材料　白の太毛糸二オンス、リボン一ノ米位

用具　毛糸用疊編針一本。

編み方　マントと同じ編み方で五枚作り、六つ接ぎ帽子の要領で接ぎ合せ一ケ所だけ明けて置いて後頭部といたします。

マントと同じく二十目の疊編で麻の葉が編み終りましたらば、次の段より兩側で一段置きに三回、次に二段置きに一回目を減して、第七十二圖の樣に次の段からは段毎に減して一目になる迄減して行きます。是を五枚作ります。

そしてマントのやうに麻の葉をよく揃へて、裏の方でつなぎ合せるのであります。後頭部になる處一ケ所だけは上の方で六目丈けつなぎ合せます。つなぎ合せ終りましたらば、前の方も後の方もマントと同じやうに三ツ鎖のピコットを第七十一圖の帽子出來上り圖の如く一段

第七十二圖

段毎に兩側にて目を減す

編んで置きます。次に前の兩角にリボンで花結びをして飾りを付け、花結びの余りを紐にして置きます。此のリボンは一ノ米位の長さの物を用ひます。

これで第七十一圖の出來上りマントと一對になります。

二三歳女兒用ドレス

材料　中細毛糸六オンス。

用具　一號二本針、一號四本針、ほつれ止め、とぢ針、毛糸用鉤針。

編み方　後スカートの裾口から編み初め、胴へきましたら兩袖をあみ出し、衿ぐりを明けて前身の胴を編みます。前スカートは別に裾口から編み上げ、これと前身の胴とはぎ合せます。衿と袖口は後から編み付けます。

後スカート　二本の針に百十一目作り、一本を抜いてメリヤス編を八段あみましたら、「掛けて二ツ一度」の時兩編を一段編み、又メリヤス編八段編んで次から山路編をいたします。

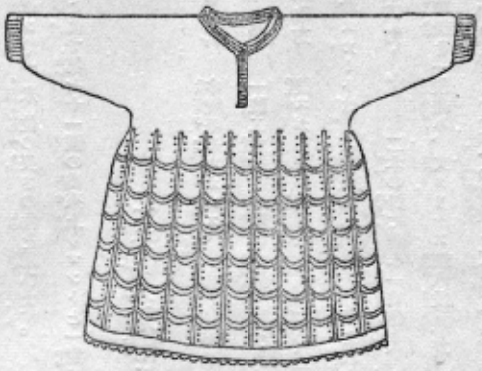
山路編み　（十一の倍數に一目加へる）

一段——「表一ツ、一ツ作る表三ツ、二ツ一度（左）、二ツ一度、表三ツ。一ツ作る」「」を繰り返し最後は表一ツ。

二段——全部裏編。

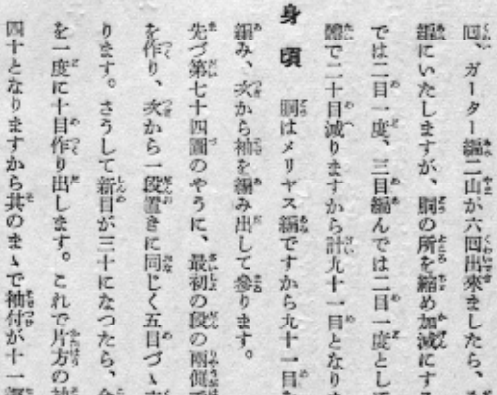
山路編は二段で一くぎりになつて居ますからこれを六度繰り返します。（合計十二段になります。）次はガーター編を二山編みます。山路編六度（十二段）、ガーター二山、これを代る代る繰り返して、模様編を七回、ガーター編二山が六回出來ましたら、全體をメリヤス編にいたしますが、胴の所を編め加減にするため三目編んでは二目一度、三目編んでは二目一度として參りますと全體で二十目減りますから計九十一目となります。

第七十三圖

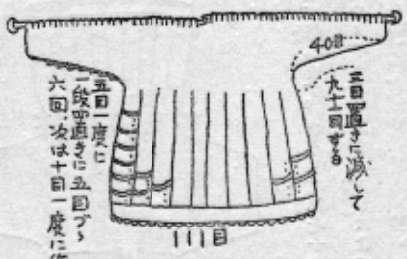


身頃　胴はメリヤス編ですから九十一目を增減なく五糎編み、次から袖を編み出して參ります。

第七十四圖

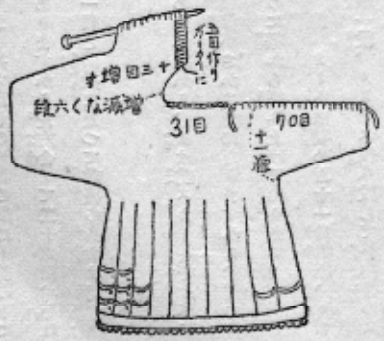


先づ第七十四圖のやうに、最初の段の兩側で五目づゝ增目を作り、次から一段置きに同じく五目づゝ六回作るのであります。さうして新目が三十になつたら、今度は袖下の目を一度に十目作り出します。これで片方の袖の目は全部で四十となりますから其のまゝで袖付が十一糎になるまで編みます。この時針の上の目數は片袖四十目づゝで兩袖で八十目身頃は九十一目合せて百七十一目かゝつて居ます

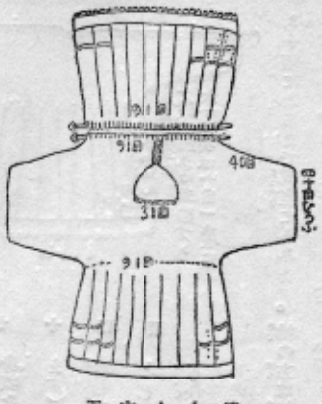


から、右端から七十目編みましたら、第七十五圖のやうに、次の三十一目を袴局明として、かぶせ止めにいたします。編んだ七十目はほつれ止めにうつし、殘りの七十目を左前身頃としてあみ續けます。それで左前身頃を七十目增減なく六段あみます。（この內の三段は繰り返しとなります）次の段からは、袴ぐりの傾で一段置きに一目づゝ增目して十三目增して、前の持ち出しとして一時に新目五目作り、この五目はガーターに編み、新目から十糎になるまで眞直にあみます。袖の方は後袖に合せて袖口の方から十目かぶせ止めにし、次に一段置きに五目づゝ六回かぶせ止めをし後袖に揃へます。さうしてこゝは其のまゝにして置いて、前にほつれ止めにうつして置いた右身頃をこれと同じにあみます。

第七十五圖



かうして左右共前明十糎になりましたら、左右を一緒にしてあみますが、持ち出しの五目の所は上前の下に下前を重ねて上下の目を一緒にあみますと、衿ぐりの方で十三目増してありますから左右合せて二十六目、それに持ち出し五目づゝを重ねて五目、合せて三十一目になり、衿肩明三十一目と同數になつて前後の身巾は同寸法になります。



第七十六圖

これで胴は編めましたから、次は前スカートですが、續けて編みますと模様がさかさまになりますから、別に後スカートと同じやうに裾から編み上げて參ります。

前スカート　前スカートは初め百十一目掛け、メリヤス編八段、時雨編一段、メリヤス編八段して全部後のスカートと同じ編方で、山路編とガーター編を交互に繰り返し模様七回、ガーター六回出來ましたら、目數を九十一に減らして終ひます。さうして第七十六圖のやうに、メリヤス編を二糎程あんで前身頃の編み終りとを基礎編第三十七圖のメリヤスつなぎの方法によつて手際良くつなぎ合せます。

衿　右前身頃の持ち出しの角から左前身頃の持ち出しの角まで周圍全部目を拾ひます。目數は衿肩明が三十一目、衿ぐりは二十目づゝ都合七十一目をガーター編で五山編んで止めます。

袖口　袖口まはりから四十目拾ひ一目表、一目裏のゴム編を十五段編んでかぶせ止めにいたします。袖口は時雨編の所から折つて裏へ綴付け脇から袖下は續けて裏からとぢます。終りに持出しスナップを付けます。

同じく帽子

材料　中細毛糸二オンス。

用具　一號二本針、とぢ針、毛糸用鉤針。

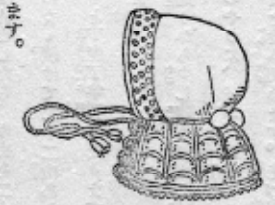
編み方　この帽子は前の折返しがイボ編、あと全部ガーター編で、後の飾はドレスと同じ山路編とガーター編であります。

イボ編み

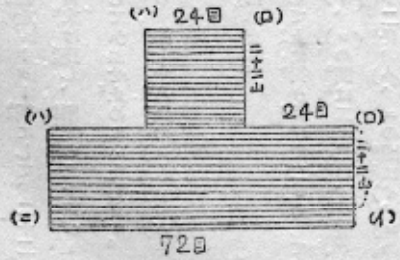
一段――一號の針に七十二目作り、表編を全段編みます。

二段――裏編を全段編みます。

三段――二目一度に編みます。

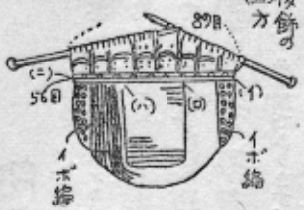


第七十七圖　出來上り圖



第七十八圖

段――表一ツ、次の目との間の目をひろふ、表一ツ、間の目を拾ふ。これで、イボ編の一模様になります。以下それを四回繰り返します。さうしますとイボが四ツ出來ますから、次からは全體をガーター編にして、二十二山出來るまで增減なく編みます。二十二山（十縞）編めましたら、中央を二十四目丈け殘し、兩側の二十四づゝはかぶせ止めに致します。殘しました二十四目は其のまゝ續けて二十二山あみましてかぶせ止めにいたします。さういたしますと丁度丁字型となりますから、第七十八圖の(ロ)と(ロ)、(ハ)と(ハ)と接ぎ合せます。



第七十九圖

後飾り　首廻りから少し縮め加減に目を拾ひます。

第七十九圖のやうに、イボ編は前飾りとして上に折り曲げて二重にして、首廻りから目を拾ひ初めます。先づ圖の(イ)、(ロ)の間は二十二目、眞直ぐ後の(ロ)、(ハ)の間は一目置きにとばして拾ひ十二目、(ハ)、(ニ)の間は(イ)、(ロ)の間と同じく二十二目、合計五十六目となります。五十六目拾ひましたら時雨編を一段いたしまして、紐通しを作ります。次はガーター編を編みながら八十九目になるまで約二目置きに增して二山、次は前のドレスと同じく模樣を四回繰り返します。山路編を繰り返しまして、ガーター編三度、模樣編三度、出來ましたら最後はガーター編四山編んで止めます。これで全部出來上りましたから、最後に紐通しに紐を通します。

紐の作り方　初め二本の糸で鎖三十糎の長さに紐を二筋編んでおきます。

玉の作り方

第八十圖　房の作り方

玉の作り方は第八十圖(イ)(ロ)のやうに左手二本の指に糸を三十位卷き、其のまゝ抜きとつて、眞中を堅くしばつて紐の先きに付け、輪になつて居る方を切つて丸く形を付けます。玉が二つ同じやうに紐の先きに付きましたら、紐通しに通して後でこま結びにいたします。

房の作り方　第八十圖(1)(2)のやうに左手四本の指に七八回卷いて其のまゝ抜きとり、紐の一番先きの目に通して二つに折り、折り目から三糎位の所を堅くしばり、先きを良く揃へて切つておきます。

二三歳用花形編ドレス

材料　中細毛糸五オンス。

用具　一號二本針、ほつれ止め、とぢ針。

編み方　このドレスは裾をガーター編に、スカートを花形編に、胴はメリヤス編として、衿及び前明はガーター編、袖口はゴム紐に致します。

先づ最初に後スカートから編み初め、胴と袖とをあんで前スカートに編み下ります。衿と袖口は後からあみつけます。

後スカートの編み方　一號の針に百二十九目作りをして、ガーター編を五山致します。其の上にメリヤス編を二段編んで置き、次からは模様編をいたします。

花形編み　（十二の倍數に九を加へる）

一段——「表九ツ、一ツ作り、三ツ一度、一ツ作り」表九ツ。

二段——全部裏編。

三段——表七ツ、「二ツ一度、一ツ作り、表三ツ、一ツ作り、二ツ一度、表五ツ」。

「」の中を繰り返して、最後は七ツ表で終ります。

四段——二段に同じ。

五段——一段に同じ。

六段——二段に同じ。

七段——全部表編。

八段——全部裏編。

九段——三ツ表、「一ツ作り、三ツ一度、一ツ作り、九ツ表」「」の中を繰り返して、最後は表三ツで終ります。

十段——二段に同じく全部裏編。

十一段——一ツ表、「二ツ一度、一ツ作り、三ツ表、一ツ作り、二ツ一度、五ツ表」二ツ一度、最後は一ツ表で終ります。

十二段——二段、八段に同じ。

十三段——九段に同じ。

十四段——八段に同じ。

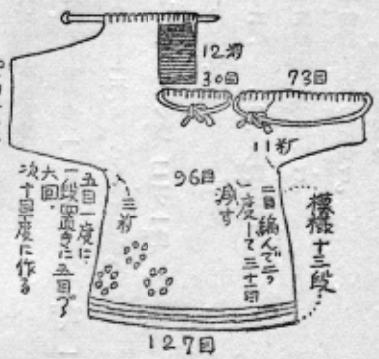
十五段——全部表編。

十六段——全部裏編。

一段から十六段迄を繰り返しますと、いつも模様が交互に編み出されて行きます。

この模様が縦に十三並びましたなら、全體をメリヤス編にいたします。其の時に少し縮めるために、二ツ編んでは二ツ一度をして、中央で二ツ一度を三ツ續へて、又二ツ編んでは二ツ一度を致しますと、全體で三十一目減りまして、合計九十六目となります。

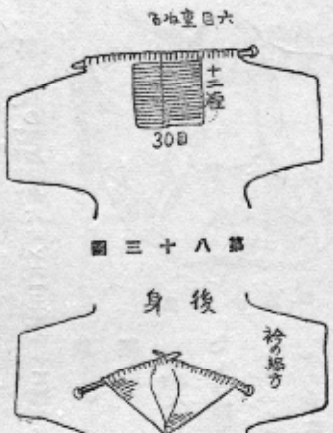
身頃　調はメリヤス編ですから九十六目を増減なく三廻あみまして、次から第八十二圖のやうに袖を編み出して參ります。



第八十二圖

先づ、最初の段から兩端で五目づゝ新目を作り、次から一段置きに五目づゝ六回作るのであります。かうして新目が三十になりましたら今度は袖下の目を一度に十目作り出します。これで片方の袖の目は四十となります。このまゝ袖付が十一糎になるまであみます。この時計の上の目數は、片袖四十目づゝで兩袖の目が八十目、身頃が九十六目合せて百七十六目かゝつてゐますから、右端から七十三目と中央の三十目とをほつれ止めに取つておきます。そして左身頃丈けを編んで參ります。

左身頃は衿肩の方に參りました時、一度に衿肩の半分より二目多く、即ち十八目増します。其の十八目丈けはガーター編で十二糎になるまであみます。一方袖の方は後袖に合せて袖口の方から十目かぶせ止めにし、次に、一段置きに五目づゝ六回かぶせ止めをし、後袖に揃へます。さうしてこゝは此のまゝにして置いて、右身頃を左身頃と同じに編みます。



第八十三圖

かうして前明十二糎になりましたら、第八十三圖のやうに、左右を一緒にしてあみますが、衿肩を増す時、三目づゝ多く増してありますから上前の下に下前を重ねて、六目を重ねたまゝあみます。

重ね合せましたら、次は全體をメリヤス編にして模様のある所まで編み、次から後の模様に合せて模様を十三段、終りにガーター五山編んで止めます。

衿　衿肩明の十八目一度に増した端から端まで、第八十四圖のやうに目を拾つて、ガーター編二十山位あんで止めます。

袖口　袖口廻りから四十目拾ひ、一目表、一目裏のゴム編を十五段あんでかぶせ止めにいたします。袖下から脇を裏から細かくとぢます。持ち出しの所にはスナップを付けます。

二三歳女兒用マガレットオーバー

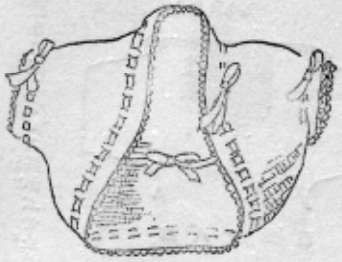
材料　白の極細毛糸六オンス（三本合せて編む。）人絹刺繍糸とき色一把、白の一糎巾リボン四米。

用具　最細用の鉤針（元の方に玉の付いたもの。）とぢ針一本。

編み方　此オーバーはかさり編の他は全部最細にして右前身の肩の方より編み初めます。

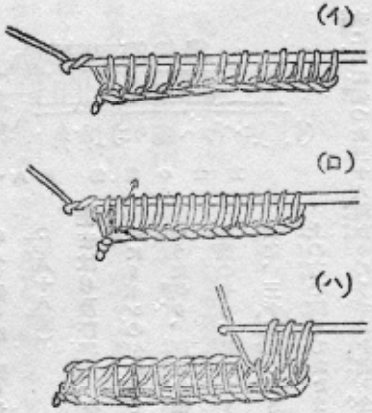
たゝみ編み　第八十六圖（イ）の如く鎖の度を一目づゝ全部八糎位の長さに引みぬき、返りは（ロ）圖の如く、糸をかけ初めの一目だけ一目はづし、次からは二目づゝはづして返るのであります。

二段——（ハ）圖の如く、前段にはづした縦の糸を一目づゝ全部八糎の長さに引きぬき、返りは（ロ）圖と同じにいたします。



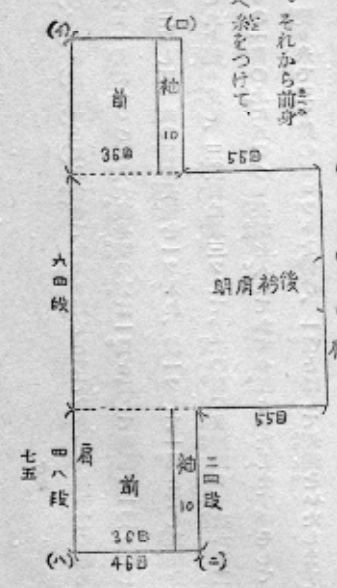
第八十五圖

最初四十六鎖編をし、第八十六圖（イ）、（ロ）の如く編みます。



第八十六圖　たゝみ編の編方

二段目は又（イ）圖の如く目を拾ひ（ロ）の如く引き抜く時、三十六目丈け引きぬき袖口となる可き方を十目引きぬかずに針に残し、三段目は一段と同じく全部編み、四段目は又二段目と同じく十目殘すと云ふやうにして袖口の方が二十四段、前身頃の方が四十八段となるまであみます。そして今度は身丈として鎖を五十五編み足しまして後身を直ぐに六十四段增減なしにあみます。六十四段編みましたら、一旦目を全部止めてしまひます。それから前身の分として、右端から五十六目のところへ糸をつけて、四十六目だけ目を拾つて最編をし、右前身と同様に十目は一段おきに減み、右方の段數に合せて同じ形に編み糸を止めます。



第八十七圖

次は兩肩を第八十七圖の(イとい、ロとろ、ハとは、ニとに)を合せてかぎ針でとぢておき、袖口の方の編め方をいたします。袖口は前身頃の方はそのまゝ一目に一ツづゝ入れ後身頃の方は一目とばして短編を一段いたします。

第八十八圖　飾編の仕方

二段目は初め鎖三ツして、次の目に長編を一ツ入れ、鎖一ツして一目とばし長編を二ツ編へて編む。これを繰り返し、三段目は鎖三ツして、次の目に長編四ツ、次から二ツ並んだ長編の終りの一目の上に五ツづゝ長編を入れてかさり編といたします。そして最後のふち飾りは、變り糸で三ツ鎖のピコットを付け、一目とばして短編をいたします。(第八十八圖)

裾まはり及び裾　全部袖口と同じやうに飾り編をいたします。

次にリボンの付け方ですが、四米を最初に袖口用に九十糎づゝ二本を、端が斜になるやうに切り、兩方の袖口の、二本並んだ長編を一ツおきに通し上の方でリボンを第八十五圖のやうに結びます。

次に、三十糎餘の長さを二ツ切つておき、殘り全部で衿と裾まはりにかさりを付け左の上の方で結んでおきます。

次に前に切つた三十八糎餘りのリボンを前を合はす樣と致しますから適當な所にかさりの內側へ結び付けて下げておきます。

オチャン〜

材料　極細毛糸白四オンス、(三本合せ)變色毛糸一オンス、リボン二糎巾四十糎。

用具　毛糸用鉤針、とぢ針各一本。

編み方　裾巾全部の寸法で上に向つて編み、編上の所で前身と後身とを別々に編み、肩で接ぎ合せあとから衿を編みます。

後巾、前巾、襷巾の二倍の寸法で六で割りきれる數だけの鎖編をいたします。

普通百六十二が適當であります。

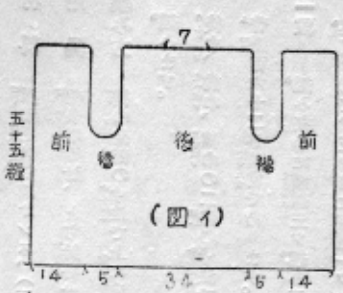
一段——編み初めに鎖編三ツ編み三ツ目に「長編」二ツ編み、二ツ飛ばして三ツ目に短編でとめて、次は三ツ目に長編五ツして、三ツ目に短編一ツ」で止める。つまり扇編をくりかへします。

二段——變色毛糸(三本合せ)で一段全部短編をいたします。

三段——地色の毛糸で一段と同樣に鎖編三ツして根元に長編二ツあみ、第一段の長編五ツの山に短編で止め、一段目の短編一ツの上に長編五ツを編みます。

四段——二段目と同様に變色毛糸で短編を一段全部編みます。

一段、二段を交互にくりかへしながら二十五編あみましたらば、變色毛糸の短編をやめて松編を地色毛糸で六段編みます。短編をやめてからは一段毎に糸を切ります。



五十五編

第八十九圖(イ)(ロ)の寸法に後巾、前巾、襠巾と糸標をつけます。襠のへら十所は段々とへらして丸くしなければなりませんから松編の五ツを三ツに三ツを一ツに減します。前は前で編み、後は後で別々に編みます。

第八十九圖

前を編む時は、襠の方だけ一方で松編をへらします。

後を編む時は、兩方で襠の方をへらします。

162目

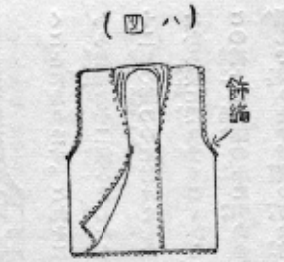
前後共減らし初めてから二十三編だけ編みましたら、糸を切ります。

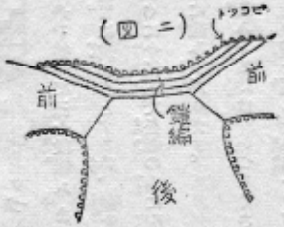
次に肩を裏からとぢ針でとぢ合せます。

次は第九十圖(ハ)のやうに襠ぐり、裾、前にピコットを一段ぐるりと編んで飾りといたします。

鈴の編み方

枠は變色毛糸で鎖編(基礎編參照)にあみます。肩から八編下つた所まで短編を一段編み、次に裏から編みますが第九十圖(ニ)のやうに兩端で一ツづゝ減らして編みます。五編位編みましたら、まわりにピコットを一段編みます。





第九十圖

飾のつけ方　肩から十七編下つた所にリボンを嬰兒帽子のやうに結んでつけて紐といたします。

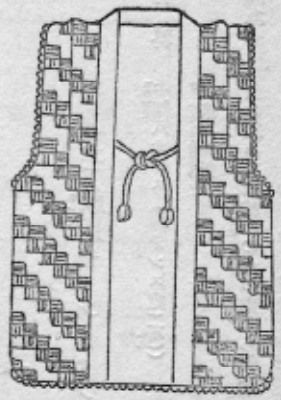
二三歳用チャンチャンコ　(斜模松編)

材料　中細八オンス(四オンス宛二色)

用具　毛糸用鉤針。

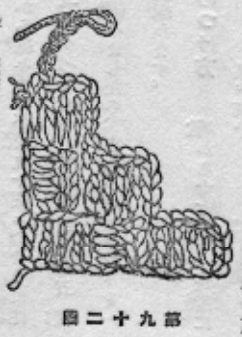
編み方　此の編み方は前巾の角の處から編み初めます。始め鎖を七ツ編み、後に戻つて四ツ目より長編を鎖の數るまで編みます。さうしますと長編が四本出來ます。こゝで又七ツ鎖を編み、四ツ目より長編を四本入れ、裏返

して始めの鎖編の處に短編で付けます。三ツ鎖を編み今付けた處に長編四ツを入れます。この時第九十二圖の如く長編を一度引ぬいた處で糸を取りかへます。又鎖三ツを編み四ツ目より長編を四ツ入れます。裏に返して前の鎖の中に短編で付けます。鎖三ツを編み同じ根元の鎖の中に長編を四ツ入れます。次の鎖の角に短編でとめて又くさり三ツ編んで根元の鎖の中に長編四ツを入れます。このやうにして兩側で七ツづゝ鎖を編みますと、一段で一ツづゝ長編が増して行くことになります。これを二段づゝ糸を替へて三十段編みます。ここが前巾になるのであります。次は裾の方から松編を十二編みましたら、十三目に進まうとする時、鎖を編まずに十二目の鎖の中に付けましたら、直ぐに今編んだ松編の山に引ぬきをしながら後に戻りますこゝから下の方に編み下がります。



第九十一圖　出來上り圖

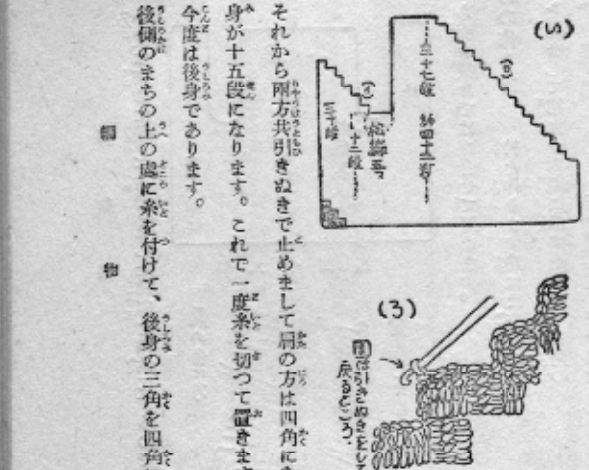
この襟上で松編の上に引ぬきをして編み下る時は、いつもくさりを三ツ編んで戻ります。裾の方は前の様に七ツ鎖を編んで松編一ツづゝ増して編んで參ります。襟上は引ぬきにして返る事を二度致しますと丁度松編五ツ丈け襟巾になります。これが出來ましたら前巾の上の方は第九十三圖(い)のやうに三角のまゝにして置いて、次は後身頃を上の方も裾の方も七ツづつの鎖を編んで續けてゆきます。兩方共七ツ鎖で十五段編みましたら肩の方を引きぬき止めにして、五段出來ましたら下の方も引きぬきで止めます。



第九十二圖

次は兩方共引きぬきにして肩の方で十段出來ましたなら次にまちを作ります。前のまちと同じやうに下から十二の松編の處で引きぬきにして戻ります。これを二度引きぬきにして戻りますと丁度襟巾が五ツで襟が出來ることになります。

後身は第九十三圖(ろ)の如く其のまゝにしておきまして、一方の前巾の方を伸ばして參ります。其の段數は襟上から十七段まで伸ばすのであります。



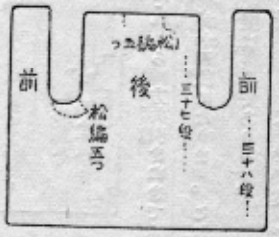
第九十三圖

それから兩方共引きぬきで止めまして肩の方は四角になるまで止めて參ります。さうしますと、前が十七段、後身が十五段になります。これで一度糸を切つて置きます。

今度は後身であります。

後側のまちの上の處に糸を付けて、後身の三角を四角になるまで編んで參ります。又こゝで一度糸を切りまして

今度は初めに綴して置きました前巾を四角にするのであります。始めのまちの前側に糸を付け、三ツ鎖を編み、両方共引きぬいては三ツ鎖をして返し、第九十四圖の如く四角になるまで編んで參ります。



第九十四圖

肩の合せ方

（平たくした圖）

第九十五圖

肩の接ぎ合せ方　次に前身頃の肩と後身頃の肩を第九十五圖のやうに突合せ、横樣を合せて裏の方から引き抜きではぎ合せて置きます。

衿の作り方　衿を作ります時には左前の裏を見まして第九十六圖に示すやうに下三角の處に糸を付けて、七ツ鎖を編み同じ處に長編四ツを入れます。七ツ鎖を編み四ツ目より長編四ツを入れます。これを初めの鎖三ツの中に付けます。三ツ鎖を編み同じ處に長編四ツを入れます。こんどは身頃の方の二ツ目の松編の中に付けます。鎖

第九十六圖　衿の作方

三ツ編んで次の松編の一番初めの長編の上に付けます。三ツ鎖を編み、前に三ツ鎖を編んだ中に長編を四ツ入れます。さうして次の松編の鎖の中に付けます。又三ツ鎖を編み長編を四ツ入れます。

これが三回出來ましたら、衿は松編三ツの巾でありますから片方は身頃に付け片方は引きぬき止めにして衿肩廻編が出來ます。

これを引きぬいて結んだ中に又針に糸を結んでは同じ目に引きぬくこと四回。これを引き締めて元の鎖の目に引きぬきで付けます。それから鎖の目毎に引ぬきをして鎖の終りまで編みます。衿の裏側の方へ糸を引込んで良く止めて糸を切ります。衿の外側も餘りきれいでないやうでしたらピコットを廻りに付けて置きますときれいになります。

紐の作り方　紐はきち丈より五糎上の處の衿と身頃の處に短編で付けて鎖三十編みます。糸を少し長くして針に糸をからんでは同じ目より糸を引き出し、又糸を針にからんでは糸を引き出し、これを四回いたしますと絡蘭編が出來ます。

仕上げは普通のチャン〳〵と同じ仕方で恰好よくいたします。

二三歳女兒用藤編袖なしセーター

材料　白太毛糸六オンス、中細又は編レース少々、一糎巾リボン一米。

用具　三號二本針一組、とち針一本、綴針。

編み方　始め二本の針に八十六の目をかけます。（この藤編は二十一目を一模様と数しますから藤四模様と最後の二目とを加へて八十六になります。）

一段——裏二ツ、表二ツ、二ツ一度を三回、次にかけて表一ツを五回あみまして、それから二ツ一度これを三回、表一ツ、これが藤編一ツの編方でありますから、これを四回續けて、終りに裏二ツで終ります。

二段——表二ツ、裏十九、終りに表二ツで終ります。

三段——裏二ツ、表十九、終りに裏二ツで終ります。

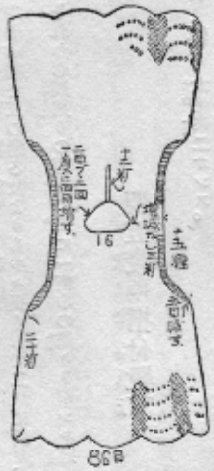
四段——二段目に同じであります。

五段目からは一段に返ります。一段から四段までを繰り返して、第九十八圖のやうに、二十糎編みます。二十糎

第九十七圖　目來上り圖

あみましたら、全部をメリヤス編にして、表編の時に全體の目が六十六になるまで、ところ〴〵で減します。この減し方は二ツ一度に編みます。それより兩方五ツづゝをガーター編にして、ガーターの内側で二目一度に編んで目を減し、始めの方はかぶせ目とし、終りの方は二目一度にいたします。

これを表編の時丈け減して兩方共五回續け、それより眞直ぐに十五糎編みまして衿肩を明けます。



第九十八圖

六十六目の内兩側で、五ツづゝ十目減しましたから殘り五十六になります。其の三分の一よりも二ツ少くして中央十六目をかぶせ止めにいたします。かうして兩方はガーター編共で二十目づゝ殘ります。

そこで前身頃が兩方に分れ、片身頃はほつれ止め又は針にうつして置き、片身頃を三糎丈のさゝ眞直ぐに編みまして、衿ぐりの方で増し目をいたします。その増し方は衿肩明の方に來ました時に二ツ増目をし、これを二回繰り返し、後は四ツ一度に増目をいたしますと丁度衿肩明きの半分の目數が片方から出たことになります。それより十二糎眞直ぐに編みまして一度糸を切り、片方も同じやうに十二糎まで編みましたなら、其處で兩方共續けて三糎編み、兩側で増目いたします。其の増し方は後身の減した分を前で増すのですから其の反對に後と同じくガーターの内側で一段置きに一ツづゝ五回兩方で増

し目をいたします。増し終りましたなら、こんどは後身で二十目減したのと反對に二十目増します。其の増し方はところ〴〵で目と目の間の糸をすくひ、一ツねじつて編みます。

さうして全部の目が八十六になりましたら、藤編をいたします。其の寸法は後身丈と同寸に編み、編み終りましたら全部の目をかぶせ止めにします。そして衿廻り前明の處を鉤針で一廻り短編で編んでおきます。胸に付けます、玉は中細か又は繊レースで二種一位の丸さのものを編んで二ツ作り前明の外側の二ケ所に縫ひつけます。紐の方は編で玉の通る位よりも少々長くして二ツに折り、右の内側の方に縫ひ付けて、前後の脇をとぢ合せます。それから胴廻りの藤編の目に一糎巾の飾りリボンを通して出來上りとします。

四五歳用指付靴下

材料　太毛糸二オンス。

用具　一號四本針一組。

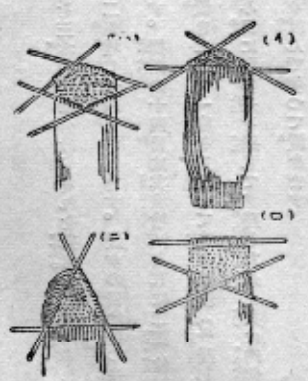
編み方　始めに二本の針に四十四目を掛け、表二ツ、裏二ツのゴム編を八糎編み、次にメリヤス編みを十二糎編みます。

こむらの減し方　何處か一個所に糸じるしを付けて、しるしの右側はかぶせ目左側は二ツ一度を致します。

これを五段置きに二回致しますと、丁度踵りが四十目になります。この四十目を真直に三糎編みます。

第百四十九圖

踵の作り方　全部の目の半分を、勝のところで減した糸標を中心にして、一本の針に移し、殘りの半分を二本の針に通して置きます。（第百四十(イ)參照）それより一本の針の方の、二十目だけを十二段編みます。（第百四十(ロ)參照）次に今編んで來た二十目を針の上で凡そ三ツに別けます。兩端を六目づゝ中央を八目として、初めその三分の二（六目と八目）を表編で編みます。裏返して、今編んで來た最後の目はそのまゝ一目右の針にうつし、次から裏編に八目編みます。又表に返して一目うつし、次から裏編を編んで、前段で編んだ目より一目多く編んで、後戻りいたします。このやうにして往復いたしますと兩端の六目は段毎に一目づゝ中央の部へ編み込まれて仕舞ひます。（第百四十(ハ)參照）もう一段編んで、先に十二段編んだ隣側の目を拾つて（第百四十(ニ)參照）二本の針に通して置いた所の、二十目も共に輪に編みます。其の時二本の針の二十目の兩端の目で、十二段の横目を拾つた目にかぶせて、



第百四十(ハ)圖　第百四十(ニ)圖　第百四十(ロ)圖　第百四十(イ)圖

一段おきに一目づゝ減して行き、拾つた目を全部渡らして仕舞ひます。（第百一圖（ホ）參照）それから眞直に八寸編みます。（第百一圖（ヘ）參照）

拇指の作り方　上下の目を端から數へて六目づゝ都合十二目を三本の針に分け、それを拇指として丸くし、合せ目の處で二目增し十四目とします。殘りの目は他の糸に通して置きます。拇指の十四目は其儘增減なしに二寸位編み、次より一目置きに二ツ一度を二段して糸を五糎位殘して切り、今の編み目に別の糸を通して、殘した糸と共に内側に入れ、しつかり結んで切つて置きます。

第百一圖

四本指の編み方　別に糸を通して置きました殘りの目を三本の針に移し、合せ目の處は拇指の時に增した目の處と共に穴のあかないやうに目を四目位拾ひます。其儘一廻り編んで小指の方で目を減します。上下を良く揃へて小指の側の一番端の目を上下共一目づゝを中心として、其の兩側の目で次の目をかぶせて減します。一段置きに二回へらしましたら、三回目からは毎段へらして親指の長さだけになるまで編みます。（第百一圖（ト）（チ）參照）編み上りの糸の先をかぎ針に通して、爪先きをメリヤスつなぎ（基礎編第三十七圖參照）にして、中の方で糸を止めて切ります。

四五歳用洋服下着

材料　太毛糸六オンス、スナップ四個。

用具　三號二本針、とぢ針。

編み方　この下着は後身の下の方から編み初めます。始め目を二十五掛けて十五糎ガーター編をします。それより兩側の一目内側で一段置きに一目づゝ十五回增します。これで全部の目が五十五になり、これが後巾になるのであります。それより增減なしに袖下迄二十糎編み、兩側で一山毎に五目づつ五回增します。次は一度に十目增し、終りましたらそのまゝ袖付の所で十糎乃至十二糎編んで衿肩を明けます。後巾の目數を三等分にいたします。衿肩が十九で兩前身が十八づつになります。衿肩明の十九をかぶせ止めにして片身頃を別の針にうつして置き片身丈け三糎（半分肩のくりこしとなる）編み、胸の方で一段置きに二目づゝ三回增し目を致し四回目は七ツ一度に增し目いたします。袖の方はそのまゝ續けて袖丈を編み、袖丈

第百二圖　出來上り圖

だけ編めましたら、二十目をかぶせ止めにし、一段置きに前に増し目した反對に、五目づゝ五回かぶせ止めにいたします。袖を止め終りましたらそのまゝ中止して置き肩山で別針に預けて置いた片方の前身を編みます。胸の増目、袖の止め方等、片方と同樣に、同じ所まで編みます。（第百三圖參照）出來上りましたら胸明きの處を三目重ねて、二目一度に三回編みます。女兒なれば左前に、男兒は右前にして重ねます。次は二十糎眞直ぐに編んで止めて置きます。

第百三圖

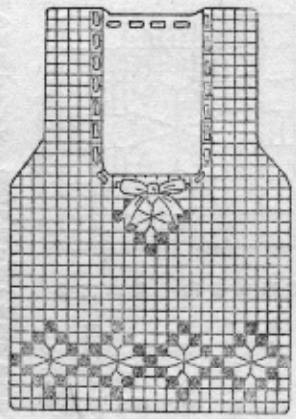
袖口の編方　袖の端の處に糸を付け一目に一ツづゝ目を拾ひ、三目拾つたら一目とばし、それを繰り返し拾ひ終りましたら、一ツ表一ツ裏のゴム編を七糎編んでかぶせ止めにして糸を切ります。前裾同じに袖口を編みます。

衿の作り方　前衿明の端に糸を付け一目に一ツづゝ拾へてとぢ針でまつるやうにしてとぢ合せます。次は前側の袖下と脇とを良く合せて付けます、脇明の處は上の處と中程とに付けて置きます。

五六歳女兒用春向きの袖なしセーター

材料　中編三オンス、一糎巾リボン一米十五糎。

用具　鉤針使用。



第百四圖　出來上り圖

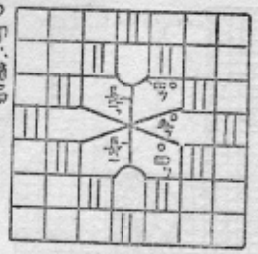
編み方　花びし編。

一段——始め鎖八十を編み、八ツ目に長編一ツを入れ、鎖二ツを編み、目を二ツとばして三ツ目に長編を入れます。鎖二ツ、目を二ツ飛して長編を一ツ入れます。この段は全部これを繰り返します。

二段——返る時に鎖二ツと長編の分が三ツで部合五ツの鎖を編んで、裏に返して前段の長編の上に長編を編みます。この拼目が三ツ出來たら四ツ目には前段の拼目の中へ長編二ツ編み、前後の長編と合せて長編を四ツ編へます。又次よりは拼目が五ツ出來ましたら六ツ目には長編を四ツ編へます。拼目五ツ置きの六ツ目、長編を四ツ編へる。これを繰り返しますと終りは拼目が三ツ出來ることになります。

三段——鎖五ツをして裏に返し次の長編の上に長編を入れます。次に鎖二ツ長編一ツの拼目を二ツ編み、次の拼目の上に長編四ツを編へます。

鎖二ツを編み前段の長編の目の揃つて居る所をとばして、その次の拼目に長編を四ツ編へます。鎖二ツを編み長編の拼目ですゝみ、前段の四ツ編へた長編の兩側にきました時に四ツ編へるのであります。これで終りは拼が二ツとなります。



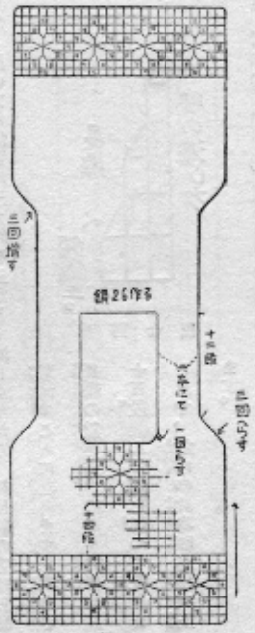
第百五圖 模様編

四段——鎖五ツを編み、裏に返して拼目一ツ作り、次の長編より四ツ編へます。鎖四ツ編んで前段の長編と長編の間の鎖に長編で付けます。又鎖四ツを編み次の長編の終りの目より長編を四ツ編へる。これを繰り返して終りに拼目が一ツ出來ることになります。

五段——この段は模様の一番廣くなつた處でありますから始めから模様を入れることになります。それで始め三ツ鎖を編み裏に返して續いて三ツ長編を編へます。

六段——鎖五ツ編み、裏に返して前段の長編の終りの目より長編を四ツ編へます。四ツ鎖を編み前段の短編三ツの中央の目に長編一ツを入れます。次に四ツ鎖を編み、前段の五ツ鎖の中に長編三ツ、長編の頭に一ツ、都合四ツを編へることになります。

七段——鎖五ツを編み、次の長編の上に長編を入れ、二ツ鎖を編み、次の長編の頭より長編を四ツ編へます。鎖二ツを編み前段の鎖四ツの中に三ツの長編を入れ長編の上に一ツ、都合四ツ編へることになります。この段はこれを繰り返します。



第百六圖

八段——鎖五ツを編み裏に返して次の長編の頭に長編一ツを入れる。鎖二ツを編み次の長編の頭に長編を入れる。鎖二ツを編み、模様の中央の處に長編四ツを入れる、第二段目と同じであります。これを繰り返しますと一模様全部が終るのであります。

第百六圖のやうに、九、十、十一、十二、十三、十四、の各段は拼目ばかり、十五段より前巾の中央の處に菱形

模様を一ツだけ入れるのであります。この模様が出來上りましたら胸明きを作るのであります。胸明きを作ると同時に脇の減し方をいたします。

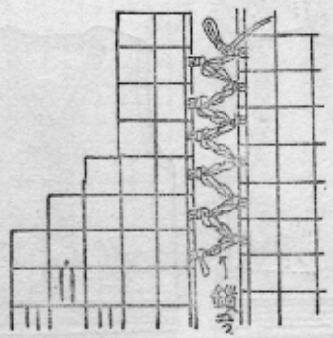
脇の減し方は第百七圖のやうに、毎段裏側で裏返す時五ツづゝ鎖を編む處を三ツづゝ編みます。一模様の終つた處から三ツ鎖をして脇の方に返ります。又脇の方でも三ツ鎖をして胸明きの方に戻ります。胸明きの方は一回三ツ鎖、脇の方は段毎に三ツ鎖を三回して減しますから、結局脇の方は三回減すことになります。胸明きの方は一回減すことになりますし兩方で減しました殘りの目が鎖を入れまして長編の數が六ツになり拼目は五ツになります。これを胸の別れ目から十五段編んで糸を切つて置きます。

第百七圖　脇の減し方

これで、前巾の片身頃が出來上りますから、次は片方の前巾にうつります。

脇の方へ糸を付けて、三ツ鎖を編み、裏に返して、胸明の一模様の終つた處まで編みます。そこで三ツ鎖して又外側の方へ編み、片方のやうに三ツ鎖をしては胸の方へと三回減します。（胸明きでは一回）鎖共長編六ツになりましたら片方と同じく、分れた所から十五段編みます。

十五段の編み終りが内側の方になりますから、そこで袴肩明として二十六の鎖を編みます。そうして一方の五ツ鎖の三ツ目に長編で付けます。それより拼目編を續けてその段の終りまで編みます。これより拼目ばかりを六段編みます。七段目より兩方で一目づゝを増します。増方は段の初めに、五ツ鎖を編み裏に返して今の鎖の根元に長編を一ツ入れますと目が一ツ増した事になります。同じ段の終りで同様に増しますから終りは三ツ鎖を編んで再び同じ目に長編を入れますと一目増した事になります。これを一段置きに三回増しますと丁度前巾の三回減した處と同じやうになります。次からそつと拼目で編み下り、裾で前の模様に合せて同じやうに編みます。

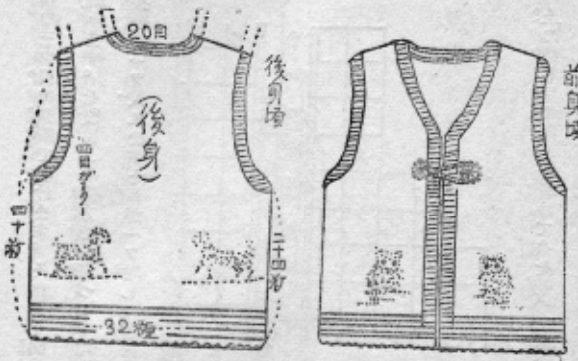


第百八圖　脇の合せ方

脇の合せ方　後前をよく擦へて第百八圖のやうに模様の上の段に糸を付けて、二ツ鎖を編み片方の模様の上の段に短針で付けるのであります。馬乘はあけて置きます。

又鎖二ツを編み、一方の次の段に付けます。これを繰り返して上の減し目の所まで付けて糸を切つて置き、堅く糸を止めて置きます。さうして前に用意して有るリボンを首廻りに通して前の方で花結びにしておきます。

五六歳用袖無セーター



第百九圖　出來上り圖

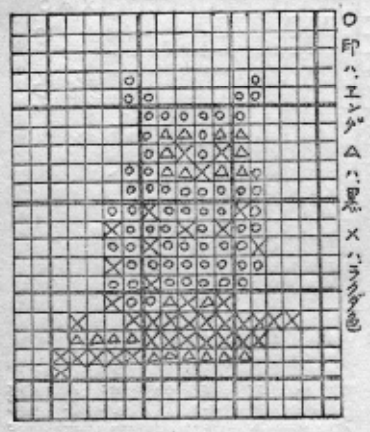
材料　中細水色毛糸五オンス、臙脂半オンス、黒駱駝少々。

用具　二號玉付二本針、とぢ針。

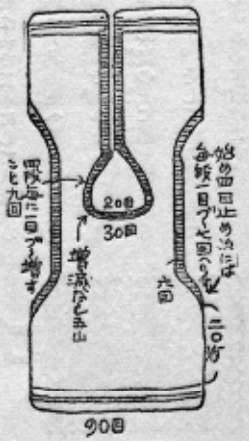
編み方　後身より編み始め、裾をガーター編に、胴はメリヤス編に、袖明きと衿をガーター編に致します。刺繍は全部出來上りましてから刺します。

始め二本の針に目を九十掛けます。地糸でガーター編を二山（ガーターは二段で一山）編み、えんじ色で一山、地糸で二山えんじ色で一山、地糸で二山、編みますから都合八山出來ます。ガーター編が八山出來ましたならば第百十圖のやうに、後はメリヤス編にして二十糎編みます。次は兩脇で三目づゝガーターにして内側の方へ一目づゝガーターを増して行き、ガーターの目が十になりましたら、端から四目かぶせ止めにして、次の段からはいつも端の方で二ツ一度をして脇の刺りをつけます。

これを七回減しますと十一目減ることになります。これを兩方共同じことに十一目づゝ減しますと後はガーターが六ツづゝ殘ることになります。それより減し初めから十五糎眞直ぐに編みまして衿肩を明けます。



第百十一圖　圖案（桑）

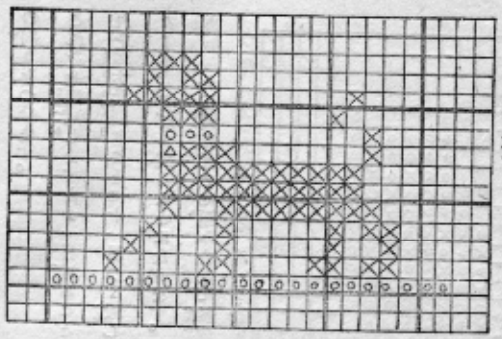


第百十圖

衿肩は全部の中央三十目だけガーター編にして、地はみなメリヤス編であります（兩側のガーターは其のまゝ續けます。）三十目のガーターが五山出來ましたら中二十目だけかぶせ止めにいたします。これが衿肩明であります。そこから前を片身頃づゝ編むことになります。

眞直ぐに増減なくガーターの處が五山出來ましたならば前側のガーターとメリヤスの間の糸をすくひとり、それを一ツねじつて目を一ツ作ります。衿刺りは三段おき四

○印 エンゲ
△ 〃 黒
× 〃 ラクダ色



第百十二圖 圖案（犬）

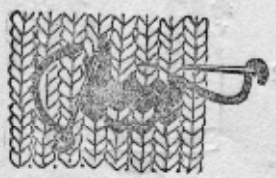
段目毎に一目づゝ増して九目増します。前明は増減なく下まで編みますが脇の方は後幅で減した反對に増目して行きます（一ツづゝ七回と四ツ一度に増し目いたします）

前の下の方は後と同じやうにガーター編をいたします。

兩方共同じやうに出來ましたら後前共に刺繍をして終ります。

刺繍はとち針に配色用の糸を通して圖案に從つて第百十三圖のやうにメリヤスの目を拾つて刺して參ります。刺した糸がつれますと見苦しくなりますからなる可くゆる目に刺すやうにいたします。

紐及釦掛 紐は糸で二本にして八編位ゆるめに鎖を編み、其の上へ引きぬきで返へります。釦は短編で編みまして、芯には木釦又はボール紙の上に綿を被せたものを二個作ります。そして前の紐を輪にして右前につけて紐の附け根を釦で覆ひ、左前の釦は少しゆるめに附けます。



第百十三圖

六七歳女兒用網代模様セーター

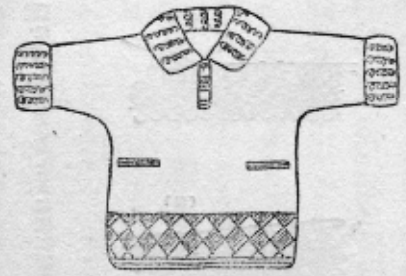
材料 太毛糸ラクダ色八オンス、同白色二オンス、アストラカン白色一オンス、スナップ二個。

用具 三號四本針二組、三號玉付二本針一組、とち針一本。

此のセーターは地色糸の外に變色糸を用ひます。あじろの組合せの一拼を變り色に致しまして、衿はアストラカンを用ひます。

編み方 始め四本の針に百四十四の目を作ります。此の目數は八目の十八倍であります。あじろは六の倍數でありますが、ガーターよりあじろに移りますとあじろ編の方が少し廣がりすぎるやうになりますので、二目づゝの余分を作つておきます。

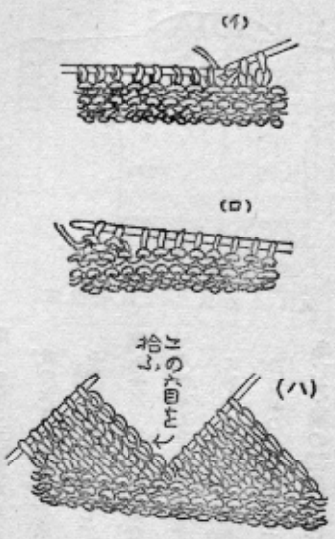
あじろ編の初めの作り方 始めガーターを二山編みます。こゝで八の倍數を模様の目數の六の倍數に直すために、二目おき、即ち三ツ目毎に二ツ一度を編み、全部を百八目とします。



第百十四圖 出來上り圖

次に模様にうつります。表を二目編み、第百十五圖（イ）、裏に返し、一目を右の針に移し、次の一目を裏編に致し

ます。第百十五圖(ロ)、又表に返し、一目右の針にうつし、次を二目表編になし、裏に返して始めの一目は右の針に移し、其の次より移した目と共に三目裏編みにします。又表に返し始めの移した目と共に四目表編とし、次に裏に返し移した目と共に四目裏編に致します。表に返して移した目と共に五目表編に致します。裏に返して移した目と共に五目裏編をします。表に返し移目と共に六目表編にします。表に返し六目表編に致します。



第百十五圖

是で第百十五圖(ハ)のやうなあじろの三角の一模様が出來た事になります。いつも模様の編み始めは二目編み、次の段からは表の時だけ一目づゝ四回編み進む事になります。(都合六目になるのでありますが、始め一度に二目進む爲に横の鎖目になつて居る所は、五目だけあらはれて居る事になります。それが爲に次の段の模様の時に、表に出て居ない下の目を一目すくひ取るのであります。つまり五目の處を六目作るのであります。是を繰返します。最初の一段は模様が半分で三角になります。

こゝまでは平らに編んでまいりますが、次の二段目の模様にうつる時から、全部の目數を五六本の棒針に分けて輪にして編みます。

二段——編み終りの針で編み初めのあじろ縞様の右側の横目を、變色糸で、裏を見て拾ひながら六目かけます。次に表に向けて、最初の一目を編ますに右針にうつして、うつした目と共に六目表編をし、裏返して初め一目移目とし、それと共に五目裏編、六ツ目にはつやきの地色糸の目と一緒に二目一度の裏編とします。又表に向けて六目表編をし、裏に返して五目裏編をし最後の一目と共に地色糸の目と二目一度の裏編とし、順々に地色糸の目を減して全部なくなるまで編みます。

次は、今、目をだん〳〵編み消した一段目の地色縞様の右側の横目を、變色糸で裏側から六目かけて前の編み方と同じに編ます。編物は右から左へ編で行きますが、この模様編四、六と四寸の段は左から右へと編で參ります

三段——地色糸に更へて、二段目のあじろの横の目を六目拾ひ、表目に五目編み、六ツ目の目と次の變色糸の一目と共に二目一度に編んで、裏に返して裏編をし、又表に向けて前と同じく表編五ツ、六ツ目と變色糸の一目とで二ツ一度をします。これを六回くりかへして變色糸の目を全部減します。次は又變色あじろ模様の横目を拾つて前と同じく編みます。

このやうにして一段(地色)二段(變色)三段(地色)四段(變色)五段(地色)六段(變色)七段(地色)八

段（變色）まで模様が編めましたら、九段目は地色糸で半模様の三角を一段と反對に編んで模様を終ります。

九段――八段目の横目を地色糸で拾ひ、そのまゝ裏編で返り、最後の一目を編まずに表に返し、表編で地色の最後の目と變色糸の目を二つ一度にあみ、裏編で返ります。その時終りの二目を編まずに表に返して裏編の終りに二ツ一度を編みます。順々に一段毎に、裏編の時一目づゝ多く殘して六回くり返しますと、三角模様が出來ます。

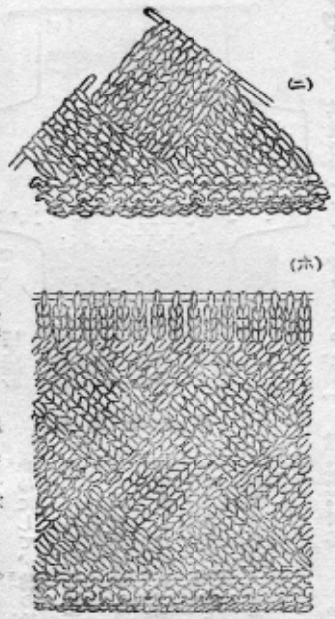
かうして、この三角の模様を一段いたしますと、總目數百八が平らに針の上に揃ひます。

二本針の網代編の仕方　以上のやうに網代編は四本針で輪にしてぐる〳〵と編むのが普通でありますが、かうしますとこのセーターのやうに模様の所だけ輪にして編み、途中から後身と前身とを分けて編まなければなりませんが、次のやうに偶數の段だけを別法で編めば、片側づゝ編むことが出來ます。

偶數段　地色で左の三角の下角に鎖六ツを編みつけて糸を切り、その鎖の根元の目から二目抄ひ出し、裏に返して一目うつして變色の一目と、地色の一目を二ツ一度の裏編にします。

表に返して一目うつし、一目表、更に前の鎖の一目を抄ひ、裏に返して一目とり、一目裏編、變色と地色と二目一度の裏編、表に返して一目うつして二目表、更に鎖の一目を抄ひ、裏に返して一目とります。かうして順々に目數を增して終りに裏に返して一目うつし、裏四ツ、二ツ一度の裏編をして三角の一ツが終ります。次に一段の模様の横の六目を裏で拾つて四角を編むのですが、こゝからは普通の網代編の二段と同じであります。それから

最後の三角は右三角の横目を裏から六目抄ひ、表に返して一ツうつし、五ツ表、裏に返して一ツ取り、三ツ裏編、二ツ一度の裏編、表に返して一ツ取り三ツ裏編、二ツ一度の裏編表に返して一ツうつして四ツ表、かうして終りは裏に返して二ツ一度の裏編で終ります。模様が編めましたら次にうつります。

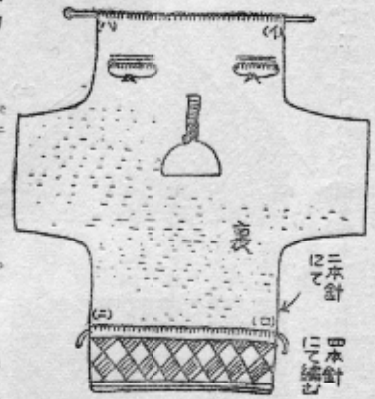


第百十六圖

次は是を半分宛にわけて片方は後身頃とし、片方は前身頃とします。全部の目を二本の針に取替て後身頃より編み始めます。これより袖下まで三十糎增減なしにメリヤス編をします。

袖の目の出し方　編み終りで五目一度に出し、次の編み終りで又五目出します。是を繰り返して五目づゝを六回、七回目は一度に十目出します。兩方共四十目づつ出た事になります。是より增減なしに袖口の方で十二糎になる迄編みます。それより衿肩をあけて身頃を兩方に分けます。衿肩の目は中央二十目をかぶせ止めにして、片方を二糎增減なく編みます。それより衿肩の方の一目内側で、目と目の間の糸をすくつて一度ねじつて編みますと一目を增した事になります。是を

一段置きに十回増し、次は四目一度に増し目をするのであります。此の四目はガーター編にして十二段編みます。袖口の方は衿肩の二段を繰り越しとして二ツに折り、後と袖丈が同じになる迄編み續けます。丈が同じになりましたならば袖口の方で、此度は後身の時の反對に、袖口の方より返る時に十目かぶせ目をして次よりはいつも袖口の方より返る時に五目づゝ六回かぶせ止めにして、前の衿の方はガーターが十二段出來ましたらばしばらく休ませて置きます。

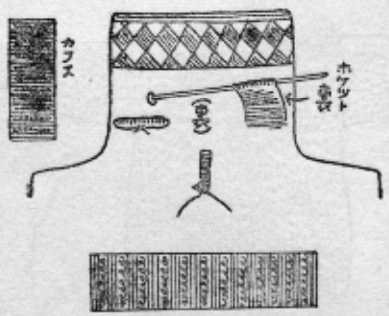


第百十七圖

肩の所で休ませてある片方の前も同樣に編みます。兩前が出來ましたならば前のガーターの四目を左前（右を上）に重ねて、上前と下前と各一目づゝ二目一度に編みます。それから先はメリヤス編にして十八段編みます。（第百十七圖參照）

ポケツト　共處でポケツトを付けます。其の付け方は兩方共裏から六目內側で二十二目づゝほつれ止めに通して置きます。通しましたならばすぐ二十二目衿を一目表、一目裏のゴム編にして二段編みます。あとは全部メリヤス編みにして、兩袖下を合はせて後身と同寸に編み、下のあじろの處でメリヤスつなぎを致します。（基礎編參照）

衿の作り方　新しく目を三十かけてガーターを二山あみ、次にアストラカンで一山あみます。三山毎にアストラカンを入れて、首まはり全部に合はせてきつすぐに衿まはり丈け編んで止めます。（第百十八圖、衿）



第百十八圖　衿、カフス、ポケツト

袖口の作り方　衿と同じやうに袖口明に合はせてアストラカンを入れて、ガーターを編んであとからとぢ合せます。（第百十八圖、カフス）

とぢ付け方は衿も袖口も共に表の方からとぢ針でとぢ合せます。

ポケツトの作り方　前に二十二目殘してある目より、兩側で一目づゝ余分にすくつて二十四目にして、十二糎メリヤス編みにしてから止め目止めに致します。（第百十八圖、ポケツト裏）、そして表の方に表はれないやうに裏からとぢ付けて置きます。

脇のとぢ合せ方　兩袖下より脇にかけて裏の方からとぢ合せますと全部編み終りました。前衿の四目のガータ一編の處に、スナツプを二個付けます。そして上前の表に配合の良い飾りボタンを二個付けて仕上げます。

七八歳男兒用セーター

第百十九圖　出來上り圖

材料　舶來太毛糸地色濃茶八オンス、配色絹一オンス、ボタン、スナップ。

用具　三號二本針一組。

編み方　掛け目六十六を作り、二目二目のゴム編を五糎、中程で變色に二段いたします。次から變りゴム編で編みます。

變りゴム編

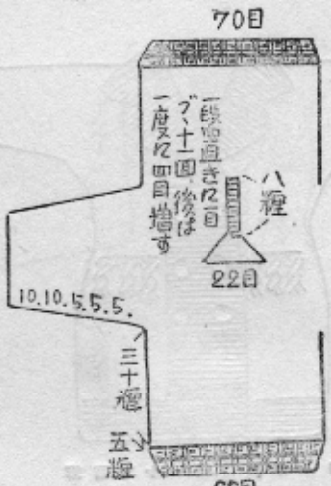
一段——表一ツ、裏一ツをくり返す。

二段——全部表編。以下一段二段をくり返します。

後身を袖下まで眞直、三十糎編んで袖を編みます。

袖は五ツ目づゝ三度増し、十目づゝ二度、都合三十五目を増し終へてから、付けのところで袖丈が十三糎になるまで編み、背の中央で衿肩明を二十二目伏せ止めして前身頃にうつります。

前身頃　前は左右別に編みますが、肩でくりこしとして三號眞直に編みます。袖の方は、後袖口に合せて口の寸法が出來ましたら十目づゝ二回と五目づつ三回止め、前衿刳の方は一段おきに一目づゝ増して衿肩明の半分即ち十一目が増せましたら、今度は一度に四目を増し、この四目はガーターにして、八糎ほど編んで、他の片身頃にうつります。



第百二十圖

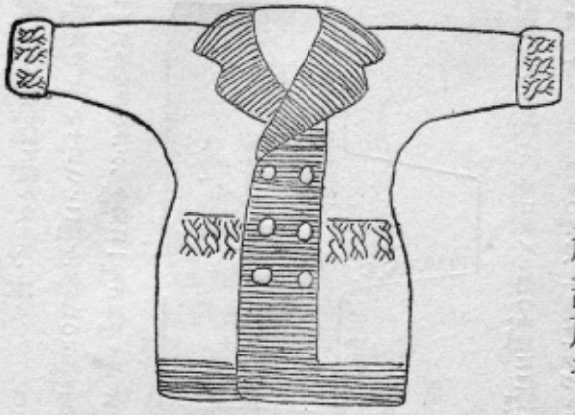
他の片身頃も同樣に編みましたら、ガーターの部分の四目は重ねて、前身頃全體を變りゴム編で、後と同寸法になるまで編みます。この時前身頃の目數は後の六十六目より四目だけ増して七十目になる筈であります。裾にゴム編をいたしますことは、後と同樣であります。（第百二十圖參照）

袖口は袖と同じやうにゴム編を八糎程いたします。

衿の編み方　衿肩續りの目を、一目に一ツづゝ拾つて、衿肩明の兩角で三目位余分に拾つて置きます。拾ひ終りましたらガーター編に致しますが、其の時兩端で二段目に一目づゝ増して十二山出來ましたら糸を切ります。

變色糸を入れる時は、袖口共ゴム編の中程に二段づゝ入れます。

七八歳男兒用オーバー



第百二十一圖　出來上り圖

材料　並太毛糸十八オンス、釦六個、スナップ四個。

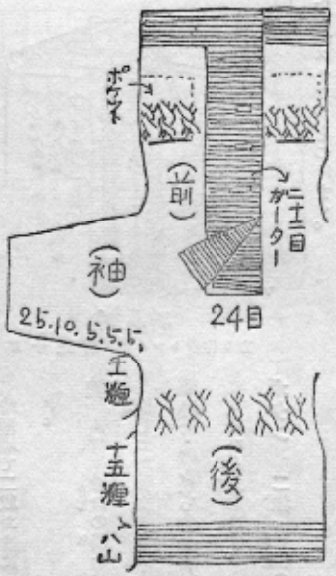
用具　三號二本針一組、同四本針一組。

編み方　掛目（後幅）九十目でガーター八山、鹿の子編十五糎編み、次は繩編にうつります。

繩編は裏二ツ、表六ツを四段しきしてから、表六ツの前の三ツを別針にとり、後の三ツを先きに編んで、前の別針にとつた三ツを後から編みますと、目がねじれて繩のやうになります。これを四段おきに二回じて又眞直に鹿の子編を十一糎編み、それから袖にうつります。

袖は五目づゝ三度、十目一度、最後に二十五目を一度に都合五十目を増して、袖口の所で十一糎だけ、編めましたら背幅の中央で二十四目伏目いたしまして衿肩明といたします。

前身頃　衿肩明の分に減した目の半分即ち十二目に十目足した二十二目を新らしく作つて、後身頃と同寸まで編んだら、繩編にうつります。（但し衿の二十二目だけは、機械にかけはず、ずつとガーターにいたします。）

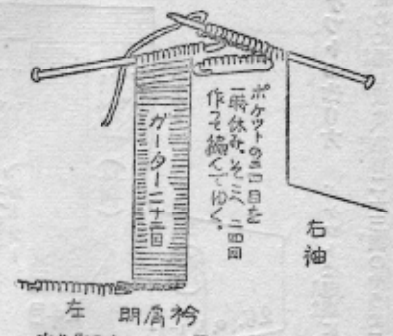


第百二十二圖

ボタン穴　上前（左前身）を編むとき前の増し目より二十糎位編んだ所で、端から四目内側で二目被せ目に致します。そして次の段で、前段で止めた所で二目作るのであります。これを八糎置きに三ツ明けます。（第百二十二圖參照）申の方は飾ボタンを付けます。

ポケットの作り方　ポケットは繩編に移る時に、前のガーターの次の目より、二十四目を別の針、又はほつれ止めに通し置き、第百二十三圖のやうに二十四目を新しく作り目して、編みつゞけて來た針で編んで行きます。身頃が出來上りましてから、ほつれ止めに通して置きました二十四目を、眞直に十糎程編みまして糸を止め、身頃

の裏側に合せて、かゞり針で三方をとぢつけます。



第百二十三圖　ポケットの作り方

衿　前項セーターの衿のつけ方と全く同じで、衿廻りの兩端十目宛を殘し、他の部を四本棒に拾つてガーターを編みますが、この時兩端で二段おきに一目宛ふやし、十目増しましたら糸を切ります。

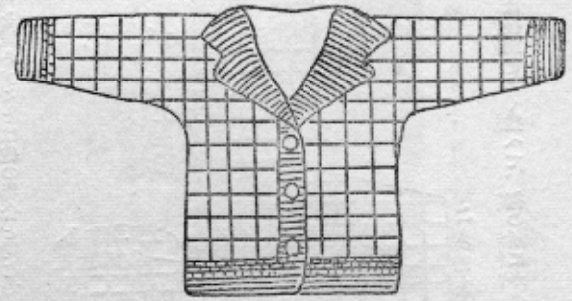
袖口　袖口の目を拾つて身頃の繩編と同じだけ繩編をして折り返しておきます。

脇袖下のとぢ合せ方　とぢ針に糸を通して兩方よく揃へてまつり縫ひを致します。

ボタン　二糎直徑のボタン六個を出來上り圖の位置につけ内側に四個スナップをつけます。

八九歳女兒用セーター

材料　地糸一ポンド、變り糸二オンス。



第百二十四圖　出來上り圖

用具　三號二本針一組、綴針。

編み方　掛目八十八を地糸でかけまして、ガーターを十二山、糸を替へてイボ編を三段（イボ編は表編一段、返りは裏編、第三段は二ツ一度。これだけがイボ編の一段となります。次の表編の時は間の目を拾つて元の目數にいたします。）又地糸にかへて格子編にうつります。格子編は圖に示してありますやうに表編八ツ、裏編二ツ、これを十二段編んでからガーターを二段、又前の表編八ツ裏編二ツの編方を十二段これを繰り返して二十八糎編みましたら袖の目を増します。袖は五目づゝ三度、次に四十三を一度に増して袖の分の總目數を五十八目にいたしましてつゞいて編み、袖附の所で十三糎になりましたら背の眞中で衿肩明を三十目あけ、この衿肩明と右身頃の分を別針にうつして、左前身頃を編みます。前身頃は衿の方で一度に二十五目を増しこの目數だけをガーターに編み、三段おきにガーターを一目づゝ前身頃の格子編にかへて行き、ガーターの部が十二目になりましたら眞直ぐに格子編とガーターと

を後身と同じ丈だけ編み、イボ編、ガーターも後と同寸にして糸を止めます。袖の方は後袖にならつてだん〳〵目を減らすことは他の場合と同にであります。次に右身頃も左身頃と同じく編みます。（第百二十五圖參照）

第百二十五圖

袖の先は裾と同じやうにガーター十山（折り返して出るガーターは四山）イボ編三段、ガーター四山を編みます。

衿　衿肩明の目數三十目と、前で一度に増した目數二十五目の中、端の方の十二目を殘した十三目をすくつて（全體が五十六目になります。）三段おきに兩端で一目づゝ増し、十二三段編んで止めます。

脇、袖下のとぢ合せ方　脇をとぢる時には後前をよく揃へて、裾の所に糸を付けて圓方一筋づゝまつるやうにしてとぢ合せます。

七八歳用半セーター

材料　リリヤーン小束十六束。一編中リボン一米五十糎。

第百二十六圖　出來上り圖

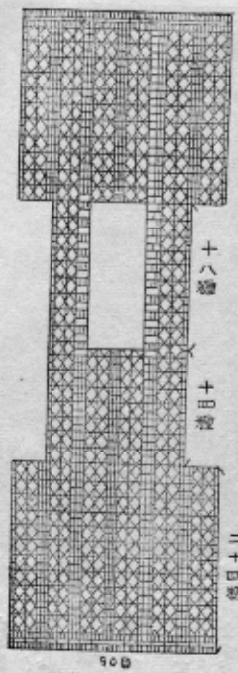
用具　鉤針一本。

編み方　このセーターは袖なしで後身頃から編み初め、衿肩明をあけ前身頃は左右別々にあんで脇の所で一緒にします。

後身頃　後巾として鎖九十目（十五の倍數）をかけ、更に次の段に移る長編の分として鎖三ツ編み、一段長編九十いたします。二段目は、鎖二ツして二目とばして長編一ツの割目編を一段し、三段目は一段と同じ長編をし、四段目から模様編をします。

四段——鎖三ツして長編一ツ編み、次より（鎖三ツ、二目飛して短編一ツ、鎖三ツして二目とばして長編一ツ、鎖三ツして二目とばして短編一ツ鎖三ツして二目とばして長編四ツ）をくり返して最後の長編は二ツで終ります。

五段——一ツ鎖、長編の上に短編一ツ、（鎖七ツして前段の長編の上に短編一ツ、鎖七ツ編み、次の長編四ツの上に短編四ツ）

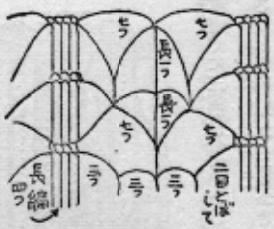


第百二十七圖

六段——三ツ鎖、次の短編の上に長編一ツ（鎖三ツ、前段の鎖七ツの四ツ目に短編一ツ、鎖を三ツ編み前段の短編の上に長編一ツ、鎖三ツ、短編の上に長編一ツ鎖三ツ、次の長編の上に長編）

七段——三ツ鎖をあみ、長編の上に長編、（鎖三ツして前段の短編の上に短編一ツ、鎖三ツして前段の長編の上に長編二ツ、鎖三ツ、短編の上に短編一ツ鎖三ツ、次の長編の上に長編）

以下四段から七段までを繰り返します。（第百二十八圖參照）、二十四糎編みましたら糸を切つて、左右兩端で裾の分として一模様宛だけ除いて前段終りの長編の上に糸をつけて模様を續けます。そして十四糎編みましたら中央で前裾明の分として一模様と透し模様一通りを殘して引返し、兩端の長編の間を往復して、片身頃づゝ十八糎（二糎は縁迄）編みます。この時前明の方と袖附の方の長編は鎖編みにしてリボン通しのために一段おきに拼目に編みます。左右の前身が十八糎づゝ編めましたら中央で鎖二十六目編み、兩方を接ぎ合せてなほ左右兩端に裾の分として鎖十五づゝ編み足して、後裾巾に合せて眞直ぐに編み、最後に長編一段、拼目一段、長編一段で二十四糎になるやうに編みます。そして後身と前身とを合せて裾から五糎位は馬乘として綴し、上の方を引き拔きでとぢ合せます。袖ぐりと馬乘に短編を一段編み、袷通りにはリボンを通し圓のやうに結んで置きます。



第百二十八圖

七八歳用 筋入ガーター編のチヨッキ

材料　並太毛糸十オンス。

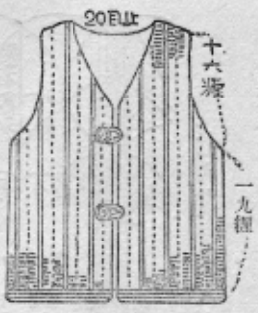
用具　三號二本針一組、とぢ針、鉤針。

編み方　始め二本の針に百〇三ツ（八の倍數から一を減す）の目を作ります。一本を拔きとり、端を結んでガーター編を五糎編み、それより筋入ガーターの模様に移ります。

一段――表三ツ（裏一ツ、表七ツ、裏一ツ、表七ツ）（　）の中を繰り返して、終りに裏一ツ、表三ツ編みます。

二段――（表七ツ、裏一ツ）（　）の中を繰り返しますと、終りは表七ツで終ります。この一段二段を繰り返して、十九廻出來るまで編み續けます。

次は兩側で目を減します。其の減し方は針の始めで減す時には針の內側の方に向つて二ツ一度に編みます。終りの方は普通に、つまり外側から內側に向けて二ツ一度に編むのであります。これを繰り返して片方で十五目宛減しますと、兩方で三十目づゝ減すことになりますから殘り七十目になります。この七十目を眞直ぐに十二廻編みまして衿肩に移ります。



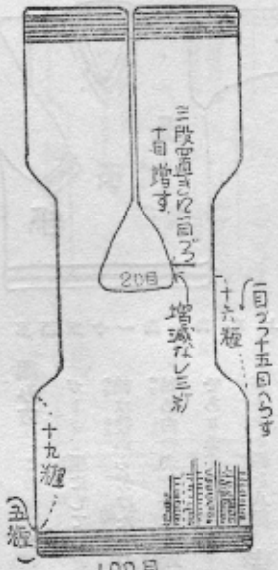
第圖二十九圖　出來上り圖

衿肩の明け方　七十目の內中央の二十目丈けをかぶせ止めにいたします。其のまゝ片方の二十五目をほつれ止めにかけて他の一方を眞直ぐに三廻編みます。これを半分だけ繰り越しとして、二ツに折ります。

さうして前の方で三段おきに一目づゝ目を增して參ります。これを片方で十目增しますと衿肩明の半分だけ增したことになります。脇側の方は後の減し方と反對に增し目して參ります。增し終りましたら眞直ぐに、其のまゝ下のガーターの所も同じく編みましてかぶせ止めにいたします。

片方の前身頃も同じやうに編んで參ります。（第百三十圖參照）、全部編めましたら、兩脇をとぢ針に糸を通してまつり縫ひにいたします。衿廻りから前巾全部を、鉤針で短編を一段編んでおきますと、縫目が良く揃つてきれいになります。

玉の作り方　玉は始め鎖三ツを編み輪にして其の中に短編を六ツ編みます。其の次は一目に短編を二ツづゝ編み乍ら廻ります。次は一目に一ツづゝ入れて二段廻ります。



第百三十一圖

其の次は中に綿を入れて丸くなし、一目おきに目をとばして減して參ります。

かういたしまして二三目になるまで減して參ります。

紐の作り方　胸明きの增し終りの所に糸を付け鎖編を前の玉の通る位置で編んで、次の目に引きぬきにして付けて置きます。これを八廻おき位に二ツ付けておきます。（出來上り圖參照）、玉はそれに合せて付け、脇の袖通しの所も一度短編で編んでおきます。出來上りましたら一度湯伸しをして使用いたします。

十四五歳用スポーツ型セーター

材料　白中細毛糸十オンス、外に青磁色中細毛糸一オンス。

第百三十一圖

用具　一號玉付二本針一組。

編み方　このセーターはメリヤス編を主にいたしまして、裾廻りをガーター編にして袖と衿ぐりをゴム編にいたします。

袖は後から付けたものであります。

始め白の糸で二本の針に目を百二十掛けます。後身の裾から編むのであります。

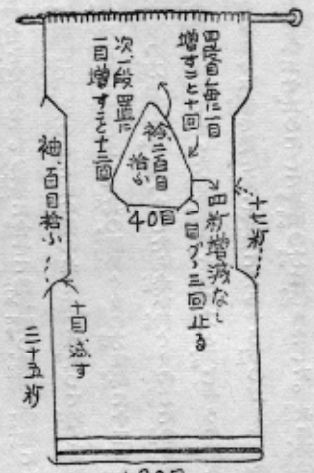
ガーター編を八段、往復で一段としまして夫れを長さ三糎あみましたならば、こん度は青磁色に取り代へます。夫れよりガーター編で二段の縞を入れます。又白に取り代へまして前と同じ寸法の七段を編みます。

今度は編目の良く揃つたきれいな方を表にいたしましてメリヤス編にいたします。

其のまゝ眞直ぐに袖下の所まで編みます。

凡そメリヤス編が三十糎出來ましたら、次は第百三十二圖のやうに袖ぐりにかゝります。袖ぐりは始めかぶせ止めにして三目一度に止めます。丁度裏編の時の止め方のそうになります。今片方は返りに止めます。其次からは兩方共一目內側で一ツ宛減します。これを一段置きに七回減しますと片側で十目宛減る譯であります。さうして全部の目が百となりましたら眞直ぐに十七糎編みます。これで後身頃は編めたのであります。

次は中央で衿肩明の分として四十目をかぶせ止めにいたします。右手に殘りました三十目の右前身頃となる可き目を其のまゝ他の針にうつし取つて置きます。移し取つた目は其のまゝ編まずに休ませて置きます。さうして左前身頃の方を續けて編みます。一度往復いたしましたなら、衿肩明の角で一目止めるのであります。この所で一目宛止めるのを三回いたしますと衿肩廻りが程良く丸みが付くのであります。そこから眞直ぐに四糎編みまして繰り越しといたします。橫付の方の側は其のまゝ眞直ぐにあみ、衿肩明の側で段々に斜にスポ



第百三十二圖

一ツ型の衿の付くやうに胸明を作ります。其の増し方は、端の一目を編み其の目と其の次の目の間の糸を抄ひ取り一度ねじつて目を一ツ作ります。さうしましたら三段真直ぐに編みまして四段目の表に向つた時に又一目増します。これを繰り返して四段目毎に十回増し目をいたします。

十回出來ましたら、今度は一段置きに十三回増し目いたします。増し終りましたら上の繰り越しを二ツに折つて肩山を定めます。後身に合せて前身頃の袖刳も同様にいたします。前は後と同じ寸法でありますが反対に表側で一目編んで、次の目と目の間の糸をすくひ取つて増し目をいたします。これを一段置きに七回増し次は一度に三目掛け目して増します。其の間衿ぐりの方は緩に十二四となるまで續けて參ります。さうして袖ぐりの方で十目衿ぐりの方で十三目増へましたら糸が衿ぐりの方に參りました時糸の先を三十糎位殘して切つて置きます。肩の所で止めて置いた右前身頃を左の方と同じやうに編みます。出來上りましたら左右共中央で突き合せにして全部メリヤス編で後と同じ寸法になるやう下のガーターの所まで全部後身頃の色に合せて編み續けます。これをかぶせ止めにして身頃の方は終りました。次に衿付を致します。

衿の附方

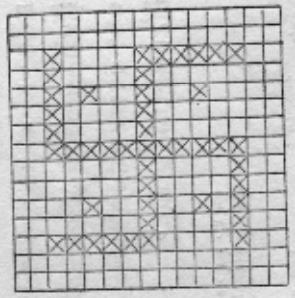
先づ全體の衿ぐりを四ツに分けて、夫れを三本の針に取ります。其の取る目數は衿肩明より下へ八十目、首廻りは一目に一ツ宛四十目衿肩のまはる所で穴のあかないやうに少し余分に目を拾つておきます。そして一目表、一目裏のゴム編にいたしまして前の三角の所で返ります。三角の作り方は端一ツ編み、次の目二ツ一度に編んで減します。三角の所に參りましたら一目内側で減しまして、一糎編みましたら、糸を青磁色に切り替へて二段の筋を入れます。又白糸に取りかへて一糎あみ、かぶせ止めにして糸を切ります。三角の所は身頃を合せた時に三十糎ばかり殘しておいた糸をかぎ針に通して裏の方から手際良く青磁色の筋を良く合せて細かく綴じ合せます。これで衿は出來上りました。

袖の作り方

まづ袖付で百目拾ひます。其の時に袖ぐりの所に穴のあかないやうにいたします。拾ひ終つたら眞直ぐに十糎同じメリヤス編にして、次に兩方の一目内側で二目一度に編んで目を減します。これを十段目毎に同じやうに減して十回繰り返します。次は袖付より計つて凡そ四十糎になりましたら、其の段で四目おきに二目一度に編んで目を減します。殘りの目が六十位になりましたなら、衿と同じやうに一ツ表、一ツ裏のゴム編を長さ六糎になるまで編みます。中程に衿と同じやうに青磁色で筋を四段入れてかぶせ止めにいたします。これで片方が出來ました。あと片方も同じやうにして作ります。

前の模様の入れ方

圖案は成る可く容易なものを選んで配置いたします。一番上は袖付より少し下つた所、一



第百三十三圖　圖案（四）

裾下は裾のガーターより少し上つた所の左右に置き、中程は衿下三角の所より十一糎下つた所を中心として位置を定め、（第百三十一圖及び第百三十三圖參照）、糸で印を付けておきます。肉色の糸をかぎ針に通して二目四角のクロース・ステッチで圖案に合せて刺して參ります。（フランス刺繍、基礎繍クロス・ステッチ參照）次は袖下より腋の縫に合せをいたします。地色をかぎ針に通して良く身頃、袖下共合せてきつり縫ひをいたします。この時糸の引き加減を注意して、伸び縮みの自由に出來るやうに加減いたします。全部出來ましたら形を整へて湯伸しをいたします。

女學生用セーター

材料　太毛糸十八オンス、釦三個、スナップ三組。

用具　三號玉付二本針一組、とぢ針一本。

編み方　此セーターは、ガーター編とメリヤス編との應用でありまして、始め後身頃裾より編み初め前身頃へ移り、袖と衿は後で付けます。

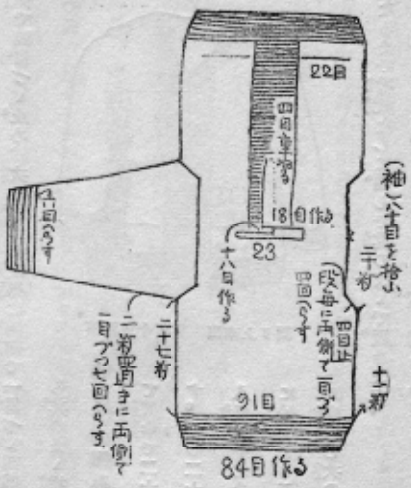
後身頃の編み方　初め八十四目作りガーター編で十一糎編みます。次にメリヤス編をします。其の時一度に目をふやします。其目のふやし方は表九ツ編み、次の目と今の目の間の糸をすくつて、一度ねじつて編みますと穴があかずに一目に增し目が出來ます。此のやうにして九ツ目毎に七回增し目を致します。最後は十一目をそのまゝ表編に致しますと目數は全部で九十一目になります。あとはメリヤス編で二十七糎いたします。袖付で初め兩側で四目づゝ止め、次の段から段毎に兩側で一目づゝ四回都合八目減します。さうすると七十五目になりますから其のまゝ增減なしに二十糎あみます。

前身頃の編み方　右肩二十六目を別針に預けて置き、衿肩明として眞中で二十三目をかぶせ止めにして止めて、左肩から編み始めます。左の二十六目を其のまゝの目數で八段編み、衿の方で一度に十八目ふやします。其のふやした十八目丈はガーター編にして、眞直に衿肩より二十糎編みましたら、うしろの袖ぐりと同樣に一段毎に四目增し次の段で一度に四目を增して、衿の增した方が二十二糎になるまで增減なしに編んで其のまゝで置きます。

第百三十四圖　出來上り圖

次に右肩に移り左と同樣にして、同じ丈だけ編みましたら、眞中のガーター編を四目重ねて一緒にして、兩側がメリヤス編、中央三十二目だけガーター編にいたします。この編方で袖刳の所から十八糎編みましたら、ガーター一の兩側でポケットを作ります。（第百三十五圖參照）

ポケツトの作り方　第百三十六圖のやうに眞中のガーターの兩側で、ポケツトの口巾二十二目づゝ別の針に移して置き、次の段で其所まで編んで來ましたら、二十二目を作り、眞直ぐに二糎あみます。別の針に移した二十二目をメリヤス編にして十糎あみます。そしてこのポケツトと前身頃にポケツト巾だけ作つた二十二目と、二枚重ねて上、下二目一度に編みますと、前身頃にポケツトの底が編みつけられます。これでガーターが全部で十一糎になるまで編んで糸を切ります。ポケツトの底はすでに前身頃について居りますから、兩側丈けをかゞり針で表に糸の出ないやうにかゞつて置きます。



第百三十五圖

第百三十六圖　ポケツトの作り方

袖の作り方　袖刳の所から前後で八十目拾ひ、兩端を二目づゝガーターにして、あとはメリヤス編みにいたします。兩側で二糎おきに一目づゝ減して、七回いたしましたら、あとは袖丈三十五糎内外になるまで増減なしにあみます。

着る方によつて袖丈は加減致します。

袖口はガーター編にして、一段で所々で六目減し、あとは其のまゝ九糎あみます。

衿の作り方　衿は前身の角から角まで衿肩廻りを七十五目拾ひ、ガーターを十二糎して糸をとめます。

袖下、脇下をとぢ合せ、前の明きにスナツプを付け、表側に飾ボタンを付けて終ります。

婦人及び女學生向セーター

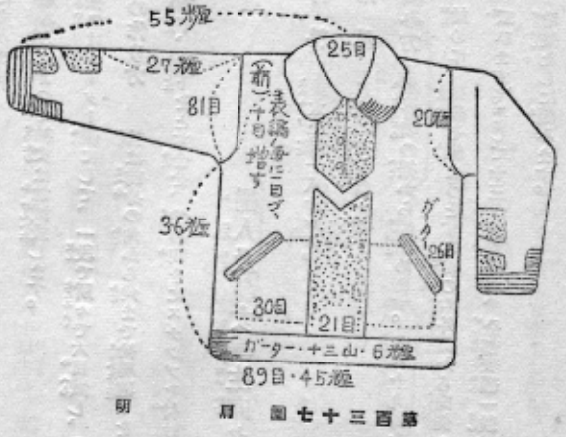
材料　並太毛絲十八オンス。

用具　五號の玉付針一組。

編み方　後身頃の裾から編始めます。先八十九目を作り、ガーター十三山、約六糎編みます。このガーターは編始めに、編絲を編まうとする目の右外側から向側へ廻して一目編まずに右針に移して編みます。(一名外滑らしと云ひます)。そして十三山編んだら、全部表編一段、裏編一段のメリヤス編に替へて、裾から三十六糎に成るまで増減なしに編みます。

袖刳の作り方　それから袖刳をするのでありますが、一方は表編の始めに、一方は裏編の始めに、二つ一度に

して、片方が十目、兩方で二十の目を減して袖を付けて行きます。



第百三十七圖　肩

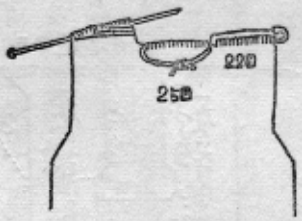
そして減し初めから二十糎の處が肩山になりますから、その處に、前身を編むときの爲に、一寸色絲で印を付けて置きます。

肩下りの付け方　兩端の袖刳で十目宛都合二十目減つてゐますから六十九目の肩巾に成つた譯であります。それで左肩山の分として第百三十八圖(い)の如く、二十二目を殘し、他の四十七目は、ほつれ止又は糸に通して置きます。この二十二目を編み、袖刳の方から編むとき七目を止め、次の十五目を編み、又持換へて引返すときに七目づゝ止めて第百三十八圖(い)のやうに二十二の目を止め一目だけ殘します。次に止めた二十二の鎖の表側へ左から第百三十八圖(ろ)のやうに編針を通して、前に止めたときと反對に、七目づゝ編み加へます。こうして肩下りの恰好を付けます。

衿刳の仕方　肩下りが出來ましたら增減なしに四山編み、次に衿刳の爲に衿の方の裾始め毎に一目づゝ六目を增し、次に九目一度に作出し、右から十三目だけ鹿子編みに編替へ、後身の袖刳で減らし終つた段になるまで肩山から數へて增減なしに編みます。それから後身とは反對に袖刳の爲に表編のとき最後の目の手前で一目づゝ十目增し、編み絲が胸明の方へ來たとき、ほつれ止めに通して絲を切つて置きます。次にほつれ止に通してある四十七目のうち衿肩明として左から二十五目に絲を通して置きます。殘の二十二目を左肩と同じやうに、袖付の方から七目づゝ止め、又その目を七目づゝ引返す度に編み加へ、四段增減なしに編み、衿刳の爲に表編のとき一目づゝ六目增し、次に一度に七目作出します。そして左から十一目を鹿子編にして、後身の袖刳の段へ來ましたら、一目づゝ十目增し、左前と同じ段數になつて編絲が胸明の方の終から三目手前の處で、左前をほつれ止から編針に移し、第百三十九圖(い)(ろ)の如く右前を上にして、その三目を重ねて一目づゝ左前の目に右針の先で通

(い)

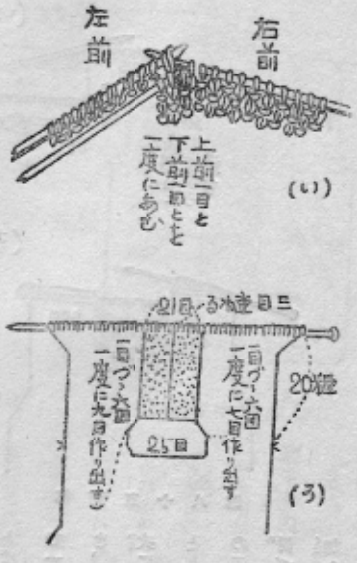
(ろ)



第百三十八圖

ねて、二ツを一度に編みつゝ胸合を狭します。

このとき座子模様の目は二十一目、全部の目数は八十九目に成ればよいのでありますそれから鹿子編の二十一目に、胸飾を裏を編むときに始めます。



胸飾の編み方

一段——裏編二ツ「表編一ツ裏編一ツ」括弧内を八回繰返し、表編一ツ裏編二ツで終ります。

二段——表編三ツ「表編一ツ表編一ツ」を七回繰返し、裏編一ツ表編二ツ。

三段——裏編四ツ「表編一ツ裏編一ツ」を六回繰返し、表編一ツ裏編四ツ。

四段——表編五ツ「裏編一ツ表編一ツ」を五回繰返し、裏編一ツ表編五ツ。

五段——裏編六ツ「表編一ツ裏編一ツ」を四回繰返し、表編一ツ裏編六ツ。

六段——表編七ツ「裏編一ツ表編一ツ」を三回繰返し、裏編一ツ表編七ツ。

七段——表編一ツ裏編七ツ『表編一ツ裏編一ツ』を二回繰返し、表編一ツ裏編七ツ表編一ツ。

八段——表編一ツ裏編一ツ表編を七ツ、裏編一ツ表編一ツ裏編一ツ、表編七ツ、裏編一ツ表編一ツ。

九段——表編一ツ裏編一ツ表編一ツ、裏編七ツ表編一ツ裏編七ツ、表編一ツ裏編一ツ表編一ツ。

十段——『表編一ツ裏編一ツ』を二回繰返し、表編十三目、『裏編一ツ表編一ツ』を二回。

十一段——『表編一ツ裏編一ツ』を二回、表編一ツ、裏編十一目、『表編一ツ裏編一ツ』を二回、表編一ツ。

十二段——『表編一ツ裏編一ツ』を三回、表編を九ツ、『裏編一ツ表編一ツ』を三回。

十三段——『表編一ツ裏編一ツ』を三回、表編一ツ裏編七ツ、『表編一ツ裏編一ツ』を三回、表編一ツ。

十四段——『表編一ツ裏編一ツ』を四回、表編五ツ『裏編一ツ表編一ツ』を四回。

十五段——『表編一ツ裏編一ツ』を四回、表編一ツ裏編三回、『表編一ツ裏編一ツ』を四回、表編一ツ。

十六段——『表編一ツ裏編一ツ』を十回繰返し表編一ツで終ります。

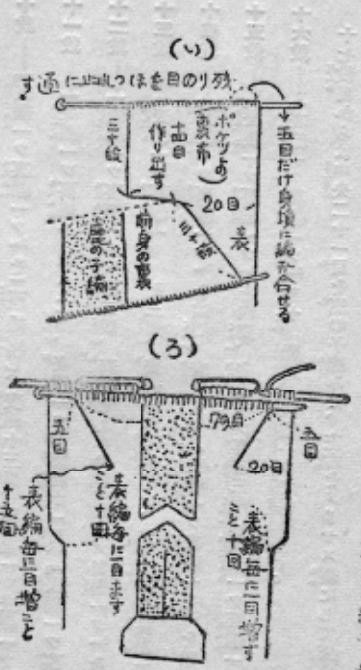
十七段目からは中央二十一目を鹿の子編みに、左右をメリヤス編にして五段編みます。

それからポケットの口を斜めに作り初めます。

ポケットの作方

ポケットの裏布の為に第百四十圖(い)のやうに両端で二十目づゝほつれ止めに通して別に取つて置きます。そこで座子編を真中にして四十九目を編むことになりますが、其のとき両端は、編始め迄に一目づ

ゝ一目と二目の間で、十五回増しますと、三十段編むうちに七十九目になります。これを今度は、ほつれ止に通して一時編むことを中止して置きます。次に兩端のほつれ止に通してある二十目づゝをポケツトの裏布として編むのでありますが、先づ右の方は右端に編絲を結び付けて二十目を編み、新らしく十四目を作出して都合三十四目を三十段編みます。左ポケツトは初めに十四作目して二十の目の右へ編み足し、同じく三十段になつたとき、先きに編んである七十九目と編み合せるのであります。このとき第百四十圖(ろ)の如く兩端の五目だけ裏布の方を編み、眞中の七十九目が八十九目になるやうに編み合せます。そしてポケツト裏の殘の二十九目づゝはほつれ止に通して置き後で六、七糎編み足して止め、表へ綴絲を出さないやうに段を合せ、目を合せながら綴付けます。



第百四十圖　右ポケツトの作り方

ポケツトの口は斜に増してある三十段を孔のあかないやうに、二十六目程拾つてガーターに堅めに編み、四山目で裏を見て止め、兩耳を適宜に綴つけます。

袖の編み方　袖刳してある處から八十一目を拾ひますが、増減なく編んである處は三段拾つては一段をとばして拾ひます。増したり減したりしてある處からは、孔の明かないやうに拾ひ、十段毎に兩端で二目と三目を二ツ一度して減すこと六回、六段毎に減すこと八回、袖付の處から二十七糎の處で扇山を眞中にして二十一目を裏編をするとき鹿子編に替へて編み、六糎に成つたら胸飾と同じ模樣を致します。そして第七段目のとき袖の内側になる端で見返しの爲に二目作り出し、ガーター八目、他の端は五目ガーターに編み三十六糎になつたら全部ガーターにして六山目のとき裏を見て止めます。

衿の編み方　衿肩明の二十五目と増目作目の衿廻りから、裏を見て左から編針を通しながら七十四目を拾ひます。このとき左前は鹿子編のところを見返として五目、右前は二目を殘して置きます。そして衿肩明の兩角兩端の四ケ所で、ガーター二山毎に百二目まで増し、衿先の丸味を付ける爲に兩端で一目づゝ二目減し、十七山約八糎に成つたら裏を見て緩く止めます。

仕上方　編んだ物を裏返して兩端を裾から袖口へ向つて減し目を縫り付け、前衿には飾ボタン及びホツクを三個づゝ付け、カフスにもホツクを付けると出來上ります。

大黒帽子

材料　色物並太毛糸二オンス、配色毛糸少々。

用具　毛糸用鉤針一本、とぢ針一本。

編み方　端から山のやうにつゞけて編み、山だけつぎ合せて中央に房をつけます。

第百四十一圖　出來上り圖

一段——鎖編二十目いたします。

二段——短編で一段返ります。

三段——鎖編を一ツして裏に向け、鎖編で端まで編み、終りに鎖編三ツ編み足します。

四段——裏に返して鎖編二ツに短編をあみ、つゞいて前段のやうに鎖編で返ります。

(イ)

二十目
二十三目
二十四目
二十六目
二十四目
二十二目
二十目

配色

第百四十二圖（イ）

五段——三段と同じやうに鎖二ツ編んで裏に向け、鎖編で端まであみ終りに鎖編三ツ編み足します。

六、七、八段——鎖一ツ編んで又鎖編で返ります。（六段）こゝで糸を變へて五段のやうに二目增し、（七段）その糸で返り（八段）こゝで糸を地色にかへます。

(ロ)

配色

第百四十二圖（ロ）

九段——以下各奇數段の上で二目づゝ減して第百四十二圖（イ）のやうに二十目になるまで編みます。

これと同樣のものを同ロ圖のやうに六枚つゞけて編みます。

次に山と山とをとぢ針で合せ、編み初めと編み終りをもとぢつけます。

口べりは短編を八段あみ、終りの一段は、引き拔きにいたします。

房は地色毛糸と配色毛糸とを半分位づゝにして八糎巾位の厚紙に卷きます。糸を澤山卷た方が丸くなります。眞中をカタン糸で堅くしばつて丸くなるやうに鋏で切つて帽子の中央にしつかりと結びつけます。

ベレー帽子

材料　並毛糸二オンス。

用具　毛糸用鉤針一本。

編み方　中心から丸く編みます。

一段——鎖編三ツあみ、引き拔きをして輪にします。

二段――鎖の目一ツの中に二ツづゝ短編を編みます。

三段――前段の短編に一目おきに三ツづゝの短編を編み、一目三目と交互に編ます。

四段――前段の目數通りに一目に一目づゝ短編一段編みます。

第百四十三圖　出來上り圖

五段――前段の短編四目毎に短編三ツづゝ入れます。

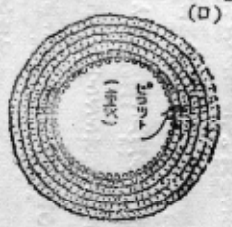
六段――前段の目數通りに短編を編みます。

七段――六目毎に短編三ツづゝ編みます。

八段――前段の目數通りに短編一段編みます。

（注意）編の中ほから編む

（イ）



（ロ）

第百四十四圖

九段――八目毎に短編三ツづゝ編みますと角が八ツ出來ます。

十段――前段の目數通りに短編を一段あみます。

次からは例へば十目、十二目、十四目、と武ふやうに偶數の段毎に角々で三ツづゝ編み奇數の一段は、その目のまゝ短編にし直徑十八糎位になる迄で編みます。

次は三段位は增し目をせずに、そのまゝの目數で編みます。その時細い針金を一本くるみながら編んでもよろしいのです。

四段目からは、十目に一ツづゝ減らして七段編みましたら編み終りに第百四十四圖(ロ)のやうにピコットを一段編んで留めます。

飾の編み方　編編十位編み引き抜きをして戻ります。それを出來上り圖のやうに中央編み始めの輪に裏から裏に出して共糸で裏にしつかりとつけておきます。

十三四歳用ベレー帽子

第百四十五圖　出來上り圖

材料　白中細二オンス、肉色少々。

用具　一號四本針一組、とぢ針一本。

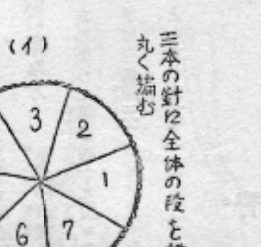
編み方　この帽子は横の方から木の葉に似たやうなものを七枚接けてガーター編で編み、山をとぢ合せて後縫を編むのであります。

最初二本の針に白毛糸で二十二目作りガーター編を一山編みます。

終りに針に糸を掛けて目を二ツ作ります。

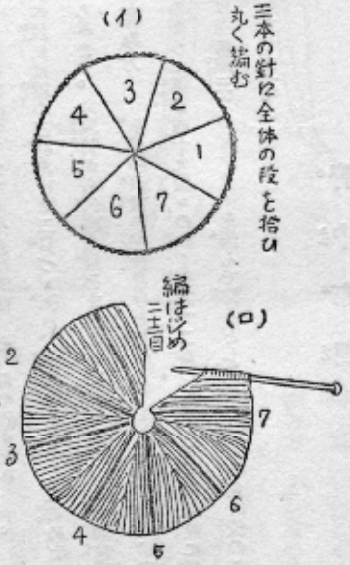
頭の大きい人は二十糎位になる迄で編みます。

裏に返して又ガーターを一山編み、又目を二目作ります。ガーターを一山編んでは二目作り、第百四十六圖のやうに編んでガーター十三山出來るまで編んでまゐります。さうして目數が四十八となるまで編みましたら、糸が下の方に來た時に、青磁色と取り替へて、ガーターを一山編みますと五十目となります。又白糸と取り替へて、ガーターを編みながら上の方に參ります。其の時上の方で二目編み殘して裏に返し、最初の一目を編まずに右の針に移し取り、次の目より下の方に編んで參ります。これを上の方で二目づゝ殘して返ることを十三山繰り返します。さうしますと青磁色が中心になつて最初の掛け目と同じやうに目數が二十二となるまで編みます。これで一角が出來上りました。二角目は下の方から一段全部の目を往復いたします。次に下から二十二目編んで返ります。この時も矢張り初めの一目だけ編まずに右の針に移して次は二十四目編んで返ります。次は二十六目と二十八目で返ります。



第百四十六圖

このやうにしていつも二十二目を振り出しに、段毎に二目づゝ編み上り、又二目づゝ編み下ることを續けまして山の中央の一段は青磁色で往復して取り替へます。かうして第百四十七圖(イ)(ロ)のやうに七枚つらねましたら終りを、なるべくゆるくかぶせ止めにいたします。つぎは裏に返して最初と最後を良く合せて、とぢ針で綴ぢ合せますと、帽子の眞中に親指の通る位の穴が開きます。こゝには慈姑の芽のやうなものを付け中の方で丸くとぢ付けます。次は緣を編みます。



第百四十七圖

緣 緣の周圍の目を一目づゝ拾つて全體を三ツに分けて四本の針で丸く編みます。一段目は裏編を編み殘るのですが、三ツ目に二目一度を編みこれを繰り返して、二段目からは一目裏、一目裏のゴム編を二糎編んで全部をかぶせ止めにして出來上りとします。この帽子は大小に拘ら予初めの掛け目は十八から二十二止まり位にして大小は緩し目で加減いたします。

お辨當袋

材料 並太毛糸二オンス、スナップ一個。

用具　毛糸用鉤針一本。

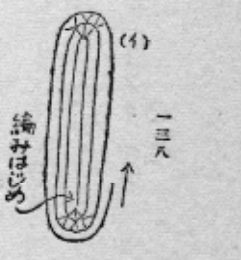
編み方　底を丸く編みまして三角形の被せをつけて編みます。

出来上り図

第百四十八図

鎖編を四十編み、鎖編の両側に一周り短編をいたします。第百四十九図(イ)のやうに隅の角には短編を三ツあみ平らな所は、その目の通り編みます。次の段には端の三目だけに二目づゝ編み、前段のやうにして初めより五段さであみます。六段目から何處も目をまさないで、そのまゝで十糎位編みます。

被の編み方　全體の目數の半分だけを被せとしてつけて編み、三角になるやうに第百四十九図(ロ)の如く兩方で二目づゝ減して行き最後に目が三ツ位になりましたら止めます。被せのまはりに鎖三ツのピコットを編んで飾りとし被せの三角の角と被のこれに合ふ所とにスナップをつけて出來上りといたします。



(イ)

(ロ)

第百四十九図

蓋の編方　兩方で三目づゝ減らす。

編みはじめ

背中布圖

材料　並太毛糸七オンス、ゴムテープ又はテープ五十糎内外。

用具　三號二本針一組。

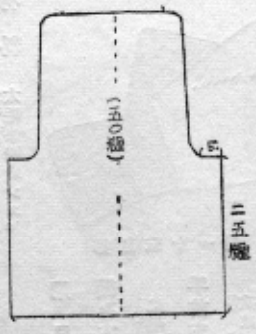
編み方　全部鹿の子編で裾から編みはじめ兩脇で袖ぐりをして肩山で角に少し丸みをつけてとめます。

最初目數を八十作り、基礎編に說明してあるやうに表編一ツ裏編一ツの鹿の子編を各段くりかへしてあみます。

第百五十圖(ロ)のやうに眞直に二十五糎編みましたら兩端で一度に五目づつ減します。

次の段から一段毎に一ツづゝ三段減して、その目數のまゝ二十二糎編みます。

肩で丸味を作る爲に兩端で一段毎に一目づゝ減し五目減して糸をとめます。



(イ)

(ロ)

第百五十圖

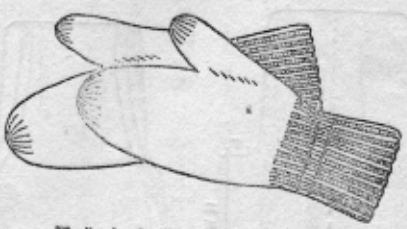
テープのつけ方　用意したテープを二ツに切り(イ)圖のやうに一方の端は肩に一方の端を襠の上につけて仕上げます。

スキー用手袋

材料　太毛糸四オンス。

用具　二號四本針一組。

編み方　此の手袋は手首の處に袋編を入れましたので、ゴム編と袋編の處を平に編み、手首から先を輪に編んで行きます。



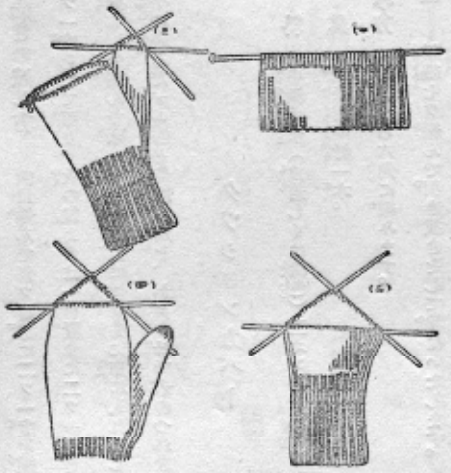
第百五十一圖　同上裏返し圖

手首までの編み方　目數四十八掛けます。

次は表一ツ、裏一ツのゴム編を十廻編みます。次に袋編（基礎編參照）を二經編み、又ゴム編を二廻編みます。次に三本の針に分けて丸く輪に編みます。メリヤス編を二經して拇指の増し方を致します。

拇指の増し方　今輪にした付目の處を内側にして二ツに折り、折つた處を拇指の増し目をする中央とし、中央より二目手前の目と目の間の糸をすくつて一ツねじつて編みますと一目増します。次に四目編んで又一目増します。其のやうに致しますと第百五十二圖(二)のやうに四目の兩側で増した事になります。今増し目した外側で、一段置きに一目づゝ六回増しますと都合中央の目と共に十六目出來ます。全體の目を増し目と共に丸く編んでゆくのであります。

拇指の作り方　今出來ました十六目を三本の針に移し、殘りの目は別の糸に取つて置き、三本の針に移した目を丸く編んでゆきます。其の時合せ目の處で目を二ツ作り、合せて十八目を丸く致します。一廻りして二廻りの合せ目の處に來た時、二目一度を二回して、初めに作つた二目をなくして十六目に致します。次に増減なしに五廻編んで指先を編みます。（第百五十二圖(三)參照）



第百五十二圖

指先きの減し方　一目置きに二ツ一度を二段、繰り返しますと終りの目が七ツ程になります、此の目に別の糸を通し、今編んで來た糸は十經位先を切り、共に中側に入れてしつかりと結び合せて切ります。

四本指の編み方　別糸に移して置いた目を三本の針に分けて通し、拇指の合せ目の二目増した處は、二目と其

の両側とで目を作り、全部を丸く編んで三度目に合せ目に廻はつて來た時二ツ一度を二回位して、元の目になるまで減します。次より増減なしに七段編みます。（第百五十二圖(四)參照）

指先きの減し方　四目編んで五ツ目毎に二ツ一度を繰り返して一廻りなし、次の段に今減した目と目の間で二ツ一度をして廻り、次の段よりは一目置きに二ツ一度をして、それを三回繰り返して廻り、別の糸を全部の目に通し、今編んで來た糸を十糎位に切り共に中に入れてしつかり結びます。

平に編んだゴム編と袋編の所を、かぎ針で糸のつれないやうにかぎり合せます。

クツシヨンカバー

材料　中細毛糸（白若しくは桃色）三オンス。

用具　毛糸用鉤針一本。

編み方　中央から六角に編みます。

一段——鎖編七ツ編んで引き抜きをして輪にいたします。

二段——鎖編三ツ編み輪の中に長編十八編み最初の鎖編三ツの山に引き抜きで止めます。

三段——最初鎖編三ツ編み更に鎖編四ツ編み、鎖編の根元に長編一ツを編みます。又鎖四ツ編み前段の目を二ツとばして三ツ目に長編一ツを編み、第百五十三圖(イ)のやうにくりかへし最後も鎖編四ツ編んで最初の鎖編三ツの山に引き抜きで止めます。

四段——鎖三ツ編み前段の長編と長編の間の鎖編四ツ中に長編七ツを編み、その間は鎖編二ツ編みます。

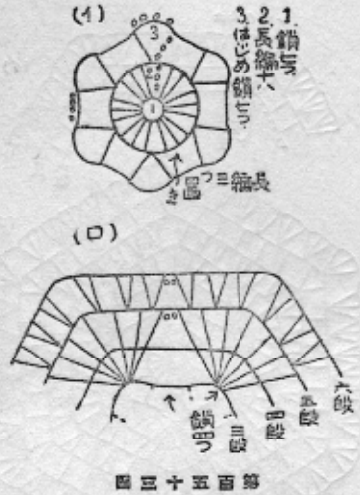
五段——鎖三ツ編み前段の長編七ツの頭へ長編七ツを入れ鎖編二ツの所は三ツ編んで一周します。

六段——第百五十三圖(ロ)のやうに鎖三ツ編み前段の長編と長編の間に長編を二ツづゝ編みますと長編十二編むことになります。その間は鎖編二ツづゝ編みます。

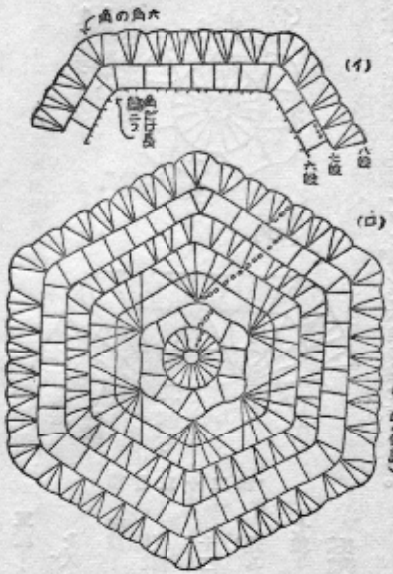
七段——鎖三ツ編み長編二ツおきに長編を一ツ入れ長編の間は鎖編を三ツ編み、前段十二の中央には長編一ツ鎖編一ツ長編一ツを編んで六角の角を作ります。

八段——鎖三ツ編み第百五十四圖の如く前段の鎖編の中に長編二ツ編み、次から三ツづゝ入れて一周り編みます。

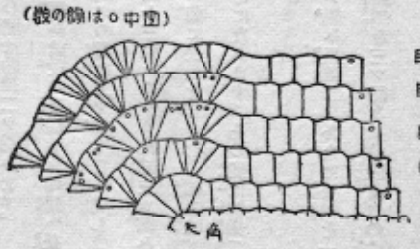
九段——鎖四ツして前編の長編を一ツおきに長編一ツ鎖編一ツを編み六角の山には同じ編方を四ツ編みます。



十段――鎖四ツ編み前段の鎖編一ツの中に長編二ツ鎖一ツを編み角では鎖編の中に「長編二ツ鎖編一ツ長編二ツ」をくりかへします。



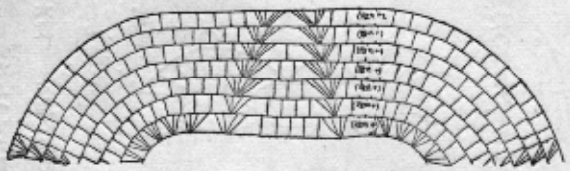
第百五十四図



第百五十五図

十一段――鎖四ツして前段と同様に編み角は前段の長編二ツの間の鎖編の中に「長編二ツ鎖編二ツ長編二ツ」を編み、次は長編四ツ目、即ち角の中心に「鎖編二ツ長編二ツ鎖編一ツ長編一ツ鎖編一ツ長編二ツ

鎖編二ツ」をいたします。



第百五十六図

更に「長編二ツ鎖編二ツ長編二ツ」を編みます。後は「長編一ツ鎖編一ツ」を前段の長編の間に編みます。

十二段――鎖四ツして前段の角の両端に編んだ松編は終りまで同様で中間だけが變つてだん〳〵擴がり、拵目が一段毎に一ツづゝ少なくなつて行きます。前段角の長編二ツと二ツの間の鎖編二ツの中へ長編二ツ鎖編二ツ長編二ツの松編を編み、次の鎖二ツとんでは鎖一ツの中へ長編四ツづゝ入れることを三回次の鎖二ツをとんで次の二ツ鎖の中に長編二ツ鎖二ツ長編二ツの松編をあみます。

十三段――鎖三ツ編み角の模様の前段の長編と長編の間の鎖二ツの中に長編を四ツづゝ編みます。

十四段――鎖三ツ編み、角模様の兩側の松編はそのまゝ松編を重ねて編み前段の長編四ツの所に「鎖編一ツ長編一ツ」を二ツ目毎に編みます。（第百五十六圖參照）

十五段――角の兩側の松編の間は鎖一ツ長編一ツを十二いたします。この段から兩側の松編は長編三ツ鎖一ツ長編三ツの、松編を絶迄續けます。そして一段毎に一ツづ

ゝ拼目がふへて六角の角模様の間の拼目は二ツになります。

十六段――六角の斜めの拼目は一ツになり角の中心は拼目が十三になります。

十七段――六角の斜めの拼目はなくなり松編と松編の間に長編一ツ編み松編と松編の間の拼目は十四になります。

十八段――この段では松編と松編は全く隣り合ひ拼目は十五になります。

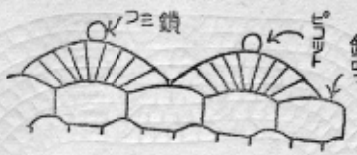
十九段――松編二ツ並んだ間の拼目は十六になります。

これでカバーの片側が編めましたからこれと同じものをあと一枚編みます。裏表の色を替へてもよろしいでせう。

パンヤの入つたクツションを中に入れてこの二枚を合せて周圍に飾りを編みます。

飾の編み方　兩側の目をよく合せて第百五十七圖の如く「長編一ツ鎖四ツをくりかへします。

前段の拼目の中に「長編四ツのピコット一ツ、長編四ツ」編み、次の拼目に短編で止め、これを一廻りします。



第百五十七圖

大人用ヅロース

材料　中細毛糸四オンス、二糎巾ゴムテープ五十糎内外。

第百五十八圖　出來上り圖

用具　三號二本針二組、とぢ針一本。

編み方　裾口の方から股上の方に編み、兩足同様に編んで中央でつなぎ合せます。

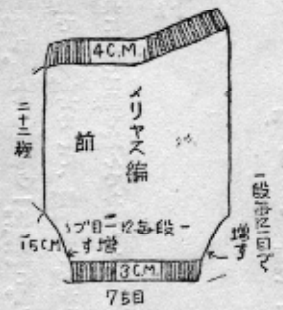
七十五目作り「二ツ表二ツ裏」のゴム編を二編編みます。

次にこの目數のまゝメリヤス編を三糎編みます。次に兩側で一段おきに一目づゝ増して、（基礎編參照）、股下が十六糎位になるまで編みます。

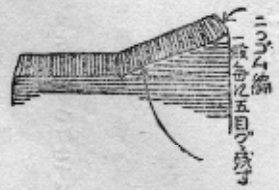
次は増減なしに股上を二十二糎編みます。

（第百五十九圖參照）

全體の目數の半分を別の針にうつしておき、後の半分を後の分として端が四糎になるまで一段毎に五目づゝ殘して編んで行きます。（第百六十圖參照）、殘して編む時は前に別の針に殘して置いた針に一段毎に五目づゝうつして行きます。



第百五十九圖



第百六十圖

全段目を表二ツ裏二ツのゴム編に四編編みます。

これで片方の分だけ編めましたから、これと向ひ合ふやうにもう一枚同様に編みます。両方出來ましたら後と後ととり合せ、前は前でとり合せまして、股下は二本糸でしつかりとかがりつけます。用意してあるゴムテープをゴム編四縄の中央に通して前で結んでおきます。

大人用靴下

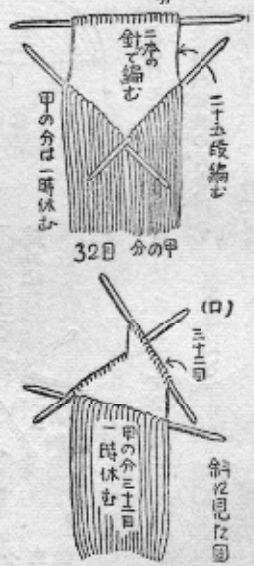
材料 スコッチ六オンス。

用具 鐵製四本針十二號一組。

靴下の大小の差は、一文を増す毎に二組、目數で四ツでありますから、それによつて増減いたします。この靴下は十文を標準にしてあります。

第百六十一圖 出來上り圖

編み方 七十二の目をかけてこの目數を、三本の針に分けて通し、次に表編二ツ、裏編二ツのゴム編を、八縄程編みます。次に表編ばかりを、十縄程編み、こゝから減します。其の減し方は、一縄の終りの針に、目を三ツ寄しておいて、二ツ一度、表編一ツを編み、又次の針の始めで、表編一ツ、一目うつす、(一目うつすと言ふのは、一目を編まずに、左針から右の針にうつすことです。)又表編一ツ編んで、移した目を、其の上にかぶせます。これで目數二ツ減したことになります。次に増減なしに、七段編み、八段目毎に、同じ所で前と同様にして減します。これを初めから、四度繰り返して編みます。そうしますと目數は六十四となります。更に又増減なしに、八段編んで、次に踵に移ります。

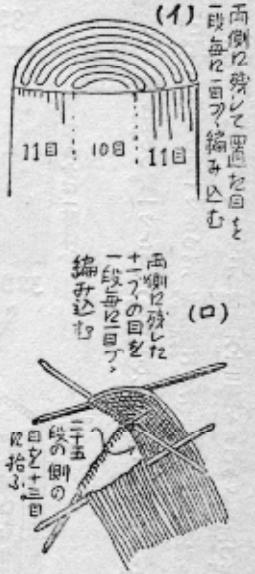


第百六十二圖

踵の編み方 第百六十二圖(イ)(ロ)のやうに六十四の目を、二等分して、その一方の三十二目を踵にいたします。(目を減した方を踵の中央とします。)

三十二目を表から編み終つて、裏返して、編み初めの目一ツとり、(左針から、右の針に、そのまゝ編まずに移します。)あとは全部裏部にして又表に返し、始めの目一ツとつて、皆表編にいたします。これを繰り返して、六縄位(約二十五段)編みます。二十六段目は、終りまで編まずに、第百六十三圖(イ)(ロ)のやうに左の針に目を十一だけ殘して、裏に返し、後戻りをいたします。裏に戻る時には、編み初める時に、目を一ツ右の針に移して、次の目から編むのであります。

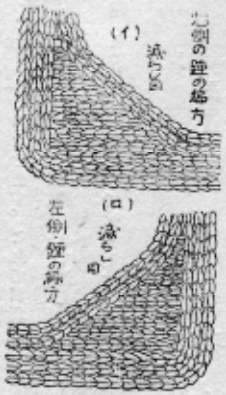
第二段よりは、前に十一づゝ殘して置いた目を、十目殘るまで編みます。裏に返して、次の目を右の針に移して、前の十一の目を十目殘るまで編みますこのやうにして、前に兩側に、十一目づゝ殘しておいたのを、全部なくなるまで一段毎に一目づゝ中に編みます。兩側の目を、全部編み込んで終ひましたら、前に半分編まずに殘して置いた目數の兩側の目に他の色糸で印を付け、前に二十五段編んだ所の兩横の目を拾ひますと都合十三宛になります。



第百六十三圖

前に殘した目と、兩横の目と、踵の目と一緒にして、つゞけて丸く編むのであります。其の時に印をつけた目で、横の目を一段毎に、兩側で一ツづゝ減します。

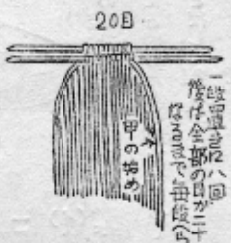
減す時には、印の目で、横の目をかぶせるやうに、針を踵の方に向けて、二ツ一度に編みますと第百六十四圖(イ)(ロ)のやうに編目が出來ます。全部横の目がなくなりましたならば其のまゝ眞直ぐに約十五糎編みます。



第百六十四圖

爪尖の減し方　一段――甲の方と、底の方は、目を二等分にいたします。

甲の始めの方は一ツ編んで、針を目の内側の方に向つて、二ツ一度に編みます。次は甲の方の終りの三目になつた時内側向きに二ツ一度に編み、殘り一ツ編んで、甲の部を終ります。底の方の目も甲と同じく一ツ編み、内側の方にむかつて針を通し、二ツ一度に編みます。裏底の終りの一ツ手前で二ツ一度に編み、殘り一ツを編みます。つまり一回編むと、目數が甲で二ツ、底で二ツ、都合四ツ減る譯であります。これを一段おきに八回減し、あとは段毎に減らして、全部の目が二十（甲十、底十）になるまで減します。（第百六十五圖參照）



第百六十五圖

爪尖の止め方　基礎編、メリヤス接ぎの方法で接ぎ合せます。

靴下カバー

材料　太毛糸四オンス。

用具　毛糸用鉤針一本。

編み方　足底より編み始め足首の方に編み上つて行きます。始め五十の鎖を作り、あとに戻つて鎖の目に一ツゞゝ短編で終りまで編み、終りの一目に三ツ短編を入れます。次に其の鎖の向ふ側に廻り短編を一ツゞゝ入れて編み廻ります。この時編み初めの目と終りの廻る山には一目に三ツ短編を入れて、その間は一目に一ツゞゝ編んで行きます。そして五段編み廻ります。（第百六十七圖參照）

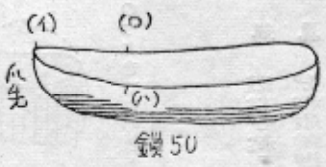
第百六十六圖　日來上り圖

それより一目に一ツゞゝ入れて五段編み、全部で十段になりましたら、一方を爪先きにして、一方を踵といたします。十一段目を編む時に第百六十八圖のやうに爪先きの方は一目とばします。其所を(イ)といたします。

(イ)より(ロ)の所まで十九目編みまして、二十目の所の目を一ツとばして編み(ロ)の反對側(ハ)の所でも爪先きから十九目手前で一目とばし段毎に爪先きの方は前にとばした上の所で一ツゞゝとばし、(ハ)の所でも、(ハ)の所でも一目とばして參ります。

第百六十七圖

これで五段編み、六段目より爪先の今とばした目を眞中にして、其の兩側で目を一ツゞゝとばして五段續けます。(ロ)(ハ)の所はいつも前と同じくとばします。



第百六十八圖

全部で二十段になりましたら、(イ)の所より二目手前の所で三ツ目の(イ)の所に長編五ツ入れ、次を二目とばして短編で付け、次の目に引きぬき止めにして、裏に返します。前の五ツの眞中の目に一目に三ツ入れて、終りに一目とばして引きぬき止めで付けます。又次の目に引きぬき止めにして裏に返し、前の五ツの目を短編で一目に一ツゞゝ入れて、終りに一目とばして短編で付け、それより短編で一廻り編んでとめます。これで出來上ります。これは十文の靴下の標準ですから一文毎に編み初めの鎖で四ツ、段數で一段づゝの增減をいたします。

保溫足袋

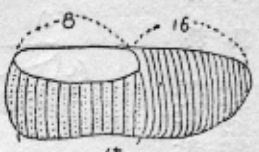
材料　並太毛糸三オンス。

用具　毛糸用鈎針一本、とぢ針。

編み方　指先きから短編で甲に編み、つゞいて踵の方を編みます。

初めに、鎖編三ツして輪を作り短編を八ツ編み、次から一目おきに一目づゝふやして二廻り編みます。次は二目

おきに一目づゝふやしながら二廻り編みます。



往復編む

短編八つ
一目置きに一目づゝ增して二廻り
二目置きに一目づゝ增して三廻り
四目置きに一目づゝ增して一廻り
合せて十四目

第百六十九圖

次は四目おきに一目づゝふやしながら一廻りあみますと目數が四十で直徑が約八糎位になります。この目數のまゝで爪先から十六糎になるまで、ぐる〳〵と丸く編みます。

次に八目だけ殘して裏からと表からと引き返し往復して更に八糎程編みます。

踵の方になりましたら、兩端一目づゝ二回程ふやして止めます。編み終りを二つに折りまげてとぢ針でとぢつけ、その糸のつゞきで口のまわりに短編を一段編んで出來上りといたします。（第百六十九圖參照）之は左右目形に編ます。

保溫足袋（指附）

材料　並太毛糸三オンス。

用具　毛糸用鉤針一本、とぢ針一本。

編み方　短編で拇指を編み、次に四本指の方も編んで兩方合せて甲から足底へ輪に編みすゝみ、足の入る口を殘して引返しに編み踵の所で合せます。

拇指の編み方　鎖編三ツ、引き抜きで輪にして、短編八ツ編みます。

次に、前段の短編八ツの上に短編を二ツづゝ編んで十六にいたします。そのまゝ九段ばかり編みますと拇指のつけねまであめますから引きぬきにして糸を少し殘して置きます。

(一) 初め巻ハツ次に二目に二目ワ、を編みすゝ六目にして九段まで編む

(拇指)

(二) 片側で一目に二目編むこと二回

片側で一目おきに一目に二目編むこと二回

(四本指)

次に四本指の方を編みます。（第百七十圖（一）參照）

四本指の編み方　鎖編三ツ編み引き抜きで輪にし、短編を十編んで、二つに折つて兩側の角で一目に三ツづゝ短編をいたしますと、全部で十四出來た事になります。

次に編む時は增目した一方の角だけに三ツ短編を編みます。他は前段の目の通りに編みます。次に一段おきに今增目した方にだけ角に三ツづゝ短編を編んで、この方法で九段まで編みます。（第百七十一圖（二）參照）

四本指の方が編めましたら、增目の反對側へ來た時、前に編んで置いた拇指と一緒にして、その目のまゝぐるぐると編み、拇指の先から十三糎半位になつたら止めておきます。

そして甲になる方の目を八ツだけ殘しまして第百七十圖(三)の(イ)から足底へ向つて(ロ)までの間を表から又裏からと交互に編みます。

凡そ八糎位編んで、一度足に合せて見ます。

次に足底の中心で、一目づゝ飛ばして四目へらします。次の段では二目減らし、又その次の段で一目へらして糸をとめます。

編み終りの目數を中表に二ツに折り、とぢ針でとぢます。そして緣に短編を三段、その上に鎖編二ツあんでピコツトを一段いたします。

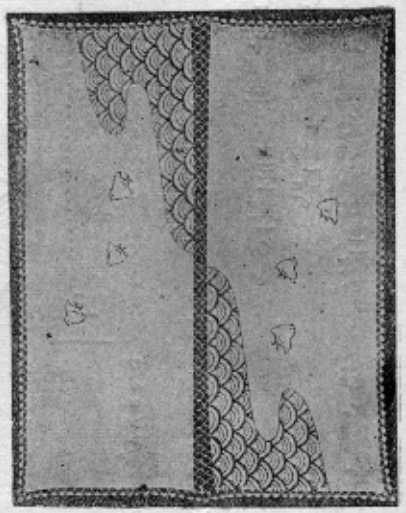
手拭を利用した食卓掛

材料　手拭二本、レース糸一玉。

用具　レース針及び鉛筆。

最初二本の手拭を重ねて兩端の寸法を正しく裁切り、兩端の裁目を細く三ツ折縫にしておきます。次に一枚を少しづらして重ね合せ、二糎毎に鉛筆で印をつけておきます。

編み方　二枚の接ぎ合せを七寶編でいたします。第百七十二圖のやうに印をつけて置いた所に糸をつけ、一ツ鎖



第百七十一圖

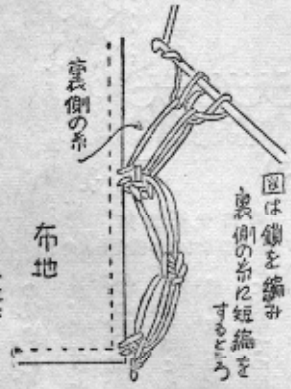
を編み、目を共のまゝ一糎半の長さに伸して裏側の糸に短編をし、今一度これを繰り返し次の印の所に短編で付けます。これを繰り返して一段を終り、二段目は端の方で同樣なものを三ツ編んで裏に返し前段の頭へ短編でとめます。

あとは前段と同樣に終りまで編みます。

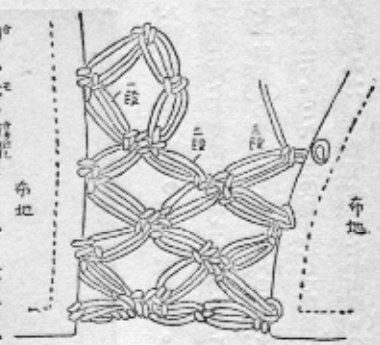
三段目は第百七十三圖のやうに別の手拭の片側に付け乍ら編んで參ります。かうして二枚を編み接ぎましたら廻りの飾りに移ります。

廻りは同じ七寶編で編みますが角の所に來ましたら第百七十四圖(イ)のやうにしますと角の所が丸くならずに角が出來ます。これを二段繰り返して飾編にうつります。

飾の編み方　飾編は第百七十四圖(ロ)のやうに七寶の間



第百七十二圖
七寶編の編方



第百七十三圖　布の編み合せ方部分圖

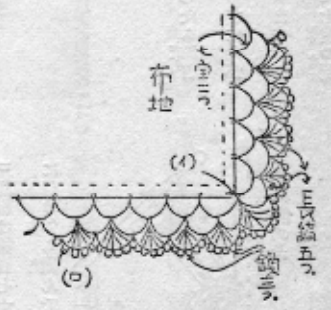
を切り、其の切端はよくかくしておき、アイロンを掛けて仕上げをいたします。

レースの袖口編（其の一）

材料　新カタン三十番一くり。

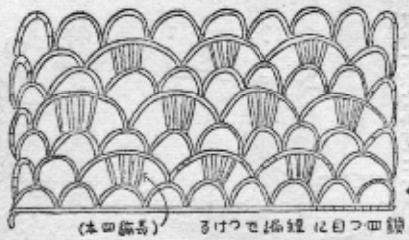
用具　レース針一本。

編み方　初め必要な袖丈の二倍だけの鎖編をし袖奥の方から袖口の方へ編んで行きます。扱帯の鎖の目數は四の



第百七十四圖
角の七寶編の仕方及鉾の編み方

の低い處に長編を一入れ、鎖三ツを編み長編の頭に短編をいたします。これを五回繰り返して七寶の山に短編でつけます。これを繰り返して一廻り編みましたら糸



第百七十五圖　甘まわりの編み方

倍數だけ編みます。

一段——逆に戻つて更に鎖五ツ編み九ツ目に短編で付けます。五ツ鎖を編み四ツ目に短編で付ける。五ツ鎖を編み四ツ目に短編でつける。これを終りまで續けます。

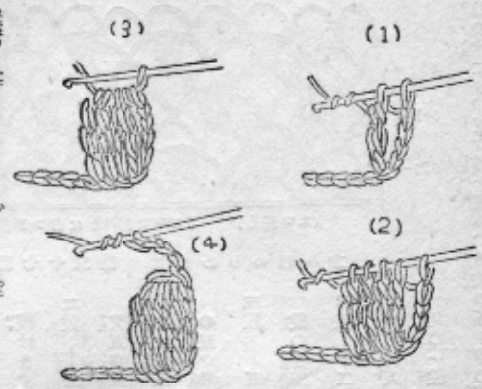
二段——二段目にうつる時に五ツ鎖を編み、次の鎖五ツの中に短編で付ける。又五ツ鎖を編んで次の鎖五ツの中に短編でとめます。次は鎖三ツ編み、其の次の五ツ鎖の中に長編四ツを入れる。三ツ鎖を編み次の五ツ鎖の中に短編でつける。これを繰り返します。

三段——五ツ鎖で前段の鎖の中に短編でつけ又五ツ鎖で第百七十五圖の如く前段の長編の兩側に短編で付けます。

四段——二段目と同じやうに長編四ツが二段目の、長編と長編との間々に行くやうに入れます。

此の一段から四段までを一回として、この編方を繰り返して、三回目の四段目の時には、五ツ鎖を編み、前段の五ツ鎖の眞中の目に長々編を四ツ入れます。（基礎編の長々編參照）、又次の

五ツ鎖の中の目に長々編を四ツ入れます。これを繰り返し一段編みます。次の段には五ツ鎖をして針に糸を二ツからみ、前段の長々編の頭に針を通して糸を引き出し、針に糸をかけて二ツ引き抜き、又針に糸をかけて二ツ引きぬき第百七十六圖(1)のやうに殘つた二ツの糸の輪は引きぬかないで置き同(2)圖のやうに又針に糸を二ツからみ、前段の次の長々編の頭に針を通して糸を引き出し、針に糸をかけて二ツ引きぬき、又針に糸をかけて二ツ引きぬき殘つた二ツの糸の輪は引きぬかないで、又針に糸を二ツからみ前段の次の長々編の頭に針を通して糸を引き出し、針に糸をかけて二ツ引きぬき、又針に糸をかけて二ツ引きぬき殘つた糸の輪は其のまゝにして今と同じことを



第百七十六圖

第百七十七圖

繰り返して、初めから四回目には同(3)圖のやうに針に糸をかけて針にかゝつて居る糸の輪を全部一度に引きぬきます。さう致しますと前段の長々編のさかさまの形になります。次に(4)圖の如く三ツ鎖を編み次の長々編の頭に今と同様な編方をいたします。これを繰り返して一段といたします。

次の段は三ツ鎖をして長々編の頭に長編一ツ入れピコットを作るために三ツ鎖を編み長編の頭に引きぬきで止め同じ長々編の頭に又長編を一ツ入れて鎖三ツ編み長編の頭に引きぬきでとめます。第百七十七圖のやうにして長編四ツ、ピコット四ツ、長編一ツを同じやうに長々編の中に入れて次の長々編の頭に短編でつけます。これを一段しますと飾りが出來上ります。

レース袖口（其の二）

材料　三十番新カタン糸。

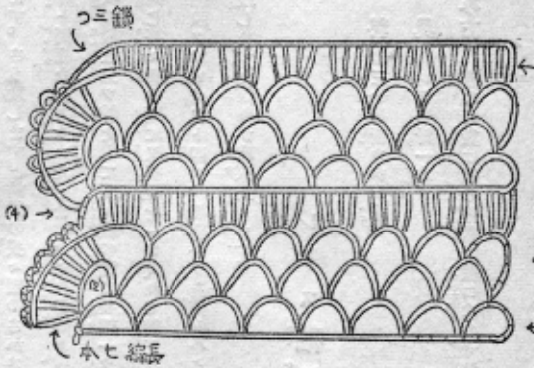
用具　レース針一本。

編み方　鎖の目數は四の倍數で袖口巾の寸法だけ鎖を編みます。レース巾ですから三糎幅でも十糎幅でも自由にいたします。

一段――鎖を四の倍數で適宜の寸法だけ編み更に九ツ鎖を編み、九ツ鎖の最初の目に短編で付ける。五ツ鎖をして

ハンカチーフ入れ

材料　白レース或は三十番新カタン糸一ツ。



第百七十八圖　編み方略圖

四ツ目に短編で付ける。これを三段繰り返しますが、二段目からは五ツ鎖の中に短編で付けて行きます。そして三段目の終りになりましたら前段の最後の五ツ鎖の中に長編を七ツ入れて一番初めの鎖の目に短編でつけます。裏に返して三ツ鎖をなし長編の六ツ目の頭に短編で付ける。三ツ鎖をして次の長編の頭に短編で付ける。これを繰り返して長編全部の頭の上に鎖三ツのピコットを作ります。三ツ鎖をして次に三段目の五ツ鎖の中に長編を四ツ入れる。次の五ツ鎖の中にも長編四ツ入れる。この長編四ツを一段いたします。

一段から四段までの編方をくり返して袖丈の寸法だけ編んで行きます。（第百七十八圖編方略圖參照）

用具　レース用鉤針。

編み方　此のハンカチーフ入れは　始め丸く輪にして口の方から底へ向つて編み、兩方をへらし始める時から二枚を平にしてぐる〳〵編み、被せは後から編み、紐は其の後で付けるのであります。

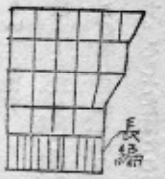
第百七十九圖　出來上り圖

一段——鎖百二十六を編んで輪にします。

二段——鎖三ツして前段の鎖一目へ一ツづゝの長編をして一巡りします。

三段——二段からのうつり目に鎖三ツと、つゞいて二ツ、都合五ツの鎖を編んで、二段の長編の目二ツをとばして三ツ目に長編をします。そして又鎖二ツしては二目とばして長編と之を繰り返し一巡りいたします。

四段——三段と同じ編方を繰り返すのですが、初めと終りで目を増すことだけが違ひます。この増し目は表側の初めと終り、裏側の初めと終りでいたしますから一廻りする間に四ツ丈け増すことになります。そしてなほこの目を増すことは一段置きに三四段します。

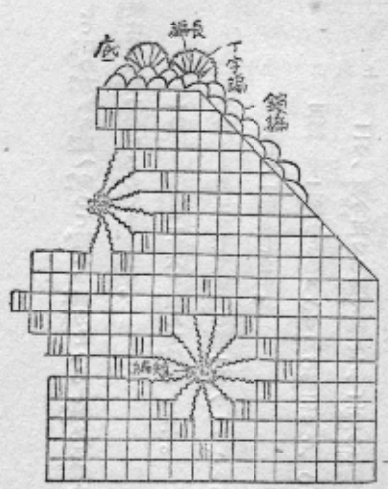


第百八十圖　目の增方

五段、七段——は三段に同じ。

六段、八段——は四段に同じにて兩横で目を增します。かうしますと袋の口よりもだんだんと廣くなつて來ます。

目の增し方　この增し方は第百八十圖のやうに、始め增す時には、鎖五ツ編んで前段の長編と長編の間の鎖二ツの中に長編を一ツ編むと、そこで一ツ增し目が出來ます。此の增し目が出來てから、又長編が二十目出來ましたならば、次の二ツ鎖の中に長編を一ツ入れて目を增します。又次は長編の頭に長編を編んで、其の次は又鎖二ツの中に增し目致します。これより又二十目編みますと終りになります。こゝで又一ツ增し目を致します。始めの五ツ鎖の三ツ目に引ぬきで止めます。此の方法で一段置きに三回增し目をします。始め增す時には鎖の兩側で次に增す處は二十一目の兩側で增します。



第百八十一圖

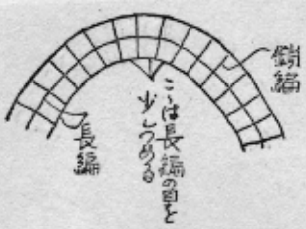
九段——この段から模樣を入れます。模樣は第百八十一圖のやうに花菱を片側に三ツ入れます。三ツ目の模樣の二段目から左右の端で一段づゝ圖のやうに減じて袋の底を段々とせばめて參ります。そして模樣を編み終へましてから、一段編んで止めますと、底に六糎程穴のあいた袋が出來ます。

今度は上の被せをあみます。今迄編みました袋の口の片側だけへ長編を一通り編み、二段目からは袋の方と同じ編方で九段編みますが、こゝは袋になつてゐませんから裏表から編んでまいります。そしてなほ二段目から巾の中央に前と同じ花菱の模樣を一ツ編みます。

次は飾りを編みます。飾は鎖五ツを編んで短編で止め、また鎖五ツしては短編と、之を繰り返します。底は二枚一緒に合せて編みます。二段いたしまして三段目は前段の鎖の輪の中へ長編を六ツして次の鎖の中へ短編で止め、又長編六ツしては短編で止める編方を一通りします。そしてその上に丁字編を一通り編んで終ります。丁字編は長編を編みながら、その頭へピコットを編んで行きます。

被せも同じやうた飾編をして、ボタンを付けます。

ボタンは全部短編で直徑八糎位の玉を作り、袋には飛飾編を入れ、被せの模樣の中央下へつけます。

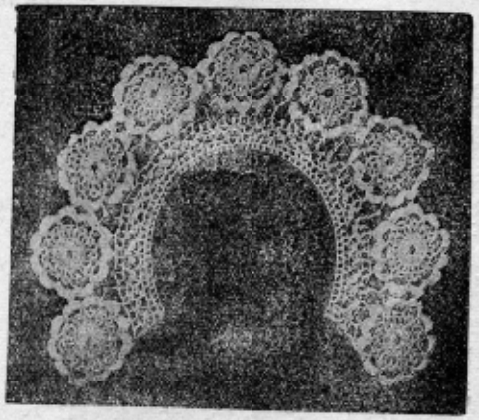


第百八十二圖　袋の編み方

次は紐ですが第百八十二圖のやうに全部鎖と長編で、網目編を裾の一方の端から編み初め他の一方で止めます。

洋服の衿カバー（其の一）

材料　二十匁カタン糸一くり。



第百八十三圖　出來上り寫眞のやう

用具　レース用鉤針。

編み方　初め九枚の花を編んでこれを出來上り寫眞のやうに編みつなげるのであります。

一段——七ツ鎖を編み輪にして引きぬき止めにいたします。

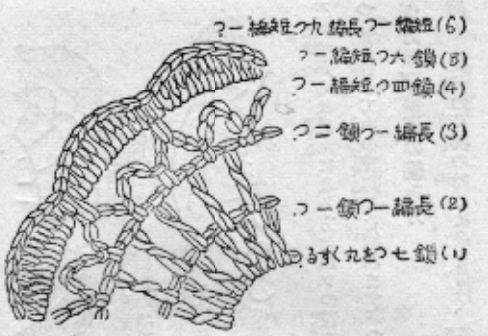
二段——四ツ鎖を編み、前段の輪の中に長編を入れ、鎖一ツを編み、又同じ中に長編を入れる。これを繰り返して始めの鎖四ツも長編一ツと數へて二十二本になるまで同じ所に長編を編み、終りに初めの鎖四ツの中に引きぬきで止めます。

三段——鎖五ツを編み第百八十四圖の如く、前段の長編と長編の中の鎖一ツの中に長編を入れます。これを繰り返して終りは初めの五ツ鎖の三ツ目に引きぬきで止めます。

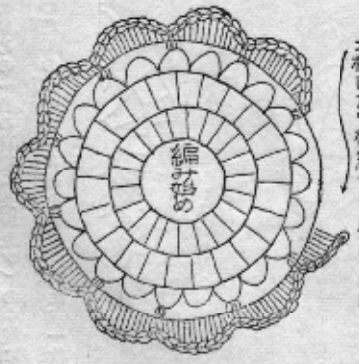
四段——鎖四ツを編み、次の二ツ鎖の中に短編で付けます。この段は鎖四ツ短編でとめる。これを繰り返して終りに始め編んだ鎖の二ツまで引きぬきにします。

五段——鎖六ツを編み前段の鎖の輪を一ツとばして二ツ目の鎖に短編でつけます

六段——前段の六ツ鎖の中に短編を一ツ入れ次は長編を九ツ入れ短編の頭に短編で止める。これをくり返します。これで花形一枚出來たのであります。（第百八十五圖參照）、これと同じものを九枚作ります

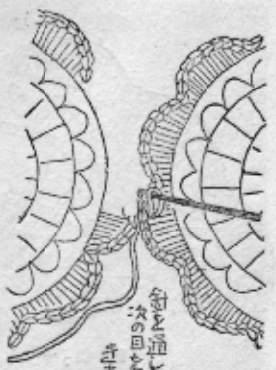


第百八十四圖



第百八十五圖

が、二枚目からは終りの松編を一ツ半殘して第百八十六圖のやうに始めの一枚の花辨（長編九ツ）の中程に針を通して、次の目を引き出して後の半分を長編にいたします。又次の花辨の半分まで長編を編んだ時に、一枚目の次の花辨の中央に針を通して付けます。

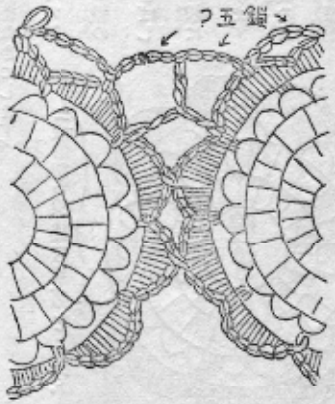


第百八十六圖

三枚目からは外側になる方を四ツの花辨にして內側は三ツにいたします。兩方共二ツづゝ付けます。これを丸枚つなぎ合せて中の首廻りを編みます。（出來上り圖參照）

接ぎ方及び首廻の編み方

一段——內側の花辨の始めに糸を付け、第百八十七圖のやうに鎖五ツを編み、次の花の花辨の中央に短編で付けます。これを繰り返して次の花に移る時は、其の間が廣くなつて居ます。鎖五ツを編み、針に糸を四ツからみ（長々編）花の時に短編でつけた處のひくい處に長編を入れ一度引きぬき針に糸が三ツかゝつて居る上に叉針に糸をからみ次の花の低い處に長編を入れ一度引きぬき編をいたします。かういたしますと長編の足を兩方にかけ逆さのY字型になります。そうして五ツ鎖を編み、次の花に付けます。

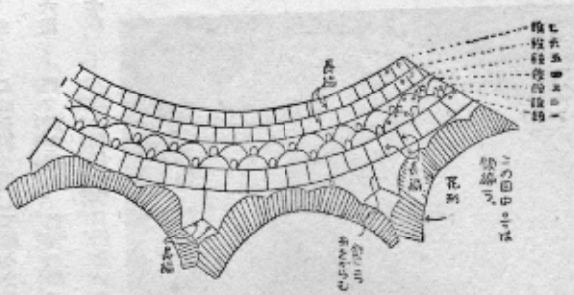


第百八十七圖

二段——鎖五ツを編み前段の鎖五ツの中央に長編一ツ入れ、鎖二ツ編み次の短編の頭に長編一ツを入れ、鎖二ツ編んで鎖五ツの中央に長編を編み、鎖二ツ編んで短編でつけた所に長編を編み、これを繰返します。

三段——鎖二ツを編み、前段の鎖二ツの中に短編でつけ、三ツ鎖を編み同じ處に短編でつけます。次は三ツ鎖を編み長編二ツとばして、次の鎖の中に短編でつけます。又三ツ鎖を編み同じ處に短編でつけます。

四段——前段の鎖三ツとばした處に三ツ鎖を編んで、短編でとめ、もう一度これを編んで同じ處に入れます。前に二度付けた處は今度はとぶことになります。

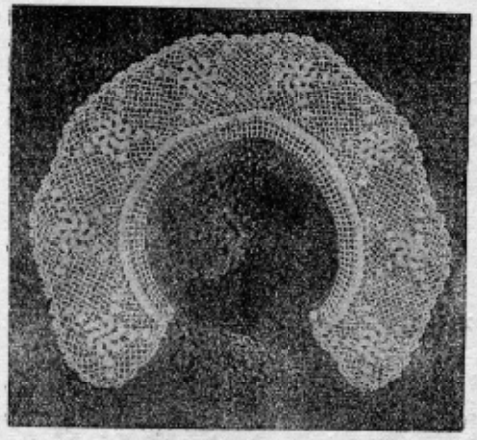


第百八十八圖　首まわりの編み方

五段——鎖四ツをあみ、前段の鎖三ツの中央に短編でつけて、又鎖四ツを編んでは一ツ飛んで次の三ツの鎖に付けます。これを繰り返して編みます。

六段——四ツ鎖を編み、前段の鎖三ツの中に長編一ツを入れ、次からは前段の目を一目おきに拵目編をいたします。

七段——六段と同様に拵目編をいたします。（第百八十八圖參照）



第百八十九圖　出來上り圖

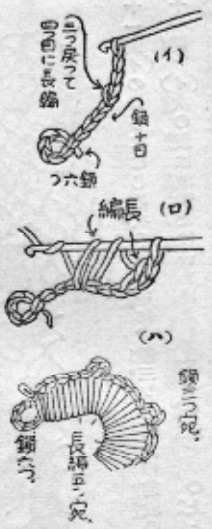
洋服の衿カバー　（其の二）

材料　新カタン三十番一玉の三分の一位。

用具　レース用鉤針一本。

編み方　この衿カバーは第百八十九圖のやうに、小さい模様を八枚接ぎ合せ、其の周圍に飾編をいたしたものであります。

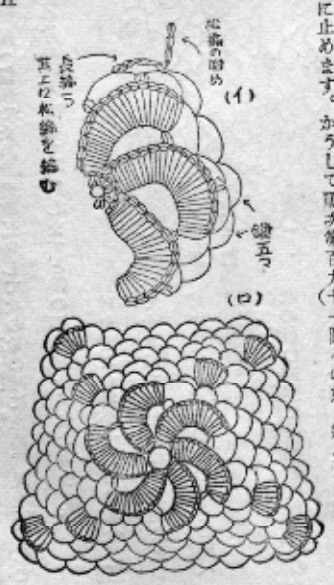
最初鎖六ツを編んで輪にします。つゞいて鎖十を編んで、第百九十圖(イ)のやうに二ツ戻つた四ツ目に長編一ツ、次は鎖をまくやうに長編四ツ（同圖）(ロ)を編んでから、鎖三ツ編み、鎖の根元の長編の頭に止めるやうに針を通して、一目抄ひ出し、（この時針に二目かゝつたまゝ）次の長編に移り、又長編を五ツ、鎖三ツのピコットを編み、次は長編五ツを編んで、最初の輪の中に止めます。（同圖(ハ)參照）



第百九十圖

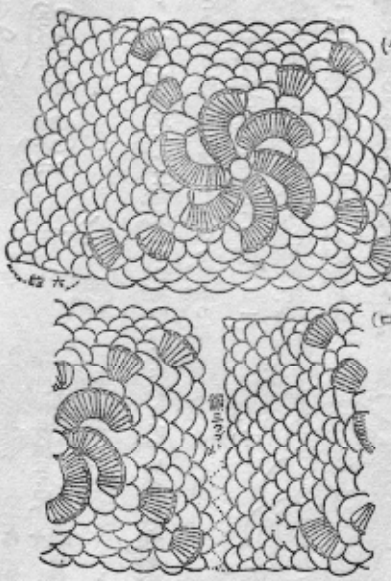
鎖七ツ編んで裏に返し、前段の終りのピコット一ツ編んで裏に返し、前段の終りのピコットに短編で止め、鎖三ツ、長編五ツ、ピコット一ツ、長編五ツを二回編んで最初の輪に止めます。かうして四次第百九十一圖(イ)の如く編みます。

このやうに、ピコットのついた長編の片を六ツ編んで糸を切ります。最後の一片のニツ目のピコットを編むとき、最初の一片の尖端を抄つて編み、又長編を五ツ編んで初めの輪に止めて糸を切ります。切つた糸を第百九十二圖(イ)のやうに、一片の初めの方のピコットにつけて、鎖五



第百九十一圖

ッを編んで、次の長編の目を一ツとばした所へ短編で止め、又鎖五ツして次の片の端に止め、又鎖五ツして其の片の初めのピコットに止め、つゞいて前の片のやうにして一周しますと鎖の網目が十八になります。



第百九十二圖

けれどこの場合十八では都合が悪いので十九にするために、最初糸をつけたピコットと、その片の端との間へ一ツ止めます。

次の段は四隅に松編を入れて前のやうに波編で一周します。（四隅と云ひましても眞四角でなく、十九の網の目を四ツ、七ツ、四ツ、四ツに分けて、其處で松編を入れます。）この松編は第百九十一圖(イ)のやうにはじめ次の鎖の中に、鎖三ツして其の前段の波編の中に長編七ツを編むのであります。第百九十一圖(イ)次の段は波編だけ一まはりしますが長編七ツの上と兩側と眞中は短編で付けてまはります。その次の段は四隅に松編を入れる組方をし、終りに波編で一周して糸を止めます。（第百九十二圖(ロ)）

四段——同樣に八枚編むのですが、二枚目からは最初のと同じ所まで編んで糸を切らずに、第百九十二圖(イ)のやうに四角の一邊（巾の廣い方が衿カバーの外廻りになるやうに）に波編を六段編み、七段目を編むとき、同(ロ)圖の如く別の一片と綴ぢつけます。

以下全部同じ仕方で編みますと衿廻りの丸味が出來ます。

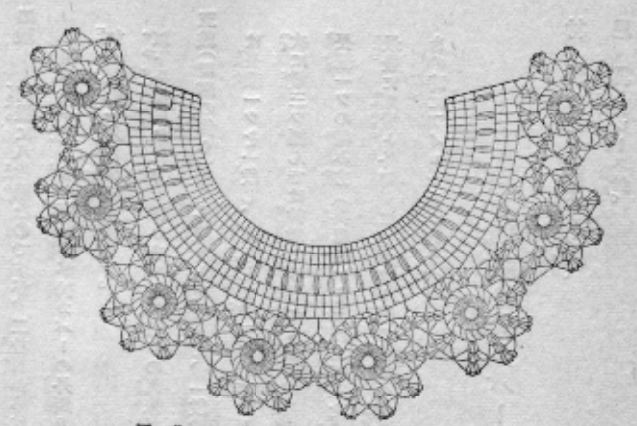
五段（周圍の飾り）——外廻りと左右とに、一段、鎖五ツと短編の波編します。次に內廻りに裏を見て、鎖三ツしては長編一ツを一段し、裏返して鎖三ツしては長編四ツを編んで、次の波編に短編で止める編方を一段いたします。次に鎖三ツ編んでは前段で四目づゝ編んだ長編の初めの目に短編で止める編方を一段します。それから鎖二ツと長編一ツの編み方（併目編）を三段して糸を止めます。

最後に兩横と外廻りにピコット附の松編の飾をします。出來上りましたら洗濯をして、澱のりを付けて、生乾きの時にアイロンをかけます。

洋服の衿カバー（其の三）

材料　三十番新カタン糸。

用具　レース針。



第百九十三圖　出來上り

編み方　初め花形を一ツあみ、次の花形から飾りのピコツトを編む時に前の花のピコツトにつゝけて編んで全部がつなぎ合さつてから内側を第百九十三圖の如く拂日編します。

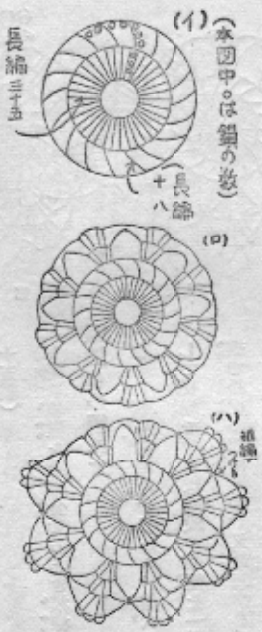
一段——鎖十編んで輪にして引きぬきでとめます。次に鎖三ツして其の輪の中に長編三十五編み、鎖の頭に引きぬきでとめます。

二段——鎖五ツ、一段の長編を一目とばして、長編一ツを編み、鎖二ツして一目とばして長編一ツを繰り返へし、終りは長編一ツして鎖二ツあみ、五ツ鎖の三ツ目に引きぬきでとめます。（第百九十四圖）(イ)

三段——鎖三ツあみ、二段の最初の長編と長編の間に長編二ツ、鎖二ツ、長編二ツを編みます。次は鎖四ツして前段の長編を二目とばし、長編二ツ、鎖二ツ、長編二ツ（松編）を繰り返へし、終りは松編をしてから鎖四ツ、前段の鎖三

ツの上に引きぬきでとめ、更に前段の長編と長編の間の鎖の所まで引きぬきで參ります。

四段——鎖三ツして前段の長編と長編の間の鎖二ツの中に、長編一ツ、鎖二ツ、長編二ツあみ、鎖四ツして三段と同じに松編を繰り返します。（第百九十四圖）(ロ)、終りは鎖三ツして、前段の鎖を四ツのところに短編でとめ、更に鎖三ツして五段に移ります。

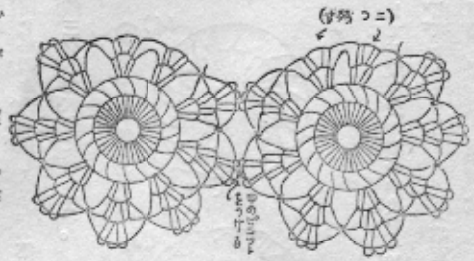


第百九十四圖

五段——前段の松編の中央に長編二ツ、鎖三ツ編んで長編の頭で引きぬき、ピコットを作り、長編一ツ、ピコット一ツ長編一ツ、ピコットツ一、長編一ツを同じ處に入れ、鎖三ツして三段四段の鎖の中央を一緒に短編で付ける仕方を、松編二山だけを殘して一段して糸を切りますと、一模樣出來たわけであります。（第百九十四圖）(ハ)

同樣の編み方で花形模樣を一ツ編んでは續けながら八個の模樣を編みますが、二ツ目からの模樣は、ピコット附の飾編を三山だけ編まずに置いて、四山目はピコットのついた長編を二ツしてから續けます。

接ぎ方　二ツ目の模様の編み續けの終りから二ツ目の飾編のピコットの中央に、鎖一ツして短編でとめ、又戻つて鎖一ツして短編でとめ、ピコットの附かぬ長編を一ツ編み、鎖四ツして三段四段の鎖編を短編でとめ、又鎖四ツ、ピコットの附の飾編を二ツ編んでから、前と同樣の方法で花形模樣を重ね合せます。（第百九十五圖）



第百九十五圖

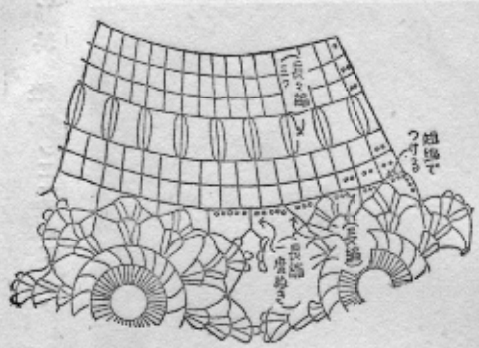
注意　模樣を重ね合せるとき模樣が裏表にならぬやうにします。

輪廻りの編み方

一段——全部重ね合せてから、鎖六ツして短編を松編の間に編み、鎖三ツして長編で、三段四段の鎖編を一所に編んで長編で束ね、鎖三ツして短編で松編の間にとめ、又鎖三ツして三段四段の鎖編を短編で束ね、次は鎖五ツして花形模樣の端のピコットに一度かけて、二目だけ引きぬき針に二目かゝつたまゝ更に、次の花形模樣の端のピコットに一度かけて糸を引き出し、殘りの目數を二ツづゝ引きぬきます。（長々編で續くことになります）、次は鎖五ツして、三段四段を長編で一所に束ね編みにします。

又鎖三ツ、短編、鎖三ツ、長編といふやうにこの編み方を一段いたします。

二段——裏返へして鎖六ツ、二目とんで長編一ツ、鎖二ツ、長編一ツ、二目とんで長編を繰り返します。（桟目編）



第百九十六圖

三段——鎖六ツ編んで二段と同じく桟目編をします。

四段——裏返して鎖六ツ編み、前段の長編の頭に長々編を三ツ入れます。この長々編は一ツづゝ編んでしまはないで、二回引きぬき二目を針に殘したまゝ、次の長々編にうつり三ツの長々編をして、目數が四ツ針にかゝつた時、三目だけ引きぬき、更に二目引きぬきます。次は鎖三ツ編んで、長編一ツとんで二ツ目の長編の上に又この三ツの長々編を繰り返へします。

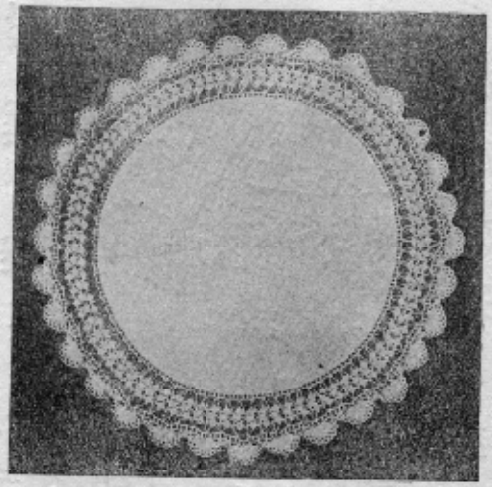
五段——鎖六ツ二目とんで長編一ツ、鎖二ツの桟目編を繰返す。

六段——五段と同樣に編みます。

七段——鎖六ツ、二目とんで長編一ツ、鎖一ツを繰り返へした桟目編をいたします。（第百九十六圖）

小テーブルセンターの飾編

材料　紙カタン二十請糸一くり。



第百九十七圖　出來上りの圖

用具　レース用鍼針一本。

編み方　始め鎖八ツ編みとヶ目に長編二ツ入れます。二ツ鎖を編み、同じ目に長編二ツ入れます。鎖六ツして、裏返して、前の二ツ鎖の中に長編二ツ入れます。鎖二ツして、同じ所に長編を二ツ入れます。これを繰り返して七回いたします。鎖三ツ編み、前段の六ツ鎖の中に、短編で付けます。鎖十編み、あとにもどつて、六ツ目に短編で付けます。鎖八ツして、四段の鎖六ツの中に、短編で付けます。鎖二ツをなし、裏に返して第百九十八圖のやうに八ツ鎖の中に、長編を十五入れます。

前に、鎖六ツで作つた輪の中に、短編で付けます。鎖八ツして同圖のやうに、裏にかへして前段の長編十五の中の十目に長編一ツ編み一ツ鎖して、長編一ツ、鎖一ツ、このやうにして六回繰り返します。

鎖二ツ編み、二段目の鎖六ツの中に短編で付ける、鎖二ツして、裏返して「長編と長編の間の、鎖一ツの所に短編で付ける、鎖三ツして、次の長編の間につける」。これを終りまで繰り返して、鎖八ツの中に、長編十五を入れ終りに鎖の中に短編で付ける。鎖八ツ編み裏にかへし前の長編十五の內、十目より、長編一ツ鎖一ツを六回繰り返します。鎖二ツ編み裏かへして前段の長編と長編の間に入れます。

この花辨を六回くり返して、六回の終りに鎖四ツの所に短編五ツ入れる鎖三ツ編み、次の長編の間に、長編二ツ入れ、鎖二ツあみ長編二ツ同じ所に入れる。長編二ツの松編をして、裏返して鎖六ツ松編をして鎖二ツ編み、花辨の長編十目の所に短編で付ける。又鎖二ツ編み、前の松編の上に又松編を入れます。是で屋車形の花が一ツ出來ました。第一の松編から初めて花びらを繰り返して六回同じことをいたします。二ツ目からは是を連續させるために、第百九十九圖のやうに、花びらの二番目のところに、前の花のをはりに二ツ鎖して、短編で付ける、いつも二番目の花びらのときに、前の花の終りに付けるのであります。是を繰り返して、花が三十六出來る迄致します。終りは編初めとつなぎ合せる處に、終りの花の松編の時

第百九十八圖

に第一段目の編を切りますと松編の下の處がバラ〳〵になります。これを終りの長編二ツして鎖二ツします時に一ツ鎖をして置きまして針を抜き、前のバラ〳〵の松編の下を四本一度に針を通して、今鎖一ツした目を引き抜きます。鎖一ツして長編二ツ入れ、鎖六ツして上の松編のはしの處に引抜きで付け、終りの糸をきらずに五ツ鎖を編み、片方の六ツの中に短編で付ける。次も又五ツ鎖を編んで付ける。是を最後まで繰り返します。五ツ鎖を編み、前段の鎖の目二ツとばして三ツ目に長編一ツ入れ、又鎖二ツ編み、二ツ目をとばして長編二ツ入れる。これを繰り返して、同じことを二段繰り返して止めます。

第百九十九圖

長編十五
鎖四つの上に
短編五つ

布をつける時は、終りの長編の所を、ミシンか、手縫で付けます。

もみぢ形テーブル掛

材料　十六番新カタン糸一くり。外に麻布又はボブリン五十糎角。

用具　レース用鉤針一本。

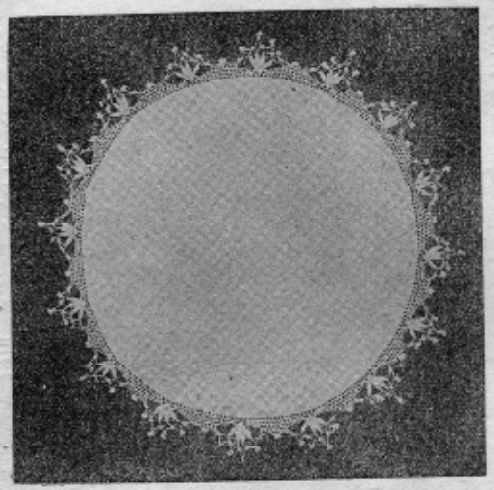
編み方　先づ一模様に對して鎖を五十四の割合に致します。

一段——鎖を八百六十四作り、輪にして引きぬき止めにいたします。

二段——三ツ鎖を編み、次の目より長編を一目に一ツづゝ入れて一周し、終りに、始め三ツの鎖の頭に引きぬき止めに致します。

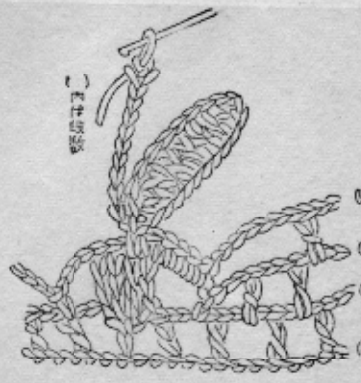
三段——鎖五ツを編み、目を二ツとばして三ツ目に長編一ツを入れ、鎖二ツ編んで三ツ目に長編をあみ、これを繰り返して終りは、始め編んだ鎖五ツの三ツ目に引きぬき止めにいたします。

四段——五ツ鎖を編み前段の鎖二ツの中に長編一ツ入れ鎖二ツを編み、次の鎖二ツの中に長編一ツを入れ、長編が七ツ出來ましたら、三ツ鎖を編み、次の鎖二ツの中に短編みで付け、又鎖三ツを編み、長編一ツとんで、次の長編の頭に長編を四ツ入れる。三ツ鎖を編み、長編一ツとんで次の鎖二ツの中



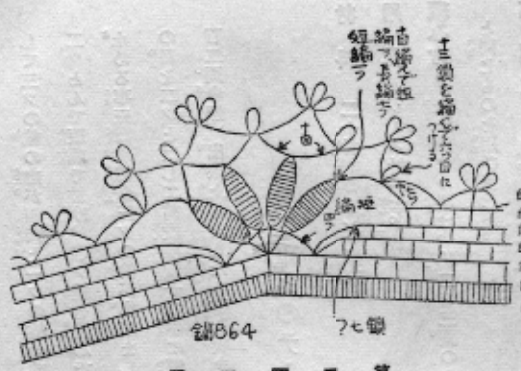
第二百圖　田來上りの圖

に短編で付け、鎖三ツを編み、次の鎖二ツの中に長編を入れます。（第二百一圖參照）、鎖と長編と交互に編んでこの段目の長編が十四出來ましたら、三ツ鎖を編み、長編一ツ編んで次の鎖二ツの中に短編で付け、又三ツ鎖を編み、次の長編の頭に長編を四ツ入れ、これを繰り返して段の終りに、始め編んだ五ツ鎖の三ツ目に引きぬき止めにいたします。



第二百一圖

五段——鎖五ツを編み、長編一ツとばして次の長編と長編の間に長編を入れ、この長編が始めの鎖共に、五ツ出來ましたら鎖七ツを編み、前段の長編四ツの兩側の鎖三ツの中に短編を四ツ入れます。長編の初めの目にも短編を一ツ入れて「鎖を十編んで次の目に短編を一ツ入れ、次の目よりは長編を七ツ編みます。八ツ目は短編を入れて下の長編の頭に短編で付ける」これを四回繰り返します。四回の終りには同じ處に二回付くやうになります。續いて四ツ短編を入れて、鎖七ツを編み、前段の長編二ツとばして、鎖二ツの中に長編を入れ乍ら、長編が十一出來ましたら、鎖七ツ編んで前段の長編四ツの兩側に短編を四ツ入れ、次よりは前に鎖十編んだ處と同じやうにして一段廻りまして引きぬき止めにいたします。



第二百二圖

六段——鎖五ツを編み、次の目より長編三ツ出來ましたら、鎖を十編みまして前段の楓の葉の頭に短編で付け、又鎖十編んで葉の先に短編で付け、これを五回繰り返して長編の所を二ツとんで三ツ目の鎖の中に長編をあみ、これを八回して又鎖十編んで葉に付ける、これを繰り返します。

七段——鎖九ツを編み四ツ目に戻つて短編で付け、鎖五ツを編み、同じ目に短編で付けます。又鎖五ツを編み、同じ目に短編で付け即ち三ツの輪が出來ることになります。鎖四ツを編み、長編の目一ツとばして、短編で付け鎖七ツを編み、前段の鎖十の中央に短編で付け、五ツ編を編んで同じ處に短編で付けます。次は十三鎖を編み、その鎖の六ツ目に短編で付け、五ツ鎖を編み同じ處に短編で付け、五ツ鎖を編み又同じ處に短編で付け、七ツ鎖をし、次の十の鎖の中央に短編で付けます。次は十三鎖を編み、六ツ目に

戻つて短編で付け、次は五ツ鎖を編み同じ處に短編で付ける事を二回致しますと都合三ツの輪になります。かうして三ツの輪の處が四回と一ツの輪の處が五回で一ツの模様が出來ることになります。又鎖七ツを編んで長編を二ツとんで短編で付け、四ツ鎖を編んで長編一ツとばし次の長編の頭に長編を入れ鎖五ツを編み元の處に短編で止める事三回、都合三ツの輪が出來ましたら四ツ鎖をし長編の目を一ツとばして短編で付け、鎖七ツ編んで長編の目を二ツとばして前段の鎖十の中に短編で付ける。これが全部の周圍の飾りになつて終るのであります。（第二百二圖參照）出來上りましたら霧を吹きアイロンを掛けます。

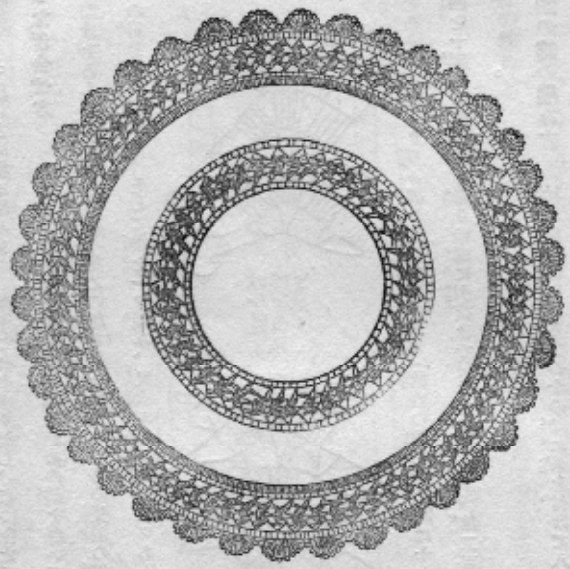
二重丸のテーブル掛

材料　二十番新カタン二把。

用具　レース針一本。

編み方　此テーブル掛は、第二百三圖のやうに、レースと布地とを組合せたもので、レースの編方に中輪と外輪と同じものを用ひました。

輪の編み方　始め鎖を十七あみ、あとに戻つて十一目に長編を一ツ入れ、鎖二ツをあみ、同じ處に長編を一ツ入れます。次に三ツ鎖をして、二目とばして三ツ目に長編を一ツ入れ、鎖二ツして同じ處に長編を一ツ入れます。



第二百三圖　出來上り寸圖

二段——鎖十をあみ、裏に返して前段の「鎖三ツ編んだ中に長々編を五ツ入れ鎖二ツ」「」の中を三回繰返します。

三段——鎖を十あみ、前段の二ツ鎖の中に長編を一ツ入れ、鎖二ツして同じ處に長編を一ツ入れます、三ツ鎖をあみ前段の五ツ長々編の編んである中央の目に長編一ツ入れ、鎖二ツして同じ處に長編を一ツ入れます。次に又鎖三ツあみ、前段の鎖二ツの中に長編一ツ入れ、鎖二ツあみ同じ處に長編を一ツ入れます。

四段——二段目と同じであります。

又鎖三ツ編み、三ツ目に長編一ツ、二ツ鎖して同じ處に長編一ツ入れます。

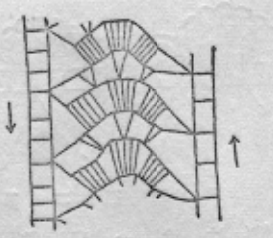
五段――三段目と同様に編みます。以下これを繰り返し、布に合せて適當の長さに編みます。

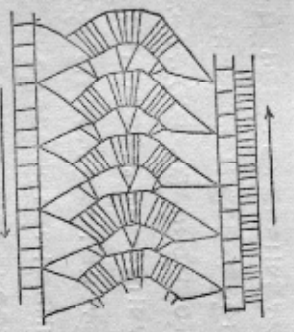
つなぎ合せ方　丸くつなぎ合せますには、編み始めの鎖を解いて、編み終りの長々編をする時、二ツ鎖の一ツだけをあんで針をぬき、編み始めの鎖を解いた處の始めの長編の根元の目に、針を逆に通して今編みつゝある鎖の目を引出します。そして鎖を一ツ編み、又次の長々鎖を二ツあんで針をぬき、中の長編の二ツに逆に針を通して、今あみつゝある目を引出し其の儘長々編を三ツつけます。次は鎖を一ツして針をぬき、次の長編の根元に針を逆に通して一ツ鎖をあみ、それより長々編を五ツ編みます。（始めの鎖を解く時に十七の鎖の内十五迄解いて置きます。）さうして編を十編んで前の解き終りの處に引抜きで付けて置きます。第二百四圖（ロ）參照。是で全部が丸く輪になつた事になります。

第二百四圖

周圍の飾の編み方　始めに外側になる方の十の鎖に糸を付けて八ツ鎖をあみ、次の十の鎖の中に短編で付けます。是を繰り返して一週り編んで終りに始めの糸を付けた處に引き抜きで止めます。鎖六ツをあみ、二目とばして三ツ目に長編を一ツあみ、又鎖三ツをあみ、二目とばして三ツ目に長編を一ツ入れ更に鎖三ツして二目とばして長編一ツ。これを繰り返して始めの鎖三ツ目に引き抜き止めにして糸を切ります。（第二百五圖參照）

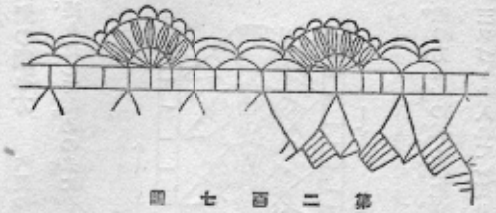
内側の編み方　内側の方は十の鎖の中に糸を付けて六ツ鎖をあみ、次の十の鎖の中に短編で付けます。これを繰り返して始めの糸に付けた處に引抜きで付けるのであります。次は鎖五ツをあみ、二目とばして三ツ目に長編を入れ二ツ鎖をあみます。此の内側の鎖はたるべくかたく編ます。目を二目とばして三ツ目に長編を入れながら一週り致しまして、終りに始めの糸を付けた處に引抜き止めに致します。中の輪の方はこれで終りであります。外の大きい輪の方は中の輪と同じ編み方をした上に、更に内側の布をつける方には鎖三ツをあみ、前段の鎖二ツの中に長編三ツづゝを入れて一周りし、始めの三ツ鎖のあたまに引抜きで止めます。（第二百六圖參照）


第二百五圖


第二百六圖

外縁飾の編み方　外輪の外側の長編の頭に糸を付け、次の長編のあたまに長編を七ツ入れて次の長編のあたま

に短編で付けます。鎖五ツをあみ、第二百七圖のやうに次の長編を一ツとばして二ツ目の長編のあたまに短編で付けるのであります。是を三回繰り返して、其の次の長編の頭に長編を七ツ入れます、これを繰り返して一段あみます。



第二百七圖

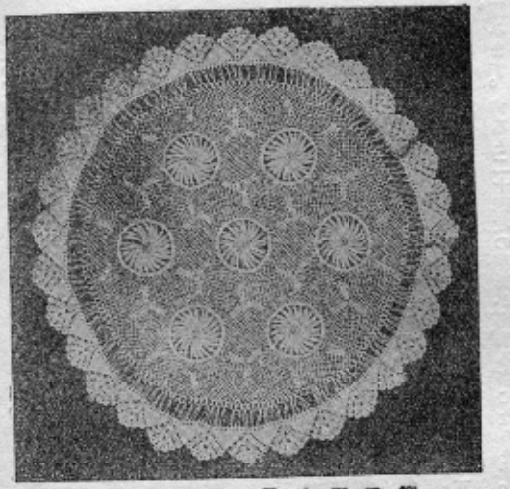
次の段は前段の七ツ長編の手前の鎖五ツの中まであみましたならば鎖二ツをあみ、前段の長編七ツの始めの目に長々編を一目に三ツ入れます。この三ツの長々編みは全部終りまで引き抜かないで、終りの一目づゝを指殘して針に掛けて置き、三ツの終りに一度に引抜いてしまひます。さうして鎖二ツをあみ、次の目に長々編を三ツ一度に引きぬいたものを入れます。是を七ツの長編の上に全部入れ次の五ツ鎖の中に短編で付けます。次は三ツ鎖をあみ、次の五ツ鎖の中に付けます。又三ツ鎖をあみ、次の五ツ鎖の中に短編で付けます。それより二ツ鎖をあみ、長編七ツの始めより長々編を三ツ一度に引きぬいたものを七ツ入れます。長編七ツの間々には全部編を二ツ入れるのであります。是を繰り返して終りは始めの目に引きぬいて止めます。

次は鎖五ツをあみ、前段の鎖二ツの中に短編で付けます。花と花の間の處は鎖三ツして、前段の短編で付けた處に同じく短編で付けるのであります。是を繰り返して縁飾りは終ります。

仕上げの仕方

中輪、外輪共に出來上りましたらば、中に付ける布を周圍に合はせて切つて仕上げます。

菊花模様テーブル掛



第二百八圖　出來上り圖

材料　二十番糸カタン三ツ位。

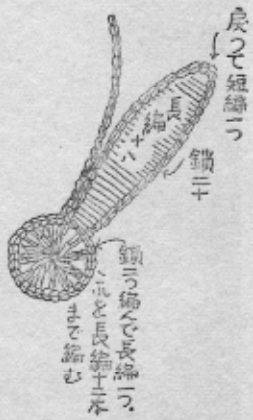
用具　レース用鉤針。

編み方　初め菊花模様を中心にした六角形を七枚編み、第二百十一圖(イ)の如くならべてつなぎ合せ圓形にして周圍に飾り編をいたします。

一段——鎖七ツして輪にします。

二段——鎖五ツして輪の中に長編一ツ、鎖二ツして長編一ツ、鎖二ツ、長編一ツ、これを繰りかへして輪の中に初めの鎖五ツの分まで合せて十二の長編が出來ましたら初めの五ツ鎖の三ツ目にとめる。

三段——今度は菊の花瓣にうつります。第二百九圖

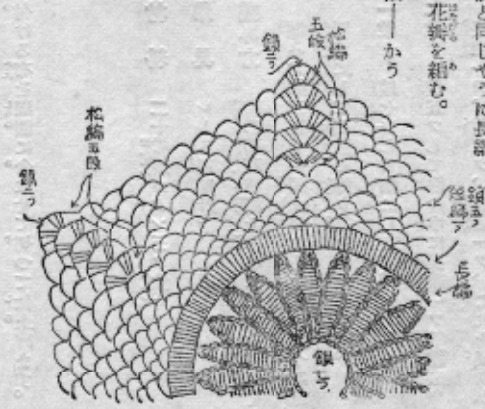


第二百九圖

して一廻りしますと十二の花瓣が出來ることになります。この花瓣は二重に重ねるのですから、もう一重、十二枚の花瓣を作ります。

今度は前段の長編と長編の間の鎖の目に編み止めるやうにして前の花瓣と花瓣の間に重なるやうに同じ花瓣を十二枚編みます。すると二十四枚の花瓣が出來る事になります。二十四枚の花瓣が編めましたら、この花瓣を鎖編と短編とで一まはりしてつなぎ合せます。この時、鎖を六ツ編んでのやうに鎖二十を編んで一ツ戻つた目に短編を一ツ編み、次から長編を十八編んで、前段の長編の頭へあみとめると、一片の花瓣が出來ます。又鎖二十を編んで前と同じやうに長編の花瓣を編む。

四段――かう

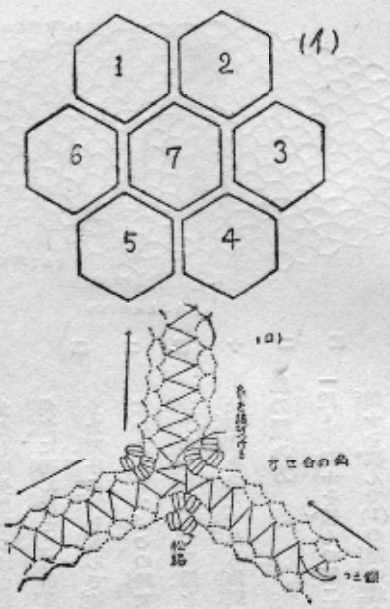


第二百十圖

花瓣の頭に短編で止めます。

五段――今短編でつけた所も鎖の所も第二百十圖のやうに、全部長編を入れて一廻りいたします。

六段――次の段からは鎖五ツと短編とで網の目を五段あみます。之は六角にするのですが鎖五ツの目が最初に四十二になりませんと六角になりませんから、若し數の都合が惡くなつて居りましても一目や二目はどうにもなりますから全體が六ツの倍數になるやうに注意して編みます。鎖編の六段目からは寫眞のやうに七ツ目、七ツ目に松編を一ツ宛入れます。そしてこの松編を五段いたしますと六角の形がハツキリと出來てまゐります。

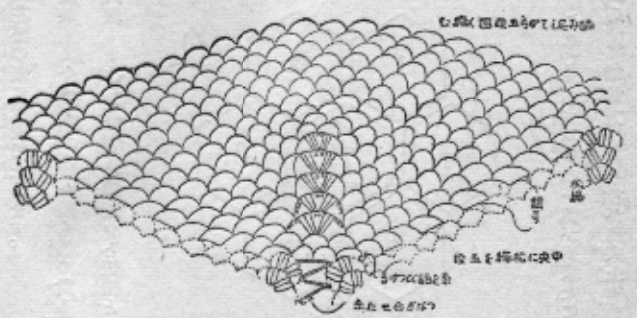


第二百十一圖

これでテーブル掛の一部が出來たことになります。これと同じものを七枚あみます。

つなぎ合せ方　七枚が出來上りましたら第二百十一圖(イ)(ロ)のやうに一枚を中心にして周圍六邊に一枚宛つなぎ

妻大圖



第二百十二圖

合せます。つけ方は、三ツの鎖と、短編とで二枚を代るがはるあみつけて行くのであります。

かうして全部をつけましても正しい六角形にはならず各片の間に三角形に凹んだところが出來ますから、この間をも第二百十二圖のやうな順序に針を運んで鎖と短編との網目で編み足して全體を丸い形にいたします。この時初めの五段だけには中央に松編を編みます。

以上のやうにして全體を編み足しましたら周圍を五段ほどぐる〳〵と波編をあんでから飾編にうつります。

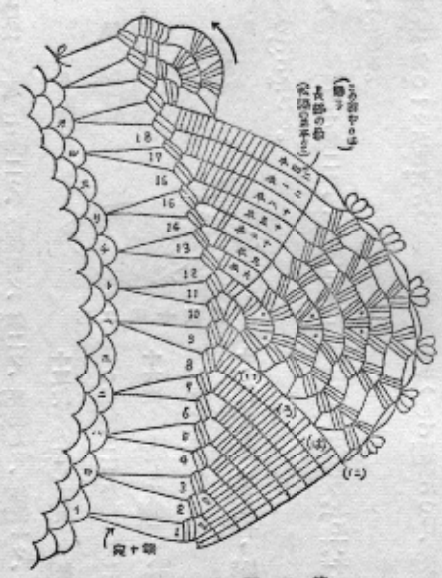
飾の編み方

一段——鎖十を編んで第二百十三圖のやうに(イ)に短編で編み止め、又鎖十を編んで(1)の鎖の端の目に長編三ツを入れ鎖二ツを編み同じところに長編三ツを入れます。

二段——裏返して鎖三ツ、長編三ツ、(前段松編の半分の上に)松編一ツ、鎖十で(ロ)に編み止める。

三段——返して鎖十、松編一ツ、つゞいて長編六ツ。

四段——返して鎖三ツ、長編九ツ、松編一ツ、鎖十で(ハ)に止める。



第二百十三圖

五段——返して鎖十、松編一ツ、長編十二。

六段——返して鎖三ツ、長編十五、松編一ツ、鎖十で(ニ)に止める。

七段——返して鎖十、松編一ツ、長編十八。

八段——返して第三ツ、長編二十一、松編一ツ、鎖十で(ヘ)に止める。

九段——返して鎖十、松編一ツ。

十段——返して鎖三ツ、松編一ツ、鎖十で(ト)に止める。

十一段——返して鎖十、松編一ツ、鎖二ツ編み、次は、鎖三ツの中に長編三ツ、鎖一ツ、長編三ツ、鎖一ツ、長編三ツ入れます。(第二百十四圖參照)、鎖二ツして八段目の長編の(い)の上に止める。

十二段――返して鎖二ツ、松編二ツ、鎖二ツ、長編三ツ、松編一ツ、鎖十でチ）に止める。

十三段――返して鎖十、松編一ツ、長編六ツ、鎖二ツ、松編三ツ、（中の松編は二ツの松編）鎖二ツでろ）に止める。

十四段――返して鎖二ツ、松編四ツ、鎖二ツ、長編九ツ、松編一ツ、鎖十でリ）に止める。

第二百十四圖

十五段――返して鎖十、松編一ツ、長編十二、鎖二ツ、松編五ツ、（中央の松編は二ツ松編）鎖二ツでは）に止める。

十六段――返して鎖二ツ、松編六ツ、鎖二ツ、長編十五、松編一ツ、鎖十でル）に止める。

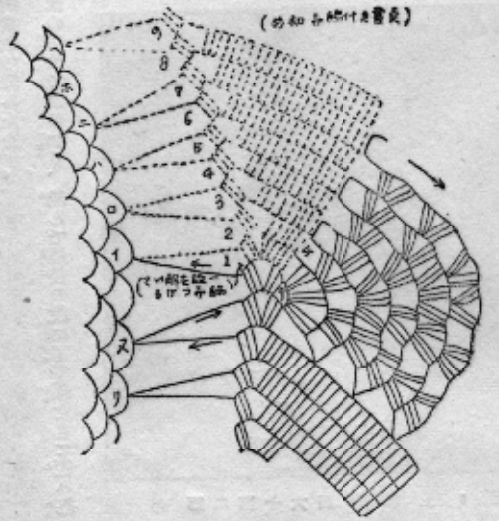
十七段――返して鎖十、松編一ツ、長編十八、鎖二ツ、松編六ツ、鎖二ツでに）に止める。

十八段――返して鎖二ツ、丁字編三ツ宛（前段の松編全部の上に丁字編をあむ）長編二十一、松編一ツ、鎖十でオ）に止める。

以上で飾の一ツが出來たので、これを繰りかへして周圍につけ、最後は模樣を編み始めとつなぎ合せます。

接ぎ方　第二百十五圖のやうに矢の方向に編みます。同圖の點線は、編み初めを現はし、實線は最後の編み終りを現はします。

それで實線の下の方から矢の方向に編み上つて、（ヌ）から鎖を十編んで松編一ツ、鎖三ツ編みます。そこで編み初めの點線の長編の根元の鎖編と、（イ）につけてある鎖編十とを拂いてそこで前段の松編の中央に長編を一ツ編み、今鎖を解いた長編一ツの根元へ目を通して引き出し、前と同じ處に長編を一ツ編んで、又次の長編の根元へ目を通して又同じ所に長編をいたします。鎖一ツ編んで長編の根元を四ツ通して鎖一ツ編み、殘り三ツの長編の根元を通して同じ所に長編三ツを編みます。鎖十を編んで（イ）の部につけて糸を切ります。



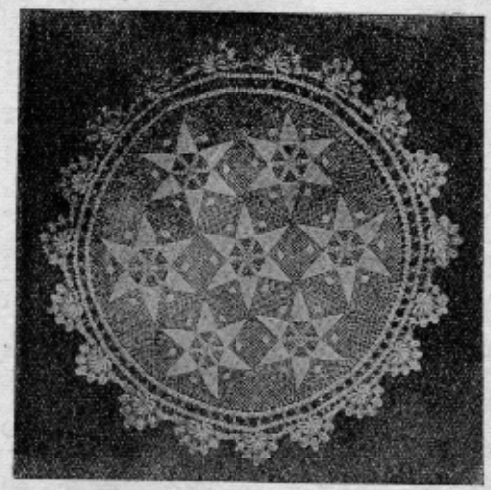
第二百十五圖

次は長編と長編の間の模樣を編みます。首た糸を（チ）の處に付けて、鎖二ツあみ、點線と實線の間の鎖三ツの中に長編三ツを入れ、鎖一ツ、長編三ツ、鎖一ツ、長編三ツ、鎖二ツあんで實線の長編に付ける事は第二百十五圖と同じであります。次は鎖二ツあんで前後の鎖二ツの中に松編をあ

み、鎖二ツ編んで次の鎖二ツの中に、松編を編み、鎖二ツして(チ)の上の段に引ぬきで付け、さらに次の上段まで引抜きで編み上ます。

此の方法で圖の如く、編んで最後の段に丁字編をして編み終ります。

桔梗形テーブル掛



第二百十六圖　桔梗模様六角形のものを七枚編んで

材料　新カタン二十番十把。

用具　レース用鉤針。

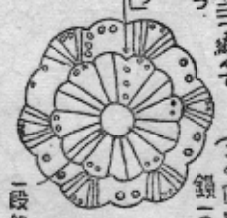
編み方　このテーブル掛は、菊花形テーブル掛と同じく、桔梗模様六角形のものを七枚編んで第二百十六圖のやうに並べてその間を鎖編でつなぎ合せ周圍にかさり編をいたします。

一段——鎖六ツ編んで輪にいたします。

二段——第一段の終りから鎖を三ツ編み、鎖六ツの輪の中に長編を二ツ編みます。次は「鎖二ツあ

んで同じ穴に長編三ツ編みます」括弧の中を五回繰り返して、全部で六ツの房となり、次は鎖二ツ編み、編み初めの鎖三ツの頭に引きぬきで止めます。更に長編二ツの上に引きぬきで止めます。(第二百十七圖參照)

三段——其處から鎖を三ツ編んで、前段の鎖二ツの中に長編三ツ、鎖二ツ、長編三ツ編みます。次に鎖二ツ編みます。次は「前段の鎖二ツの中央に長編三ツ、鎖二ツ、長編三ツ、編みまして、次に鎖二ツ」を編みます。「」の中を六回繰り返して、編み初めの鎖三ツ目の頭に引きぬきで止めて、更に次の長編二ツの上に引きぬきでとめます。

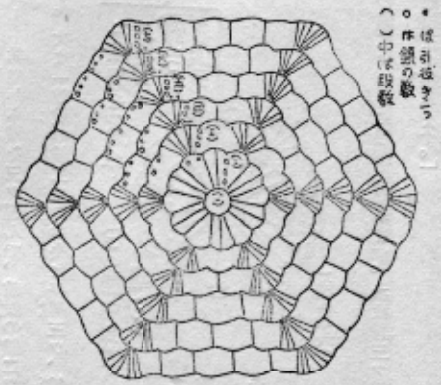


第二百十七圖

四段——其處から鎖三ツ編みまして、前段の松編の中央の鎖二ツの中に長編二ツ、鎖二ツ、長編三ツの松編を編みます。次は「鎖三ツあみまして、前段の松編と松編の間の鎖二ツの處に長編を一ツ編みます。次は鎖三ツ編みまして、松編の中央の鎖二ツの處に松編を編みます。次は鎖三ツ編みまして、松編と松編の間の鎖二ツの處に長編一ツ編みます。次は鎖三ツ編みます。」

「」の中を繰り返し全部で六回編みましたら編初めの鎖三ツ目の頭に引きぬきで止め、更に長編二ツの上に引きぬきをします。(引きぬきの場合は第二百十八圖參照)

五段――鎖三ツ編みまして、前段の長編と長編の間の鎖二ツに松編を編みます。次は鎖三ツあみまして、前段の松編と長編との間に長編一ツ、鎖三ツを編みまして、次は長編と松編との間に長編一ツ、次は鎖三ツ、編みまして「前段の松編の中央に松編を編みます。次は鎖三ツ編みまして、前段の松編と長編との間に長編一ツ、次は鎖三ツあみまして、長編と松編との間に長編一ツ、次は鎖三ツ編みます。」次は「レ」の中を繰り返して全部で六回編み、初めの鎖三ツの頭に引きぬきで止めます。更に長編二ツの頭を引きぬきで止めます。

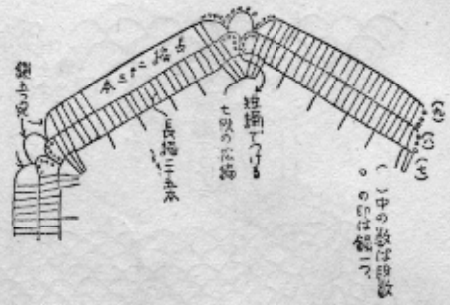


第二百十八圖

六段、七段――は松編と松編の間は鎖三ツ長編一ツを一ツづゝ増して編みます。

八段――第二百十九圖のやうに鎖三ツ編みまして、次は「松編の中央から、次の松編の長編三ツ目まで、長編一目に一ツ、鎖目一目に一ツづゝの長編を編みます。次は鎖五ツ編みまして、前段松編の中央に短編でとめます。次は鎖五ツあみまして」「レ」の中を一廻りいたします。

最後は鎖五ツあみ、前段の鎖二ツの中に短編でとめ、鎖五ツ編んでから編み初めの鎖三ツをとばして、次の長編の頭に引きぬきで止めます。



第二百十九圖

九段――次は鎖三ツ編み、前後の長編の上に長編を編みますが、最後は長編一ツ編殘しします。

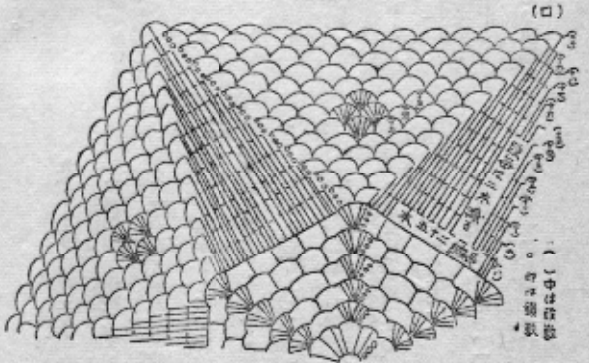
次は鎖五ツ編んで、前段の鎖五ツの中央に短編で止めます。次も鎖五ツ編みまして、前段の鎖五ツの中央に短編で止めます。

次は鎖五ツ編んで「最初の長編一ツ」とばして二ツ目の長編の上から前段の長編の上に長編を編みます。

最後は長編一ツ編殘しします。次は鎖五ツ編みまして、前段の鎖五ツの中央に短編で止め、次も鎖五ツ編んで、前段の鎖五ツの中央に短編で止めます。」

次は鎖五ツ編んで、「レ」の中を一廻り繰り返します。

最後は鎖五ツを二回編んで短編でとめ三回目の五ツ鎖を編んで編初めの鎖三ツをとばして次の長編の上に引きぬきで止めます。



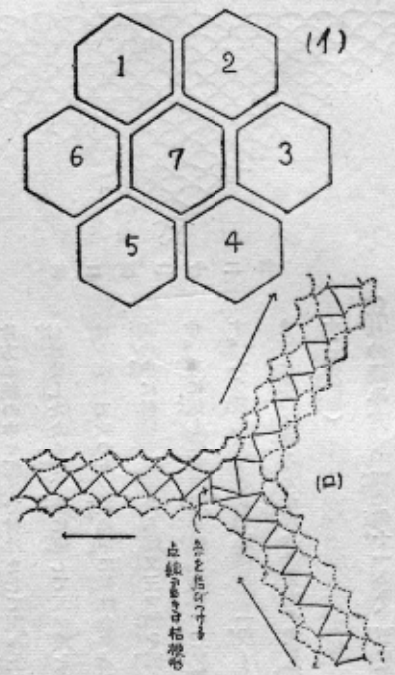
第二百二十圖

十段——鎖三ツ編んで、前段の長編の上に長編をあみますが、編初めと編終りは長編を一ツあみ殘します。次は鎖五ツあみまして、前段の鎖五ツの中央に短編で止めます。

十一段——十二段とも同じ編み方を繰り返しますが、長編が二ツづゝへつて、波編が增す事になります。

十三段より十五段迄は波編の中央に松編を入れます。其の入れ方は、十二段目の波編の中央の短編で付けた處に長編を五ツ入れて、次の鎖の中に短編で付けます。十四段の時は今の松編の兩方の短編の目に入れて、十三段の松編の頭に短編で付ける事になります。十五段の松編は十三段の中央に入れるのであります。(第二百二十圖(イ)(ロ)參照)

十六段より十九段は九段と同じやうにして鎖の處を增して長編をへらします。

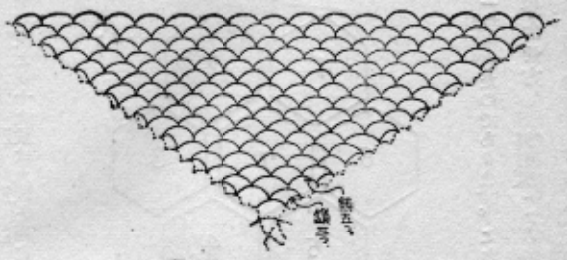


第二百二十一圖

二十段——鎖八ツあんで、前段の鎖五ツの中央に短編で止めます、次から鎖五ツの波編を十四回繰り返して、次は鎖五ツあみ前段の長編三ツの中央に長編一ツあみます。以上を六回繰り返して糸を止めます。これで柚梗形が一枚出來たのであります。これと同じものを七枚作ります。

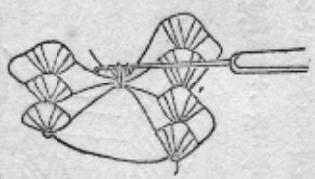
接ぎ合せ方　柚梗形一ツ〳〵を接ぎ合せるには、第二百二十一圖(イ)の角の部分に糸を付けて、其處から(ロ)圖に示す如く鎖を三ツあみ、第二の柚梗形の同じ部分に短編で止めます。この方法で七ツを(イ)圖のやうな配置に接ぎ

合せます。つなぎ終りますと六角形のものが出來上ります。これから六角のくぼみを鎖で編みながら埋めて行くのであります。其の編み方は六角のつぎ目の終りの目に糸を付け、鎖五ツをあみ、次の目〳〵と五ツ鎖で三回付けてゆきます。次に三ツ鎖をあんで片方の鎖の中に短編で付けまして編み上るのであります。三ツ鎖をあんで付けましたならば、裏に返して五ツ鎖をあみ、今三ツ鎖を編んで付けた處はとばして次の五ツ鎖の中に付けます。これを繰り返して、片方の六角の鎖の中に付けましたならば又三ツ鎖を編んで次の目に編み上るのであります。裏に返して五ツ鎖を編んでは、三ツ鎖の處はいつもとばす事になります。かう致しますと角のくぼみが一段〳〵と編み上りまして、十七段編みますと角のくぼみが平になり全部の角を編んで丸くいたします。（第二百二十二圖參照）



第二百二十二圖

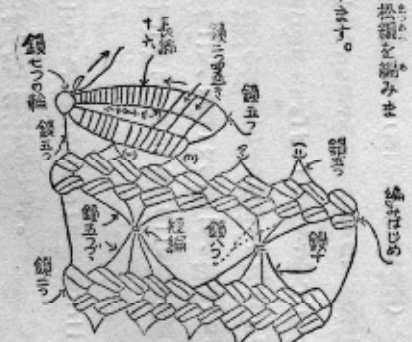
飾りの編み方　別に鎖十一あみ、更に鎖を三ツあみます。次は三ツ戻つて四ツ目に長編一ツ、鎖二ツ、長編三ツの松編を編みます。次は鎖を十あみまして、最初の鎖十一編みました内の十迄とばして十一目に長編三ツ、鎖二ツ、長編三ツの松編をあみます。


第二百二十三圖

「裏返して鎖五ツあんで前段の松編の中央の鎖二ツの中に、松編を編みます。次は鎖八ツあんで、次の松編の中央の鎖二ツの處に又松編を編みます。次は裏返して鎖五ツ編み、前段の松編の中央に松編をあみ、又八ツ鎖編して次の松編の中央の松編を編む。裏返して、「鎖五ツ編み、前段の松編の中央に松編をあみ次に鎖五ツして、前段の鎖十、八、八、の部合三本の鎖を中に入れて第二百二十三圖のやうに短編を編みます。其處から鎖五ツ編みまして次の松編の中央に松編を編みます。」「」の中をもう一回繰り返して編みます。

次は鎖五ツ編んで、前段の松編の中央に松編を編みます。次は鎖十編みまして、次の松編の中央に松編を編みます。次は第二百二十四圖のやうに鎖を十二編みまして、戻つて七ツ目の鎖目に短編一ツ編みます。

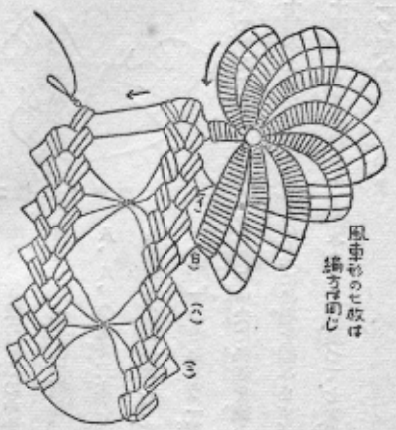
次は其處から鎖を六ツ編んで、前の松編の横(イ)の鎖五ツの中央に短編で止めます。又其處から鎖六ツ編み、次の鎖五ツ(ロ)の中央に短編で止めます。其處から鎖三ツ編み、裏に返し今編んだ鎖六ツ



第二百二十四圖

の中に長編八ツ、次の鎖六ツの中に長編六ツ編みまして、鎖七ツの輪の中に短編で止めます。

次に其處から「鎖十二編み、前段の長編の十一目に長編一ツ、鎖二ツ編み、前段の長編を一目飛ばして二ツ目に長編を編み、鎖二ツ編んで、長編の終りに長編一ツ編みます。」



風車形の二枚は編方同じ

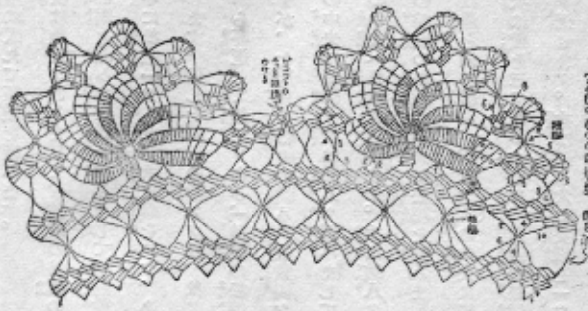
次は裏に返して鎖五ツ編み、前段の二ツ目の長編の上に長編一ツ、鎖二ツ、長編一ツ、鎖二ツ、長編一ツ、鎖二ツを編み、前段の鎖十二の中に長編十六編んで、鎖七ツの輪に短編で止めます。「」の中を七回して、次は最初の鎖十二あみ七ツ目を輪にした處りの五ツの鎖編の中に長編六ツをあみます。（第二百二十五圖參照）

第二百二十五圖

次は前段の松編の中央に松編を編みます。鎖八ツ編んで前段の松編の中央に松編をあみ、裏に返し、鎖五ツ松編の中央へ松編、鎖八ツ編みまして、前段の松編の中央に松編を編み、次は第二百二十六圖のやうに鎖二ツ編み、十六の長編の八ツ目に短編で止めます。其處から鎖二ツあんで裏に返し、前段の松編の中央に松編、次は鎖五ツあみまして、前と同じやうに十、八、八、の三本の鎖を中に入れて短編を編みます。

次は鎖五ツあみまして、前段の松編の中央に松編をあみます。裏にかへし鎖五ツあみ前段の松編の中央へ同樣に松編を編み次は鎖十編みまして、前段の松編の中央に松編を編みます。次は鎖六ツあみ「風車形の角の鎖五ツの中に松編一ツ入れ、次は鎖を六ツ、あみます。」そして次々と風車形の角の鎖五ツの中へ「」の中を七回繰り返します。但し七回目の鎖六ツは、はじめ二ツあんだ時、前に編みました鎖五ツの（八）の中に短編で止めます。其處から裏返して鎖三ツあみ、「前段の松編の中央に松編をあみ、次に鎖八ツ編みます。」「」の中を七回繰り返しますが、七回目の終りの鎖八ツは鎖四ツ編み、前段の鎖の中央に短編で止めます。次は鎖四ツあんで、前段の松編の中央に松編、次は鎖八ツ編みまして、前段の松編の中央に松編をあみます。裏に返し、鎖五ツあみ、前段松編の中央へ松編をあみます。次に鎖八ツ編み次の松編の中央へ松編をあみ、次は鎖を八ツ編みまして、「風車形の方の前段の松編の中央に松編を編みまして、次に鎖を八ツ編みます。」「」の中を七回繰り返します。但し七回目は鎖を四ツ編み、鎖五ツ（二）の中央に短編で止めます。

次は鎖を三ツあみまして、前段の松編の中央に「長編一ツ、長編の先に鎖三ツのピョット」「」の中を四回繰り返します。次は同じ穴に長編を一ツ編みまして、其處から鎖五ツ編み、前の鎖三本を中に入れて第二百二十六圖の仕方にて短編を編みます。次は鎖を五ツ編みます。」「」の中を七回繰り返します。但し七回目の終りは鎖



第二百二十六圖

三ツ編み、前段の鎖の中央に短編でとめます。

次は鎖を三ツ編みまして、前段の松編の中央に松編をあみます。

「次は鎖を五ツ編みまして、鎖三本を中に入れて、短編を短ます。次は鎖五ツ編みまして、松編の中央に松編を編みます。」以上の飾り編を繰り返して、模様が十六出來るまでいたします。(第二百二十六圖參照)

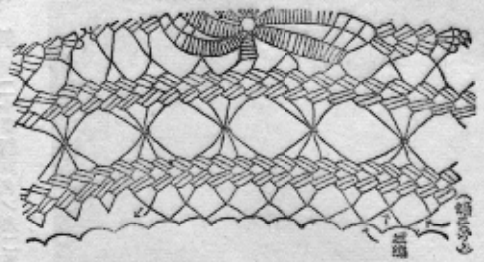
此の時二ツ目の風車の最初の角の長編みにピコットを付ける時に、二目だけ前に出來た風車の終りのピコットに短編で付けてから先へ編み進みます。此のやうにして二と三、三と四の風車の兩端の角々につなぎ合せて十六の風車を輪にいたします。

十六目の最後の風車形の終りの段が編ましたら鎖三ツあみ前段の鎖八ツの中央に短編で止め鎖三ツ編んで松編の中央に長編三ツ鎖一ツ編みます。

其處で飾編みの、最初の編み初めと接ぎ合せます。

接ぎ合せ方

編み初めの鎖を切つて解いてしまひますと松編の根本がバラ〳〵になりますから中側の松編の根元の目を拾つて其の中へ編み續きの鎖の目一ツを通して叉鎖一ツあみ前段の松編の中央へ長編を三ツ入れます。鎖五ツ編んで十、八、八、三本の鎖を中に入れて短編みでとめ叉鎖五ツ編んで、最後の松編みの中央に長編三ツ鎖一ツ編みます。そして叉端の松編の根元のバラ〳〵の目を拾つて其の中の鎖一ツを通し叉鎖一ツを編んで松編の中央に同じ穴に長編を三ツ編み鎖五ツ編んで根本の目を拾つた松編の横角へ引抜で止めます。



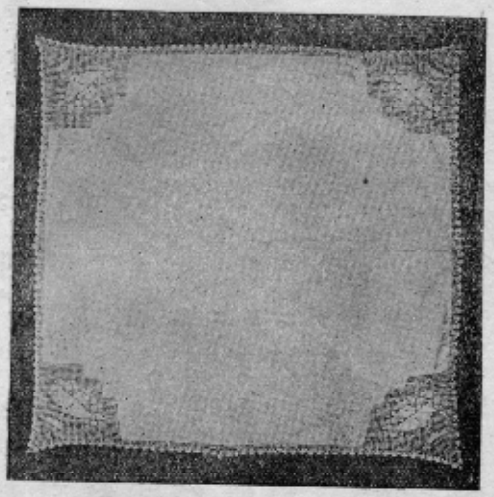
第二百二十七圖

飾りの附け方

これで周圍の飾りが出來ましたから前に拵へておきました桔梗形七枚を接ぎ合せた圓の周圍につなぐのであります。その仕方は第二百二十七圖のやうに、飾編みの內側の五ツの鎖の中央に糸をつけて鎖三ツ編み圓の波形の鎖の中央に短編みで止めます。次に鎖編を二ツ編んで飾編みの內側の五ツの鎖に短編で止め鎖三ツ編んで次の波形の鎖に短編みでとめます。これを繰返して一廻り付けるのでありますが飾編みの五ツの鎖の數よりも圓の周圍の波形の鎖の方が數が多くありますから所々で適當に波形の鎖を飛ばせて付けます。

盛花模様テーブル掛

材料　二十番新カタン糸二把。



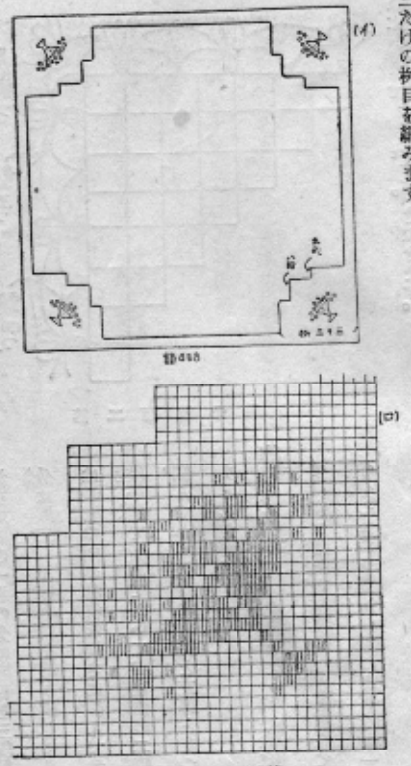
第二百二十八圖　出來上り圖

用具　レース用鉤針。

編み方　中央に麻布又はキヤラコのやうな布を入れその周圍につける飾り編でありまして、第二百二十八圖のやうに、四隅に盛花模様をあらはし、その間を拱目編でつなぐのであります。

初め第二百二十九圖(イ)のやうに鎖を四百五十八編み、裏に返して四ツ目に長編を一ツ編み、「鎖二ツを編んで目を二ツとんで、三ツ目に長編一ツ(拱目編)編み」ます。これを繰り返して鎖の終るまで編み、この拱目編を三段編みます。

この三段の拱目はテーブル掛の周圍の緣になつて角の拱目三十三の中に模様編をいたします。(段の變り目ではいつも鎖五ツを編みます。)三、四、五段は三十三だけの拱目を編みます。



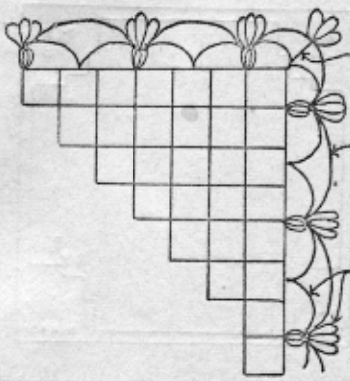
第二百二十九圖

六段——端から拱目九ツ編み、第二百二十九圖(ロ)の圖案にならつて十目の拱の中に長編を二ツ入れますと兩方の長編とで四ツになります。

次は九ツ置いて、長編四ツ編みます。あとは拱目で十三編んで端から丁度三十三拱の處まで編みます。こゝからは一隅だけを編むことになりますから、二十三の拱目に模様を入れながら裏表繰り返してあむことになります。

七段——拱目が十出來ましたら、拱目二ツだけ長編に編みます。

次よりは十一模目が出來ましたなら、二ツだけ長編を增へ、殘りは八ツの模目編にします。以下このやうに圖案に合せて、模目編と長編とで編み上げます。かうして第二百二十九圖ロ）の一隅の模樣編が出來ましたら周りになる細い部分を編みつけます。



第二百三十圖

最初周圍の一邊の分に模目を三段編みましたから、左右の分は縱三目だけ模目を繰り返して八十四段編んで、次からは最初の隅の模樣を逆さに編んで參ります、但し最初の三段手前で留めておいて、左側の二隅と縱の三目の模目とを編んでから最後に右側と左側とをつなぐ模目を三段して終りとします。

飾りの編み方　角でない中途の模目の中程から糸を付けて、四ツ鎖を編み長編一ツとばして次の長編の頭に長編の半分づゝぬいたもの、つまり針に一目づゝ殘したものを二回入れて最後に一度に引きぬきます。

四ツ鎖を編んで長編一ツとばして次の鎖の中に短編で付けます。（第二百三十圖參照）、角の處は長編一ツとばさずに次の五ツ鎖の中に短編で付けます。この段はこれを繰り返して終りに、始めの鎖三ツの元の目に引きぬき止めにいたします。これで飾の一段が終りました。

次は、一段の終りから二段に移る所は、前段の鎖四ツの目を引きぬきにして、前段の長編三ツ一度に引きぬいた處まで編みまして、鎖四ツを編み、長編三ツの上に短編で付けます。鎖四ツ、同じ所に短編でつける、これを三回繰り返しますと一ツの飾編が出來るのであります。

次は五ツ鎖を編んで、次の長編三ツ一度に引きぬいた處に、短編で付けます。又四ツ鎖を編み元の目に三回付けこれを繰り返します。

角の處まで編みましたら、前段が短編になつて居りますから、短編の上に長編を一ツして、鎖四ツ編んではこれを前と同じく三回付けます。そうして五ツ鎖を編んで次の長編三ツ一度に引きぬいた處に付けます。

これで飾編全部が出來上ります。出來上りましたら良く四方の寸法を調へてアイロンをかけます。

キヤラコでもポプリンでも好みの布を平に置き、其の上に出來上りのレース飾りをのせて、假りに蝶をかけてこの上からミシン又は手縫にいたします。若し汚れた處でもありましたら、一度洗濯をして澁糊を付け半乾きの時にアイロンをかけて使用いたします。

このテーブル掛は、第二百二十九圖ロ）のやうに菱目（方眼紙）の中に盛花模樣を現はしたものでありますが、こ

の外どんな模様でも好みの図案を方眼紙に書いて、模様の部分を長編にすれば種々の図案が自由に編めます。

春向ショール

第二百三十一圖　出來上り圖

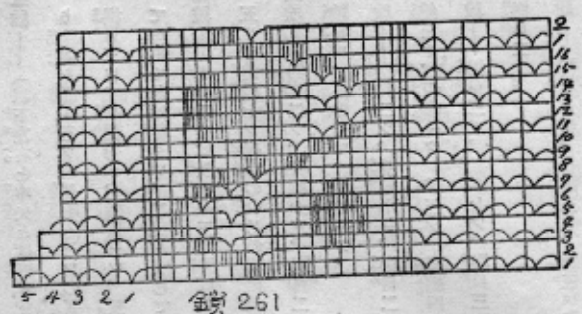
材料　編レース（アナ糸）二百五位。

用具　レース用鉤針。

編み方　全部長編と鎖編の應用であります。

先づ鎖を二百六十一編みます。（内三ツは次段にうつる爲めの分で、以下いつも裏返して戻る時は鎖三ツ編んで次の段にうつるのです。

一段——鎖三ツ戻つて四ツ目に長編一ツ、鎖三ツして下の鎖二目を飛ばして三ツ目に短編二ツ。又鎖四ツして下の鎖二目を飛ばして三ツ目に長編一ツ。これを繰り返し五回、つまり短編が五ツと長編が五ツ出來ます。次は下の



第二百三十二圖

鎖二ツ飛ばして長編を三ツならべ、次に鎖二ツ、長編一ツの辨目編を六回します。つゞいて長編を十五、辨目編を六回、長編を三ツ編んで、それから初めの編方（鎖三ツして短編、鎖三ツして長編一ツの編方）を十四回繰りかへし、長編三ツ、辨目六ツ、長編十五、辨目六ツ、長編三ツ、して最初の編方五回して二段にうつります。（この模様はすべて初めの模様と同じで向き合ひになるやうに編めば宜しいですから圖は半分省略いたします。（第二百三十二圖參照）

二段——鎖三ツして根元へ長編一ツ、鎖五ツ、長編一ツ。（前段の一ツの長編の上へ）これを繰り返して五回、次に長編三ツ。（この三ツの長編は各段とも同じで、すつと終りまで通します）辨目八ツ、長編三ツ（一段の長編十五の中央に）を編み、それから鎖三ツして二目とばして短編一ツ、鎖三ツして二目とばして長編七ツ、又辨目四ツして長編三ツ（この長編も各段とも同じにすつと終りまで通します）を編んで、初めと同じ五ツの鎖と一ツの長編を十四回します。これから先は、前の模様と向き合ふやうに編んで

次の段にうつります。（第二百三十二圖寫眞參照）

三段——（以下左右と中央とは終りまで同じ編方を繰り返すのですから、說明を省きまして、模樣の部分だけつまり全體を通す三ツの長編と三ツの長編との間だけの說明になります。）

拱目三ツ、長編七ツ、拱目三ツ、長編三ツ、鎖五ツ、前段長編七ツの初めの目に長編一ツ、鎖三ツ、二目とばして短編で付け鎖三ツ、二目とばして長編七ツ、拱目二ツ。

四段——拱目二ツ、長編十三、拱目二ツ、長編三ツ、鎖三ツ、前段五ツ鎖の中に短編一ツ、鎖三ツ、長編一ツ、鎖五ツ、前段七ツ長編の初めの目に長編一ツ、鎖三ツ、二目とばして短編一ツ、鎖三ツ、長編四ツ、拱目一ツ。

五段——拱目二ツ、長編十三、拱目二ツ、長編三ツ、鎖三ツ、短編一ツ、鎖五ツ、長編一ツ、鎖三ツ、短編一ツ、鎖三ツ、長編一ツ、鎖五ツ、長編四ツ、拱目一ツ。

六段——拱目二ツ、長編十三、拱目二ツ、長編三ツ、鎖三ツ、短編一ツ、鎖三ツ、長編一ツ、鎖五ツ、長編一ツ、鎖三ツ、短編一ツ、鎖三ツ、長編四ツ、拱目一ツ。

七段——拱目三ツ、長編七ツ、拱目三ツ、長編三ツ、鎖五ツ、長編一ツ、鎖三ツ、短編一ツ、鎖三ツ、長編七ツ、拱目二ツ。

八段——拱目八ツ、長編三ツ、鎖三ツ、短編一ツ、鎖三ツ、長編七ツ、拱目四ツ。

九段——拱目六ツ、長編十五、拱目六ツ。

十段——拱目四ツ、長編七ツ、鎖三ツ、短編一ツ、鎖三ツ、長編三ツ、拱目八ツ。

十一段——拱目二ツ、長編七ツ、鎖三ツ、短編一ツ、鎖三ツ、長編一ツ、鎖五ツ、長編三ツ、拱目三ツ、長編七ツ、拱目三ツ。

十二段——拱目一ツ、長編四ツ、鎖三ツ、短編一ツ、鎖三ツ、長編一ツ、鎖五ツ、長編一ツ、鎖三ツ、短編一ツ、鎖三ツ、長編三ツ、拱目二ツ、長編十三、拱目二ツ。

十三段——拱目一ツ、長編四ツ、鎖五ツ、長編一ツ、鎖三ツ、短編一ツ、鎖三ツ、長編一ツ、鎖五ツ、長編三ツ、拱目二ツ、長編十三、拱目二ツ。

十四段——拱目一ツ、長編四ツ、鎖三ツ、短編一ツ、鎖三ツ、長編一ツ、鎖五ツ、長編一ツ、鎖三ツ、短編一ツ、鎖三ツ、長編三ツ、拱目二ツ、長編十三、拱目二ツ。

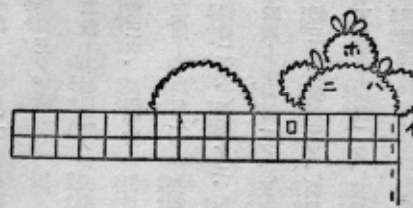
十五段——拱目二ツ、長編七ツ、鎖三ツ、短編一ツ、鎖三ツ、長編一ツ、鎖五ツ、長編三ツ、拱目三ツ、長編七ツ、拱目三ツ。

十六段——拱目四ツ、長編七ツ、鎖三ツ、短編一ツ、鎖三ツ、長編三ツ、拱目八ツ。

十七段——この段から第一段と同じになりますから一段から十六段までを繰り返して、總丈を一米十五糎位編んで

で止めます。

飾の編み方　兩端共挽目編を二三段編み、其の上へ、第二百三十三圖のやうな飾をいたします。



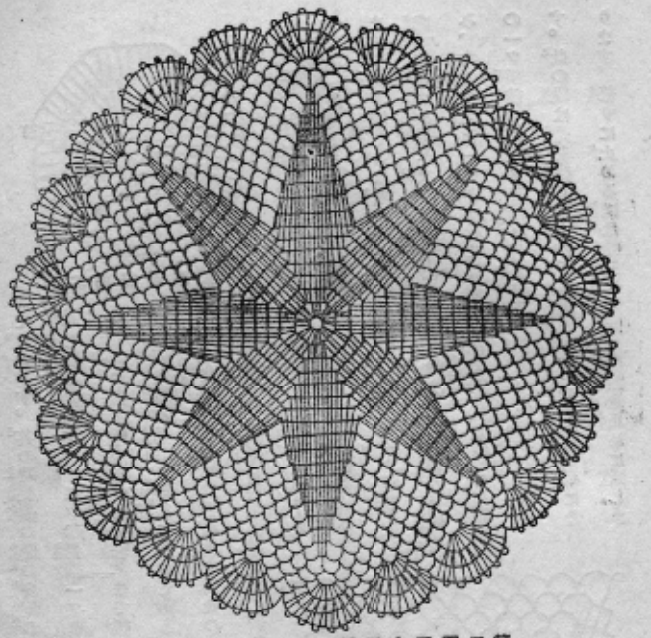
第二百三十三圖

先づ(イ)に糸をつけて(ロ)までの間へ短編を十三編み、そこから鎖十五編んで初めの(イ)に編みつけ、この鎖の上を戻つて(ハ)までの間に短編を五ツ編みます。

それから又鎖を五ツ編んで(イ)に止め、この五ツの鎖の上に五ツの短編を編んで(ハ)にかへります。こゝで鎖四ツでピコットを作り、つゞいて(ニ)までの間に五ツの短編をいたします。今度は(ニ)から鎖七ツを編んで(ハ)に止め、又短編で戻つて(ホ(中央))でピコット三ツをつくり、つゞいて(ニ)まで短編をあみ、又一ツピコットを作り、なほつゞけて短編を五ツして(ロ)にまいります。次に(ロ)から鎖を五ツ編んで(イ)にかへり、又この鎖の上に短編をして、(ロ)にかへります。

以上で一ツの飾は出來上るのですから、以下これを繰りかへして幅全體につけます。若し全體の幅で數の具合が悪いやうな場合は適宜目立たないやうに加減いたします。

桔梗形花瓶敷



第二百三十四圖　出來上り圖

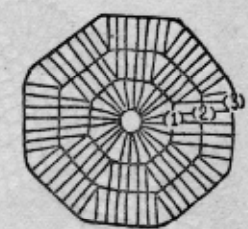
材料　レース糸一玉。

用具　レース針一本。

編み方　中央から丸く編み、編みながら桔梗の花の形を編みまして周圍に簡單な飾りを付けます。

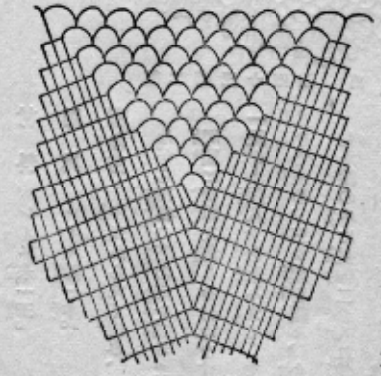
一段——鎖八ツを編み丸くして引抜きで止め、三ツ鎖を編み、今丸くした輪の中に長編二ツ入れ鎖共三ツに立します。鎖二ツして長編を同じ處に三ツ入れます。是を八回繰り返して始めの鎖三ツの頭に引抜きで止めます。

二段——三ツ鎖をなし、前段の長編の上に一目に一ツづゝ長編を入れ



第二百三十五圖

て行きます。其の時長編の頭の向側の糸をすくひ筋編にします。前段の鎖二目の處は長編一ツ、鎖二ツ、長編一ツを入れ次よりは長編一ツの上に長編一ツづゝ編みこれを繰りかへして終りまで編んで初めの鎖三ツの處まで編みます。終りの所は編み始めが鎖共に四ツしかありませんので、鎖の中に長編を一ツ、鎖二ツして三ツ鎖の頭に止めます。此のやうに致しますと五ツづゝの長編が八ケ所出來ます。（第二百三十五圖參照）、此の編み方を繰り返して第二百三十六圖のやうに、始め輪にした鎖共に十段になるまで増してゆきます。十一段目よりは今迄増した目を二ツづゝ減しながら編みます。其の減し方は増す時と反對に長編の終りの一ツ手前の處で鎖五ツを編み次の鎖の中に短編で付けます。又鎖五ツ編み、次の長編を一ツとばして長編を續けて編み、前段の長編の一ツ手前で鎖五ツを編み、次の二ツ鎖の中に短編で付けます。此の段は是を繰り返すと丁度鎖の處が二ツ出來る事になります。終りに止める處は鎖三ツの頭に引抜き止めに致します。



第二百三十六圖

第二百三十七圖

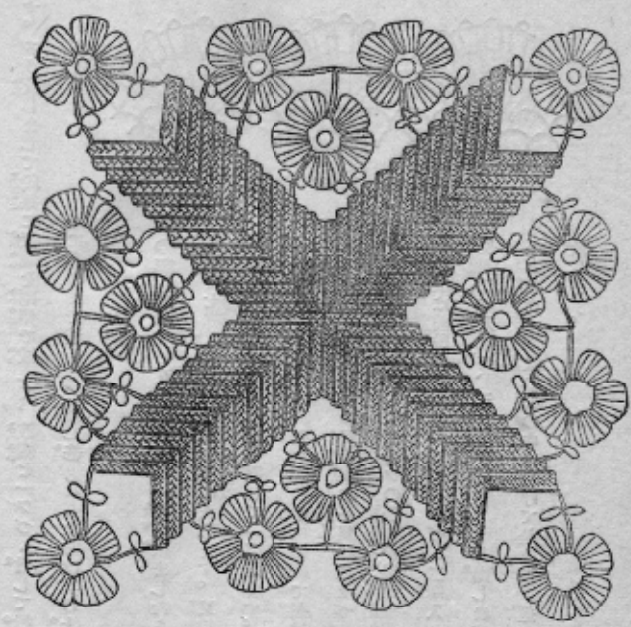
す。さう致しまして段毎に長編を兩側で減して、波編を一ツづゝ増して行きます。これを繰り返して長編が一ツになるまで減して、減し終りましたらば其の上を一段、五ツ鎖だけで一廻りして飾に移ります。

飾の編み方　五ツ鎖の處が一周出來ましたら第二百三十七圖のやうに次の鎖の中に長編を七ツ入れて次の鎖の中に止めます。又鎖五ツを二回して次の鎖の中に七ツの長編を入れます。これを繰り返して一周します。

次の段は前に長編の時五ツ鎖の中に短編で付けた處の一ツ手前の鎖の頭に短編で付け次に前段の長編七ツの目全部に一目に二ツづゝ長編を入れ前後の波編の頭に短編でとめ、次に波編一ツして又七ツの長編の目に長編を二ツづゝ入れて一廻り編みます。

次の段は前段の長編の一目に一ツづゝ二回入れて鎖三ツを編んでピコットを出し、又長編二ツ入れて、三ツ鎖でピコットを出します。是を繰り返しますと六ツのピコットが出來ます。次の鎖の中に付けて是を繰り返して終りに短編の根元に引きぬき止めに致します。

矢筈模様花瓶敷



第二百二十八圖　出來上り圖

材料　白レース一玉、時色レース一玉、草色レース少量。

用具　レース編鈎針。

編み方　初め白レースで二十六の鎖をあみ、次の目より短編を一目に一ツづゝ入れて十二目まで編み、第二百三十九圖のやうに十三目に短編を三ツ入れます又次の目より一目に一ツづゝ入れて終りまで編みます。裏に返して鎖編（基礎編參照）をなし、目の向ふ側の目に短編を一目に一ツ入れて前段の三ツの中央の目に三ツの短編を入れて、次の目より一目に一ツづゝ入れて終りは一目殘して裏に返し、次の段に移ります。編み方は全部鎖編で、兩側は一目手前で後にもどり次の段に移るのであります。（第二百四十圖參照）是を繰り返して二十六段編みますと十三山出來る事になります。是を四枚編みます。この四枚の先のとがつた處をつき合せにして引ぬきで編み合せるのであります。（第二百四十一圖參照）

このやうにして四枚共接ぎ合せましたらば次は花の編方を致します。

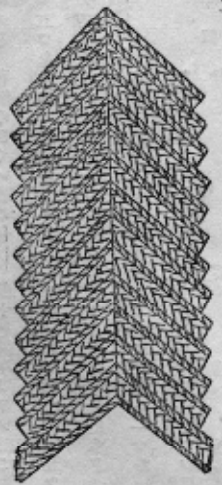
花の編み方　時色のレース糸で第二百四十二圖(イ)のやうに始め鎖六ツをあみ、輪にして其の中に短編を十目入れて引ぬき止めに致します。

（この圖を三回編む）

第二百三十九圖

「鎖三ツあみ、(ロ)圖のやうに次の目に長々編を五ツ入れ、鎖三ツあんで次の目に短編で付けます。」「　」の中を五回繰り返しますと一ツの花が出來ますから是を十六枚作つて置きます。

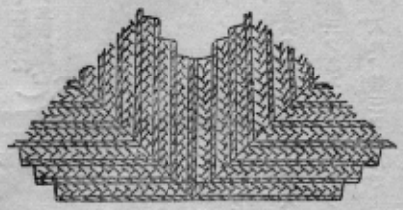
花のつなぎ方　花が十六枚出來ましたらば、



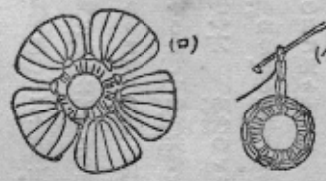
第二百四十圖

第二百三十八圖のやうに前に用意致しました草色の糸を、花辨のひくい處に付け、鎖十を編み、五ツ目にもどつて短編で付けますとピコットが一ツ出來ます。又鎖五ツをあみ、矢羽の編み初めの處に短編で付け、鎖五ツを編み、前のピコットの根元に短編で付けます。鎖五ツ編んでピコットを一ツ作り又鎖五ツを編み初めにもどつて引ぬきで止めて糸を切ります。次に花辨を一ツおいて糸を付け前と同じやうに鎖十をあみ、戻つて五ツ目に短編で付けてピコットを作ります。次に五ツ鎖を編み、矢羽の一方の端に短編で付け、鎖五ツを編み、前のピコットの根元に短編で付けて、又鎖五ツを編んでピコットを一ツ作り鎖五ツ編んで編み初めの花辨の間にもどつて引ぬき止めにして糸を切ります。是を矢の端に四ケ所付けるのであります。

次は矢の內側三角の所に三ツの花を付けるのであります。花辨のひくい處に草色の糸を付け、鎖十を編み、後にもどつて五ツ目に短編で付けます。五ツ鎖をあみ、矢羽の三角に凹んだ所から三山目に短編で付け、又鎖五ツをあみ、前のピコットの中に付けて、又五ツ鎖をあんで



第二百四十一圖



第二百四十二圖

花辨の編み初めにもどつて引ぬき止めにして糸を切ります。次に花辨を一ツおいて糸を付け、反對の側の三山目に前と同じ方法で付けるのであります。

次は第二百三十八圖のやうに今の花の兩側に付けるのであります。前の花のひくい處に糸を付けて、前の花の付け方と同じ方法で五山目に付けます。次に花辨一ツおいて三山目に付けるのであります。これを片一方も付けますと三枚が續ればなれになつて居りますから、この三枚を丁字形につなぎ合せます。

その仕方は草色の糸で鎖を七ツ編み、中の花の上の二枚の花辨の間に短編で付け、七ツ鎖を編み、鎖の編始めに短編で付け、花の右の方の花辨に短編で付け、又鎖七ツを編み前に短編で付けました同じ目に短編で付けます。

次は左の方の花辨に七ツ鎖で付けて、七ツ鎖で元の編み初めにもどります。

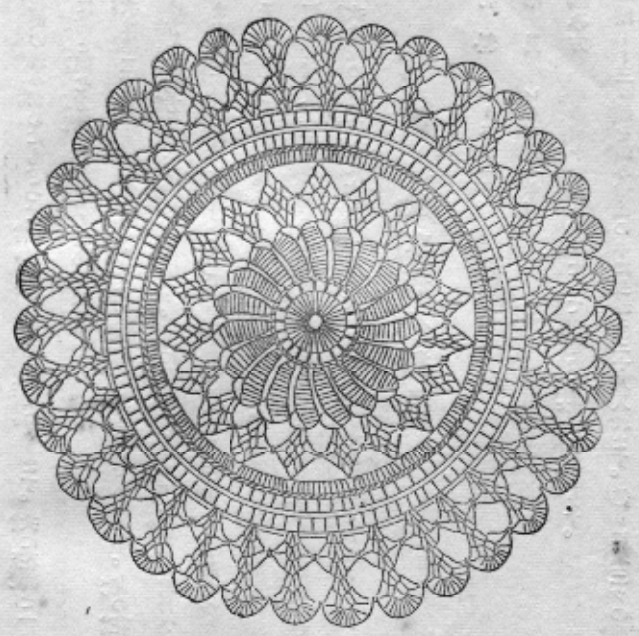
風車形花瓶敷

材料　レース糸一玉。

用具　レース針一本。

編み方　結め鎖十を編み、輪にして引きぬき止めに致します。

一段——三ツ鎖を編み、輪の中に長編を三十八入れます。終りに鎖三ツの頭へ引き抜き止めに致します。〈第二百四



第二百四十三圖　同糸上り圖

十四圖(イ)參照)

二段——鎖五ツあみ、前段の目を一目とばして二ツ目に長編を一ツ入れ、次は鎖二ツをあみ、二ツ目に長編を入れます。是を繰返しますと終りまでに長編が十九出來る事になります。終りは始めの五ツ鎖の三ツ目に引抜き止めにして糸を切ります。(第二百四十四圖(ロ)參照)

三段——鎖七ツを編み、(ロ)圖の矢印の處に短編で付け、裏に返して今の鎖の中に短編を一ツなし次は鎖を心にして長編を十二編みますが十二目の最後の長編を一ツだけ鎖の目の中に入れます。鎖五ツを編み、裏に返して長編の目を二目とばして三ツ目に長編を一ツ編み、七ツ鎖を編み、丸の次の長編の目に短編で付けます。又裏に返して今の鎖の中に短編を一ツ入れ、次よりは長編にして十二入れます。又五ツ鎖を編んで裏に返し三ツ目に長編を一ツ入れます。又七ツ鎖を編んで丸の次の長編の目に短編でつけるのであります。是を繰り返して終りに五ツ鎖をして長編の時に編始めの鎖の矢印の處に引抜きで付けて糸を切ります。(第二百四十四圖(ハ)參照)

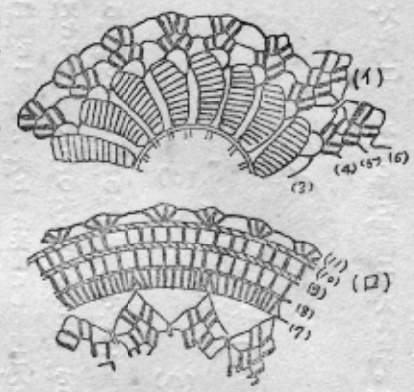
第二百四十四圖

四段——前段の五ツ鎖の中に糸を付け、三ツ鎖を編み、同じ處に長編一ツを入れ、鎖二ツ編み同じ處に長編を二ツ入れます。五ツ鎖を編み、次の五ツ鎖の中に長編を二ツ入れ鎖二ツあみ同じ處に長編二ツ入れます。此の段は是を繰返して終りは始め鎖三ツの頭に引抜き止めにします。

五段——前段から此の段に移る時に、糸を切らずに引抜をしながら長編二ツと二ツの間の鎖二ツの處迄糸を持つて來るのであります。さうして三ツ鎖をなし長編を一ツ入れ、鎖二ツをあみ同じ處に長編を二ツ入れます。四ツ鎖をあみ次の鎖二ツの中に長編を四ツ入れます。いつも四ツの長編の間には鎖二ツを編みます。終りには始めの鎖

三ツの頭に引抜き止めにして、又引ぬきで鎖二ツの所まで糸を持つて行き、次の段にうつるのであります。

六段——三ツ鎖をあみ、長編を一ツ入れて二ツ鎖をあみ同じ處に長編二ツ入れる、二ツ鎖をなし、四段と五段の鎖一を一緒にして短編で付けます。鎖二ツを編み、次の松編の中に長編を四ツ入れます。又二ツの鎖を編んで四段と五段の鎖を一ツにきとめて短編で付ける。是を繰り返して終りに鎖三ツの頭に引抜き止めに致します。更に二ツ鎖の處まで引抜きに致します。（第二百四十五圖イ參照）



第二百四十五圖

七段——第二百四十五圖（ロ）のやうに鎖七ツを編み、次の松編の頭に短編で付け、又鎖七ツを編み、次の松編の頭に短編で付けて繰り返します。

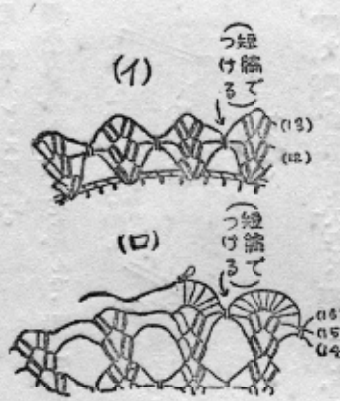
八段——三ツ鎖を編み、前段の七ツ鎖の中に長編を十一づゝ入れて一廻り編みます。終りは三ツ鎖の頭に引抜で付ける。

八段——四ツ鎖を編み、一目とばして長編を一ツ入れ、一ツ鎖を編み、一目とばして長編を一ツ入れます。これを繰り返して一周いたします。

十段——前段の長編と長編の間の鎖一ツの處に長編を一ツづゝ入れて、長編と長編の間の處へ一ツ鎖を編みます。

終りは始めの鎖四ツの三ツ目に引抜き止めに致します。

十一段——第二百四十六圖（ロ）のやうに鎖三ツを編み、鎖一ツの中に長編を二ツ入れ、二ツ鎖を編み同じ處に長編を二ツ（松編）入れます。四ツ鎖を編み、長編を三ツとばして一ツ鎖の處に松編を入れます。是を繰り返して終りは三ツ鎖の頭に引抜き止めに致します。



第二百四十六圖

十二段——此の段は前の段の松編の中に長編を四ツ入れまして、長編二ツと二ツの間には鎖を二ツ入れます。松編と松編の間の處には四ツ鎖を編みます。終りは引抜き止めにします。更に又松編の頭に引抜きで糸を持つて來て次の段にうつります。

十三段——鎖三ツを編み長編を一ツ入れ、鎖二ツを編み同じ處に長編を二ツ（松編）入れます。鎖二ツを編み十一段と十二段の鎖を一緒にして短編で付けます。是を繰り返して終りは引抜き止めで付けます。

十四段——十五段は第二百四十六圖（ロ）のやうに十三段の松編に重ねて行きます。

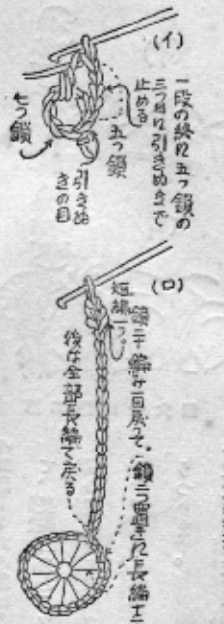
十六段——前段の松編の山に長編を九ツ入れ、鎖一ツして十四段十五段の鎖編を一緒に付けて出來上りとします。

菊形花瓶敷

材料　レース糸一玉。

用具　レース用鉤針。

編み方　中央に菊の花を編んで、周囲に飾り編をつける花瓶敷であります。



第二百四十七圖

一段——第二百四十七圖(イ)のやうに七ツ鎖を編み、輪にして引きぬき止めにします。

二段——始め五ツ鎖を編み、輪の中に長編を入れ、二ツ鎖を編み、同じ輪に長編を入れる、又鎖二ツを編んで同じ中に入れます。これを繰り返して始めの鎖と共に長編が十二出來るまで入れまして、終りに始めの五ツ鎖の三ツ目に引きぬきで止めます。

三段——第二百四十七圖(ロ)のやうに、鎖二十を編み、その鎖の次の目に短編を一ツ入れ、次よりは長編で終りまで編み、次の長編の頭に短編で付けます。又二十鎖を編み前と同じやうに始めの一ツは短編とし、次からは長編で

鎖の終るまで編みます。これを前段の長編の上に全部付けますから、丁度十二枚花瓣が出來ることになります。

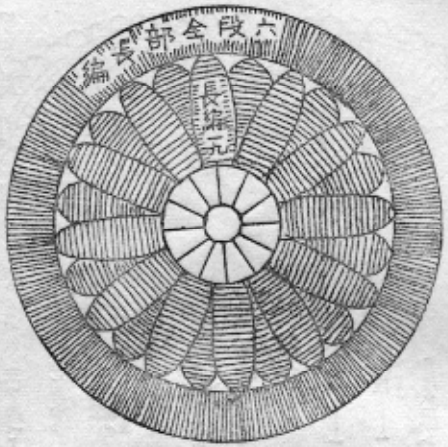
四段——前段の十二枚の後側に短編で付け、前と同じやうに二十の鎖で花瓣を作り、前段の後側に短編でつけて糸を切ります。

五段——第二百四十八圖のやうに、全部の花瓣を良く揃へて、上の花瓣の頭に糸を付け、鎖六ツを編み下の花瓣に短編で付ける。これを上下に付け乍ら一段廻りまして引きぬき止めにします。

六段——三ツ鎖を編み、前段の六ツ鎖全部と短編で付けた所もみな一日に一ツ宛長編を入れて廻ります。終りに、三ツ鎖の所に引ぬき止めにいたします。

七段——鎖五ツを編み、三目飛して短編で付ける。廻り全部の內二目おきの所を四ケ所程作り、後は皆三ツ置にしますと、丁度鎖の所が四十四出來る樣になります。

八段——以下十一段まで鎖五ツの波編にします。



第二百四十八圖

十二段――四十四の波編を十一に分けて、四ツ目毎に第二百四十九圖のやうに鎖三ツを編み、長編三ツ、鎖二ツ、長編三ツを同じ所に入れ、三ツ鎖で次の鎖に付ける。長編を初める時と終る時には鎖を三ツいたします。つまり六ツの松編の中に鎖を二ツ入れることになります。この松編の上に十三段、十四段も松編を重ねて編むのであります。

十五段――松編が三段出來ましたら其の松編と松編の中央の鎖編の中に長編を五ツ（松編）編み、松編の兩側は鎖を編んで　短編で付けます。

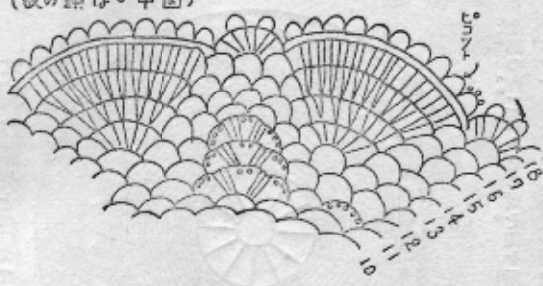
十六段――次は前段松編の上に長編を一目にニツづゝ入れます。

十七段――前段の長編十の上に又一目にニツ宛入れて二十にいたします。

十八段――二十の長編の上は一目に一ツ宛入れて廻ります。

十九段――二十の長編の上には短編を編み、長編と長編の間には圖のやうに松編を編み、次の長編には又短編を編みます。

二十段――鎖三ツのピコットを長編の上にして波編の上には長編二ツ、ピコット一ツ、長編二ツ、ピコット一ツ、長編一ツ、これをくり返し一廻りして出來上りといたします。



（圖中○は鎖の數）

第二百四十九圖

タッチング

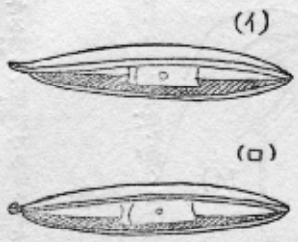
タッチングについて

タッチングは編物の一種でありますが、編針を用ひませんで第二百五十圖のやうなシャツターと云ふ器具で、レース糸、木綿糸、絹レース、穴糸、絹刺繍等を編んで、手提袋、羽織紐、帶留、洋服裝飾等のやうな小物を作ります。

用具

シャツターには、金屬製とセルロイド製とがあります。金屬製のはネヂ付きになつて居ますから、糸を掛くには便利ですが、重いので編みにくゝ、セルロイド製は輕くて滑りがよく使ひようございます。

シャツターは兩端の合せ目が、第二百五十圖(イ)のやうにきつちりと合つて居て一方の端が片側だけ尖つて外側にそり返つて居るのがよろしうございます。(ロ)圖のやうに尖端に鉤のついたものもありますが、これはピコットをつなぎ



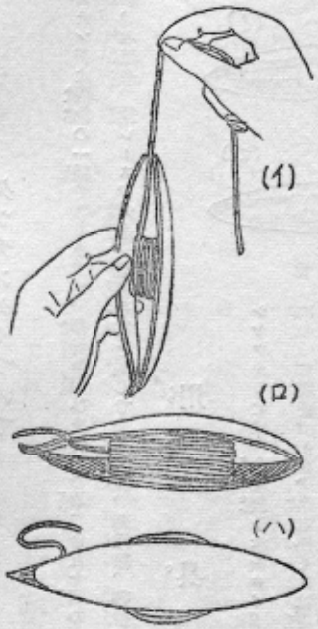
第二百五十圖

要大圖

合せる時には便利でありますが、編む時に糸が引掛かるので編みにくゝあります。

糸の巻き方

シャツターに糸を巻くには、中央の穴に糸を結び付け、第二百五十一圖(イ)のやうに尖つた方を下向にして左手に持ち、右手の糸を手前から向側にまはして(ロ)圖のやうにかたく上手に揃へて、外れない程度に澤山巻いて置きます。(ハ)圖は横から見たところ。編みますときには、シャツターの糸をあまり長く取しますと、編むのに時間がかゝるばかりでなく、編み目が不揃ひになつて出來上りが惡くなりますから短くして置くやうに注意します。

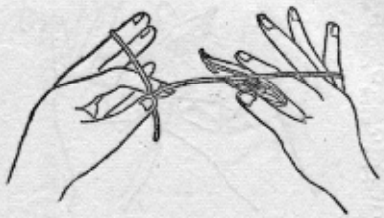


第二百五十一圖　糸の巻き方

シャツターの持ち方と糸の掛け方

シャツターに糸を巻きましたら、第二百五十二圖のやうにシャツターの糸を三十糎位出して置き、シャツターを右手の拇指と人差指との間に、尖端を向側の上にしてはさんで持ち、左手の拇指と人差指とでその糸の先端から四糎位の所を持ち、其の糸を人差指から、中指、藥指、小指をまはつて、元の拇指と人差指との間に、前にはさんである糸とを並べて持ちます。このやうに致しますと糸の大きな輪が出來て輪の中には中指、藥指、小指の三本が入つて居ります。

次に、右手の糸はシャツターから出て、右手の小指、藥指、中指に掛け圖の如くシャツターは其の下をくゞるやうに持ちます。いつも右手の拇指と人差指はシャツターから離れてはいけません。そして左手の人差指と中指との間は、四糎位あけて糸を張り、其の間をシャツターが自由に通れる位にあけて置きます。

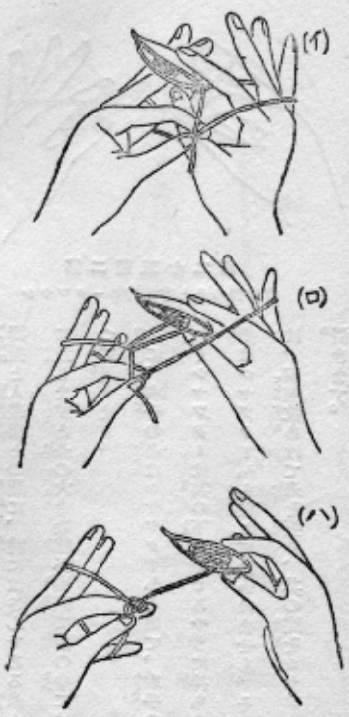


第二百五十二圖　シャツターの持ち方と糸の掛け方

編方

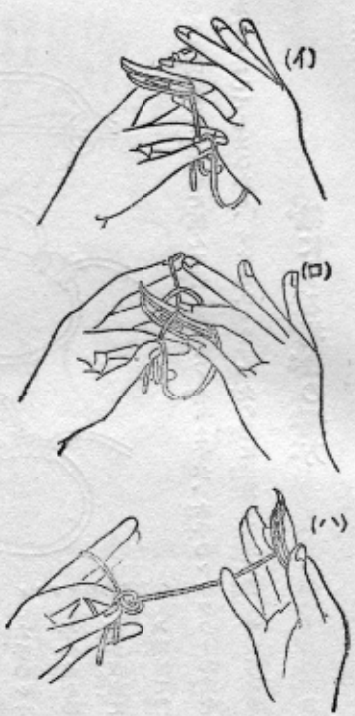
上の糸のかけ方が定まりましたらば、シャツターの尖つた方を向側の上にむけて、左手の人差指と中指との間に

張られて居る糸の下側からシヤツターを入れますと、左手の糸は右手のシヤツターと人差指との間を通ります。この時シヤツターは、右手の人差指と拇指で持たれた儘、第二百五十三圖(イ)のやうに左手の中指と人差指の間に來て居ります。次に左手の糸は、右手の拇指とシヤツターの間を通つて元に歸ります。(同(ロ)圖)、この時シヤツターを引張つて引くと同時に左手の糸をゆるめてかるくしめて編みます。即ち右のシヤツターの糸は引張られて芯になり、左手の指にかゝつて居る糸が編糸となつて編まれるのであります。(同(ハ)圖)、此の時は左手の中指で加減して最後の糸の引しめを致します。此所が最もむづかしい處で、きちんと目が揃ふまでには相當の練習を要します。この編方を表編と申します。是で目の半分が出來た事になります。



第二百五十三圖　表編のしかた

次に右手の拇指と人差指とで輕くシヤツターを持つたまゝで、右手の各指には糸をかけずに下におろしておき、左手の中指と人差指との間に張られて居る糸の上から、第二百五十四圖(イ)のやうに、其の糸を右手の拇指とシヤツターの間をくゞらせて、又右手の人差指とシヤツターの間をくゞらせて、(同(ロ)圖を參照)元に返してシヤツターを引張り、左手の糸をゆるめて左中指で加減を致します。(同(ハ)圖)これが裏編であります。前の表編とこの裏編とで一目出來た事になります。

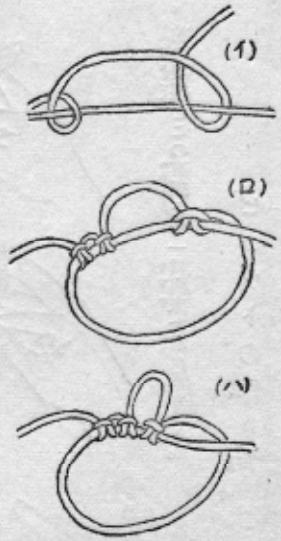


第二百五十四圖　裏編のしかた

ピコツトの作り方

普通に一目編み、次の表編を編む時に、前の裏編と次の表編との間を第二百五十五圖(イ)のやうに八耗位離して、つゞいで次の裏編をなし(同(ロ)圖)裏編の時に引寄せますと一ツのピコツトが出來ます。(同(ハ)圖)、此のピコツトは

飾りにもなり又輪と輪をつなぎ合せる時にも必要であります。特に長ピコットと云はない限りは此のピコットを用ひます。



第二百五十五圖　ピコットの作り方

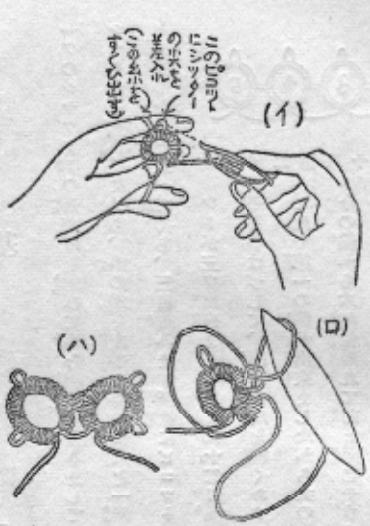
前に說明いたしましたやうに右手のシヤツターの糸は引張つて忠となり、左手に張られて居る糸が緯糸になるのでありますから右手のシヤツターの糸を引くと同時に、左手の糸をゆるめる事を忘れてはなりません是が反對になりますと結ばれて仕舞つて編み續けて行く事が出來なくなります。始めの內は間違ひを知らずに編んで行く事がよく有りますが、右手のシヤツターの糸を引いて見るとかたくしまつて動かなくなつてしまひから、すぐわかります。此の點に注意して糸が動くやうになりますまで練習を致します。

輪にする場合の編方

一本糸編と申しましてシヤツターを一ツだけ用ひて編みます。一ツのシヤツターで編む時には必ず輪にする時です。

ピコットの接ぎ方

輪と輪をつなぎ合せる時は、多くの場合最初の輪のピコットと次の輪の之れに相當する目に接ぎ合せるのであります。つなぐ時には一ツの接合すべきピコットにシヤツターの尖つた部分を差入れ、第二百五十六圖(イ)のやうに左手の人差指と中指との間の糸をすくひ上げて、其の中に右手のシヤツターを通して引抜いて仕舞ひます。(同ロ圖)、左手の中指で加減をしながら適度に糸を締めるのであります。此の時も芯糸は動くやうにして左手の糸が結び付かるやうになります。(同ハ圖)、是は容易に出來ます。



第二百五十六圖　ピコットの接ぎ方

タツチング編の糸は、主に綿糸を用ひますので切り口及び接ぎ目の、ほつれないやうに糊を付けて置きます。

基礎編

基礎編（其の一）

一ツのシヤツターの糸だけを用ひて編む編方でありまして一本糸編と申します。

シヤツターを右手に持ち、糸の端を左手に持つて糸を一寸左手の各指を廻り、初めに糸の端を左手の拇指と人差指とに持つたのと並べて持ち、三目編みます。次にピコット一ツを作り、又三目編むことを三回くり返しますとピコットが三ツ出來まして目數は十二目編めた事になります。編み終りましたら左手に掛つて居る糸を皆はづして、編んだ所を輕くおさへ右手の糸を引き締めますと、丸い輪になります。

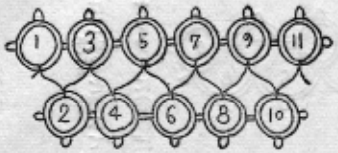
これで第一の輪が出來ましたから次の輪をその隣りに作ります。

今の輪から六粍位離れて前と同じやうに拇指と人差指で糸を持ち、左手を一廻りして同じ所に據へて持ち前のやうに編みます。初め三目編んでピコットに移る時に、初めの輪の終りのピコットの中に第二百五十六圖(ロ)の仕方でシヤツターの尖つた先を差入れて、そこから左手の人差指と中指の間の糸をすくひ上げ、その中にシヤツターを通してぬいてしまひます。左手の糸は

第二百五十七圖

前と同じやうにゆるめて右手の糸を引張り、左手の糸を適度に締めますと、前に編んだ目と揃つて結び付きます。

そこから又三目編んでピコットを出し、三目編んでピコットを出して三目編み、初めの輪の時のやうに引締めますと同じ輪が二ツ並びます。此のやうにして次々と第二と同じ仕方で第二百五十七圖のやうに第三第四の輪を作ります。以下一本糸編の時はいつもこれと同樣に編んで輪にする事を定めとして、說明をはぶきます。



第二百五十八圖　二段の輪のつなぎ方

基礎編（其の二）

前の編方と同じやうにして五目編んでピコットを出し之を三回繰返し終りに五目編んで引締めます。次に今編んだのを裏返して、反對側に最初の輪と同じ輪を作ります。次に裏返して、第一の輪と並べて初め五目編み、第一の輪の終りのピコットに止めます。五目編んでピコット、五目編んでピコット又五目編んで引締めて輪に致します。裏返して第二の輪と並べて初め五目編み、第二の輪の終りのピコットに止めて第三の輪と同樣に編んで行きます。此の樣にして一ツの輪から次の輪に移る時に裏返して反對側の輪につないで編みますと二段の輪のつらなりが第二百五十八圖のやうに出來上ります。

基礎編（其の三）

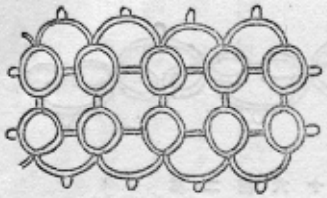
是は二本糸を用ひて編みます。一本は必ずシャツターに巻いた糸で、他の一方は糸巻きの儘でも宜しいのですが、シャツターに巻けば更に便利であります。又二色の糸を同時に用ひる場合は、必ずシャツターに巻かなければなりません。編み方は一本糸編と同じでありますが、二本の糸の端を一緒に揃へて左手の拇指と人差指とで持ち、一方の糸は中指薬指を通って小指に来て小指に一ツ巻き付け、その儘下にたらして置きます。他の一方の糸はシャツターに巻いて一本糸の時と同じく右手に持ちます。而して、二本糸の時は輪にする必要がありません。一本糸と同様に編んで行きますが、引締める事はいけませんから一目づゝきち〳〵と目を揃へてすぐ隣りにすき間のないやうに編む事が大切であります。かう致しますとゆるまないで奇麗に出来上ります。此の編み方を練習して第二百五十九圖を編み初めます。

第二百五十九圖

基礎編共の一のやうにして一本糸で輪に致します。三目編んでピコットを出し、三目編んでピコットを出し、三目編んでピコットを出し、三目編んで引締めて輪に致します。裏に返して新しい糸の端と今編んで来た糸と並べて、左手の人差指と拇指とで持ちます。新しい糸はその儘左手の中指薬指にまはし小指に一巻きしておきます。今編んで来たシャツターを右手に持ち、新しい糸が編み糸となり、シャツターの糸が芯になります。四目編んでピコットを出し、四目編んで裏に返します。今度は今芯になつた糸、即ちシャツターの糸を（最初から編んで来た糸）輪にして編みます。つまり最初と同じ一本編をいたします。新しい方の糸は其の儘にして下げて置いて、シャツターの糸だけで三目編み、初めの輪の終りのピコットにつなぎ合せます。三目編んでピコットを出し、三目編んでピコット、三目編んで輪に致します。

次は裏返して又二本糸で前のやうに編みます。是を繰り返すと第二百五十九圖のやうに出来上ります。

基礎編（其の四）


第二百六十圖

基礎編共の三の編み方を二ツつなぎ合せるのであります。

先づ其の三と同じ物を編んで置きます。次に片方の輪を編みながら中央のピコットを出す時に、一方の中央のピコットにつなぎ合せて行きますと第二百六十圖のやうなものが出来ます。

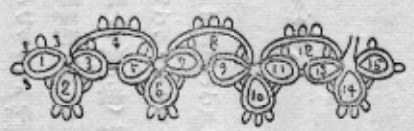
基礎編（其の五）

一本糸で八目編んでピコットを出し、八目編んで引締めます。裏に返して二本の糸で八目編んでピコットを出し、八目編んで裏に返します。一本糸に移つて八目編み、第一の輪のピコットにつなぎ合せ、次に八目編んで引しめて輪に致します。初めからを繰り返しますと第二百六十一圖のやうに出來上ります。

第二百六十一圖

基礎編（其の六）

一本糸で三目編んでピコットを出し、三目編んでピコットを出し、三目編んで引締めます。此の輪の隣りに三目編んで第一の輪の最後のピコットにつなぎます。三目編んでピコット、一ツ編んでピコット、二目編んでピコット、三目編んでピコット、三目編んで引き締めます。次も亦、この輪と並べて第一の輪と同じやうにして作り、第二の輪の終りのピコットにつなぎ合せます。以下第一の輪と同樣にして編みます。こう致しますと三ツの輪のつながりが出來ます。次に裏に返して二本の糸で編みます。新しい糸を左手に掛けて編み糸とし、今まで編んで來た糸を芯にして鎖を編みます。（二本糸の所を鎖と申します。）五目編んでピコットを出し、二目編んでピコットを出し、二目編んでピコットを出して、次に五目編みます。裏に返して一本の糸で最初の輪と同樣に編んで、二番目のピコットの所で、前の第三の輪の中央のピコットにつなぎ合せます。以上を繰返すと、第二百六十二圖が出來上ります。



第二百六十二圖

應用編

羽織紐

材料　あな糸約二瓦（五分位）、硝子の眞珠玉小二十個、大一個。

用具　シヤツター一個。

編み方　糸をシヤツターに卷く時に糸に眞珠玉の小粒を十ケ通し、次に大きいのを一ツ通し、又小粒を十ケ都合二十一粒を通しておきます。先づシヤツターで二十目を編んで第二百六十四圖(イ)のやうに丸く致します。この丸くして輪の處より又二十目編んで、是も丸くいたしますと同ロ(ロ)圖のやうに二ツ出來ます、始めの引しめた口と次の引しめた口を合せて、始めに出來た方を向側にあとの方を手前に持つて、二ツ輪の中から同(ハ)圖のやうにシヤ

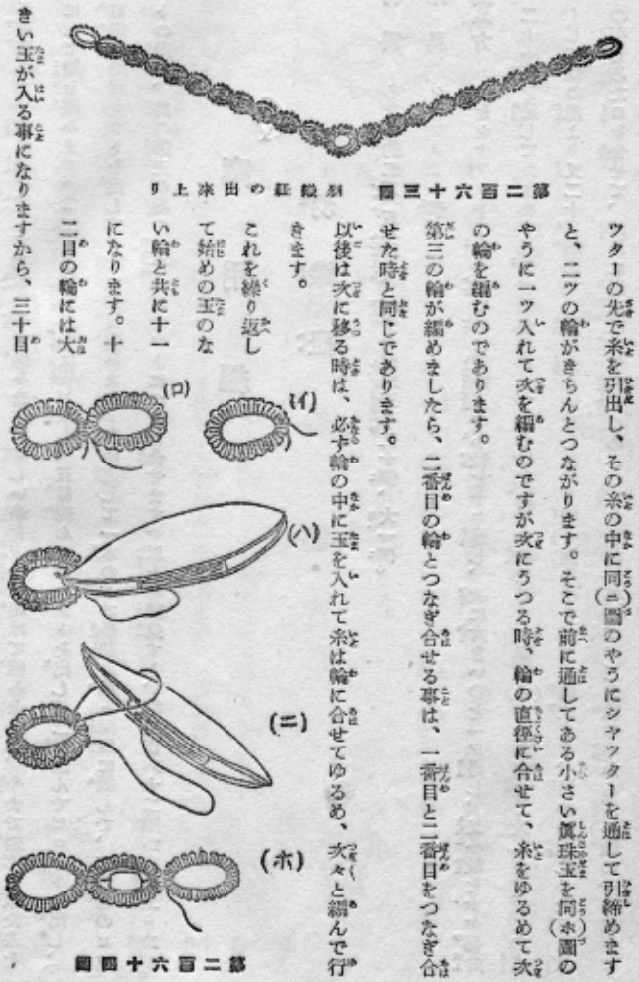
ッターの先で糸を引出し、その糸の中に同(ニ)圖のやうにシャッターを通して引締めますと、二ツの輪がきちんとつながります。そこで前に通してある小さい眞珠玉を同(ホ)圖のやうに一ツ入れて次を編むのですが次にうつる時、輪の直徑に合せて、糸をゆるめて次の輪を編むのであります。

第三の輪が編めましたら、二番目の輪とつなぎ合せる事は、一番目と二番目をつなぎ合せた時と同じであります。

以後は次に移る時は、必ず輪の中に玉を入れて糸は輪に合せてゆるめ、次々と編んで行きます。

これを繰り返して結めの玉のない輪と共に十一になります。十二目の輪には大きい玉が入る事になりますから、三十目編んで大きい輪を作り大きい玉を付けるのは前と同じ事であります。

以下は小粒を入れながら終りに玉のないのと十一輪になるまで編みます。そこで糸を切つて止めます。止めには一寸のりをつけて置きます。この最初と最後の玉の入らない輪が、羽織の乳につく紐の乳になつて、羽織紐は出來上ります。



第二百六十四圖　斜線紐の出來上り

(6) 花瓶敷

材料　あな糸白色六瓦(一圓五分位)、クリーム色二瓦(五分位)

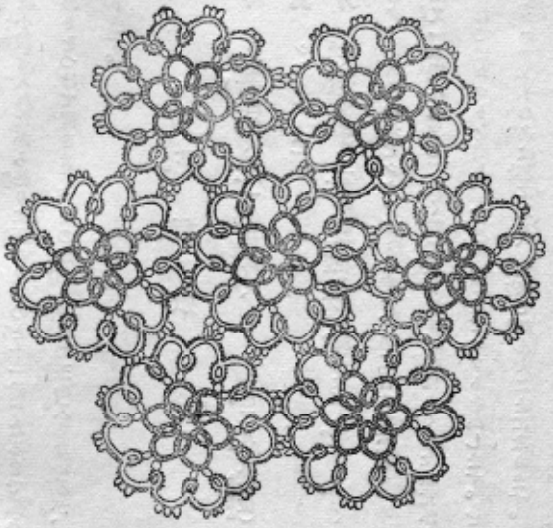
用具　シャッター二個

編み方　此の花瓶敷は二色の糸で花の形を編みながら付けて行くのであります。

始めクリーム色の糸をシャッターに卷き、第二百六十六圖イ)のやうに一本編を七ツして、ピコットを出します。次は又一本編み七ツして丸く輪に致します。次は丸くした根元から白糸を付けて向きを變へ、鎖(二本糸編)を九ツしてピコットを出し、一目編んで又ピコットを出します。ピコットが二ツ出來ましたら又鎖を九ツ編みますとシャッターの糸は芯になり、此糸で編んだことになります。

次は白糸は其の儘にしておいて向きをかへ、シャッターの方で二本編を七ツします。さうして始めの一本編のピコ

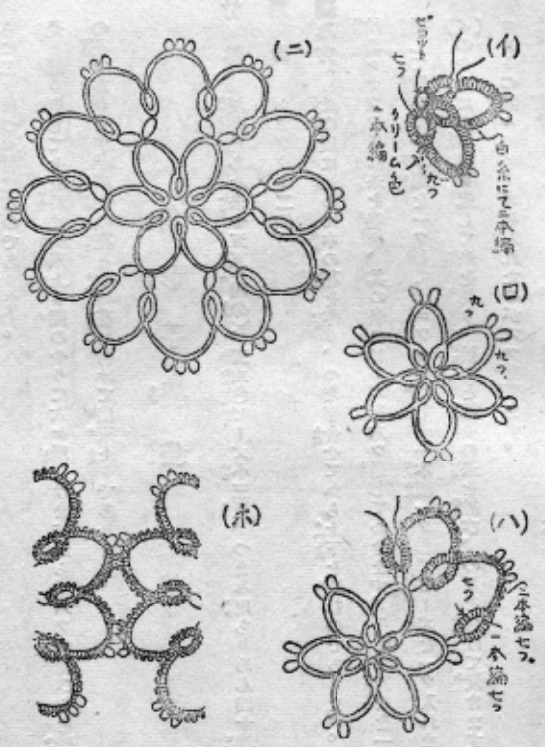
ツトの中に付けます。又七ツして丸い輪を作り、それから又、二本編で鎖九ツ、ピコツト一ツ、一目編んでピコツト一ツ、鎖九ツして、次は又、一本編で七ツ編み、始めの輪のピコツトにつけて七ツ編んで輪にします。



第二百六十五圖　出來上り圖

是を同(ロ)圖のやうに、六回繰り返して編み、始めの糸とつなぎ合せて糸を切り、のりを付けておきます。

別に同(ハ)圖のやうに一本編を七ツ編み、前に作つておいた花の一方のピコツトに付けて、又七ツ編んで丸くします。向きをかへて別糸をつけて二本編みを七ツしてピコツトを三ツ揃へて出します。又二本編を七ツ編んで向きを變へ、一本編で七ツ編み次のピコツトに付けます。又七ツ一本編みをして丸くします。これを繰り返して同(ニ)圖のやうに、此の花のまはりを全部付けて、始めの糸と結び合せてのりを付けておきます。



第二百六十六圖

これを七枚作りますが、始めの一枚だけは全部作つて、二枚目からは始めの花につなぎ合せますから花の終りから二番目の三ツのピコツトの眞中を出さずに、同(ホ)圖のやうに一枚目の花の三ツのピコツトの中央に付けるのであります。

これを二枚目の花は二ケ所だけ付けますが、三枚四枚五枚六枚迄は四ケ所付ける事になります。三枚目は二枚の

終りに、終りから二番目の花びらをのこしたやうに、三枚目は終りから四番目の花びらまで殘して、二枚の花びらに二ケ所づゝ付けるのであります。

是を繰り返して七枚目は出來上り圖のやうに六ケ所付けますから、六ツの花びらを殘す事になります。是が終りの花であります。兩側の花と中の花に付けて出來上りであります。

角形手提袋

材料　淡茶色あな糸十五瓦(四匁)、玉虫色ビーズ小三把、つまみ用ちりめん四十纏、新モス三十五纏。

用具　シャツター二個。

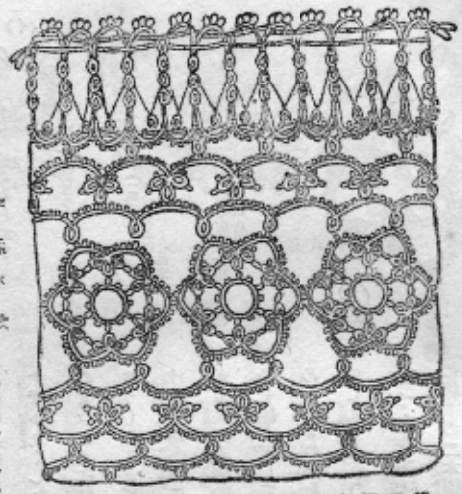
編み方　此の袋は始めに中の花を作り、つなぎ合せてから上下を編むのであります。

始めシャツターに糸を巻き、其の糸にビーズを六ツ通しておきます。そして左手を一廻りする糸にビーズを六ツ通して置いて一本編を一ツしてピコットを出し、一本編一ツしてビーズを一ツ入れます。これを第二百六十八圖(イ)のやうに六回繰り返して糸を切り、始めと終りの糸を結び、のりを付けて置きます。さう致しますと普通のピコットの間々にビーズを入れたのが六ツ出來ます。

今度は二本編をいたしますが、其の一方(シャツターでも糸巻でも)にビーズを六ツ通して置きます。

花の作り方

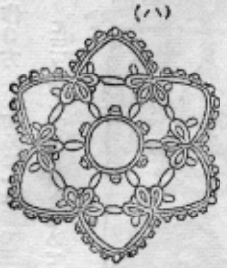
初めに一本編で三ツ編み、ピコットを出し、又三ツ編んでピコットを出します。是を三回編み、終りに三ツ編んで糸を引きしめて輪にいたします。次に三ツ編み、第一の輪の最後のピコットにつけ、又一本編三ツをして第二百六十八圖(ロ)のやうにビーズのないピコットに付けます。次に一本編を三ツしてピコットを出して、三目編んで丸く輪に致します。又丸くした糸をはなれないやうに一本編を三ツして、前の輪の終りのピコットに付け、次は三ツおきにピコットを二ツ出して終りに三ツ編んで丸く致します。



第二百六十七圖　出來上り圖

次に向きを替へて、前にビーズを通しておいた即の糸で編むのであります。此の糸で二本編を三ツの編みビーズのピコットを一ツ出します。又三ツ編みビーズのピコットを出し是を繰り返して九ツのビーズピコットを作りましたら又向をかへ一本編三ツしてピコットを出し、又三ツして前の一本編三ツの輪の内、終りの輪の眞中のピコットに付けます。又三ツしてピコットを

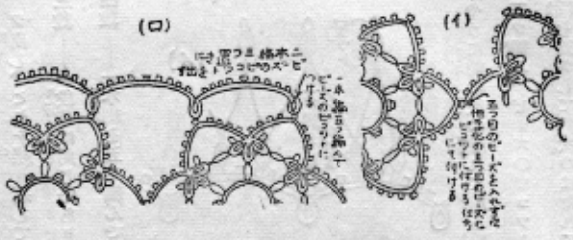
出し三ツ編んで丸く致します。次に又一本編を三ツして今編んだ輪の最後のピコットに付け、又三ツして、中心の輪の次のピコットに付け、又二ツしてピコットを出して丸く致します。今丸くした糸の處から離さずに又一本編三ツして今丸くした絲りのピコットに付け、又三ツおきにピコットを二ツ出して丸く致します。さうしますとビーズのピコットが丸ツ出來た方が外側に、丸く三ツ付けた方が内側になつて中の輪のピコットに付いた事になります。これから又二本編にうつります。



第二百六十八圖

是を繰り返して第二百六十八圖(ハ)のやうに花形を作つて糸を切り、始めと終りの糸を結んでおきます。此のやうに順に六ツの花をつなぎ合せて丸くするのであります。

花のつなぎ方　花と花のつなぎ合せ方は、一枚を仕上げて、次の花の終りの二本編の時ビーズピコットを四ツ出して五ツ目の時ビーズを入れずに第二百六十九圖(イ)のやうに他の花の五ツ目に付けて、又三ツおきに後四ツのビーズピコットを出して終ります。このやうにして六ツつなぎ合せるのであります。六ツの花びらの内廻剣一ツづゝ付けて、上下を二ツづゝ殺しておきます。



第二百六十九圖　花のつなぎ方

上下模様

一段——六ツの花を付け終りましたならば、又別に一本編を五ツ編んで同(ロ)圖のやうに前の花の上下二ツづゝ殺しておいた片方九ツピコットの中央のピコットに付けて、又五ツ編んで丸く致します。

次は向きをかへて二本編してビーズピコットを三ツおきに九ツつけます。

又向きを變へて一本編みにして次ぎ〳〵と付ける事、圖のやうにして此の段の終りまで繰り返します。終りに糸を切り始めの糸とつなぎ合せてのりを付けておきます。

是れで花の上を一段終つたわけであります。

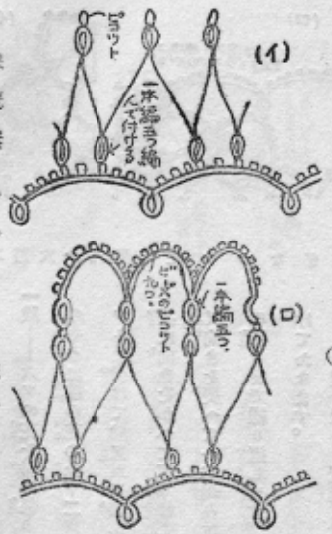
六ツの花を合せた時は上下共同じでありますから、終りの編方に依りまして上下が定まる事になります。

二段——二段目は、最初の花の作り方の時、中の輪の次に編んだ二段目と同じ方法であります。(第二百六十八圖(ロ)

の説明と同じ）これを前段の九ツピコットの眞中に花の中央を付けます。前向きを變へてビーズのピコットを九ツ出し、これを繰り返して終りに始めの糸に結び付けます。

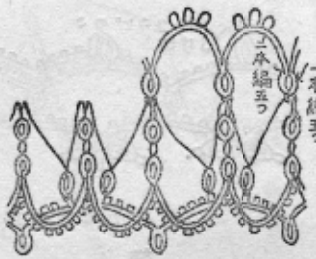
三段――一段目に同じであります。

四段――一本編を五ツ編んで第二百七十圖（イ）のやうに前の九ツピコットの端から四ツ目に付けて、五ツ編んで丸く致します。次は今丸くした處より二糎位離して一本編を五ツして、ピコットを出し五ツ編んで丸く致します。又これより二糎離して五ツの一本編をして、一ツおいた隣のピコットに付けて、五ツ編んで丸く致します。これを繰り返して此の段は終ります。



第二百七十圖

五段――一本編を五ツして第二百七十圖（ロ）のやうに前の段の離れて居る輪のピコットの中に付け、五ツ編んで丸く致します。それから向きを變へて二本編で三ツ編み、ビーズのピコットを出し、これを三ツおきに九ツ出して、又向きを變へて一本編みに致します。一本編を五ツして、次のはなれて居る輪のピコットの中に付け、又五ツ編んで丸く致します。これを繰り返してビーズのピコットを出した處を二ケ所、たゞのピコットを出した處を二ケ所作りまして一廻り致します。是が周りに下りまして縁飾りとなります。



第二百七十一圖　紐通しの編み方

紐通しの編み方　第二百七十一圖のやうに一本編で五ツ編みまして四段目の二糎長くなつて居る二本の糸のピコットのない方へ付けるのであります。又五ツ編んで丸く致します。向きを變へて二本編を五ツ編みピコットを出し、これを一ツおきに三回出し、五ツ編んで又向きをかへて一本編を致します。一本編を五ツして次の二本の糸に付け、五ツして丸く致します。これを繰り返して終りに糸を結んで切ります。是で上の方は全部終りました。

下の編み方　下の方の編方は二段迄、上の二段と同じ編み方を致します。三段目のビーズピコットの五ツ目になりましたならば、一本編に歸つて五ツ編んでピコットを出し五ツして丸く致します。これより又ピコットを出します。是を六回繰り返して七回目には第二百七十二圖のやうに、前の中の丸くしたピコットに付けます。これを終りまで繰返して糸を切ます。

中の袋の作り方　中の袋はつまみ縮編で表の袋に合せてそれに縫代を入れ、丈の方は紐通しより三糎位長く

して裁切ります。

第二百七十二圖

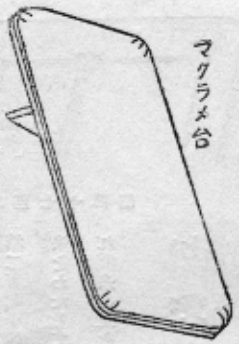
新モスの方は前編より二編だけ丈の方をつめて裁ちます。二ツの用布を裏表そろへて四ツ綴に致しますと、新モスの方が短いので縫代は、二糎位中の方にある事になります。底の隅角に丸味をつける爲、一糎位摘んで縫ひます。これを編んだ袋に重ねて同色の糸で底をとぢます。口元は紐通しの下の丸い處に縫付けて置くのであります。

紐の作り方及び通し方　糸を二本にして鳩針で鎖編を三十糎位して後もどりして引ぬき編で、編初めまで致しますと、普通の鎖より丸味が付き太くもなつて形が良くなります。これを二本編みます。紐の端を兩側に向けて通し、先を結んで出來上りと致します。

マクラメレース

マクラメについて

これは太綿糸、麻糸、リリヤーン、絹糸又は繩などを結び合せて種々の模様を作る手藝でありまして、室内の裝飾品、裝身具又は袋、籠などの實用品にも應用されてをります。



第二百七十三圖

用具

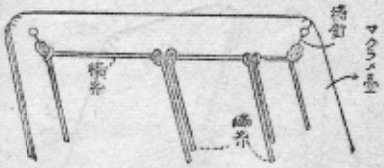
1、マクラメ綿糸、（マクラメクッション）間に合せの場合は鍛板を用ひます。
2、ボビン（細長い糸巻）
3、裁斷用の待針。
4、刺繍用の目打。

基礎編

糸の掛け方

糸は繰りのまゝでぼかしを強へて、色の調子を見計ひ一ケ所だけ切ります。

第二百七十四圖の如くマクラメ組臺に（縦横どちらでも其の時の便利なやうに置く）横糸をわたして兩端を針で止めておき、結び糸を二ツに折つて輪の方を横糸の下から入れ横糸の上を通つて輪の中に二本を入れて下に引きます。

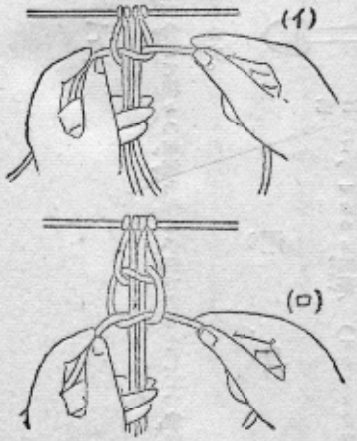


第二百七十四圖

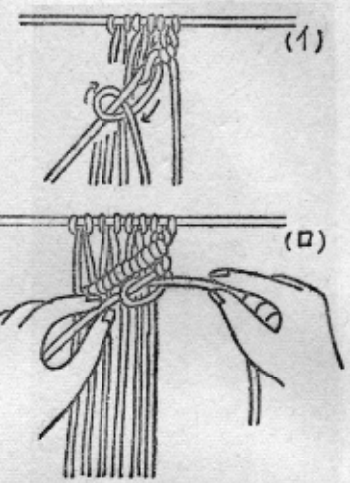
七寶結び

これは掛糸は二本ですが垂れた糸の四本で結びます。

初め中央の二本を芯にして左右の糸二本で第二百七十五圖(イ)の如く結び、次に(ロ)圖の如く糸を反對にして結び、糸の繰加減は糸が弛まない程度で宜しいのです。



第二百七十五圖

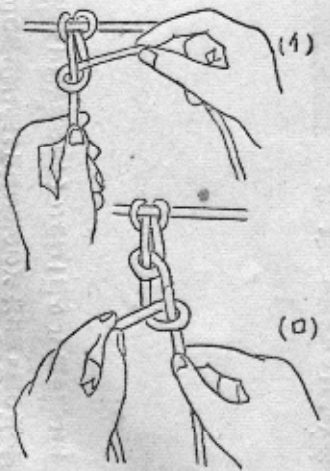


第二百七十六圖

巻き結び

横糸に編む方の糸を全部掛け、次に第二百七十六圖(イ)の如く端の糸一本を斜に持ち（これをコードといふ）其の糸に編む糸（垂れて居る糸）を二度づゝ掛けて巻きながら結んでゆきます。

この結び方は縦にも横にも斜にも色々の形に結ばれます。結ぶ時にはいつも芯となる方の糸を引き、巻く方の糸をゆるく致します。



第二百七十七圖

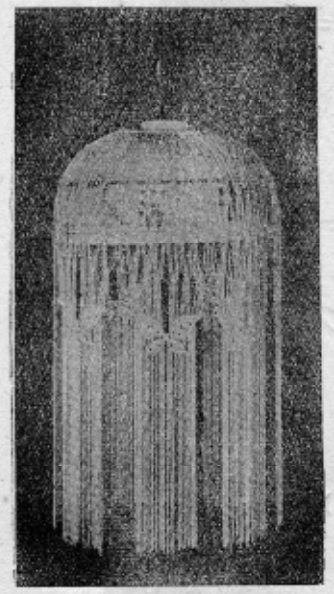
鎖結び

これは二本の糸で結ぶのであつて、はじめに第二百

七十七圖(イ)のやうに左の糸を芯にして右の糸で巻き(この時は左を引いて右を弛める)、次は同ロ圖の如く反對に右の糸を芯にして、左の糸を巻きます(この時は右を引いて左を弛めます)これを一組として繰り返しますと頓結びが出來ます。

應用編

電燈カバー



第二百七十八圖　出來上り圖

材料　リリヤーンぼかし染分け一把(糸數八十四本位)

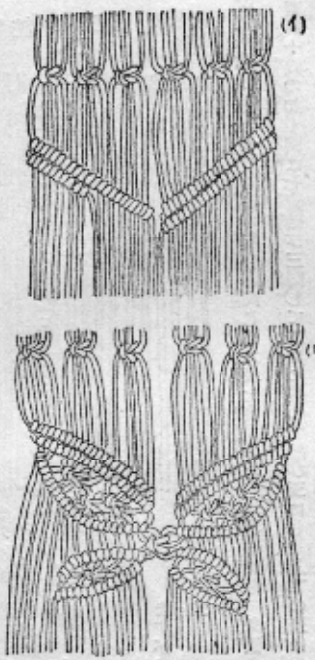
結び方　糸はくりのまゝでぼかしを揃へて電燈カバーの房にする方の色の中央で一ヶ所切ります。

裏は横にして横糸を二本(一本でもよし)渡して兩端を針で止めます。

それに八十四本の基本結びの排方のやうに掛けます。

一段——横糸から三糎下つた所に、七寶結びを一段宛します。

二段——前段右側二本左側二本づゝの七寶結びの一組四本の糸を左右に分けて、三糎離して七寶結びをいたしますと、兩方の端に二本づゝ組み合せる事の出來ない糸が殘りますから横糸を止めておいた針をはづして、横糸の端と端とを結び合せて、殘つた二本づゝを七寶結びをして丸く輪に致します。



第二百七十九圖

蜘の模樣結び　七寶結び六段出來ましたら第二百七十九圖(イ)の如く七寶結び六ツを一組として竝べ、針で止めて置きます。

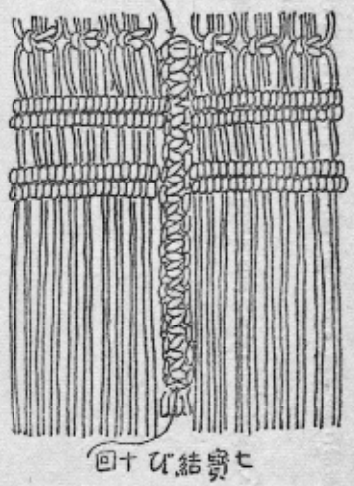
そして七寶結び三ツで片方の上羽を作ります。右から斜に巻き結びを二回して圖の如く羽の中には小さい七寶結びを三ツ入れ、更に右から一回巻き結びを致します。片方の羽は反對に左から斜に巻いて同樣に作り二ツの羽を

七寶で結び合せて、兩端を四本づゝ殘し、下羽は上羽と反對に圖の如くそれぞれ卷き結びを致します。下羽の中は小さい七寶を二ツ結んで模樣とします。

これで緣の一段樣出來たのであります。

扇は糸を垂らして適當に切ります。最初の橫糸の先きは兩方共鎖結びを六回位して止めます。

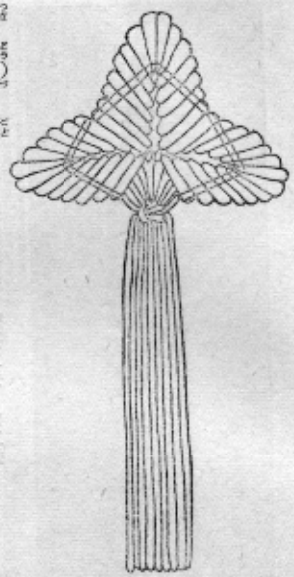
出來上り寫眞の模樣は蝶の模樣結びでありますが、蜻蛉の模樣結びに替へても宜しいですから次に其れを說明いたします。



第二百八十圖

蜻蛉模樣の結び方　前の場合と同じく六段七寶結びをし、其の先を、矢張り蝶と同じく六ツを一組として第二百八十圖の如く頭は七寶結び三回して二ツに折つて結び玉にし、上下の羽は卷き結び、胴は七寶結び三回、尾は七寶結び十回して短かく切り絹糸で縛ります。

クローバの葉

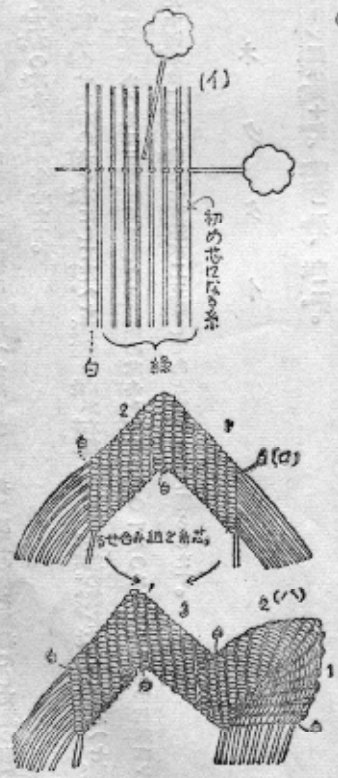


第二百八十一圖　出來上り圖

材料　リリーヤーンの緣一米七糎丈のもの七本、白同一本。

結び方　糸はくりのさいで切り、第二百八十二圖(イ)の如く緣七本と左の端へ白一本と郤合八本を竝べて糸の中央に針を横に通して糸の上に郤の針で止めます。

次は同(ロ)圖の如く右の端の緣一本を芯にして卷き結びを一段し、次に又、右端の糸を芯にして卷き結びをし、順々に右から左へ



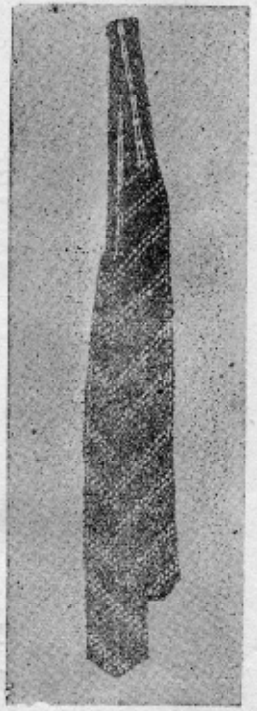
第二百八十二圖

巻き結びを七回致しますと、左の端にあつた白が右の端へまゐります。次は反對の側を同樣にして葉の形にとゝのへ、矢の方向に左右の芯糸を組み合せます。

次は同(ハ)圖の如く組み合せた右の糸を芯にして左へ七回巻き白が右端へ出ると左端の緣を芯にして右へ七回巻きますと又一葉出來ます。かうして三葉出來ましたら最後の芯糸を交互に上の一葉の中に掛て中心で眞結びを一ツ致します。集つた十四本は二本の白で七寶結び二三回してあとは房として垂らします。

ネクタイ

材料　リリーヤーン黒小束十把、薄茶二把、白二把。



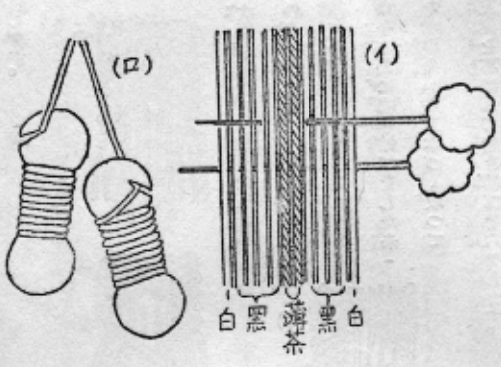
第二百八十三圖　出來上り圖

先づ五米(メートル)の長さに黒を八本、薄茶と白を各二本切つて、第二百八十四圖(イ)のやうに中央に薄茶二本、その兩脇が黒四本、兩端が白となるやうに並べます。そして兩端の長さに三十糎の差を作つて、それを葉と同樣に横に針で通して、三十糎短い方を手前にして臺に止めます。

この糸は大變長いですからボビンに巻いて置きます。

ボビンは間に合せの場合には厚紙を同(ロ)圖の如く繭形に切つて片方に少し切り込みを入ておきます。

兩端の白を除く他はボビンに巻き、編むところを二十糎位殘して切り込みにはさんで止めます。



第二百八十四圖

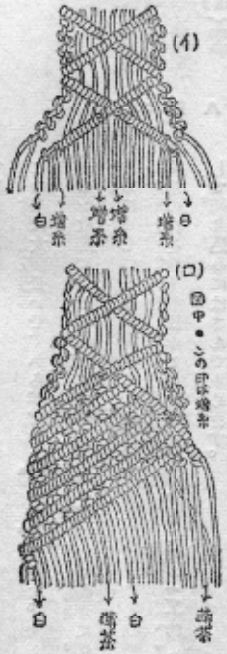
結び方　第二百八十五圖(イ)の如く左端の白を芯にして中央の薄茶の一本まで斜に巻き結びを致します。右端よりも同樣にし左の芯糸の白も巻きます。そして兩端の黒二本で鎖結びを六回して、今度は中央から左右とも斜に巻き結びを致します。これを一模樣として七模樣繰り返し、これでネクタイの首まはりの半分が出來た事になります。こゝで増し糸をして前の編方にうります。

増し糸の仕方　第二百八十五圖(ロ)の如く、黒リリヤーンを、今編んで居る糸の二倍の長さに切り、白の芯糸に

掛けます。同(ハ)圖の如く、その掛けた糸の一本と、もとの芯糸の白と二本を芯にして薄茶で巻き結びを一回、次は、白にそへた芯糸の黒で巻き結びを一回、眞中から左右に向つて、二本づゝ糸を取つて巻き結びを五回づゝ致します。

第二百八十五圖

次は右側の増し糸の次の鼠色の糸を芯にして、左斜に巻き結びを端までいたします。次は今左斜に巻き結びをした糸を、中央から二本づゝ取つて左側を芯にして巻き結びを六ツします。



第二百八十六圖

次は先に左斜に巻き結びをした芯の右一本置いた隣の糸を芯にして、前と同樣に左斜に巻き結びをします。

其の時左側の巻き結びは二本のうちの左手の糸を芯に、右側の巻き結びは右手の糸を芯にします。

次は又中央から二本づゝ取つて、左側を芯にして巻き結びを七ツします。

このやうにして次々と右側一本置いた糸を芯にしては巻き結びをし、又二本づゝ取つては巻き結びをすることを五回繰り返しますと、右の端へ鼠色の糸が出ますから、其の芯糸を針でとめて左斜に端まで巻き結びをします。

次は又右端から二本づゝ取つて左側を芯にして、左端まで十二巻き結びをします。

かやうにして次々と、右端の糸を芯にしては斜に巻き結びを繰り返して行きますが糸が短かくなつたときには右端で一ツ結んでから増し糸をいたしますと薄茶と白の縞が斜にあらはれてまゐります。(第二百八十三圖參照)

ネクタイの短い方は凡そ三十糎位編みましたら、片方は段毎で一ツづゝ編み殺し三角形にして兩方から巻き結び二回して止めます。

糸の先は一糎位殘して切り、丸くして裏から黒の絹糸でかがり付けます。

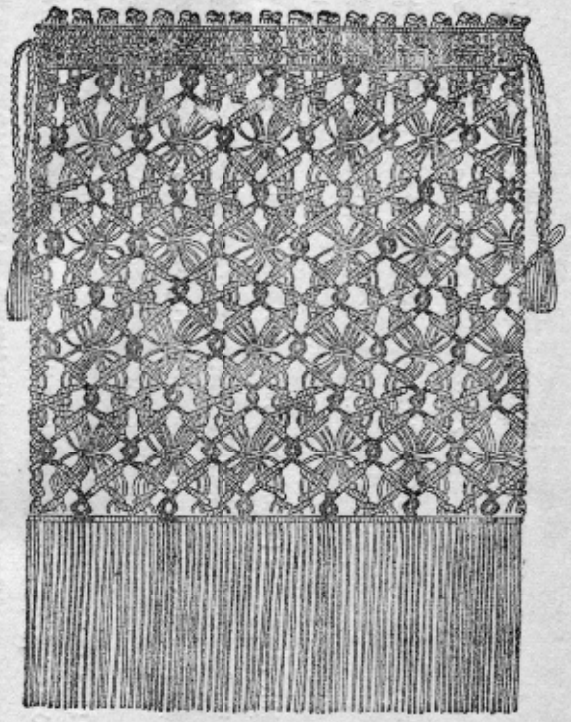
次は最初の中央へ戻りまして片方の長い方を編み始めます。首まはりは同じ模樣を七度繰り返し前の編方にうつります。(但し長さは四十糎にして糸を止めます。)

手提袋

材料　リリヤーン時色(小束)八把、緞色四把。

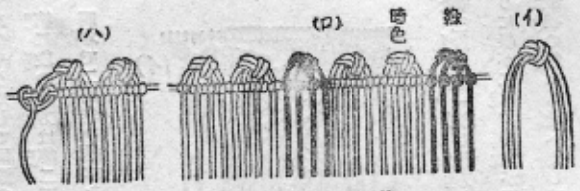
マクラメレース

糸は二色とも二米十五糎の長さに、時色を四十八本、緑を二十四本切つておきます。別に何色でも、コードに用ひる糸として一米十五糎の長さのものを三本用意します。



第二百八十七圖　口糸上り圖

結び方　先づ第二百八十八圖(イ)のやうに同じ色の糸を二本づゝ揃へ中央で一回結びます。それを同(ロ)圖のやうに緑を一ツ時色を二ツといふ配置にして、同(ハ)圖のやうに一本の糸をコードとして、全部を

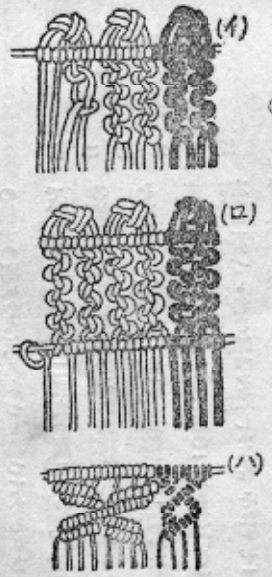


第二百八十八圖

平に巻き結びをいたします。

次は第二百八十九圖(イ)のやうに鎖結びを八回致しまして同(ロ)圖のやうに別の一本の糸をコードとし、それに巻き結びをいたします。

次には、右端の緑四本で同(ハ)圖のやうな格子に巻き結びを致しますが、それは初めに二本づゝとつて向つて右の二本は左へ左の二本は右へと巻き結びを一回し、次は左を下に右を上に交叉して又再び左右へ一回づゝ巻き、こゝを角にいたしますために待針を打つて角を作り、更に左右から中央に向つて巻き、再び交叉して又それぞれ一回づゝ結んでおきます。



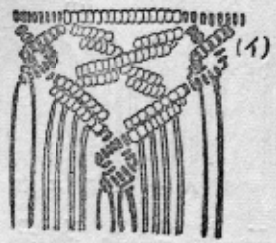
第二百八十九圖

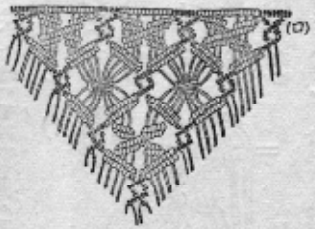
次は第二百八十九圖(ハ)の左端の時色八本をもつて模様を作りますが、それは初め四本づゝとつて左右に分け、左

右とも三回づゝ二段に巻き結びをし、中央で交叉して又再び左右へ分けて三度づゝ二列結んでおきます。

このやうにして同圖の模様を十二回繰り返しましてそれを第一段といたします。

第二段の仕方は第二百九十圖(イ)のやうに第一段で出來た絲四本の格子の二本を殘し、一本づゝを芯にして、時色四本で二列巻き結びを左右共致します。次は芯糸の絲四本をもつて又格子を作る仕方を十二回繰り返しますと絲の格子の間へ時色が八本づゝ集つてまゐりますので、それをもつて第二百九十圖(ロ)の中程に出てゐる模様を作りますが、それは時色八本の中の六本を芯にして兩端の一本で七寶結びを一回いたします。そして前と同じやうに絲の二本を芯にして左右共二列づゝ巻き結びを致します。それを十二回繰り返します。

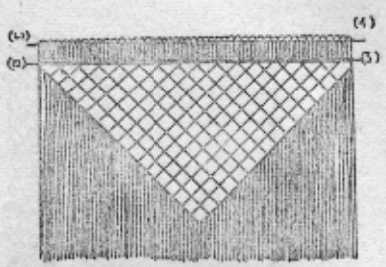




第二百九十圖

第三段は第一段の仕方を致します。以上は一段と二段を交互に組んでまゐりますが、その場合、兩端で同圖のやうに絲が二本、時色が四本といふ順序に糸が殘つてまゐります。

最初の段から數へまして八段組みますと、第二百九十五圖のやうに中央に三角形の模様が出來上ります。それから第二百九十一圖のコードの(イ)と(い)(ろ)と(ロ)とを結び合せまして第二百九十二圖のやうになります。次には兩方の殘つた糸と糸とで二段の仕方から始めて



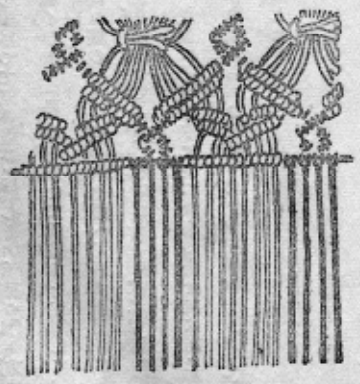
第二百九十一圖

第二百九十二圖

段々に前と同じやうに組んで捕へます。

第二百九十三圖のやうにコードを別糸で入れまして一まはり巻き結びをいたします。そしてコードの糸は端と端とをしつかりと結び合せまして房は五糎位殘して糸を切つてしまひます。袋の底は時色の絹糸二本でとぢ合せます。

次は袋の口に付けます紐の作り方を申します。時色の糸を一米三十三糎の長さに四本切り二本合せてゆるく撚りを掛け上の館



第二百九十三圖

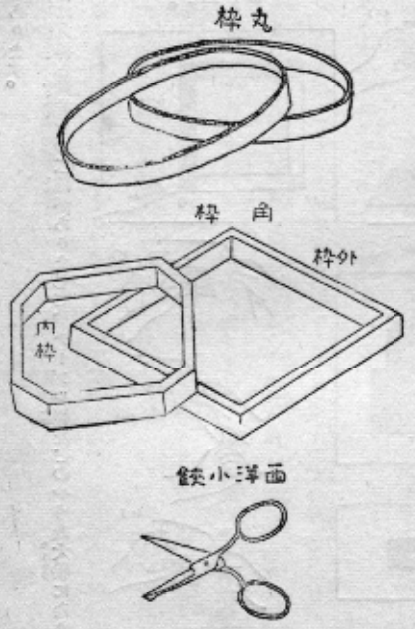
第二百九十四圖

結びを二本づゝ抄つて互ひ違ひに通します。房の作り方は第二百九十四圖(イ)のやうに兩端を合せて鎖結びを五回して、そのところに同(ロ)圖のやうに別の糸を添へ、かざりとして鎖結びをした糸と共に合せて一度に結びしめ、四糎位房に殘して切ります。最後に、コードに使つた糸の合せ目は同じ色の絹糸でしつかり裏からかゞり付け、さつと湯伸しをして全體の仕上げを致します。

ドロンウオーク

ドロンウオークは布の縦糸又は横糸の一方を拔いて其のあとを別糸で種々の形に膽る手藝であります。

材料



第二百九十五圖　用具

麻布、木綿、絹布、其の他糊氣のない地質のあまり密でないもの、つまり糸を拔きやすいものを用ひ糸はカタン糸、絹糸、D・M・C糸等を用ひます。此の他、洗濯にたえ得る質の糸ならば使はれます。

用具

枠、西洋小鋏、針、目盛定規、等

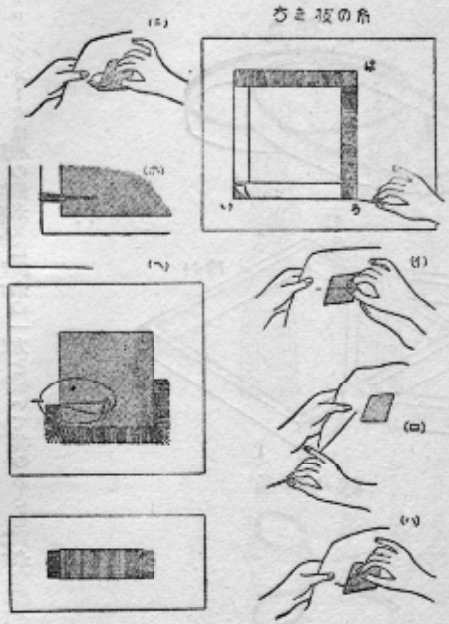
であります。

枠は丸枠と角枠との二種がありまして、テーブル掛などのやうな大物になりますと、角枠を用ひますが、大抵は丸枠で間に合ひます。

西洋小鋏は先の鋭利なもので、布目を切る時便利に出來て居ります

針は普通の縫針又はメリケン針を用ひます。

定規は目盛りのしてある三角定規を用ひますが、普通尺度でも差支へありません。



第二百九十六圖

糸の抜き方

第二百九十六圖のやうに用布に抜くべき寸法を測つて、(い)と(ろ)のところに印を附けまして、其の印の一番上か下かの糸を一本だけ切り、針の先で一糎位引き出して手に持ち、その一本を終りの印まで完全に抜き取り、これより次々と寸法通りに抜きます。

穴かゞりの仕方

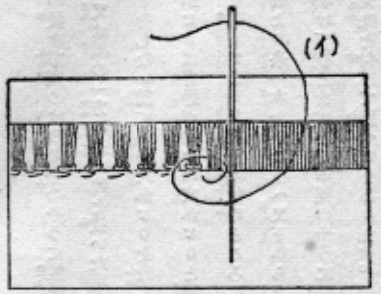
糸の抜き方圖の(は)の部分のやうに縦横の糸を抜きますと、そこに四角の穴が空きます。第二百九十六圖(ト)のやうに縦、又は横の一方の糸だけを抜いた場合は、兩端に切り口が出來ます。此の切り口の糸のほつれを防ぐために、他の縢りをしない前に必ず穴かゞりを致します。

穴かゞりは普通ボタンの穴かゞりと同樣でありまして木綿又は麻布の場合は六十番のカタン糸で、先づ同(イ)圖のやうに切り口より凡そ三粍位のところに下から上へ針を出し、同(ロ)圖のやうに針を抜き、(ハ)圖で最初に(イ)圖でさした針目より糸一本おいた次へ又下から上へ刺しまして、次は(ニ)圖のやうに針の先へ「の」の字形に糸を下から上向きに掛けて抜きますと、(ホ)圖のやうに切り口に糸が被さるやうになります。これを次々にして角は(ヘ)圖のやうに自然に丸味を付けて縢つてまゐります。

なほ縢り糸は用布の地質によつて異るもので、例へば絹ハンカチのやうなものには羽二重糸などを使ひますが、大體においては用布の織糸よりもやゝ細い糸を適當と致します。

基礎縫ひ

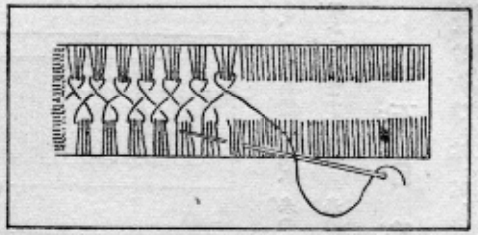
ヘムステッチ（用布キヤラコ、用糸五十番）



第二百九十七圖　ヘムステッチ

布の横糸を凡そ八耗抜き、糸目五六本を抄ひ、針を抜き出し第二百九十七圖(イ)のやうに針を下から上へ抜き、前に抄つた目に戻り下から表へ向けて針を出して締めます。これは普通「片ヘム」と云ひ「両ヘム」とはこの仕方を両側にするのであります。第二百九十七圖(ロ)参照（以下ヘムステッチを「ヘム」と略す場合もあります。）

千鳥ヘムステッチ

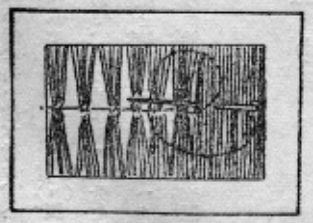


第二百九十八圖　千鳥ヘムステッチ

糸を抜く時、中央をおよそ五耗程殘して中心とし、その両側を六耗位抜きます。左の中央から針を出し右から左へ糸を四五本抄ひ上下交互にして千鳥掛けのやうに縫ります。（第二百九十八圖参照）

鼓形縫り

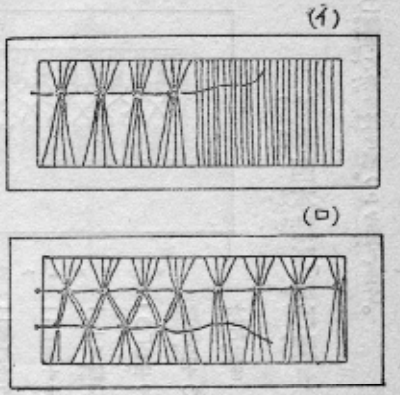
二糎の巾に糸を抜き、両側を五本づゝ抄つてヘムステッチをします。次に第二百九十九圖の如く左の横の眞中に糸を結び付け、ヘムステッチを三組抄つて一ツ結びます。結び方は、糸で平假名の「の」の字を書くやうにして、その字の中へ針を出すのであります。糸の引き方は一度左に引き、更に右へ引いてしめます。



第二百九十九圖　鼓形縫り

鼓形四本結び別け縫り

巾二糎半に糸を抜き両ヘムを致します。

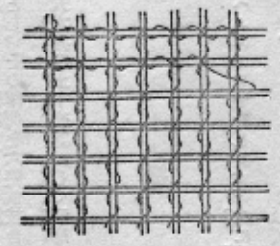


第三百圖 雛形四本結び縢り

第三百圖(イ)の如く左横三分の一の所に糸を結び付け、ヘムの糸四組抄つて結び、次々と右へかゞります。次は同(ロ)圖の如く殘りの二分の一の所から始めて、前の結び同の半分をとつて、即ち最初の一ツはヘム二組を結び、その次からヘムを四組づゝ結びますと、(ロ)圖のやうに結び目が上と下と交互にならぶやうになります。

格子縢り

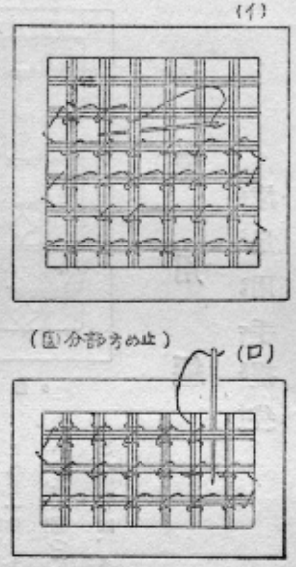
これは縦横の格子に糸を抜き、それを縢るので、糸の抜き方は二本抜いて二本殘し、つまり二本づゝの格子を作ります。格子の糸に一回づゝ縦横に第三百一圖の如く卷いていきます。



第三百一圖 格子縢り

石目縢り

格子縢りの抜き方と同じ仕方で、三本づゝの格子に抜きます。これは裏面を見て縢ります。一番手前の三本の左端に糸を結び附け、一段、「初め上から下へ縦に抄ひ、次に手前の横を右から左へ抄ひ、上から下へ縦を抄ふ。」これを繰り返して終りは右横を一ツからんで、次段の三本の右端へ針を運びます。(第三百二圖(イ)參照)



(止め方部分圖)

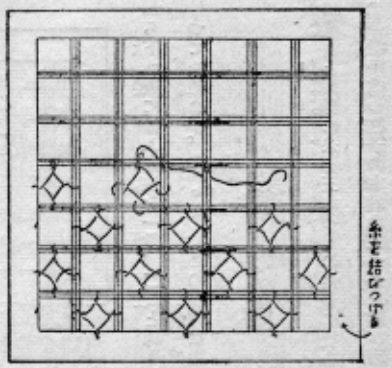
第三百二圖 石目縢り

二段、先づ左から右へ進むやうに布を持ち變へておきます。上から下へ縦を抄ひ向ふ側の横を右から左へ抄ひます。次は上から下へ縦に抄ふ方法を一段、二段と繰り返します。一番最後の段では手前の横と向ふ側の横を右から左へ兩方を抄つて止めます。(同(ロ)圖)、この縢方は主に葉の模様などに應用されます。

籠の目縢り

石目縢りと同様に糸を三本づゝの格子に抜き、これは表を見て縢ります。

一、一番手前の格子の右端中央へ糸を結び附け最初の格子は飛ばして糸は裏側を通つて其の次の格子の中へ針先を



第三百二圖　編の目數

出します。

二、向つて左を左から右へ抄ふ。この時、糸はたゞ抄ふばかりでなく第三百二圖の如く、一ツ搦つて次にうつります。

三、上を、上から下へ抄ひ右から左へ抄ひます。

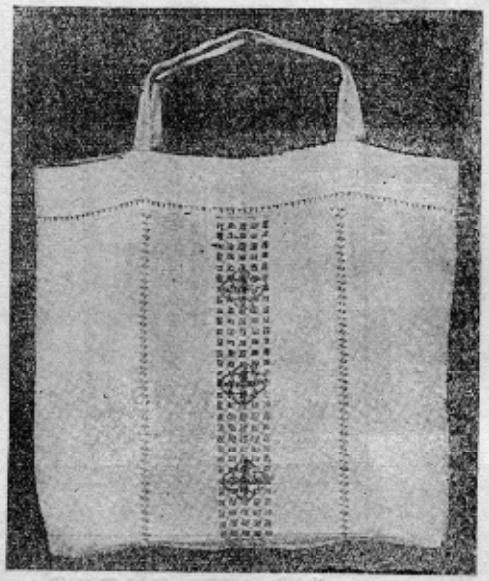
四、裏側を通つた糸と手前の三本を合せて抄ひ、一回針に糸を巻き付けて抜き糸をしめます。これで一ツの編の目が出來る。これを一格子おきに致しまして、二段目は一段目の模様のない格子へ搦つて、交互に模様を入れてまゐります。

この編りは、多く花などに應用されてゐます。

應用編

遠足用手提袋

材料　麻布三十糎巾長さ五十三糎（袋用布）、同八糎巾長さ三十五糎（手の分）、D・M・Cの五番白色一把、同二十五番茶色一把。



第三百四圖　遠足用手提袋

糸の抜き方

一、先づ、第三百五圖の如く、袋の口になる方を上から五糎下つて、五本横糸を抜きます。

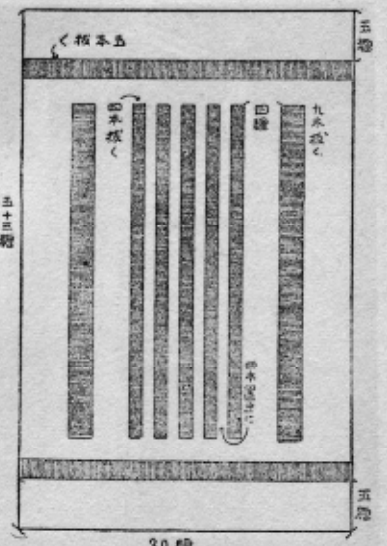
二、次は、この抜いた所から八粍位離れた所から中央に五ツの縦糸を作ります。圖の如く、縦糸を四本おきに四本づゝ抜きます。

三、五本の縦が抜けましたら、その兩側へ四糎離して九本づゝ抜きます。

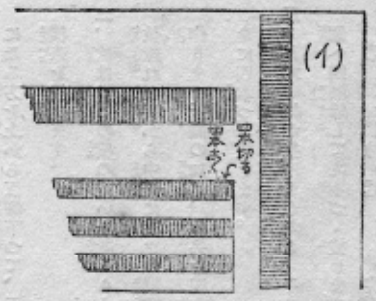
四、第三百六圖イ）の如く五ツの縦糸を一格子糸に致します。それは横糸を四本おきに四本抜きます。横糸を抜く場合は、片側だけ數を間違へぬやうに鋏を入れて「四本は切り、四本はおく」を續けます。そして切つた方の側を同口圖（ロ）の如く重しでおさへておき、左

手で切らない側の抜くべき糸の根元を強く掴つて針先で一本づゝ引き出して、順々に抜いてゆきます。

五、抜いた横糸が片側へ集まりますから第三百六圖(ハ)の如くその方を眞直に折つて鉄で切り取ります。



第三百五圖　手提袋糸の抜き方



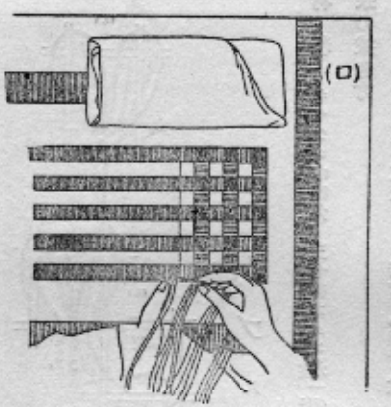
第三百六圖（イ）　手提袋糸の抜き方順序

織り方

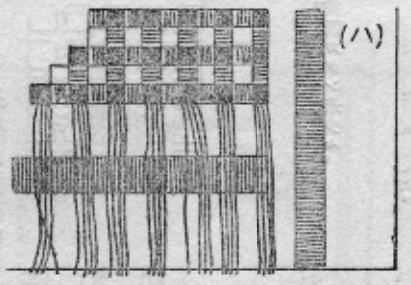
一、口の方を兩側共、四糎に折り、最初の糸を挽いたところへその折目をあてゝ假紙をかけ、茶のD・M・C二十五番糸で片へムステッチを致します。

二、九本抜いた縦糸の兩端に同じ糸で穴織りをして成形織りを致します。（糸は三本抄ふ）

三、五ツの格子縞の兩端を穴織りをして格子織りを致します。



第三百六圖（ロ）

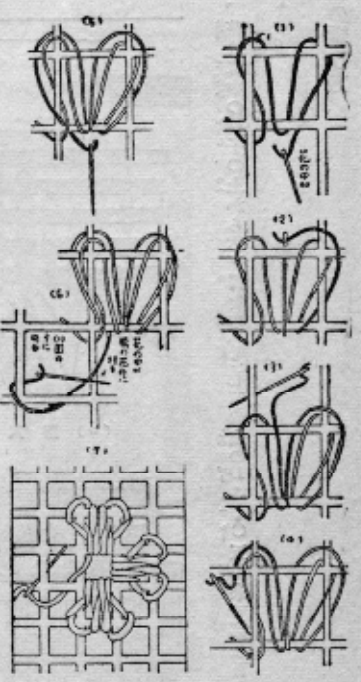


第三百六圖（ハ）

四、花は眞中の格子の上から六ツ目を中心として白のD・M・C五番糸で第三百七圖の(1)より(7)までの順序で織ります。

袋の縫ひ方

編物編



第三百七圖　格子縢り

兩脇を縫ひ、底の兩角を三糎縫ひ、手の布は丈を二ツに切つて四ツ折に縫ひ、裏側から付けます。用布の地質によつては適當な裏布を用ひます。

テーブル掛

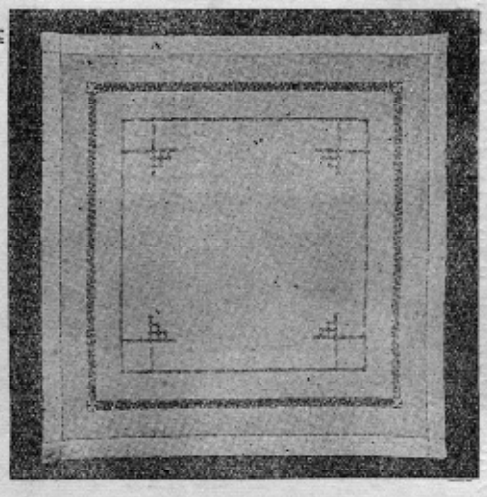
材料　キヤラコ巾四角、三十番カタン糸一個、二十番新カタン糸少々。

糸の拔き方

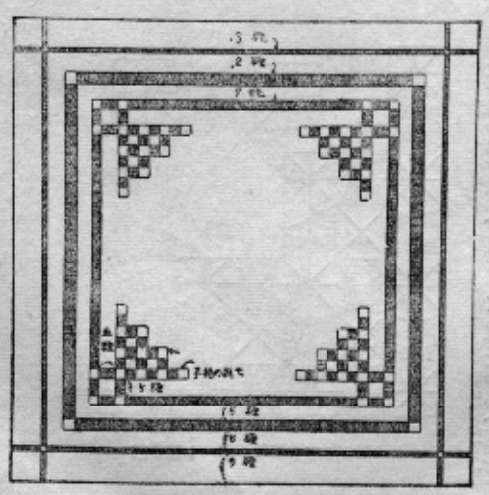
第三百九圖の如き寸法に、四方及び内側四隅の糸を拔きます。（糸を拔く目標をするには青花を使用いたします）

縢り方　（第三百八圖出來上り寫眞參照）

一、最初に外側の九糎を端より一糎に折り、次に四糎に折つて三ツ折とし鞅をかけ、三十番の糸で兩ヘムステツチを致します。



第三百八圖　テーブル掛出來上り



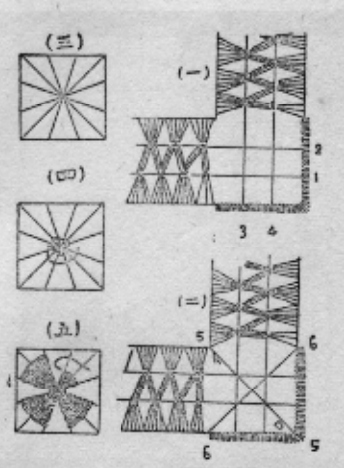
第三百九圖　糸の拔き方

二、次に内側の二糎に拔いたところは同じ糸で先づ二方に穴縢りをして、第三百十圖(一)の1234の順に糸を付け

菱形四本結び別け勝りを致します。同(二)圖の5-6の糸はあとから別に渡します。

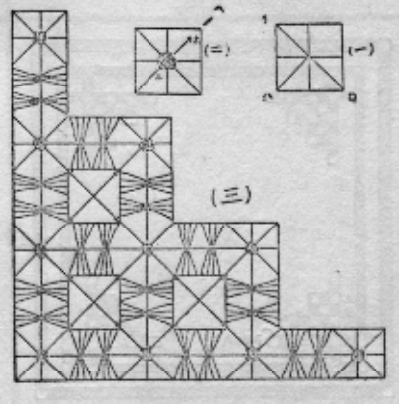
三、同(二)圖のイからロに針を入れて裏から糸をしめますと同(三)圖のやうになります。

四、次は二十番の糸で、中心を二本づゝ抄つて二回繰ります。(同(四)圖)



第三百十圖　勝り方

五、同(五)圖の如く隅の一本を中にして三本の糸を抄つて（やはり二十番の糸）繰り、裏をくゞらせて中心へ渡し又次の三本を繰ります。



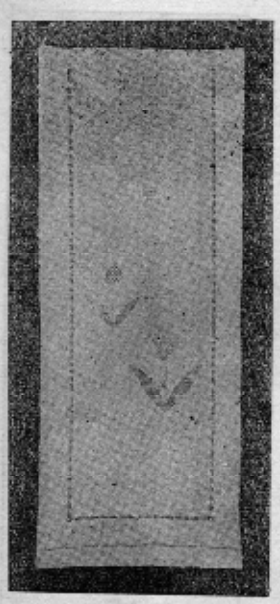
第三百十一圖　菱形四本結び圖

六、次の内側七糎抜いたところは三十番で（凡そ三糎半位の巾に抄つて）菱形勝りをし、格子に明いた個所へは水玉勝りを致します。水玉勝りとは第三百十一圖(一)の如く(イ)から(ロ)、(ロ)から(ハ)に針を出し（但しロ）から(ハ)は裏側を通る）中心で一ツ結び一本づゝ抄つて三回繰り四回目は同(二)圖(ニ)から(ホ)に針を通して(ヘ)に止めます。

七、四隅の模様は第三百十六圖(三)の如く水玉勝りと菱形勝りを交互に致します。（但し一格子毎に糸を切らず）その間々の殺つた布の上は、端で一ツ結び、斜に渡し乍ら續けて勝ります。

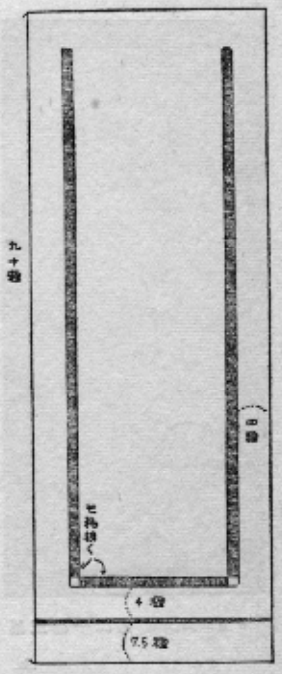
鏡掛け

材料　クリーム色薄地の麻布巾三十四糎、長さ九十糎、四十番及び百番カタン糸一個宛。



第三百十二圖　鏡掛出來上り

糸の抜き方　第三百十三圖の如く糸を抜き次にチューリップの花と葉の圖案は第三百十四圖、第三百十五圖を參考にして適當に擴大し厚紙に描き、切抜いて用布の上に適宜に配置して周圍を描き寫します。



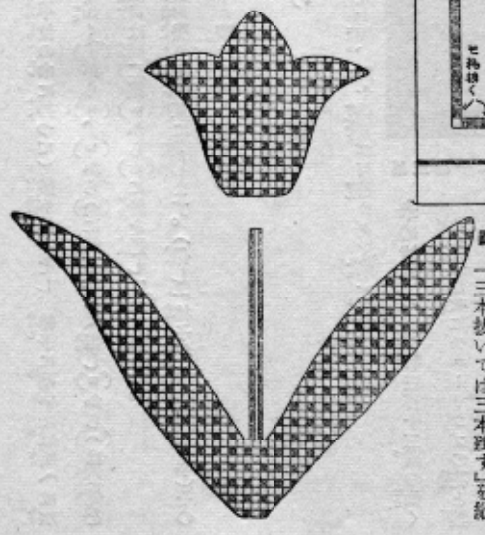
第三百十三圖

花と蕾の中は「四本抜いては四本殘す」これを縱と横にして格子にします。葉の中は、「三本抜いては三本殘す」を縱と横にして格子に致します。

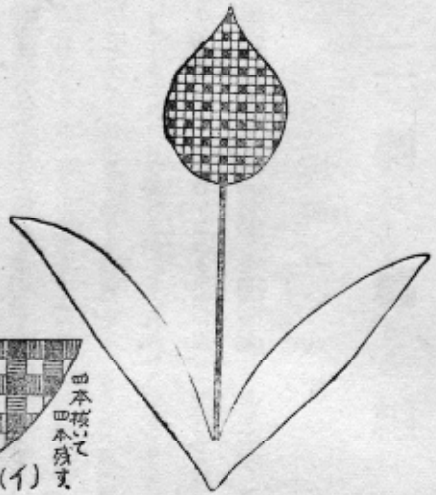
蕾の方の莖は第三百十六圖(イ)のやうに三本抜き、花の方の莖は同(ロ)圖のやうに中央に五本殘し、その兩側を三本づゝ抜きます。

膨り方（第三百十二圖出來上り寫眞參照）

一、先づ縱の兩端と鏡掛の裏側に折り返る分の端を六粍に折り、それを三ツ折りにミシンを掛けます。



第三百十四圖

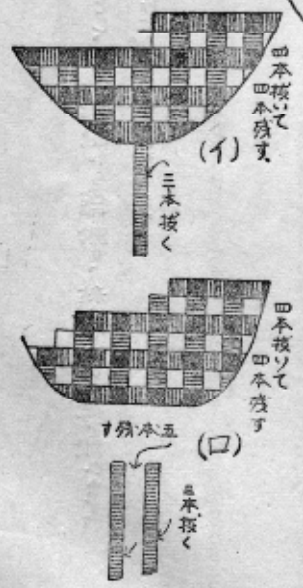


第三百十五圖

二、次に鏡掛の垂れとなる七糎半殘した方を始め五粍に折り、次に三糎半に折つて前に説明しました手提袋のやうに鞍をかけて、四十番の糸で兩ヘムステッチを致します。

三、内側の七粍抜いたところは、先づ布の裁目に四十番糸で穴膨りを致します。次に、八本抄つて皷形膨りをし、下の二ケ所の格子には水玉膨りを致します。

四、蕾の方の莖は裏から百番の糸で皷形膨りを小さくします。花の方の莖は裏から、同じ糸で三本づゝの千鳥ヘムス



第三百十六圖

テツチを致します。

五、花と蕾は表から百番の糸で籠の目膝りをし、葉は全部裏から石目膝り、糸はやはり百番を用ひます。

六、鏡の裏側に折り返る方は、ホツクを附けて合せるやうに致します。

二、刺繍編

刺繍について

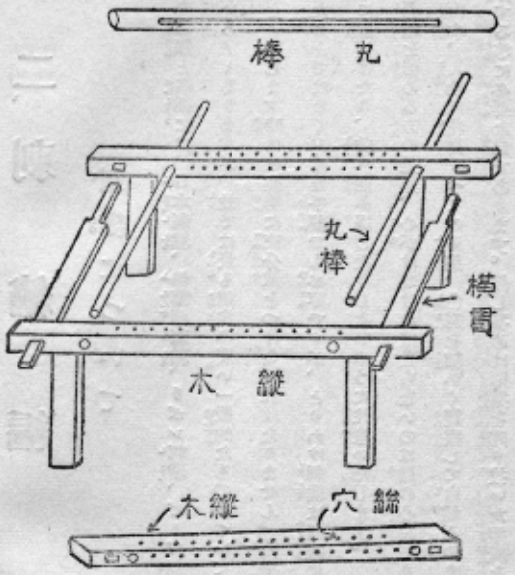
刺繍の種類と名稱には、日本刺繍、佛蘭西刺繍、リボン刺繍、ビーズ刺繍など刺し方によつて、またその材料によつていろ〳〵ありますが、玆では最も用途の廣い一般的なものについてお話いたします。

刺繍をいたします時には姿勢に充分氣をつけなければなりません。姿勢を正しく保つといふ事は强ち刺繍ばかりに限つたことではなくどんな手藝でも必要ですが、とりわけ刺繍は興味に囚はれ易い手藝でありますから、眼を余り作品に近づけたり、前へ屈み過ぎたりしないやうに注意いたします。

尙、刺繍を修める方の是非、心がけなければならないのは繪の心得であります。これは最も大切な基礎でありまして、山水、人物、花鳥すべての形態、色彩を細かく觀察して自然そのまゝを、また或はその一部分をとつて圖案を創作する等に必要な爲であります。然し初めは圖案を彫り拔いた型紙を使つて差支へありません。

日本刺繍

用具と使用法

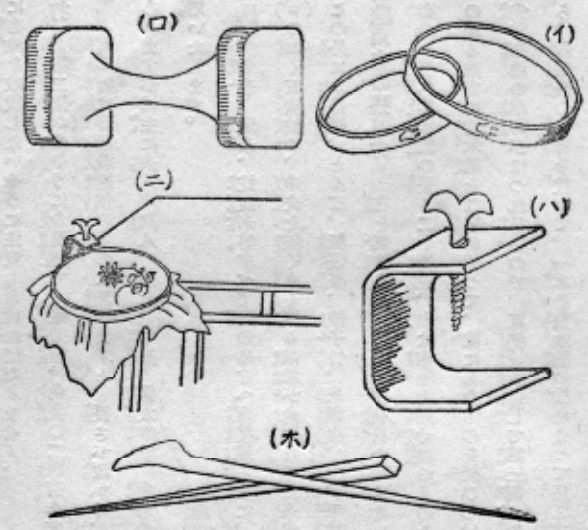


第一圖

刺繍臺　第一圖のやうなもので、用材は檜、又は朴等で作り、横貫、縦木、丸棒、脚の部分から成立つて居ります。いづれも取り外しが自由で又組立ても容易に出來るやうになつて居ります。寸法は大小いろ〳〵ありますから、品物によつて適當な大きさのを選びます。普通枠の長さ七十糎位のものでしたら一寸したものには間に合ひませう。臺の左右にある丸棒は兩端ともに五・六糎を殘して、巾一糎内外の細い溝を堀り、此處に布地を挟んで留めるために、一・二個所の釘穴をあけてあります。そうして縦木の上面と側面とにある絲穴といふのは、布地を張つた時、中のたるまないやうに適宜に糸で布地の耳を張るやうになつて居ります。

丸枠　之も第二圖(イ)のやうに、外枠、内枠で一組の枠になつて居るもので大小數種ありますが、直徑十八・九糎位のものが適當です。歐米刺繍は皆この枠を使用いたして居ります。

輪挟　是れは第二圖(ハ)(ニ)のやうに丸枠を挟



第二圖

んで、机などの角へ取り附けますと、兩手が自由に使へて輕便なものであります。

妻大圖

鋏　刺繍用の鋏は普通日本鋏の小型で、肉が薄く先端の鋭いものが適當であります。刄先が鋭いため使用する時に布地を破損しないやうに注意しなければなりません。

目打　第二圖(ホ)のやうに金屬製で、薙刀型、角型の二種有ますが、頭部が扁平の薙刀型の物を多く使用します。

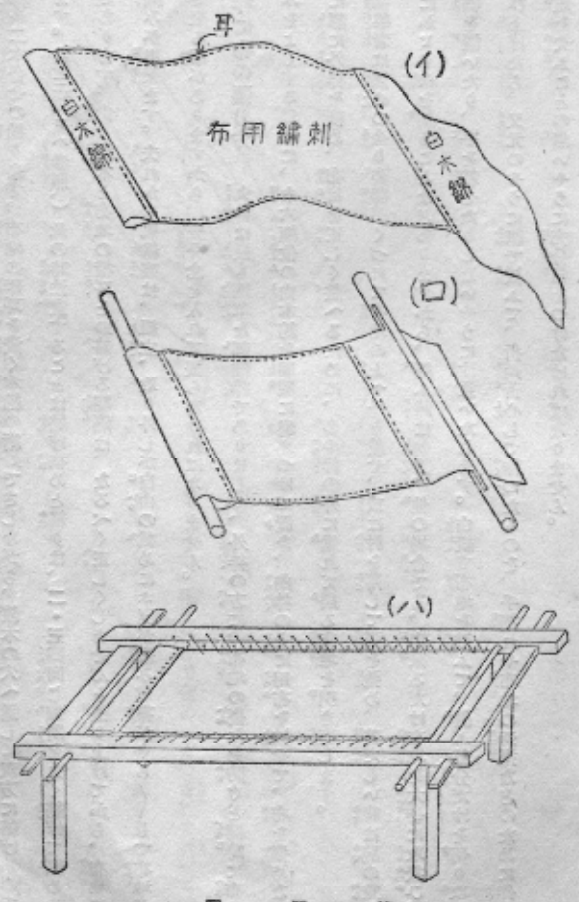
針　刺繍針は普通裁縫用のものに比べますと、長さが短かく、めどがやゝ長目になつて居ます。種類もいろ〳〵ありますが、主に糸八、細八、糸七、常細、常太等で、金糸の高縫の場合には、メリケン針の十番か十一番を使用いたします。

卷駒　金糸、銀糸、蛇腹糸等すべて針のめどへ直接通さずに、使用する糸類を卷き附ける木製の器具で、第二圖(ロ)の如く五糎位の、中央を細く丸く挟り兩端が角になつた糸卷であります。

この外に糸捲臺、とんぼ、紙張臺、仲子竹、糸撚臺、鑁、毛拔等がありますが專門に渉りますから省きます。

刺繍用布の張り方　布を刺繍臺へ張るには、布目の曲らないやうに注意いたします。先づ第三圖(イ)のやうに用布の一端へ白木綿の長さ二十糎位、巾は布地と同寸法のものを、針目を細かく縫ひ附けます。他の一端へは丸棒の通る程度に白木綿を二重に折つて、輪にしたものを縫ひつけて置きます。

尙、布地の兩耳がほつれ易いので、五粍位折返して第三圖(イ)のやうに縫つて置きます。以上の手順が終へましたら、刺繍臺の丸棒を拔いて、一本を白木綿の輪になつて居る方へ通し、臺の丸棒の穴へ元のやうに挿し入れ、他の布端は一本の丸棒の溝の中へ挾み、卷きつけて、臺の端にある丸棒の穴へ入れ、布地の充分緊く張るまで、徐



第三圖

かに丸枠を通し手ら引き締め、布地が延び切つたら丸枠にある釘穴へ釘を通し、之を横貫にかけて止め置き、木綿糸二本合せの撚り糸で、布地の耳を浅く木綿の綴針でさしながら、縦木の穴へ通して双方に結げるのであります。（第三圖ロ（ハ參照）此の時注意することは結げ初めと終りは、二・三回同じ個所をよく結げて締めることであります。尚、縦木と布地の横耳との結げる間隔は、なるべく正しくしませんと張り上げてから、布地に伸び縮みが出來ます。夫れから刺繍臺は、組立、取り外しが自由の爲めにホゾが設み、臺がぐら〳〵して布地が歪んで來る事がありますから、充分念を入れて張らなければなりません。

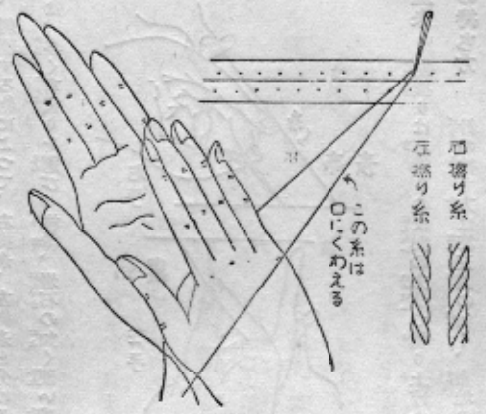
丸枠に布の張り方　丸枠は最も簡單な刺繍枠でありまして、外枠の方に、布地の傷みを防ぐと同時に布のなじみをよくする爲めに、巾六糎位の白木綿を周圍に巻きつけて置き、内枠の上に用布を被せて、布を傷めないやうに靜に外枠を嵌め、布目を正しく整へるために、多少枠の外に露れて居る布地を引き直します。

初學者は熱心の余り姿勢がくづれて布地の上へ手を載せ、或は肘を落して張を弛め、甚だしい時は腕の重みの爲にかゞり糸を切ることなどありますから、縫ふ時は勿論、他の場合でも、出來るだけ布地を大切に取扱ひ、重い物を置いたり、手を載せたりしないやうに注意いたします。白紙で布地を被ふて、縫ふ部分だけを切り取り、縫ひ上げたら、又元のやうに紙で被ふて、折角苦心して作つたものを、手摺れや布地の汚損などのために作品の價値を失ふことの無いやうに充分氣をつけなければなりません。

下絵のつけ方　型紙は生紙又は美濃紙を二三枚貼合せて、生漉を引いたものでありまして、これに下繪が刷つてあります。この型紙を布地の上において、小刷毛で粉白粉又は胡粉を靜かに刷りこみますと、布の上へ下繪が寫ります。

次に肝要な事は、糸の縒り方、針の持ち方、及び針の運び方等であります。

釜糸の撚り方　第四圖のやうに先づ目打を刺繍臺の向側の縦木の糸穴へ挿して、之に釜糸を一本かけ一ツあやにして輪をかけて留め、その背丈を調べて、背通は等分に分け、一方づゝ別々に下撚りをいたします。そしてその二筋を一緒に合せて上撚りをかけるのであります。

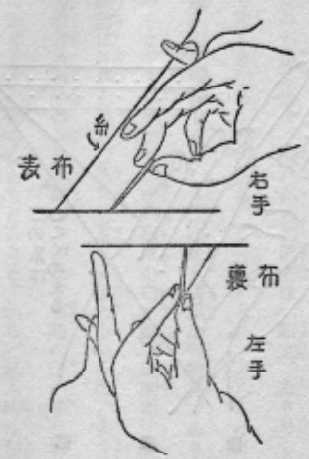


第四圖

下撚りとは初めに一筋づゝ撚る事を云ひ、上撚りとはその一筋づゝ撚つた糸を合せて、下撚りの向きと反對に撚り合せる事を申します。此の撚り方を一本一本の撚りとも割り合せとも申します。若し撚糸の太いのが欲しい場

合は、菅を割らずに一本づゝそのまゝ下撚りをして、二本合せて上撚りをかけます。此の撚り方を二本一本の撚り又は出し合せと云ひます。

尚、刺繍する物によつて、右撚糸、左撚糸と分ける場合があります。例へば花鳥の如くやさしい物に使用する撚糸は、多く右撚りを選び、樹幹、岩石の如く硬い感じを表すには、左撚糸を用ひます。

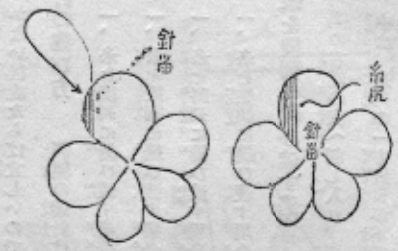


第五圖

右撚糸　釜糸の長さを大抵六十糎内外に切り、四圖の如く一方の端を口へ咥へ、一方を兩掌の間へ挾み、右撚りは左掌を下に、右掌を上にして、手前へ右掌を引おろし五六回繰り返し撚りをかけます。二本とも同じ方法で下撚りを掛ましたら合せて一本とし反對に上撚りをかけたもので撚り上げた糸の撚目の右肩が高ければよろしいのです。

左撚糸　左撚りは右撚りの反對の方法で撚り上げたものであります。

針の持ち方　針の持ち方は第五圖の如く、布地の裏側（刺繍臺の下）では、左手で針を持ち、表側（刺繍臺の上）では右手で針を持ちます。布地の表から針を刺し入れる場合には、右手の中指と拇指とで摘み持ち、針先を定め、小指へ糸をかけて支へながら目的の所へ刺し入れます。布地の裏から針を抜き出す時は、左手の拇指と人差指で針先を定め、更に中指を布地の裏へ輕く當てゝ上へ刺し出します。



第六圖

針留　刺繍の縫ひ初めと縫ひ終りには必ず糸を留めます。針留は普通かくしどめと申しまして、模様の外で行はずに、模様の内に隱し留めるのであります。其の方法は縫糸を針へ通しその末端へ普通裁縫の時のやうに小さく玉結びを作り、模様の中の布地の下より針を布面へ刺し貫いて、約そ二針ほど細かく星縫（第三百五頁基礎縫星縫參照）をして留めて置きます。

兩面縫等の場合には糸尻に結び玉を作らずに針留しなければなりませんから第六圖のやうに最初表から針を入れ、糸尻を少し表へ殘して置いて、直ぐそのそばへ針を出し、前のやうに直ぐ際で星縫を二ツ程して、終りに殘して置いた糸尻を切り去つて、本縫へ移ります。尚、本縫が全部終りましたら其の糸尻は縫の糸列の下（糸列と布地との中間）へ横に針を滑らして抜き出し、糸を引き締めて糸尻を切取ります。刺繍の途中で糸が足りなくなつた場合は、續いて縫はうとする所の極く近い所へ星縫を二ツ程して針留をし、更に又新らしい糸を針に通し、今の針留のすぐ傍で同様の針留をして、漸次縫つて參ります。

針目　針目とは、布地へ糸を渡した場から場へ、針の出し入れされた両端を申します。

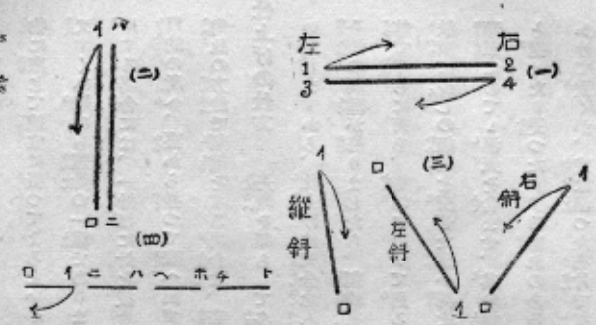
糸渡し　布地の表面へ縫ひ渡された糸の長さを申します。此の糸渡しの長さは縫ふものに應じて長短がありますが、用糸が細ければ短かく、太ければ多少長くとも差支へありません。要するに糸が布地へぴつたり密着して浮かない程度ならば宜しいのであります。

針の運び方　刺縫の運針は、大別して左の四ツになります。

一、糸を横列に縫ひ渡す場合。
一、糸を縦列に縫ひ渡す場合。
一、糸を斜列に縫ひ渡す場合。
一、糸を點線に縫ひ渡す場合。

糸を横列に縫ひ渡す場合　糸を横列に縫ひ渡す場合は、第七圖(一)の如く、初め左端(1)の裏から針を引き抜き(2)の右端の表へ刺し入れ、更に(3)へ引き抜き(4)へ入れ、順次實横の糸列で縫ひ埋めるのであります。習ひ初めの中は、糸列の一方針目が不揃に下がる向に針が出ますから、充分注意して縫はなければなりません。

糸を縦列に縫ひ渡す場合　之れも第七圖(二)のやうに(イ)の裏から針を引き抜き(ロ)へ刺し入れ、順次(ハ)(ニ)と右方へ縫ひ進む方が、手都合よく針が運びます。眞直ぐの縦は勿もすると、糸列の下方が左へ傾き勝ですから、特に注意を要します。



第七圖

糸を斜列に縫ひ渡す場合　右斜と左斜とに依つて針使ひにも相異があります。右斜と申しますと右の肩が上つた斜で、左斜と申しますのは左の肩が上つた斜を云ふのであります。右斜の縫ひ方は、第七圖(三)のやうに(イ)の裏から針を引き出し(ロ)の表へ刺し入れます。左斜も圖のやうに(イ)から(ロ)へ渡して縫ふことは前と同じでありますが、右斜は上方から下方へ、左斜は下方から上方に向ひ針を入れますと手都合よく運びます。しかし斜が急で、ほとんど縦列に近い場合は、右斜、左斜とも上方から針を抜き出し、下方へ向けて刺し入れた方がよろしいです。

糸を點線に縫ひ渡す場合　多く返し縫に針を運びます。この時注意することは、第七圖(四)のやうに(イ)の裏から針を抜き、(ロ)の表地へ刺し入れ、其の針を(ハ)へ抜き(ニ)へ刺し入れる時、(イ)の糸の端へ針を刺し重ねるやうにいたしませんと、長い線等を縫ふときにはポツ〳〵針目が見えて醜いものになります。

以上で運針の大體は述べましたが、つまり運針の方法は針の出し入れのしやすい事を基として、左右上下は縫ふ物に應じて適宜に扱つてよろしいのであります。

又すくひ縫ひも運針の一種でありまして、主に片手縫に應用されて居ります。即ち佛國西刺繍のやうに丸枠を使用する場合には、一針毎に針を抜き刺しいたしませんで、用布をすくひ針で一度に、表面から入れた針を同時に目的の所へ、裏から抄つて表へ出す方法であります。

尙此の方法で刺繍をする場合は、布地を丸枠に張る時緩めに張め針をすくふのに便利なやうにしておきます。

仕上げの仕方　丹精を盡らして多くの時日を費した苦心の作品も、仕上げの巧拙に依つて出來榮えに大變影響いたしますから、仕上げは充分念入りにしなければなりません。

全體の刺繍が終りましたら、刺繍臺に張つた儘で臺の四脚を取り外し、襯にして徐かに裏から尺度又は細い竹等で平らに打ち、布地に附いて居る塵埃を浮かせ、表から天鵞絨布或は眞綿等で拭ひ取ります。次ぎに、裏から鉄糊に少しの姪糊を交ぜた薄い糊を、右手の中指の頭へ附け、刺繍の裏糸全體へ輕く擦り込み、更に裏側全體を蒸氣にあてゝ濕氣を含ませ、其の濕氣の乾く迄共のまゝにして置きます。併し布地の色合に依つて蒸氣をあてると縮せたり變つたりする處れのある物は避けなければなりません。その代りに霧吹で裏からサツト輕く霧を吹きかけて置くか、或は濕つた布片で拭いて置くかして、日光又は火氣を避け、自然の乾燥を待つて刺繍臺から取り外します。

刺繍臺から取り外した作品を藏つて置くには、決して折つたり疊んだりしてはいけません。縫ひ糸の浮かないやうに表を外にして丸枠等に卷いて置くのが一番よろしいのです。併し紗紗等に高縫をした場合は、丸枠に卷かないで刺繍の部分を折らないやうに輕く疊んで置きます。

以上で大體刺繍の要旨を述べ終りましたから、是れから基礎の名稱とその縫ひ方を說明いたします。

基礎縫

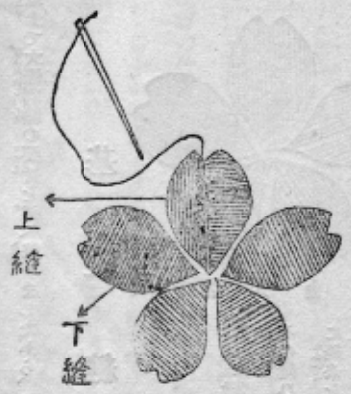
平縫（ひらぬひ）

第八圖

これは普通一番多く用ゐる方法でありまして、一名平糸縫とも申します。その縫ひ方は平面に縫ふのでありまして、初の中は常細で、縦、横又は斜に縫糸を同じやうに密接させて、平らに縫つて參ります。第八圖の櫻花の縫はその縫方方向を示したものであります。

肉入縫（にくいりぬひ）

一名高縫ともいひ、薄肉、中肉、高肉等の別がありまして、縫ふ物により、木綿糸で下縫をして、其の上を釜糸又は撚り糸で縫ひかぶせ、又は綿を適宜にあてて縫ひ附け、その上を平縫することもあり、或は厚紙の類を型通りに切つたのをのせて、その上へ平縫をする事もあります。

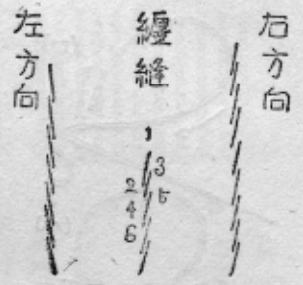


第九圖

初め上縫の方向と反對に圖の中側に平縫をし、それを蔑として上縫をいたします。肉入縫は元來平縫のやうに平らな地へ糸をかけ渡すのとは違つて、凸凹した所を縫ふのでありますから、糸の伸び縮みの出來ないやう注意する事が肝要であります。（第九圖參照）

纏縫（まつひぬひ）

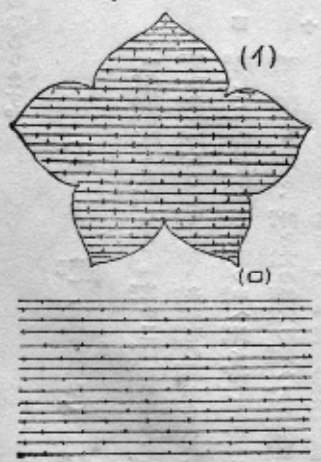
この縫ひ方は主に、線縫に應用されて居ります。楢木の細枝、又は草の莖、葉脈のやうな部分を縫ふ時に用ゐる方法で、用糸が右撚りなら、第十圖のやうに右方向に縫ひ、左撚りならば左方向に縫ひます。初め針留めをしてから、針を布の表へ拔き出し、適宜に一針長く渡し、次ぎに其の針を前の針目の中程から引き出し、戻して刺すのであります。（第十圖まつひ縫のしかた）



第十圖

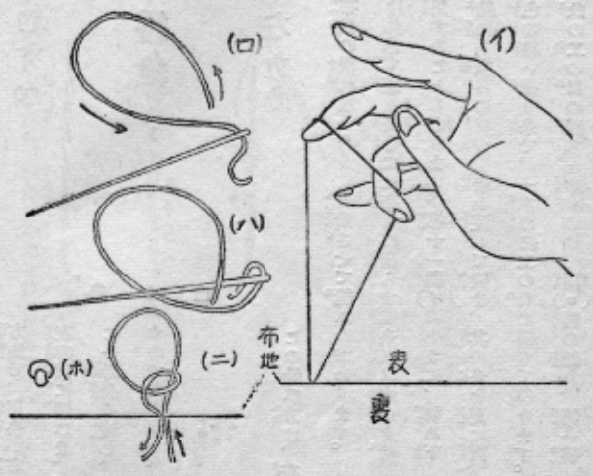
菅縫（すがぬひ）

この縫ひ方は、布地の織目（をさ）の太細に應じて、撚糸も太細を選み、布目の現れないやうに密着させて縫ふのであります。けれども或る場合には布目に拘らず細糸又は太糸を使用することもあります。第十一圖（イ）のやうに、初め下繪通り織目に從つて糸を渡して置き、其の糸を更に同色の細い撚り糸で、一本毎に工の目に綴ぢてゆきます。此の工の目の綴ぢと申すのは、同（ロ）圖の通り、第一線を適宜の間隔に綴ぢて置き、次ぎの第二線は一線の綴



第十一圖

ち目の間々を綴ち、三線は再び一線と同じ處を綴ちるのであります。



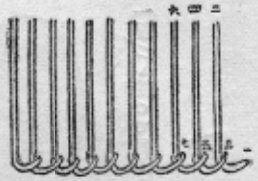
第十二圖

玉縫（たまぬひ）

一名相良縫とも申します。第十二圖（イ）のやうに初め縫ひ糸を針止めしてから、糸を布の裏から表へ拔き出して、輪を作りその輪の中へ針を差し入れ、結び玉を作りながら、針を元の針穴の側へ入れて裏へ引き拔きます。此の時糸の引き加減は勿論結び玉の大きさも不揃にならないやうに注意しなければなりません。圖中ロ（ハ）（ニ）は縫方順序を示したものでホは出來上りの形であります。

すから縫

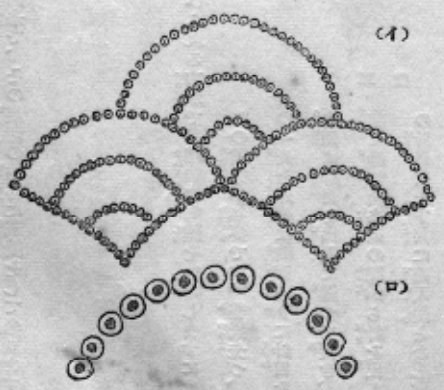
第十三圖のやうに（イ）から拔き出した針を（ロ）へ刺し入れ、（ハ）へ拔き出す時に、（イ）から（ロ）へ渡した糸へ絡げながら縫つてゆく方法で、主に布地の緣止め縫に應用されます。ボタンの穴かがりもこの縫方です。



第十三圖

星縫（ほしぬひ）

一名纏繫縫とも申します。初め釜糸一本を二ツに分けて撚り合せ、針止めした後、織目の横糸一本へ一針づゝたてに返し針に縫つてゆくのですが、兎角初歩の中は針目が不揃になり、又は針足が長過ぎて、その名のやうに星とも纏繫粒とも見えないやうになり醜ですから、針目針足の揃ふやうに充分注意が必要であります。



第十四圖

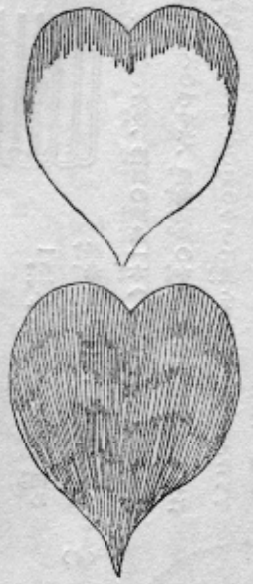
絞縫（しぼりぬひ）

一名鹿の子縫とも申します。初め白の撚りの弱い糸で太さに應

じた星縫をして置き、次に布地より少し濃い色の少し細目の別糸で、その星縫の中心に玉縫をして參ります。第十四圖のやうに縫ひ上りは丁度紋のやうに見えます。

挿縫（さしぬひ）

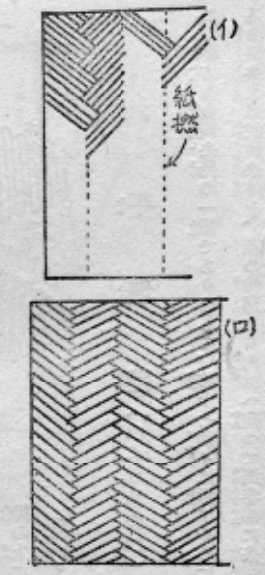
此の縫ひ方は總て色の濃淡とか、影の明暗を現はす場合に用ひられる方法で、精細に刺繍をいたしますには是非この縫方が必要です。普通先づ、上段の一列を外側は輪廓通りに針目を揃へ内側は針目を出入に縫つて置き、次に前に縫つた糸列の間から針を出し、其の針目は上下共に出入縫となし、次に三段に移つて、順次第十五圖のやうに一段づゝ縫つて行くのであります。動物の毛並等を表すには此の縫ひ方に優るものはありません。



第十五圖

網代縫（あじろぬひ）

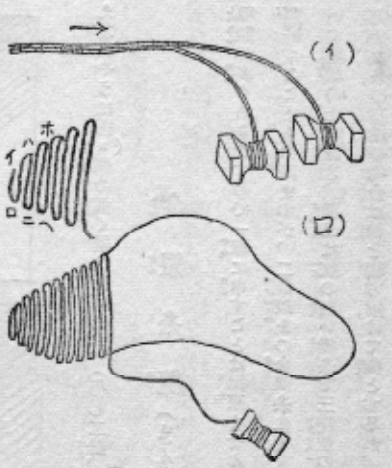
一種の組み縫ひでありまして、多く籠のやうなものを縫ふ場合に應用されます。縫ひ方は、初め第十六圖（イ）に示してある點線の上を、上縫と同色の細い撚り糸で、紙撚を綴ぢ附けて置き、其の紙撚を芯として、左から出した針を紙撚の右側に入れ、右から出した針を紙撚の左側に、四針或は五針位づゝ、交互に組合せながら密接させて、紙撚が少しも見えないやうに同（ロ）圖の如く縫ひ上げます。（但し二針、三針位に幅狹く組み合せる事もあります。）



第十六圖

金銀糸縫（きんぎんしぬひ）

種類が多くありますので一樣に申すことは出來ませんが、毛金銀糸又は一掛金銀糸位ならば、それを針に通して刺繍することも出來ますが、二掛以上の金銀糸になりますと、第十七圖（イ）のやうに卷胸に卷いて之を少しづゝ解いて模樣の上に置き、黄又は紅の細い撚糸で三粍位の間隔に綴附けてゆきます。此の方法を駒取縫と申します。尙金銀糸の高縫の場合は絁を綴ぢ附けて肉とするか、又は木綿糸で肉入縫をして置き、其の縁を細い紙撚を黄又

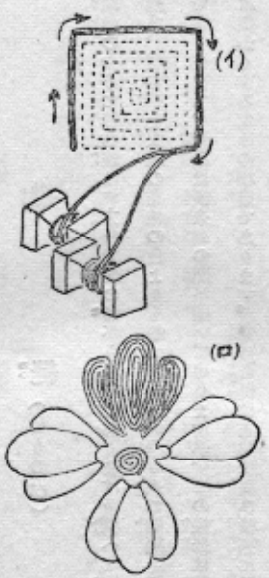


第十七圖

は白のぞべ糸で綴ぢ、巻駒に巻いた金銀糸を、其の上へ、縁から縁に渡し、即ち抵撚の外側に、金糸ならば黄、銀糸ならば白の撚りの強い糸で留め縫ひをして、同ロ圖のやうに(イ)から(ロ)に、(ロ)から(ハ)に、と順次折り返して行きます。此の方法を和蘭縫と申します。此の場合は金銀糸の、糸渡しの長いものでも、中途に工の目の綴ぢを入れません。余り糸渡しの長い場合は、附縫の上に細をつけて糸渡しの浮き上らないやうにいたします。

平埋縫（ひらうめぬひ）

この縫方も金銀糸縫の一種でありまして、第十七圖(イ)に示すやうに、矢印の方向にならひ二ツの巻駒へ巻いてある金銀糸又は蛇腹糸等を、圖の輪廓より内部へ向つて渦巻形に糸列を綴ぢてゆきます。綴ぢ糸は金糸ならば黄又は赤の細い撚り糸、銀糸ならば白、其の他は同色糸の細い撚糸を使用します。



第十八圖

この方法は本来、形の中心を起點として外部へ向つて巻いてゆく方がよいのでありますが、内部に區劃のない形を縫ひ詰める場合には、中心に倚り所がありませんから、最初の渦が狂つて来て外側の輪廓の所へきて形が合はなくなる處れがありますから、普通は外の輪廓より内部へ向つて、糸を綴ぢながら縫ひ埋めてゆく方が安全であります。尚、圖は解り易くする爲に、間が隙いて居りますが、實際は隙かず、重ならず、密接に列べてゆくのです。

友禪縫（いうぜんぬひ）

一名切伏縫とも申します。種々の色彩ある縮緬又は綸等を好みの花鳥等の形に切り抜き、それを希地の適當の位置へあてゝ、同色の細い撚糸でその縁を綴ぢ附けるのであります。

絽縫（ろぬひ）

絽繍は絽刺とも云ひます。その縫ひ方は先づ布地へ図案を描き、次で適當の糸を太く撚り合せ、その模様に従ひ絽布の段の目を拾つて綴刺に、或は筋違ひに一ツの目に限らず、時としては二ツ乃至三ツも間を置いて、すくひ縫にする方法で、主に紙入、煙草入等に應用されて居ります。すべて絽刺は一面に縫ひつぶすものでありますから色に充分注意を要します。

織縫（をりぬひ）

織地のやうに縫ひ現はす方法で此の名があるのであります。例へば衣服の定紋を縫ふ時には、横列の糸を白糸で縫ひ、綴ぢ糸を衣服の布地の色よりもやゝ濃い細い撚り糸で間隔を細かく綴ぢます。その方法は全く菅縫と同じでありまして、菅縫は横糸列の間が隔いて居りますが、この織縫は隙間なく糸を並べてゆき、綴ぢ目も菅縫よりは細かくするだけの相違であります。尚、菅縫は布目に従ひ横列に縫ふに限られて居りますが、織縫は必要に應じて方向を変へて縫ふ場合もあります。

紋縫（もんぬひ）

この縫ひ方は衣服その他に紋章を現はす縫ひ方の総称でありまして、主に、菅縫、星縫、平縫、繻縫、金銀糸平埋縫、和蘭縫、其の他幾種もありますが、それ等の應用であります。

以上の外尚ほ數種の縫ひ方がありますが、前述の各項を充分に習得いたしましたなら、刺繍の要訣をつかみ、何にでも應用する事は、むづかしくないと信じますから省きます。

之から實習へ移り説明いたします。

應用縫

額面（櫻の折枝）

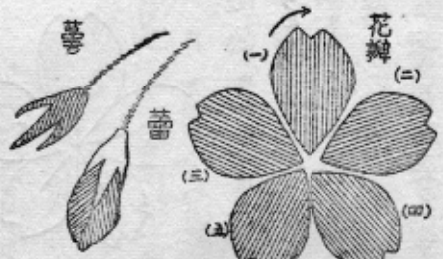
材料　鼠色琥珀地。

釜糸（淡黄、濃黄、茶褐色、海老茶、茶鼠、黄、白）

用具　刺繍臺、針（常細、細八）

第十九圖　出來上り圖

縫ひ方　平縫を應用した櫻の折枝を縫ひませう。前にも述べた通り、この平縫は釜糸でも撚り糸でも隨意ですが茲では花瓣を釜糸で縫ひ上げ、枝と葉は撚糸を使用いたします。



第二十圖

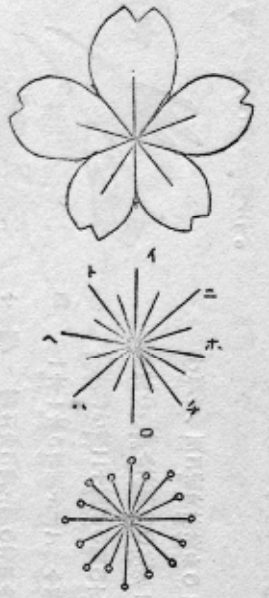
花　花瓣及び蕾から初めます。淡い鴇色の釜糸をそのまゝ常細へ通し第二十圖のやうに五片の中央の瓣(1)より縦に圓の如く左の端より、矢印の方向に縫ひ上げ(2)へゆき(3)(4)と順次五瓣を縫ひ蕾へ移ります。蕾は少し色の濃い鴇色の釜糸で圓に描いてある方向に斜に縫ひ、蕚へ移ります。

蕚　蕚は次に使ふ葉の茶褐色の釜糸へ、二菅の海老茶色の釜糸を交ぜ、一本一本の右撚として、今縫つた蕾の針目へ少し縫ひ重さなる程度の針渡しで第二十圖蕚の圖の方向に縫ひ上げます。この撚り交ぜ糸の作り方は、初め茶褐色の釜糸一本を二分して、左右より一菅づゝを取つて置き、更に海老茶釜糸の一菅づゝを、前に分けて置いた二筋へ左右一菅づゝ加へて撚り上げます。

莖もこの蕚に使用した、撚り交ぜ糸でまつひ縫を應用して縫ひ上げ、其の元へ集まる嫩葉も同色で斜に針足短か

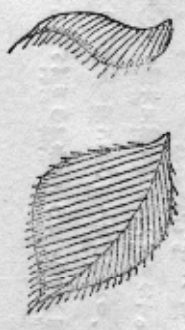
く縫ひます。

蕊　白色の一背合せの右撚糸を細八へ通して、第二十一圖のやうに先づ五鐵の中央の一鐵より下の鐵と鐵との中間へ一針渡し、次にとなりの鐵の中央より出した針を、又鐵と鐵の間へ入れ、順次五鐵へ渡します。圖のイロハの順のやうにいたします。各鐵に渡した芯糸の中心は堅く一針きとめ寄せて置きます。尚、その芯の尖端へ黄色の四管一本の右撚り糸で星縫の花粉を附けます。



第二十一圖

葉　茶褐色の二本一本の右撚り糸で中央の葉脈を施とし、第二十二圖のやうに葉尖より左右へ片側づゝ斜に縫ひます。此の方法を制縫と稱します。全部の葉が縫ひ終りましたら、その縁へ葉の糸の一背と、更に同系統のやゝ黄ばんだ茶褐色の釜糸一背とを撚り交ぜた糸を葉の外部へ出して環らにかけ渡して置きます。


第二十二圖

枝　茶鼠色の釜糸の二本一本の左撚りで、その撚り目の方向通り左肩を高く綜縫といたします。

尚、針は糸の太細に應じて替へますが、次から一々申しませんから注意して使用して下さい。

壁掛（百合）

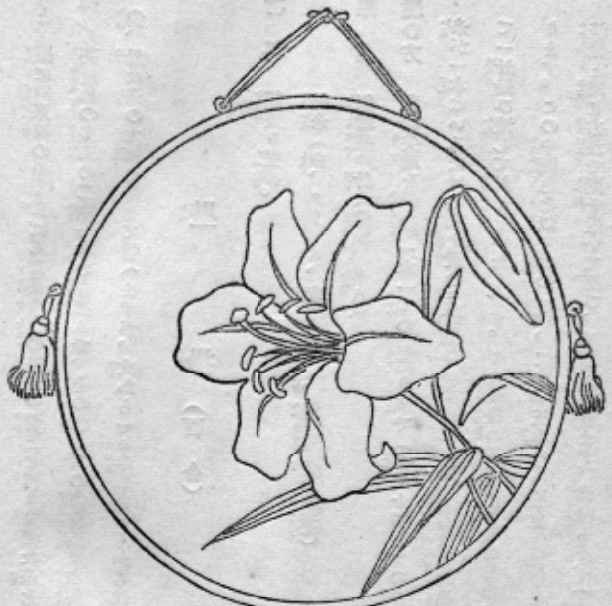
材料　絹張り壁掛。

釜糸（白、クリーム、青磁、濃綠、淺綠、黄、金茶）

用具　刺繍臺、針（常細、糸八）

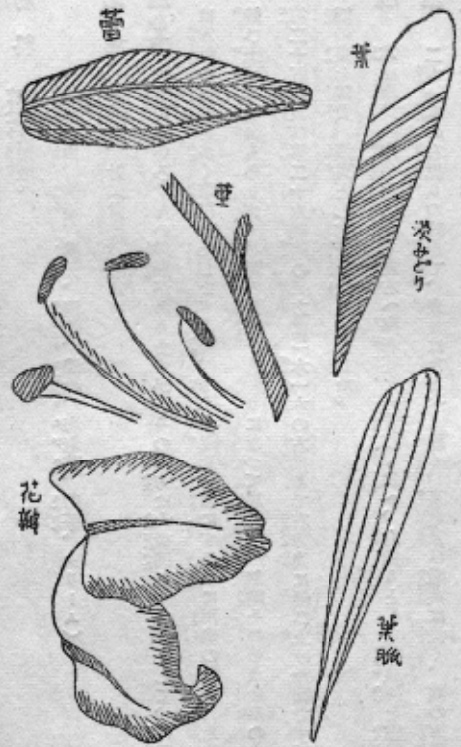
縫ひ方　葉は尖端を淺綠一本一本の右撚り糸で（第二十四圖）の方向に斜縫とし、中央まで縫ひ進みましたら糸が一本はいるだけの間を置き三針縫ひ、次に二本はいるだけ間を置いて二針縫ひ、又三本はいるだけ間を置いて一針縫ひ渡して針留をいたします。この淺綠の縫方が終りましたら、次に濃い綠と淺い綠の撚り交ぜ糸をつくります。この中間色を以て前の一本、二本、三本のはいるだけ間をあけてある所へ縫ひ入れ、次に、又此の糸で淺綠と同じ方法で間を置いて縫ひ、濃綠へ移ります。濃綠も亦、一本一本の右撚りで、其の隙間を縫ひつめ全部縫ひ上げます。

次は葉脈へ移ります。葉脈は青磁色を一本一本の細い右撚りとし、葉の尖端から元の方へ大小に應じて三本又は四本一直線にかけ渡し、葉の反りなりに從つて、同色の二番一本の細い右撚糸で、二糎置き位に綴ぢ上げます。



第二十三圖　出來上り圖

花瓣　白を四番一本の右撚りとし先づ蕾の周圍を圖に示す如く、一針長く一針短かく、全部離つて置き、更らに其の糸で押縫へ移り、徐々に中心へゆくに從つてクリーム色にぼかします。ぼかし方は白とクリームの二番づゝを左右へ別け、撚り交ぜて四番とし、前の白と同じ方法で白の一針長く一針短かい間へ深く押し入れ乍ら二段縫ひ上げ、次にクリーム色四番一本へ移り、全部押縫といたします。蘂の中央にある筋は、四番一本の黄色で、圖の方向にならつて斜に縫ひ上げます。かうして花瓣が終りましたら、芯を白の一本二本の右撚糸で尖端を細く、元へゆくに從つて少し太くまつひ縫にいたします。頭は縫捻を黄色の一本一本の右撚りで横に縫ひ、雌蕊を海老茶色で斜に縫つて置きます。



第二十四圖

蕾　は花瓣と同じ方法で圖に示す方向に縫ひ上げます。

萼　淡綠の一本一本の右撚りで、圖の如く右方向に縫ひます。

額面（菊）

材料　鼠色琥珀地。

釜糸（白、淡黄、濃黄、淡緑、濃緑、海老茶、薄茶、クリーム）

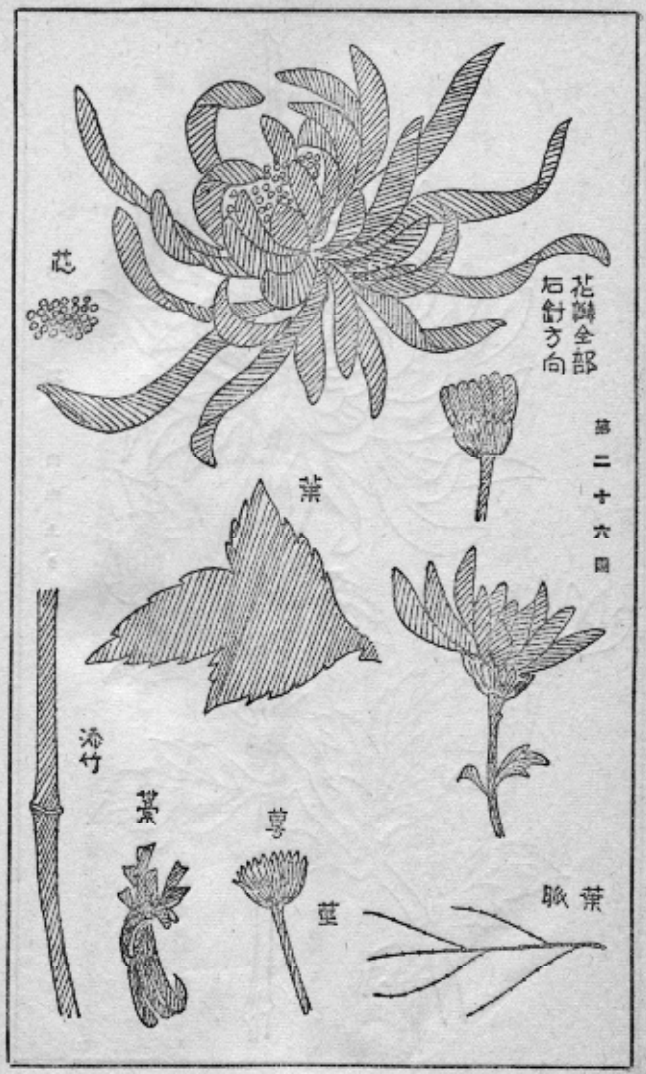
用具　刺繍臺、針（常細、糸八）

縫ひ方　菊にはいろ〳〵の種類がありますが、その縫方は大抵同じでありまして、花瓣の反工合に依つて右針又は左針の斜縫を多く應用いたします。尚、糸の光澤を一樣にする爲に用糸の撚り目なりに、右針とか左針とかで縫ひ上げる場合もあります。瓣の裏表が色彩りになつて居れば、無論そのやうに糸の色を變へて縫ひます。この第二十五圖及び第二十六圖菊の縫方は一本一本の右撚りで右方向に縫ひ上げた圖です。瓣の裏を淡黄、濃黄とし、表を白としました。

蕊　芯は濃黄一本半を二分し左右へ海老茶を一管づゝ加へ、右撚りとして相良縫を應用しまばらに縫上げます。

葉　二本一本の右撚りの緑色で、表葉はなるべく濃く、裏葉及び嫩葉は淡く、圖の方向に下縫をして置き、前の百合の葉と同樣に葉脈を淡緑の二本一本の撚りの強い右撚りでかけ渡し、更に同色の二管一本の右撚り糸で反りをつけながら綴ぢます。

第二十五圖　田來上り圖



萼　初め蕾を縫つて置き、淡綠色四菅一本へ海老茶一菅づゝを加へた右撚り糸で、一針長く一針短かく交互にその蕾の元を縫ひかぶせて置き、次に淡綠ばかりの四菅一本で挿縫いたします。

莖　淡綠の一本一本の右撚り糸で斜に縫ひます。

添竹　薄茶一本一本の右撚り糸で圓に示す方向に縫ひ、一節づゝ縫ひ切り、その縫ひ切り目を更に同色の四菅一本右撚りでまつひ縫をいたします。

蕚　クリーム色一本一本の右撚りで、圓の如く右方向に斜縫をいたします。

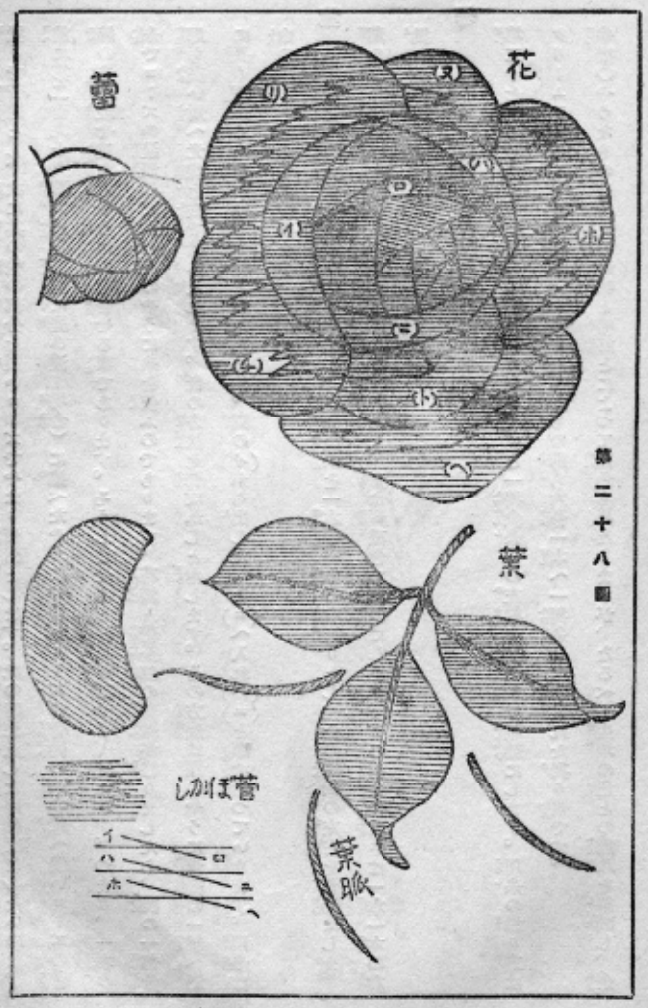
半襟（薔薇）

材料　半襟、縮細地（淡青磁色）
釜糸（ローズ濃淡、白、青磁、クリーム）一掛金糸。

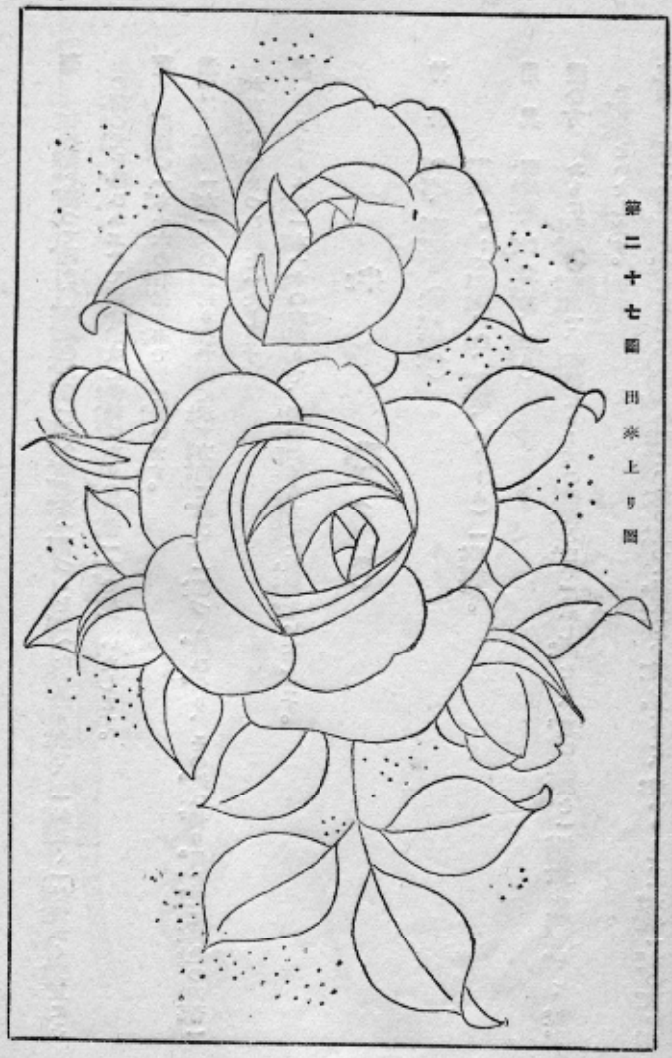
用具　刺繍臺、針（常細、細八）

縫ひ方　おもに菅縫の應用で、花瓣はローズの濃淡と白でぼかし縫をし、葉は葉脈を一掛金糸で纏縫とし、青磁で菅縫をいたします。

花瓣　第二十八圖に示しました（イ）（ロ）（ハ）の順に、瓣の返つた部分と、瓣の先きを、淡いローズ一本半一本の強い右



第二十八圖



第二十七圖　田米上り圖

撚りで背縫とし、次に其の他の部分を濃いローズでやはり背縫とします。此の時注意しなければならないのは、前に第二百九十九頁（糸を點線に縫ひ渡す場合）に述べたやうに、淡いローズの背縫の糸の端へ濃いローズの背縫の糸を戻せ重ねるやうに織ぎ合せる事であります。そうしませんと針目がぼつ〳〵見えます。つまり、一本の糸でローズの濃淡のぼかし染のやうに糸を使ふのであります。花辨と雷全部の背縫が終りましたら、蘂の一部分即ち高い所へ光線を白で縫ひ入れます。此の方法を背ぼかしと申します。その方法は圖のやうに背縫の一線へ斜に長く短かく糸をかけて光線といたします。圖の(イ)から出した針を(ロ)へ入れ(ハ)(ニ)と順次縫つていきます。用糸は白の半本を撚らずに使ひます。

葉　葉脈を一掛金糸で左方向に鎖縫にし、青磁釜糸を一本半一本の右撚りとし、その葉脈の左右を背縫にします。葉の先きの返つた部分は、金糸又は白で背縫とし、葉は青磁色で鎖縫にします。この用糸の太さは一本一本の右撚りが適當です。

雪　雷の蕊は青磁色で背縫にいたします。

第二十七圖の薔薇の周圍にある點々は、クリームと一掛金糸との左撚り交ぜ糸で星縫にします。用糸の撚り方はクリーム三背づゝへ一掛金糸一本づゝ加へたもの即ち六背一本へ一掛金糸二筋入れた撚り糸です。

半襟のやうなものは各人の趣味と嗜好とによつて配色も異なりますが、なるべく生地の色との調和を顧慮し、余り濃色とか、生地の色とかけ離れた色は使はない方が上品であります。

額面（牡丹）

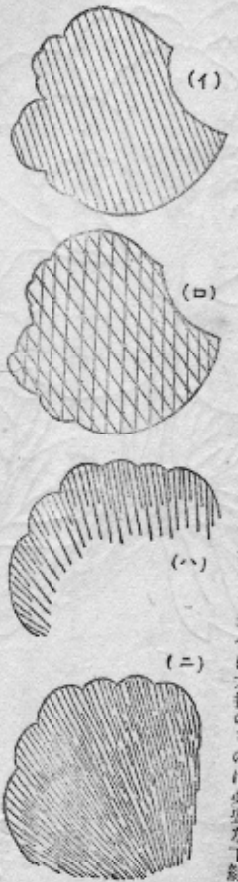
材料　淡茶色　琥珀地。

釜糸（白、淡狐、濃狐、淡緑、濃緑、淡茶鼠、濃茶鼠、海老茶、黄）

第二十九圖

用具　刺繍臺、針（細八、常細）

縫ひ方　花瓣から縫ひ初めます。第二十九圖花瓣の數字は縫つてゆく順序で、(1)の瓣を縫ひ上げ(2)へ移り以下(3)(4)と順次に進みます。縫ひ方方法として第三十圖に示すやうに、一瓣をイの如く、先づ、白一本で撚らずに横に縫ひ詰めて置き其の上へ更に白二筋一本の右撚りでロの如く菱形をかけ渡し、その糸で菱形にかけた糸の交叉したところを動かないやうに留め縫をします。此の方法は巾廣の押縫をする場合に大抵のものに必要な下縫であります。かうして全部縫の下縫が出來ましたらハの如く其の上を白の四筋一本右撚りで一針長く一針短く絡を適宜の長さに縫ひ上げニへ移り、だんだんに圖の如く押しながら白より淺物、濃部と元へゆくに隨つて色を濃く縫ひぼかします。この糸はなるべく弱く撚ります。尙、白より淺へ移る時、余り色が際立ちましたら、白二筋、撚二筋の撚り交ぜ糸を中間色として使用いたします。



第三十圖

葉　葉脈を先きに、濃緑の四筋一本の右撚りで、撚り目なりに右の肩を高く振縫として置き、次に淡緑四筋一本の右撚りで、葉の尖端から葉脈の反りに隨つて押縫し、濃緑へ移ります。第三十一圖の矢印は押す方向を示したものであります。

莖及幹　やはり押縫を應用いたします。糸は淡茶屈二筋と淡緑二筋とで、撚り交ぜの四筋一本右撚りを作り、上から押しながら幹へ移ります。幹の所にある皮は上部を淡茶屈二筋へ、淡緑一筋、海老茶一筋を交ぜて撚つた四筋一本右撚りで適當の所まで押しながらだん〳〵に濃茶屈四筋一本の右撚りへ移り、下まで押縫にいたします。

芯　花粉を縫ふ前に中にある蕊を、淡緑三筋へ海老茶一筋を交ぜた右撚り糸で縫に押縫として置き、次に、黄の一本一本の右撚りで花粉を圖のやうな方向に一ツづゝ縫ひます。

第三十一圖

色紙（松に鳶）

第三十二圖　出來上り圖

材料　繍絲。

釜糸（淺鼠、濃鼠、黒、淺茶、濃茶、黄、焦茶）

用具　刺繍臺、針（細八、普細）

縫ひ方　松を黒繍風に表し、鳶を寂色繍にします。

松樹　先づ松から初めます。松皮を濃鼠と黒とで桂撚り糸を作り、挿縫とします。この桂撚り糸は、樹皮、岩石等の刺繍に適した撚り糸で、糸の表に波形のうねりをもち、幹の皮の感じを現すには適當であります。

桂撚り糸　その撚り方は、第三十三圖の如く、假りに二本一本の撚り糸でしたら、目打へ二本の釜糸をかけ、一方を四管とし、一方は殘り全部の管を合せて一本とし、その管へ充分撚りをかけ、次ぎに一方の四管は撚りをかけずにそのまゝ普通糸を撚る時と同じく、前の撚りをかけた糸と合せて反對に撚りを戻すと撚り上つた糸の表へ波形が現れます。此の糸を桂撚り糸と申します。

糸が撚れましたら第三十四圖の如く、龜甲形の松の皮を幹の挿し方と同じ方向に、濃鼠又は黒で適當に挿縫します。

第三十三圖　二本一本桂撚り糸の圖

四管

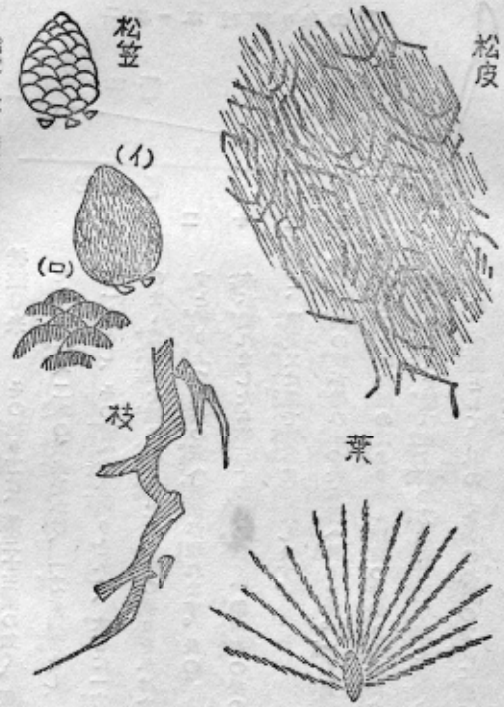
殘りの管

幹　松の皮が縫ひ上つたら幹へ移ります。之も濃淡二色の鼠を適當に配合して今縫ひ上げた松の皮よりやゝ細目の桂撚り糸で同じ方向に挿縫をします。

尙、松の皮を縫ひ表す別の方法に、龜甲形を紙撚りか厚紙を適宜に切つて綴ぢ附け、肉縫として、其の上を幹の挿縫の方向に縫つて置き挿縫へ移る方法もあります。この縫方は主に紗紗、巾着等の刺繍に應用されます。

枝　圖に掲げたやうに右方向に淺鼠桂撚り糸で、斜に縫ひ上げます。太い部分は濃淡二色の鼠で二段に挿縫をす

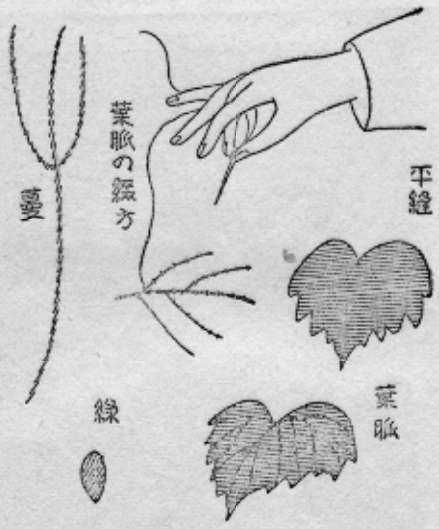
るのも宜しいでせう。又細い枝尖きは徒糸で縫纏にします。（二段の挿縫は牡丹の第三百二十六頁で、枝尖の纏縫は葉脈のところで説明した通りですから省きます。）



第三十四圖

松笠　淡鼠四菅一本の右撚りで挿縫を應用し、（イ）圖の如く縫ひ上げ、次に濃鼠二菅一本の右撚りで段層の筋を纏縫として置き、その上へ更に同じ糸で一針長く一針短く（ロ）圖の如く縫ひかぶせます。

松葉　圖の如く、一葉づゝ濃淡二色の鼠四菅一本を右撚りとし、撚りの方向に纏縫とします。芯にある翠は淡茶一本一本の右撚りで



第三十五圖

圖の如く斜縫とします。この松葉を縫ふには上部から一ツづゝ縫ひ上げ、下へゆくに隨ひ多少縫ひかぶさるやうにしませんと茂つた感じが現れません。

蔦の葉　第三十五圖の如く、淡樺又は濃樺を一本一本の右撚りとして、適宜に配色し眞横に平縫をし、その上へ淡樺の葉へは黄の六菅二本の撚りの強い右撚り糸で葉脈をかけて綴ぢ、濃樺の葉へは焦茶六菅一本右撚り糸で葉脈をかけ渡して綴ぢ上げます。

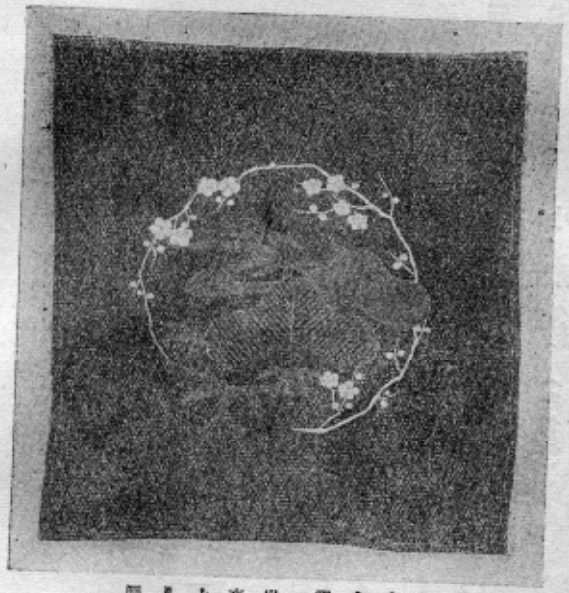
蔓　淡鼠四菅一本の右撚り糸で纏縫とします。

小袱紗（松竹梅）

材料　赤地鹽瀬。

妻大圖

釜糸（白、淡緑、濃緑、海老茶、鼠、黄、金茶）



第三十六圖　出來上り圖

金糸（三掛、一把。一掛、二把。）

用具　刺繍臺、針（常細、糸七）卷駒。

縫ひ方　先づ中央の松から初めます。第三十七圖のやうに、一ツの松を大體三ツに分け、その下部を濃緑の釜糸一本で撚らずに横に平縫をして置き、糸を淡緑に替へて、之れも撚らずにそのまゝ上部を横に平縫にします。中間は濃緑半分と淡緑半分とを交ぜ合せて横に縫ひ埋めます。是れが終りましたらその上へ、一掛の金糸で圖のやうに、中央へ一針渡しかけ、更に、上部三粍

第三十七圖

程下から又一針並べて渡して置き、この線を中央として左右へ二粍置き位の間隔で右斜、左斜にその一掛金糸を渡し掛ます。（圖を參照）、次に黄の二菅一本の右撚りを作り、針も糸七と替へて、斜に渡しかけた金糸と中央の二筋金糸を一緒に二粍置き位に綴ぢ上げます。後の松は、一掛金糸で布地の目にならつて菅縫をいたします。菅縫が終りましたら、淡緑を二本一本の強い右撚りとして、前の松に應用した一掛金糸のかけ方と同じ方

法で中央と、左右の斜とに渡しかけ、同色の二番一本の右撚り糸で綴ぢます。二ツの松が出來ましたら、三撚金糸を二ツの巻絣へまき、一緒に黄の二番一本の右撚り糸でその輪廓を綴ぢます。松の下にある枝は、海老茶一本半一本の左撚り糸で、其の撚りの方向に從づてまつひ縫にします。

竹 淡綠一本半一本の左撚りで、圖のやうに尖端から左方向に全部縫ひ、その上へ一撚金糸三本を渡しかけ、反りなりに黄の二番一本の右撚りで綴ぢます。小枝は淡綠四番一本の右撚りで右方向にまつひ縫をいたします。

水 一撚金糸で背縫にし工の目止めをします。

梅 肉入縫を應用し、白一本半一本の右撚りで、蕾と共に縦に縫ひ、その元へ海老茶一本半一本の右撚りで二針又は一針づゝ針足を短かく幕を縫ひます。蕊は前の櫻と同じやうに縫ひます。

枝 鼠色一本半一本の左撚りで、左方向に尖端からだん〳〵に、根元の方を太く斜に縫ひます。

額面（竹に雀）

材料 薄茶斑珀地。

用具 釜糸（淡鼠、淡茶鼠、茶鼠、茶、黒、白、海老茶、鼠、淡綠、濃綠、淡藤、黄）
刺繍臺、針（細八、糸八）

第二十八圖　出來上り圖

第三十九圖

縫ひ方　鳥類の形態の異なるに隨つて多少縫方手順も異なりますが、大體のきまりとしては玆に說明いたします雀の縫ひ方に從へば、大した誤りはありません。

羽　裏羽より初めます。第三十九圖の數字の順に、丸みの羽、所謂、袋羽から片切羽に行き尾羽へ移ります。糸は淡茶鼠の一本一本の右撚りで圖に描いてある方向に縫ひ、次に表羽へ移ります。これも袋羽の(1)から順に、羽尖を少し白の一本一本の右撚りで縫ひ、次に茶鼠一本一本の右撚りで圖の如く縫ひます。片切羽は、糸を茶の一本一本の右撚りに替へ、數字の順に縫ひます。裏表の兩羽が終りましたら、表羽の茶で尾羽へ移ります。中央の一枚は割縫とし左右を縫ひます。圖はその縫方向を示したものです。羽が皆終りましたら、背から頭を插縫にいたします。

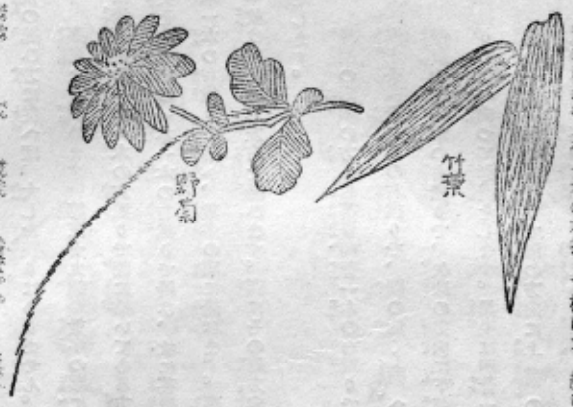
背　尾羽の附根の方から茶鼠四番一本の右撚りで、頭を目がけて、少し丸みをもたせて挿して行きます。

頭　海老茶四番一本の右撚りで、圖の如く嘴へ向つて挿縫をします。

腹　淡鼠四番一本の右撚りで、矢印の方向に下部より眼へ向つて挿縫とし、黒毛ある邊から頬は白の四番一本の右撚りで嘴へ向つて挿縫をします。黒毛は四番一本の右撚りの黒で腹部と頬の挿し方向にならひ挿縫します。

嘴　鼠の一本一本の右撚りで圖の方向に上嘴の尖端から斜に縫ひ、下嘴へ移ります。

脚　鼠の六番一本の右撚りで指尖から橋縫とし、爪は黒の四番一本で二針三針のまつひ縫とします。



眼　普通は黒の六苔一本の右撚りで横に丸く縫ひ、その周囲を淡黄の二苔一本の右撚りで纏縫とします。

竹の葉　葉脈を濃緑四苔一本の右撚りで纏縫をして置き次に淡緑四苔一本の右撚りで尖から挿縫に移り、元へ行くに従ひ濃緑との撚り交ぜ糸を使用し、除々に濃緑へぼかして行きます。（第四十圖）

野菊　花瓣は淡藤色一本一本の右撚りで第四十圖に示す方向に、一瓣づゝ尖端から右斜に縫ひ、中央の蕊は、黄の一本一本の右撚りで適宜に屈縫をして置きます。

全部の縫が終りましたら、背と腹の間隔へ毛掛と云つて、挿縫の方向にならつて背は背の色、腹は腹の色の二苔一本の右撚りを、その輪郭へあまり長くなく多少不規律に糸をかけ渡します。（毛掛の圖參照）

葉は濃淡二色の緑で一本一本の右撚りを作り、割縫の葉へは主に濃い色を、若葉へは淡色を程よく配して、圖のやうな方向に縫ひます。

莖は淡緑四苔一本の右撚りで纏縫とします。

草は尖端から淡緑と濃緑の四苔一本の右撚りで纏縫とします。

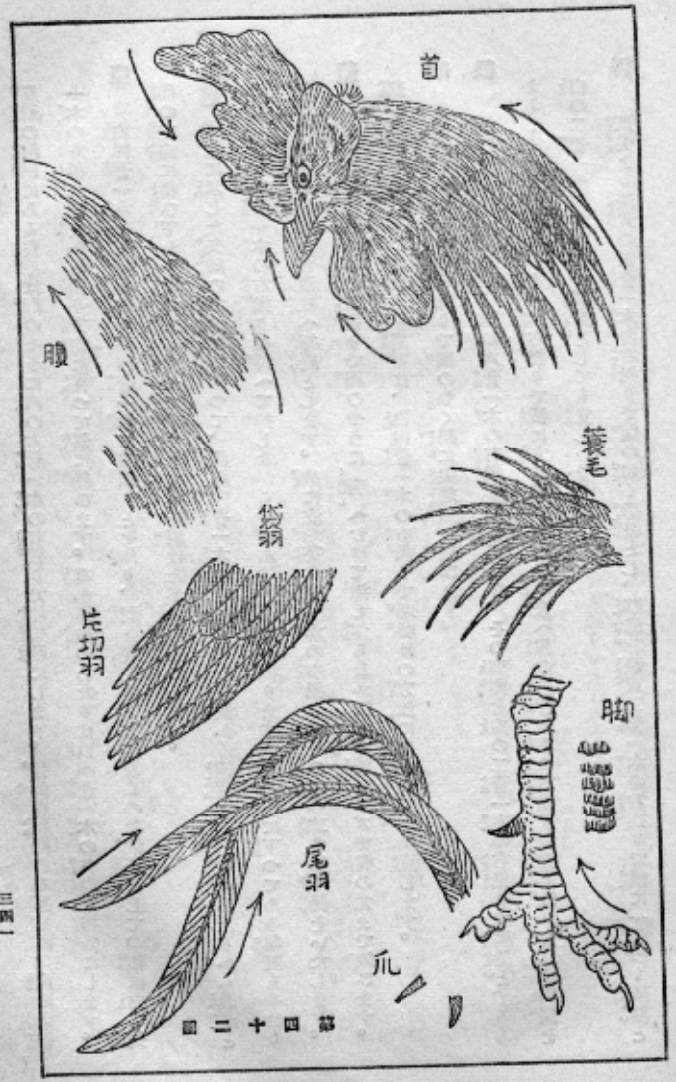
額面（鶏と雛）

材料　淡茶綾地塙。
　　針糸（白、クリーム、淡茶、淡灰、淡黄、濃黄、淡紅、濃紅、海老茶、淡ローズ、濃ローズ、緑）

用具　刺繍臺、針（細八、糸八）

縫ひ方　前に小禽（雀）の縫方を説明いたしましたが茲では雛と雛の縫方をお話いたします。

羽　先づ姿羽から第四十二圖の方向に淡茶一本一本の右撚りで斜に縫ひ、片切羽をクリーム色の一本一本の右撚りで之も圖の如く縫ひ、次に尾羽へ移ります。尖端から白の一本一本の右撚りで割縫とし中程まで縫つて來ましたら糸を淡茶一本一本の右撚りに替へて元まで縫ひます。この尾羽の割縫が終りましたら、中央の筋は白の六苔一本の少し撚りの強い右撚りで撚り方向に、尖端を細く元へ行くに従つて太く纏縫を入れます。



第四十二圖

第四十一圖　出來上り圖

尾羽の附根にある蓑毛は圖のやうに白の六菅一本の右撚りで片切縫にします。背から肩にある羽毛は、白の六菅一本の右撚りで尖から撚り方向に從つて斜に縫ひます。首から胸のあたりは白四菅一本の右撚で掃縫にします。

腹　白四菅一本の右撚りと淡茶四菅一本の右撚りとを作り、羽と蓑毛の下方にあるのを淡茶にして、他は白で矢印の方向に從ひ下から首の方へ向つて、少し丸みを附けながら掃縫にします。

鶏冠　圖に示した矢印の方向にならつて、淡紅四菅一本の右撚りで針足短かく掃縫とし、中央あたりから浪紅との撚り交ぜ四菅一本の右撚りに替へて掃しながら、だん〳〵濃紅へ移ります。額の下に下つてゐる鶏冠もやはり矢印の方向に淡紅から濃紅へ掃縫とします。次に海老茶六菅一本の右撚りでその上へ斑らに星縫をいたします。

顔　淡ローズ四菅一本の右撚りで圖のやうに嘴へむけて掃し乍らなかばから濃ローズで嘴の元まで縫ひます。額の上部と雛冠との境にある眉毛は、白四菅一本の右撚りで毛掃けの方法にならつてかけ渡します。

嘴　濃黄の六菅一本の右撚りで圖の如く斜に尖端から縫ひます。

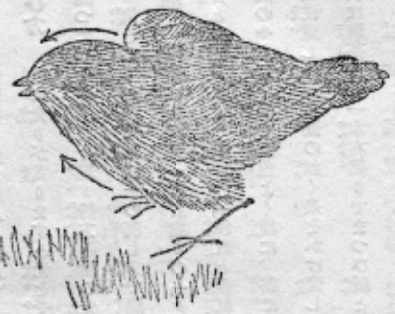
眼　前の雀の時と同じく、黒の六菅一本の右撚りで横に縫ひ、その周圍を白の二菅一本の右撚りで纏縫とするもよろしく、又、黄の一本一本右撚りで横に丸く縫ひ、その中央へ黒の六菅一本の右撚りで瞳を縫ひ入れ、周圍を白の二菅一本の右撚りで纏縫としても宜しいです。

脚　爪尖より淡黄の四菅一本の右撚りで圖の如く掃縫とし、關節を濃黄二菅一本の右撚りで横に一段づゝ纏縫として置き、その上を更に同じ糸で右の靭し方向に一段づゝ縫ひ被せます。後部は圖に示すやうに、濃黄の一本一本の右撚りで星縫をいたします。

爪　淡現六菅一本の右撚りで尖端から斜に縫ひます。全部縫ひ上がりましたら、腹部及び眼の方へかけて前の雀の時と同じやうに毛掃をいたします。

翼　一羽及び尾羽をクリーム色の六菅一本の右撚りで第四十三圖に示す方向に縫ひ、次に淡黄四菅一本の右撚りで背から肩へかけ、更に嘴へ向つて掃縫とします。腹は矢印の方向に從つて白の四菅一本の右撚りで嘴へ向つて掃縫にします。

脚は濃黄の六菅一本の右撚りで纏縫とし、嘴は濃黄の四菅一本の右撚りで斜に縫ひます。



第四十三圖

眼はやはり黒で縫ひ周圍を白の二菅一本で纏縫とします。全部縫ひ上りましたら毛掃を雀と同じ方法でします。

下草　四菅一本の右撚りの緑色で圖の如く長く短く一針づゝ渡し縫とします。

額面（光線縫の静物）

材料　盤琥珀地。

釜糸（クリーム、淡黄、淡紅、濃紅、淡緑、濃緑、淡茶、濃茶、白、淡鼠、濃鼠）

用具　刺繍臺、針（細八、糸八）

縫ひ方　物に光りが當りますと光を受けた部分と、受けない部分とが出來ます。この陰陽のある物の陰ばかりを縫つて、その感じを現す縫方を陰の光線縫と云ひ、陽の部分のみを拾つて現す方法を陽の光線縫と申します。一例として「雀に林檎」の刺し方で陽の光線縫をお話いたします。（第四十四圖參照）

林檎　用糸は皆四菅一本右撚りの「クリーム」と「クリーム及び淡黄との撚り交ぜ」「淡黄」「淡紅三菅と淡緑一菅との撚り交ぜ」「淡紅」「淡紅と濃紅との撚り交ぜ」「濃紅」等の數種を撚り揃へて置き、先づ林檎の輪廓から圖のやうな方向で配色よく横に、斜に、或は長く、或は短かく縫ひ渡します。次に光を受けた部分を、之も色容に注意しながら圖の如く糸をかけ渡します。この時網目の如く糸が重つても差支ありません。

枡は濃茶六菅一本右撚りでまつひ縫とします。

壺　之も糸は四菅一本の「淡茶」「淡茶及び濃茶の撚り交ぜ」「濃茶」「白」「淡鼠」「淡鼠と濃鼠の撚り交ぜ」「濃

鼠」「白と淡茶の撚り交ぜ」等數種を撚り描へて置き、圖のやうに形の輪廓を先づ茶系統で縫ひ、中の模樣は配合のよい鼠系統をあしらひ、靈の光を受ける高い部分を淡色の茶に、林檎の影となる部分はやゝ濃いめの茶をかけ渡します。尚、一番高い部分へは白で光を縫ひます。縫ひ糸のかけ渡し方は林檎と同じ方法であります。

影　影は陽の光線縫でも弱い光を受けて出來た部分のみを拾つて淡鼠、濃鼠を適當に配しかけ渡します。

陰の光線縫　是は殆ど反對の方法ですが、輪廓と模樣の一部或は影等は、やはり適當の色糸で縫ひ現して置きます。又、この光線縫を背縫だけで縫ひ現す方法もありますが、物體の高い所と低い所との區劃を判然と光線のみに依つて縫ひ現すには前の方法が適當であります。

額面（動物）

材料　鼠琥珀地。

釜糸（白、淡鼠、鼠、淡茶、金茶、黒）

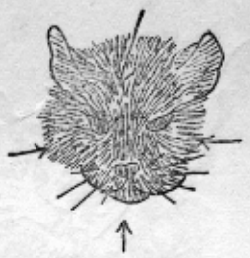
用具　刺繍臺、針（細八）

花卉鳥類の縫方はこれまで説明した通り、平縫、挿縫、纏縫等の應用でありまして、夫等を充分に會得すれば、其の他のものは形態及び配色等に留意し、獸類は主に、挿縫だけの應用であるだけに一層技巧が要ります。今一

圖一上淡田　圖四十四號

例として猫の圖でその縫方を説明いたします。（第四十五圖）

縫ひ方　普通は尾の尖端から縫ひ初め、後足の指の部分から前足に至り、胴及び腹の部分を刺し、頭へ移り耳を縫ひ、鼻及び口に至り最後に眼を縫ひ上げます。然し之れも姿態に依つて、一概に其の方法に從ふ事は出來ませんから下繪を斟酌して縫ひます。先づ尾の尖端から矢印の方向に白の二菅一本右撚りで針足を短かく刺しながら適當に淡鼠の二菅一本右撚りを配し（イ）の邊迄縫つて來ましたら、後足の指を鼠四菅一本右撚りの糸に替へて斜に縫ひ、再び白の二菅一本の右撚りで、矢印の如く毛並にならつて刺してゆき、（イ）の刺し方向と合せて背へ向つてゆきます。腹部も、刺し方は背と同一ですが色彩を替へて矢印の方向に縫ひ、背の毛並を合せて頭へ向ひます。左右の耳を、初め白の二菅一本の右撚りで第四十六圖の矢印に縫ひ、糸を淡鼠二菅一本の右撚りに替へて頭の頂きから鼻へ向つて挿縫とし、左右の頰へ移ります。淡鼠と白の二菅一本の右撚りで適宜に配色し圖に示す毛並の方向に挿縫とします。鼻筋は白の二菅一本の右撚りで縦に刺しながら鼻頭へ向ひます。鼻頭は淡茶四菅一本の右撚りで縦に縫ひます。口は下顎を淡鼠二菅一本右撚りで挿縫とし、口の割目は淡茶二菅一本右撚りでまつひ縫といたします。眼は金茶



第四十六圖

六菅一本の右撚りで斜に縫ひ、上瞼を白の四菅一本の右撚りでまつひ縫とし、黑の四菅一本の右撚りで瞳を圓く縫ひます。

髭は白の四菅一本の撚りの強い右撚り糸で針足長く挿縫にします。

尙、角のある獸類は頭部の挿縫をする前に角を縫つてその根元へ頭部の刺し糸をかけ渡しながら挿縫とします。

額面（風景）

材料　鼠琥珀地。

釜糸（濃茶、淡茶、濃綠、淡綠、鼠、黑、茶鼠、淡鼠、白）

用具　刺繡臺、針（糸八、細八）

風景はその範圍極めて廣く、山、川、湖、海、などに依つて其の縫方にも多少の變化のある事は申すまでもありません。玆に田舍の風景を描いて縫方を説明いたします。（第四十七圖）

縫ひ方

屋根　まづ屋根から初めます。淡茶六菅一本の右撚りで第四十八圖の矢印に從つて廂に面した下の方から一列に一針は長く、一針は短かく適當な針足で縫ひ、次に再びその糸で挿縫の方法で中央の邊まで刺してゆきます。中

第四十八圖

夫から上の方は一段だけ、茶の濃淡撚り交ぜ六管一本の右撚りで刺し、次に濃茶六管一本右撚りに移り、三角形の窓を殘して全部補綴にします。側面の頂きにある申もあとで縫ふのですから之も亦頂上まで押縫にします。三角形の窓と申は濃綫二本半の强い右撚りの糸で二針づゝかけ、それを同じ糸の二管一本右撚りで綴ぢます。

廂　廂は圖の方向に鼠一本半の右撚りで平縫として置き、その上へ板の接ぎ目を黒又は濃鼠の四管一本右撚りで圖の如く渡しかけます。

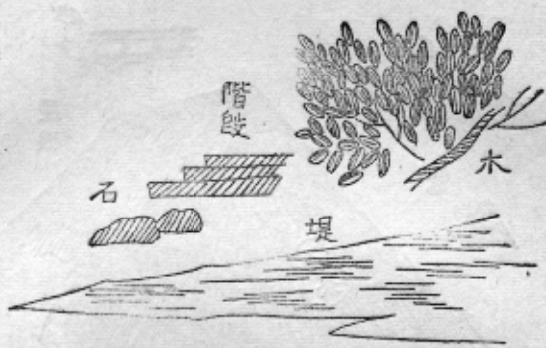
柱　柱は茶鼠一本半の右撚りで撚りの方向にまつひ縫をします。

壁　壁は濃淡二色の鼠色一本半一本の右撚りを作つて置いて、前面の方を淡鼠に後の方を濃鼠で斜縫とします。

第四十七圖

窓　窓は白の一本半一本の左撚りで圖の如く左方向に斜縫として、其の上へ淡茶一本一本の右撚りで竹を一針づゝかけて置きます。

別小屋の物置は屋根を淡茶一本一本の右撚りでまつひ縫とし、下の板の所は濃鼠一本一本の右撚りで斜縫とし、其の上へ濃茶一本一本の右撚りで二針づゝ出來上り圖の如くかけ渡し、同じ色の二菅一本で綴ぢます。屋根と下の板との中間は濃茶一本半一本の右撚りで斜に平縫をします。



第四十九圖

木　初め幹と枝を茶鼠一本一本の右撚りで縫とします。

葉は淡綠二本一本の右撚りで第四十九圖のやうに、二針三針づゝ並べて縫ひながら根元へ行くに從つて濃綠とします。この葉は上部即ち光を受けた所へは、主に淡色を使ひ日蔭の部分へは濃色を用ひ木の繁みを表すやうに注意して刺します。

前景　水際の地面は、濃淡二色の鼠四菅一本の右撚りを作り、上部の方を淡色で霞の如くかすらせながら挿縫とし、その他は全部濃色で挿縫とします。

石段　淡鼠一本半一本の右撚りで一段づゝ斜に縫ひます。

石は濃鼠一本半一本の右撚りで圖の如く斜に縫ひ上げ、その上へ所々に淡綠六菅一本右撚りで下縫の方向通りに二針三針づゝ短かく渡しかけて置きます。

岸邊の水草は淡綠の六菅一本の右撚りで短かく圖を參照して一針づゝ渡し縫とします。

杭　茶の一本一本の右撚りで二針三針づゝ縱に縫ひます。

水　白の四菅一本の右撚りで針足をやゝ長目に縫ひ縫といたします。

遠山　圖に示す方向に、淡鼠四菅一本の右撚りの撚の弱い糸で裾の方をかすらせて縫ひ上げます。

紋章縫

材料　紅鹽瀨、又は縮緬。

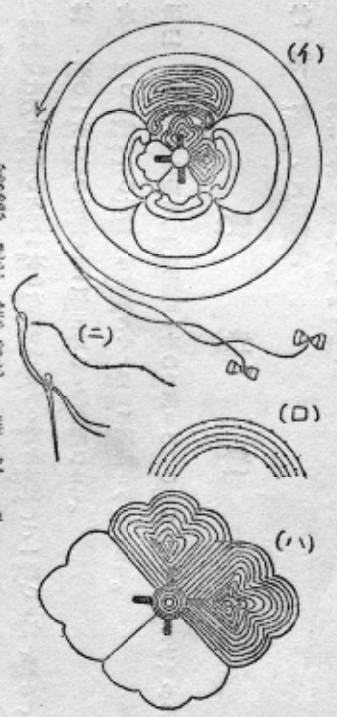
金糸六掛、釜糸、赤、黄、白。

用具　刺繍臺、針（メリケン針十一番、糸八）卷駒二箇。

縫ひ方　初めに袱紗等に應用される日向縫又は陰縫の方法で、主に金銀糸、蛇腹糸等で駒取り縫の綴ぢ方をお話いたします。

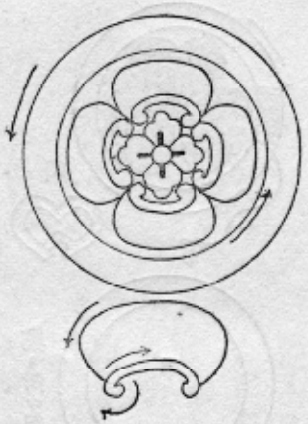
日向縫　日向縫は前に種々の縫方説明の所で述べましたから多少重複する點もありますが、玆に平埋縫と和蘭縫の二種を主として應用した物と、他に平縫、背縫等を用ゐた縫方とを圖解で説明します。

第五十圖　矢印の方向に從つて二ツの卷駒へ金銀糸又は蛇腹糸を卷き、輪廓から内部へ向つて渦卷形に二ツの糸を一緒に綴ぢてゆきます。紋の大小に依つて糸の太い細いはありますが普通小袱紗の定紋ならば、六掛か八掛位の金銀糸を用ひます。綴ぢ糸は金糸ならば赤又は黄の四菅一本右撚りを使ひ、銀糸ならば白の四菅一本右撚りを用ひます。又蛇腹糸の場合は、同色の四菅一本右撚りが適當であります。この平埋縫は本來、形の中心から外へ向つて卷いてゆくのでありますが、紋によりますと中心點が狂ふ虞れがありますから、輪廓から内へ向つて糸を綴ぢてゆく方が安全であります。尚、圖は解り易くする爲に糸と糸との間を隙かしてありますが、實際には隙かさず重ならず密接させて列べてゆくのであります。又紋の形によつて圖に示すやうに一綴を區分して、その一片づゝを縫ひ埋めてゆく場合もあります。



第五十圖

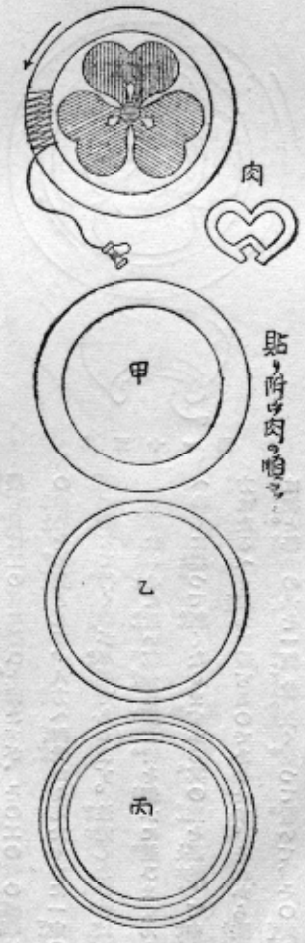
次に定紋の丸輪は、内側の輪の線と外側の輪の線と大小の相違はありますが形は同一の圓でありますから、この場合には内側の線より外へ向つて渦に卷いてゆく方がやりよくあります。


第五十一圖

綴ぢ目は工の目に縫ひ上げますが、その工の目の標準は形の中心を起點として、八方へ御光が射したやうに一定の間隔に綴ぢて行く事が必要であります。注意しなければならない事は中心に近い部分は綴ぢ目を細かに縫ひませんと外へゆくに從つて粗くなりますから其の點を斟酌して中心の方はなるべく細かに綴ぢるのであります。それから駒取縫は初と終りの糸を一糎位長く切つて置いて、その端を(二)圓のやうに別の木綿針へ小町糸を二本通して輪を作り、その輪へ、縫ひ初の綴ぢ目の所と、縫ひ終りの綴ぢ目の所とで、端をかけ用布の下へ引抜きます。この方法はすべての駒取縫に應用されます。

陰縫　陰縫は、紋章の輪廓だけを金銀糸又は蛇腹糸等で大小に應じて太く細く縫ひ表す方法で、第五十一圖はその縫方を示したものです。前に述べました平埋縫の仕方で二ツの卷駒へ糸を卷いて輪廓を綴ぢ廻り、一巡いたし

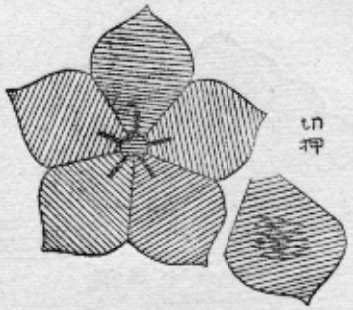
ましたら又その内側へ工の目に綴ぢながら一巡いたします。初め輪廓を一巡した綴ぢ縫を一べん取りと言ひ、二回その方法を繰り返した縫方を二へん取りと申します。紋の大きさに依りこの方法を五六回繰り返す場合もあります。尚、糸の綴ぢ初と終りは、前のやうに輪へかけて下へ引抜いて出してしまひます。要するに陰縫は平埋縫と大差はなく、駒取縫の廻數のすくないものであります。



第五十二圖

和蘭縫　和蘭縫は一名高縫とも申しまして、張子紙、板目紙の類で肉上げをして、その上を金銀糸又は蛇腹糸等で縫ひかぶせるのであります。一例として丸に木瓜の紋の縫方を説明いたします。

第五十二圖に示すやうに紋の丸輪は、初め輪廓通りに張子紙又は板目紙で切り取つて置き、次に別にその輪から一糎位内輪の丸輪を切り、前に切り取つて置いた輪の裏へその輪を糊で貼り付けて肉といたします。第五十二圖甲乙丙の圖を參照して下さい。紋の大小に依つて輪も太い細いがありますから、太い輪の場合には同じ方法で順々に小さく三四枚輪を切り重ねて貼つて、肉を高くいたします。此の方法で中の木瓜も一劃づゝ切り、裏から肉上げをいたします。この肉附けの切り紙が出來ましたら、それを裏として用布の上へ姫糊で貼り附けその周圍を四管一本右撚りの黄色釜糸の撚りの強い糸でこまかく綴ぢます。又も一ツの方法としては、輪廓へ紙撚りを綴ぢ附け、その中へ綿を適宜に切つて綴ぢ附けて肉とする方法もあります。この肉取りが出來ましたら、次に縫ふべき糸、たとへば金銀糸でも色糸でも用糸を卷駒へまき、圖のやうな順序で左から右へ、その兩端だけを一針とめては折返し又一針留めては折返し、密接させて確かりと綴ぢ糸を締め乍ら縫つて行きます。それから紋の大きい場合は上縫の糸渡しが長くなりますから、その時は砂糖を加へた姫糊を肉の上へ引きながら糸を縫ひ渡しますと、縫糸がよく肉へ附着いたします。



第五十三圖

平縫應用　第五十三圖のやうな桔梗の紋の縫方を説明いたします。初め桔梗の紋を礬水引の薄美濃紙へ寫して

それを切り取り、用布へ薄糊で貼り附けます。次に縫ひ糸を、紋の大小に依り太さを適當の右撚りとし、その貼り附けた切り紙の上を中央の丸から圓のそうた方向に一縫づゝ縫ひます。糸渡しの長い場合は、切り押へと稱して撚り目なりに糸渡しの中央の邊を同色の二菅一本の右撚りで目立ないやうに長く短かく斜に、切押圓の如く縫ひます。この平縫の方法を終りましたら用布と同色の細い蛇籠糸一本で紋の周圍を駒取縫にいたします。

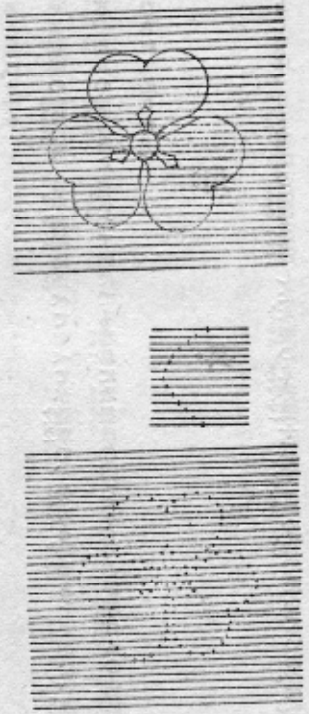
第五十四圖

工の目

菅縫應用　菅縫を應用して花菱の紋を白糸で縮緬地へ縫ひます。第五十四圖を御參照下さい。菅縫の縫方は前にも度々說明した通り、布地の織目通り横に縫ひ同色の二菅一本の右撚り糸で工の目に綴ちてゆきます。初め白の一本一本右撚りの撚の強い糸で、中央の丸から横に圓の如く織目なりに縫ひ式に花菱を一片づゝ之れも織目の通りに縫ひ上げ、白の二菅一本の右撚りで工の目に綴ち上げます。綴ち縫が終りましたら、中央の丸の周圍の花の蕊は用布と同色の釜糸一本一本の右撚りで二針づゝかけ渡し、同色の二菅一本の右撚りで綴ちます。

尙、衣服の紋縫に應用される駒寄縫を說明します。第五十五圖の酢漿草の紋は、その針使ひの方法を示した物で

第五十五圖



す。初め用布へ紋の型を寫しましたら、織目の横糸へ六菅一本の右撚糸で、縁に一本の織目へ返し針で一ツづゝ巻縫をしてゆきます。圓の線が縁になつても横になつても織目の横糸に從ひ一針づゝ返し縫をいたします。用布の地色よりやゝ淡い同色の糸を選ぶ方が栄えるやうです。若い方の紋縫には、金糸銀糸等をあしらつた縫方もありますが方法は同一であります。

佛蘭西刺繍

佛蘭西刺繍について

佛蘭西刺繍とは歐米各國に行はれてゐる各種の刺繍を總括しての名稱で、その繍ひかたに特種な方法があるのではなく、たゞ材料の選擇又は扱ひ方、應用範圍の相異等によつて自然に日本刺繍と異なつた特徴が出來たと云つてよからうと思ひます。

フランス刺繍の特徴は、日本刺繍に比べてすべてが簡單で、勞力と時間とを要さない點、作品が度々の洗濯に堪え得る事、用具の簡單なこと從つて誰にでも容易に取扱はれ得ることなどが現代人の生活に適して居りますので盛んに用ひられて居ります。

用具

用具としては、日本刺繍の處で說明した木製の丸枠徑十五種位の物でたいていの刺繍は間に合ひます。

針は日本刺繍の針と異り、めどが長く製造所によつて、番號を附け各種に區別してゐる處もありますが、大中小の太、細を一袋としてあります。

糸は國產品と舶來品とがありますが、只今の所では佛國製のD・M・Cと稱する木綿糸が一番に、質・色共に堅牢とされて居ます。尙、用途により麻、人絹糸等も使用いたします。

糸の扱ひ方

糸の扱ひ方は普通絹糸は細い糸六筋が一本となつて居ますが六筋の一本をそのまゝ用ふのでなく刺繍しようとする布の地質圖案用途に應じ二筋或は三筋適當な太さに合せて使用いたします。一把の糸をそのまゝ一方の輪を切つて三ツ編に編んでおき、それから一筋づゝぬきとると糸の光澤を損せず、もつれる憂ひもありません。その場合注意すべきことは必要な本數だけを同時に抜かうとするともつれる憂ひがありますから、必ず編んだ糸の他の一方を左手でしつかり押へ一筋づゝ抜かなければなりません。かうして一筋づゝ抜き取つた糸を適當に合せて一本とし、尖きを揃へ針のめどへ通します。

用布の張り方

用布の張り方は日本刺繍の用具の使用法に於て述べましたやうに、丸枠の內輪の上へ用布をのせ緣かにその上へ外

輪をのせ、壓しながら填め込みます。そして下絵の曲らないやう又布目のゆがまないやう注意して張ります。

圖案

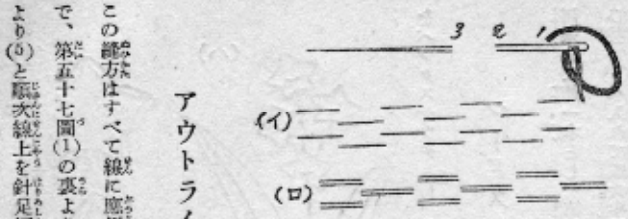
圖案は下絵前の用布が材料店に出て居りますが、成るべく自身で考案し自由に描いて刺繍する方が情趣豊かなものを得られます。圖案を布へ複寫する方法は色々ありますが最も簡便なのは、用布の上へ炭酸紙を置きその上へ圖案をのせ、徐かに軽く鉛筆か鐵筆でその圖案の上を描きますと下の布へ轉寫されます。

仕上げの方法

出來上りました作品の仕上には、裏から輕く霧を一面にふき、四ツ折にした毛布の上か或はアイロン布圍の上で、裏からアイロンをかけます。麻、キヤラコ等の白地ものが手垢れで汚れた時は、一度さつと洗濯して、半乾きの時に前と同様にアイロンで仕上げ、手織物などはぬれタオルを裏から用布にあて、其の上からアイロンをかけます。

基礎縫

ダーニングステッチ



第五十六圖

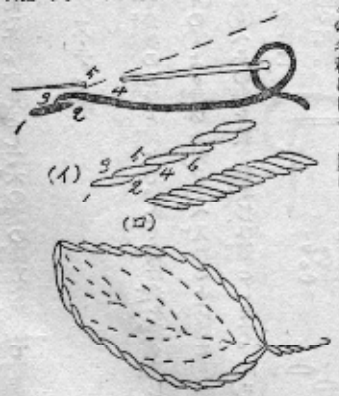
用糸二十五番糸。

和服裁縫の運針と同じ縫ひ方で、第五十六圖のやうに(1)の裏から針を出し(2)へ入れ(3)へ入れ、(4)(5)と順に針を運んでゆきます。用糸は二筋一本とし、糸がもつれないやう注意いたします。(ロ)圖のやうに二本の線で表はすときは上を淺色に下を濃色に縫ひますと又溢つた感じを現すことが出來ます。

尚、フランス刺繍には、ステッチといふ言葉が多く使はれますが、ステッチとは腰るといふ意味ですから、之からあとの名稱には一々附けないこともありますが、勿論何々ステッチと言ふべきであります。

アウトラインテスッチ

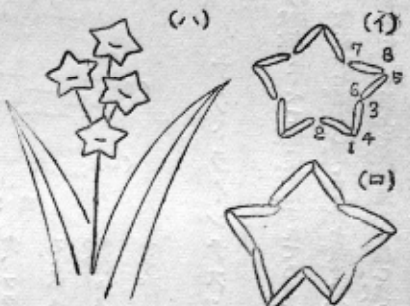
この縫方はすべて線に應用されてゐます。用糸はやはり二筋一本で、第五十七圖(1)の裏より針を抜き、(2)へ入れ(3)へ抄ひ抜き、(4)より(5)と順次線上を針足短かく縫ひ進みます。(い)は細線、(ろ)は太



第五十七圖

線を表す時の針方向です。應用として木の葉の縫方を揭げて置きます。

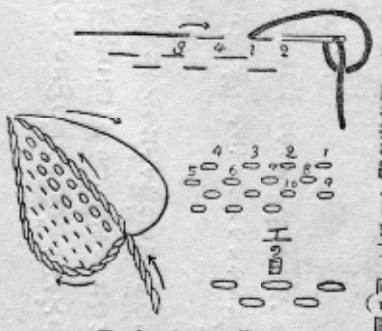
バックステッチ



第五十八圖

この縫方は裁縫の千鳥掛の方法と同じで、たゞ掛け糸を淺く渡しかけます。第五十八圖(イ)の(1)より拔いた針を(2)へ入れると同時に(3)へ拔き(4)へ淺く掛けて入れ(5)へその針を拔き順次抄ひ縫とします。同ロ圖を參照して下さい。用糸は二筋一本か三筋一本位が適當です。(ハ)圖の如き場合は花をバックステッチとし、葉及び莖はアウトラインを應用します。

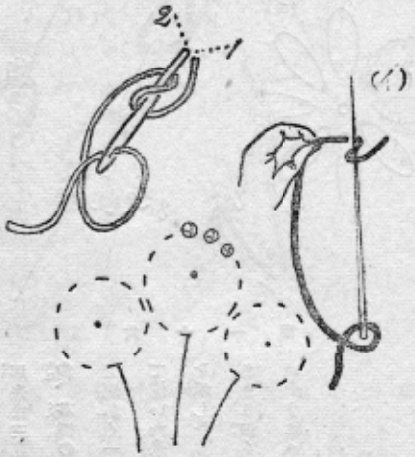
シードステッチ



第五十九圖

用糸を二筋一本とし、第五十九圖上の(1)より針を拔き、(2)へ入れ(3)へ抄ひ拔き(4)へ入れて順次半返し針に縫つてゆきます。圖の如き糸列の場合は必ず工の目に縫ひます。尙、輪廓はすべてアウトラインを應用し、圖の如く右肩を高く縫ひます。

フレンチノットステッチ



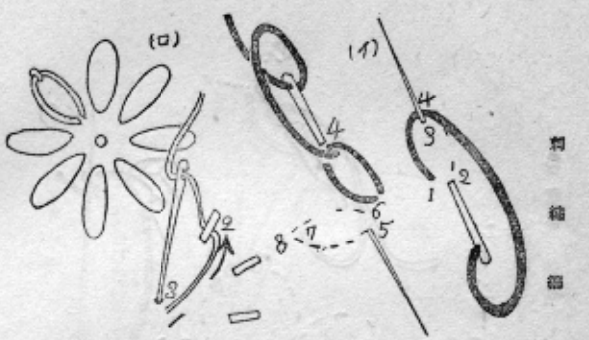
第六十圖

用糸を四筋一本とし第六十圖(イ)圖(1)の裏から引き拔いた針へ一ッ糸をからげ卷き、そのまゝ(ロ)圖のやうに(2)へ針を入れ、徐かに引けば結び玉が出來ます。物により大きな玉を作らうとする場合は二三回針へ糸をからげ卷けば玉も從がつて大きくなります。初めのうちは玉が途中で結ばれますが徐に加減して引けば用布へぴつたり玉がつくやうになります。尙、(1)より拔いた針を(2)へ入れる場合、あまり針足をひろげず(1)のそばへ入れるやうに注意します。

レージーデージーステッチ

雛菊の縫方で第六十一圖イの(1)から抜き出した針を(2)へ入れ、(3)へ抄ひ抜き(4)へ刺し入れ(5)へ抜き(6)と、順次瓣の次つぎへ移ります。用糸は三筋一本が適當でせう。

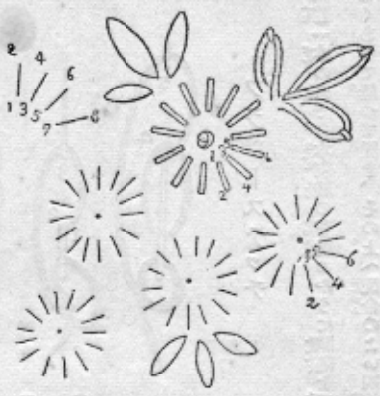
尚、花瓣の尖の色を替へて縫ふ場合には、初め尖端を白とか赤とかで短かく一針縫つて置き、次に配合のよい色糸三筋一本でその縫つて置いた糸足の間をくぐらせて輪に縫ひ上げます。(ロ)圖はその方法を示したものであります。この縫方は主に花瓣に應用されますから、あまり強く糸を引き締めずにふつくりと輪に作り瓣の感じを損ねないやうにいたします。



第六十一圖

サウサンドフラワーステッチ

二筋一本の糸で第六十二圖(1)から出した針を(2)へ刺し入れ、その針を(3)へすくひ抜き(4)へ入れ(5)へ抜き順次繰り返してすくひ縫とします。葩はフレンチノットを應用し、葉はレージーデージーの方法で留め縫とします。縫方は簡單ですが數多く花瓣が集つてゐる圖案の時は色の配合に注意します。



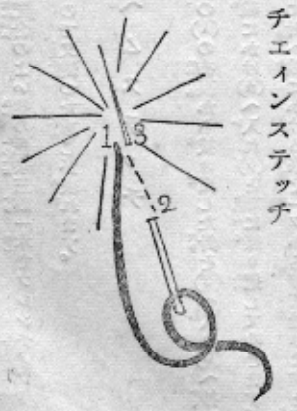
第六十二圖

エイトストランドステッチ

サウサンドフラワーと全く同一の方法ですが用糸は六筋その一を一番太い針へ長く附け、それを折返し合せて一本とし兩端を纏へて糸尻に結び玉を作ります。つまり十二筋一本の糸とします。縫方は前と同じですから省きますが、糸へ搦りのかゝらぬやう注意いたします。(第六十二圖參照)

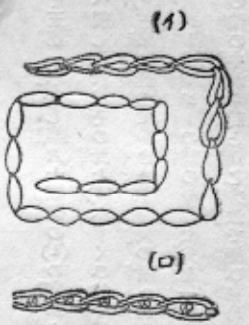
チエインステッチ

用糸を三筋一本とし第六十四圖の(1)の裏から抜き出した針を(2)へ刺し入れ、その針を(3)へすくひ抜く時、糸を輪にかけ(4)(5)と順に縫つてゆきます。角の所へまゐりましたら一度レージーデージーの時のやうに尖を一度留めて、又新しくその輪の中から前と同じ方法で縫ひ初めます。(ロ)圖はそ



第六十三圖

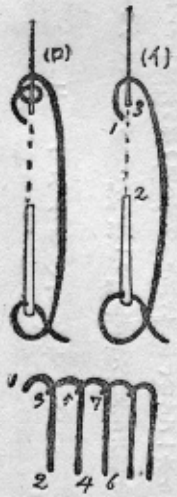
の輪の中へ配合のよい他の色糸三筋一本でフレンチノットを縫ひ入れたもので又變つた感じが表れます。



第六十四圖

ヘムステッチ

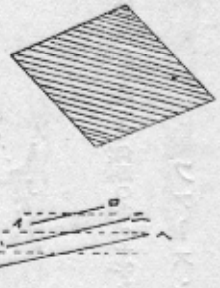
第六十五圖の(1)の布裏から抜き出した針を(2)へ入れ(3)へ抄ひ抜く時、糸を輪にかけ(4)へ入れ(5)と順に繰り返してゆきます。又(ロ)圖のやうに針へ輪にかける糸を一ツからげて縫ひますと留めがしつかりします。かゞりなどには此の方法が主に用ゐられます。用糸は物によりますが二筋一本か三筋一本が適當であります。



第六十五圖

フラットステッチ

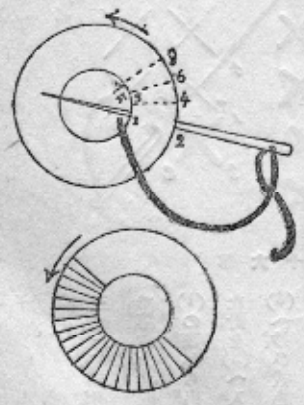
四筋一本の糸で日本刺繍の菅縫のやうに間隔を正しくあけて縫つて置き、その上へ配合のよい四筋一本の糸で第六十六圖のやうに下糸へ斜に渡し掛けます。(イ)から出した針を(ロ)へ入れ(ハ)へすくひ抜き(ニ)と順次運んでゆきます。



第六十六圖

モーニンググローリーステッチ

六筋そのまゝ一本とし第六十七圖の(1)から抜き出した針を(2)へ入れ(3)へ抄ひ抜き(4)へ入れ、順次ぐるりと縫ひ廻ります。針使ひは、内側の方を多少糸が重なるやうにし、外側は少し糸と糸との間があく位にしませんと縫ひ詰つて廻ることができません。

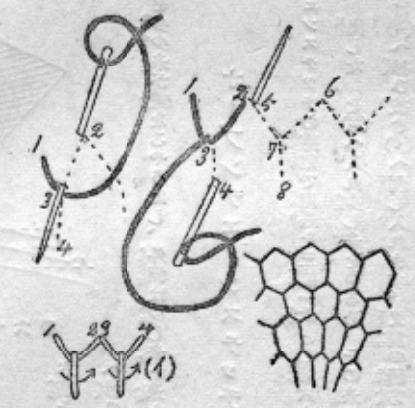


第六十七圖

オーブンチエインステッチ

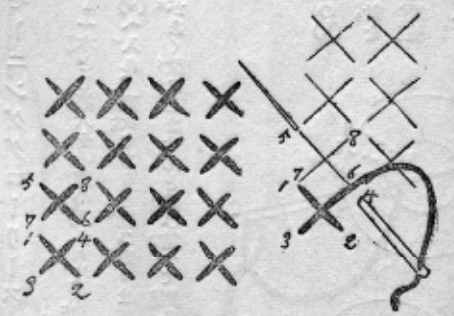
チエンステッチの應用で用糸を三筋一本とし第六十八圖の(1)より出した針を(2)へ入れ少し糸をゆるめ、その糸の輪へ針をかけ(3)へ抄ひ抜き(4)へ刺し入れます。又別の縫方で初め緩線を抄ひ縫とし、次に糸を替へてその緩糸をくゞらせて縫ふ方法もあります。(イ)圖はその針使ひを示したものであります。

クロスステッチ



第六十八圖

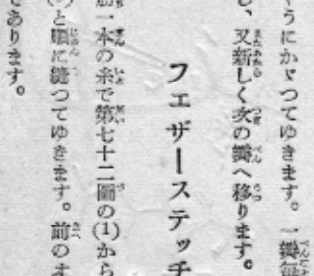
三筋一本の用糸で第六十九圖の(1)の裏から出した針を(2)へ入れ(3)へ抄ひ抜き(4)へ入れ、その針を(5)へ抄ひ(6)と順次縫つてゆきます。麻のやうな布目の荒いものは織目の數を拾つて角形の中へ十字を描く心持で縫ひます。



第六十九圖

ファースンチエインステッチ

先づ線を三筋一本で前に説明したチエインステッチで縫ひ上げて、その糸目を配合のよい色糸で第七十圖のやうに(イ)から出した針を(ロ)へ入れ(ハ)へ抄ひ抜き(ニ)へ入れ、順次繰り返して終りの尖はチエインの内側から一針づゝ二針設にかけ渡します。



第七十圖

フレンチローズステッチ

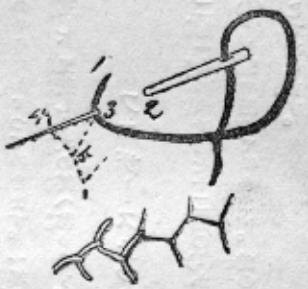
二筋一本の糸で花芯の内側からヘムステッチの應用で、第七十一圖(イ)のやうにかゝつてゆきます。一巡毎に縫ひ終りましたら針を下へ抜き落し、又新しく次の處へ移ります。

第七十一圖

フェザーステッチ

二筋一本の糸で第七十二圖の(1)から出した針を(2)へ入れ(3)へ抄ひ抜き(4)(5)と順に縫つてゆきます。前のオーブンチエインの針使ひと大方同じであります。

コーチングステッチ



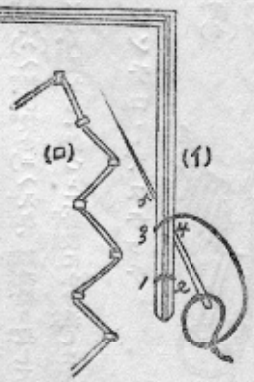
第七十二圖

六筋一本を少し長く針へ通し折返して糸尻へ玉結びを作り、先づ第七十三圖(イ)の如く渡し縫をして置き、次に別の配合のよい二筋一本の糸で圖のやうに(1)より(2)(3)と順に一糎位の間隔でとぢてゆきます。(ロ)圖は六筋一本の糸を別の六筋一本の糸で山形に綴ぢ縫した圖であります。主にテーブル掛クッションの縁縫等に應用されます。

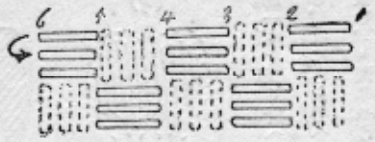
バスケットステッチ

之は前に述べたダーニングステッチの應用で、第七十四圖のやうに二筋一本の糸で針足を揃へて横縫を抄つて置き、次に縦縫を刺し縫とします。

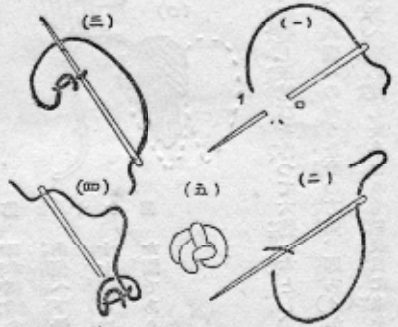
ジャーマンノットステッチ



第七十三圖



第七十四圖



第七十五圖

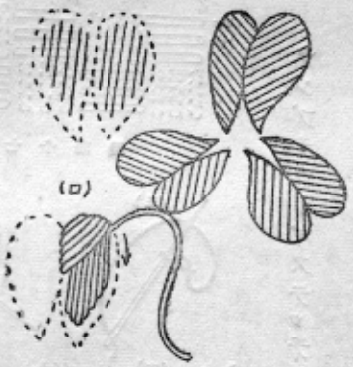
六筋折返しの一本糸で第七十五圖(一)のイの裏から出した針をロへ刺しハへ抄び出し(二)圖のやうにその一針渡した糸の上から左の方へ糸をくゞらせ、(三)圖のやうに再び一針渡した糸の右の端を下からくゞり、その糸の輪へ針をかけ(四)圖の如く上の中央の縁で留めます。(五)圖は出來上りの形です。

ランブラローズステッチ

六筋そのまゝ一本とし第七十六圖(イ)のやうに中心の圓を横に縫つて置き、その圓の周圍を五角形にかこみ、更にその一角の針の落し目を覆ふやうに一針づゝ縫ひかぶせ、順々に花瓣

第七十六圖

の感じを表してゆきます。（ロ）は五角形でかこんだ形で（ハ）はその一角の針の落し目を縫ひかぶせた圖です。かうして（ニ）の如くローズの花辨を作ります。尚、この縫方はあまり針使ひに囚はれますと花辨の感じが出ませんから、多少不規則になつても宜しいですから花の形を作るといふ心持で縫ひます。



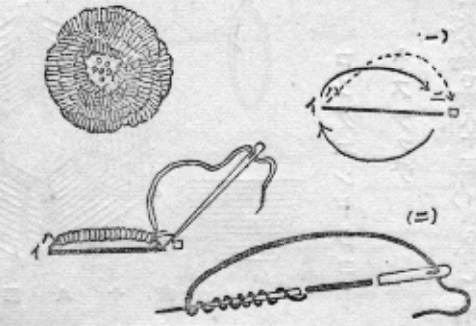
第七十七圖

カバーステッチ

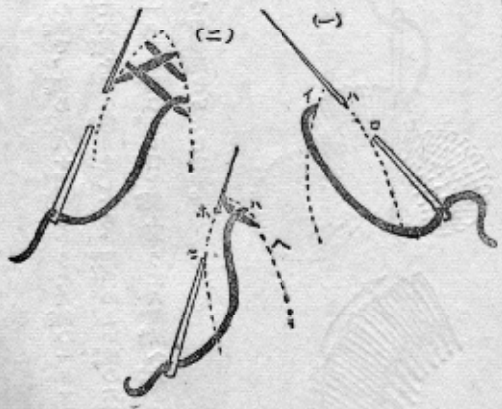
日本刺繍の肉入縫と同じで、二筋一本の糸で、先づ縦に圖の内側へ下縫をして置き、その上を斜に縫ひかぶせます。第七十七圖(イ)は下縫の方向を示し、(ロ)はその上を斜に縫ひかぶせた圖であります。

バリオンステッチ

三筋一本を長く針へ通して折返し玉結びを作つて六筋一本とし、先づ中央へ五ツ六ツフレンチノットで蕊を作つて置き、次に色を替へて第七十八圖(一)のやうな針の方向、即ち(イ)から出した針を(ロ)へ入れ、再び(イ)の傍らの(ハ)へすくひ抜き、(ニ)圖のやうにその針へ初め渡した糸よりも稍長目に糸を巻き附けて除かに針を引き抜き(ロ)の傍らの(ニ)へ刺し入れます。この方法で初め三角形を作り、次にその一角の角々を覆ふやうに同じ方法で花辨の形を作ります。



第七十八圖



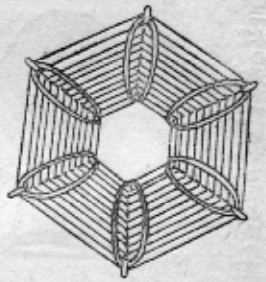
第七十九圖

シヤドーステッチ

二筋一本の糸で第七十九圖の(イ)の裏から出した針を(ロ)へ入れ(ハ)へすくひ抜き(ニ)へ入れ(ホ)へ抄ひ(ヘ)へと順次に千鳥形

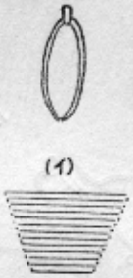
に縫つてゆきますと、(二)圖のやうになります。

ラインステッチ



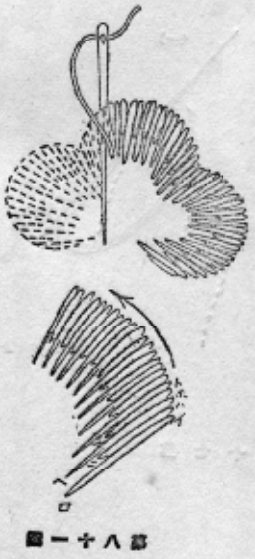
第八十圖

六筋一本の糸で、初め第八十圖(イ)のやうに六角の一コマを上部から縫ひつめ、順に六角を縫ひ終りましたら、配色のよい他の六筋一本の色糸と替へて、一コマの縫ひ切り目を覆ふやうに六箇所へ大きくチェインステッチ一つで留め縫をいたします。



ロングエンドショートステッチ

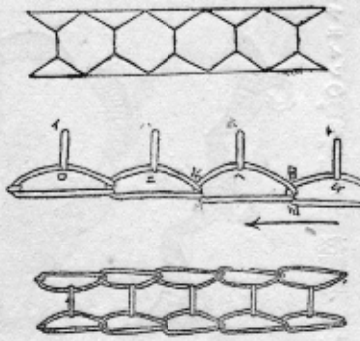
三筋一本の糸で第八十一圖(イ)から出した針を(ロ)へ入れ(ハ)へすくひ抜き(ニ)へ入れて順次縫つてゆくのですが、外側は針足を揃へ、内側は圖のやうに一針長く一針短かく交互に縫ひます。



第八十一圖

ネットステッチ

三筋一本の糸で、初め縦の線を第八十二圖(イ)から(ロ)へ(ロから(ハ)へと順にすくひ縫として置き次に色を替へてチェインステッチの方法で



第八十二圖

(一)から出した針で縦線を一つくゞり(二)へ入れ(三)へすくひ抜き、又縦線をくゞり(四)へと順に縫つてゆきます。

リーフステッチ

第八十三圖

二筋一本の糸で第八十三圖(一)の(1)から出した針を(2)へ入れ(3)へすくひ抜き(4)へ入れ(5)へ抄ひ(6)と順に針へ糸をかけて引き抜きます。又別に(二)圖の中央の素地を留め縫とする方法もあります。その縫方は(イ)から出した針を(ロ)へ入れ(ハ)へ抜き(ニ)へ入れ(ホ)へすくひ抜き(ヘ)と(イ)(ロ)(ハ)順に縫つていきます。

ボタンホールステッチ

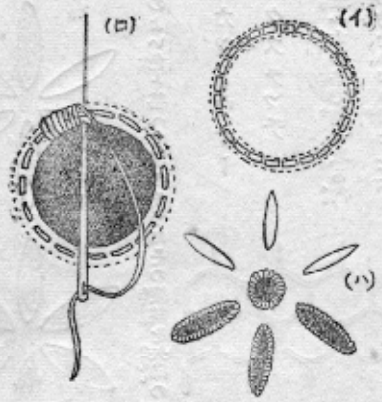
二筋一本の糸でフレンチローズの針使ひと同じく、外側で針を糸へかけながら縫ひます。第八十四圖(イ)の如く上縫の糸で初め下縫をして置いて、その上を縫ふ場合もあります。又(ロ)圖の如く飾り玉、即ちピコットの縫方は、中央までかゝり縫してきた糸で用布を針で抄はずに糸だけでチエインを四五周すくひ縫し、其の針を元の穴へ入れ除かに引きますと小さいチエインの輪が出來ます。花瓶敷、皿敷等の緣縫の飾に多く應用されます。

第八十四圖

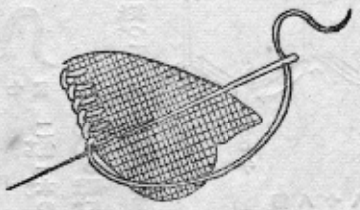
ピコット

アイレットステッチ

二筋一本の糸で、初め第八十五圖(イ)のやうに圓の周圍を針足短く本返し縫をして置き、次にその中を切り抜き、(ロ)圖のやうにその本返し縫を力糸として強く巻きかゝげてゆく縫ひ方です。(ハ)圖は同樣にして縫つた花の模樣です。



第八十五圖



第八十六圖

バツチドウオークステッチ

圖案の中にある花とか動物とかの形を他の別布で切り取りそれを下繪の上にあて周圍を極く細い糸で所々留め縫をしそれから配合のよい色糸の二筋一本でその緣を第八十六圖のやうにボタンホールでかゞり縫ふ方法です。

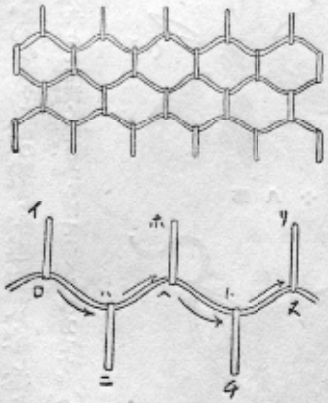
サテンステッチ

二筋一本の糸で、初め第八十七圖(イ)のやうに上縫の反對に下縫をして置き、次に(ロ)圖の如くその上を眞横に縫ひ被せます。日本刺繍の卷縫と同じ方法です。

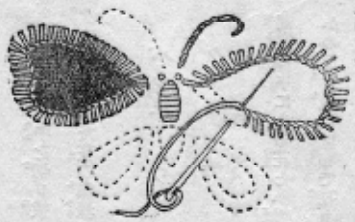
第八十七圖

ハネイコームステッチ

二筋一本の糸で、先づ縦線を第八十八圖の(イ)(ロ)(ハ)の順に抄ひ縫として置き、つぎに糸を配合のよい色と替へて圖のやうにその縦線を矢印の方向に從つてくゞらせながら縫ひ上げます。



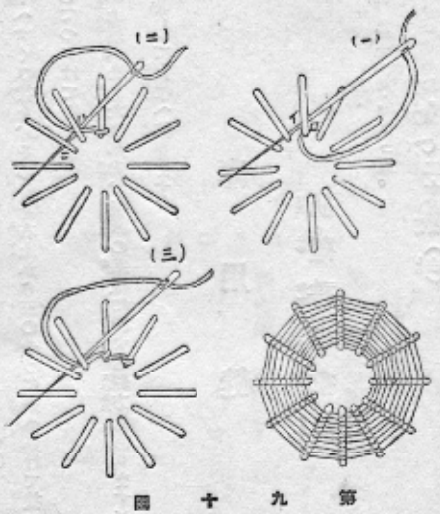
第八十八圖



第八十九圖

カツトウオークステッチ

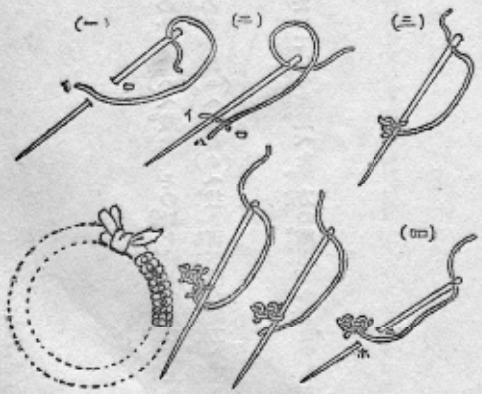
二筋一本の糸で切り取る内側の方をかゞり目として、ボタンホールの縫方を應用して縫ひ上りましたら、そのかゞり目より内側を切り取ります。第八十九圖蝶の圖でその針使ひを示して置きます。



第九十圖

ロールステッチ

六筋一本の儘で、初め第九十圖(一)の如く放射狀に線をみな渡して置き、次に(イ)から出した針を(ロ)から布を抄はずに縦糸にからげ、その針でつぎの縦糸をくゞらせて(ニ)の如く(ハ)(ニ)と順にからげながら縫ひ、ぐる〳〵渦卷形に縫つてゆきます。圖の(一)(二)(三)



第九十一圖

はそのからげてゆく順序を示したものであります。

ケーブルステッチ

六筋一本の糸で第九十一圖(一)の如く(イ)から出した針を(ロ)へ入れ(ニ)のやうに(ハ)へ抜き、その針を渡した糸の左上から下へすくひ抜き、その針を右上から(三)のやうに糸へかけて抜き(四)のやうに(ホ)へ入れ(ヘ)へ抜き再び前の縫方を繰り返してつゞけてゆきます。

以上述べましたほか向、數種の基礎に屬する縫方もありますが、たいてい今迄述べた縫方の應用でありますから省きまして實物へ移ります。

應用縫

肌襦袢の袖口

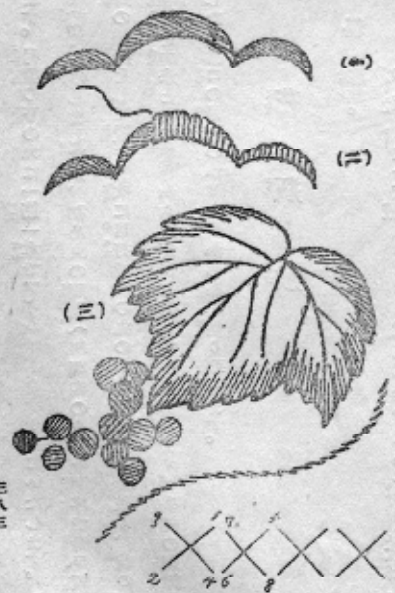
材料　キヤラコ地。
D・M・C二十五番(白)

第九十二圖　田來上り圖

縫ひ方　二筋一本で線の月型を第九十三圖(一)のやうに斜に下縫して置き、その上をやはり同じ糸でボタンホールでかゞり縫を同(二)圖のやうにいたします。

葉　模様の葉は二筋一本で周圍をロングエンドシヨートで一針長く一針短かく縫ひ、葉脈をアウトラインで表します。

實と蔓　實は之も二筋一本で同圖(三)のやうに色々の方向にカバーを應用し、蔓はアウトラインで右同上りに縫ひます。下の山型は三筋一本でクロスをいたし



第九十三圖

ます。月型の下の丸は一筋一本でアイレットウオークにいたします。この縫方は前にも申しましたが、初め丸の周圍へ同圖(四)のやうな順序で針足短かくつぎ針の繰縫をして置き、次に目打でその丸の中央の布を突き破り、前のつぎ針の繰縫を力糸として巻きからげながら縫ふ方法であります。全部の刺繍が終りましたら袖口の月型のかどより目から布を切り取ります。

第九十三圖

花瓶敷

材料　麻地。
D・M・C二十五番（クリーム、オレンヂ、エンヂ、淡綠、濃綠、淡茶、黒）

縫ひ方　先づ鉢闇の花から初めます。クリームの三筋一本で第九十五圖(イ)のやうに花瓣を縦に粗く縫つて置きその上を同じ糸で横に密にカバーステッチで縫ひかぶせます。花瓣の上にある芯は、オレンヂの六筋一本でフレンチノットを應用いたします。葉は淡綠の二筋一本で同圖のやうな方向に繻縫といたします。

葉　葉は輪廓と風とを全部淡綠二筋一本でアウトラインで繰縫をして置き、その中の下部の方を濃綠三筋一本でクロスステッチで縫ひ詰め、上部の方を淡綠二筋一本でシードステッチをいたします。周圍の輪は、淡茶六筋一本でケーブルステッチにいたします。内側の大きい山形は黒の二筋一本でアウトラインで表はし、下の丸はエンヂ二筋一本で眞横にサテンステッチをいたします。外側の小さい山形は淡茶二筋一本で針足短かくチエインステッチで縫ひ上げその線から用布を切り取ります。

第九十四圖　出來上り圖

第九十五圖

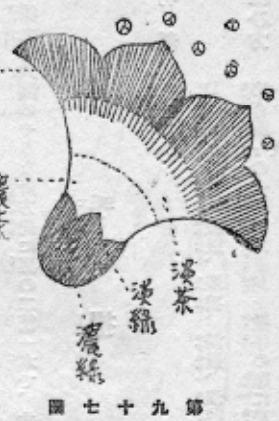
草履表

第九十六圖　出來上り圖

材料　麻地。

D・M・C二十五番（クリーム、淡茶、濃茶、エンヂ、黒、淡綠、濃綠）

第九十六圖は草履表の左足の分であります。用布へ轉寫する方法は先づ圖を草履の大きさに引き伸ばして前に述べた通り、炭酸紙を應用して一方が描けましたら、その下繪を裏返しにして其の上を徐かに寫しますと右足の分が描けます。



第九十七圖

縫ひ方　先づ第九十七圖のやうに花瓣の上部をクリーム色糸二筋一本で、上段の點線までロングエンドショートで縫ひ、次に色を淡茶二筋一本に替へて、その縫ひ上げた短かい針足の所へは長く、長い針足の所へは短かく、再び二段目の點線まで縫ひ、最後に濃茶二筋一

第九十八圖

本で前の方法を繰り返し三段を縫ひ上げます。鐸の上にある玉はエンヂ六筋一本のまゝでフレンチノットを應用します。蕊は淡綠二筋一本で初め上部からロングエンドショートで中央まで縫ひ、糸を濃綠二筋一本に替へてその下を又ロングエンドショートで刺します。

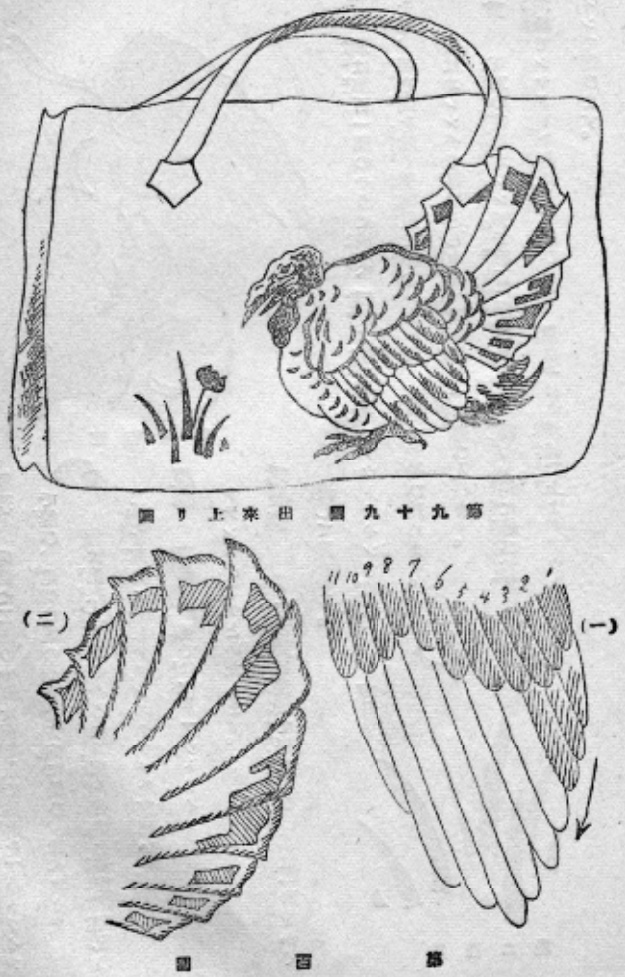
葉 葉は第九十八圖(イ)のやうに淡綠二筋一本で初め左右の外側の方をロングエンドショートで縫ひ、次に濃綠二筋一本で花瓣と同じくロングエンドショートカバーといたします。中央の葉脈は黒の二筋一本で上部から斜に縫ひます。莖は淡綠二筋一本で之も右斜に圖のやうに上から縫ひます。下向きの花は(ロ)圖のやうに輪廓をクリームの二筋一本で、アウトラインを應用し、中にある三ツの瓣は淡茶二筋一本で、シヤドーに縫ひ、下の太い線は濃茶二筋一本で線に縫ひます。蕊とその太線との間は淡茶一筋一本で、クロースに縫ひ詰めます。飾りの三角形は第九十六圖のやうな針方向に黒の二筋一本で、サテンステッチを應用いたします。

手提袋

材料 麻地。

D・M・C五番(藍鼠、淡鼠、淡茶、オレンヂ、葡萄鼠、淡綠。)

縫ひ方 第百圖(一)のやうに二重羽を數字の順に鼠鼠で尖から斜に縫ひ、羽尖は淡茶で之も順に斜縫いたします。



第九十九圖 出来上り圖

第百圖

第百一圖

尾羽　尾羽は(二)圖のやうな葡萄鼠で輪廓をアウトラインで縫ひ、尾羽は圓のやうな方向に縫ひ、背へ移ります。

背　背は出來上り圖のやうに輪廓と月型を淡鼠、藍鼠の二色を適當に配しサテンステッチを應用いたします。

腹部　腹部は淡鴇で輪廓をアウトラインで縫ひ、月型をサテンステッチといたします。

嘴及脚　嘴及び脚は淡鼠で斜に縫ひ、爪は一針短かく渡して置きます。

頭　頭は第百一圖のやうに淡茶、頰及び鶏冠は鴇でアウトラインで線縫をし、明き間を悉く葡萄鼠で小さいクロスステッチで縫ひ詰めます。

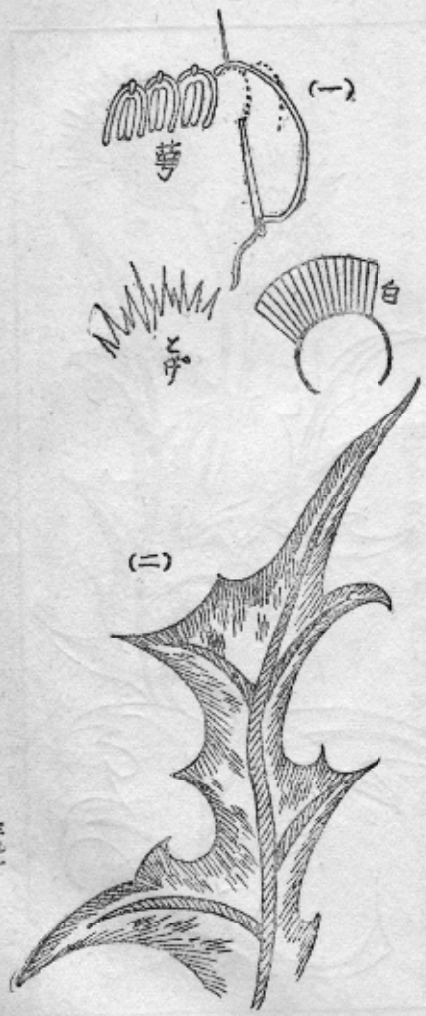
眼　眼はオレンヂで斜縫とし中央へ瞳を黒で一針縫ひ入れます。

下草　下草の花はオレンヂで第百二圖のやうに一瓣づゝ斜に縫ひ、葉は淡綠でシャドーを應用して縫ひます。莖はやはり淡綠で上よりアウトラインで縫ひます。

第百二圖

鏡掛（薊模様）

材料　褪紅色ポプリン地。
人絹糸（黒、白、淡綠、濃綠、エンヂ、オレンヂ。）一掛金糸。



第百三圖

大妻圖

第百四圖

縫ひ方　第百三圖の繪の夢を上部からオレンヂでレーヂーデーヂーを應用し、一ツづゝ重ね加減に縫つて置き、その糸と糸との間へエンヂを二針づゝならべて縫ひ入れます。

花　上の花は白で縦に縫ひ其の上へ一掛金糸で圓の如くまばらに長短のとげを渡しかけます。

葉　葉は中央の脈を黒で尖端から二圖に示すやうな方向に斜縫として周圍を淡綠で之も尖端からロングエンドシヨートで縫つて置き、つぎに濃綠で挿縫の方法にならつて其の下へ長短の糸渡しでぼかすやうにかすらせて縫ひます。

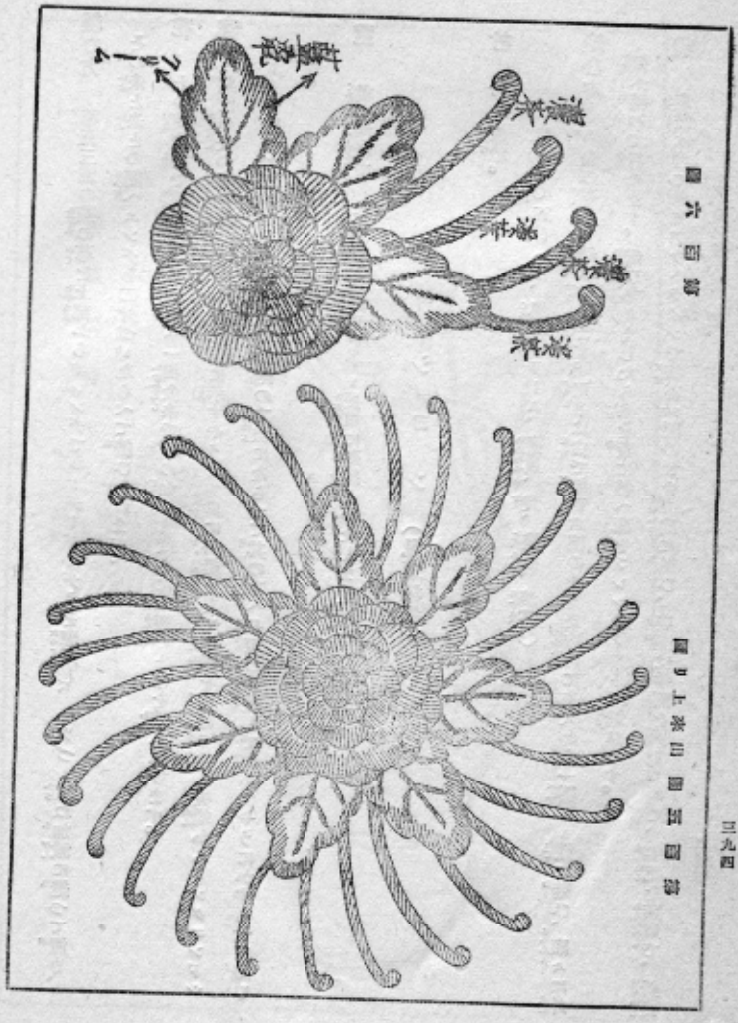
莖　莖は淡綠で斜に尖端から針足をやゝ長目に斜縫といたします。

クツシヨン（亂菊模樣）

材料　麻地。
D.M.C五番（白、黒、クリーム、鼠、黄、濃茶、淡茶。）

縫ひ方　中央の菊から縫ひ初めます。用糸は白で第百六圖のやうな方向に中央から一針づゝ縦に縫ひ、順々に外側へ縫つて行きます。縫ひ終りましたら糸を黄に替へ蕊をフレンチノツトで縫ひます。

葉　葉脈は黒にしてアウトラインで第百六圖の如き方向に縫ひ、周圍は半面をクリームに、半面を鼠で、針足



第百六圖

第百七圖

第百七圖　出來上り圖

長くロングエンドショートで縫ひます。外側の亂菊は濃菊と淡茶と一瓣置きに色を替へて圖の如く本の方から針足短かくサテンステッチを應用して縫ひ上げます。

クツシヨン（魚模様）

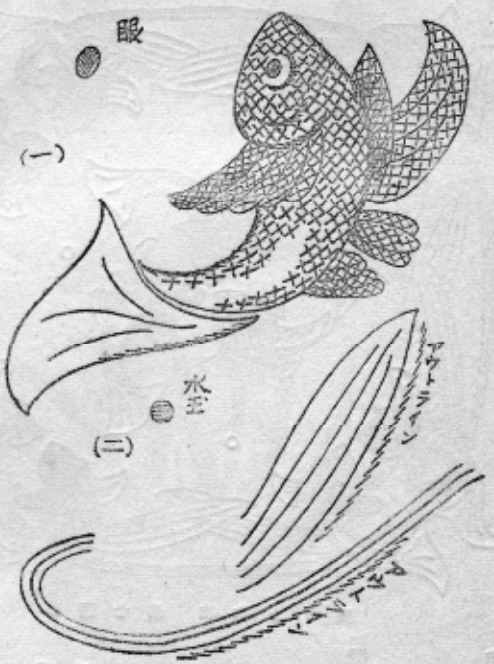
材料　サーヂ。

D・M・C五番、（淡茶、濃茶、白、黑、鼠、藍鼠。）

縫ひ方　魚より初めます。頭部から背へかけて淡茶で輪廓をアウトラインで縫ひます。

腹　腹部の線は白、鰭は藍鼠、尾

は鼠で之もアウトラインに縫ひます。



第百八圖

頭　次に頭部の鍔から眼の下を黒でクロススステッチで縫ひ詰め、頭の上部から背は鼠で、腹部は淡茶で第百八圖(一)のやうに之もクロスを應用いたします。眼は藍鼠で横に縫つて置き、中央へ黒で瞳を縫ひ入れます。水は同(二)圖のやうに線を淡茶、濃茶の二色で上段を淺く下段を濃くアウトラインといたします。中央の三個の水玉は黒で横にサテンステッチを應用して縫ひます。

テーブルセンター

材料　麻地。
D・M・C五番（黒、淡茶、濃茶、クリーム、エンヂ。）

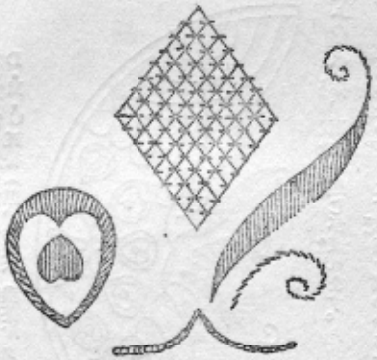
第百九圖

縫ひ方　きづ第百九圖のやうな圖案をセンターの左右につけます。初めエンヂで波形五線をチエインステッチで針足短かく縫ひ次に輪廓の曲線は黒で之もチエインステッチを應用いたします。左右共同樣の縫方で差支ありませんが、互ひ違ひに色を配して縫ふのも、亦、面白い感じが表れます。

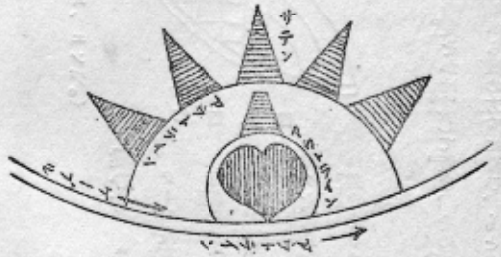
菱形　次に中央の菱形は、第百十圖のやうに淡茶で菱をかけ渡して置き、その交叉した糸を横に一文字に、濃茶で一針縫ひます。左右の葉のやうな形は濃茶で尖端から圖の方向に縫ひ、もとの菱形卓は、淡茶でアウトラインといたします。その下の山形の線は、濃茶でチエインステッチといたします。

孔雀の尾形

孔雀の尾の珠のやうな丸形は、周圍をクリームで縫ひ上げ、中の丸は淡茶で縦に縫ひます。下の圓の線は淡茶でアウトラインとし、上の三角形は黒でサテンといたします。中の模様は第百十一圖のやうな縫方にします。用糸は茶、エンヂ等を適當に配して縫ひます。最後に、周圍の半圓形の線は、内側を淡茶でケーブルステッチとし、外側を濃茶でアウトラインを應用いたします。片方も同様に縫ひます。



第百十圖



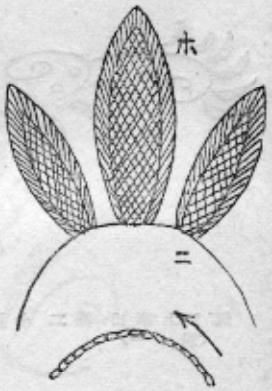
第百十一圖

テーブル掛

第百十二圖 出來上り圖（一隅）

第百十三圖

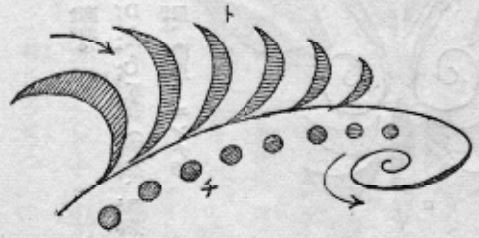
材料 麻地。D・M・C五番（淡茶、濃茶、淡鼠、濃鼠、エンヂ。）



第百十四圖

縫ひ方　第百十二圖は四隅にある同様の模様の一隅だけを掲げたものでありますから、このテーブル掛はこれと同じ模様が向ひ合つて四隅にあるのであります。

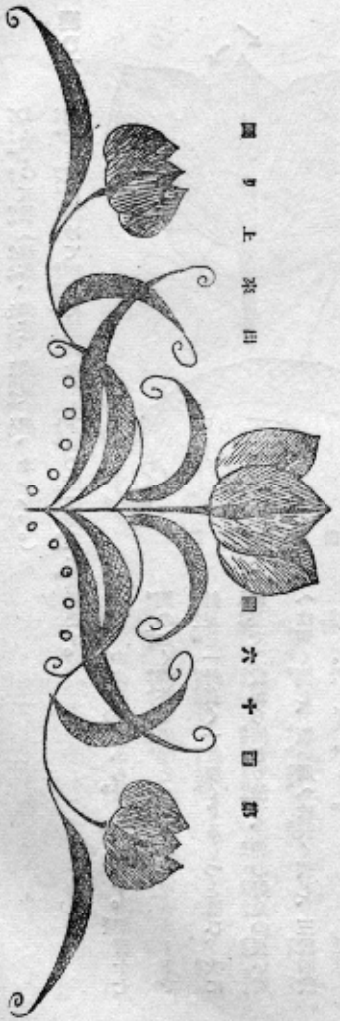
第百十三圖の中心となる中央の飾りから縫ひ初めます。(イ)のやうに周圍を淡茶でサテンステッチをし、圖の方向に密に縫ひ詰め、下の唐草はその共糸で同方向にだん〳〵と細くアウトラインに移ります。唐草の下の(ロ)は之れも圖の如く濃茶でサテンステッチをいたします。輪廓が終りましたら中の(ハ)は淡鼠でシヤドーステッチで縫ひその周圍を同じ糸で右斜のアウトラインにいたします。頭部にある飾りは第百十四圖(ニ)の線を濃鼠で針足短くチエインステッチで縫ひ(ホ)は中央をエンヂでシヤドーステッチで縫ひ、その外側を淡鼠で圖のやうな方向に縫ひます。第百十三圖(ヘ)は輪廓を淡茶で右斜にアウトラインステッチとし、その中を濃茶でクロスステッチにいたします。次に第百十五圖の蔓を濃鼠で針足短かくアウトラインとし、葉の(ト)は淡鼠で圖の方向に斜縫とします。蔓の下にある(チ)の飾りはエンヂでサテンステッチといたします。尚、矢印は縫ひ進む方向を示したものであります。



第百十五圖

これで一隅だけは出來上りました。同様のものを順次四隅にして出來上りと致します。

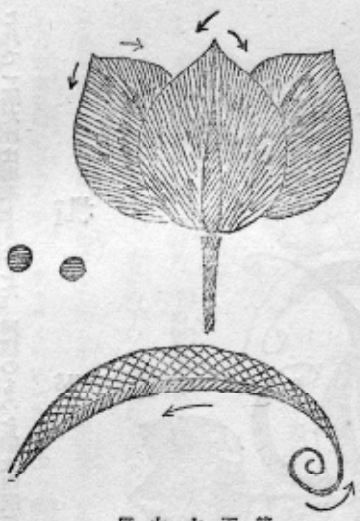
机掛



圖り上來出　圖六十四第

材料　麻地。
D・M・C五番（淡茶、濃茶、濃鼠、黒、オレンヂ。）

縫ひ方　用布を机に掛けて兩端に垂れたやゝ下目の所に圖案を置きます。



第百十七圖

花藝　中央の花藝から縫ひ初めます。第百十七圖の如く淡茶で周圍をロングエンドショートで針足を一針長く一針短くくるりつと縫ひ、次に濃茶で二段から同じ方法で、前の針足の長い所へは短く刺し、短い所へは長く刺し、三段四段と同じ方法を繰り返して縫ひ詰めます。中央の眼はオレンヂで尖端から右斜に縫ひます。

葉　葉は圖のやうに、初め下の方を黒で斜に縫ひ、上の方を濃鼠で尖端からアウトラインをだん〳〵にシヤドーステッチにいたします。

莖　莖は濃茶で針足を右方向にとり、圖の如くアウトラインステッテといたします。葉の下にある飾の玉はオレンヂで横にサテンステッチにいたします。

テーブル掛

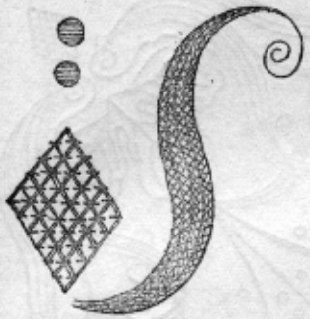
第百十八圖　出來上り圖（一隅）

材料　麻地。
D・M・C五番（淡茶、濃茶、黒、エンヂ、クリーム。）

縫ひ方　第百十八圖は第百十二圖同樣これと同じ模樣が向ひ合つて四隅にあるのであります。菊花の瓣から初めます。クリームの糸でサテンステッチとし第百十九圖の如く、一瓣づゝ尖より右方向に縫ひ上げます。蕾は淡茶で中央の三角形を殘して左斜に上部から縫ひ初め、莖も其の糸で同じ左斜に縫ひます。次に三角形

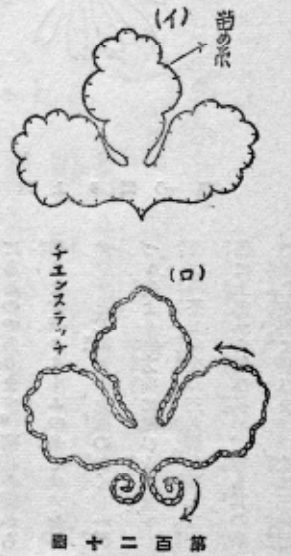
はエンヂで同じ針の方向に縫ひます。

第百十九圖



第百二十一圖

葉　中央の葉は、晒木綿を青味の帶びた灰色で染め、その小布を葉の形に切り取つて漿糊で貼り附け、周圍のところどころを黒の細い糸で第百二十圖（イ）の如く留めて置き、次に同圖（ロ）の如く黒で輪廓を針足短かくチエインステッチで縫ひます。周圍が出來ましたら、葉脈を黒で右斜のアウトラインといたします。左右にある細長い葉は第百二十一圖の如く四ツに區分しクロスステッチをいたします。配色は上の二側を淡茶に、下の二側を濃茶といたします。初め輪廓を



第百二十圖

淡茶で右斜にアウトラインステッチに縫ひ置き、其の中へクロスステッチを致します。小さい葉は二側に區分して差支ありません。飾り玉はエンヂでサテンステッチとし、葉の下にある菱型は初めエンヂで二筋糸をかけ渡して菱型とし、その交叉した糸と糸との上を横に一文字に黒で綴ぢます。

これと同樣のものを四隅にして出來上りと致します。

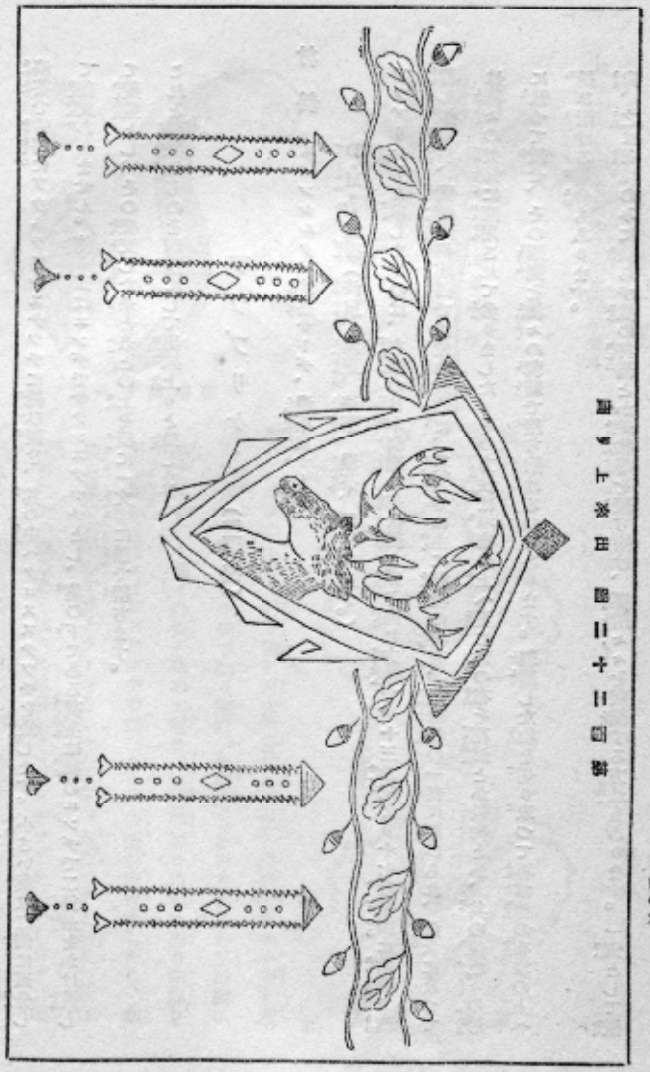
アツブリケー（壁掛）

材料　スパンシルク、淡茶サーヂ、濃茶屈サーヂ。

D・M・C五番（淡鼠、濃鼠、淡茶、濃茶、黒、エンヂ）。

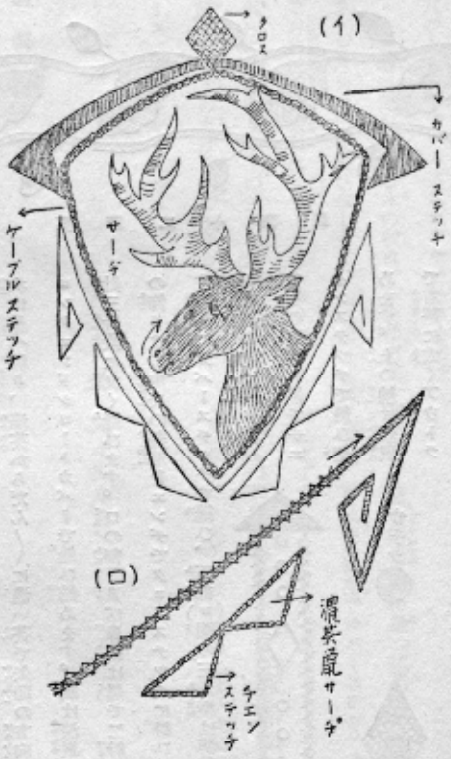
アツブリケーと申しますのは、在來の日本刺繍の切伏縫と殆ど同じ方法で、十三世紀より十七世紀頃に歐洲で流行し伊太利、獨逸、佛蘭西では室内裝飾に、英國では主に祭壇の掛布、祭服等の一部に用ひられ、近世になつては種々の裝飾に應用されて參りました。その方法は地布の上へ更に別の布を花形とか動物とか、其の他色々の形に裁つて載せ、その周圍を種々の刺繍で綴ぢ附けるのでございます。刺繍した物を切り取つて再び他の布地の上へ縫ひ附ける場合もあります。

尙、之は布地のみに限らず他の捧繪とか編物等を綴ぢ附け、要所々々を刺繍する方法もあります。一例として



第百二十二圖

掛に應用したアップリケーを説明いたします。



第百二十三圖

縫ひ方

形布の附け方

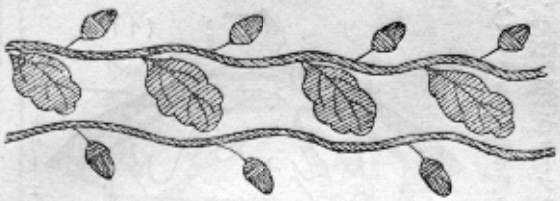
中央の馴鹿の盤面より初めます。第百二十三圖の如く盤の形に（ケーブルステッチの中）淡茶色のサーヂを切り取り地布のスパンシルクに薄糊で貼り附け、その周圍を同色の極く細い撚り糸で所々こまかく綴ぢ附けて置いて、其の上を同じ系統の茶色でケーブルステッチで縫ひ留めます。この盤面を縫ひ終りましたら馴鹿へ移ります。

馴鹿の縫ひ方

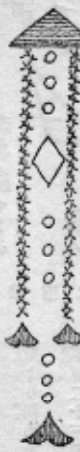
角から縫ひ初めます。第百二十三圖のやうに横にやゝ丸みをつけて鼠色濃淡二色を適當に配し

て二三段に先きから刺します。此の縫方は余り針目を深く刺し入れずに少し浅めに角の感じを失はないやうに注意いたします。角が終りましたら淡茶で、向つて右の耳の内側を二三段に揃縫し外側をやゝ濃い茶で圖の如く縫ひます。

次は鼻へ移り、淡茶からだん〳〵に濃い茶で矢印の方向に從つて眼の所を殘してロングエンドショートカバーで縫ひ詰めます。眼は淡黒で斜に縫ひ、黒で瞳を二針三針縦に丸く縫ひます。口の割目及び鼻際は黒で二針横に縫ひ入れます。上部の飾りは、中央の菱形をエンヂでクロスステッチに縫ひ詰め、下は濃鼠で圖に示す方向にカバーステッチで縫ひ、下部（ロ圖の三角型は濃茶鼠色のサーヂを切り前の盤面の如く貼り附けてその周圍を黒でチェインステッチで縫ひ留めます。上の線は濃鼠で右斜に太くアウトラインステッチに縫つて



第百二十四圖



サテン

クロス

フエーザー

第百二十五圖

其の上を淡茶でクロスステッチで縫ひます。

枝　左右へ流れてゐる木の枝は、葉を第百二十四圖のやうに淡鼠で横に縫つて置き、その上へ黒で葉脈をアウトラインステッチで縫ひ表します。枝を濃茶で横に縫ひ、實は縦に淡茶でカバーステッチといたします。枝は濃鼠で右斜にやゝ太目にアウトラインステッチといたします。

垂れてゐる飾りは上の三角型は黒で第百二十五圖のやうに横に縫ひ、中央の菱型は淡茶でクロスステッチに縫ひ詰め、上下の丸は淡鼠でサテンステッチとし、下の飾りはエンヂで縦に縫ひます。兩脇の直線は淡鼠でフエーザーステッチといたします。

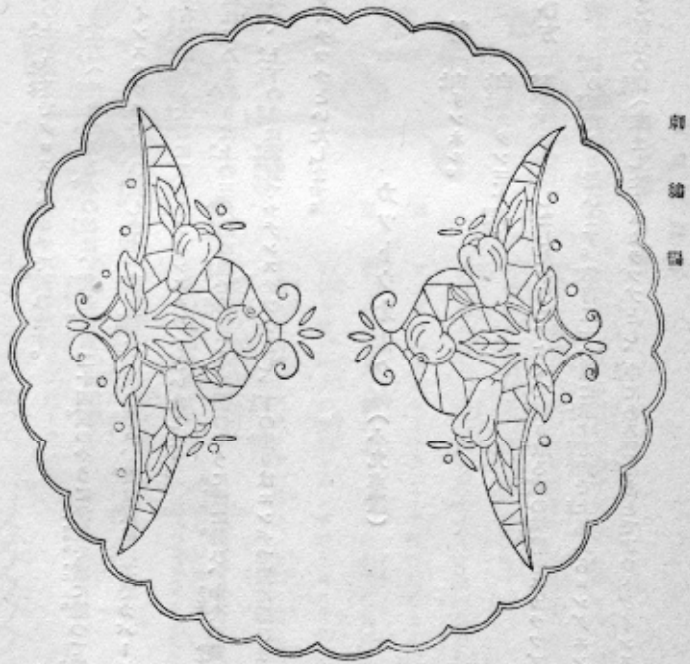
カットウオーク（小丸卓置）

材料　白リンネル。

白新カタン三十番。

縫ひ方　基礎縫に說明しましたやうに、すべて切り取る側の輪廓をスカラップで縫ひ上げます。

果實　初め果實より縫ひます。第百二十七圖に示す方向で上部からロングエンドショートカバーで縫ひ、切り取る部分の傍へ來ましたらスカラップとし、中にある筋はあとでアウトラインステッチで表します。



第百二十六圖　由來上り圖

四一〇

葉　葉は周圍を之も切り取る側をスカラップとし眞を尖きよりアウトラインステッチで縫ひます。莖は左斜に余り針足の長くならないやうに注意して縫ひ上げます。此の葉實の全部が縫ひ終りましたら、輪廓へ移ります。

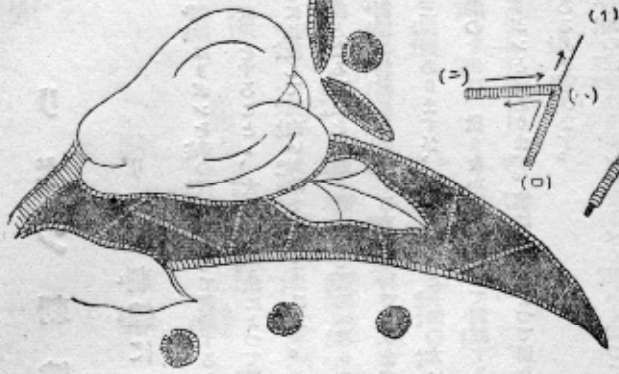
輪廓　頭部の庫草から右方向に、針足短かく斜にアウトラインステッチでだん〳〵に太く、之も切る側の所へきましたらス

第百二十七圖

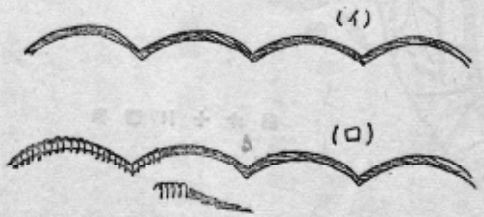
カラップといたします。飾りの丸と楕圓形はアイレットウオークの方法で縫ひます。

此の方法は基礎縫の時說明しましたやうに、第百二十八圖の(一)は楕圓形の周圍を矢印の方向に本返し縫となし、輪廓を終りましたら、その中を切り取り、(二)のやうにその本返し縫を力糸としてかゞつて行く方法であります。丸も同じ縫方でいたします。かうして模樣全體の刺繍が出來上りましたら外の輪廓月型へ移ります。初め內側へ第百二十九圖(イ)のやうにアウトラインステッチで力糸となる縫をして其の上へ(ロ)のやうにスカラップを應用いたします。

次ぎに模樣のつなぎとなる線は第百三十圖(イ)より(ロ)へ糸を渡しかけ、其の糸を圖のやうにスカラップの方法でかゞりながら(ハ)の點までかゞつて來ましたら、(ニ)へ其の糸を渡しかけ、再び同じ方法で其の糸を跨り(ハ)へ來ましたら又(ロ)へかゞつて行きます。



第百二十八圖



第百二十九圖

第百三十圖

此のつなぎの線がかゞり終りましたら、布の裏から其の線を切らないやうに注意して布地だけ切り取ります。又外側の月型のスカラップより外の布を切り取りますと、出來上ります。

以上にて佛蘭西刺繍の基礎及びその應用の一通りを終へます。

リボン刺繍

リボン刺繍に就て

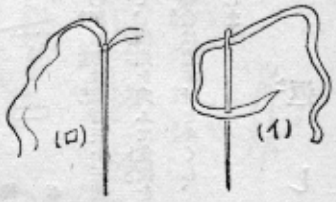
リボン刺繍はリボンを糸の代りに使つて刺繍するので、別に日本刺繍と大差はありません。リボンの幅を活用して力強い表現をすることゝ、大まかな手法によつて豊な感覚味を持たせることの出來る點は日本刺繍の纖細な技工と優雅さに比較して面白い對象であると思ひます。

形の基礎となる方法を一通り説明して實物へ移りませう。尚、用具も初は丸枠で結構ですが、少し大きいもの丶時は日本刺繍の刺繍臺を使用する方が便利であります。

針も二三種類ありますが、普通は平滿と長滿の太いのを用ひます。用途によつてリボンへ撚りをかけて刺繍する場合は長滿のを使ひ、撚りをかけずに平にて刺繍する場合は平滿のを用ひます。リボンには縞リボンと無地のリボンとがあります。縞は大抵定まつて居りますが、質には良不良がありますから地の目がつんで堅く織り上げてある品を選びます。

リボン刺繍の注意はリボンをなるべく短かく切つて尖端を三角に切り、平たいまゝ針滿へ通し、リボンの端の縞の中央へ第百三十一圖(イ)のやうに針を通し、(ロ)のやうに針を引き抜いて置きます。撚りをかける場合は縫ひながら針だけを指頭で廻すやうにして、リボンへあまり手を觸れないやう、又平に縫ふ場合は日本刺繍に用ひる目打でリボンを撫げながら縫つてゆきます。

全部縫ひ上りましたら裏から輕く叩き、布面のほこりを落し、淡い糊を指頭で布地へつかないやう注意して、リボンの裏のみにつけ、濡れたハンカチで裏から布面一體を輕く拭ひ陰乾として裏から外します。仕上げはフランス刺繍のやうにアイロンを用ひますと、折角のリボンの膨を損じますから此の刺繍には不適當であります。



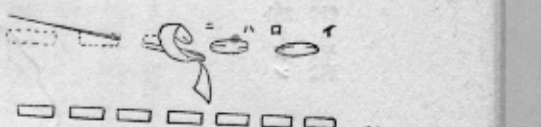
第百三十一圖

基礎縫

點縫

縞リボン
針：平滿

第百三十二圖イの裏から出した針をロへ入れハへ抜き出しニに入れ順次に縫つて行きます。リボンに撚りのかゝらないやう目打で平に擴げながら縫ひます。



第百三十二圖

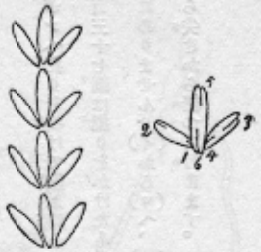
線縫

縞リボン
針　長溝
佛蘭西刺繍のアウトラインと同じ方法でリボンに撚をかけて返縫といたします。撚りの拵へ方は第百三十三圖のやうに右手の揃指と食指とに針を持つて、揃指を向ふに食指を手前へ引くやうにいたします。太く縫ふ場合は返す針を多くし、細い線を縫ふ場合は返す針を少なくいたします。

第百三十三圖

返し縫

縞リボン
針　平溝
撚らず平のまゝで第百三十四圖(1)から出した針を(2)へ入れ(3)へ抜き(4)へ入れ(5)へ抜き(6)と順に針を返す縫方で、最後の(6)で(1)(4)の針穴をかくします。



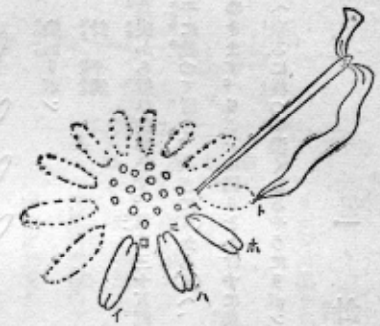
第百三十四圖

割縫

變別リボン
針　平溝
葉尖から縫ひ初めます。第百三十五圖のやうに、葉脈の尖を(1)より(2)へ一針平に縫つて置き、次ぎに(3)から(4)へ、(5)から(6)へと、交叉させながら縫つてゆきます。リボンは撚りをかけずに葉の尖をぼかしの淡い色の方で縫ひ、元へ來るに從つて濃くなるやうにリボンを使ひます。

第百三十五圖

一針縫

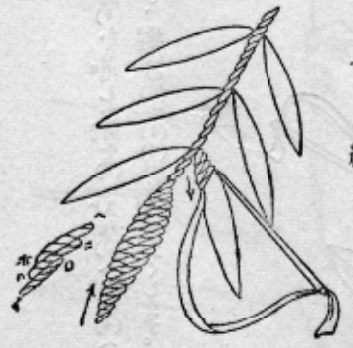


第百三十六圖

縞リボン
針　平滿

撚りをかけずに第百三十六圖(イ)から出した針を(ロ)へ入れ、(ハ)へ抜き出し(ニ)に入れます。順に一針で花瓣を表します。芯は撚りをかけながら日本刺繍の相良縫の方法で縫ひます。

片切縫

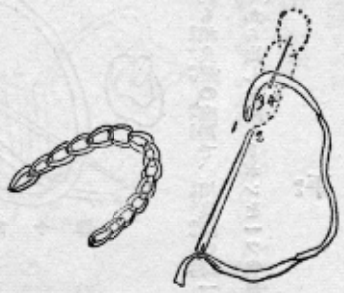


第百三十七圖

染別リボン
針　長滿

リボンへ撚りを掛けて縫ふ時と、平で縫ふ時とがあります。第百三十七圖は撚りをかけたものですが平縫でも縫方にかわりはありません。(イ)から(ロ)へ、(ハ)から(ニ)と順に撚りを掛へながら尖きから縫つて行きます。

鎖縫



第百三十八圖

縞リボン
針　長滿

佛蘭西刺繍のチェインステッチと同じ仕方で、第百三十八圖に示した數字の順にリボンへ撚りをかけながら縫ひます。

相良縫

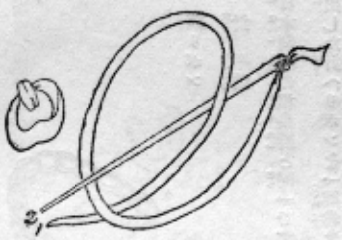
縞リボン
針　平滿

日本刺繍の相良縫と同一です。リボンへ撚りをかけずに第百三十九圖(1)から出した針へリボンを一回巻き(2)へ入れて徐かに引き締めます。

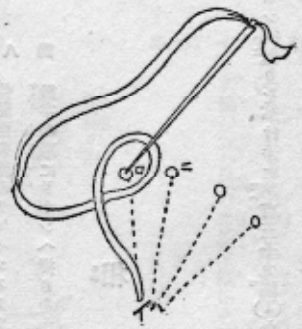
環縫

第百三十九圖

縞リボン
針　平溝



第百四十圖



第百四十一圖

相良縫の應用でありますが、第百四十圖に示すやうに一ツ少さく輪を作り、其の輪を今出した針の傍で一針留め縫をいたします。

流相良縫

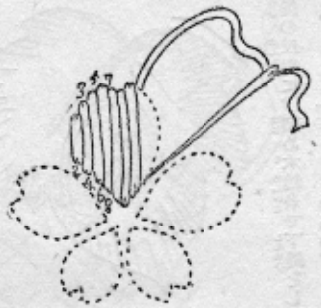
縞リボン
針　平溝

これも相良縫の應用で、相良縫の時一ツ針へリボンを卷いて、入れる針足を長く縫ふのであります。第百四十一圖の(イ)から出した針へリボンを一ツ卷き(ロ)へ入れます。撚りは强ひて擴げなくても自然のまゝで宜しいのです。

平縫

染別リボン
針　平溝

リボンを平に用ひ、第百四十二圖の花瓣の端より數字の順に縫ひます。リボンの幅と幅とが余り重ならず、又隙ないやうに目打で揃へて縫ひます。



第百四十二圖

第百四十三圖

鎖止縫

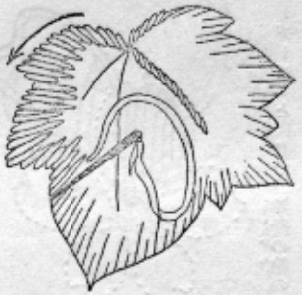
染別リボン
針　平溝
佛蘭西刺繍のレージーデージーと同じで、鎖縫の輪の尖を留める縫方であります。リボンへ撚りのかゝらないやう注意いたします。

(第百四十三圖參照)

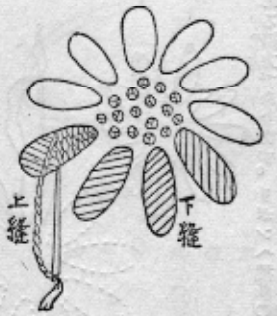
出入縫

染別リボン
針　長滿

リボンに撚りをかけながら、繪廓は針目正しく、内側は一針長く一針短かく、中心へ向つて縫ひ廻りきます。撚りに強い弱いが出來ないやう指先で加減いたします。（第百四十四圖參照）



第百四十四圖



第百四十五圖

撚掛肉入縫

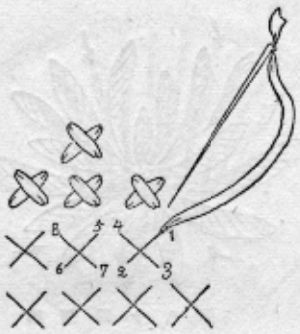
染別リボン
針　長滿

上縫の反對に、初め木綿糸で下縫をして置き、その上をリボンへ撚りをかけながら縫つてゆきます。芯は相良縫にいたします。

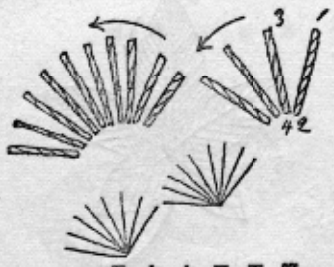
十字縫

縞リボン
針　平滿

リボンを平に第百四十六圖の數字の順に(1)から(2)へ(3)から(4)へと正方形の隅から隅へ針を渡す心持で縫ひます。



第百四十六圖



第百四十七圖

松葉掛縫

染別リボン
針　長滿

リボンへ撚りをかけながら第百四十七圖(1)から(2)へ(3)から(4)と順に渡し松葉の形に縫ひます。元の集まる點は余り間の隙かないやうにいたします。

斜縫

染別リボン
針　長溝

リボンへ撚りをかけ乍ら瓣の尖から斜に撚りの不同にならないやう縫ひます。（第百四十八圖參照）

第百四十八圖

第百四十九圖

撚掛割縫

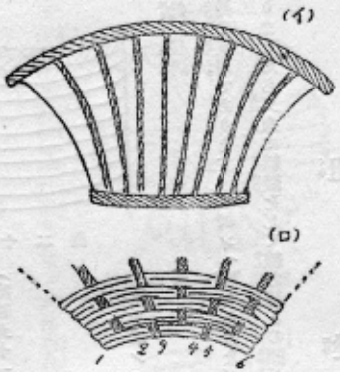
染別リボン
針　長溝

中央の葉脈を境とし第百四十九圖のやうに葉の尖から半面づゝ撚りを掛へて葉脈の針目が余り隙かないやうに注意して縫ひます。

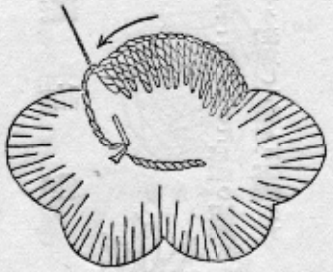
籠編縫

縞リボン
針　長溝

籠の左右の縦線を殘して第百五十圖のやうにリボンへ撚りをかけながら籠の中の縦線を綿縫といたします。此の綿縫が終りましたら底の方からリボンを撚らずに(1)(2)(3)(4)と同じ針使ひを二度づゝ繰り返し一段を縫ひ、次に二段目は一段目と針目がたがひちがひになるやうに矢張り二針づゝ繰り返してだん〴〵上部へ縫つてゆきます。終りましたら椽と底はリボンへ撚りをかけ太目に綿縫をして置きます。



第百五十圖



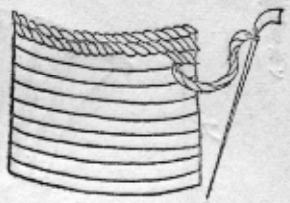
第百五十一圖

スカラ縫

染別リボン

針　長溝

リボンへ撚をかけて內側の方から針を出し、その針へリボンを一度かけて針を引き拔きます。此の縫方は兎角撚りが不同となりがちですから特に注意致します。（第百五十一圖參照）



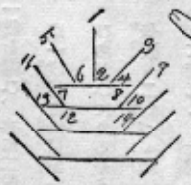
第百五十二圖

纏詰縫

縞リボン

針　長溝

線縫の應用であります。リボンへ撚をかけながら第百五十二圖のやうに上部の線縫が終りましたら又次に線縫をして線と線との間が隙ないやう注意して順々に縫詰ます。



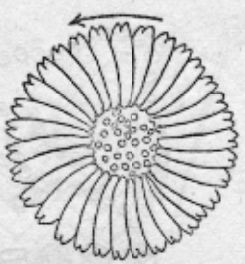
第百五十三圖

組縫

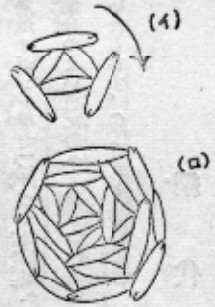
縞リボン

針　平溝

リボンを平に第百五十三圖のやうに(1)から出した針を(2)へ入れ(3)から出し(4)へ入れ(5)へ拔き出し(6)へと順々に組み重ねてゆきます。撚のかゝらないやうに目打で揃へ縞目に注意いたします。圖はリボンとリボンの間が隙いて居りますが、針使ひの方向を判りよく示すため描いたもので、勿論、隙かないやうに縫ふのであります。



第百五十四圖



第百五十五圖

平重縫

染別リボン

針　平溝

一針縫の應用でありまして目打でリボンを平らに揃へながら一攢づつ多少重なり加減に縫ひ廻ります。芯は相良縫といたします。（第百五十四圖參照）

卷重縫

染別リボン

針　平溝

リボンを平に縫の中心を三角形に縫ひ、次にその角々を落す心持で第百五十五圖のやうに針を運びます。縫の内に多少拔のかゝつた縫ひ方がまじつても結構です。要するに花瓣を作る心持で縫ひ廻るのであります。

鹿の子縫

第百五十六圖

無地リボン
針　平滿　長滿

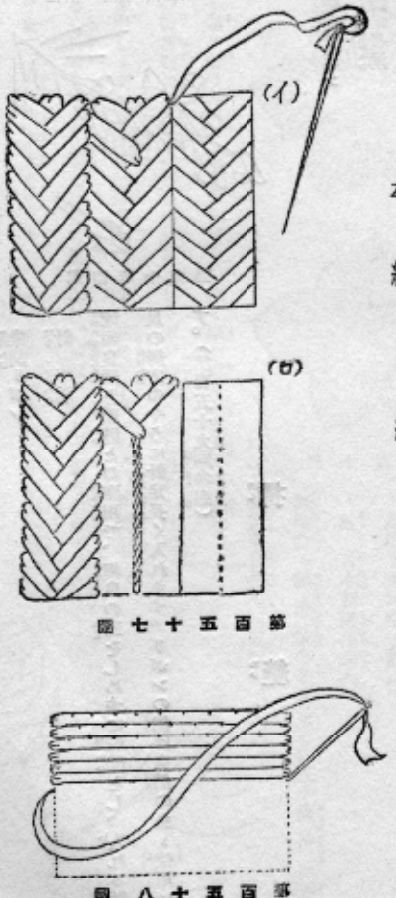
無地リボンを平で二針づゝ針足短かく並べて點縫をして置き、次にリボンを配合のよい色に替へて拔をかけながらその點縫の中央へ一針かたく相良縫をいたします。（第百五十六圖參照）

網代縫

縞リボン
針　平滿

リボンを平に前に進べました刺縫の方法で針を左右交互に縫ひ重ねてゆきます。尙、第百五十七圖(ロ)のやうに網代の中心即ち圓の點線の上を先に拔を掛けて線縫をして置き、其の線上を交互に組み合せ乍ら縫ふ方法もあります。

平縞目縫



第百五十七圖

第百五十八圖

縞リボン
針　平滿

リボンの縞目を目打でよく揃へ、上部から順々に少しリボンが重なる樣に縫ひ上げ、終りましたら同色の極く細

い撚り糸で工の目にリボンの綫を一本づゝ浅く綴ぢます。（第百五十八圖參照）

環挿縫

染別リボン
針　平滿

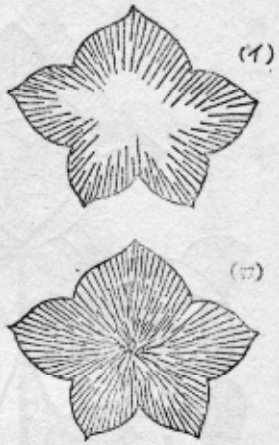
第百五十九圖

流相良縫と環縫との應用で、相良の玉をしめずに環縫とし、入れる針を流相良の縫方のやうに針足長く入れます。リボンの撚は自然のまゝ使用いたします。（第百五十九圖參照）

挿縫

染別リボン
針　長滿

リボンへ撚をかけ第百六十圖（イ）のやうに出入縫をして置き、次に（ロ）のやうにその出入の針目の間へやはり長短の針足にて挿し入れ順次縫ひ詰めます。日本刺繍の挿縫と同一です。



第百六十圖

綴附縫

無地リボン幅一糎位
針　日本刺繍用糸八
無地の一糎巾位のリボンを約三十糎位に切りその尖を目打へ四五回輕く巻き附け目打を抜き取り同色の極く細い撚り糸を糸八へ通し、その抜き取つた目打のあとへ針を通しリボンの端へ少し針をかけて引き出しリボンを布地へ綴ぢ附けます。次に其のリボンで、花瓣を作る心持でぐる〳〵廻しながら撚をかけ、或は平にして綴ぢ付けてゆきます。形が出來上りましたら、リボンの端は目打で布の裏へ落して綴ぢ附けて置きます。（第百六十一圖參照）

以上大體基礎となる縫ひ方を擧げましたが、前にも述べましたやうに、日本刺繍と大差なく、たゞ縫上りの感じが糸と異つて方強い面

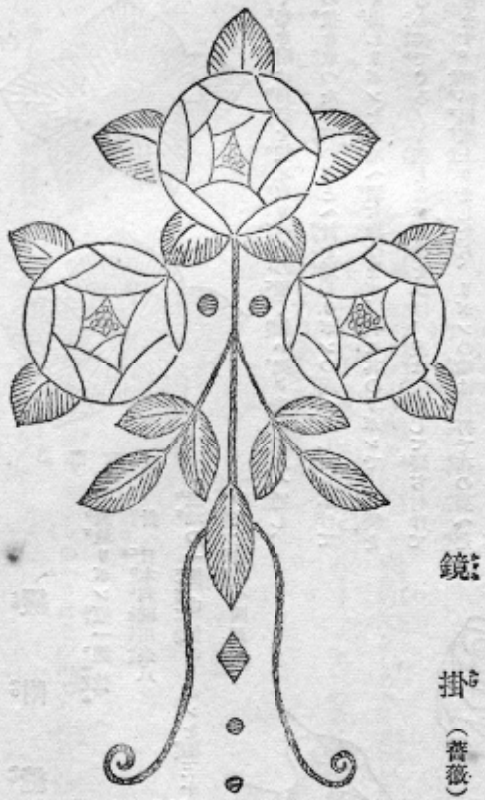
第百六十一圖

實大圖

白味が有るのであります。

應用縫

鏡掛（薔薇）



第百六十二圖　出來上り圖

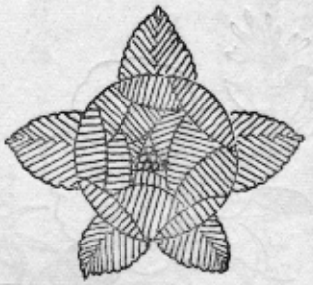
材料　ボブリン地。

リボン（淡黄と白染別、綠濃淡染別、黄、茶、エンヂ）

用具　リボン刺繍用針（以下いつもこの針は必要ですから針は省略いたします。

縫ひ方　花辨より初めます。第百六十三圖のやうな方向に外側から順々に内側へ向つて白と淡黄の染別リボンで撚を掛けながら縫ひ上げ、芯は黄で撚をかけながら相良縫をいたします。

葉　綠濃淡染別リボンで脈を中心として尖を淡色に左右より平で刺縫にいたします。



第百六十三圖

枝　枝は右方向に茶のリボンで撚をかけながら綠縫とし、飾の丸と菱形はエンヂで撚を掛け乍ら横に縫ひます。

雲れてゐる莖のやうな左右の線は、之も黄で撚をかけながら右方向に綠縫といたします。

ハンドバツク（月見草）

材料　黒繻子地。

第百六十四圖　出來上り圖

リボン（黄濃淡染別、緑濃淡染別、青磁。）釜糸、（緑、白。）

縫ひ方　花辨から初めます。第百六十五圖（イ）のやうに黄の染別の淡色で辨の外側から平の掛縫で、一針長く一針短かく縫ひ廻りだん〳〵に濃くなるやうリボンを使ひます。花辨が縫へましたら（ロ）圖のやうに蕊を白釜糸一本半一本の右撚りで線縫をしてその尖へ、雌蕊を青磁色で平

第百六十五圖

に一針づゝ四針縫ひ、雄蕊を黄の濃色で平に一針余りリボンを引き締めないで縫ひます。

半開きの辨　半開きの辨も（ハ）のやうに黄の淡色だけで、掛縫にいたします。

蕾　蕾も（ニ）圖のやうに濃い黄色で縦に撚り掛く縫ひ、萼はそのもとを青磁色で同じ方向の縦に縫ひます。蕾の上にある若葉も、青磁色で、撚り掛く（ホ）圖のやうな方向に縫ひます。蕾は緑濃淡染別で尖きから縫ひはじめ追々濃くなるやう掛く撚つて右斜に縫ひます。

テーブル掛（葡萄模様）

材料　サージ。

リボン（鼠濃淡染別と茶濃淡染別とで適當に葉の色を定めて縫ひ方へ移ります。

葡萄鼠染別、黒。）釜糸（淡鼠、淡茶、黒。）白木綿糸。

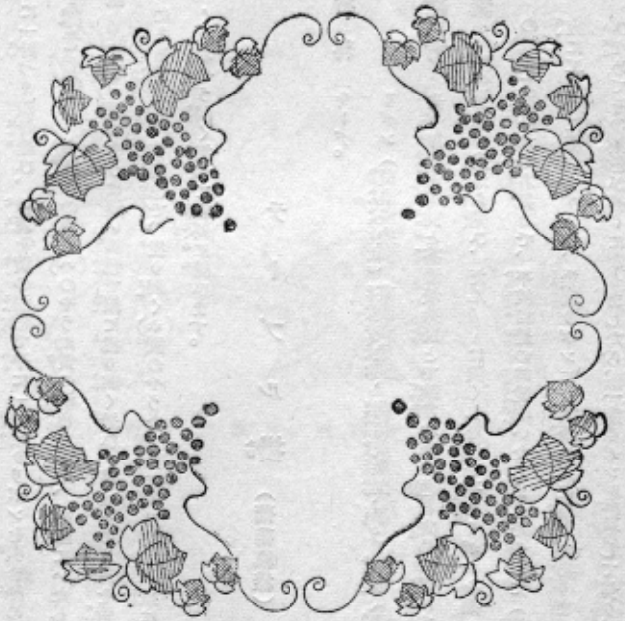
縫ひ方　先づ鼠濃淡染別と茶濃淡染別とで適當に葉の色を定めて縫ひ方へ移ります。

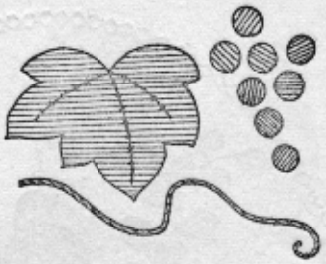
葉　淡色で葉の尖から縫ひ、だん〳〵に濃くし目打で平にリボンを捲へ、第百六十七圖の方向に縫ひ上げ、同色の釜糸二番一本の右撚りで、平縫目縫の時説明いたしましたやうに（第四百二十九頁參照）リボンの耳を三粍位宛に工の日に殺ぢます。尚、染別リボンには濃淡の丈に限りがありますから、大きな物を縫ふ場合には淡色で縫ひ初めてその淡色が終りになりましたら、一度リボンを針留して切り、又淡色で其のあとを縫ひ、だん〳〵に濃

色へ移りませんと淡、濃、淡、濃といふ工合に綺立つて見苦しくなります。この葉の場合にも一丈で、淡色で初め濃色で終る小さい物は結構ですが、大きい葉は淡、淡、濃、濃といふやうに使用し、又ある葉へは淡、濃、濃と色どりますと、リボンに無駄も出ず配色も綺立たず に縫ひ上ります。次に黒で撚を充分かけて眞を渡し、同色の釜糸四管一本の右撚りで反りを附け乍ら縫ひ上げます。

葉　葉は茶濃淡染別で撚をかけながら右方向の綾縫といたします。

第百六十六圖　出來上り圖





第百六十七圖

配色の濃淡は別にかまいませんが、濃い所で終りましたら又濃い色で初め、淡い所で終りましたら淡色でつゞけませんと濃淡をはぎ合せたやうで見苦しくなります。

實　實は綿掛肉入縫を應用し白木綿糸で上縫の反對に下縫をして置き、その上を葡萄鼠で撚をかけながら縫ひ上げます。方向は第百六十七圖のやうに色々に向を變へて縫ふ方が平面的でなく房々した感じが出ます。

クッション（椿に小鳥）

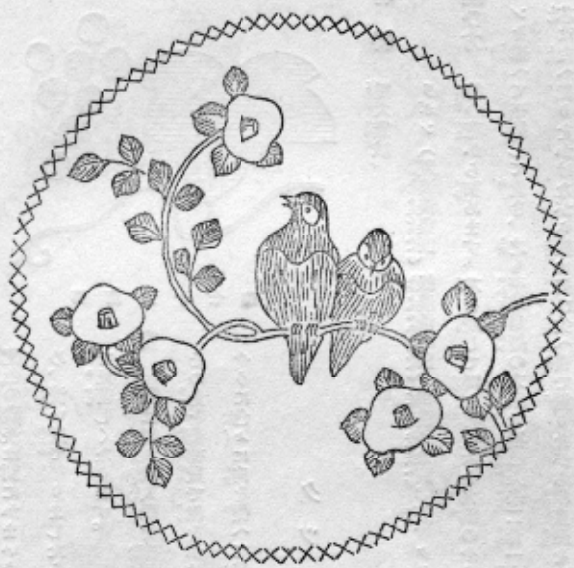
材料　黒天鵞絨。

リボン（良濃淡染別、緑濃淡染別、雪濃淡染別、茶、クリーム、白、黄）釜糸（淡緑、黒）

縫ひ方　椿の花から初めます。芯を殘して縫を第百六十九圖のやうな方向に濃染別の淡色を上部とし、平にリボンを揃へて平縫して置き、之も平納目縫の方法で濃色釜糸二管一本の右撚りでリボンの坪を留め縫いたします。芯は白へ撚りをかけながら縦に縫ひ尖へ黄で撚りながら相良縫をいたします。

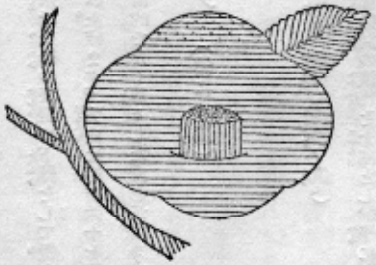
葉　葉は緑染別の淡色から左右へ平に割縫としします。

枝　枝は茶で撚をかけながら右斜に縫ひます。

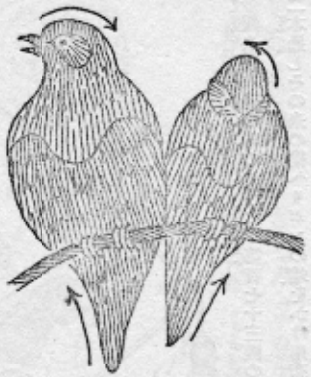


第百六十八圖　出來上り圖

鳥　鳥は頭から胸の線まで鼠濃淡染別の濃色から第百七十圖の矢印の順に淡色へ顔の部分を除いて縦に平で挿縫とします。腹は尾の部分から、之も矢印の方向に從つてクリームへ撚をかけずに平で挿縫とします。顔の部分は鴇の淡色で平に挿縫とし、嘴及び脚は鼠の淡色で撚りながら斜縫にします。最後に眼は釜糸の黒で撚らずに横に丸く縫ひ、その周圍を淡鴇四菅一本の右撚りで線縫をいたします。輪廓の圓形は茶を撚らずに十字縫で表します。



第百六十九圖



第百七十圖

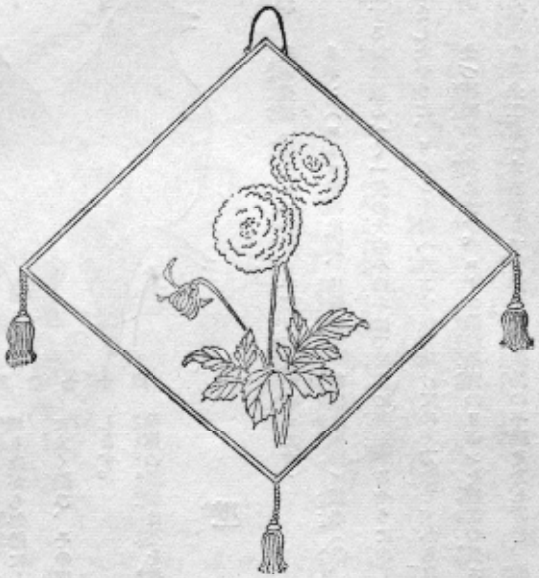
壁掛（ボンボンダリヤ）

材料　菱形壁掛（絹張りの既製品手藝材料店に有ります）

リボン（ローズ濃淡染別、白黄染別、緑濃淡染別）釜糸（緑、ローズ。）

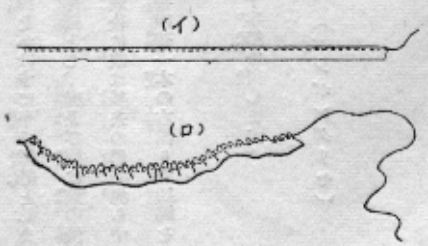
使用する針は成るべく一袋の大中小の中にて適當に選定するやうに申しましたが茲で説明する綴附縫は基礎の時申しましたやうに、リボンを針へ通さず綴ぢ附けてゆく方法ですから日本刺繍針も用意いたします。

縫ひ方　先づ花瓣から初めます。ローズ濃淡染別のリボンを適當の長さに切り。第百七十二圖（イ）のやうに幅の上部を同色の釜糸二菅一本右撚りで密かく普通裁縫の平縫をなし置き、終りの糸を適當にリボンの緑のちゞむ加減



第百七十一圖　出來上り圖

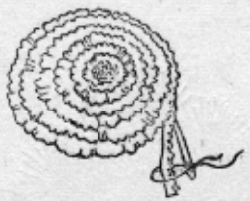
に引縮めますと(ロ)圖のやうになります。此のリボンを綴ぢ附け縫の方法で同色の二菅一本の糸で用布へ縫ひ附けながら綴ぢ廻ります。終りのリボンは少し長く切つて、日本刺繍の金銀糸駒取縫の時のやうに、第百七十三圖の如く太い針へ木綿糸を輪とし二本通しその糸の輪へリボンの端をかけ用布の下へ引き落します。芯は黄



第百七十二圖

色リボンで相良縫といたします。今一ツの花も同じ縫方にいたします。

葉　葉は綠濃淡の染別で尖を淡色に、もとを濃く、平で縫つて置き、その上へ葉脈を綠の釜糸二本一本右撚り糸で渡しかけ、同じ色の四菅一本右撚りで反りを附けながら綴ぢ上げます。綠濃淡染別で大きい葉を縫ふ場合は尖を淡色から初め、淡色が終りましたら一度リボンを留縫して切り取り、更に淡色から初めて濃色へ移ります。前にも申しました通り一枚の葉へ淡、濃、淡と縞が出來ないやうに注意いたします。裏葉は淡色で第百七十四圖の方向に平で縫ひます。蕾はローズ色染別で弱く撚りながら圖の方向に縫ひ、蕚は綠濃淡染別で之も弱く撚りながら蕾の上へ一針長く一針短かくかけ渡して縫ひます。



第百七十三圖

第百七十四圖

莖　莖は綠染別の淡い方から、余り撚りをかけないで右方向にだん〳〵濃くなるやうに縫ひます。

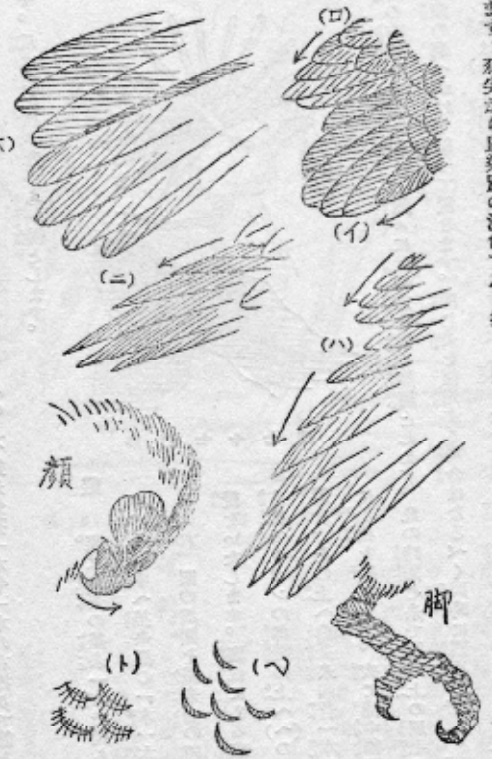
額面（松に鷹）

材料　鼠琥珀地。

第百七十五圖　山來上り圖

リボン（茶淡濃染別、鼠濃淡染別、綠濃淡染別、淡茶、黑、黄。）釜糸（白、金茶、黑。）

縫ひ方　鷹の二重羽第百七十六圖（イ）から初めます。茶染別の淡色で羽尖から圖の方向にならつて矢印の順に撚りを弱く縫ひます。（ロ）も同色のなるべく濃い方で矢印の順に縫ひ（ハ）へ移ります。羽尖から鼠染別の淡色で之も撚りを弱く矢印に隨ひ順々に縫つてゆきます。（ニ）の向の羽はやはり風切羽ですから、（ハ）と同じ配色で同じ縫方です。尾羽（ホ）は鼠染別でやはり尖を淡色に中央の一枚を割縫とし左右を圖のやうに撚りを弱く縫ひます。肩から背の羽は一枚一枚縦に圖のやうな方向に茶濃淡染別にて弱く撚りながら縫ひます。



第百七十六圖

頭部　頭部の羽も茶濃淡染別で弱く撚りながら嘴寄りの方を濃く圖のやうに一枚づゝ縦に縫ひます。

腹部　腹部は淺茶で撚りをかけながら第百七十六圖の矢印の方向に押縫とし縫へ向ひます。

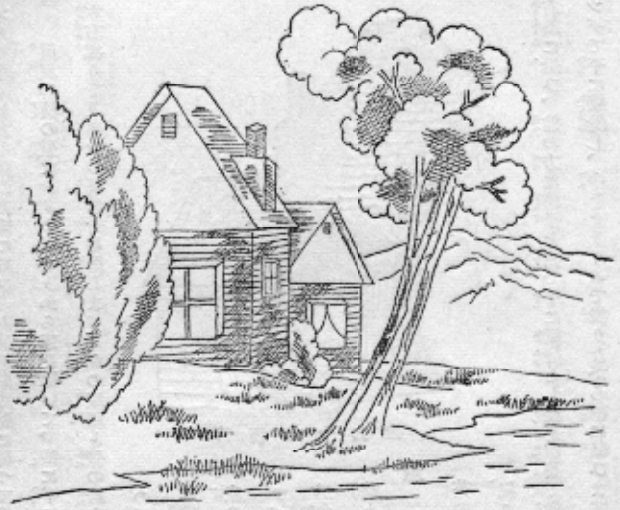
顔　顔は黒で撚り弱く嘴の上部へ向つて押縫し、嘴は黄に撚りをかけて圖のやうに尖より斜縫とします。

脚　脚は黄で縫りながら左斜に縫つて置き、その上へ釜糸金茶一木半一木の右撚りで節を一針づゝ渡して置きます。爪は白を撚りながら斜縫とします。

第百七十七圖

眼　眼は金茶の釜糸一木で撚らずに横に丸く縫つて置き、その中へ釜糸黒の一木一本の右撚りで横に瞳を縫ひ入れ、眼の周圍を釜糸白の四管一本で針足短かく縫縫をいたします。腹部にある斑は釜糸黒の一木一本の右撚でリボンの押縫の上へ(へ)の如く月型に線縫をして置き、その上へ白釜糸四管一本の右撚りで(ト)圖のやうに毛掻を縫ひます。次に圖中割羽の芯は白釜糸一木一本の右撚りで尖を細く、徐々に元の方を太く線縫としします。此の時同じ糸で眼の上の眉毛に似た羽毛を圖のやうに翼の羽へかけて縫つて置きます。同じ糸を使用する場合はなるべく同時に纏めて縫ふと手都合よく運びます。

松　松は幹を茶濃淡染別で撚りをかけながら第百七十七圖の如く右斜に押縫とします。配色はなるべく鳥の蔭となる部分へは濃色を用ひ、細い枝は撚りをかけて右斜の線縫とします。松葉は緑濃淡染別で撚り乍ら松葉掛縫の方法で下の葉り、即ち茅のある所へ淡茶を平で一針縫つて置きます。尚、下枝が大きい場合は松葉を一本づゝ撚りをかけて線縫といたします。



第百七十八圖　出來上り圖

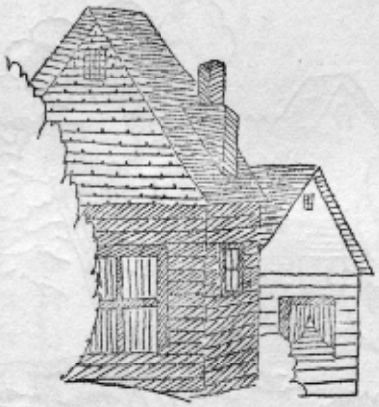
額面（山水）

材料　クリーム琥珀地。
リボン（茶濃淡染別、緑濃淡染別、クリーム、エンヂ、白、扇、淡茶。）
釜糸（茶、白、クリーム。）

縫ひ方　屋根を茶濃淡染別で撚りをかけながら第百七十九圖のやうに押縫とし、煙突はエ

ンヂで外側を之も圖の方向に縫ひ、內側を眞で斜に縫つて置きます。

壁　屋根の横の壁はクリームで上から窓を除いて、横に平に縫ひ、あとで平縞目縫のやうにクリーム釜糸二番一本右撚りでリボンの巾を留め縫します。此の屋根と壁の縫方は後方の家にも應用しますが、配色はなるべく後方の屋根は蔭となりますから濃色を主に用ゐます。屋根裏は圖の方向に眞で撚りながら縫ひます。

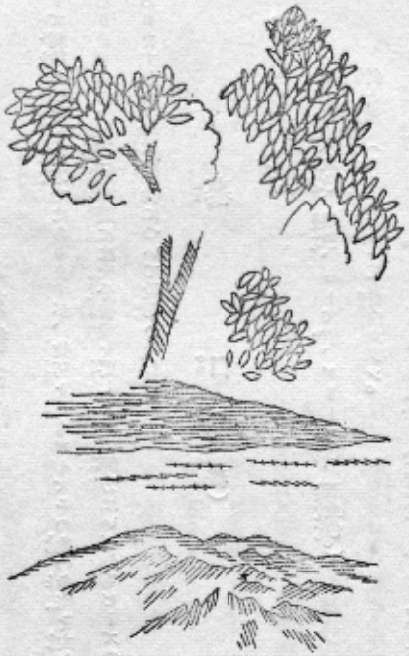


第百圖七十九圖

家の下見即ち板壁は茶濃淡染別で撚りをかけて左斜に一ツづゝ縫ひ切ります。此の場合縫切りの針目と針目の間が余り隙かないやうにいたします。配色も屋根と同じく藤となる方をなるべく濃く縫ひます。

窓　屋根裏の窓は眞リボンを平で縦に縫ひ横の桟を釜糸茶の二本一本の右撚りで渡しかけ、同色の二番一本の右撚りで綴ぢて置きます。下の窓は開閉を眞で撚りながら右斜に縫ひます。後方の窓はカーテンをエンヂで平に縦縫し、中をクリームで撚りながら横に縫ひます。次に家の傍らにある木立へ移ります。

樹木　これも圖に針使ひを示しましたやうに頂きから綠染別の淺色で平に針足短かく多少重なり目にいろ〳〵に方向を向けながら縫ひ詰めます。配色は木立の茂りを濃色で表はします。家の前にある二本の木は幹及び枝を眞で撚りながら左斜に縫ひ、葉は木立の要領で第百八十圖のやうに平で縫詰めます。



第百圖八十圖

陸　陸地は眞及び淡茶の二色を適當に配つて向つて左方から撚りながら挿縫といたします。木立の下蔭は眞色が適當でありませう。此の挿縫が終りましたら其の上へ綠染別で、下草を圖のやうに短かく渡し縫をいたします。水は白を撚り乍ら綠縫としてもよし、又は白を撚つて長く一針渡して置き、その上を白釜糸二番一本右撚りで綴ち上げても隨意です。遠山は圖のやうに眞を撚りながら縫ひます。以上でリボン刺繍の基礎とその應用の一端を述べました。

ビーズ刺繍

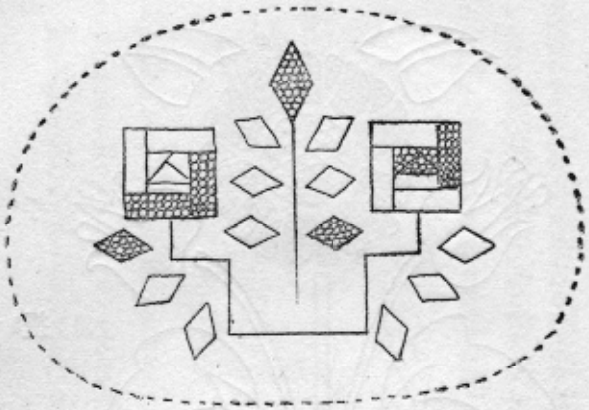
ビーズ刺繍に就て

ビーズ刺繍は簡單な仕方ではありますが、技巧よりもビーズその物の色彩を主とした綺麗な感じを現はすのが生命でありますから、配色と構圖には充分留意を要します。縫方はいづれもビーズの穴へ糸を通し綴ち附けてゆく方法でありますから、直に實物について說明いたします。

嚢口（書嚢）

材料　キヤンバス地。
ビーズ（金色、銀色、ローズ色、グリーン色、玉虫色。）
針と糸（ビーズ針）五十番白カタン。

キヤンバス地は桝目になつて居りますから、圖案を一應方眼紙に描いて布へ轉寫しますと間違はありませんが、嚢口のやうな小さな物は直接布へ描いて差し支へありません。

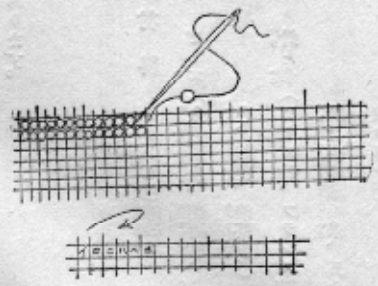


第百八十一圖　出來上り圖

縫ひ方　先づビーズ針へ五十番の白カタンを適當の長さに通し、糸尻へ玉結を作り、布地の糸の上で一度小さく針留をして、第百八十二圖のイから出した針へビーズを一ツ通してロへ刺し入れ（ハ）へ拔き、又ビーズを通して（ニ）へ入れ順次返し縫に詰めてゆきます。この要領で嚢の中の線を金色に縫ひ、縁をローズ色で縫ひ詰め、枝は銀色、葉をグリーン色、總地を玉虫色で縫ひ詰めます。

終りの針留はビーズの蔭で日本刺繍のやうに二針程小さく留め縫をします。

尙、キヤンバス地を應用して縫ふ小さい作品は用布を枠へ張る必要はありません。



第百八十二圖

ありませんが大きな物になりますと、やはり刺繍臺を使用した方が便利であります。

手提袋

第百八十三圖

材料　クリーム色綿紗地。
ビーズ（金色玉虫、葡萄色、孔雀色、銀色、淡茶色。）
針と糸（ビーズ針、フランス刺繍針。白極細毛糸、五十番白カタン。

縫ひ方　クリーム色綿紗地を二ツ折にし、その中央より四糎位上へ第百八十三圖の圖案を擴大して描き、丸枠に張り縫方へ移ります。

花　中央の花から刺めます。第百八十四圖のやうに糞の(イ)の部分を白極細毛糸を佛蘭西刺繍針へ通し、二本として上縫の反對に密かく縫ひます。終りましたら金色玉虫を糞の幅に應じ數を增減しながら横にその毛糸縫の上を縫ひかぶせます。(ロ圖を參照して下さい、次に八重のうしろの糞を葡萄色で輪廓を先きに縫ひ廻りをしてから中を縫ひ詰めます。

第百八十四圖

芯は輪廓と菱形の線を銀色にて一粒づゝ留めて線縫をし、淡茶色でその中を縫ひます。

葉で一寸說明して置きますが、前述の蓋口のやうなキヤンバスの地の目を拾ふ場合は、ビーズの向きも一定しませんと出來上りが見苦しくなりますが、地の目にかまわず縫ひ詰める場合は、ビーズの向が多少異なりましても差支ありませんのみならず反つていろ〳〵にビーズの光澤が反映するので面白い感じを表します。

葉　葉は片側を淡茶色に片側を孔雀色で詰め、莖は葉を淡茶に、花蕊を金色玉虫に、莖は孔雀色にて縫上げます。

鏡掛（孔雀）

材料　黒鶯絨。

第百八十五圖　出來上り圖

ビーズ（コバルト色、綠色玉虫、金色玉虫、鶯茶色、淡茶色、葡萄色、黒、白。）

針と糸（ビーズ針。）五十番白カタン、白極細毛糸。

縫ひ方　用布を刺繍臺へ張り孔雀の尾羽から刺し初めます。輪廓の線の上を綠色玉虫を二粒通し送り針に布地の下へ落し縫ひ、珠へ移ります。第百八十六圖の方法を參照して下さい。珠は輪廓を淡茶色で同じ方法で縫ひ、月型をコバルト色に、中を金色玉虫で縫ひ詰めます。

肩から羽の線は悉く黒で縫ひ、二重羽を淡茶色に、風切羽及び肩を綠色玉虫で縫ひます。

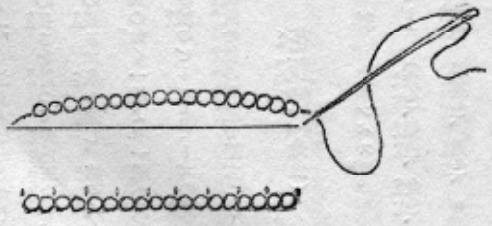
背及び腹は鶯茶色で詰め、頸から頭へかけてコバルト色に、冠羽は綠色玉虫に、眼は白、瞳は黒、嘴と脚は淡茶色で縫ひます。

尚、鏡掛の丈の長い場合は圖も從つて大くなりますから、尾羽を全部鶯茶で縫ひ詰めますと更に豪華な作品となります。

第百八十六圖

山葡萄　周圍の模樣の山葡萄は蔓を淡茶色に、葉は脈を先きに黒で縫つて置き、綠色玉虫で縫ひ詰めます。

實は前に述べた手提袋の花瓣の縫方を應用して毛糸二本一本を以て下縫をしてその上を葡萄色で縫ひかぶせます。



第百八十七圖

第百八十八圖　出來上り圖

泊り木

泊り木はあらかじめ縫の長さを計つて金色玉虫を、その長さに糸へ通し、第百八十七圖の如く一端より一端へ渡しかけ縫のビーズとビーズの間を二粒置き位の間隔で綴ちつけます

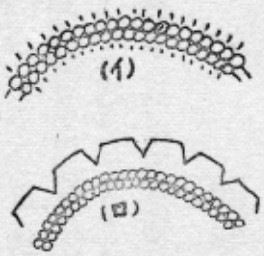
花瓶敷（金魚）

材料　キヤンバス地。
ビーズ（赤色、銀色、金色、淡水色、濃茶色、黒色、ローズ色、グリーン色。）
針と糸（ビーズ針。）五十番白カタン

縫ひ方

キヤンバスの目の拾ひ方は前の蓋口と同樣ですから、茲では色の配合だけを說明いたします。

金魚　金魚は腹部及ひ尾の尖を銀色に他は赤色で縫ひ、眼は黒色、泡は金色にいたします。



第百八十九圖

水藻　花はローズ色、葉はグリーン色で縫ひます。
その周圍の圓内は黒色で、次の圓は濃水色で縫ひ、金魚の圓内は淡水色で縫ひ詰めます。
外の輪廓は長さを計つてグリーン色を前の鐵拵の泊り木に應用した縫方のやうにビーズを長く通した物を輪廓の圓形に置き、一粒毎にビーズとビーズの間を綴ち廻ります。
縄縫が終りましたら輪廓より一粒位外を切り取り第百八十九圖(ロ)のやうに鉄を入れ裏へ折返して糊で貼り附けて置きます。

三、摘畫編

摘細工に就て

摘細工は、昔から行はれた手藝でありまして、家庭に有合せの薄い絹地や、縮緬などを利用して、簪玉、簪、花櫛等を作つた位のものでありましたが、近年各種の手藝が進歩發達するにつれて、摘細工も亦一大進境を示し、これに繪畫を配して自由に花鳥・山水・などを繪畫風に現し、柱掛、寫眞挾から、額面などにまで應用されるやうになりました。そして、呼び方も亦摘細工から、轉じて今日では摘畫と呼ばれるやうになりました。

摘畫の基礎

器具の種類及其の用途と選び方　摘畫にはピンセット、鋏、糊板、糊べら、尺度、鑷、刷毛、歯ブラシ、ぼかし網等が必要であります。

ピンセット　摘畫には、是非必要な用具で、布を折つたり挾んだりすることは申すまでもなく、種々な形を作る上に何時も、自分の指先の代りに使用されるものであります。近頃は質や形に色々なものがありますが、鐵鑷

のものが一番宜しく、長さは十八糎位で、握る所の幅は一糎位のが最も使い易く、先に行く程細くよく尖つたものを撰びます。余り腰の強いものは使ふのに指先が疲れるばかりでなく、折角形よく摘んだ布まで崩して了ふことがありますから、腰は成可弱いものが宜しい。ピンセットは錆ると使用出來なくなりますから錆の出ないやうに手入をして置くことが肝要であります。

鋏　日本鋏と西洋鋏とを用ひます。日本鋏は常に軟かい布や紙等を切りますから、切れ味の宜しいもので大きさは十五糎位が使用上便利です。余り小型なもの又は粗惡なものは、仕事の能率が上がらないばかりでなく、折角ピンセットで美しく摘んだ布まで損する憂がありまます。西洋鋏は主に、針金、厚紙類のやうな固いものばかり切るのに用ひますから極く丈夫なものがよろしくあります。

糊板　糊を練つたり、薄く伸ばして摘んだ布を載せるのに用ひます。木質は朴、檜等が最も宜く、長さ二十糎、幅十二糎、厚さ一糎五粍位が一番手頃であります。

糊べら　竹製と金屬製との二種ありますが、摘細工には竹製のものが宜しく、よく枯れた竹で長さ二十三糎、幅一糎五粍位のもので、持つ方も練先も同じ幅で薄く平らに削つたものが宜しい。竹べらも糊板と同じやうに使用後は必ず綺麗に洗つて置きます。

尺度　メートル尺を用ひます。

鑢　彼物用鑢と造花用筋鑢とを用ひます。

刷毛　繪具刷毛と齒ブラシを用ひます。繪具刷毛は布又は臺紙等の着色及びドーサを引くに用ひ、毛の極く柔かいもので大きさは幅三糎前後長さ二十五糎位のものが手頃であります。齒ブラシはぼかし網で臺紙や花瓣等をぼかすときに用ひるもので普通齒みがき用の竹ブラシで結構です。

ぼかし網　前に述べたやうに、臺紙や花瓣等を霧の如くぼかす器具で、網は銅でも眞鍮でもよく一粍半角位の網目のものが適當です。

材料の選び方及び用途

材料には用布として摘細、摘縮緬を用ひ其の他下臺、胴皮紙、糊、染料、繪具、造花用花芯、糸針金、アルコール、等を用ひます。

摘細　摘細と申しますのは極く薄い絹でありまして、これには糊有絹と糊無絹との二種あります。何れも光澤の十分あるものが宜しく、糊有絹は主として藥玉、花櫛、鳥類等の製作に用ひられ、糊無絹は草木の葉、花、等を作るのに多く用ひられます。

摘縮緬　薄地のものと厚地のものとがあります。薄地の方は普通フランス縮緬と呼ばれてゐるもので、地質の極

く薄いしぼりの細く描つたものであります。厚地は普通長演縮緬と云ふのを用ひます。而して前者は草木の花の中藤花、野菊等を作るに用ひ、後者は鶏のとさか、又は家屋の壁等を作るに用ひます。

下臺　下臺は現今額面臺紙、卓上飾、寫眞挾、壁掛、羽子板、衝立、短冊、狀差、筆立、等が使用されて居ります。これ等の材料は賣品を購はれてもよく又あり合せの物を應用せられても結構であります。

雁皮紙　その用途に依つて適當な色に染めます。屋根、樹皮、枝、莖、小石、鳥類の足等を作るに用ひます。

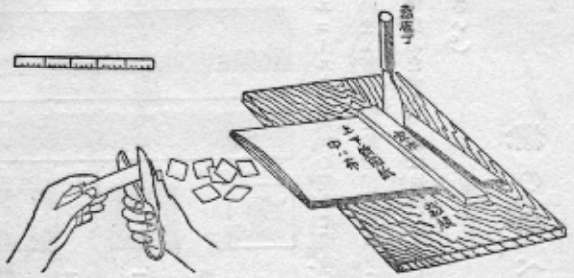
花芯　造花用として既に出來上つてゐるもので、又場合に依つては胡粉、木綿糸等を應用して花蕊に使用することもあります。

糊　摘細工には缺く事の出來ない重要なものであります。最も良いのは、上新粉（米の粉）を煮た糊でありますが、場合に依つては大和糊を使用してもよろしくあります。

染料　直接染料、鹽基性染料、酸性染料、その他種々の染料がありますが、摘みには主として鹽基性染料と、酸性染料とを用ひます。色數も澤山あれば結構ですが、普通は次の六色位を備へて置き、あとは是等の色を配合して大抵の色を出します。

ローダミン（桃）オーラミン（黄）グリーン（綠）ブラツク（黑）ブラウン（茶）バイオレツト（紫）等。

繪具　日本繪具、油繪具、水彩繪具等で何れも相當多く用ひられます。用途は主として臺紙の背景を描いたり、又出來上つた細工物の彩色に用ひるのであります。



第一圖

アルコール　染色の時、染料の溶解を助け又は布の滲透をよくする爲に用ひます。

尙この外、胡粉、膠、石膏、糸、厚紙、揮發油、盤景用砂、メリケン粉等も相當多く使用せられますが、之等の材料の選擇及び用途は實地製作の時に詳細に述べることに致します。

布の裁ち方

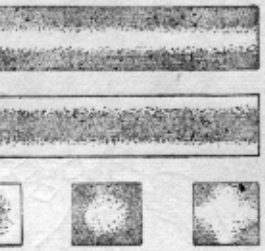
少しの布を裁つには、格別のこともありませんが、一時に澤山の布を裁つ場合は次のやうな方法で裁つのが便利です。

最初摘絹又は摘縮緬の丈を四ツ折又は八ツ折にして布目を正しく、布の兩耳を糊で貼り、第一圖のやうに布の兩面に新聞紙を當てゝ同じく兩耳を糊で貼るのであります。

かうしたものを裁板の上に平に載せて、任意の寸法に定木をあてゝ裁庖丁

で裁ち更に正方形に鋏で切ります。

布の染方



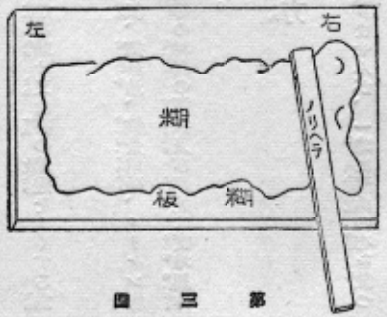
第二圖

布を染めます事は、染料が工業用なので一寸面倒に思はれますが、一二度染めるに從つて思ひのまゝに染まるやうになります。

先づ任意の寸法に切つた摘絹、又は摘縮緬を揃へて八枚程重ね、それをアルコール六と水四の割合に混合した液に浸し、すぐ掌に載せて輕く絞りそのまゝ新聞紙に載せ、乾かぬ中に別に溶いて置いた染料を筆に含ませて好みに染めますと、色は自然にぼかしになつて來ます。（第二圖の染め方を御覽下さい。）

糊の伸べ方

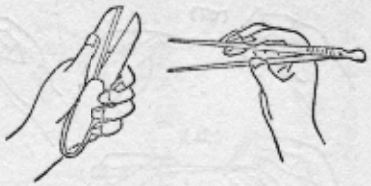
糊は必要だけ糊板の上に取つて、第三圖のやうに竹べらで左から右へ厚さ二



第三圖

妻大圖

粍か三粍位に平に引伸ばします。余り糊がやはらかかつたり固かつたりいたしますと細工がしにくゝなりますので適度に練つて用ひます。



第四圖

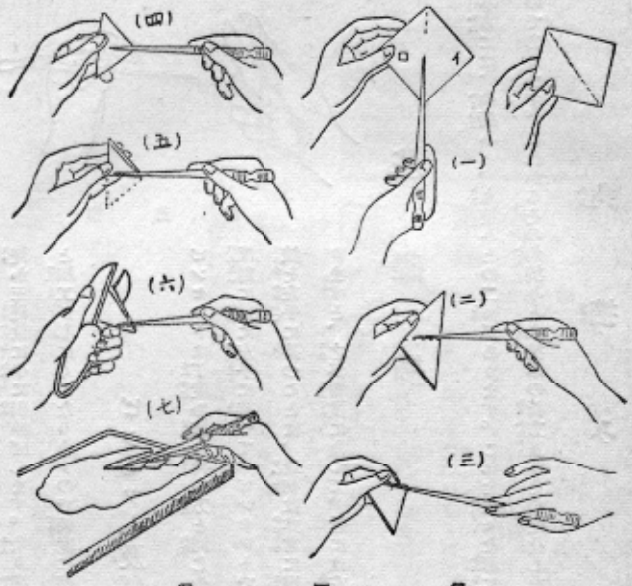
ピンセット及び鋏の持ち方

ピンセットは丁度お箸の持ち方と同じやうに右手に持ちます。（第四圖）鋏はこれと反對に常に左手に持つて、ピンセットで摘んだ布の不揃になつた所等を鋏みます。鋏を左手に持つことは、最初は非常に困難のやうに感ぜられますが、暫く使つて居りますと、之が習慣になつて、遂には右に持つのが却つて不便のやうになります。

基礎摘

摘み方には、角摘みと、丸摘みとの二種があります。これを色々な形に變化應用して、優雅な摘み細工を作り上げるのであります。これからその角摘みと丸摘みの折方及びその變化した摘方を說明します。

角摘み



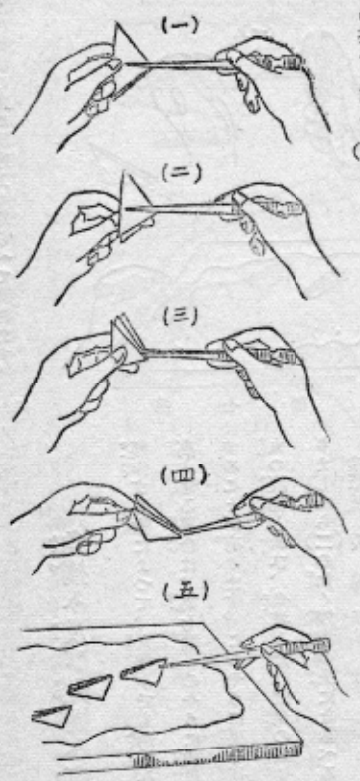
第五圖

先づ布を任意の寸法の正方形に裁ち、その正方形の布の角を(一)のやうに左手で持ち、右手のピンセットで布の中央を下方から挟み(イ)からロに向つて布を二ツに折ります。そうしますと布は正しい三角形になりますから、そのまゝ左手に挟み、同時に右手のピンセットで(二)の如く布の中央よりやゝ上方を挟みます。

そしてそのまゝピンセットの手を下にかへしますと、摘まれた布は下向に折られて(三)のやうな三角形となります。こんどはそのまゝ布を左手に持ち、同時に右手のピンセットで(四)の如く三角の中間を挟み右手で下の三角を折り上げて(五)のやうな角摘みを作るのであります。こゝで折目や恰好をよくなをし、又裁目の不揃になつてゐる處は鋏で裁ち、一列に續つて置いた撮板の上に順序よくならべます。(第五圖(六)(七)を御參照下さい)

丸摘み

この摘みは第六圖(一)までは前と同じ方法で二等邊三角形に折ります。それから(二)のやうに三角形の布の中央をピンセットで挟み、同時に左手の拇指と食指とで下側の二枚の布を(三)のやうに、下から手前と向ふに分けて折り返します。更にそれを(四)の如く、右手の拇指と食指で裁目の揃つた底の所を持ち、同時に右手のピンセットで丸摘みの頭部になる處を少しく挟み、布

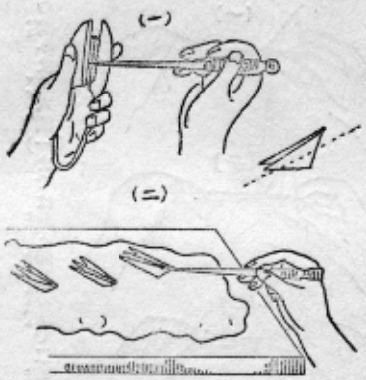


第六圖

を内側に向つて程よく向けますと丸摘みが出來るのであります。丸摘みも出來上りましたら角摘みと同じく(五)のやうに糊板の上に順序よくならべて置きます。

角摘み及び丸摘み裏の切り方

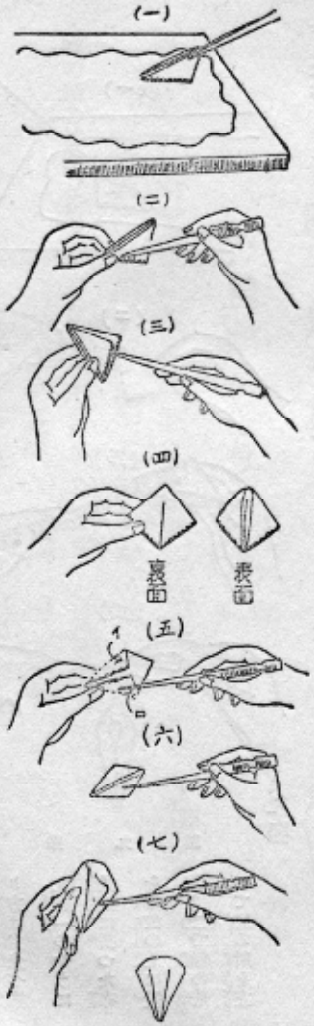
製作する物によつて、丸摘みでも角摘みでもそのまゝでは膠が高すぎる場合は、第七圖(一)のやうに裁目の方を深く切つて使用することが有ります。このやうに裏を切ることを丸摘みなれば丸の裏切と云ひ、角摘みなれば角の裏切りと申します。裏を切りましたら(二)の如く糊板の上にならべるのであります。裏の切り方程度は作る物に依つて異りますから場合々々によつてよく考へて加減致します。



第七圖

丸摘み裏返しの折り方

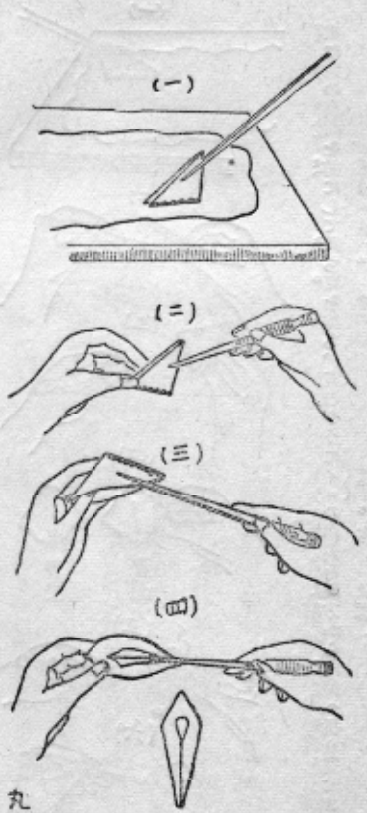
先づ丸摘みに摘んだ布を第八圖(一)のやうにピンセットで挟んで糊板の上に置き、それを更にピンセットで挟み、(二)の如く左手の指掛と食指とで糊付けした所を一度貼りつけてしまいます。次にはその糊の乾かない中に左手に持ち、右手のピンセットで(三)の如く、一度貼りつけた所の下の方を左右二ツに分けます。そう致しますと(四)のやうな恰好のものが出來ますから、そのまゝ乾かして置きます。



第八圖

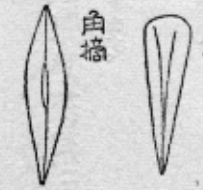
次に(四)の裏面を前にして裁ち目を持ち、(五)のやうに(イ)(ロ)の兩角を兩方から内側へ折り寄せますと表側は(六)のやうになります。この中央の合せ目を右手のピンセットで布を左右から裏返しにして(七)のやうにして丸摘み裏返しを作り上げます。

角摘裏返しの折り方



第九圖　角摘裏返しの折り方は、先づ第九圖(一)のやうに角摘に折つた布を糊板の上に置き、(二)で糊の着いて居る所を左手の指と食指とで輕くおさへ持ち、布の表裏を貼りつけてそのまゝ乾かします。次には(三)のやうに布を左手で持ち、同時に右手のピンセットを布の眞中へ深く差し入れて布を裏返し、(四)のやうな角摘裏返しを作り上げます。

尙この外場合によつては丸摘み、又は角摘みの裏を切つて裏返し、第十圖の如く、形を極く細長くして使用することもあります。これを丸摘なれば丸摘裏切り返しと云ひ、角摘なれば角摘裏切り返しと稱します。



第十圖

應用摘

卓上飾り（柿）

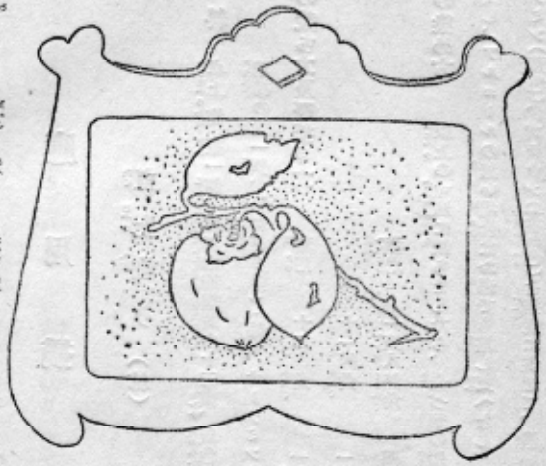
材料　卓上飾臺一個、細無白摘絹並巾十三種、眞色雁皮紙少々、綠色雁皮紙少々、日本繪具綠色少々、摘み用柿の實一個、染料グリーン(綠)、オーラミン(黃)、ブラウン(茶)等。

布の裁ち方及び折り方　葉用　十二瓣角　一枚　角摘裏返し

十一瓣角　一枚　同

蔕用　一種八糎角　四枚　丸摘裏返し

布の染め方　以上の寸法に裁ちましたら、先づ葉の用布を二枚重ねて、アルコール六と水四の割合の混合液に浸し、(アルコールの無い場合はお湯でも差し支へなし)輕く絞つて新聞紙の上に載せ染料グリーン(綠色)にオーラミン(黃色)、ブラウン(茶褐色)を適度に混ぜて、濃いオリーブ色を作り、之れを繪筆に十分含ませて、第十二

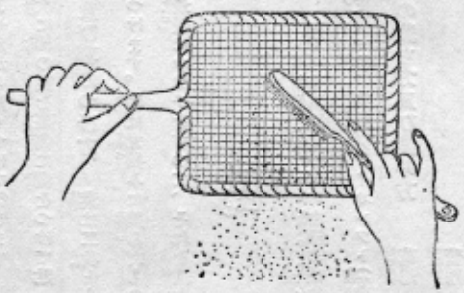


第十一圖　出來上り圖

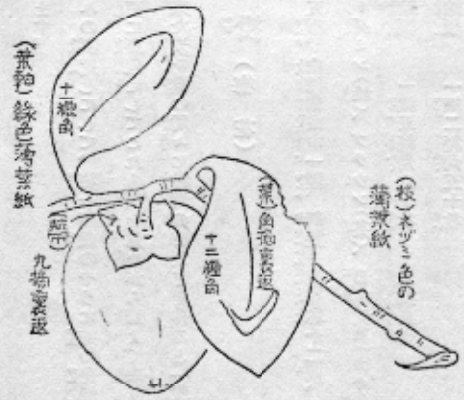
圖のやうに布の眞中を濃く、周圍になる程淡く染め上げ、布の兩端は少しのこして置きます。次には別の皿に染料ブラウン(茶色)を溶いて、前に染めのこして置いた布の兩端を染めます。同時に蒂の布も同じ色で同樣に染めて置きます。

臺紙のぼかし方　先づ小皿に日本繪具の綠色を程よく溶き、この液を齒ブラシにほんの少しづゝつけて、第十二圖のやうに臺紙の上六・七糎の高さにぼかし網を持ち、その上から何度となく左右にブラシを擦りますと、液が霧のやうに散つて臺紙を思ふやうにぼかすことが出來ます。然し余り澤山な液を齒ブラシに含ませると液が一ケ所にのみ集まつてぼかすことが出來ません。

第十二圖



第十三圖



第十四圖

作り方　綠色にぼかした臺紙に、先づ鉛筆か木炭で第十一圖にならつて大體の輪廓を書いて置きます。次には半紙を一糎の巾に切つて紙撚りにし更に其上へネヅミ色の雁皮紙一糎巾のものを撚つて柿の枝を作り、先に書いて置いた下繪に倣つて臺紙に貼りつけます。別に綠色の雁皮紙で、紙撚を作り葉柄としてこれも下繪にならつて貼りつけて置きます。只だ枝や葉柄をつけただけではまだ柿の枝としての感じが出ませ

んから夏に枝の部分と葉柄の付根の處々に、木皮としてネヅミ色の雁皮紙を强く少さく（五粍巾二糎位に）むしり切つて、別に糊を薄めて糊板の上に延して置き、これに雁皮紙を浸してはピンセットで摘んで枝の處々に皺をよせながら貼りつけて行きます。

次に柿の實を裏側に糊をつけて貼りつけます。

葉及び蒂のつけ方　葉は二枚とも角摘みの裏返しにして、第十四圖のやうに蒂の先端を内側に折り返して取りつけます。蒂は丸摘みに摘んだものを、更に裏返にしてこれも圖を見ながら形よく取りつけます。

最後にマッチをすつて、それを消して出來た炭を葉の所々に枯葉の跡などを作ると一段と感じを表します。

柱掛（梅花）

材料　布張柱掛一個、白摘綿細並巾十五糎、白摘綿並巾一糎、既製品梅花芯十二個、緑色雁皮紙一枚、緑色雁皮紙一枚、染料ヴアイオレット（紫）、ローダミン（桃）、ブラウン（茶）、日本絵具（カキ色、白色、緑色等。）

布の裁ち方及び摘み方

花用	白縮緬	一糎五粍角六十枚	丸摘裏切
蕾用	白縮緬	一糎二粍角五十枚	同
夢用	白綿	一糎角十二枚	丸摘み裏切

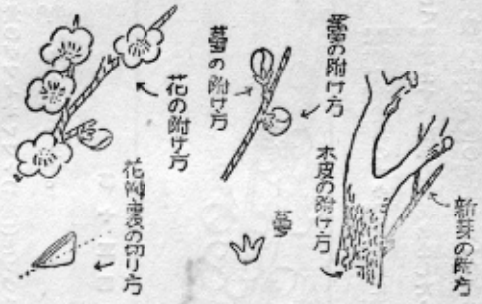
布の染め方　梅花では夢布だけを染めれば宜しいのであります。染め方は白摘綿一糎四角に裁つて置いた夢布を八枚位宛重ね、水とアルコールの混合した液に浸して、そのまゝ新聞紙の上に置き、染料ローダミン（桃色）に小量のヴアイオレット（紫色）とブラウン（茶色）とを入れて茶色がかつた臙脂色を作り、布の眞中を濃く周圍を淡く染め上げて置きます。

第十五圖　出來上り圖

蕾　最初日本繪具のカキ色を小皿に溶いて、ぼかし絹とブラシを用ひ、柱掛の下部を濃く上部になる程淡くぼかして置きます。ぼかしが乾きましたら、第十五圖の人體の下繪を書きます。

幹、枝　別に鼠色の雁皮紙を一糎位の幅に切り、幹や枝にする紙撚を作り、下繪に做つて貼り付けます。同時に緑色の雁皮紙で、新芽にする紙撚を作り、是れも下繪に做つて貼りつけます。更に幹や枝の所々又新芽の付根の

所に、鼠色の雁皮紙を小さく切つて柿の枝を作つた時のやうに、幹から枝へ枝から新芽の付根へと、細かく木皮を貼りつけて、恰も古木のやうに作り上げます。幹の所々に切り口などの跡を作るのも一入面白いものです。（第十六圖參照）



第十六圖

花の附け方　花は一糎五粍角に裁つて置いた瓣布を、全部丸摘みの裏切りにして、糊板の上に順序よく列べ、先に摘んだ布から、一ツの花に各五瓣づゝ取りつけます。成可下の方の花から順々に上の花を取りつけて行きます。此の時花の向方を一方にばかり向けないで、横向又下向などにつけます。

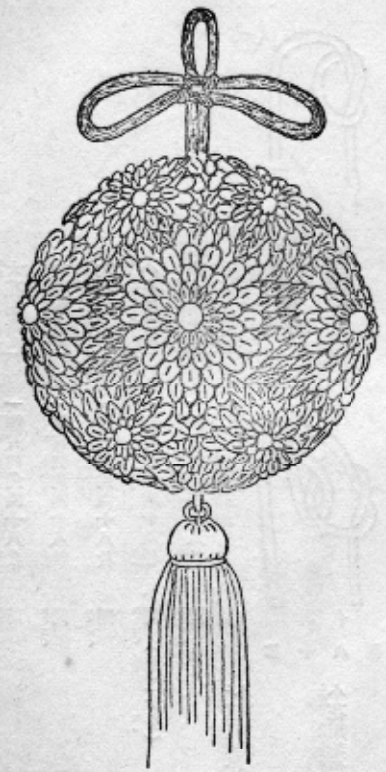
花がつきましたら、すぐ花の蕊を花輪の方向に倣つて附けます。（第十六圖參照）

蕾及び花の附け方　蕾も花と同じやうに丸摘の裏切りにして、第十六圖のやうに、一ツの蕾に二枚の布を抱き合せて、出來るだけ布にふくらみをもたせてつけます。蕚も矢張り、丸摘みの裏切りにして、布の先端をピンセットの先で三ツに開いて蕾の根元に形よくつけます。

最後に仕上として日本繪具の綠色に少しの白色を混ぜて、幹や枝の所々に苔が自然に出たやうにぬつて置きます。

藥玉（菊花）

材料　紙製藥玉芯（徑四糎五粍）一個、糊有摘絹黃色、水色、時色、紫色、各並巾十五糎、糊有摘絹赤色、綠色各並巾二十糎、造花用花芯大四個、小八個、飾り紐赤色直徑二粍、長さ四十糎一本、赤細打紐七糎、紅白リリヤン製房一本、藥玉掛一個、直徑七・八粍眞鍮製丸カン一個。

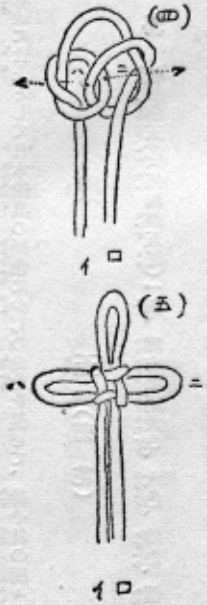


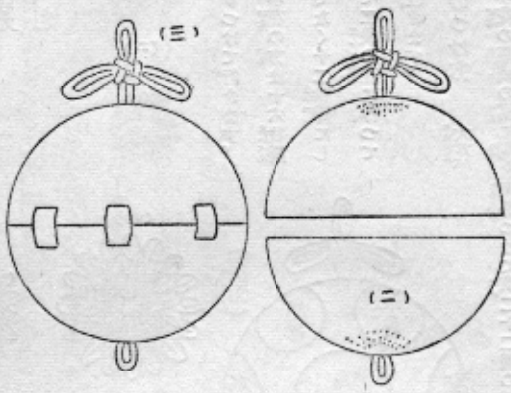
第十七圖　出來上り圖

布の裁ち方及び摘み方

大花用水色	一糎五粍角四十八枚	丸摘花一個分
大花用時色	一糎五粍角四十八枚	同
大花用黄色	一糎五粍角四十八枚	同
大花用紫色	一糎五粍角四十八枚	同
小花用黄色	一糎五粍角四十八枚	同（花二ケ分）
小花用水色	一糎五粍角四十八枚	同
小花用時色	一糎五粍角四十八枚	同
小花用紫色	一糎五粍角四十八枚	同
葉用緑色	一糎五粍角百六十枚	丸摘
地理用赤色	一糎五粍角約三百枚	丸摘

第十八圖　図案結び





第十九圖

芯の作り方

先づ藁玉の芯の上部の眞中に錐で穴を穿ちそれに徑二粍位の太さの赤の打紐を圖案結びにして（圖案結びは第十八圖を參照して下さい）。其の結んだ先きを外側から通して內側で膠のやうに解きほぐして全部に糊をつけて芯の中に貼りつけてしまいます。次には赤の極細い打紐を房の吊し紐として、上部と同樣芯の下部に穴を穿つて通し一糎半位の餘を出して殘りを內部に貼りつけて置きます。（第十九圖參照）

花臺の作り方

古葉書又は畫用紙を利用して、徑四糎位の圓形に切り、其の眞中迄鉄を入れ、切り口の一方に糊をつけて一糎程重ね、第二十圖の如く丁度管笠のやうなものを十二個作つて置きます。

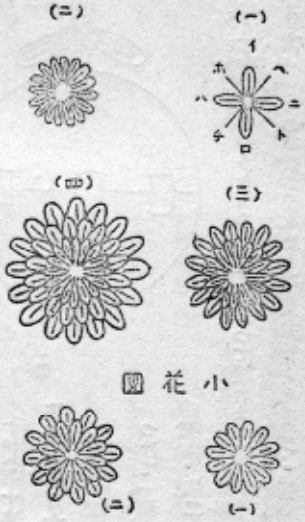
花の作り方

この藁紙が出來ましたら大花用として設つて置いた

第二十圖

一握五糎角の布を、四十八枚(花一ケ分)を全部丸摘みにして糊板の上に列べ、裏紙の中心から第二十一圖のやうに一段、二段、三段の順序を以て取りつけて行きます。(各段共十六枚の割)この時最初の四枚はイロハニの間に布を正確に向い合せて取りつけ後はその間へ間へと取りつけて行きます。色の配合は好みに依て變へて結構ですが、つまり似た色合を一ケ所に集めないやう氣をつける事であります。

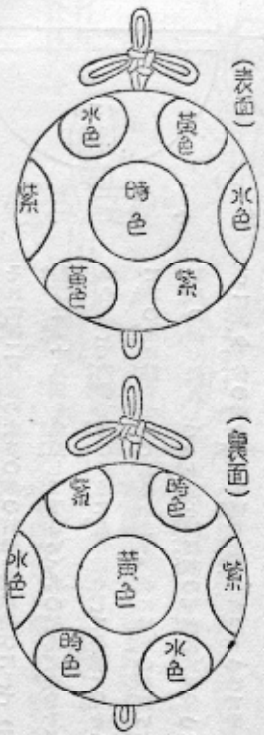
大花 小花 圖



第二十一圖

花のつけ方

大花、小花の臺紙の裏に糊を充分つけて第二十二圖のやうな色の配合で藥玉の芯に貼りつけて行きます。色の配合は好みに依て變へて結構ですが、つまり似た色合を一ケ所に集めないやう氣をつける事であります。

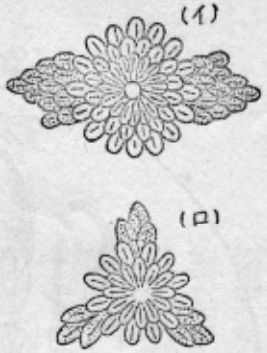


第二十二圖

葉の附け方

綠色の摘絹を丸摘みに摘んで大の花は一ケ所に十一枚づゝで葉の恰好を作つて、第二十三圖(イ)の如く向ひ合ふやうにつけます。

小花は(ロ)のやうに三枚で一枚の葉を作り、花の三方に向い合せてつけます。

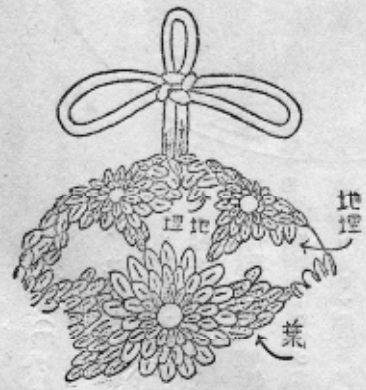


第二十三圖

地埋の仕方

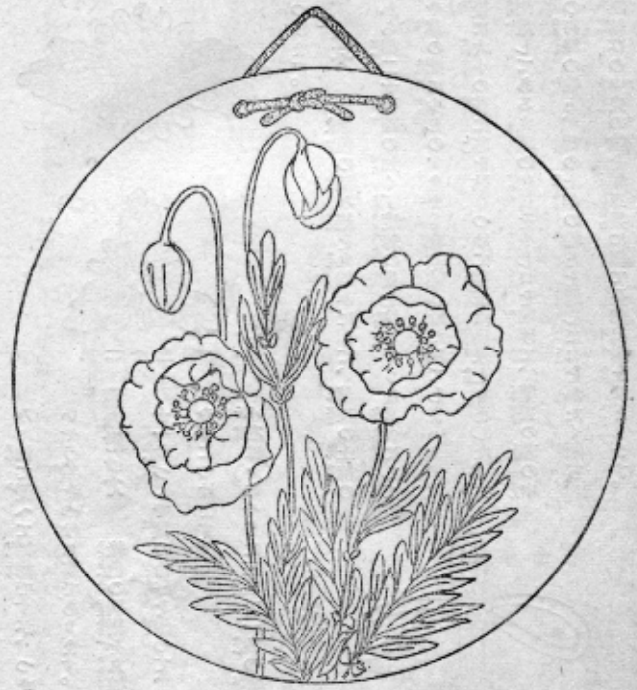
赤色の摘み絹を丸摘みにして、藥玉の上部の方から第二十四圖の如く丁度蜂の巣を作るやうな具合にして花や葉の間に少しのすきまもなく貼つけて埋てしまいます。

最後に大小の花に芯を貼りつけて藥玉は出來上りました。次は用意してある丸環の切目を少し口を明けて、藥玉の芯の中央の打紐の輪と、房の上部の輪とを通して口をかたく閉ぢ、圖案結びの中央の輪を藥玉掛に掛て全部出來上りとします。



第二十四圖

壁掛（提げし）



第二十五圖　出來上り圖

材料　丸形壁掛一枚、白繻無絹大巾二十糎、綠色厚皮紙一枚、造花用花芯一把、半紙少々、染料オーラミン（黃）ローダミン（桃）、グリーン（綠）ブラウン（茶）、樹等。

布の截ち方及び折方

花用幅六糎　丈九糎　四枚

花用幅四糎　丈八糎　四枚

蕾用二糎五粍角　四枚　丸摘裏返し

同二糎五粍角　一枚　丸摘裏切り

葉用二糎角　五十枚　角摘裏切り

同一糎五粍角　二十枚　同

布の染め方

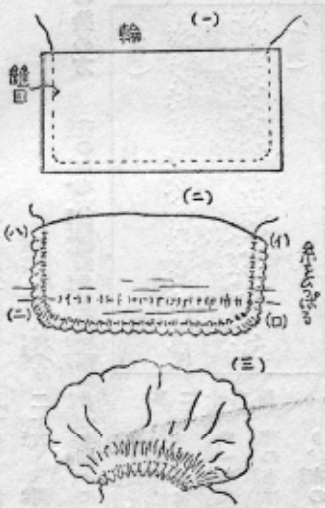
花の用布六糎幅四枚と四糎幅四枚とを別々に重ね、オーラミンにローダミンを少々加へて眞赤な色を造り、布の中央を第二十六圖のやうに染めます。兩側はオーラミンだけで染めて置きます。同時に蕾の用布二糎五粍角一枚だけを同樣に染めます。

蕾の布はグリーンとオーラミン、ブラウンとで淡い綠色を作り、布の中央を濃目に兩側は次第に薄く染め上げます。葉も同じ液で蕾と同樣に染めて置きます。

第二十六圖

花の作り方　最初花の用布の幅を第二十七圖(一)のやうに二ツに折り、裁目の方を三方赤の絹糸で細く縫ひますこの時縫ひ初めに返し針をせずに又縫終りも止めずにそのまゝ糸を一糎位の長さに切つて置きます。次に(二)の如

く布の縦糸を(イ)と(ロ)の間で二三本位づゝ三ケ所程引き締めて布をちゞめ、(ハ)と(ニ)の間も同じやうにひいて置きます。此の時糸を抜いてしまはないやうに、そして布に小皺をよせるやうにいたします。最後に縛つて置いた糸を開方から引いて(三)の如き花瓣の恰好をしたものを作ります。

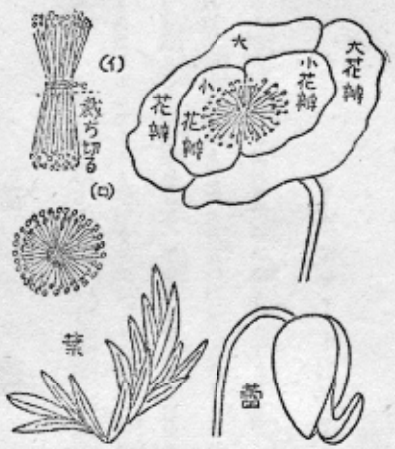


第二十七圖

次に蕊紙を着色するのですが若し蕊紙に絹張製のものを用ひるならば、緑色の繪具をうすく溶いてさきに說明したやうに、ぼかし網で蕊紙の下方から中程までやゝ色を濃い目に上部になる程うすくぼかして置きます。然し木製の蕊を使ふ場合は、繪具を用ひないで只そのまゝで花や葉等を付けた方が出來上りが却つて綺麗に見えます。

蕊の作り方及び付け方　蕊は、なるべくやわらかい半紙を紙撚の芯に使ひ、その上に緑色の雁皮紙を二回程手ぎわよく巻きつけるのでありますが、この時紙撚のもとの方は太く先になる方は細く作ります。紙撚が全部出來上りましたら第二十五圖を參考にしながら、これを蕊紙に取りつけるのであります。

花の附け方　花も下繪にならつて先づ大の花瓣を第二十八圖のやうに、二枚向ひ合せて丸くなつた方を外側に切り口の方を內にして裏側に糊をつけて蕊につけ、その上に小の花瓣をこれも二枚の瓣を向ひ合せて大の花瓣のやうに形よく糊でつけます。



第二十八圖

蕊の附け方　花の蕊は糸の先に胡粉を塗つて出來て居るものがありますから、それを第二十八圖(イ)(ロ)のやうに蕊の先から一寸位の處を糸でくゝり、適宜の長さに切りそれを花の中心に糊で貼りつけます。

蕾の附け方　蕾は二ツ分の布即ち四枚を丸摘の裏返しにいたしまして、第二十八圖のやうに布の尖端を向ふに、丸くなつた方を蕊に付けて、一ツの蕾に二枚重ね合せてつけます。そして今一枚の赤い布は丸摘みの裏切りにして、先につけた蕾の布と布との間へ挟んで、布の眞中から一寸上向に折り返して、今蕾が開かうとする形にしてつけます。

葉の附け方　葉も圖の如く角摘みを二糎位の高さに裏切りにして、各部糊板の上に並べ、大きい方の布からだ

ん〳〵つけて行きます。この時其の人の技巧によつて裏葉を見せたり横向、下向と様々の向き方を見せるのも面白いものであります。

四、リボンアート編

リボンアートに就て

小さな端布一ツでも其れを巧みに細工いたしますと美しい花となり、葉となり、やがてはそれが立派な洋服飾にもなれば、帽子の飾にもなつて役立つばかりでなく、それを作る事によつて、色彩の調和、手指の練習、緻密な觀察力をも養ふことが出來まして、手藝として立派な價値あるものであります。

こゝにはリボンアートと掲げましたが、それは元、材料をリボンから取りましたのでさう申しましたが、材料はリボンばかりに限りませんで、薄地の朱子、縮緬、羽二重などいろ〳〵のものを用ひます。

薔薇

材料　朱子リボン一吋半幅一米、
ビロード製バラの葉三枚
造花用青針金一本、造花用青紙少々。

作り方　この花はリボンの幅の廣い狹いによつて、花の大きさも自然に違つて來ますが、いつも一ツの瓣に用ひるリボンの長さは、幅の三倍から四倍位あれば格好のよい花を作ることが出來ます。本體の瓣の數も五枚と決めませんで、いつも用ひる場合を考へて、大きくしたり小さくしたりしますが、こゝでは瓣の數は八枚にします。

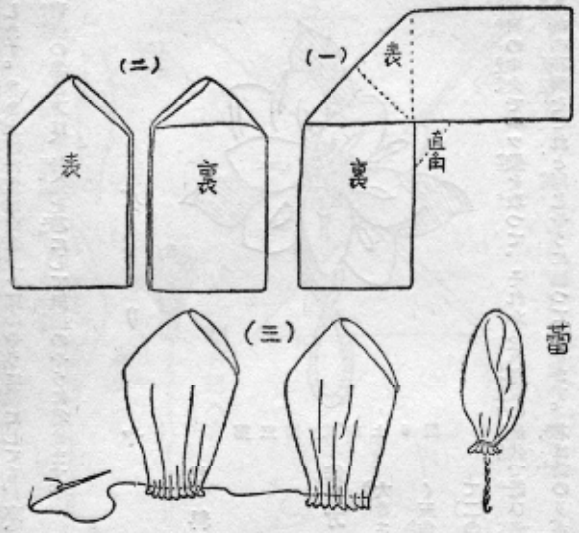
一米のリボンを九ツに切つて、その一枚を第二圖(一)のやうにリボンの裏を手前にして、上の端を右の方へ折り、下の角が直角に、且つ兩端の長さが同じになるやうにして、

第一圖

其れから更に右の端を手前の方に折り曲げて下の端に重ねますと、(二)のやうに上が三角になつて、下の端が二枚重なつたものが出來ます。そしてこれは裏が手前になつてゐますからそのまゝ向をかへて、表の方を手前にして下の端から五粍ほど上つたところを背通の針目で縫ひます。かうして八枚共折り、一枚づゝ順に(三)のやうに同じ糸で縫ひつゞけます。

芯は矢張り花瓣の折り方と同じやうに折つたものを、ぐる〳〵と細く卷いて圖の當のやうに根元を青針金でかたく結へます。この結へた針金は後で莖にいたしますから切らずに、十五糎ほどの長さにしておきます。

この芯を中心にして、そのぐるりに前に縫つた八枚の花瓣を位置よく卷いて、花の形を整へながら芯へかぶりつけて、花瓣の動かぬやうに又根元をきれいに綴ぢます。この瓣をつけますのに三枚を內の花瓣にして五枚を外の花瓣にしますと格好よく仕上ります。



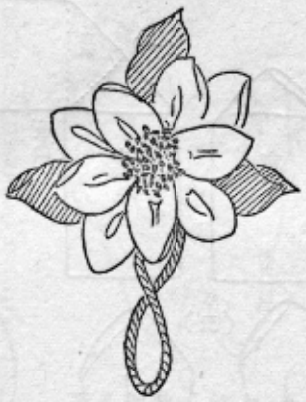
第二圖

花が出來ましたら根元に蕚をつけることもありますが省いて葉で根元をかくします。

葉はリボンで作ることも、又布で折つて作ることもありますが、こゝでは造花用の既製品の葉を用ひます。既製品には緞子、繻絨、ボイル、ビロード等、種々の布地を使つて色も實物を縫れた、美しいのが種々出來てゐますから、花との配合、洋服やショール等、用ひるものとの配合を考へて、適當なものを三枚出來上り圖のやうな位置に添へて莖と一緒に卷きます。

莖を巻く紙はなるべく花や葉に近い色の、薄い雁皮紙を選びますが、適當な紙のない時は造花用青紙を使用いたします。巻き上げた莖は出來上り圖のやうに輪にしても、亦、三四糎の長さに切つても宜しいのであります。青紙の巻き方は、針金を芯にして紙撚のやうに巻きます。

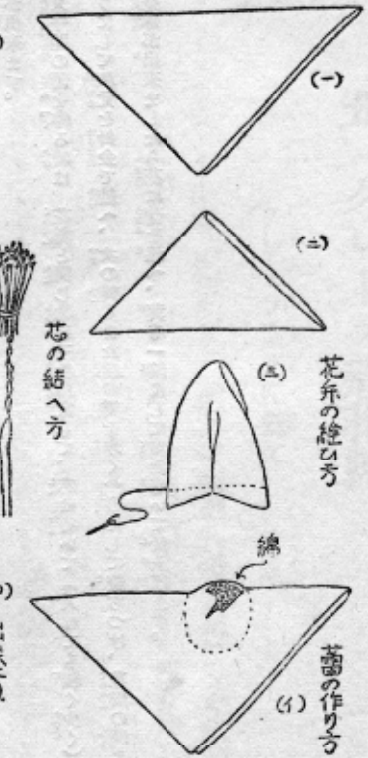
ダリヤ



第三圖　出來上り圖

材料　薄地の縮緬十糎角　九枚（花用）
同　三枚（葉用）
造花用莖　一把　青針金　一本

作り方　十糎角（作らうとする花の大きさによつてこの大きさは自由にいたします）の布を、先づ第四圖(一)の如く三角に二ツ折りにし、更にこれを三角に二ツ折りにして(二)のやうに折つたものを、(三)の如く下の眞中、つまり裁目の中央で一ツ襞を取つて、それから五粍位の縫代で縫ひ糸を引きしめて縮めますと(四)の花辨が出來ます。全部の花辨をこれと同じやうに離つておきます。芯は前のリボンで作つたバラの花のやうに襞の一ツを巻いて作つても宜しいのですが、今度は造花用の既製品を使ひます。芯の既製品にも種々様々のものがありますが、矢張り實物から離れても色彩の配合、形の調和といふ事をよく考へて選びます。選びました莖は(五)のやうに根元を青針金でかたく結へて、針金を捲いておきます。



第四圖

芯が出來ましたら瓣の附け方圖の如く前に縫つておいた襞を一ツづゝ芯の廻りに位置よく、花の形を整へながら綴ちつけて參ります。全部の瓣をつけ終へましたら全體としての花の感じをよく見て襞の附け際をかゞりつけます。

かうして作つた花は、矢張り前に述りました花と同様に葉をつけます。葉の作り方は瓣と同じ仕方でたゞ色を代へるだけで宜しいのであります。若し蕾を添へます時は次の如く作ります。

蕾の作り方　かたい蕾の時は第四圖(イ)のやうに花瓣と同じ大きさの布を、先づ三角に二ツ折にし、その半分の中に適當の大きさに經く丸めた綿を入れ、これを又三角に二ツ折にして、根元を針金で結へますと(ロ)のやうな蕾が出來ます。

又半開の蕾を作る時は、花瓣と同じ物を三枚用意して、芯は省いて（入れても極く少く）この瓣を少し丸めるやうにして根元を針金で結へ、次の瓣もまた前の瓣を卷くやうにして綴ぢつけ、花瓣の開きかゝりの如くします。全部が出來ましたら花に蕾を添へ、葉も一緒にして莖を卷いて仕上げます。

五、クレープ造花編

クレープ造花に就て

クレープペーパーアートは、造花に限らず、簡單な髪飾或は人形の着附など、其の應用の範圍は比較的廣い手藝であります。應用の廣い割合にその仕事は容易で且つ材料が安價で、非常に興味の深いものであります。

こゝには其のアートのうちの造花の作り方を說明します。

製作についての細かい注意は、その都度說明いたしますが大體を左に記します。

第一に濕氣を避けることであります。この紙は濕氣にあひますと大事な皺が伸びてしまひますから、保存にも、製作の途中にも出來るだけ濕氣を避けて、糊をつけます場合などにも極く少しを手早くつけるやうに心掛けます。次に紙の裏表を混同せぬことであります。手觸りが滑らかで光澤のある方が表でありますから貼り合せの時など注意しなければなりません。それから紙を切る時には、よく切れる鋏を用ひ、同じ形のものを何枚も切るやうな場合など鋸り澤山重ねますと、紙がすれて形がくづれますから、五六枚乃至七八枚位までとし、洗濯挟のやうなものでよくはさんで切ります。

要大圖

型紙に「|||||」この印が入れてありますが、これは紙の纖を示したのでありますから、この纖の向きにクレープを合せて切ることを忘れてはなりません。

造花はすべて實物が一番よいお手本でありますから、造花をなさらうとする方は常に實物をよく觀察して置かなければなりません。そして各部分〳〵を手奇麗にいたしますと、自然出來上りも美しく立派なものになりますが、この實物觀察がよく出來ませんと、太い莖の枝が細かったり、揃々してゐる莖の莖がかたくて太かつたり、又割生であるべき葉が互生だつたりするやうなおかしなものになりますから、よく氣をつけなければなりません。

カーネーション

材料　クレープペーパー　白或は桃色(花用)、綠(葉及び萼、卷紙用)

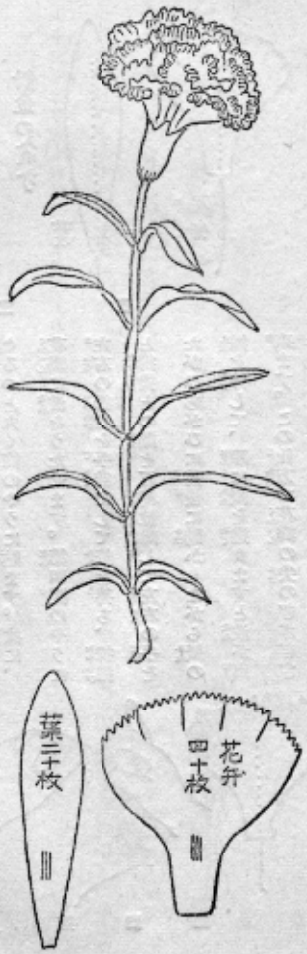
針金　太(二十番)三十纏位のもの一本、糸針金少々。

作り方　先づ第二圖の型紙に合せて花瓣を四十枚、萼を一枚、葉を二十枚切ります。全部が切れましたら、先づ葉と、花瓣二十枚だけに細い針金を中に入れて二重にいたします。

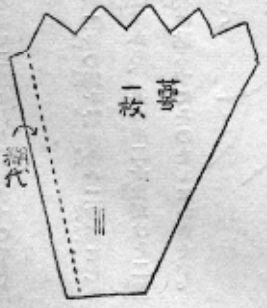
その仕方は、糸針金をどれも七八纏の長さに切つて、花瓣と同じ色のクレープと、綠のクレープをそれ〳〵五粍幅に横に切つて、紙の纖をすつかりのばし、花瓣と同色のを花瓣用とし、葉用として綠色を針金に十本づゝかたく卷きます。(第三圖參照)

かうして紙を卷いた針金に糊をつけまして、前に裁つてあります葉の二枚の間に挾んで貼り合せます。周圍にも極く少しの糊をつけて合せます。前にも申しましたやうにこのクレープは濕氣が加はりますと纖がのびてしまひますから、いつでも貼り合せる場合には糊を手早く、且つ纖をのばさない程度にほんの少し纖の上面だけに極くつけるやうにいたします。

第一圖　出來上り圖



第二圖



巻紙の巻き方図

針金の入れ方

葉

花弁

二十枚裁つてあります葉は、全部かうして二重に貼り合せますので、出來上りの葉は十枚になります。

花蕊も葉と同じやうに針金を入れて、二枚の紙を貼り合せ二重織にします。花瓣は全部で四十枚裁つてありますから、其の中二十枚だけを二重瓣にして十枚の瓣とし、殘りの二十枚は貼らずにそのまゝにおきます。

次に蕚は糊代のところへ糊をつけましてくるつと丸く筒のやうに貼ります。次に、花瓣に波をうたせます。第四圖のやうに左右の拇指を手前にして紙を持ち、拇指と指との間を五粍位離して左右の手をたがひちがひに前後に動かしながら紙の緣を伸して、順に紙を送りますと波が出來ます。この仕方で花瓣の尖のきざきざの部分を全部いたします。針金を入れない分も同じやうにします。

第四圖

かうして全部の緣よせがすみましたら、二重の花瓣を一枚一枚にはがして二十枚を一纏めにいたします。この時一枚〳〵の瓣が重ならないやうに注意して、根元を針金で結へ、其の外側へ針金の入つてゐる二重の緣を全部添へてもう一度根元を針金で結へます。（第五圖參照）。そしてこれに、蕊になる太い針金を足し、根元へ蕚をかぶせて結び目をかくします。それから蕚のつけ際から下を、卷紙（この卷紙は一糎位の幅）で卷いて行きます。其の途中に葉を二枚づゝ向き合はせに添へて全部莖を卷き上げ枝振りを作つて出來上りといたします。

花瓣の緣方

第五圖

花菖蒲

材料　クレープペーパー　紫（花用）、綠（葉及び花用）、濃黃（花用）

針金　太（二十番）四十糎位、造花用青針金十本。

作り方　先づ花瓣と萼を第七圖の型紙通りに裁ち切ります。數は一輪について型紙に示してある數だけづゝ切れば宜しいのであります。

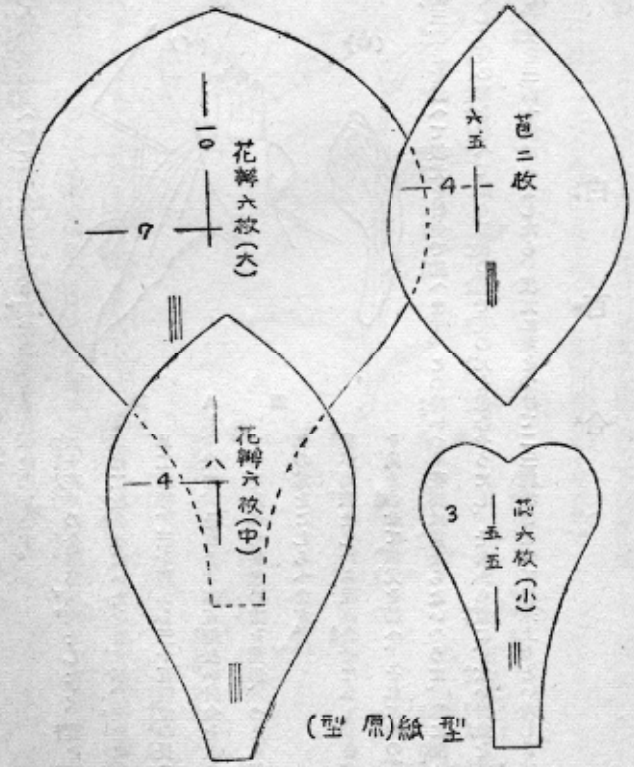
型紙に合せて全部の花瓣が切れましたら、萼の二枚を除く他は皆中央に青針金を入れて二重に貼り合せておきま

す。（貼り方の注意はカーネーションと同じであります。）かうして全部が貼れましたら、周囲をよく切り揃へて形を正し、それから花瓣に縦をよせますが、花菖蒲の瓣は指先だけでなく、第八圖（ロ）のやうにハンカチか手拭の端をひろげて、その上に花瓣を縦に二ツ折りにしたものを載せ、針金の端が右側に來るやうにおきまして、ハンカチを上から被せます。そして左の掌でハンカチの上からしつかりと花瓣を押へつけ、右手でハンカチの右端（針金も一緒に）を持つて手前の方へぐつと力を入れて引張ります。そうすると中の花瓣はロのやうに揃れたやうな縦が具合よく出來ますから、大の花瓣三枚と中の花瓣三枚を同じやうにして、それから尖の方は波打たせておきます。

第六圖　出來上り

小の瓣は尖の方を波打たせるだけにします。苞は矢張り大の瓣と同じやうに縦をよせておきます。

次に大の瓣、つまり外花瓣だけは瓣の中央を黄色く染めます。



型紙(原型)

その染め方は繪具で染めても宜しいのですが前にも申しましたやうにクレープは水に逢ひますと縦がすぐ伸びてしまひますから、染めるより濃黄色のクレープを極く細かく粉のやうに刻んで置き、瓣の中央へ手早く糊を

第七圖

つけ、其の上へ粉に刻んだ黄を振り掛けますときれいにつきます。

第八圖

以上花瓣の全部が出來ましたら、葉を作ります。葉は二枚合せにいたしますが、先きに葉の形に切らずに、初め二糎幅、三十糎から三十五糎位の長さに切つたクレープの中央に、それより四五糎長い針金を入れて二重に貼り合せます。それから尖端の方を葉形、つまり劍形に切りまして、全部の葉をこしらへます。

葉が出來ましたら組み合せにかゝります。最初小の花瓣三枚を向き合せて根元を結へ、それに中の花瓣を三枚と、大の花瓣三枚とを添へて根元を針金で結へます。この時いつも花瓣は重ならないやうに、順に間々に添へて參ります。そして花の形を整へてから二枚の葩で花の元を包むやうにし、それから蜜に、太い針金を添へて卷紙でかたく卷き、丈を三四十糎にしましたら、根元に葉をつけて二三糎卷きまして出來上りといたします。

白百合

材料　クレープペーパー　白(花用)、茶及び薄綠(蕊用)、綠(葉用)
針金　太(十八番位)五十糎一本、細花用青針金十五六本。

作り方　この花は清楚な感じをよく現はすことに努めなければなりません。

第九圖　出來上りの圖

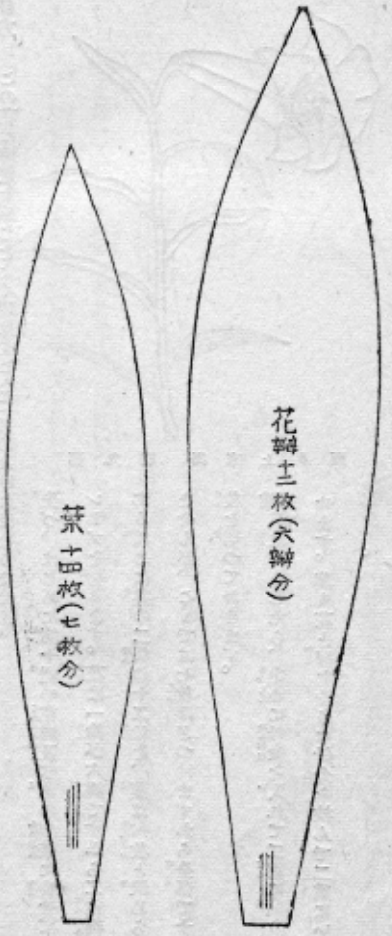
先づ、はじめに第十圖の花瓣及び葉の型紙に合せてクレープを切ります。花は一輪が六瓣ですから二重瓣にする爲めに其の二倍の十二枚を、葉は何枚と決められませんが、こゝでは七枚ほどつけますから全部で十四枚を切つておきます。

型が取れましたら、中心に針金を入れて二重に貼り合せます。葉も花と同じやうに針金を挾んで二重にいたします。

次に蕊を作ります。針金を花瓣の長さ位に六本、それより二糎ほど長いものを一本切つておきます。この長いのは雌蕊の分で、これには第十一圖のやうに頭に薄綠色のクレープで直徑五粍位の紡錘形をつけ、その根元から同じ色のクレープの五粍幅位のもので細くかたく卷いておきます。

次に、雄蕊は先きの方一糎五粍ほどの間へ、稍々太目に茶色のクレープを巻き、それから下へは雌蕊と同じ薄緑色を巻きます。かうして巻いてから(ロ)のやうに先きを曲げておきます。これと同じものを六本作つて、それから

型紙原型



蕊の纏め方圖のやうに雌蕊を中心に、その周圍に六本の雄蕊を添へて根元を結へます。

次に前に貼り合せた六枚の花辨が乾きましたら、根本の方を薄く緑色にぼかし染をいたします。共れには圖番用のクレオンで輕く染めるか、或は葉にする緑のクレープの布端を水に漬らして輕く絞つて共れで手早くこすつて染めても奇麗に染まります。

次に花をまとめます。

先づ、前に作つた蕊を芯にしてその周圍に三枚の花辨を添へ、更に其の間々へ又三枚の辨を添へ、花の纏め方圖のやうに根本をかたく結へます。そしてこれに莖の太い針金を添へて莖を巻きます。百合の莖は可成り太くしつかりとして居りますから、下巻をさきにしまして、最後の上巻の時に葉を互ひちがひに莖に添へて巻いて參りまず。全部が巻けましたら花辨の恰好をつけ、花の付け根から花を前の方にかゞませますと全體に勢が出ます。そして、もう一度全體をよく調めて花及び葉の形を整へ出來上りとします。

六、フラワーリリーアート編

フラワーリリーアートに就いて

フラワーリリーは一名八千代フレンチとも云つてリリヤーン細工の一種であります。これはリリヤーンを一種位の房狀にして一方をミシンで縫ひ繼いだ一種の組紐でありまして、是れに糊をつけて、從來の摘細工と同樣に草木・花鳥・風景・動物などを壁掛、柱掛、色紙、羽子板、額面、寫眞挾、小箱、ランプシエード等に貼附けた細工物であります。

尙、これを編んで籠とか手提袋又は造花、盤景等廣く應用の出來る手藝であります。

用具　摘み細工と同樣に糊板、糊筵、ピンセット、鋏、糊等であります。

糊の選び方及び糊加減　糊にも種々ありまして長く保存するために多くの防腐劑の入つたものがありますが、此れは糸の光澤を失ひ又、變色したりする恐れがありますから、經濟的で簡單に出來る姫糊が何よりも安全であります。

糊の煮加減は普通ゴム糊の少しやわらかい位が適當であります。

種類　フラワーリーには巾の廣いもの、狹いもの又は、ミシン目を中央にして兩輪のもの、壁掛の縁用の片輪のもの等の種類があり、又色は無地、染め分等數十種あります。品質は糸に光澤があり、柔のみあるものが良い品であります。

使ひ方　表と裏のどちらを使ふかは作る物によつて適宜に定めます。感じを現はす爲には、どちらを表にしても差支へありません。

藥玉

材料　藥玉の芯（紙製品）直徑十四糎
釣紐　赤打紐（徑六粍位）八十糎
房　染分リーヤン　大束一把

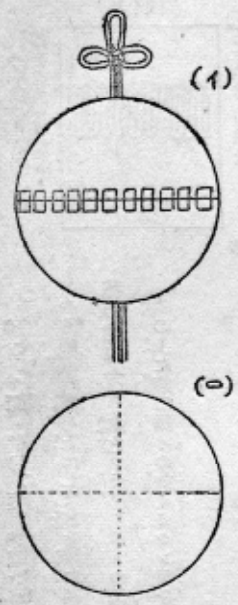
グリーヤン	赤フラワリー二米	同	十目宛	四十九
	紫	同	同	
	緋	同	同	小（藤
	桃	同	同	菊（黄
		同	同	
		同	同	

中（黄	四十糎	一	地（白	七十五糎　二十八目　八
菊（白	同	同	埋（白	七十五糎　二十五目宛　八
葉（濃綠	二米	二十目	二十四	芯（淡黄　三米糎

寸法には多少の餘裕が見て有ります。

作り方順序　赤の打紐を六十糎と二十糎に切り、六十糎の方を國旗結びにします。國旗結びは第四百七十六頁を參照して下さい。

紐の付け方　紙製品の藥玉の芯は、二ツのお椀狀のものを合せて一ツの玉にしたものであります。先づ二ツのお椀の眞中に穴を明けて、一ツのお椀には今結んだ國旗結の紐の先を通して、其の結び目から二糎ほど外に出して、端はお椀の內側で結んで拔けないやうにしつかり留めて置きます。



圖一

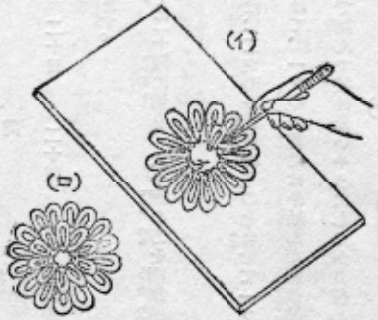
次に他の一ツのお椀には二十糎の紐を二ツに折つてやはり穴に通して、お椀より五糎位外に出してやはり拔けないやうに內側で結んで置きます。

二ツのお椀に紐がつきましたら、二ツ

第一圖　第二圖

を合せて、第一圖(イ)の如く生作紙で、離れないやうに貼ります。それから(ロ)のやうに國旗結を上にして芯を縦に四等分して鉛筆で標をつけて置きます。

花の作り方　赤色フラワリーの輪を十目切つて、糊を薄く平らにのばした糊板の上に第二圖(イ)の如くミシン目を向ふにしておきます。次にピンセットで中央を向ふに押し上げますと、輪が(ロ)のやうに下斜向になりますから、更にこれを押し上げて左の五目の上に右の五目を重ねますと(ハ)のやうな一ツの輪が出來ます。

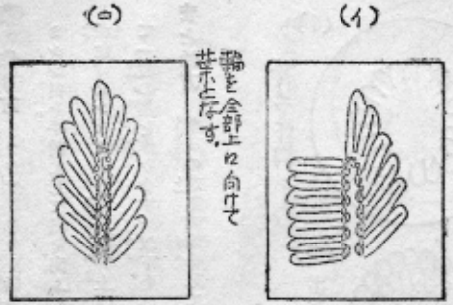


第三圖

同樣にして赤色花瓣を四十七枚、外に桃色、黄色、樺色も四十七枚づゝ作つてをきます。これが後に說明するダリヤの花になるのであります。

次に第三圖(ロ)の小菊を作ります。

小菊　藤色フラワリーを二十五目に切つて、前と同じやうに糊板の上に置きますが、これは輪が花瓣になりますのであまり輪の方へ糊をつけると載かみを失ひますから、ミシン目の方へ糊をつけます。そして一度ピンセットで糊板から離し、再び糊板の上で第三圖(イ)のやうに直徑二糎位の圓を作り、疎り端を順に其の中へくる〳〵と重ねますと、(ロ)のやうな一輪の小菊が出來ます。かうして藤色黄色八ツの外に、白で二十八目を一輪とした地垣の花を八ツ作ります。そして是等の花の芯は造花用菊の芯を使つてもよろしく、フラワリーの淡い黄色のミシン目の際から輪を切り落し、ミシン目だけに糊をつけてくる〳〵とまいて切口の方を上にして、花の眞中に貼りつけてもよろしくあります。



第四圖　第五圖

この芯は花瓣の淡色の場合は濃い芯を濃色の場合に淡色を使ひますと調和がとれます。

中菊　次に白と黄色を長さ三十八糎一位に切り外廻り直徑三糎位の大きさにして、前と同じやうな菊を作ります。芯は花の大きさに從つて

少し大きくいたします。

葉の作り方　フラワーリリー緑色二十目を一枚の葉として二十四枚とります。そして花と同じやうに糊板の上にミシン目を手前にして輪を向ふに置きます。

次に、ピンセットで中央を押上げミシン目を左右より寄せて第四圖(イ)の形とし、(ロ)の如く全部の輪を上向きにして一枚の葉を作ります。以下全部を同様にいたします。

まとめ方　藥玉の芯を四等分してありますから、其の中の一區切の眞中を花の中心として赤のダリヤの花をつけます。

(イ)　ダリヤ外辨

(ロ)　出來上り

第五圖

さきに作りました花瓣を第五圖(イロ)の如く、外花瓣二十一を先に貼りつけて第一段とし、次に十九枚を外花瓣へ三分の一重ねて第二段とします。瓣を重ねる時は外花瓣の間々につけて瓣の重ならないやうにします。第三段目は殘り七瓣をつけて一輪の花とします。

次に今附けたダリヤの反對の後側へ紫色のダリヤを同樣につけます。

これで二ケ所花がつきましたから、殘り二ケ所には黄色と白の中菊をつけます。そして其の花の廻りへ、黄色には赤色の八ツの小菊をつけ白には黄色の小菊を八ツつけて第六圖の如く一纏めの花といたします。

第六圖

斯樣にして芯の中央は花で埋もれましたが、上下には花がついて居りませんから、緑色四十七枚のダリヤと桃色四十七枚のダリヤで埋めてしまひます。

あとに二十八枚の白の小菊八ツと葉二十四枚殘つて居りますから第七圖(イ)の如く、白小菊の三方に葉をつけて、(ロ)のダリヤと菊との間へ上部四ケ所下部四ケ所につけてあいて居るところを埋めます。この時は三枚の葉を先に蕊へつけて置いてから眞中へ白菊をつけるので有ます。(ハ)參照。是で芯全部へ花がつきましたから花の眞中に蕊を貼りつけます。

(イ)

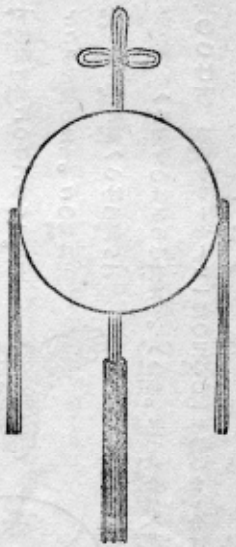
(ロ)

赤　白　黄　紫

(ハ)

第七圖

房のつけ方　房用リリーヤーン一把の三分の一を總のまゝ分けて、更にそれを二ツに分けて左右の中菊の芯の下にとれないやうにつけて長く垂らし、殘りは芯から下に出て居る緑を芯としてしつかり結びつけて第八圖のやう



第八圖

に房といたします。

注意　花のまとめ方は以上の如く全部を一度にまとめてもよいですが、糊が乾くとつけにくゝなりますから、一輪づゝ必要なだけ花鐵を作つて一つづゝまとめた方が軟い感じになります。

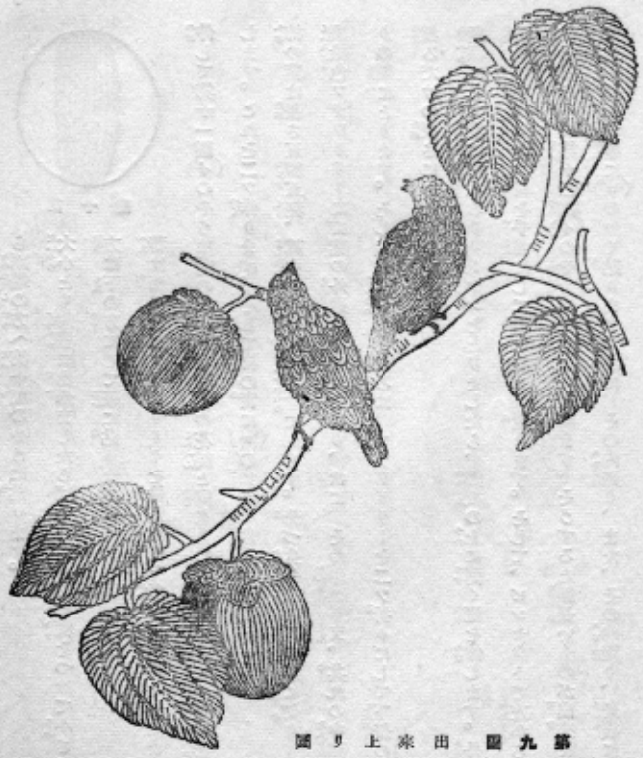
柿に繍眼兒

材料　フラワリー濃綠色三米、六十糎（巾）淡綠色二十五糎（へた）黃色四十糎（小鳥）リリーヤン淡綠色黃色、柿色（柿）濃い鼠色（枝）各一把、生平紙、板目紙、綿、既製品の鳥の眼球二ケ、額の臺紙二十糎長三十三糎

作り方順序　臺紙に下繪をうすく鉛筆で畫きます。

先づ柿の木から作ります。生平紙で下繪に倣つて適當な太さの紙撚をこしらへて、小枝と同樣にして置きます。

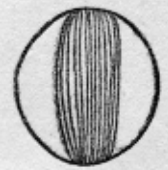
そして、鼠色のリリーヤンをといて紙撚の端からくる〳〵と卷きますとまるい柿が出來ます。それを上からたゝいて平たいものにして、糊をつけて木の恰好に臺に貼ります。



第九圖

次に柿の實を作ります。

大きい實、長さ五糎、巾四糎、小さい實、長さ四糎、五糎巾四糎位の柿の實型を板目紙でとり、そして、眞中がすこし高くなるやうに綿を全體に置き、其の上からどんな布でも適當な布を貼つて柿の實の土臺をこしらへます。次に柿色のリリーヤンをよく引きのばして柿の實の長さより少し長目に切り二三本づゝ眞中か



第十圖

ら兩端の方へ第十圖のやうに貼ります。

大小とも同樣に出來ましたらば柿の實の裏に糊をつけて小さい方は木の上部に、大きい方は下の方にして臺に貼ります。

莖は淡い綠色フラワリーを輪から輪を數へて十目を切ります。そして糊板の上に糊を伸して第十一圖(イ)のやうに前の葉玉のダリヤの花辨と同じものを三ツ合せて一ツの莖としします。これを二ツ作ります。そして柿の實に(ロ)の如くつけます。

柿の葉は長さ五糎五耗、眞中の巾は四糎位にします。先づ生半紙を葉の形に切り濃綠色フラワリーにて葉の外廻りの寸法をとり、次に、その中廻り又、其れの中廻りの順にとります。そして、眞中のところは、フラワリーを二ツ折りにして下紙の埋るだけの長さにいたします。

斯樣にして葉に用ふるリーヤンをとりましたら、糊板の上に薄く糊を伸します。外廻りの葉はミシン目を手前にして輪を向ふに置きます。そして、ピンセットで左から輪を右の下に第十二圖(イ)のやうに終りまで入れます。そうすると餘長いものが出來ますから眞中を葉の眞中にして生半紙の葉型に(ロ)の如く貼ります。次に、その內廻り、また、その內廻り、最後に眞中の順序にして一枚の葉

(ロ)

(イ)

第十一圖

(イ)

(ロ)

(ハ)

第十二圖

ころ〳〵フラワリーの輪を二三目づゝ切つて(ハ)のやうに感じを出します全部葉が出來ましたら、裏の紙に糊をつけて幾分ふくらみをつけて臺に貼ります。

鳥　二羽とも頭より尾先きまでの長さを八糎、胴巾を三糎位にします。先づ板目紙で、尾をのぞいた他の部分の型をとります。そして前の柿の實と同樣に綿を入れて上から布を貼つて鳥の土臺をこしらへ臺に貼ります。

次に、黃色フラワリーの輪を切つて第十三圖(イ)の如く、輪の上に輪を半分位づゝ下から上に重ねてお腹の部分を先きにこしらへます。そして淡綠色のリリーヤンを八糎に切り四ツ折りにして糊をつけ、一枚の尾羽根とし

(ハ)

(ロ)

(イ)

第十三圖

を作ります。尙このフラワリーの重ね方によつて大小の葉が出來ます。そして枌葉はと

同様なものを四枚作ります。そして二枚づゝ重ねて(ロ)の如く尾といたします。

更に、左右の羽根を尾羽根と同色で、四ツ折りにして長さ一糎位のものを幾つも作り、(ハ)の如く、長短をつけながら胴のところまでつけます。そして胴から上に首、頭の部分は、やはり同色にて、二ツ折りにして八粍長さのものを、お腹のつけ方と同様にして最後に嘴のところで終ります。

嘴は鳥の體と釣り合ひのとれる大さにいたします。

目は、小鳥の眼球用のガラス玉の裏に糊をつけて貼りますが、眼球のない場合は普通の縫糸の黒で極小さい玉をこしらへ、その周圍に白糸を一廻り巻き、また其の廻りに黒一廻をきますと生々とした目の玉が出來ます。

足は生半紙を小さく紙撚にして、その上に本と同色の扇色リーヤンをといて巻き、出來上り圖のやうに枝にとまつた形につけます。

フラワーリリーは巾のせまい紐でありますが、使ひ方によつてかやうに葉も大きくて廣いものにもなり又、花鳥に限らず風景・人物・どんなものにも應用が出來ます。

七、縫細工編

縫細工に就て

縫細工は、押繪や切箔細工と同様に、我國古來からのお細工ものゝ一ツでありまして、討突、巾着など實用と裝飾とを兼ねた小布利用の縫細工としてどこの家庭にもよく試みられたものであります。然し時代の變遷に伴つて、これ等小布利用の縫細工にも亦新時代の趣味が多分に加味せられるやうになり、裝飾に實用に、また趣味の玩具として非常に廣況に利用せられるやうになりました。

僅かな小布を利用して工夫力を養ひ趣味性を喚起せしむるためには最も好適なものであると思ひます。

鶏の針差

材料　白縮緬　十五糎角一枚、白縮緬　六糎五粍角二枚、緋縮緬　丈四糎七粍、巾九糎一枚、緋縮緬　四糎五粍角二枚、黄色縮緬　二糎五粍角一枚、黒縮緬　五糎五粍角一枚、黒縮緬　四糎五粍角二枚、反物の厚紙少々。

作り方　臺は、六糎五粍角の白縮緬一枚を第二圖(一)のやうに丸く縫ひ、夫に厚紙を直徑四糎の丸に切り、それを

中に入れて糸を引きしめ、縫ひ代は裏側へ紙で貼りつけます。

鶏冠は、丈四糎五粍、巾九糎の緋縮緬の巾を二ツに折り、(二)のやうに両端を三粍の縫代で縫つて表へかへします。そして(三)のやうに裁目を五粍の縫代で縫つて(四)のやうに糸を引きしめ、鶏冠の形に縮ませます。次に四糎五粍角の緋縮緬二枚は嘴の下の鶏冠になるのですから、(五)のやうに縦に二ツ折りにして圓のやうな丸味のついた細長いものに縫ひ、上の口から表へ返して使ひます。

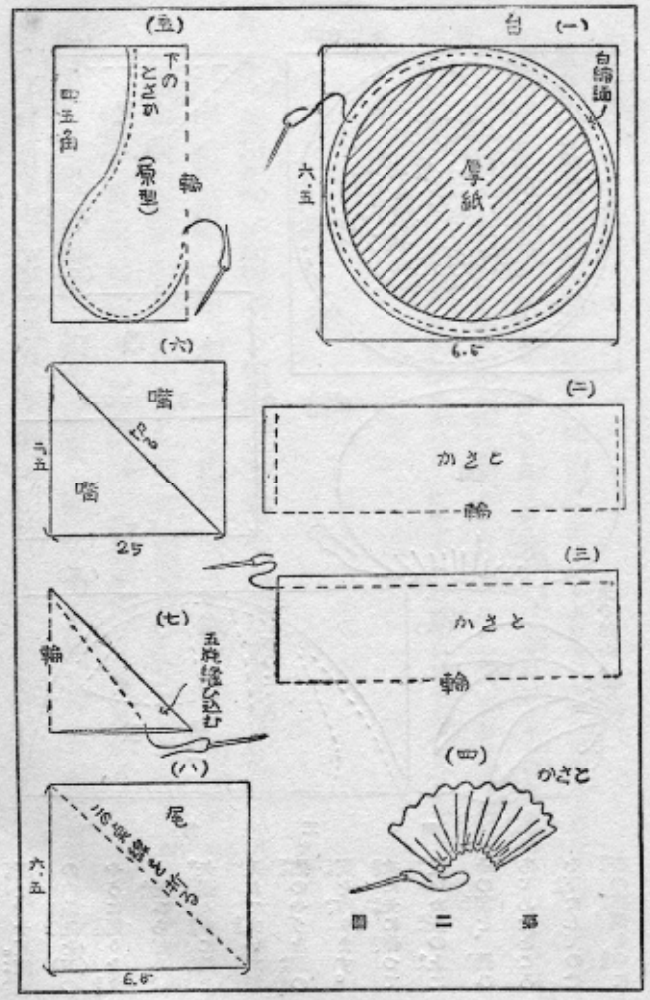
第一圖　出來上りの圖

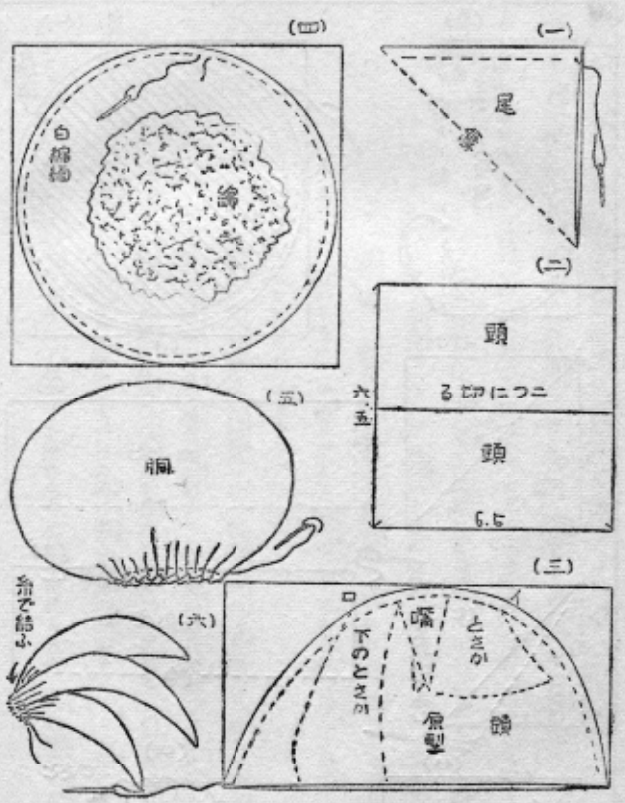
嘴をつける

嘴は、二糎五粍角の黄色の縮緬を、(六)のやうに三角に二ツ切りにし、二枚とも別々に(七)のやうに二ツ折りにして、斜の長い方を五粍の縫代で縫つて、下の口から表にかへしこれを二ツ作ります。

尾は、黒縮緬六糎五粍角一枚、四糎五粍角二枚で、(八)のやうに何れも二ツ折りの三角にして斜の一方を第三圖(一)のやうに三粍の縫代で縫つて表に返します。

頭は、六糎五粍角の白縮緬を(二)のやうに二ツに切り(三)の原型通りに切つて四粍の縫代で半返しに縫ひます。この時、嘴と上下の鶏冠を(イ)と(ロ)の間の點線の位置に挟んで縫ひます。縫つたら表に返し(四)のやうに下の廻りを縫ひちぢめ、中に綿を入れ、鶏の頭の形に好よく糸を引きしめます。





第三圖

胴は、十五糎角の白縮緬を(五)のやうに廻りを丸く縫ひちぢめ、矢張り中に綿を入れて丸いお饅頭のやうな形の胴を作ります。

次に先に作つて置いた嚢の上にその胴を、縫ひちぢめたところを下にしてのせ嚢の裏側を中に

し廻りをまつりつけます。

(七)尾のつけ方　先きに作つて置いた頭を、胴の丸い、背になる方の右の上部へ出來上り圖のやうに、嘴が少し上向き加減にまわりをまつりつけます。次に尾を第三圖(六)の如く、中央の一枚を兩端の一枚づゝではさむやうにして、はしを束ねて糸で結んで胴の左の上部へ出來上り圖のやうにのせて、奇麗にまつりつけます。最後に赤い絹糸を二本より合せて眼球を可愛らしくつけます。その時黒い絹糸の玉を中に入れますと生々した感になります。

內裏雛

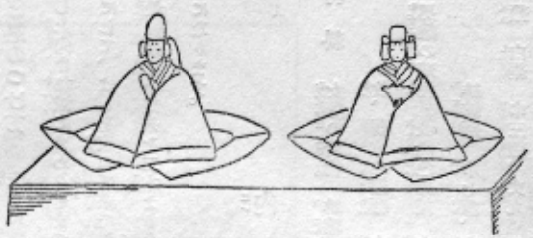
材料　女雛の着物　緋縮緬　巾十一糎五粍、丈十四糎一枚、輸出羽二重又は絖絹の白　巾十六糎、丈十八糎一枚、萌黄色縮緬　巾七糎、丈四糎一枚、緋縮緬　同　黄色縮緬　同　時色縮緬　同

男雛の着物　表裏色縮緬　巾十一糎五粍、丈十四糎一枚、裏輸出羽二重又は絖絹の白　巾十六糎、丈十八糎一枚、緋縮緬　巾七糎、丈四糎一枚、黄色縮緬同　萌黄縮緬同　白縮緬同

頭　白絹　巾三糎、丈九糎二枚、金紙一枚、黒の千代紙一枚、赤の千代紙一枚、ボール箱一個(巾十六糎位、高さ四糎位、深さ八糎位)頭に入れる綿少々、冠の紐にする赤の絹糸少々。

顔

白絹の顔用布を第五圖(一)のやうに縦に細く三ツに折り、點線の邊に綿を入れてそれを(二)の如く二ツに折つて糸で固くくゝり、顔の形をつくります。これを二ツつくりましたら黒の千代紙で書のやうに、鬢、前髪、冠を原型通りに切り、それを先に括つて置いた顔に(三)、(四)のやうに糊で貼りつけ、髪及び冠の格好を程よく形づくります。鬢と前髪だけは點線のところを折りまげて貼り、男女の顔は(三)、(四)を參照して作ります。

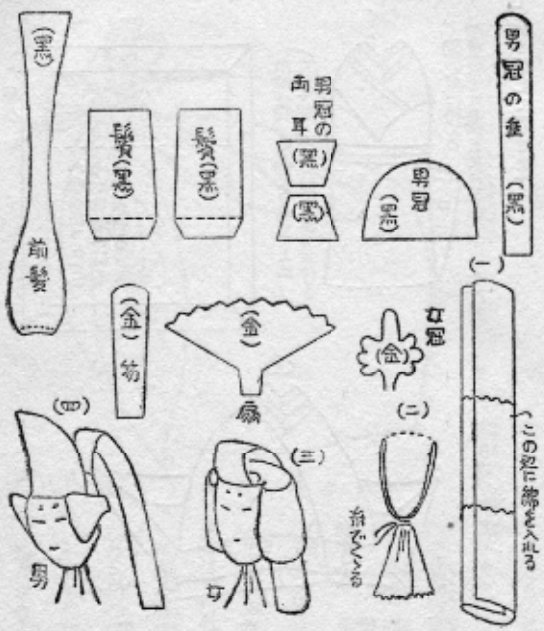


第四圖　出來上り圖

着物

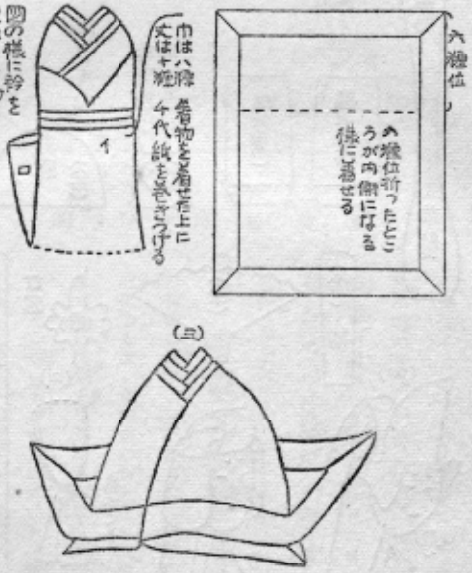
先づ女雛の分の緋縮緬の表布と、白の裏ぎれを合せて額縁の蒲團のやうに縫ひ合せ、男雛の方の鶸色縮緬と白絹の方とを同様に縫ひ合せます。次に巾七糎、丈四糎の布を各々丈の方を一糎位づゝ内側に折りまげて、それを先きに出來上つて居る顔に一枚づつ順々に第六圖(二)のやうに着せて參ります。その時に女雛の方は時色を一番下にして、黄色、緋、萠黄色の順に重ねて美しく着せ、男雛の方には白を一番下にして、萠黄、黄色、緋の順に重ねて着せます。次に赤の千代紙を巾八糎丈九糎五粍に二枚切り、それを着物の上に(二)の(イ)のやうに卷きつけて糸で括つて胴と致します。

卷きつける時は巾の方を卷きます。そして頭からはかつて七糎五粍位の高さになるやうにして(二)の(ロ)のやうに紙を後の方へ折りまげて置きます。これで身體が出來ましたから、先きに縫つて置きました額縁の布を第六圖(一)のやうに丈を六糎位裏側へ折り、その六糎折りまげた方が内側になるやうにして、それを身體に(三)のやうに着せます。そして衿の合せ目のところを動かないやうに糸でとめて置きます。これで出來上りましたから、金紙で扇と笏を切つて出來上り圖のやうに持たせ、顔をお内裏様らしくきれいに書きます。



第五圖

臺　ボール箱に金紙を美しく貼つて臺に致します。



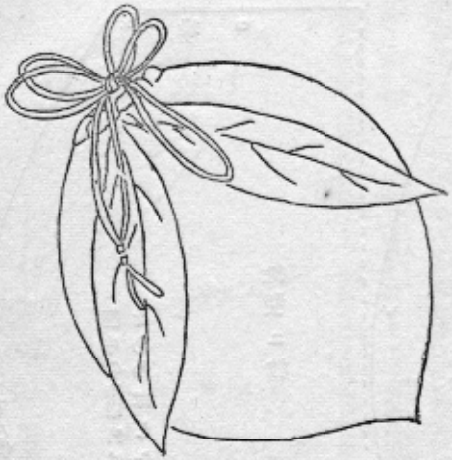
第六圖

臺が出來ましたら、その上へ男雛が向つて左、女雛が向つて右になるやうにのせ、後へ折りまげてある身體の紙のところを畫鋲で、しつかりと臺にとめて置く。（出來上り圖參照）次に金紙で女雛の冠を第五圖のやうに切つて前髪のところへ糊で貼りつけ、最後に赤い絹糸二本で冠の紙のやうに顎で結んで置きます。これですつかり出來上りましたから上着の裾をお内裏様の裾らしくぴんと折り返して置きます。

第五圖の髪や冠は實物大でありますから原型の通りにお切り下さい。

桃袋

材料　表用布、桃色縮緬巾二十八糎丈十五糎、裏用布、桃色新モスにて表用布と同寸、葉用布、綠色かオリーブ色縮緬巾十六糎丈十二糎、袋口緣布、黃縮緬丈十糎巾六糎、打紐三十糎、毛金糸一米、生半紙一枚。

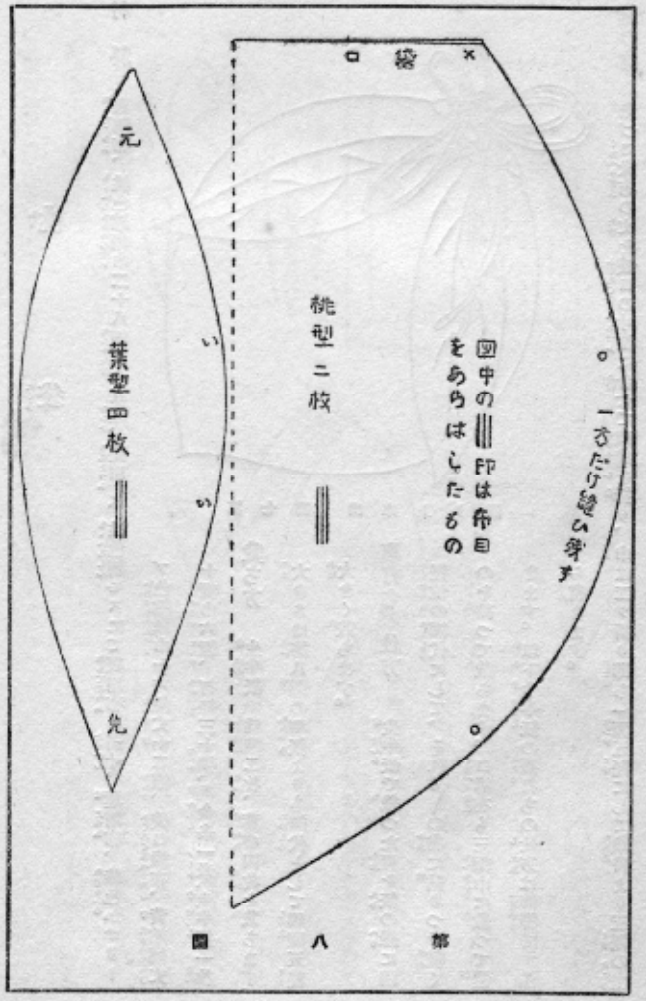


第七圖　出來上り圖

裁ち方　生半紙で桃型二枚、葉型四枚を裁ちます。大きさは第八圖の型紙よりも縫代として周圍五粍大きく裁ちます。

裏打ちの仕方　生半紙で裁つた型を紙の緣に四粍位の糊代にして、それ〴〵の布に貼りつけ乾くのを待つて裁ちます。口緣布も三糎巾に裁つて置きます。以下生半紙の裏打ちの仕方は同樣ですから省きます。

縫ひ方　先づ口緣布の丈を袋口の寸法に合せて兩端を折り、巾は二ツ折り即ち一糎五粍にして裁目より三粍の處

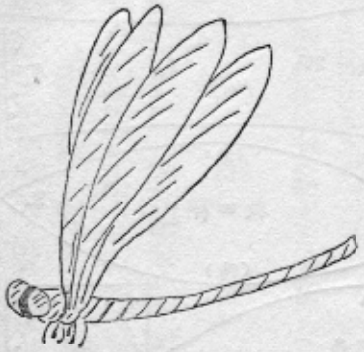


第八圖

を縫つて置きます。次に桃型布表裏二枚の綿口に綿布の裁目を合せて挟み、第七圖の×印の間を四粍の縫代で返し縫ひにします。これと同じものを二ツ作ります。次に桃型布四枚を重ね、四ツ縫とし型紙の○印の中央を裏布一枚だけ縫ひ殘して表へ返します。そして鑷で形を正して縫ひ殘しの一枚の裏布を綴じつけます。

次は葉形二枚づゝを合せてい印の間を縫ひ殘し葉先がすつきりするやうに注意して縫ひ、表へ返して縫殘しは綴じ附け形を正して、金糸で葉脈を縫ひます。葉脈は出來上り圖の如く中央に一本と中央の糸に掛けて左右に五本を葉の表裏へ同樣に縫ひます。金糸の縫方は葉の元から始めて先端で葉の側面で目立たぬやうに止めます。次は葉の元を出來上り圖の如く桃の實へ四五針まつり附け、綿布の中へ打縫を通して出來上りと爲します。

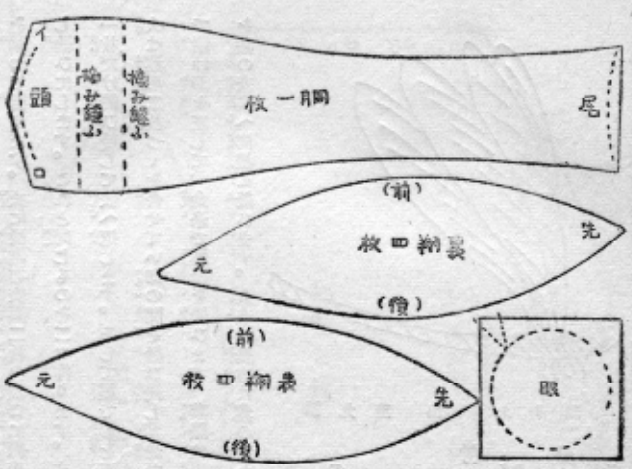
蜻蛉



第九圖　出來上り圖

材料　黑縮緬十二糎角、水色縮緬十糎角、毛絲糸十五圓、生半紙一枚の四分の一、綿一錢。

裁ち方　第十圖の型紙通りに生半紙で、胴を一枚と、翅を八枚裁ちます。生半紙は柔かに成るまで揉み、鑷で良く鑞を延



第十圖

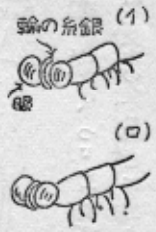
したものを用ひます。

裏打　生半紙で裁つた胴と翔とを用布に貼ります。胴と表翔四枚は黒布に、裏翔四枚は水色布に共に布目が斜になるやうに貼り、眼には裏打しません。

縫ひ方　表裏の翔を二枚づゝ合せて小針に半返しに縫ひ、翔の後方を二糎位縫ひ殘して置き、此處から表へ返します。縫ひ殘しの處は折をつけて糊をつけ仕上げをします。

次は胴の二ケ所の點線を紙の方から摘んで、二粍の縫代で摘み縫ひにし、折目は頭の方へ折ります。次は巾二糎長さ胴丈と同寸の生半紙で紙捻を作り、これを胴の芯として太い部分は堅く綿を卷きつけて形をつけます。次に第十圖頭部(イ)(ロ)線を折り、尾の點線は折つて糊を附けます。兩側を三粍の縫代に折り

芯を入れて小針にまつり絎け、この絎け目は下向きとして腹部とします。



足六本は銀糸を兩側から三本づゝ差して足の元を布に一針づゝ止めておく

第十一圖

次は頭部(イ)(ロ)の間を縫つて、此處に眼を附けます。眼は第十圖眼の點線を縫ひ、小豆大に綿を入れて縮めくくり同じものを二ツ作つて頭部(イ)(ロ)の縫縮めた處へ差しこみ、しつかりつけます。次に眼の中央に銀糸で二ツの線を飾り附け(第十一圖(イ)參照)。眼の感じを表はします。次は胴の摘み縫ひの所へ兩側に、二枚づゝの翔をしつかりと、目立たぬやうに附けます。

最後に翔の附根の下方に銀糸で六本の足をつけ長さは八粍位に揃へて切つて出來上りとします。(第十一圖(ロ)參照)

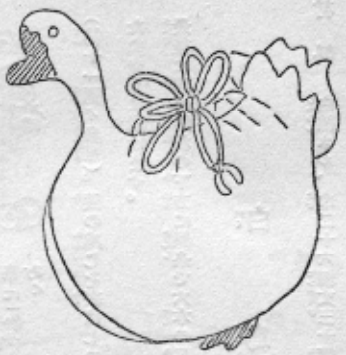
白鳥袋

材料　白綿ネル、巾二十六糎丈三十糎、黄色新モス、巾八糎丈十四糎、白新モス、巾九糎丈二十三糎、打紐四十糎、ビーズ赤か黒十四粒。

裁ち方　白綿ネルで型より縫代として周圍を四粍大きくして卷末第十三圖の胴型二枚、翼先型二枚、嘴下型一枚、卷末第十四圖の尾型上側一枚、腹型と尾型下側とつゞいたもの一枚を裁ち、次に黄色新モスで同下圖の寸法に足

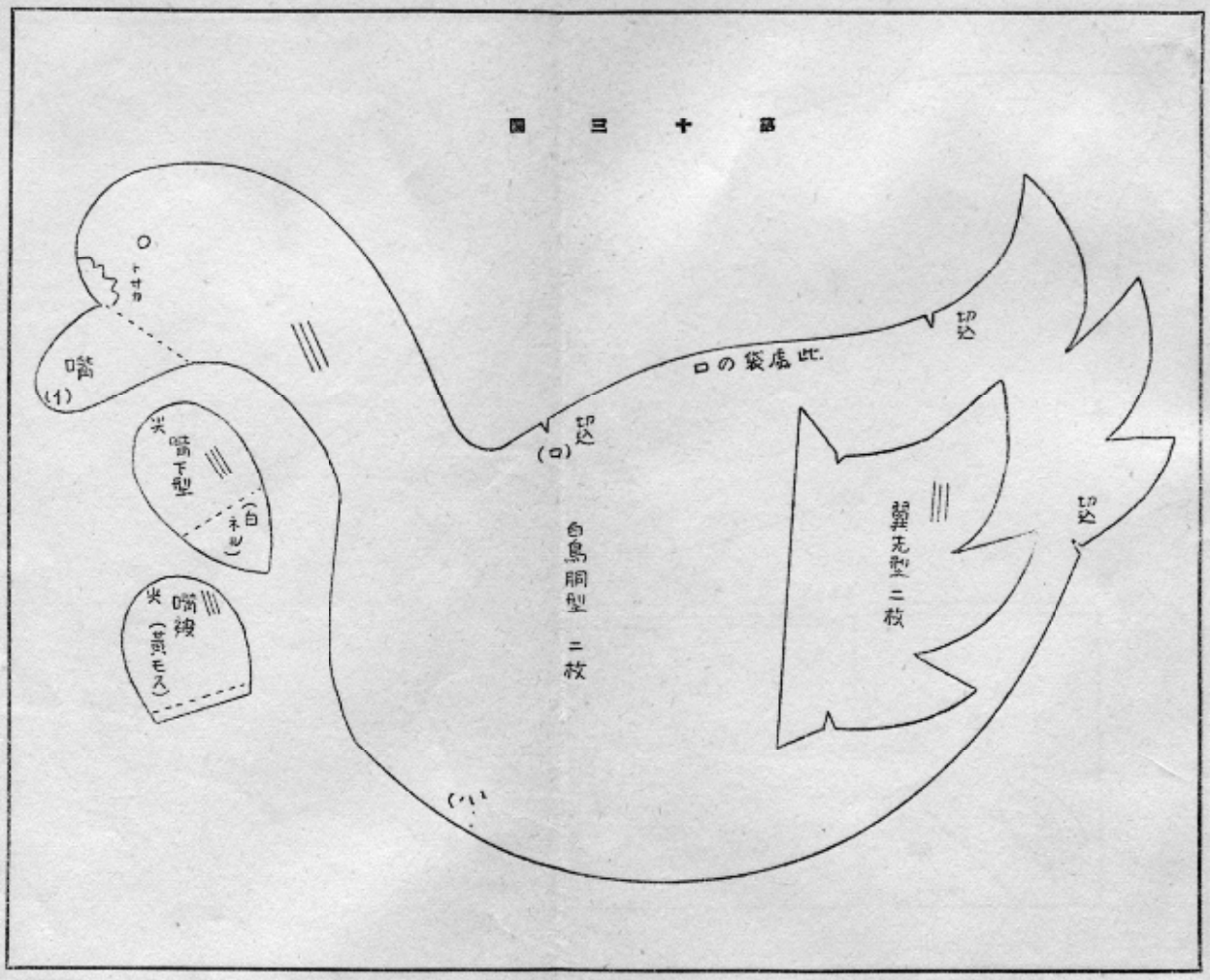
二枚、嘴一枚、鶏冠一枚、嘴下被型一枚（嘴と嘴下の型紙は巻末第十三圖參照）を裁ちます。次に白新モスで袋裏布として巾九糎丈二十糎のものを裁ち、殘りは巾三糎丈九糎の袋口布とします。

縫ひ方　先づ胴形の嘴（イ）から背の切込み（ロ）までの頭部を極小針に半返しに縫つて縫目を割り、次に胴の翼先切込みに翼先型を合せて二枚づゝ縫ひ翼先を表へかへし、上下尾型も二枚合せて切込印まで縫つて表へ返します。次に腹型の（ハ）を胴型（ハ）に合せて尾型の切込印と胴型翼の下方切込印とを合せて腹型が丁度袋の底になるやうに兩側の胴を縫ひ合せます。胴型の嘴には黄色布で裁つた嘴布を點線の上へ被せて縫ひつけ、胴型の嘴に合せて嘴の尖端を裁ち合せ鋏をかけて置きます。嘴下型に嘴下被型をかぶせて點線を縫ひ尖端を合せて鋏をかけます。



第十二圖　出來上り圖

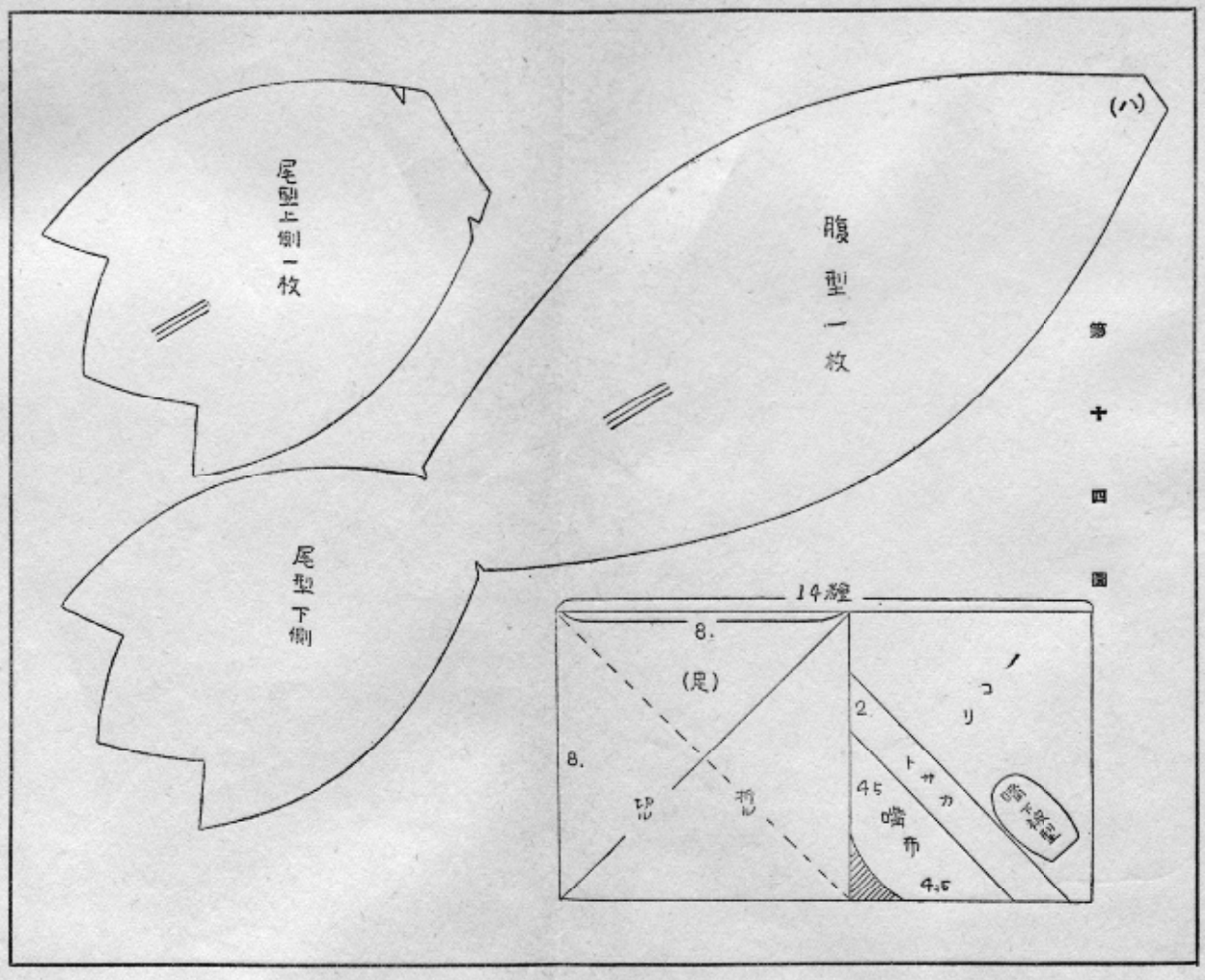
次に胴型嘴に嘴下型を合せて（イ）を中央に嘴點線の處を縫つて嘴を仕上げ、つゞいで胸部を（ハ）まで縫ひ合せます。次は頭部と胸部とに適宜に綿を入れて形をつくります。次は三糎巾の袋口布を二ツ折とし、上り巾一糎丈は袋口巾に合せて兩端を折り、表胴布と裏袋布と袋口布を挾んで縫ひ、續いて裏袋布の兩端と底に當る處の兩端を三角形に縫ひ、一方の端を少し縫ひ殘して此處から返し、縫



第三十圖

上て嘴の尖端を裁ち合せ鞋をかけて置きます。嘴下型に嘴下被型をかぶせて點線を縫ひ尖端を合せて鞋をかけます。

次に胴型嘴に嘴下型を合せて(イ)を中央に嘴點線の處を縫つて嘴を仕上げ、つゞいで胸部を(ハ)まで縫ひ合せます。次は頭部と胸部とに適宜に綿を入れて形をつくります。次は三綾巾の袋口布を二ツ折とし、上り巾一綾丈は袋口巾に合せて兩端を折り、表胴布と裏袋布と袋口布を挟んで縫ひ、續いて裏袋布の兩端と底に當る處の兩端を三角形に縫ひ、一方の端を少し縫ひ殘して此處から返し、縫



第十四圖

ひ綴しを新けて表胴の中へおちつかせ、ビーズを七個づゝ糸に通して眼をつけます。

次に二糎巾六糎丈の鶏冠布の巾を四ツ折として、第十五圖(イロ)のやうに縫ひちゞめ、嘴の中央上部につけます。足は同圖(一)(二)のやうに八糎角の足布を二ツの三角に切り、又それを各々三角に折つて縫ひちゞめ、出來上り圖の如く腹部に二ツ揃へて縫ひつけます。尾は左右翼の中央に形よく縫ひとめて出來上りと致します。

第十五圖

(一) (二) (イ) (ロ)

揚羽蝶小袋

材料 表用布、黒縮緬巾十七糎丈二十五糎、翅裏用布、黄色縮緬巾十二糎丈十六糎、胴裏用布、黄又は白新モス丈十糎巾十二糎、縁布、青又は緑縮緬丈九糎巾三糎、打紐三十糎、縁ビーズ十四個、毛銀糸五糎。

裁ち方 第十七圖の型紙通りに生半紙で、胴を二枚と、前翅二枚と、後翅二枚とを裁つてそれ〳〵表用布に貼ります。次に翅裏用布で前翅二枚と、後翅二枚とを裁ち、胴裏用布で胴裏を二枚裁ち、縁布は巾を一糎裁ち落して

丈を二ツに裁ちます。裁ち落した小布は後に翔の斑點に用ひます。

縫ひ方　前翔と後翔とそれぞれ表裏二枚づゝ合せて型紙の×印の間を縫ひ殘して、他は翔の曲線が美しく表はれるやうに四粍の縫代で縫ひ、一粍のきせで表へ折りをつけて返し、縫ひ殘りは糊で附けて鏝をかけます。

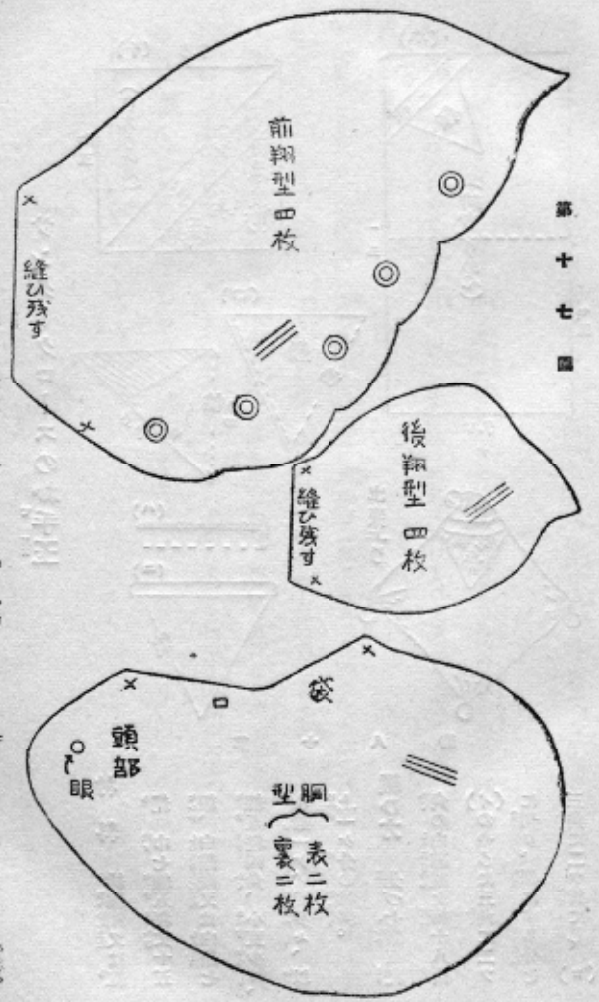
第十六圖

次に前翔へ五ケづゝの斑點を附けます。斑點の作り方は、圖のやうに大圓は直徑四粍、小圓は直徑二粍の圓を生半紙で十枚づゝ裁ち、大は黄布に、小は綠布に貼り、糊が乾いたならば裁つて、黄の上に緣の圓を重ねて貼り、又それを前翔へ型紙の位置に貼り附けます。

次は裏表の胴を重ねて四粍の縫代で四ツ縫ひとし、袋口の處から表へかへし鏝で形を直して置きます。

前翔は胴の頭部の兩側へ、後翔は前翔に並べて後方に縫ひつけます。

次は緣布を袋口に合せて兩端を折り、巾は七粍上りとして、翔の上からしつかりと半返し縫とし、袋の裏へ絎けます。頭部の兩側へビーズで眼をつけます。



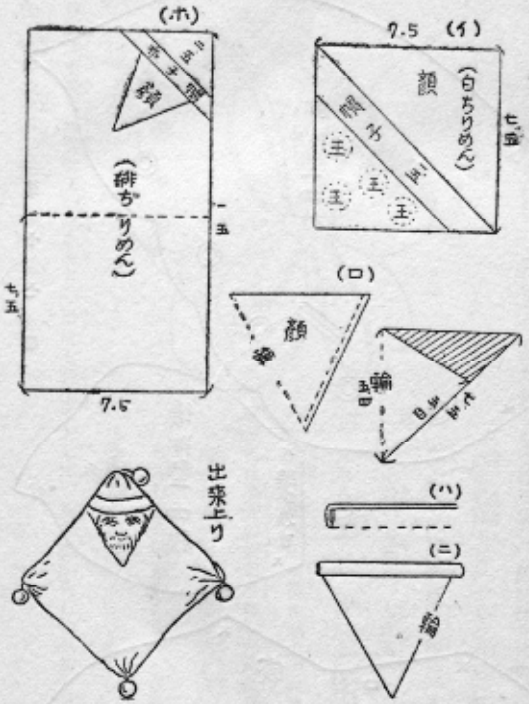
第十七圖

次に銀糸を鼻の尖端の位置につけ長さ二糎位にして切り、つけ根を目立たぬやうに止めておきます。そして打紐

大妻圖

を通して出來上りとします。

サンタークロースのお手玉



材料　絣縮緬又は紅絹　巾七糎五粍丈十五糎、白縮緬又は白絹七糎五粍四角、小豆少々、小鈴一ケ、綿少々、以上一ケ分の材料。

縫ひ方　先づ七糎五粍角の白縮緬を第十八圖(イ)のやうに三角に二ツに切り、顔にする分を三角に二ツ折にし、(ロ)の右圖のやうに裁ち目の方を、綸の方の寸法と同寸にして、餘分は切り捨てます。そして左圖のやうに袋に縫つて表に返します。

次に帽子布としてある一糎五粍巾の斜布の巾を二ツに折つて(ハ)のやうに四粍位の巾に綴け、これに先きに縫つてある顔布のロの方をあて、表に針の出ないやうに(ニ)の如く綴けつけます。するとこれが、出來上り圖の如く帽子の緣になるのであります。

顔が出來ましたら、絣縮緬の一方の隅へ(ホ)のやうに角から二糎五粍入つたところへ當て、綴けつけ、それから裏を出して二方を縫つて返し、小豆と鈴を入れ、口を綴けつけることは普通のお手玉と同じであります。

四隅につける小さな玉は顔布、帽子布を取つた殘りの布から、猶一糎五粍位の丸い布を四ツ取つて、この周りを細く縫ひ、中に綿を丸めて入れて糸を引きしめ、口をかゞつたものを出來上り圖の如くつけ、サンタークロースのおぢいさんのやうな髭の生えたやさしい顔を畫きます。

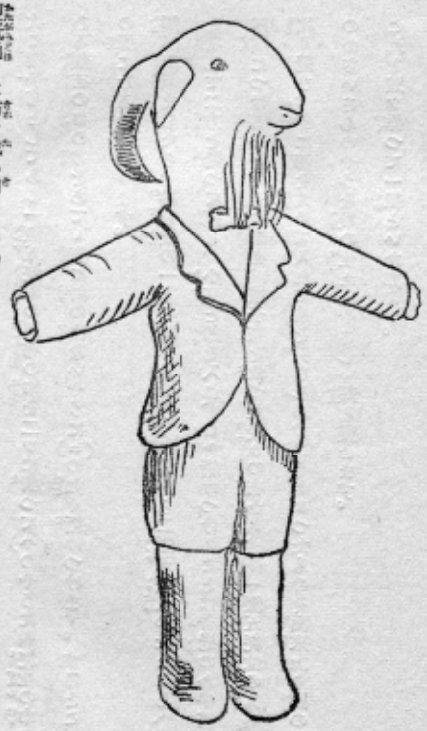
これを五ツ作つて一組といたします。

羊人形

材料　洋服用布、黒ビロード巾七十二糎丈十八糎、羊用布、白フアライヤア又は白ネル巾六十一糎丈二十六糎

ネクタイ用布、黒褐子巾三糎丈八糎、眼球用茶色羽二重一糎二粍角二枚、綿一枚、刺箸三本、白毛糸少々。

以上のうち白フアライヤアと云ふ布は裏がメリヤス織になつて居り、表に毛の出て居るもので洋服の生地店に賣つて居りますが、若しない場合には白ネルを用ひます。



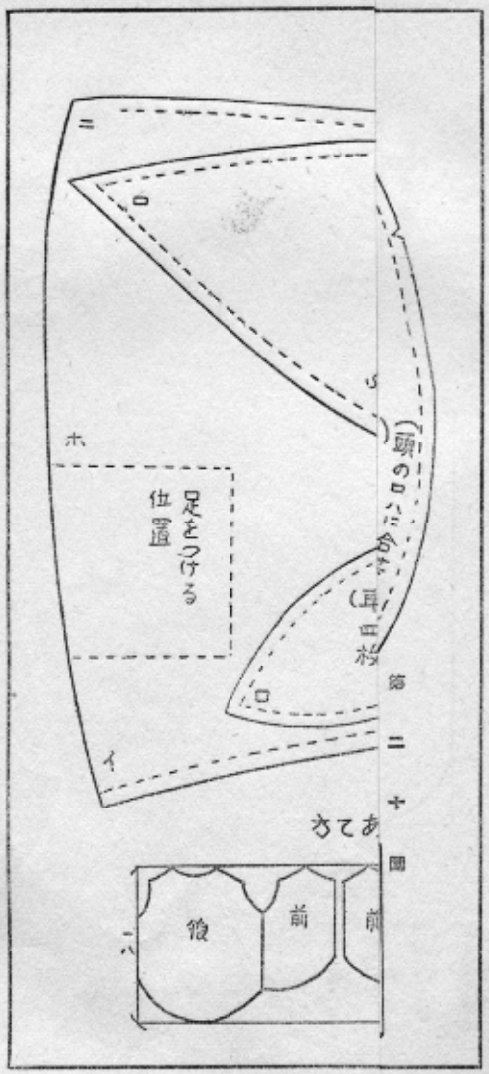
第十九圖　出來上り圖

出來上りは第十九圖のやうに誠に可愛らしいものであります。

用布の裁ち方

最初卷末第二十圖のやうに型紙を全部裁つてそれを羊の型紙のあて方圖のやうな位置に羊用布に當てゝ型紙通りに布を裁ち切ります。

次に第二十一圖に示す寸法通りに洋服型紙を作り、それを第二十圖洋服の型紙あて方圖のやうに、洋服用布に當

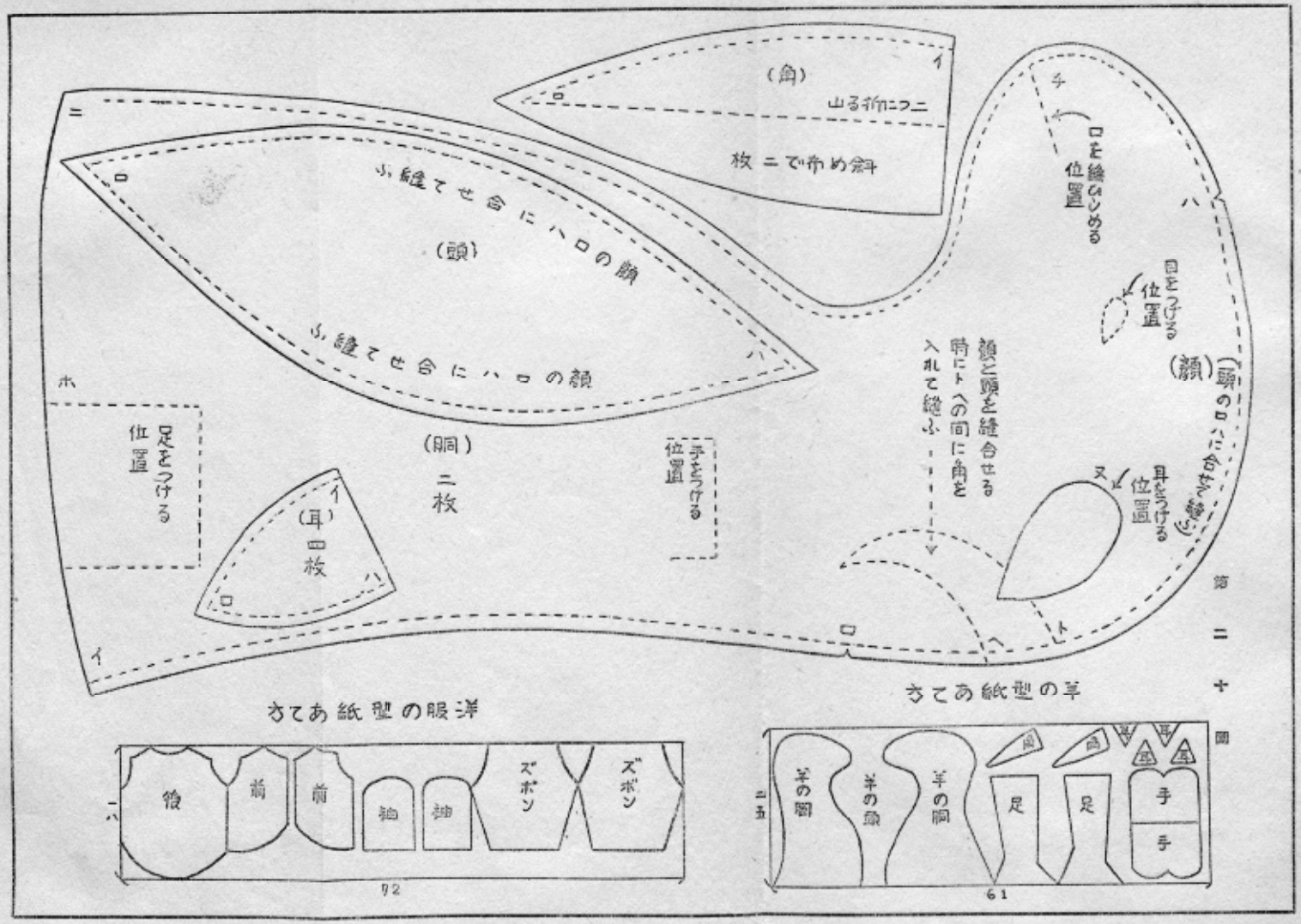


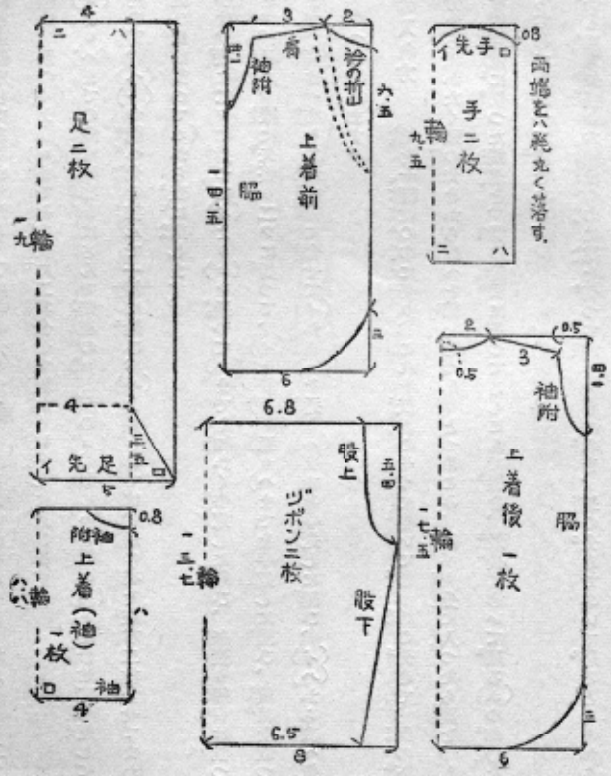
第二十圖

型紙通りに布を裁ち切ります。

次に第二十一圖に示す寸法通りに洋服型紙を作り、それを第二十圖洋服の型紙あて方圖のやうに、洋服用布に當

置に羊用布に當て





第二十一圖

てゝ型紙通りに裁切ます。

縫ひ方 先づ羊から縫ひはじめます。角は裏側を出した儘、縦に二ツに折つて第二十圖(イ)から(ロ)までをこまかく縫ひ、その儘、糸を適宜に引きしめて縮めますと

絆布を使用してありますから、丁度羊の角のやうな、ほどよい形になりますからそれを二ツ作ります。

顔は、胴のイよりロまでを中表に二枚合せて細かく返半しに縫ひます。

ロよりハまでの間は頭布をはさんで頭布のロと顔のロ、頭のハと顔のハとを合せて半返しに縫ひます。その時、ヘトの間へ角を挟んで一緒に縫ひ、ハよりニまでは、顔の布を左右二枚合せてまわりを半返しに縫ひ、縫ひ目は割つてホから表に返します。

手は、縦に二ツに折つてイよりロを通つてハまでを細かく半返しに縫ひ、矢張り縫目は割つてハニから表に返します。足は、縦に矢張り二ツに折つて、イよりロを通りハまでを半返しに縫ひ、縫目を割つてハニから表へ返します。耳は、布を二枚中表に合せてイからロを通りハまでを半返しに縫ひ、イハから表へ返して、同じものを二ツ作つて置きます。

綿の入れ方　綿を十糎位の巾に切り、これを紙捻のやうに巻いて箸か棒の先きで、胴の下部の第二十圖(ホの部分から、かたく頭の先きから胴へと綿をしつかりとつめこみ、綿が充分に入つたら胴を、しつかりさせる爲に、十四糎位に切つた割箸を、背の縫目にそつてさしこんで置き、最後にあいて居るホの部分を枕の底のやうに縫ひちぢめてしばつて置きます。

手も足も矢張り六糎位の巾に綿を切つて前のやうに巻き、箸の先きであいて居るところから入れます。そして足の先きまでよく押し込んで、箸を足の芯にします。

耳、目、鼻、手、足のつけ方　手は第二十圖型紙の手の位置に手をしつかりと下向きに左右とじつけます。足は縫目のある爪先きの方が、前になるやうにして背中へ二本ならべて、動かないやうに、芯の箸と一緒にとぢつけます。

耳は巻末第二十圖型紙の耳の位置にイハの部分を少しちぢませ加減に、糸の目立たないやうに後へ向けて、第二十二圖の如くまつりつけます。

目は茶の繻子又は羽二重を一糎二粍丸に切つて、まわりを縫ひちぢめ、綿を小さく丸めて入れて糸を引きしめ、小さな目玉を作り第二十圖の目の位置に両方へつけます。

口は白の絹糸を二本にして、第二十圖のロの位置に二糎位の深さで糸を渡し、かたくひきしめて糸をとめます。

鼻は、毛糸を十四糎位の長さに切つて、第二十二圖の鼻の位置に一針すくつては下げ一針すくつては下げて縫ひつけ、最後にそれを針の先きでほぐしてよりを戻し、毛のやうに見せます。

第二十二圖

洋服の縫ひ方　袖布を縦に二ツに折つて袖下（第二十一圖袖のハの部）を筒のやうに縫ひ、袖口を穴位裏側の方へ折り込んで、小さくかくし縫を入れて置きます。

次に前の肩と後の肩を合せてこまかく縫ひ、縫ひ目は割つて脇を縫ひ合せ、裾を六糎位の深さで裏側へ折り、前の裾から七糎五粍位上つたところまで襞を小さく入れて置きます。

前裾から七糎五粍上つたところに切り込を入れ、衿肩明からこの切り込みのところまで斜めに裏側の方へ折り、今度はそれを反對に六粍位の深さで表側の方へ返しますと、衿の形になりますから裏側から針が目立たないやうにとぢて置きます。

袖は身頃の袖附と縫ひ合せて、縫ひ目は割つて置きます。

ズボンは前後の股上を各々縫ひ合せて縫ひ目を割り、股下を右から左へ縫つてズボンの型をつくります。ズボンの上と裾口は六粍位裏側へ折り込んで、小さくかくし襞を入れて置きます。

これでズボンも上着も出來ましたから、ズボンから先きにはかせ、ズボンの上をお腹の廻りへ糸でとぢつけます。それから上着を着せて前を合せ、衿の終りを一寸二針ばかり突き合せにとぢて置きます。

最後に、巾三糎丈十二糎の黒羽子のきれで、蝶形のネクタイを作り胸にとぢつけて出來上りといたします。

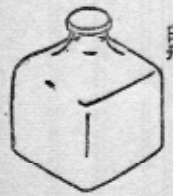
八、壜細工編

壜細工に就いて

壜細工は、ガラス壜の中に、摘み細工、造花、人形、盆栽、其の他いろ〳〵の細工ものなどを入れる手藝でありまして、床脇や書棚の上などの部屋飾りといたします。

丸形

楕円形


白形

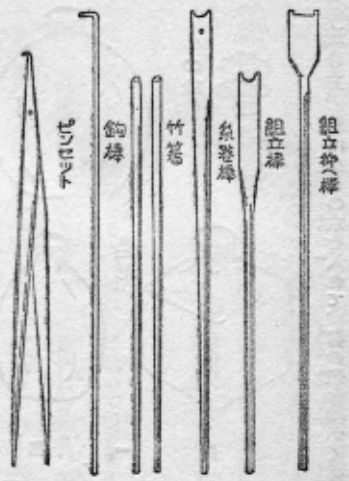
口栓

第一圖

壜の種類　壜には第一圖のやうに、丸いもの、楕圓形のもの、角形などの大小種々の大きさがありまして口は比較的大き目であります。

用具　第二圖の如く、鉤のついたピンセット、先の曲つた細い鐵棒、竹製の箸、同じく竹製の圖のやうな形をした組立棒と組立抑へ棒などで、何れも三十糎から三十五糎位の長さのものであります。

壜の洗ひ方　壜に少しの水を入れて、卵の殻を細かく碎いて中に入れ、よく振つて洗ひます。外も殻でこすつて



第二圖

から、よく濯ぎ、水氣のきれるまで逆さにして乾します。

乾かない中に布巾などで拭くと曇つて汚なくなりますから、自然に乾かします。卵の殼のない時は、細かくちぎつた新聞紙又は鹽などを入れて洗ひます。

糸巻

材料　小壜一ケ、口栓一ケ、朴の木製糸巻四ケ、白絹糸、赤絹糸四瓦、生半紙三糎半四角八枚、糯少々、木綿糸少々、ビーズ五十粒、光玉十個位、絹打紐　赤一米二本、白一米一本、細針金(二十二、三番位)三米。

用具　壜細工用具一揃、針、鋏。

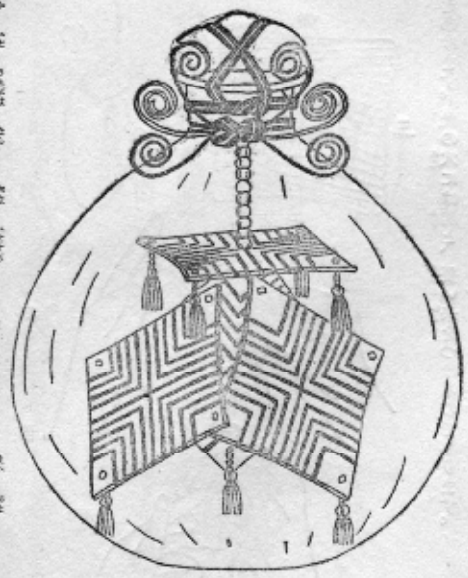
以下用具はいつも同じものを使用いたします。

作り方　糸巻は無地がよろしいですが、模様があるのでしたら模様のある方を裏にして、その裏の方に木の目に添つて、中央に長さ三糎位の線を引き、その通りにナイフで深さ糸巻の厚さの半分位の切り込みを入れて、生半紙を貼ります。表の方へも裏と同位置に生半紙を貼りつけます。

次に糸を巻くのですが、假りに糸巻の四方に一、二、三、四、と標をつけて説明いたします。先づ赤糸の端を輪に結んで第四圖(イ)のやうに糸を結び、(ロ)のやうに糸巻の一の標の方へ糸巻の端一糎位の處から結びつけて、七筋か八筋位平らに並べて巻きつけます。

次は(ハ)のやうに糸巻を持ちかへて、糸を三四回撚つて、糸の方向を變へ、(ニ)のやうに二の標の方へしつかりまきます。そして三から四へと、一と同じ糸筋だけ巻きます。

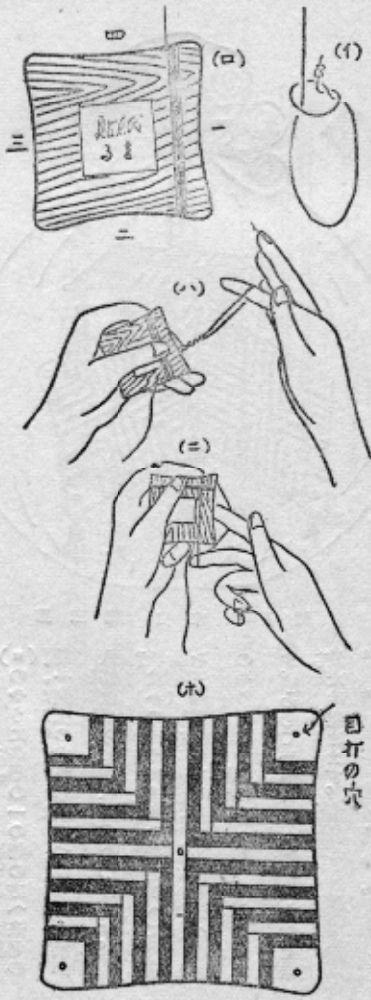
巻き終りましたら、白糸に繼ぎかへて赤の糸の内側へ並べて同じ糸筋だけ、又一から四まで前と同じやうに巻きます。かうして赤白と何回も繰り返して(ホ)のやうに全部糸巻がかくれるまで巻けましたら裏でしつかり解けないやうにとめます。



第三圖　出來上り圖

但し最後の糸は、糸巻の縁で終つてゐるやうにいたします。

かうして四枚とも同じやうに巻きましたら、糸巻の角から五粍入つたところへ、四隅とも目打で静かに小さい穴

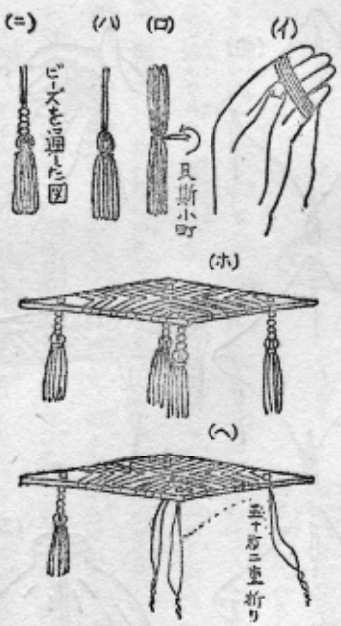


第四圖

をあけます。此の穴には房と、長い糸をつけるのであります。

房の作り方及び附け方　四本の指を並べて第五圖(イ)のやうに十回位赤糸をまきましたらはづして、中央を瓦斯小町（十五瓦位）で結びます。更に兩端を一緒に揃へて、中央を結んだ糸から二三粍下つたところを(ハ)のやうに赤絹糸で結びます。そして下を揃へて切つておきます。之と同じ房を七ツ作つて(ニ)の如く中央を結んだ瓦斯小町に、四粒位ビーズを通します。

次は此の房を糸巻につけるのであります。ビーズを通した糸を二本一緒に糸巻の角の穴に裏から通して、表側で一本だけにビーズ一ツを通して、二本でよく結んでおきます。かうして一枚だけはホの如く四方に房をつけますが、他の三枚には、一角にだけ房をつけて、(ヘ)の如く三方には、瓦斯小町（五十瓦）の中央に二ツビーズを通して、二重にして揃つた糸を表から穴に通します

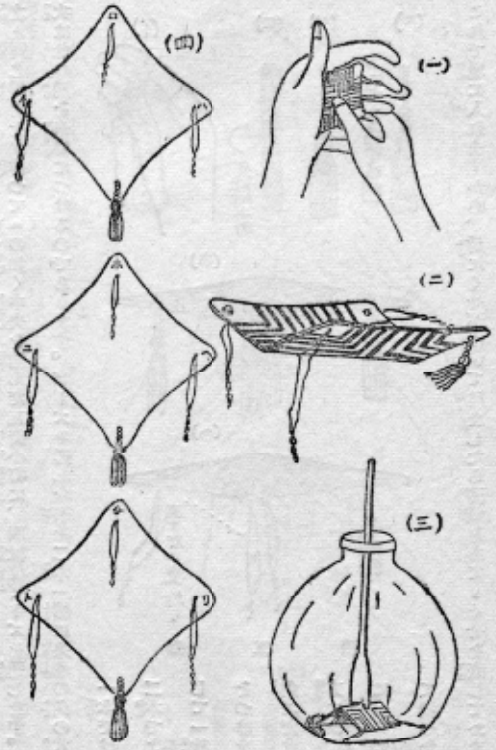


第五圖

これで堤に入れますから、房にくせがついて居ましたら湯氣をあてゝくせを直しておきます。

堤に入れ方　糸巻を第六圖のやうに表を上に、木目を縦にして左掌にのせて、(一)の如く右手の掃指で中央をおさへますと、最初に切目を入れておいたところが割れて(二)のやうになります。割れ目に糸が入りますから、入ら

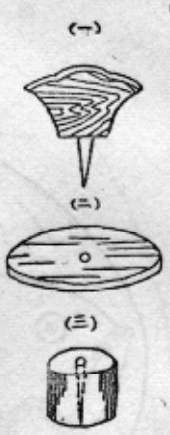
ないやうに縦に巻いた糸を兩方によせておきます。壜の口に入る程度に折つて入れ、裏を上にむけて抑へ棒で(三)の如く上からおさへますと、糸巻が前のやうに平らになります。かうして三方に糸をつけた三枚を先に入れます。



第六圖

わかりよいやうに、この三枚に假りに(四)のやうに、(イ)、(ロ)、(ハ)、(ニ)、と印をつけておきます。

先づ最初に(イ)と(ヘ)の糸を、ピンセツト又は鈎棒で壜の口元へ引き上げて、結び合せます。この時二枚をかたく結びつけないで、少し糸をゆるくしておきます。次は(ハ)と(ト)、(ヱ)と(リ)の順に結びますと三ツが結びつきます。次は(ロ)、(ホ)、(チ)を結びます。次に、一枚殘しておいた糸巻を折つて、中央に穴をあけてそれに壜の中の(ロ)、(チ)を結んだ糸を通して壜に入れ糸巻を平にします。そしてこの糸に光玉を通して出來上り圖のやうに口栓に通して吊します。

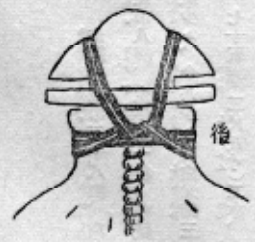


第七圖

口栓は第七圖のやうに三ツにはなれておりますから、(三)の眞中に穴のあいてゐるのを穴を大きくしておいてそれに光玉を通した糸を通し、次は(二)の穴に通し、糸を二ツにわけて、その間に細い針金の一糎位のものを入れて何度も結んで糸を一糎位長くして切つておきます。そして(一)を上から、(二)、(三)の穴にさし込みます。

紐の結び方

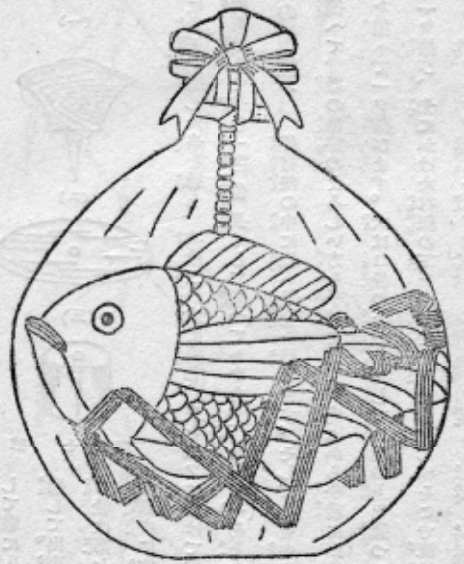
絹打紐の中に細い針金を通します。そして白を中にして三本揃へて、壜の格好のよろしい方を手前にして、向ふから手前にかけて、兩端を揃へて一ツ結びます。次は口栓の上で交叉して口栓の上を通つて、向ふで一ツ結び、先にかけた打紐の下を通つて手前にもどし、そこで眞結びにしつかり結びます。先は一本づゝ格好よく開いて、端から上向に渦巻形にきれいに巻いて、根本から四・五糎のところでとめておきます。(結び方の正面は出來上り圖を、後側は第八圖を參照)兩方とも同じやうにして出來上りと致します。



第八圖

この打紐は三本、五本、七本といふ數で、適當に用ひます。

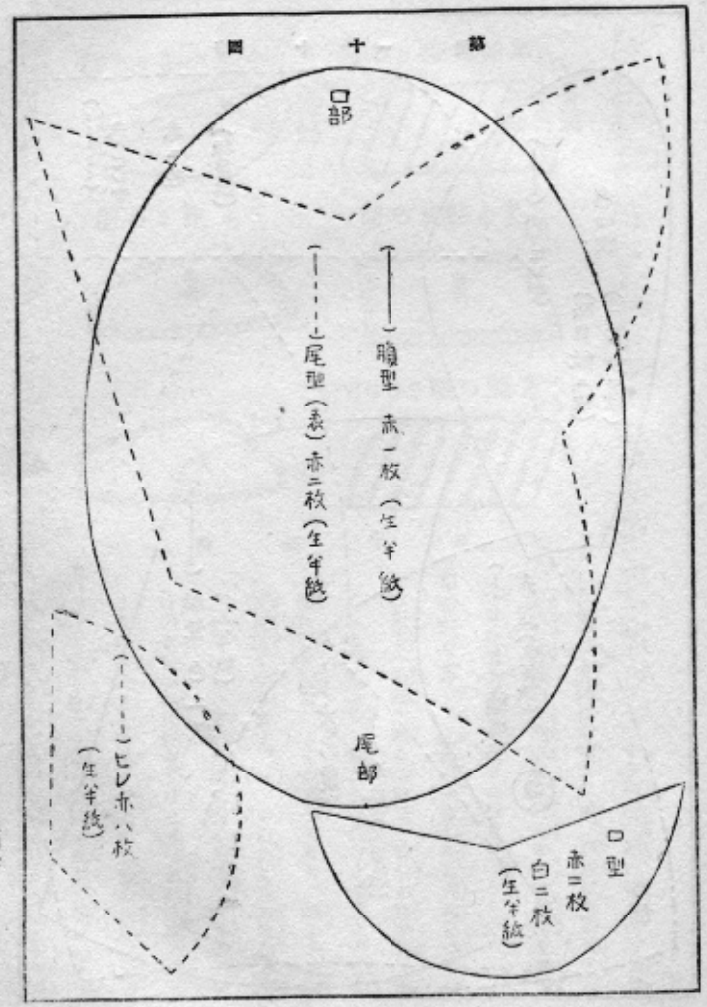
金魚



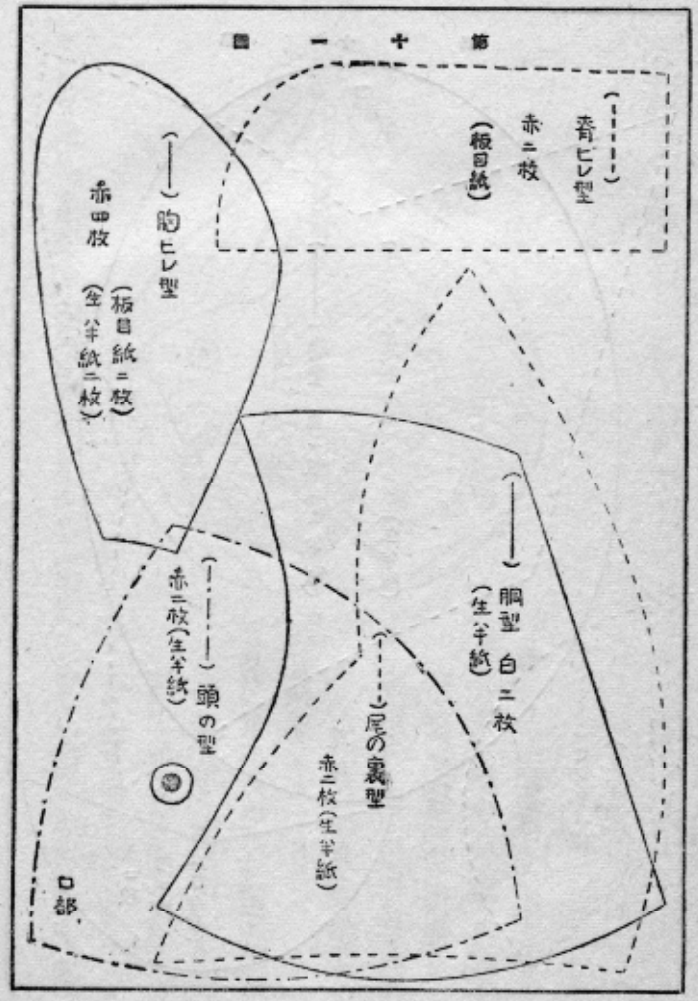
第九圖　出來上り圖

材料　赤縮緬並巾三十八糎、白ちりめん並巾八糎、生半紙一枚、芯紙少々、板目紙少々、金糸少々、白元結三本、銀水引七十五糎(二尺五寸)二本、大壜一ケ、口栓、光玉十四五粒、綿少々、木綿糸。

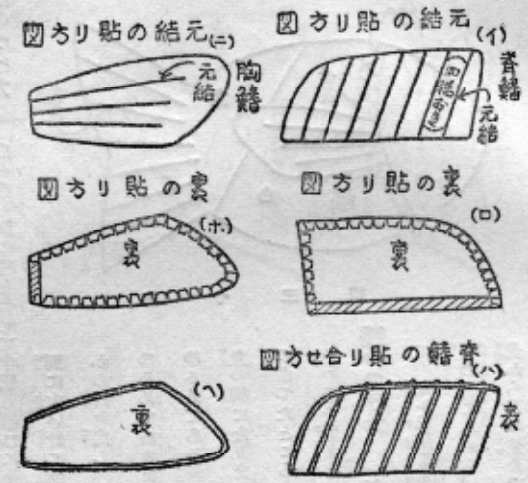
型の取り方　型を生半紙又は板目紙で第十圖、第十一圖の型中にある說明通りに、布に貼りつけます。腹の型だけが一枚で、他は二枚づゝになつて居ますから、向ひ合せにとつて、同じ向のを二枚とらないやうに注意いたします。生半紙でとつたのだけは、型通



第十圖



り切りとりますが、板目紙でとつた脊鰭、胸鰭は布に貼る前に第十二圖（イ）及び（ニ）のやうに、元結に糊をつけてはります。脊鰭は四耗おきに、胸鰭は圖の如く、附根の方は四耗間隔に、鰭先の方は鰭巾を四等分するやうに三本はりつけます。

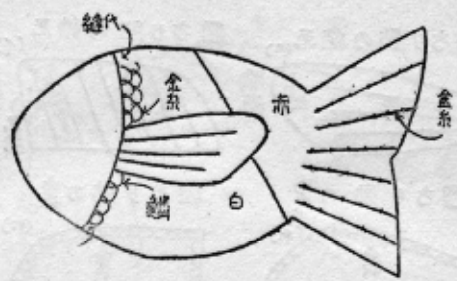


第十二圖

布の貼り方　之が出來ましたら元結をはりつけた方へ全體に糊をつけて、餘分の糊を指でしごきとつて（布に糊がしみ出ないやうに）赤紙に貼り付け、よくおさへておき、型より周圍五耗廣く切ります。（ロ）、（ホ）の如く三方に切り込みを入れて、脊鰭は胴に付く方即ち、下の方だけのこして他は貼りつけます。これと向き合ふやうに今一枚を貼り、この二枚の内側に糊をつけて貼り合せます。胸鰭も同じく胴につく方だけ殘してはりつけて、生半紙でとつた同じ型（周圍四耗切りとつて小さくしたもの）を裏に貼りつけます。即

に忠紙で尾の裏の型を周圍縫代だけ小さく切つておきます。以上で型の取り方は終りました。

鰯のつけ方　白と赤の胴の標を合せて半返し縫ひに接ぎます。

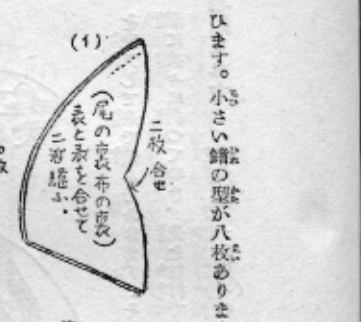


第十三圖

別に太い針に金糸をつけて、上下標とも縫代だけのこして、白の胴の裏から針を出し、八粍位おいて二粍すくひます。この時表に出る糸を少しゆるめておきます。一段が終りましたら、二段目は八粍の中央で、少しゆるめてある糸を押へるやうにして、二粍すくつてゆきます。これが金魚の鱗になります。これを幾回も繰り返して、第十三圖のやうに尾の型の曲つたところまでいたします。尾の先は金糸を圖のやうに減して、黄色の糸で金糸をとめておきます。二枚とも同樣にいたします。

鰭のつけ方　次は胸鰭を第十三圖のやうな位置にあて、胴にとぢつけて、頭を矢張り半返しに縫ひつけて、縫目は頭の方へ折ります。その縫目のところから、背鰭をとお付けて、兩方の胴ではさんで背の方を頭の先から尾の先まで縫つて縫目は割つておきます。

尾の縫ひ方　第十四圖（イ）の如く裏型を二枚合せて、上の方を二粍位縫つて割り、尾の表に（ロ）のやうにあてゝ縫ひます。小さい鰭の型が八枚ありますから二枚づゝ合せて（ハ）のやうに一方だけ殘して縫ひ合せておき、兩胸鰭の下と胴と尾の接ぎ目のところへ、兩方とも附けておきます。



第十四圖

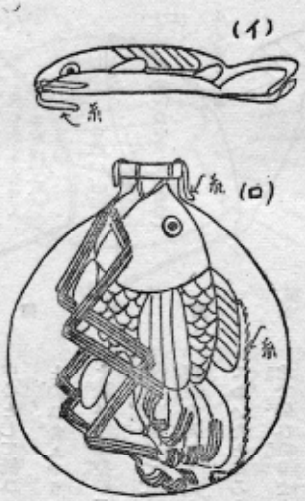
口の縫ひ方　口の型を赤白二枚づゝ合せて縫ひ、一つは頭の縫目を中心として縫ひつけて、唇の幅は七粍位にいたします。今一つは上唇と向ひ合ふやうにして腹の方に附けます。上下の唇を合せて胴と腹を縫ひ、尾型の二つ共縫ひ殘してあるところから表にかへします。先に忠紙でとつておきました尾の二型に金箔に糊をつけて、尾(イ)の方に型通り入れて貼りつけますと、尾がピンとなります。そして尾の明けておいたところを綴けます。

之で縫ひ終りましたから、次は目を作ります。

目の作り方　先づ半紙で直徑八粍位の圓を切り、糊をつけてその中央に、黒ビロードで直徑四粍位の圓を切つて貼りつけます。その周圍に金糸をぐる〳〵巻して貼りますと、丁度眼のやうになります。之を頭の目の位置に貼りつけます。

金魚　金魚は場の中に糸でつるしますから、木綿の赤糸を一糸位を二重にして、背鰭の中央から三糎程、前によった所につけて掛つておきます。

腹には、水にする水引を結びつける糸をつけますが、之は二重のまゝ錂らないでお腹の中央を縦に五粍位すくつただけにしておきます。口にも上唇下唇共真中に十糎位の糸をつけて輪にしておきます。

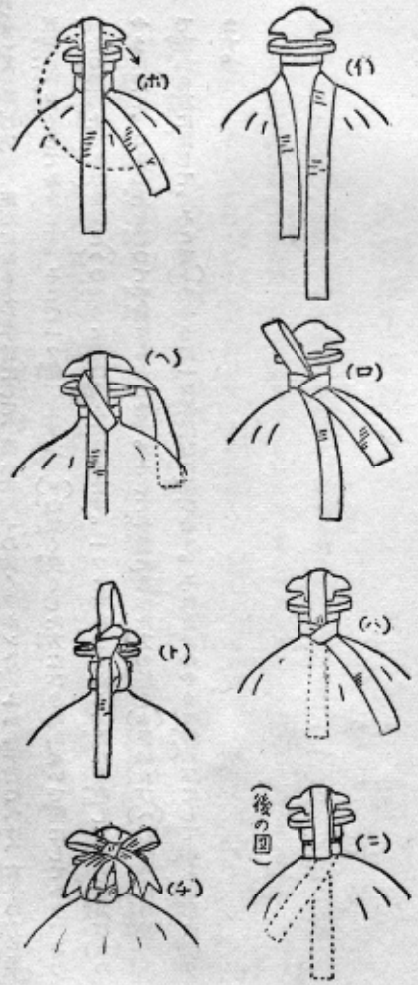


第十五圖

これで綿を入れるのでありますが、尾の方に綿が入らないやうにとぢておきます。この糸は後でピンセットで抜きとりますから尾端に結び玉を作らないでおきます。

水の作り方　銀の水引(七十五糎)二本に、真からべつたり糊をつけて五筋がバラ〳〵にならないやうに貼りつけて、乾いてから中央を交叉して糸で結んでおきます。そして八糎位のところで一ツ折り、又八糎位に折つて、それに合せて「く」の字形に次々に折つてゆき、先を目打で巻いておきます。

場に入れ方　金魚を第十五圖(イ)のやうに平たくたゝんで生半紙で包んで、場に錂ぢ込み紙をとります。次に折をつけた水引を入れて、交叉した所を腹につけてある糸で結びつけます。そして形をたゞしてから唇の糸を場の口に出し、口を開けて、左手で持ち、小さく丸めた綿をフンワリと入れます。このとき綿ぼこりを場の中に入れないやう注意することゝ綿を澤山押し込んであまり腹をふくらませないやうに氣をつけることが肝要です。頭や口の兩側に皺の出來ないやうにつめましたら、口に糊をつけて貼りつけます。これでどこから綿が入つたかわ



第十六圖

からないやうになりますから、尾をとぢた糸をとつて、水の形をなほし、脊鰭の糸に光玉を通して口栓を通して吊します。これから先は前の糸巻と同様にいたします。

リボンのかけ方　正面になる方を手前にして、第十六圖(イ)の如くリボンを向ふから手前にかけ、右手の方を十五糎位長くしておきます。そこで一ツ結びますが、(ロ)の如く長くした方はひきぬかないで輪にしておき、その輪を口栓の上にかけますと(ハ)のやうに端は向ふにゆきます。一ツよぢれますから、撚れを直してから(ニ)及び(ホ)のやうに更に、口栓の上を通つて手前にもどします。そして手前にあつた方の端を(ホ)點線及び(ヘ)のやうに口栓の上で左から右に出して、そこで(ト)のやうに一ツ縦結びに結びます。それを(チ)のやうに蝶結びにして端を山形に切ります。

九、人形細工編

人形細工に就て

近頃人形細工が街頭の裝飾、一般家庭内の置物等に、使用されるやうになりました。これは、只飾ると云ふことよりも、むしろ部屋や店頭の調和に、やわらかみを持たせるものでありまして、書棚の上などに置かれてある人形を見受けますと、その人の人格が偲ばれて、大變奥床しく、優しく思はれます。この優美な人形細工は、一寸の時間を利用して、又小さな小布を使つて自分の思ひのまゝのものを作ることが出來るのです。

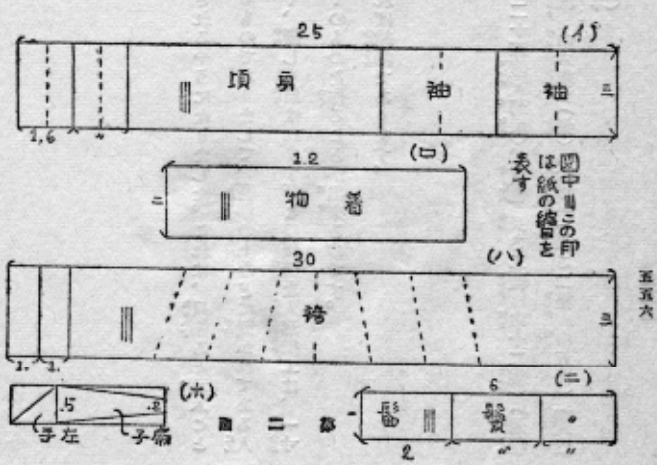
用具としては、糊、鋏、目打、ピンセット、針、糸等があれば結構であります。

玉子人形福助

材料　玉子一個、クレープペーパー、茶色(長さ三糎　巾二十五糎)(羽織)、黄色(長さ二糎　巾十二糎)(着物衿)オリーブ色(長さ二糎　巾十二糎)(袴)黒色(長さ一糎　巾六糎)(髪)板目紙(長さ二糎　巾五粍)臺(五糎角の板又はボール紙)(羽織の紐)(白リリーヤン長さ三糎)

作り方　この人形は、玉子を幅助の體と見なして、玉子の尖った形の細い方を組に、丸い方を足の方にします。そして出來上り寫眞のやうに、着付をします。玉子の中味の抜き方は、玉子の丸い方に錐で稍大きな穴をあけます。そして中味を取り出し、中をよく洗ひます。

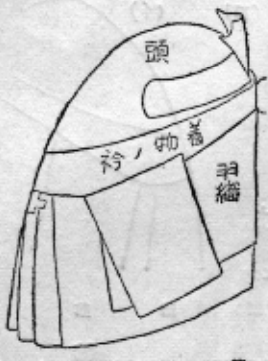
第一圖　出來上り圖



第二圖

着付　先づ着物から着せますが、羽織を着せますと着物の身頃は見えませんから、第二圖(ロ)のやうに黄色のクレープペーパー長さ二糎、巾十二糎の衿布を細長く折つて、第三圖の如く後は玉子の長さの四分の一位の所から、前は玉子の二分の一位の所へ下げて衿を合せるやうに貼り付けます。

袴の付け方　第二圖(ハ)のやうに端から一糎巾の紙布を二本取り、殘りの布の中央で適當に襞を作り、糊でとめて置きます。そして着物の衿の合せ目から一糎位下つた所の眞中へ、袴の襞を前にして貼り付けます。次に殘りの布を後にまわして袴の裾から玉子の下が見えない程度の長さにして貼り付けます。

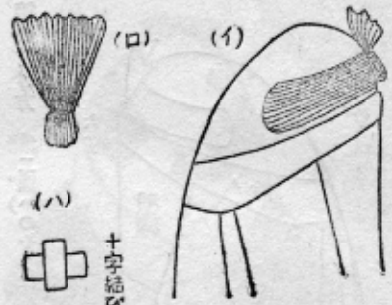


第三圖

羽織の着せ方　第三圖の如く、羽織の身頃から先に着せます。後は、着物の衿より六粍下げて、前は、着物が一糎位出るやうに糊で貼りながら着せます。次に羽織の衿布一糎六粍を二ツに折つて、羽織の前布の端に羽織の衿の形に貼り付けます。そして袖は五糎の袴布を二ツに折り、輪の方を袖口にして、左右袖の位置に貼り付けます。

髪の付け方　髷の形はチョン髷にし、頭の周圍三分の一は顔として殘し、後側三分の二を髪から髱とします。

長さ一糎、巾二糎の黒を第四圖(イ)のやうに兩鬢として貼り付け、後髷も(ロ)の形に糸でくゝり、後に貼り付けます。



第四圖

袴の紐及び羽織の紐付け方　これで、着物、袴、羽織の着付けが出來ましたから、先きに取つてある袴の紐布を縦に二ツに細く折り、第四圖(ハ)のやうに十字結びにして貼り付けます。次に、用意してある厚紙を、第二圖(ホ)の形に扇子を切つて右袖口に持つたやうに貼り付け、左袖口に手を出して置きます。

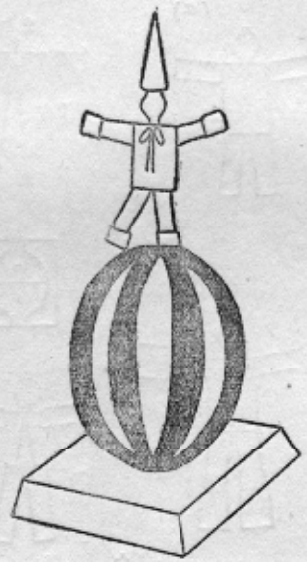
尚羽織の紋として白い紙を小さく丸く切り、後と兩袖の紋の位置に貼り付けます。

臺の付け方　玉子の下に紙を貼つて、その紙へ糊をつけ、臺に貼り附けて出來上りと致します。

玉子人形玉乘

材料　玉子一個、クレープペーパー、赤色長さ八粍、巾三十糎、赤色長さ八粍、巾八糎、赤色長さ三糎、巾二糎、綠色長さ二糎、巾六糎、茶色長さ一糎五粍、巾二糎、リヽーヤン十糎、細い針金七糎五粍、板目紙一糎五粍角、臺　福助人形と同じ。

玉の作り方　玉子を前と同樣に中味を拔き、これを玉乘りの玉とします。第六圖のやうに赤のクレープ長さ八粍、巾三十糎を三ツに切り、毬をかゞるやうに縦に三まわり貼り付けます。



第五圖　出來上り圖

第六圖

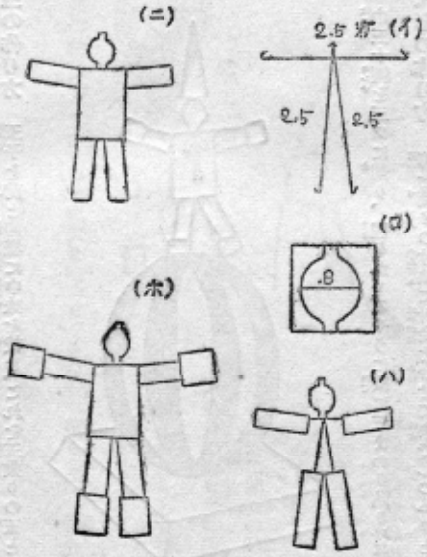
人形の作り方　第七圖(イ)の寸法に針金を合せて糸でしつかりとくゝり之を人形の身體と致します。

そして板目紙一糎五粍四方を(ロ)の形に顔を取り、針金の顔の部分にそれを貼り付けます。

次に、綠色のクレープペーパー巾六糎、長さ二糎のものを四ツに切り、縦に二ツに折つて兩袖と、兩ズボンに(ハ)

のやうに貼り付けます。

茶色のクレープペーパー長さ一糎五粍、巾二糎のものを二ツに折つて(ニ)のやうに、上着の形に貼り付けます。



第七圖

これでズボン、兩袖、上着と着せましたから、飾りとして兩袖口と、兩ズボンの下に、赤色のクレープペーパー巾八糎、長さ八粍を四ツに切り、その一ツづゝを二ツに折り(ホ)のやうにつけます。

帽子の付け方　赤色長さ三糎、巾二糎のクレープを、頭のまわりに貼り付けます。そして上部は細長くして糊で貼ります。

前飾りの付け方　リヽヤーンを蝶結びして咽喉の所に貼り付け長く下げて置きます。

これで人形が出來ましたから、右足の方に糊を付けて玉の上に立て、手足の恰好を、出來上り圖のやうになほします。

最後に輻助と同樣に臺につけます。

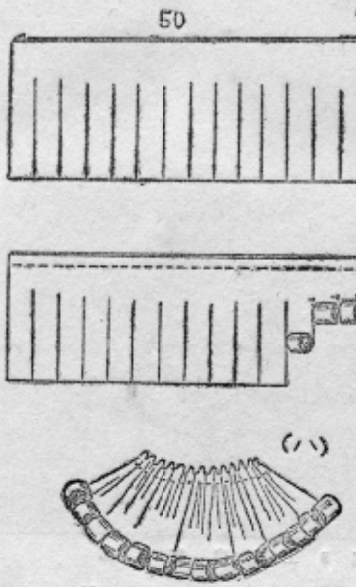
第八圖　出來上り圖

○クレープ人形

材料　キューピー一個、(丈十三糎―巾十七糎、)クレープペーパー、赤色長さ十三糎、巾五十糎二枚、赤色長さ十八糎、巾五十糎、黃色長さ十三糎、巾五十糎二枚、黃色長さ十八糎、巾五十糎、綠色長さ五糎、巾四十糎、綠色長さ六糎、巾三十糎。

着付　長さ十三糎、巾五十糎に切り赤、黃、のクレープペーパーを赤色を上に、黃色を下に重ねて二組こしらへます。

この二枚重ねたクレープペーパーを第九圖(イ)の如く縦に、長さの三分の二まで一糎ほどの巾に二組とも切込を入れます。そしてこれを端から、(ロ)のやうに目打でかたくまいてゆきます。かうして全部巻きましたならば、切目を入れない方を糸で縫ひます。そして糸をしめると、(ハ)のやうになりますから、この一ツをキューピーの胴の前から後にまわして兩端を後で合せ糸をしめて、あまり上にならないやうに、締りと止めます。それから殘りの二ツを先に胴へ結び付けた上へ、もう一度重ねて前と同じやうに結び付けます。この時は前の一段目よりずつと上げて胸の所で結びます。つまり二段のスカートの形になります。



第九圖

二段とも出來ましたら、次に赤色、黄色の長さ十八糎、巾五十糎のものを、前と反對に、今度は黄色を上に赤を下に二枚重ねて切目を入れ、前と同樣に目打で巻いて縫ひちゞめます。そして前には巻いた方を下にしましたが今度は巻いた方を上にして、キューピーの背中にあて、兩方の糸をひきしめながら前にまわし、咽喉の所で結びます、これを頭の後で形よく丸くひろげますと、後スカートが上に舞ひ上つたやうな形りなります。

第十圖

髪飾り　次に長さ六糎、巾三十糎の綠のクレープペーパーを、第十圖(ロ)のやうに兩端を中央に向け、六糎ほど重ねてたゝみ、細長い帶のやうなものに致します。そしてこの眞中を縫ひちゞめますと、(ハ)のやうなものになります。これを咽喉の所にあてゝ、よだれ掛けのやうにして兩端の糸を後でしめます。

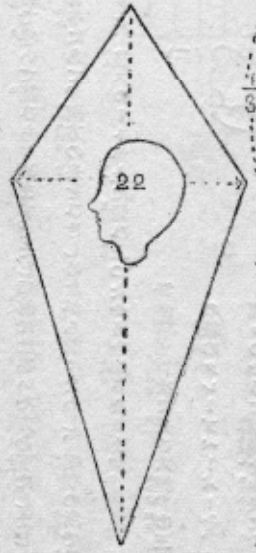
次に飾りとして綠色のクレープペーパー長さ五糎、巾四十糎のものを一糎おき位に少しづゝ短しますと、ちぢれの飾りが出來ますから螺結びにして、背中に糊で貼り付けます。そして(ニ)のやうに、端を三角に切落します。これで全部出來上りましたが、キューピーの髪が重くなつて、もし巻りが惡いやうでしたら足の裏に紙を貼り。

第十一圖　出來上り圖

更にそれをボール紙の臺に貼りますと、倒れないで立たせる事が出來ます。

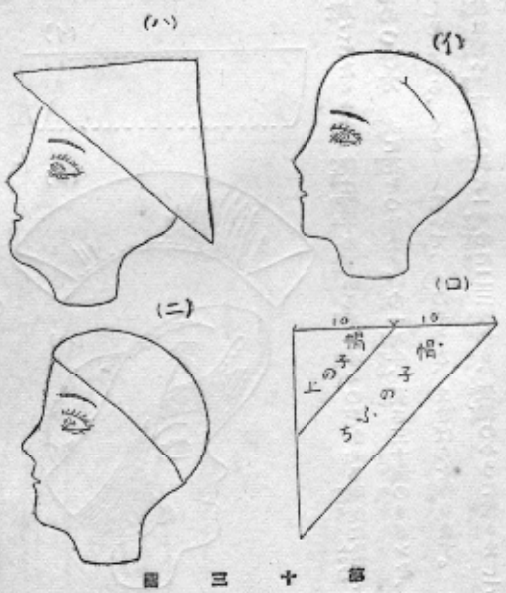
蠟面壁掛

材料　蠟面一個、ボール紙一枚、造花用雪紙一枚、黒摘み縮緬（又は人絹羽二重の黒布にてよろし）並巾三十糎、幅子布（人絹）三十糎角の二ツ切三角一枚、エンヂ色リボン、巾一吋半、長さ三十糎、バラの葉三枚、リリーヤン又は毛糸（髪）少々。



第十二圖

臺紙の作り方　ボール紙を第十二圖の如く縦五十糎とし、巾はその三分の一の所で二十二糎の菱形に裁ちます。黒布は糊代としてこのボール紙の臺よりも一廻五粍位大きく裁ちます。そして菱形に切つたボール紙の上に、綿を一枚通り置き、その上に黒布を被せてゆるみのないやうに布を充分張らせて裏にかへし、ボール紙の裏に糊をつけて貼ります。

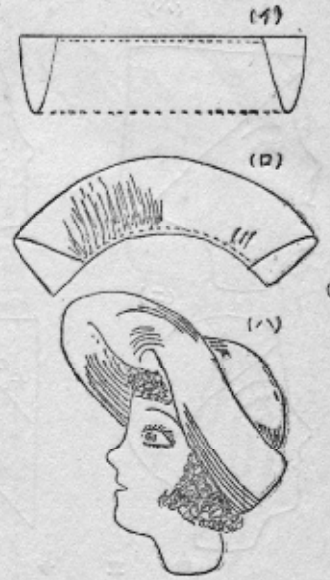


第十三圖

顔の付け方　纖面を臺紙の上に置き、上から三分の一位下つた中央の所で、第十二圖のやうに位置を定めます。面は蠟ですから、容易に針が通りますから、木綿糸を二本にして、面の上から下の臺に通し再び上の面にもどして、しつかりと第十三圖（イ）の如くとぢ付けます。

帽子のかぶせ方　次に帽子をかぶせます。第十三圖（ロ）の寸法の斜布を裁て頭の上部に、（ハ）のやうに被せ、殘りは頭の後に入れて同圖（ニ）のやうにします。

次にふちの布を第十四圖(イ)のやうに二ツに細長く折つて、裁目の方を、(ロ)の如く縫ひます。そして糸をひきしめながら、帽子の上部の布の下に、(ハ)のやうにツバの形にとぢ付けるか、又は表に出ないやうに糊で貼り付けます。

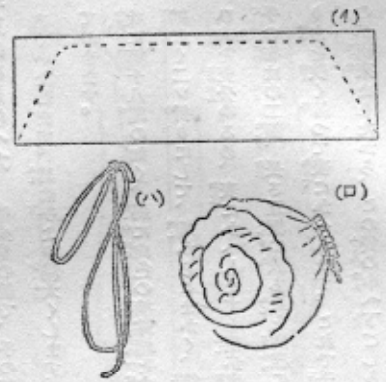


第十四圖

殘りの布はやはり面と、臺紙との間に入れてしまひます。

髪の毛の付け方　リリーヤン又は毛糸をほぐして手でよくもみちゞれさせたものを額の方と、後の方に頭髪らしくつけ、帽子からのぞかせます。額の方はあまり多くすると嫌な感じになります。後は帽子の下から毛を少々のぞかせる程度に恰好よく出しておきます。

花のつけ方　次に花をつけます。巾一吋半、長さ三十糎のリボンを、第十五圖(イ)のやうに端から縫つて糸をひきしめながら、くる〳〵巻いて、(ロ)のやうな、まきばらを作ります。枝は青い造花用の紙を一糎巾に二三枚切り、紙撚のやうに撚りまして(ハ)のやうに結び、葉は三枚そろへて第十一圖のやうな位置につけます。

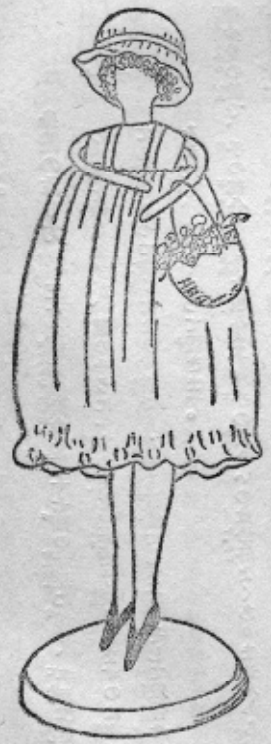


第十五圖

最後にリリーヤンかうち紐で、長さ三糎を二ツ折にして、臺の上端角のところに針目を表に出さぬやうに、裏に縫付けかたくとめておきます。そして臺の裏全體に別の紙で裏貼りをして出來上りと致します。

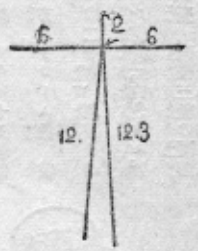
西洋人形花賣乙女

材料　二十三番の針金　長さ三十九糎、綿少々、髪の毛　茶色のリリーヤン又は毛糸少々、縮緬細、赤色巾十糎、長さ五糎、白色　十五糎四方、クリーム色　並巾二十糎、刺繍リボン、赤色、白色少々。臺　直徑三糎の圓形


第十六圖　出來上り圖

のもの。

身體の作り方　三十九糎丈の針金を第十七圖の寸法に切り、手及び足、頭の土臺を作りますが、圖のやうに一方の足を三粍だけ長くしますのは臺に立てる爲であつて表情により、右でも左でも任意にします。そして組合せた所をかたく、糸でくゝつて置きます。

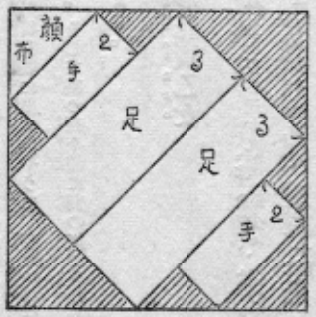


第十七圖

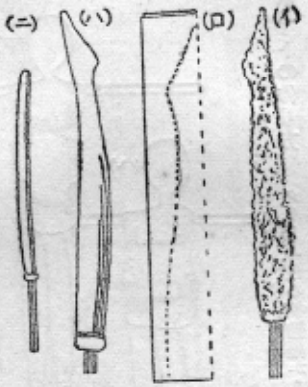
手足のこしらへ方　極少量の綿で、手の部分の針金を包みます。手の大きいのは恰好よくありませんから、小さくいたします。足は手より稍太くします。但し手足の先はとがらせておきます。

次に第十八圖の如く、斜に白色の摘縮緬を巾三糎、長さ九糎に裁ち、細長く二ツ折りにして、端からこまかく、第十九圖(ロ)のやうな形に縫ひ糸を充分ゆるめ、表にかへしますと足が出來ます。

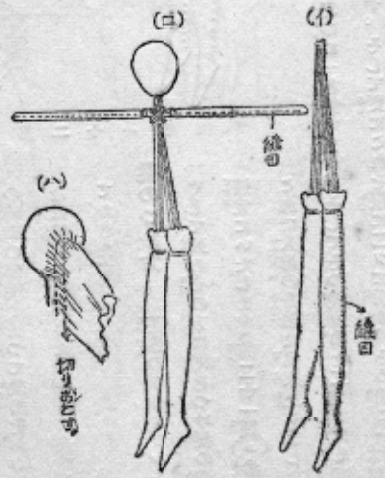
手の布は巾二糎、長さ五糎に裁ち足と同樣に、足よりもずつと出來上り巾を狹く縫つて表にかへします。これで手足にかぶせる袋狀のものが出來ましたから、この袋の中へ下ごしらへの出來て居る針金を通し足先も手先もよくとがらせて、軟かみを見せるやうにして置きます。そして袋の終りを取れないやうに四ツ共かたく糸で縫ひとめて置きます。それを第二十圖(イ)の如く、足の右左の縫目は後にし、手の左右の縫目は、(ロ)のやうに下にむけておきます。



第十八圖



第十九圖

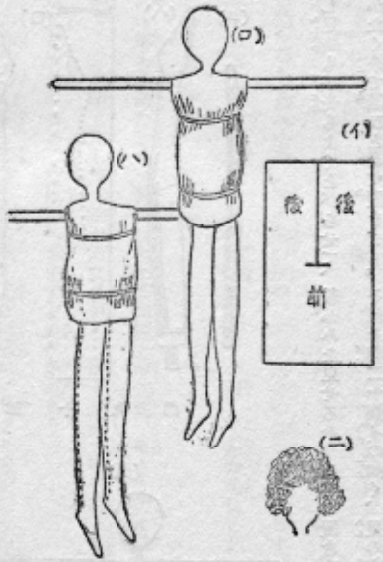


第二十圖

頭の作り方　頭の部分の針金に綿をかたく卷きつけます。そして、顔布の白摘縮緬の斜布でその上からおほひます。(この手足とか、顔のやうに丸味を持たせるところには斜布を使用すると恰好がとれやすいのであります。)顔

があまり長くならないやうに糸で縫ひながら形を整へて後で縫ひとめ、第二十圖(ハ)のやうにし、殘りの部分は切りおとします。

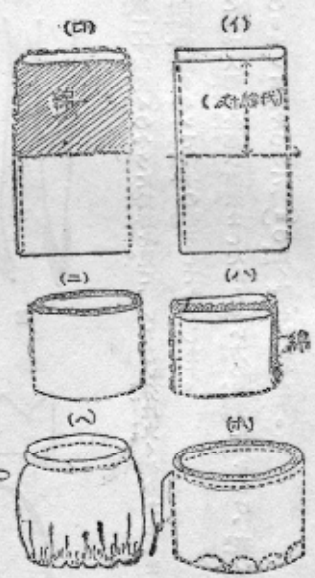
胴の作り方　胴の部分にも、釣合よく綿を卷きます。そして別布白色の摘緬緞で胸巾と、胴の長さの寸法に截ち、第二十一圖(イ)の如く後を截ち、前と後とを(ロ)の如く反對に着せます。その時布の兩端を折つて截目をかくし、なほ脇から綿がみえぬやうに糸でとめておきます。



第二十一圖

髮のつけ方　茶色のリーヤンをほぐして頭の布の方に糊をつけ髮の形は適宜にいたします(第二十一圖(ニ)參照)これで人形の身體は出來上りました。

スカートの作り方　クリーム色の摘緬緞から一綴二糎巾に一枚截ちます。そしてその殘り巾を二ツ折にして巾の兩端を縫ひ合せて、第二十二圖(イ)の如く輪に截します。そして更にこれを縫に二ツに折り、その間に一枚通り



第二十二圖

のしめ加減は胴の巾より三倍位のひろさに糸をひきしめます。

節に取つたクリーム色摘緬緞の一綴二糎を四圍の長さに二枚切り、これを巾三ツ折に致します。そして人形の前は帶の所から肩を越して後の帶の所に、左右平行に第二十三圖(イ)の如く縫ひつ

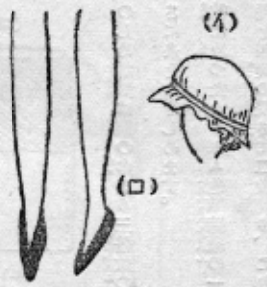
第二十三圖

綿を入れ、(ロ)(ハ)(ニ)參照)それを普通の縫代で(ホ)のやうに縫ひます。輪の方は(ヘ)の如く山の高い所は輪から一糎五糎位上つた所、下は輪まで通して波形に縫ひ糸をひきしめますと、(ヘ)の形となります。こ

けます。これはたすきのやうですが、スカートから殘いたものであります。

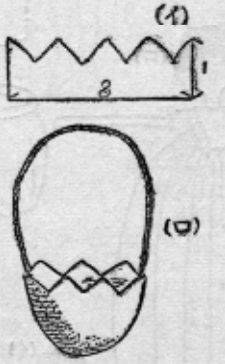
次に前に作つてある輪になつて居るスカートをはかせ、(ロ)のやうな形に縫目を中にしてしつかりと胴にくゝりつけます。これで洋服の着付が出來ましたから、白の刺繍リボンを長い蝶結びとし、後に結び目をみせて飾結とします。

第二十四圖



帽子の作り方　五糎角の赤色摘緬細を二ツ折にして二枚重ねたまゝ頭にかぶせて糸をしめ、まわりは縫になりますから第二十四圖(イ)のやうに恰好を見て、いらない分は丸く切りおとします。なほこの帽子の縫目の見えないやうに、白色刺繍リボンで帽子の帶をしてかくします。

第二十五圖



これで人形の全部が出來ましたから長い方の足先に糊をつけ、臺の眞中に穴をあけて立たせます。そして刺繍用のリボンに糊をつけて、(ロ)の如く靴をはかせます。

花籠の作り方　厚紙幅三糎、長さ一圍のものを第二十五圖(イ)の形に切り、(ロ)の如く丸くし、左右を糊で貼り付け適當に底を作ります。そして籠の手は、長さ五糎位の紙撚を輪にして籠の中に貼り付けます。中の花はクレープペーパーの赤色や綠色や黃色を小さく切り高く盛つて花の感じを見せます。

この花籠を出來上り圖のやうに適當に人形に持たせて出來上りと致します。

第二十六圖　出來上り圖

ビエロ

材料　針金二十三番（長さ三十九糎）綿（少々）髮の毛（リリーヤン又は毛糸少々）摘緬糊、黑色、黃色（長さ四糎、幅十八糎）白色（長さ十五糎、幅二十糎）綠色刺繍リボン（少々）臺（五糎四角又は丸形）

身體の作り方　針金の組合せ方、綿のまき方、髮の毛の付け方まで全部花賣乙女に同

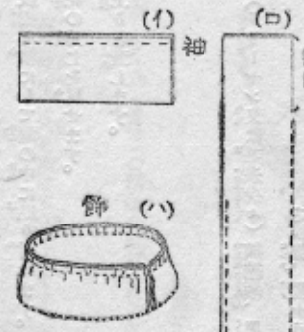
じですから説明を省き、こゝでは着物の着せ方だけに致します。

着　附　この着附は片身頃を黄色に、片身頃を黒に着せつけるのであります。

袖の作り方　黒色と黄色の縮緬で人形の手の長さを袖幅として布の幅四種が袖丈となりますから、第二十七圖のやうに裁ちます。

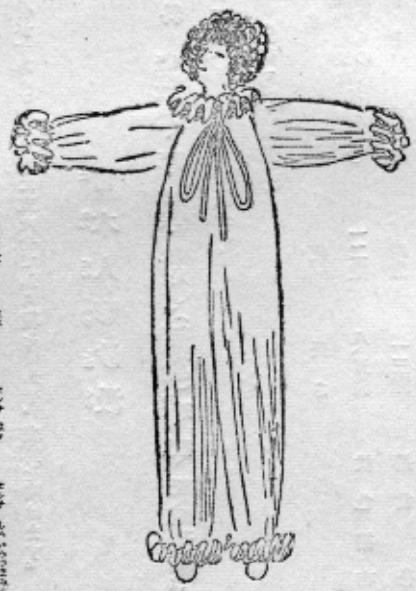
第二十七圖

両袖とも細長く二ツに折り、第二十八圖(イ)のやうに縫ひ、表にかへして、人形の両手に通しかたく袖付のところへ縫ひとめて置きます。(この時黒色と黄色は右でも左でも適宜に致します。



第二十八圖

身頃の作り方　身頃は頸から足首までを身丈として、幅は四種とします。これはズボンと續いたものでありまして、人形の身頃の半分になります。これを片身づゝ着せてゆきますから、黒い布の方も黄色い布の方も縦に長く二ツに折つて第二十八圖(ロ)の如く、上の輪の所袖附だけ二種位切込を入れておき、そして身丈の下から上へ、凡そ身頃の二分の一位上つた所まで、小針に縫ひ表にかへします。この半分縫ひました後の即ちズボンになります。これで身頃と両袖が出来ましたから人形の身體に着せます。袖は先きに手に通して、袖付の所でとめてありますが、この時左袖が黒色ならばやはり左身頃も黒色にして、足の方から通して上にひき上げ、頸の所で縫ひとめて置きます。前申したやうに片身頃づゝ變へますから左が黒色ならば右の方は袖も身頃も黄色になるわけであります。これで人形の身體へ半分は黒色で半分は黄色の着付が出来ました。



第二十九圖　出來上り圖

袖飾り、首飾り　両手両足の飾りは長さ十五種、幅二十種の白色縮緬の長さを五ツに割り(長さ三種、幅二十種のもの五枚)、それを細長く二ツに折り、殺目の方を縫ひ合せて、第二十八圖(ハ)のやうに縫ひ、首と手足の飾

りにいたします。

衿衿飾りとして刺繍リボンを適當の長さに蝶結びにして、第二十九圖の如く首飾りの下につけて長く下げます。

着付がすみましたら臺に立たせてから髪をはかせ、表情を附けます。

日本人形汐汲

材料　人形の縮緬、胴、兩手、兩足等、（既製品）冠、櫛、臺（長さ七糎、幅五糎）生半紙一枚、針金十八番線（長さ二十糎）着物の布、厚紙少々。

着物の裁切寸法（縮緬）

名稱	長さ	名稱	幅	長さ
赤無地又は模様もの	一二糎	八、五糎	桃色裾布（裏）	一二糎	九糎
同袖布（二）	四糎	一三糎	適當帶	四、五糎	一三糎
同肩布	四糎	七糎	赤地模様帶	三糎	九糎
同衿布	一、五糎	九糎	赤地模様帶	二糎	五、五糎
桃色振布（二）	二糎	一一糎	赤色長襦袢	三糎	
黄色下衿	二糎	九糎	赤色下衿	二、五糎	九糎
狩絹縁（色繻絹）					
袖布（二）	四、五糎	一三糎	身頃	五糎	一二糎
衿布	一、五糎	一二糎			

第三十圖　出来上りの圖

身體の作り方　人形の縮緬、胴及び手足は既製品で、別々になつて居りますから初めに身體の組合せからします。先づ、針金二十糎、四糎、六糎のもの一本づゝと五糎二本とを切ます。そして、それ〴〵へ幅一糎の生半紙を、紙撚をするやうに巻きつけます。四糎の針金は頭に、六糎のものは手に、五糎のものは足に用ひます。既製品の手、足、首には穴があいて居りますから、

容易に針金を入れる事が出来ますから、先づ五糎の針金二本を左右の足の穴にさして置きます。

胴の作り方　胴は、長さ四糎にまはり、五糎位の圓筒形のものでありまして、これは針金を芯にして綿をかたく巻くか、又は藁をしつかりと結へて作ります。こゝでは第三十一圖のやうに藁の胴を用ひます。尚、顏、及び手足の既製品のない場合は、西洋人形と同樣に顏や手足を作つて組合せます。髪は黑の絹糸を糊でつけ、「おかつぱ」人形のやうな頭に致します。

次に六糎の手になる針金を胴の上部に高い方を前にして横に通し、針金の剛先を手の穴に通して、手から手までの長さを九糎にいたします。前に針金をさして置いた兩足を、藁の胴へ前後左右を間違へぬやうに通します。

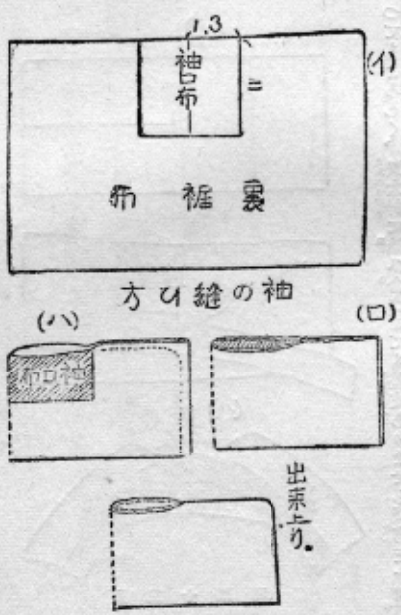
顏も手足と同樣に、四糎の針金を用ひて胴に通します。そして人形の背丈を十一糎に致します。

第三十一圖

紙のまき方　寸法が定まりましたら、一糎幅の生半紙に糊をつけ、手足がとれないやうに、手及足から胴にかけて、まいて貼り付けます。これで身體の組合せが出來ました。

縫ふ前に綠色の薄絹を除いて殘りのものは全部生半紙で裏打をいたします。全部の布の幅と長さと同寸に生半紙を取り、生半紙に糊をして布に貼り、おしをかけて置きます。

袖の縫ひ方　袖口布を身頃の褞袍しの中央上部は第三十二圖(イ)の如く、全部使はないで幅一糎三粍、長さ二糎のもの二枚を切り取つて、袖口布といたします。



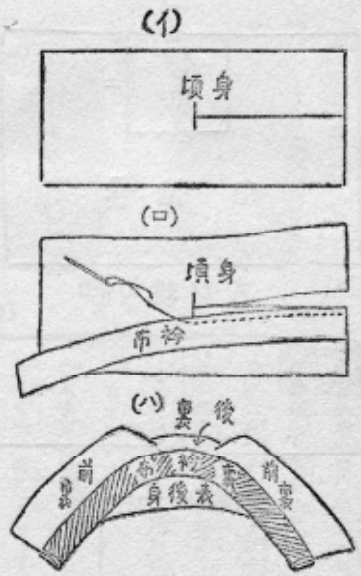
第三十二圖

表袖と袖口布を合せ、袖口布の方を釣らせて口明を縫ひ合せ、縫代に糊をつけて袖口布の裏に貼り、これを表にかへします。そして袖口にとめをして、袖口下から袖下を縫ひ、袖口布の奥は貼りつけておきます。振り布は後でつけます。この縫ひ方は普通の着物と少しも變りません。

身頃の縫ひ方　普通の着物と違つて、すべて小さい日本人形の着物は胴から上と、胴から下とを別々に縫つて着せますと、恰好よく着せられますから先づ身頃肩から裾までの布巾四糎、長さ七糎を縱に二ツに折り、第三十

三圖(イ)の如く、一ツ身の着物のやうに衿肩明を六糎切ります。そして前身を裁ち、次に(ロ)のやうに衿をやはり普通の着物のやうにつけて、巾七糎位にして、折り代は裏に貼り付けて置きます。

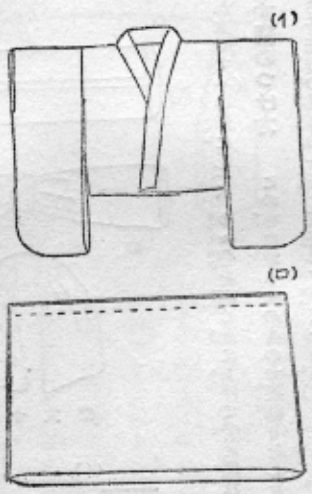
袖山と肩山とを合せて、一糎位の袖付けで腋縫は帯の下になりますから縫はないで置きます。



第三十三圖

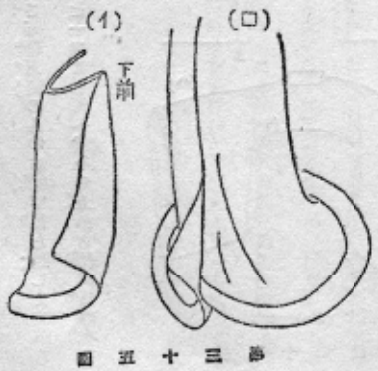
これで第三十四圖(イ)に示すやうな身頃の帯から上が出來ましたから、次に帯から下、つまり裾布を、表と裏をやはり普通の着物と同樣にして裾を合せます。そして兩褄の恰好をこしらへ、裏は裏布の方で先きにとつてありますから、凡そ五糎位になります。次に脛褄を縫ひ表にかへし上部裁ち目の方は、表と裏を糊で貼つてもよろしく、又大針に縫ひ合はせても差支ありません。(第三十四圖(ロ)參照)

着付け　人形の首のまわりに、厚紙で、着物の衿よりも少し狹く細長いものを作り、衿を合はせるやうに貼つて置きます。そしてその上に赤色と、黃色の襦袢の衿だけを着せますと、その厚紙が衿の藝となつて恰好よく着せられます。新樣に下衿がつきましたら、身頃の上半身を着せ、次に長襦袢の布、巾三糎、長さ三糎のものを、兩足の前方の下つまり着物の裾から見えるやうに糊で貼りつけます。そして、その上に裾布を着せて第三十五圖(ロ)の如く裾が長く引くやうに、前で合はせます。次に巾二糎長さ十一糎の振布を細長く二ツ折にし、更に長さを二ツ折りにして、袖の中に入れて少しのぞかせ長襦袢の袖のやうに見せておきます。



第三十四圖

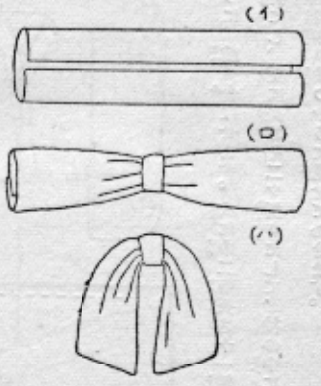
帯のつけ方　帯は普通の帯と違つて、前から見える部分と、後の結び目と乘れとに別けてつけます。巾三糎、長さ九糎のものを前帯にします。又巾の兩端を少し折り一糎六粍位の巾にして、前から後



第三十五圖

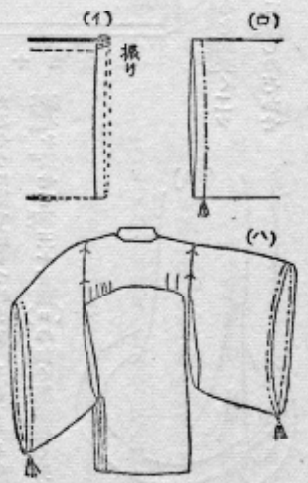
にきわし、かたく縫ひとめて着物上半分と、掴布のつぎ目でこの帯でかくれるやうにします。

垂れには巾四糎五粍、長さ十三糎のものを用ひます。そして巾二糎長さ五糎五粍のものは結び目と致しますから巾を第三十六圖(イ)のやうに折り、垂れの方を(ロ)の形に真中で大きな襞を一ツこしらへ、その上から結び目の布をかぶせて(ハ)の形にして、少々帯を高く上に上げて背に縫ひつけます。



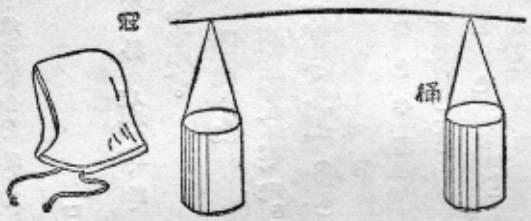
第三十六圖

うす絹のつけ方　この布は地うすのもので裏貼りをしない摘み絹のやうなものを用ひます。袖布巾四糎五粍長さ十三糎の袖布の一方を五粍ほど第三十七圖(イ)のやうに先きに折つて置いて更に丈を二ツに折り袖下を縫ひます。



第三十七圖

次に袖口の方を七粍ほど裏に折つて、(ロ)のやうに五粍位の深さに白の絹糸で飾り襞をかけます。次に巾五糎長さ十二糎の身頃を、長さの三分の一を前身頃とし、三分の二を後にして、やはり一ツ身と同様に肩をあけ、先に着物の上半身を縫つたと同様に袴を付けます。巾も着物と同寸に、今度は袴裏は折け付けて置きます。そして袖は袖山と身頃の肩山とそれから七粍下つた所と、前身頃と前襠との三ケ所を、糸で結びつけるか、かたい糊で貼り、袖と身頃のはやれぬやうにいたします。そして脇は裁ち目ですから、振と同様に折つて裁ち目をかくして着せますが、両袖は通しません。前はかき合はせないで、羽織のやうにあけ、両袖は後へ自然にたらしておきます。そしてうす絹の後身頃で帯の上をおほひ、第三十七圖(ハ)のやうに形をとゝのへ、リリーヤンを上から紐としてうす絹の後から前の帯の中に入れて見えないやうに結んで下げて置きます。



第三十八圖

冠のかぶせ方　冠を頭にかぶせ、顎の所で冠の紐を結びます。右手を上に上げて、桶を肩に掛けるのであります

ます。この冠と桶は第三十八圖のやうな形に作ります。桶は長さ二糎五粍、巾六糎の厚紙を輪にして、左右の端を貼り合せ、底を入れます。尚色は繪の具を用ひて適宜に着色いたします。

日本人形猿さわし

材料　人形の頭、胴、兩手兩足、髪（長さ七糎、巾五糎）生半紙（一枚）針金十八番、長さ二十糎、綿少々、着物用布。

猿に用ひる布

茶色繻子巾四糎、長さ五糎、腰かけ幅三糎、長さ二糎。

着物裁切り寸法（縮尺)

名稱	幅	長さ	名稱	幅	長さ
綠色半纏	五糎	一二、五糎	空色　タツツケ（二枚）	七糎	六、五糎
空色腰紐（二枚）	三糎	三糎	着物　衿身頃と同じ	二糎	一〇糎
空色　袖着物衿に同じ二枚	四糎	八糎	黄色裾衿衿	二糎	九糎
紫色頭布	三糎	七五糎	白下衿	一、八糎	九糎
白袖口（二枚）	二、二糎	四五糎	紫色帶	一、五糎	二〇糎

第三十九圖　日本上り圖

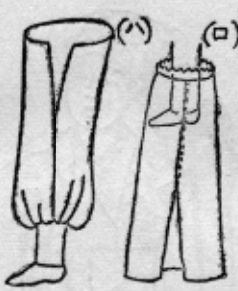
身體の作り方、及び着物の裏貼りの仕方、縫ひ方等は前の沙汲人形と同樣であります。

タツツケの拵へ方

幅七糎、長さ六糎五粍の布の幅を二ツ折にして、西洋人形のピエロのズボンと同じやうに長さの二分の一位兩方を別々に縫ひます。

着付け　最初に前の沙汲人形と同樣に、厚紙で衿藁を貼ります。

そしてその上に袖絆の紐の桃色を下に黒を上にしてその上にもう一枚着物の袖を重ね、三枚の袖を合はせます。脚絆は、幅も長さも三糎の布を合せ目が、後になるやうにして、第四十圖(イ)の如く踵足へ貼り付けます。その上へ先きに縫つた縫目が内側になるやうにタツツケを左右の足に通し、脚絆を見せてタツツケの裾口を、(ロ)のやうに中側でくゝり、(ハ)の如く表にかへして綿を入れ、ふくらみをつけ、形を整へます。そしてタツツケの上は前も後も左右の布の裁目をかくし、前で襞をとつて糸でしつかりとめます。



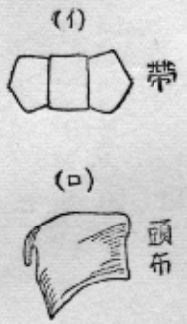
第四十圖

次に褞の袂の中にも少々綿を入れ、タツツケのやうにふくらみを付けて、左右の手を通し、袖附の所で上から糸の見へぬやうにとめます。そして前袖と後袖の振を左右とも貼り合せます。

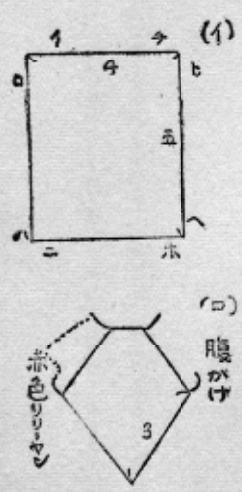
半纏は、幅五糎、長さ十二糎五粍のものを一ツ身と同様に衿肩をあけ、前を裁ちます。そして脇と裾と前の裁目を折り、人形の胴に着せ、前後を兩脇で恰好を見ながら襞を取り糸でとめます。

帶はその上に長さ二十糎、幅一糎五粍の帶の布で胴まわりの寸法を先きに取り、兩端の裁目を折つて、後から前に廻し、汐汲人形のやうな帶をつけます。これを前で左右の布端を合はせてとめて置きます。殘りの布は、第四十一圖(イ)の如く詰び、結び目を前にして貼り付けます。

頭巾は長さ十糎五粍、巾三糎の布を、頭の前から後へまわし、兩端を後で合せて貼り、後の髪の毛は頭布の外へ少々出して、上部の裁目を長すぎたり短かすぎたりせぬやう恰好よく後に折つて置きます。これで着付が出來ましたから、汐汲人形と同樣に竹ぐきを胴にさして人形をたゝせます。そして右手に小さな榊を持たせ、その先に赤い紙をつけ、猿の首に結びつけます。



第四十一圖



第四十二圖

猿の作り方　茶色の丈五糎、幅四糎の布を、第四十二圖(イ)と(ロ)(ハ)と(ニ)(ホ)と(ヘ)(ト)と(チ)の角々を合せて各の角から一糎五粍位の間だけ縫ひますと、猿の四足が出來ますから表にかへしてその中に綿を充分に入れて、殘した分もとぢ合はせてしまひます。そして一方の手を殘して手足をまげて置きます。

頭に白色の布で出來上り圖の如き八糎位の大きさの頭を作り、胴にとぢつけます。

次に幅三糎、長さ二糎位の大きさの赤布を腹掛として、第四十二圖(ロ)のやうに、赤色のリリーヤンを首に結びつけ、下の紙は手の下を通して背中で結びます。

十、贈答用折紙と水引結編

我が國では人に品物やお金を贈るのに、昔から時代〳〵によつて差異はありましても、相當の裝飾を施すのを禮とされて居ります。現今では紙に包み水引をかけて、熨斗をつけるのが普通の禮となつて居ります。

包紙の種類

包み紙の正式なものは奉書でありまして、祝儀不祝儀ともこれを用ひます。美濃紙、西の内などはこれに次ぎ、改良奉書、檀入半紙、などは略式となります。この外奉書の厚いのをちぢませた樋紙と云ふ紙がありますがこれは祝儀用だけに用ひられます。

而して包み紙の數は婚禮には必ず二枚、凶事には一枚を用ひ、其の他の場合は一枚でも二枚でもよろしく、二枚の紙で包む時は必ず紙の裏と裏とを合せて外表にいたします。

小さい品物を包む時は、紙を二ツ折り、又は四ツ切にして包み、品物が大きくて包みきれない場合は、品物の上から被せて下は折けて置いても差支ありません。

水引の種類

水引には普通祝儀用としては紅白、金銀、赤金、赤白などを用ひ、凶事用としては白黒、白、白黄、銀白などを用ひます。なほこの他赤、白、金、銀、青、竹の葉（四筋青、一筋白）左巻（赤、緑、紫、桃、等に銀紙を細くたづなに巻いたもの）五色（五筋共異つた色）松葉（元結を青く染めたもの）等の種類がありますが、これらは装飾用の細工水引であります。

品物を結ぶ水引の数は、結婚に関する贈物には必ず二本、凶事には一本を用ひます。又大きい品物を結ぶのに水引が短かい場合は裏側で継ぎ合せてもよろしうございます。

尚、水引の長さは従来の習慣上すべて曲尺を用ひて居りますから、本文の寸尺もその例にならつて（　）内に曲尺を用ひました。

水引の結方

結方には種々ありますが基礎となるものは、真結、蝶結、鮑結、逆鮑の四種でありまして、其の他は何れもこれらの應用であります。

真結　婚禮又は凶事のやうに二度あつてはならない場合に用ひ、婚禮の時は水引の先を切らずに必ず老の波を巻くか、或は偏にいたします。凶事の時は先を紙より二種位長くして切ります。

蝶結　花結ともいひ、婚禮、凶事以外の幾度かされてもよい事の場合に用ひる結び方であります。

鮑結　凶事、災難の外何れの場合に用ひてもよろしく、水引も凶事用以外何を用ひてもよろしいのであります。

逆鮑結　凶事にだけ用ひる結び方でありますが、この用途は一本の真結と同じであります。

金銀包（鮑結）

材料　小奉書　一枚、水引　赤白六十糎（二尺）一本。

紙の折り方　紙の表を下におき、第一圖(一)のやうに右下の角を上に合せて右上の角を正しく三角に折り、この三角を(二)のやうに右上角を左下の角に合せて真二ツに三角に折ります。それから三角の山の袋になつてゐる中へお金を入れて、そのお金の大きさに(三)の如く角を折り、殘りの幅を三等分して(四)、(五)のやうに疊に疊みます。そして紙の端の上にかぶさつた方が表になりますから上下を後側に折り曲げて、眞中で凡そ一、二糎位重なるやうにいたします。この折り曲げる寸法は包紙の大きさによつて折りますので一定しませんから、折り上げた丈と幅を適當に恰好よくいたします。

そして折りの向は、祝儀及び日常用は表側で紙の端が左を向き、裏側で上下の重なりは下を先に上を後から折り重ねます。図事の場合は同じ折り方で、そのまゝ逆さにして水引をかけ、又表書をします。

第一図

水引の結び方及掛け方

結ひ方は図事、災害の外、何れの場合に用ひても宜しく、水引は図事に使ふ白や白黒、黄色等を除けば何を使つても宜しいのであります。

先づ最初に水引の帯（中央に巻いてある銀紙を水引の帯といひます）を左の人差指と拇指とで持ち、右の拇指の

第二図

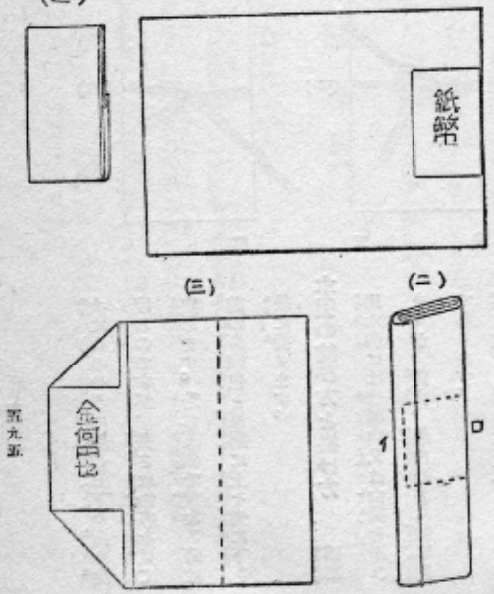
腹で輕くしごいて、帶より五糎程上で第二圖(一)のやうに白で輪を作り、輪のくづれぬやうに左手で持ちます。次に右手で赤を持つて下から白の輪の向ふへまはして先を白の上から手前に引き下げて(二)のやうに又左指の中に持ち、それから(三)のやうに赤の端を順にくゞらせますと(四)のやうに鮑結の大體が結ばれたのでありますから、こゝで水引の五筋を平らによく並べます。途中五筋が重なつたり、跨がつたりしないやうに丁寧に一々指先で並べて落ちつかせ、恰好よく形を整へた上で帶の所の輪を大きく伸して、其の中へ包紙を通し、裏側の中央に水引の帶を正しくあてゝ、(五)のやうに包紙の幅だけに水引に折りくせをつけます。それから出來上り圖のやうに順に鮑結を引き締めて、包紙の上に一文字に平らになるやうにいたします。水引の締め方がゆるいと結び目が上に跳ね上り勝ですから、よくしめます。この締め方は、先づ鮑結の上の左右の輪の白と赤を内側の矢の方向に兩方へ強く引き、中央の赤白の重なつた所を左指で押へて、上部の矢の方向に上へ引きますとよくしまります。それから水引の先は大きく一ツ輪に結んで、形を整へ其の兩端の不揃の分は揃へて切ります。

凶事用紙幣包（眞結）

材料　小奉書　一枚、水引　白又は白黒四十五糎（一尺五寸）一本。

紙の折り方　凶事用のものは祝儀用とちがつて、すべてに餘り技巧を加へませんで簡單な折り方にいたします。

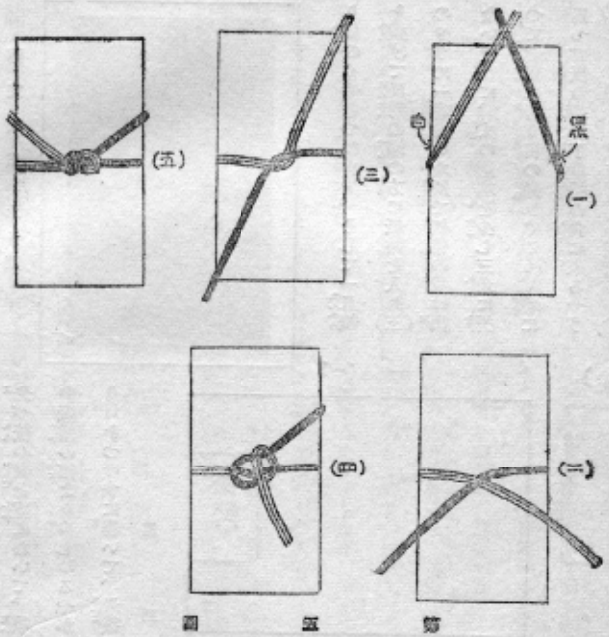
第三圖　出來上り圖



第四圖

先づ紙の表を下において、第四圖(一)の如く中に包む紙幣をのせ、その紙幣の幅より少しゆるやかに(二)の如く一方の端からぐるぐると折り目をつけずに卷いて、最後に紙の中央(イ)、(ロ)の邊で一寸摘んで折り目のくせをつけます。そして一旦紙を擴げて反對の端の方に紙幣を入れ(三)のやうに一卷まいた所で紙幣の拔け出ないやうに、丈の兩端を少し三角に折つて、更に折り目の通りぐるぐる卷に折つて紙の端が丁度折の角に來るやうに正しく折り、吉事の時と反對に、紙

の表の端を右に向けます。



次に(四)のやうに紙の上下を折り曲げるのですが、長さは恰好を見て定めます。若し裏側で重なる時は前の金銀包と反對に上を先に下を後に折ります。

水引の結び方と掛け方　図章

用水引には普通白又は白黒を用ひますが、黄白、銀白などは図事用であります。

結び方は、眞結又は逆飯結をします。こゝは白黒の水引で、眞結をいたします。折り紙が出來ましたらば、折紙の裏の中央に水引の

帶をあて、折紙の巾だけに水引に折りくせをつけ、第五圖(一)のやうに右手に黒、左手に白を持つて折紙の中央で(二)のやうに黒を下に、白を上に組み合せ、同時に手を反對にして右手に白、左手に黒を持ちます。この二の重なつた所を左人差指で持ち、(三)のやうに、白を黒の下からくゞらせて上に出し、次に(四)のやうに黒を折り返して右上に向け、つゞいて白を上から下に向け白の端を、右に向いてゐる黒の下からくゞらせて上に引き出して締めますと(五)のやうに出來上ります。殘り端は包み紙より二糎ほど長くして切ります。

図事の場合は水引が長く殘つても必ず切り捨てゝ、輪結にしたり老の波に卷いたりしてはなりません。

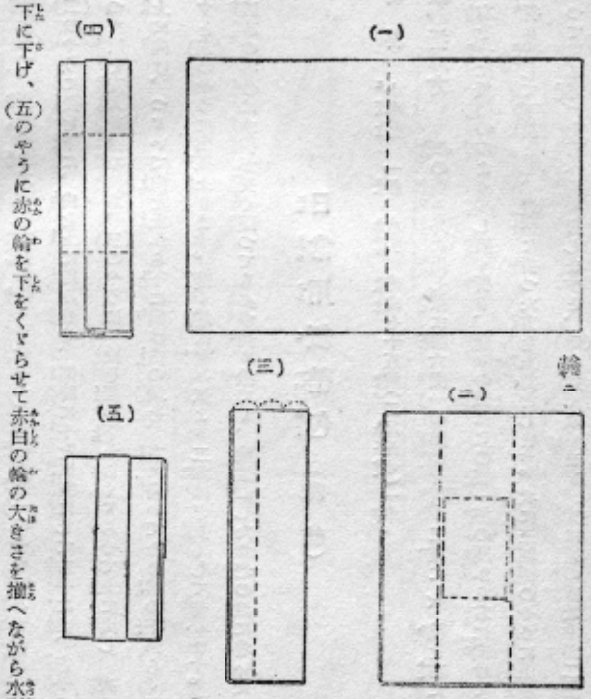
日常用紙幣包（蝶結）

材料　小奉書　一枚、水引　赤白七十五糎(二尺五寸)一本。

紙の折り方　紙の表を外に出し縦に第六圖(一)の點線を折り二重にし、輪を右にしておき、中央に紙幣を入れて右を先に紙幣の巾より少し廣く折り、殘りの紙はこの幅一杯の所から右に向けて折り、そして左の方の紙を先に折り直して下前とし、最初に折つた方を上前とします。次に(三)點線のやうに上前巾の三分の一だけ左端(輪になつて居る端)を右へ折り返しますと、(四)の如くなります。次は後の裏なりが二糎位になるやうに定めて、(五)の如く折りさげます。

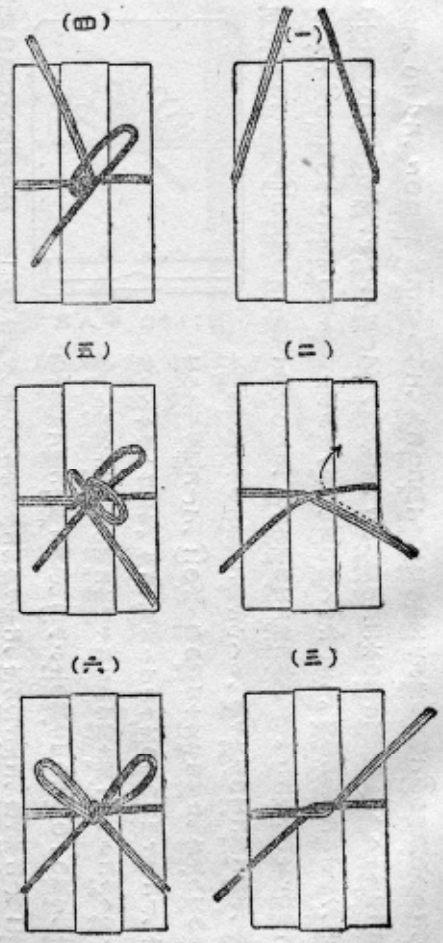
水引の掛け方

この水引は赤白でも紅白でも金銀でも結構であります。



第六図

結び方は前に記しました眞結をする要領で先づ帯を包紙の後側中央に當て、第七図(一)のやうに表で白を左に赤を右にして、包紙の巾に水引に折り癖をつけます。次に(二)のやうに赤を下に、白を上に組み、つゞいて(三)のやうに白の端を赤の下からくゞらせて上に出します。それから(四)のやうに赤の方で輪を作り、上にある白を下に下げ、(五)のやうに赤の輪を下をくゞらせて赤白の輪の大きさを揃へながら水引をよぢれないやうに揃へて(六)のやうに締めます。



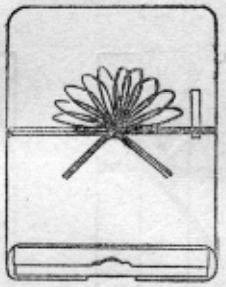
第七図

萬物包＝反物及箱の類等（花結）

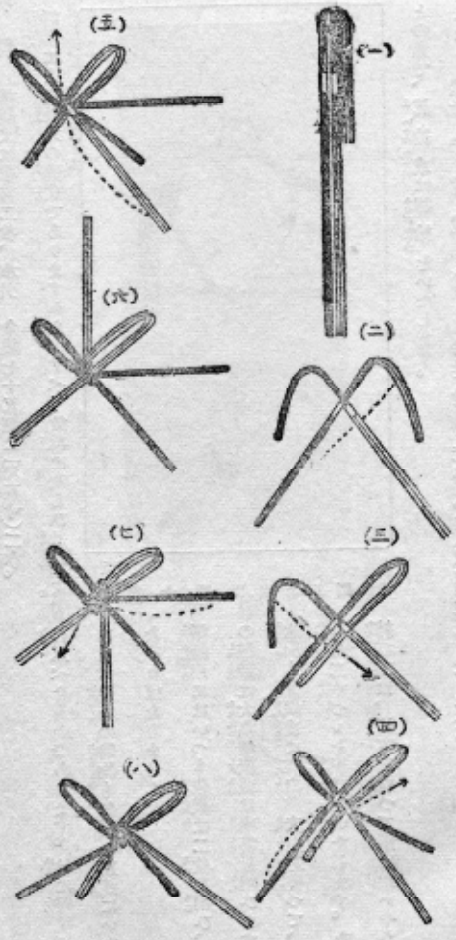
材料　奉書　一枚又は二枚、水引　赤白六十糎(二尺)二本（品物の大小によつて水引の長さは加減します）

包み方　紙を二枚用ひます場合は必ず紙の裏と裏とを合せ、一枚の時は表を外に出します。そして品物の小さい場合は、紙を下において中央に品物をのせ、紙の右端を品物の左角まで一杯に折り、左の端りの紙を、その上に折りかぶせて折をつけ、一度ひろげて再び左を先に、右をその上にかぶせ、紙の端は左向とします。若し品物が大きくて合はない時は、品物の上から紙を被せて、第八圖のやうに、紙の端は裏側であけておきます。

花結の結び方及掛け方　二本の水引を、先づ右は赤を上に、白を下に、左は白を上に、赤を下にし、二本の帶を並べて縦に左手に持ち、帶から上の端までの三分の一の所で、右の食指と中指との間に水引をはさんで第九圖(一)のやうに丸く向ふへ折りくせをつけます。次に二本並んでゐた左の方の水引を上にし、右の方の水引を下にして、(二)の如く帶の際で十文字に重ね、右上の方の白の水引を點線のやうに曲げて輪をつくり、先を左下の方に斜に持ち、次に左上の方の赤水引も(三)の點線の如く曲げて輪をつくり、先を右下の方に斜に持ちます。これをそのまゝ右手に持ち、次に(四)の點線のやうに左下の赤を左向ふから右へ曲げ、(五)の如くいたします。同時に左手に持ちかへ、右手で下に下つて居る白を下から向ふへ廻して上へ折ります。この時後では二本の帶を正しく(六)の如く十文字に重ねます。つゞいて、この白を手前に折り曲げて、次に右に出て居る赤を根元から折り曲げて(七)の點線のやうに、左の赤の輪の根元をゆるめて其の中へ通して左に抜き出し、(八)のやうに石疊を作ますと、花結が出來上ります。これを包紙に掛けますには、結び目をしつかり締めて形をとゝのへ、帶の十文字になつて居る方を表として、左に白右に赤の長く出てゐる水引を品物の後にまはし、裏で眞結にして端が長く殘つた時は適當に切り捨てます。表は赤白五筋づゝの輪を第七圖のやうに一筋づゝ擡げて菊の花のやうな形にいたします。



第八圖　出來上り圖



第九圖

婚禮用反物包（眞結）

材料　壇紙又は奉書二枚、水引　金銀七十五糎（二尺五寸）二本。

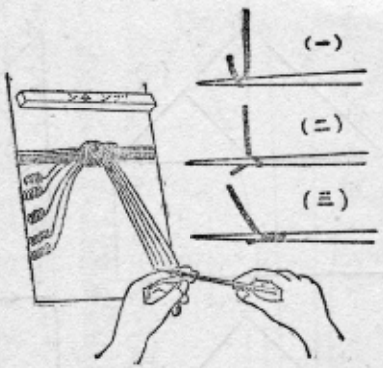
婚禮は人生最大の儀式でありますから、すべて故事にならひ壯嚴に取り行ふべきものであります。故に婚儀に用ひます色々の贈物も矢張り正式にいたさなければなりません。

第十圖　出來上り圖

婚禮用にはいつも包紙は二枚を用ひ、紙の種類は大高壇紙或は奉書を用ひます。水引も金銀或は紅白、赤白を使つて、何れも二本づゝを正式といたします。なほ結び方は、緣喜を祝つて解けないやうにとの意で、眞結或は鮑結をいたします。

包み方　奉書二枚の裏と裏とを合せて外表に重ね、反物を包み水引は金銀二本で眞結にいたします。（眞結は第五百九十六頁參照）そして水引の先は必ず切らずに輪にするか或は老の波にいたします。輪にする方法は前に說明しましたので、こゝでは老の波の卷き方を說明致します。

老の波の卷き方　第十一圖のやうに目打錐の先の方に水引の先を一糎ほど出して一まき卷きつけ、そしてそれに倣つて左手の拇指と、人さし指とで目打錐の先に殘した水引の上へぐるぐると卷きつけます。

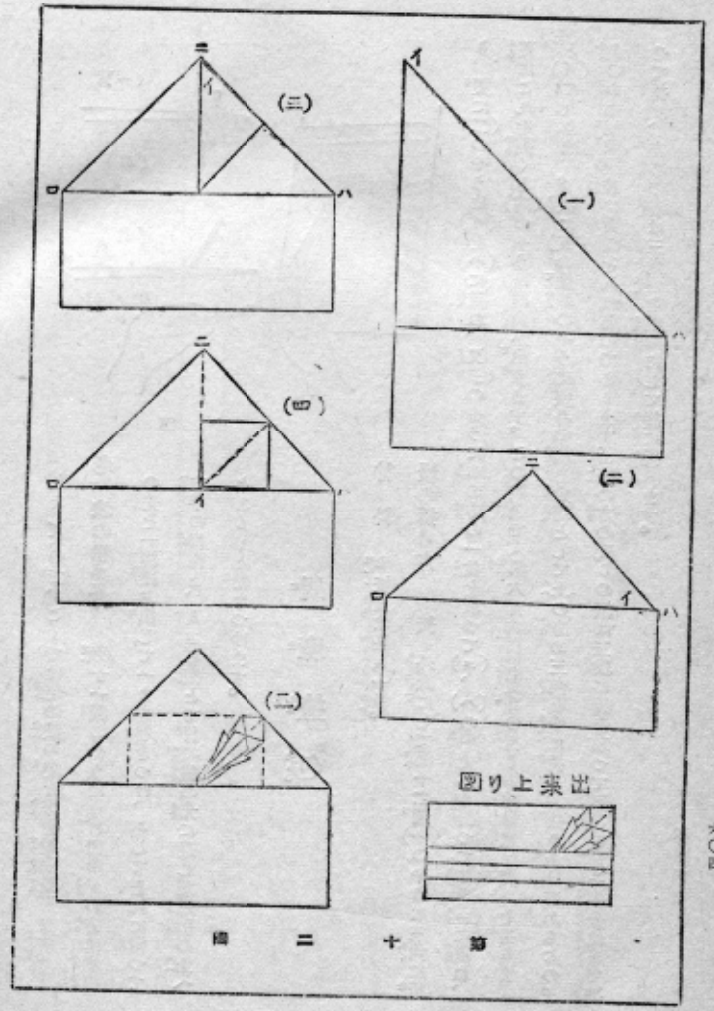


第十一圖

胡麻塩包

材料　半紙又は糊入一枚。

紙の折り方　紙を外表にして第十二圖（一）のやうに三角に折り、更に（二）のやうに（イ）を（ハ）に重ね、又（三）のやうに右の方の一枚を取つて（ニ）、（ハ）の中央から折つて（イ）を（ニ）に重ね、更にこれを開くと（四）のやうな四角が出來ます。この四角で（第六百六頁折熨斗の折り方圖參照）熨斗を折りますと（五）になります。次に（五）の點線のやうに熨斗の頭を定規として上の方の三角を後に折り、（折り上げてからこの三角の中に胡麻塩或は黃粉を入れるのであります。）下の方の殘りの紙は三段に襞を取つて熨斗の凡そ半分位まで被せて折り、左右の端は三角形を境目にして後に折ります。



第十二図

のやうな形に出來てゐて、左右二枚で一對になつてゐます。

この熨斗は祝儀（結納とか婚禮式）には一對を熨斗包に包んで用ひますが、普通の贈答品には小さく切つて用ひます。但し凶事の時と魚類、肉類、卵の類を贈る時は一切熨斗を用ひません。

切熨斗　一枚の熨斗を、第十四圖(イ)のやうに切つてそのまゝ光澤のある方を表に出して包に貼りつけます。

結熨斗　結熨斗は細く切つた熨斗の先きを(ロ)のやうに上部

第十三圖

熨斗

熨斗は普通鮑熨斗といつて、もとは名の通り鮑の肉を引き伸して、うすく剝いで切つて附けたものださうですが、現今では海草を煮溶してうすく伸したものを用ふやうになりました。一枚の熨斗は第十三圖

切熨斗

(イ)

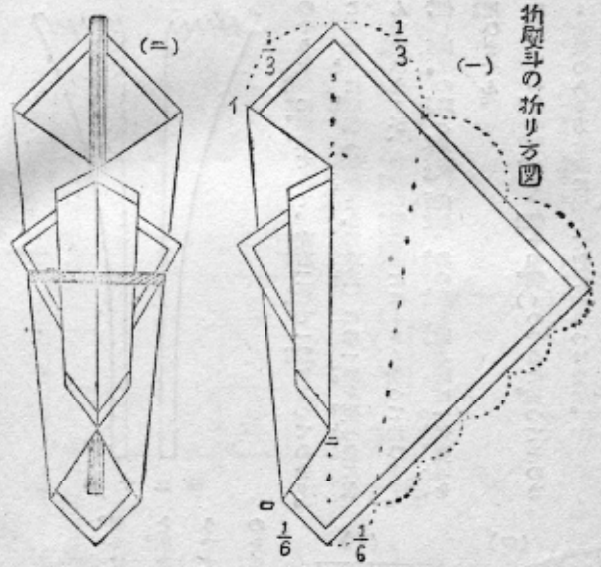
(ロ)

結び熨斗

第十四圖

の左端だけに裏が出るやうに一つ結んでつけます。

折熨斗の折り方図



普通反物包一位の大きさの包につける切熨斗は、長さ七糎、巾二糎五粍位、結熨斗は長さ十五糎、巾一糎五粍位にしますが何れも決つた寸法はありませんから、包との釣合を見てつければ宜しいのであります。

この他折熨斗がありますが、現今では切熨斗や結熨斗などよりもこの折熨斗が一般には用ひられて居ります。

折熨斗　大きさは矢張り贈る品物の大小によつて、大きくも小さくもしなければたりませんが、普通には六糎から十糎角位の紙で折つたものが多く用ひられます。

用紙は包紙に使ふ紙を用ひ、略しては色紙、模様紙などで折ることもあります。

熨斗の折り方　適當な寸法の四角の紙に、それより周圍二粍小さい赤紙を重ねて、眞中を一寸糊で貼り、これを第十五圖(一)の寸法に從つて折り疊みます。

先づ熨斗の頭になる方は一邊の長さの三分の一を取り、下の方は六分の一の寸法を取つて標をつけ、其の標に從つて紙の端を右に折り、更に之を中央から左の方に折り返します。次に圖のイロ線と(ハニ線の中央に線を取つて恰好よく折ります。他の一方もこれと同じく折ります。そしてこの折り紙の中心に熨斗を三粍か四粍巾に、丈は紙の長さ位に切つて巾の中央に糊をつけて貼り、折り紙を落ちつかせて丈の中程を細い金紙で卷いて裏で貼つておきます。

この金紙は金水引の二三種の切端の、殘りをもどして金紙だけのばして貼つてもよろしうございます。

附　若き女性に送る

強く正しくにこやかに

いつも不足ばかり言つて、ものをねだるふくれ面の娘さんがございます。『笑つたら損』といつたやうな顔をして、客にものをつき出す無愛想なおかみさんもあります。御主人や、お友達に挨拶もせずに、いつも佛頂面をした事務員や女工さんもあります。

ふくれ面をした娘さんや、無愛想なおかみさんの居る店は、客足が遠くなります。別に愛想よく言つてくれたからといつて、得になるのではありませんが、人情は微妙なもので、石鹸一つ買ふにも、足は自然に愛想のよい店へ向ひます。

佛頂面をした事務員や、女工さんはお仲間はづれにされたり、御主人からも忘れられ勝ちとなりますから、何時も不愉快に勤めねばなりません。

いやな鳴聲を出す鳥はどこの村里へ行つても嫌はれますが、愛嬌のある美くしい聲の鳥は萬人に持て囃されます。

いつもニコ〳〵した快活な娘さんは、顏容までもよく見えまして、近所の人にまで賞められます。

愛想のよい何時もニコ〳〵顏のおかみさんの店は繁昌いたします。

かうして愛想のよい、ニコ〳〵顏の人達の周圍には、いつも明るい春のやうな世界が現はれます。家庭の幸福もおなじ

店の繁昌も、近所や會社の圓滿な交際も皆この、ニコ〳〵顏から惠まれて來ることを痛切に感じます。

しかし愉快に、幸福に暮して行くには、ニコ〳〵顏だけでは、複雜な世の中に處して行かれません。そこには強く正しくといふことが必要であります。

『ほゝおかしい』何でもないことがおかしくて笑つて、時に他人から叱られることもございませう。いつもにこやかであることを希望いたしますが、といつて、底なしに笑つたり、時と場合をも考へないで、只ニコ〳〵ばかりしてゐたのでは誘惑の多い世の中でありますから、どんな不幸を見るかも知れません。甘い言葉で誘惑されて不幸のドン底に泣き暮して居る婦人の多くは、この底なしのニコ〳〵が祟つて居るのでございます。

ですから、にこやかの底にどことなくひき締つた強さがなければなりません。

敢て男子の向ふを張つて主張せよといふのではありませんが、盲從したのでは肝腎の女の務が果されません。しかしたゞ強くと云ふても、徒らに強ければよいと云ふのではありません。即ち正しいと信じたことはどんな迫害や誘惑があらうとも、眞實勝利が得られる迄、にこ〳〵と耐え忍んで行く心の強さが必要であります。

要するに皆樣は、いつもにこやかでたければなりませんが、底なしのにこ〳〵はいけません、不斷の修養によつて判斷力を養ひ、事毎に判斷して正しいと信じたことの爲には、何處迄も耐え忍んで最後の勝利を得るといふ強さがなければならないのであります。

この強い意思と、正しい判斷と、にこやかな情緒とが昭和時代の婦人として、最も大切でございます。

焦るな休むな怠るな

『人の一生は重き荷を負ふて、遠き路を行くが如し。急ぐべからず。』とは德川三百年の礎を築かれました家康公の遺訓でございます。無暗に成功を焦つた光秀が僅かに三日將軍で終りをしたのに比べて、さすがに大成功をなさる人の心構は始めから違つてをりました。

山間の溪流が岩を噛み泡をたて、すさまじい勢で流れてをります樣は、一寸見ますと快い感じを與へますが、平野を流れる大河の洋々としたのに比べますと、いかにもせつかちで小さく感じられます。其れと同樣に焦り氣味の人はすることが早く、テキパキと萬事を片づけるやうですが、其れはほんの一時のことで、直ぐ疲れて倦きやすく昨日は甲のことに熱中してゐたかと思ふと、今日はもう乙のことに夢中になつてをります。一時の手なぐさめなら兎も角、自分の一生をかたちづくる職業や學習の方法で、こんなですと、終には何にも出來なくて終ります。

先生にならふと思ひ、或は事務員になりたいと思ひ、さては美容師に等といつた塩梅に、いつも成功を焦つて考がフラ〳〵して居りますので自分ながらも方向が決りません。こんな人はいつも夢を見てゐるやうで一向現在の仕事に身が入りませんから、屢々失策をいたします。

これに反して十年間一つのことをみつしりやつて居れば、大抵のことはその道の專門家として、人も認め自からもその氣になるものであります。

焦らず、休まず、怠らずいつも同じ調子に不斷の努力をつゞけて行かねばならないのでございます。

小さい島國育ちの日本人は、よく忘る國民だといはれてをります。それに近頃はうち續く生活難、就職難に迫ひ立てられて、のび〳〵とした氣持になつて、自然の惠を喜ぶ暇さへ持たぬ程、焦りに焦りつゝ過して行くことは、誠に憂ふべき狀態でございます。こんなことでは、いつ迄經つても、明るい住み心地のよい世界を造り上げることは出來ません。お互に一つ落ちついて一つ一つ眞實のものを築き上げて行きませう。

仲よく働け笑つて暮せ

不愉快に働く原因を取り除いて、仲よく働き笑つて暮すといふことは、誰しも望む所で充分解り切つたことでございますが、この解り切つたことが、どうもその通りに行かないで、とかく不愉快に働く人が多うございます。實際、妹がせつせと働いたお金を親や兄が酒代に橫取りしたり、親や兄が汗水を流して働いて居るのに、育丈延びた壯健な妹がのらくらしてゐたりしたのでは、如何に仲よく働いて笑つて暮さうと勵つても、それは駄目なことでございます。こゝは一つ皆一本調子になつて共に働き、そして働いた者にはそれ相當に慰安や娛樂を與へて「働いたつてつまらない」といふ感じを一家の內に持つ人のないやうにしたいと思ひます。

こゝに申して置きたいことは、外に出て働く人だけが一家の經濟を支持するのではなく、家に留つて小さい子供のお守りをするお婆さんも、炊事洗濯などをなさるお母樣も等しく重要な役目をつとめて、ねらるゝといふことを考へて頂きたいのでございます。それは丁度第一線に立つて敵と戰ふ戰鬪員も、後方にあつて、糧食、衞生等の事を掌る後方部隊も、どちらも戰爭に必要であつて、其の功績に優劣の差のあらふ筈がない如く、出でゝ戰ふ人も留つて家を守る人も、共に生活戰にはなくてはならない人でございます。これを導き違へて、外に出て働く者だけが威張つて、家に留る人はいつも涙ながら、稼の下の力持をしなければならないやうになりますと、一家揃つて仲よく働くわけには參りません。

働くは人生の義務を完ふする爲であります。多くの人は働くことを、單にお金を得る爲とばかり思つてをりますが働くといふことはそんな簡單なことではございません。人間は共存共榮と申しまして、決して一人では生活の出來るものではございません。私一人が、日本の國民として財產生命を保護せられ、且衣食住には不自由もなく其の上今日の進んだ文化を樂しんで行けると云ふことは、皇室、國家の御恩は勿論、父母祖先を始め一般社會の人々から、草木禽獸の恩惠までを數へなければなりません。ですから私は全く恩愛の海に浮んで生きて居るといつても敢て過言ではないと思ひます。

こゝに各人が仲よく勢一杯働かねばならぬ理由があるのでございます。裕福であるからといつて遊んで暮す人は、實は恩盜人でありまして、共存共榮の社會には全く不要の人でございます。で身體を健康にして、男女貴賤の別なく皆働かねばなりません。これはやがて笑つて暮せる基になるのであります。

お饒舌り

雀百まで踊りを忘れぬと申します。性來快活な人は得てお饒舌りで、はては自らも閉ることのあるものです。お饒舌りし過ぎた後の不快を思つて何とかして洗默を守らう「今日こそは今日こそは、」と毎日出直しては見ますが、

やはり無駄になつてしまひます。

こんな事はよく實生活にあることです、昨日までよくお喋舌りをして居つた人が急にだまり込んで仕舞つては、周圍からは何か腹立つて居るのではないかと思はれることもあります。ですからこんな時には何も自己の天眞を壓へ付けてまでも、敢て默するものでもないと思ひます。

快活な人はその快活のありのまゝであればよいのです。たゞ人の感情を害するやうな言ひ方、人に迷惑になることは努めて避けねばなりません。

一度口に出したこと、云ひ過ぎたことは、取り戻すわけには參りません。まして人の惡口、罵言を喋々するやうなことは愼しみたいものです。

しかし物を云ひ過ぎないのがよいと申しましても、たゞ默して人に可否を問はれても、何の返事もしないで、たゞニヤ〳〵してゐるやうなことは避けたいものであります。自分の云ふべきこと、答ふべきことは少しも躊躇することなく、はつきりと自己の意志を明瞭に表示するのがよいのであります。殊に自己の一生の大事業を取り定められやうとする場合に、心にもない答をしたり「どうでも宜しいです、お委せします等」といつたやうな態度を取らないやうにしたいものであります。

人の惡口を聞くとき

人の惡口を聞かされる程不快なことはありません。平靜な心をかき亂されたやうな氣がいたします。それも自分より年少者でもあれば、そんなことを仰言るものではありませんとか、聞くのはいやですとかいつて、警告することも出來ますが、自分より目上の人であれば、不快を忍んで神妙に聞いてゐなければなりません、ところが表面默つて居るだけに、內心は盛んに動きます。

そして、ついうつかり先方の言葉に引き込まれたり、又は反抗して見たい心が動きまして、言はでもがなのことを言つてしまつて悔を遺すこともあります。元々人の惡口をいふ人は又、自分の言つた事を他へ漏らす口輕な人でありますから、夢にも先方の惡口に相槌を打つたり、贊成してはなりません。こんな時には努めて沈默してゐるか、或は無邪氣な方向へ話題を轉ずるかに限ります。いつかはこちらの靜かな態度に、慚ぢ入つて惡口を告げなくなるものです。かういふ風に先方を反省させて上げるといつた態度で聞いて居れば惡口を聞かされる爲めに、私の心をかき亂さるゝこともありません。

昭和八年九月十日印刷
昭和八年九月十五日發行
和昭九年一月十日五版
昭和九年一月二十六日六版
昭和九年三月二日七版
昭和九年四月二十八日八版
昭和九年六月十五日九版
昭和九年七月八日十版
昭和九年十月三日十一版
昭和十年二月二十日十二版
昭和十年六月一日十三版
昭和十年十月二十五日十四版
昭和十一年二月五日十五版
昭和十一年五月二十七日十六版
昭和十一年十月八日十七版
昭和十二年二月十一日十八版
昭和十二年九月二十三日十九版
昭和十三年一月十日二十版
昭和十三年八月十二日廿一版
昭和十四年五月二十五日廿二版
昭和十五年三月三日廿三版

不許復製

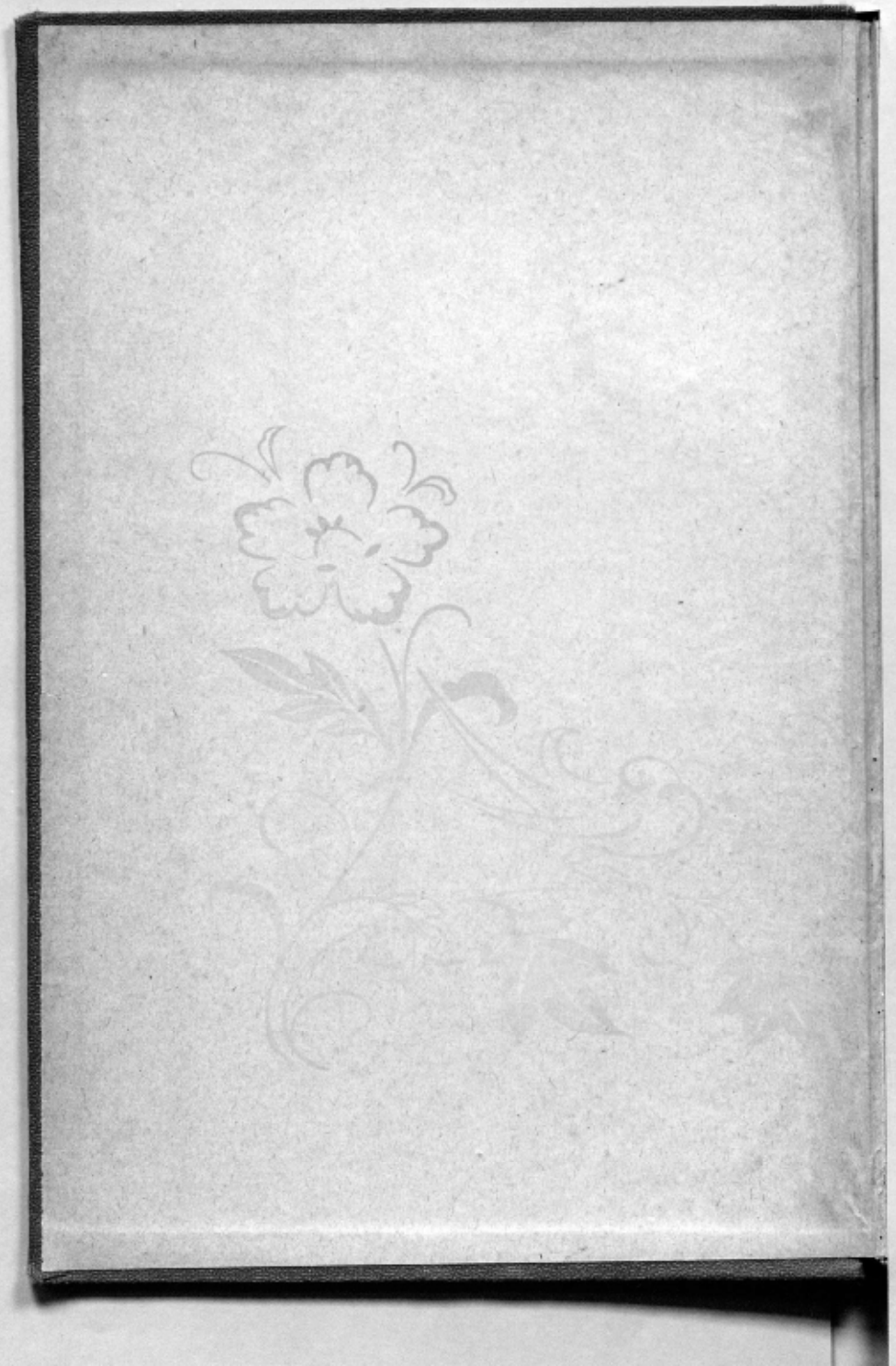
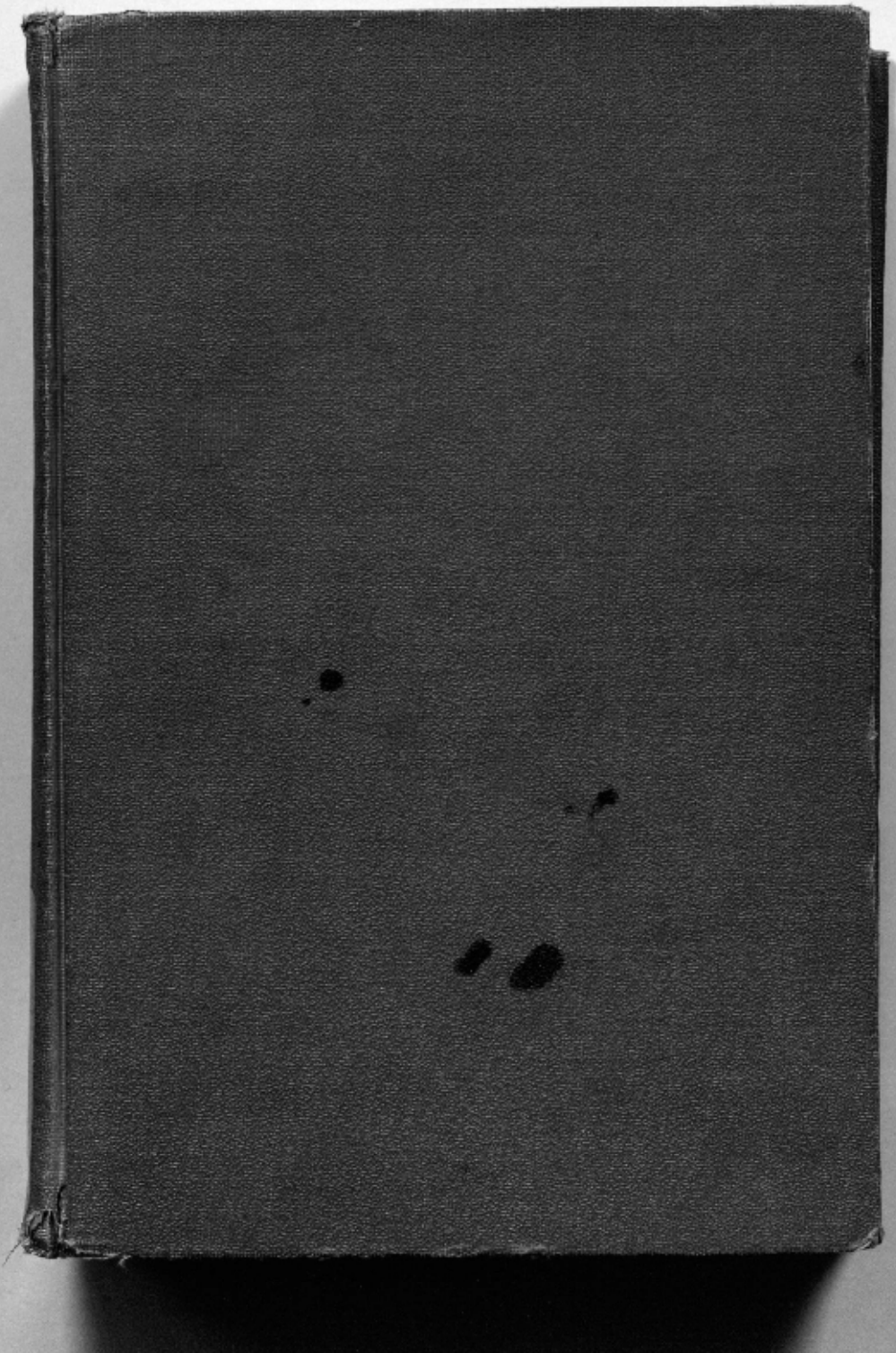
現代手藝全書 奥付

定價 金參圓五拾錢

著者 大妻コタカ

發行者 東京市本郷區元町一丁目一番地 橋口景二

印刷者 東京市神田區鎌倉町十一番地 阿部喜太郎

發行所 東京市本郷區元町一丁目一番地 研文書院
電話小石川三〇六六番
振替東京五九五七五番

【三共舍印刷所印刷】